

(3) 活動間ネットワークによる運営スタッフへの参加

【スタッフ募集の経緯】

2008年のまちづくりスクールから、一般スタッフを募集した。座学と実技を混ぜる形式ということ、特定のテーマでワークショップを行うということで、新たな試みであり、スタッフの募集が決まった。当初の募集条件としては、表4-3が挙げられるが、業務内容については、プログラムによって随時変化している。特に、2008年度、2009年度秋コースはワークショップのファシリテーター⁶としての仕事があり、ある程度の経験が必要な仕事内容であったが、座学形式時には、UDCKスタッフの補助としての役割が強く、雑務が多い傾向があり、求められる能力に大きく違いがあることがわかった。

表4-3 まちづくりスクールスタッフ募集条件

呼びかけ内容	実習の進行を手伝ってくれる方を募集します。 スタッフとして関わりながら、まちづくりや環境についても学んでみませんか？
募集人数	5名
謝金	5000円/1回
主な業務内容	・ワークショップの進行補助（ファシリテーター） ・当日の運営・活動記録

【スタッフの内訳】

スタッフの招集について、市民スタッフはまちづくりスクール修了生とカレッジリンクの修了生に呼びかけた。これは、活動間の運営者によるネットワークにより呼びかけが成立した。学生スタッフは東京大学空間計画研究室⁷の学生にメーリングリストによって呼びかけられる。2008年以降は市民・学生スタッフが毎年5～7人参加している。（表4-4参照）活動当初は学生の参加者（スタッフではない）もみられたが、2008年以降は徐々にスタッフへの参加にシフトする動きが見られた。また、市民スタッフは、同一人物に限られてきた傾向がある。この傾向はファシリテーターという経験を要する役割を担う場合には良い傾向だと言えるが、ファシリテーターを育てるしくみとしては人材の偏りがあり、工夫の余地がある。

市民スタッフと学生スタッフは同じ段階で招集され、事前スタッフミーティングが行われる。そこでは告知や、事前の準備作業（ある場合）や日程の確認が行われる。ここでは主にUDCKスタッフからの事務報告となっており、市民・学生スタッフと一緒に何かを考案することは殆どない。また、UDCKスタッフ以外の柏市、柏市都市振興公社との関わりはほぼない状況であり、「公民学連携」は、スタッフ間では感じる事ができないしくみとなっている。

⁶ ファシリテーター

会議やミーティング、住民参加型のまちづくり会議やシンポジウム、ワークショップなどにおいて、議論に対して中立な立場を保ちながら話し合いに介入し、議論をスムーズに調整しながら合意形成や相互理解に向けて深い議論がなされるよう調整する役割を負った人。ファシリテーターが参加者の立場も兼ねる場合もある。以前はオーガナイザーに含まれていた役割が、つまり進行の過程の専門家として、分離独立して認められるようになってきたもの。したがってファシリテーターはミーティングで扱われる内容そのものの専門家である必要はない。

⁷ 空間計画研究室

UDCK創設者北沢猛の研究室であり、創設当初から活動の企画や運営などに関わっている。

表4-4 年度別スタッフ人数

開催年	2007 春	2007 秋	2008	2009 春	2009 秋	2010
UDCKスタッフ	3	3	3	3	2	2
柏市都市振興公社	2	2	2	2	2	2
市民スタッフ	—	—	1	3	3	1
学生スタッフ	—	—	4	3	4	3

(出典：丹羽由佳里氏によるまちづくりスクールまとめ)

【ファシリテーター係】

ファシリテーターの係を経験した市民スタッフからは、市民・学生スタッフ同士で反省点を話し合った上で次回に向けた注意事項や進め方について議論が行われたことがわかった。スクール終了後や、メールでやり取りが行われたという意見も聞かれ、市民スタッフの積極的な関与が見られた。

一方で、ファシリテーターの経験が少ない学生スタッフが担当する場合、専門性が高く、まちづくりやその議論に慣れていない人から意見を聞き出し、提案に結びつけるには難易度が高い役割であることがわかった。さらにはヒアリングによって⁸「行政職員が市民・学生スタッフと共にファシリテーターを務めることが、職員の教育にとって重要なのではないか」という声も聞くことができ、ファシリテーターを教育の材料として活用していくことを考える必要がある。

【記録係】

現在の市民・学生スタッフの役割は主に表4-5に示す通りである。市民スタッフの大きな役割として、「記録係」が挙げられる。これは、一日の流れを写真の記録とともに文章にまとめ、次の回に配布される元データとなるものを作成する係である。

この係は、市民自ら考案したものであり、UDCKスタッフと話し合った上で担当することとなった。図4-3は市民がまとめたものをUDCKスタッフに編集されたものである。

市民スタッフによってエクセルデータ⁹で作成されたものを、UDCKスタッフがイラストレーター¹⁰で編集を加えるが、今後の課題として、市民スタッフ自ら最終的なレイアウトまで担当できるようになることが課題である。一方で、記録係を経験したスタッフからは、「まとめ作業を行うことで、参加者以上にスクール後に復習をし、まちづくりに関する内容の理解を深め、良い経験だった¹¹」という意見が聞かれた。

⁸ 網野敬司氏へのヒアリングより

⁹ エクセルデータ(Microsoft excel)

マイクロソフトがwindows及びMac向けに販売している表計算ソフトで作られたデータ

¹⁰ イラストレーター(Adobe Illustrator)

アドビシステムズが販売するベクトル画像編集ソフトウェア

¹¹ 嶋浜祥之氏によるヒアリングより

表4-5 まちづくりスクールスタッフの役割 (2010)

スタッフ	UDCKスタッフ	柏市都市振興公社	市民スタッフ	学生スタッフ
準備段階	企画・段取り・広報・講師の決定など	参加者の管理 予算の調整	口コミによる告知	大学へのポスターの掲示、口コミによる告知 ネームプレートの作成
当日	司会進行	会場設営 受付	会場設営 買い出し 記録 (内容記述、写真撮影) (ファシリテーター)	会場設営 買い出し 運営者の補助 (ファシリテーター)
終了後	—	—	記録のまとめ	参加者感想文のデータ化



図4-3 市民スタッフによる記録 (UDCKスタッフ編集)

以上のことから、まとめとして以下の4点が挙げられる。

- A) スタッフとして関わる機会があること、市民が運営の視点を持つことは、まちづくりに対する興味や理解が深まる大きなきっかけであることがわかった。
- B) 学生スタッフを空間計画研究室から募っているが、学年によってファシリテーターの経験の有無が違っており、まちづくり/アーバンデザインの専門家を育てる意味でも、一度は参加者として参加し、ワークショップについて学ぶべきである。そうすることで、ファシリテーターとして機能する存在となる。
- C) 市民が企画から関わるしくみが必要。市民・学生スタッフは現在、企画段階からの参加はなく、決められた役割が多く、市民がスタッフとして関わっているメリットを活かしていない。これによって、市民の声を拾うしくみづくりはできていないことがわかる。
- D) 市民が関わる活動の中で、公民学が同じ場で議論できる珍しい機会であるにもかかわらず、座学形式では、それらが共に議論できる場づくりができていない。

【活動実践におけるプロセスの分析】

■ 時期別分析

「活動立ち上げ期」として1年目は春コースに座学形式の講座をスタートし、2回目となる秋コースにワークショップを導入した。第二回目からリピーターが出現し、その後はコンスタントにリピーターが存在している。「活動始動期」として2008年にはワークショップで提案まで行うプログラムが試行された。その後スタッフへの参加へ移行する人が現れた。また同時期にワークショップで行った提案の実現に向けた動きが活発化しており、スクール終了後もUDCK関係者や学生スタッフがサポートする形で継続してミーティングが行われた。このような動きが見られた時期をstep4の「活動発展期」と定義する。さらに「活動成熟期」として、スタッフの仕事の充実や、実現した提案のフォローアップをしていく必要がある。これにより、まちづくりスクールでは「活動発展期」に至るまでは住民・市民を巻き込む土壌やボトムアップ提案型の活動が発展し得るサポート体制があったことがわかるが、その後、持続的に提案を実現に繋げるしくみやスタッフの関わり方の工夫が見られないことが、「活動成熟・継続期」まで到達しない要因であることが考えられる。

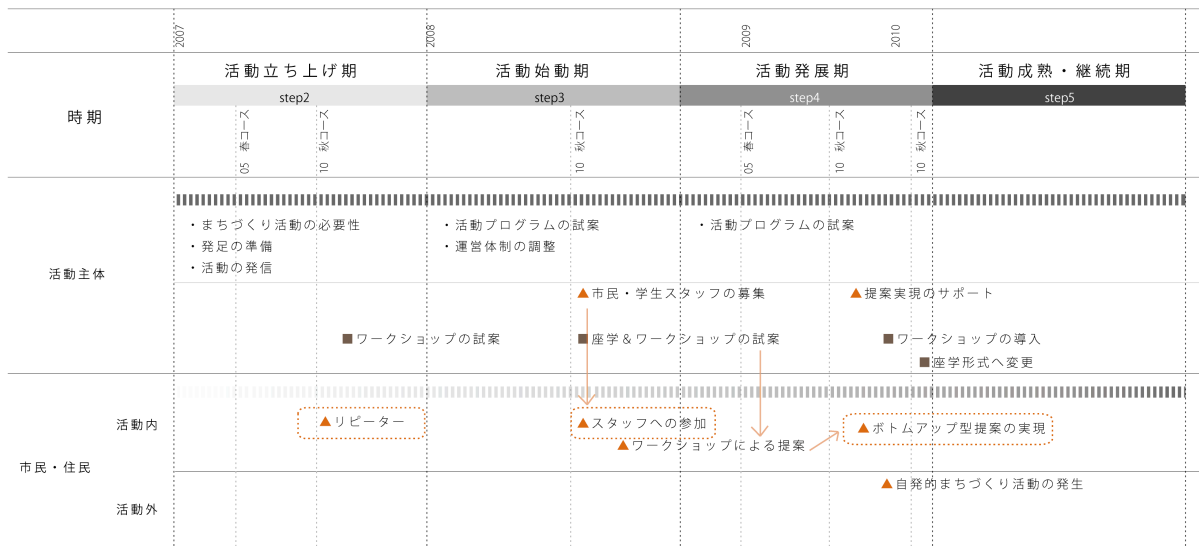


図4-4 まちづくりスクール時期別分析

■ 運営のプロセス

まちづくりスクールの運営プロセスにどのように市民が関わるかを分析する。運営プロセスに関わるスタッフ経験者である市民は、図4-5にあるように、準備の段階で呼びかけが行われ、ここで決定する。その後、スタッフミーティングが行われ、招集される。そして広報活動などの活動に参加しているものの、当日の運営以降の関わりはなくなる。企画を立てる段階から関わる事ができるしくみや、当日の運営後にフォローアップができるしくみを考える必要がある。

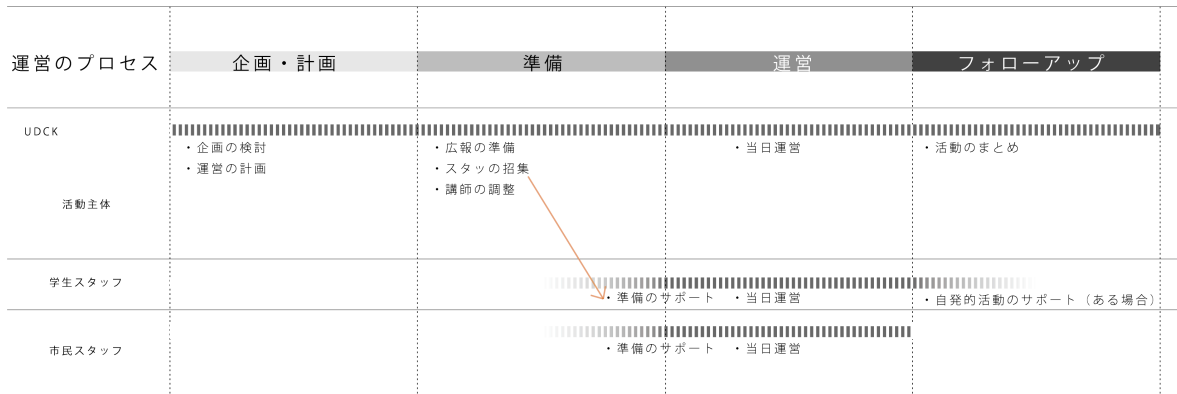


図4-5 まちづくりスクール運営のプロセス1

また図4-6では、ワークショップによるボトムアップ型提案を行った住民・市民はの実現に向けてのプロセスについて分析する。ここでは、学生スタッフによるサポートが大きく影響し、住民・市民と学生スタッフによる企画から運営までの流れと、UDCKの関係スタッフによる協力が成立した。また、フォローアップとして、「まちのクラブ活動」に加入し、その後のサポート体制ができたことが特徴である。

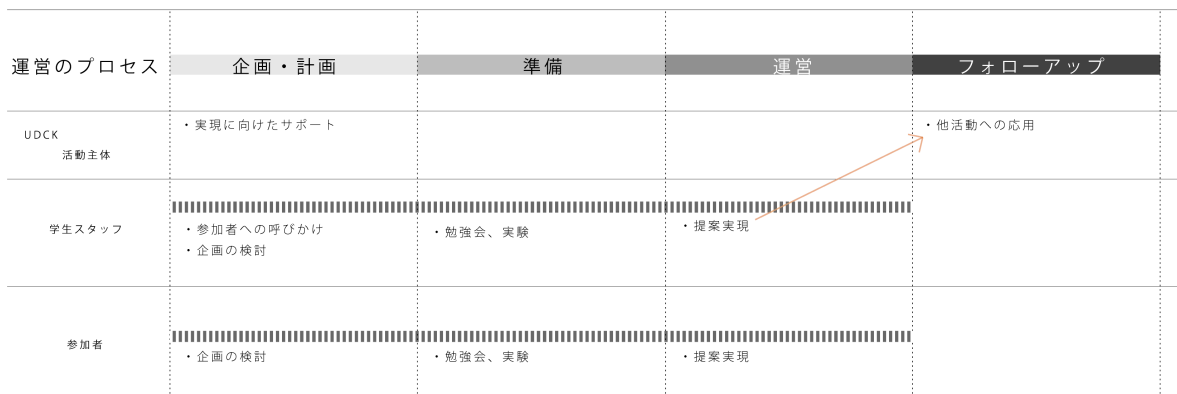


図4-6 まちづくりスクール運営のプロセス2

■ まちづくりスクールにおける住民・市民の関係分析

これまでの分析結果を相関図にすると図4-7のようになる。この関係を見ると、参加者である住民・市民と活動主体の間に市民スタッフ・学生スタッフの層があることで、活動の発展が生まれ易くなっていることが考えられる。また、他の活動（カレッジリンク）から市民スタッフの募集や、ボトムアップ型の提案が他の活動へ展開する動きが見られることから、UDCKの連携によって住民・市民を繋げることができたことがわかり、活動内での展開だけでなく、活動の枠組みを超えたまちづくり活動の連携が重要となってくる。

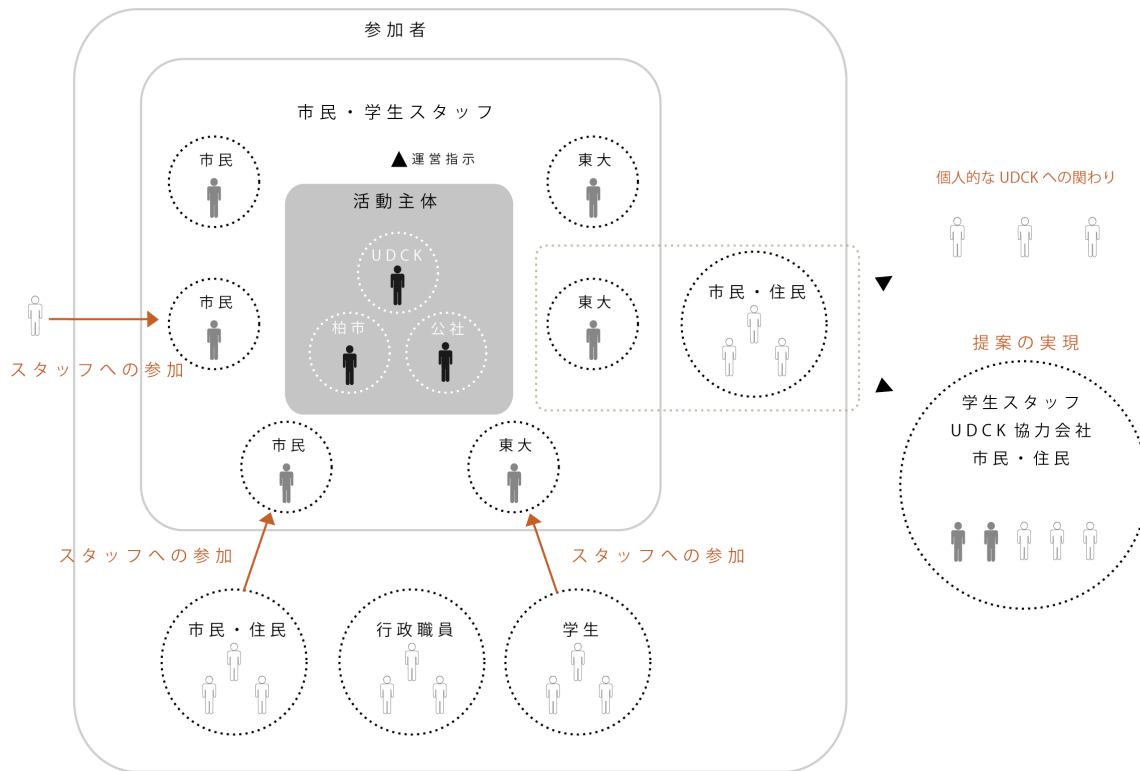
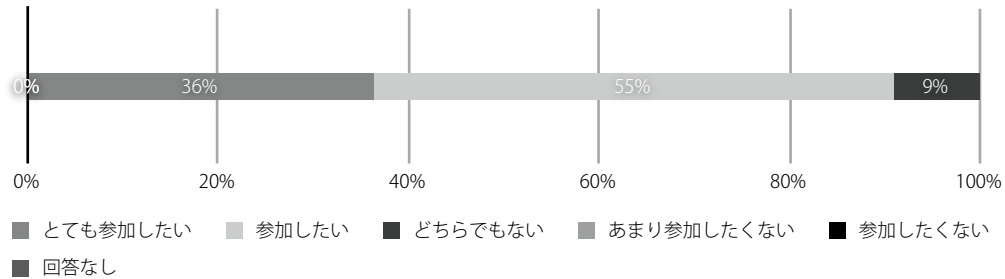


図4-7 まちづくりスクール 活動と住民・市民の相関図

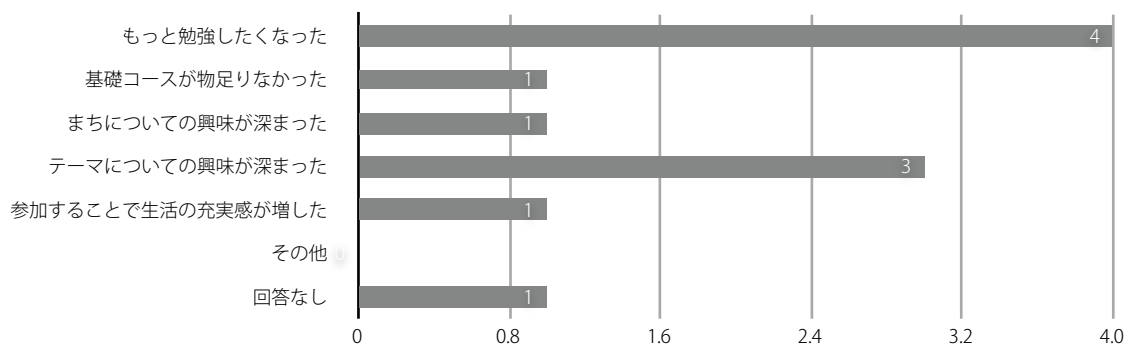
4.2.2 段階的活動の参加とボトムアップ提案型まちづくりの実践【カレッジリンク】

(1) 持続的参加への意欲

2008年から活動しているカレッジリンクについてはその参加者の詳しい属性はわからないものの、専門コースは基礎コースを終了した人のみが参加できるシステムであり、専門コースの受講者が毎年確保できていることから、リピーターの存在は明らかである。また、アンケート結果から、「またカレッジリンクに参加したい」と答えた人は91%であることから、今後の参加も期待できる。



また、専門コースを履修している人に対し、専門コースを履修しようと思った理由を聞いたところ、以下の結果が得られた。一番多かったのは「もっと勉強したくなった」次いで「テーマについての興味が深まった」であり、知的好奇心が向上したことが要因であることがわかる。



ヒアリング調査では「他の活動とは違って知的な活動をすることが楽しい」や「ワークショップで知識を得るだけでなく、自分の意見を発表し、受け身だけではないところが良い」という意見が聞かれ、内容だけではなくその講義プログラムに対する満足度が高い。これは古在先生の「市民科学」¹²の考え方が受講者に受け継がれていると言える。しかし一方で、「専門コースはもっと専門的な内容だと思った」など物足りなさを感じている人もいる。千葉大学はこのような人に対し、大学院への進学を促す、サポートするしくみを現在考案中であることがわかった。

¹² 市民科学 3章カレッジリンク参照

(2) 段階的プログラムによる活動の展開— 任意団体カルネットの設立に向けた取り組み

3章の活動内容で述べたように、カレッジリンクのプログラムには3段階の展開が用意されている。3ステップについては既に述べた通りであるが、step2の専門コースで提案の出した内容の発展系として、現在動いている活動について発展の経緯や活動の運営体制について詳しく述べる。

【生け垣プロジェクト】¹³

2009年前期の専門コースにおける提案が発端である。「生け垣プロジェクト」とは、千葉大学が行っている「グリーンフィールド構想」から生まれたものである。「グリーン（療法）フィールド」とは、環境健康フィールド科学センターの一部を、市民にとっての憩いの場であり、高齢の方や身体弱者の方にとって新たな活力を生み出す場となる景観果樹園に創り変えようという構想であり、千葉大学の先生を中心にプランが練られてきた。そして、カレッジリンクのプログラムにおいて、この「グリーン（療法）フィールド」をテーマに受講生たちが独自の視点から構想案を創り上げていった。

従来なら、プログラム内で発表して完結することが多いが、前期プログラムの終了後、千葉大学内で議論が行われ、「修了生たちがまとめた構想案を前向きに受け止め、実現に向けて検討していこう」ということになり、実現に向けて動き出したプロジェクトである。



写真4-5 生け垣ミーティングの様子
(出典：カレッジリンクブログ)

表4-6 生け垣プロジェクトメンバー構成（現在）

立場	専門コース修了生	基礎コース修了生	先生	合計
人数	3	1	1	5

(出典：カレッジリンクブログ)

【養生訓いろはかるたプロジェクト】

2009年後期の専門コースの発表会にて提案されたものが発端となり、漢方薬と西洋薬、予防医学と未病、薬膳に見る食べ物と健康の関係について計6回のプログラムを通してカレッジリンク流の養生訓を作ろうという提案が行われた。最終回の公開発表会の中で、「ただ養生訓をまとめて終わりにするのではなく、それらをオリジナルの『いろはかるた』にまとめて、柏の葉全体に広めよう」という提案がされ、実現するために動き始めたプロジェクトである。

提案が行われた翌週にメンバーの募集が行われた。提案に携わった専門コースのメンバー以外にもこれまでの修了生に声かけられ、いろはかるたの「読み札づくり」がスタートした。

表4-7に挙げられるメンバーが集まり、計14名で検討が行われた。ここでは基礎コースの修了生も参加可能であり、step1からstep3への展開は自由であることがわかった。（写真4-6～4-9）

表4-7 養生訓いろはかるたメンバー構成

立場	専門コース修了生	基礎コース修了生	先生	合計
人数	7	5	2	14

(出典：カレッジリンクブログ)

¹³ カレッジリンクブログ：みんなのAgora http://college-link-chiba-u.com/agora/08_pilot/

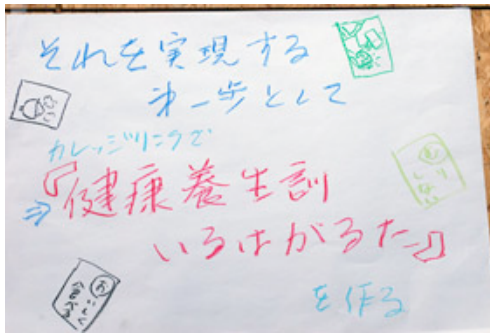


写真4-6 養生訓いろいろはかるた提案の様子1
(写真提供：三輪正幸)



写真4-7 養生訓いろいろはかるた提案の様子2
(写真提供：三輪正幸)



写真4-8 養生訓いろいろはかるた提案の様子3
(出典：カレッジリンクブログ¹⁴)

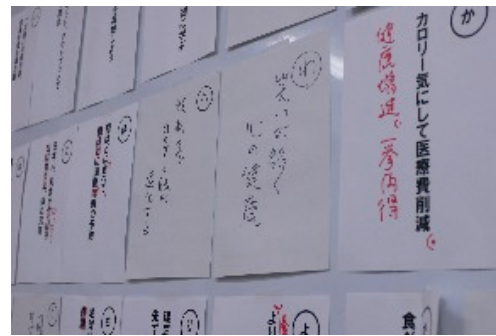


写真4-9 養生訓いろいろはかるた提案の様子4
(出典：カレッジリンクブログ)



図4-8 養生訓いろいろはかるた完成案

14 カレッジリンクブログ：みんなのAgora http://college-link-chiba-u.com/agora/08_pilot/

【活動実践におけるプロセスの分析】

■ 時期別分析

「活動立ち上げ期」として2009年にパイロットコース（現基礎コース）を立ち上げ、同年春からは基礎コースと専門コースにわかれた現在と同じプログラムがつけられた。これを「活動始動期」とする。同年春の専門コースには1月のパイロットコースからの参加者がリピーターとして参加した。さらに秋のコースで提案された内容を基に、提案実現の動きが見られたため、この頃から「活動発展期」とした。ここで提案された活動は現在も続いており、継続的なサポートが行われていることがわかる。今後は提案から立ち上がった活動を持続させるために、活動団体を社団法人にする動きもでてくる。2009年の始動からわずか2年間の間に提案を実現する動き、それをサポートする動き、今後の体制について考える流れが短期間で進んでいることがわかった。

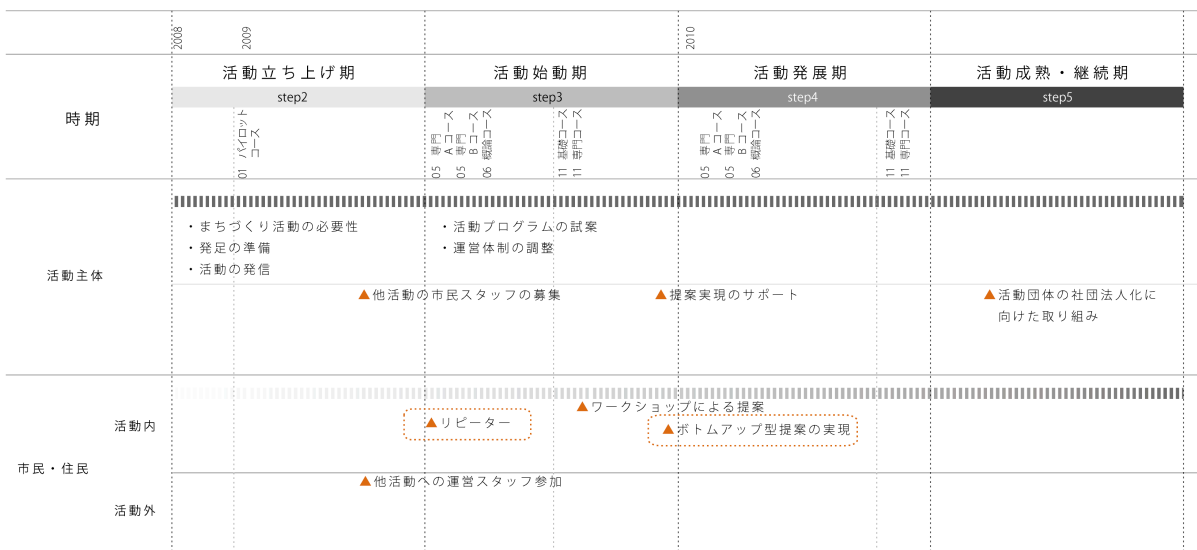


図4-9 カレッジリンク時期別分析

■ 運営のプロセス

提案は活動の中で住民・市民から出てきたものであるが、実現に向けての話し合いの場やアドバイザー紹介などが活動主体によって行われており、短期間の間に活動主体と住民・市民の連携が取れていることがわかる。しかし、活動自体は毎回新しい人も参加するので、スタッフが足りていない状況である。この問題については、活動主体へのヒアリング¹⁵によっても明らかとなっており、人手不足の対策を考え、住民・市民が主体的に動くことができるようになることを求めている。一方で参加者に対するヒアリング¹⁶では、「自分たちで動きたい思いはあるが、先生がいなくてできないことがまだ多い」、「社団法人化されることで自分たちでできることが増えるのではないか」という意見が挙がっていることから、住民・市民の側の主体的な取り組みに対する積極的な意見を聞くことができた。

¹⁵ カレッジリンク活動主体野田氏へのヒアリングより

¹⁶ カレッジリンク参加者山内氏、河合氏へのヒアリングより

運営のプロセス	企画・計画	準備	現在進捗 運営	フォローアップ
UDCK	・実践に向けた検討	・ミーティング、勉強会	・提案実現のサポート	
活動主体				
カルネット参加者	・カレッジリンクによるアイデア再検討	・ミーティング、勉強会	・提案の実現 ①養生訓かるた作成 ②生け垣製作	

図4-10 カレッジリンク運営のプロセス

■ カレッジリンクにおける住民・市民の関係分析

図4-11の図を見ると、活動の展開が段階的であることがわかる。また、カレッジリンクの参加者が他の活動のスタッフを務めるに至る経緯や、他活動への参加は活動主体のUDCKとの連携があってこそできていると言える。また、このように段階的に活動を展開することで、参加者同士のコミュニティも自然につくられ、カルネットの活動を円滑に進めることができるということが考えられる。

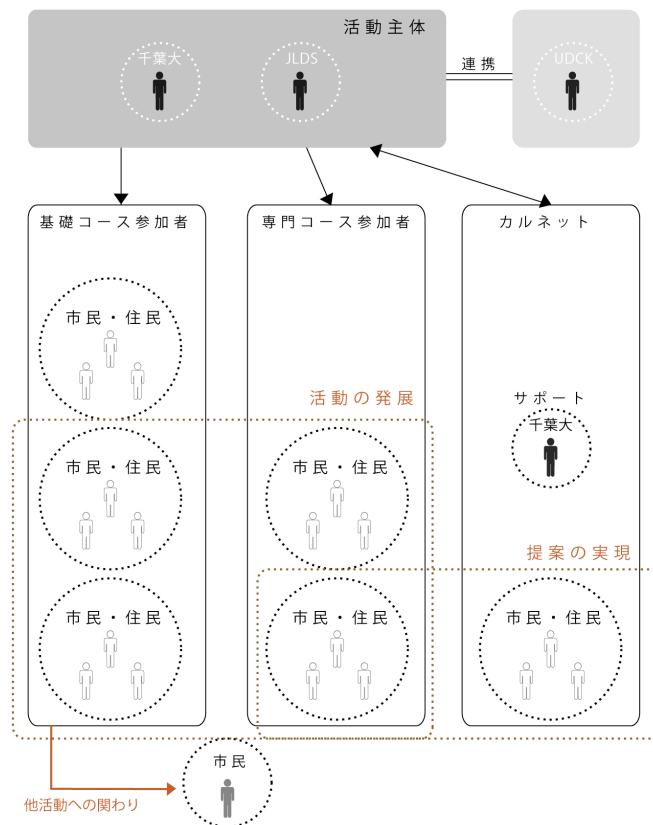


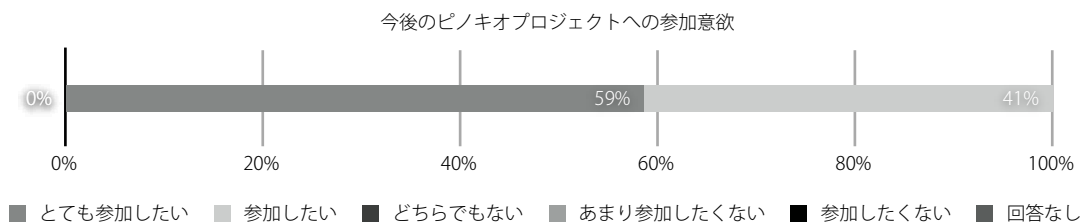
図4-11 カレッジリンク 活動と住民・市民の相関図

4.2.3 まちづくり担い手育成の実践 【ピノキオプロジェクト】

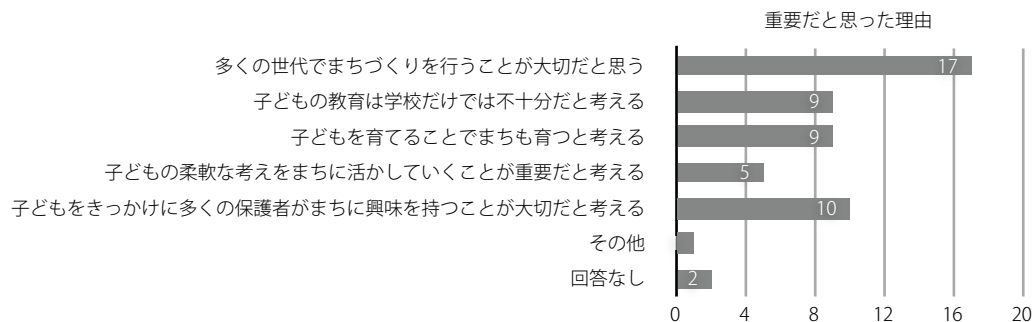
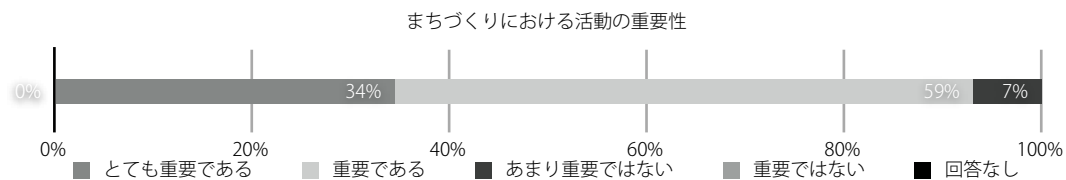
(1) 持続的参加に対する意欲

後述するリーディングメンバーの活動は一年に一回のイベントに向けて多くのワークショップを行っており、継続的な参加が必要となってくる。また、ピノキオプロジェクトは地域でまちを育てるということをコンセプトの一つとしており、継続することによる地域への理解や関心も深まると考えられる。活動主体へのヒアリング¹⁷においても、地域企業のピノキオプロジェクトに対する理解が深まり、協力体制が整い始めたことが挙げられ、持続的に活動することによる成果と言える。また、活動に参加している保護者へのヒアリング¹⁸からは、子どもによる「中学生になっても関わり続けたい」という意見も聞かれ、運営側と参加者側が共に単発のイベントではなく、長期的な活動としてピノキオプロジェクトを捉えていることがわかった。

リーディングメンバーへのアンケート調査では、100%の参加者が今後の継続的な参加意欲を示しており、今後の持続的な取り組みに向けた対策を考える時期である。



ピノキオプロジェクトのまちづくり全体における重要性については93%の人が「とても重要である」と答えており、その理由としては「多くの世代でまちづくりを行うことが大切だと思う」と答えた人が多く、活動が地域全体のまちづくりとしての一端を担っているという意識があることがわかった。活動を継続的に行う中で参加者が地域のまちづくりにおける重要性を意識していることは、まちづくりの担い手を育てる上で、大変意味のあることだと言える。



¹⁷ 中澤氏へのヒアリング

¹⁸ 和田氏へのヒアリング

(2)市民運営に向けた戦略的な取り組みによる関わり方の変化— リーディングチーム設立

■ リーディングメンバーの結成

2008年のピノキオプロジェクトは、企画運営はスパイラルを中心に行われた。2009年の新たな取り組みとして、「ピノキオリーディングチーム」が結成された。ピノキオリーディングチームでは、ピノキオのプランニング、準備、運営まで全てに渡り地域住民の参画による「試行錯誤と実践」が図られた。2009年のピノキオでは小学生から大人まで計55名がリーディングメンバーとして登録した。募集方法は、五感の学校¹⁹のメーリングリスト、ホームページ等によって一般公募とした。内訳は表4-8に示す通りである。なお、2010年には広く募集はしていない。リーディングメンバーの口コミで新たな参加は受け付けている。

表4-8 ピノキオリーディングメンバー2009登録者内訳

立場	小学生	高校生	大学生	社会人	保護者	合計（人）
人数	27	8	6	6	8	55

(出典：ピノキオプロジェクト2009報告書)

2009年に結成されたメンバーはピノキオプロジェクト当日に向けたワークショップの事前企画・準備だけではなく、ワークショップの後に「振り返り」の会を行っており、次の活動に活かせるしくみづくりができています。

<準備>

・2009年

2009年ピノキオシティのコンテンツは3章で述べたように主にピノキオマルシェとピノキオシティであり、リーディングメンバーはピノキオシティの構想から運営まで関わった。

①事前ワークショップ

2009年8月から4回に渡ってワークショップを行った。このワークショップは、10月の「ピノキオシティ²⁰」のアイデアを考え、企画のプロセスから関わることを目的に行われており、イタリア在住のマラジジ氏とネット回線によってテレビ会議方式で行われた。この4回のワークショップでピノキオシティのアイデアをまとめた。

表4-9 ピノキオリーディングメンバー2009活動内容

日程	2009/08/24	2009/09/12	2009/09/27	2009/10/04
	第一回企画会議	第二回企画会議	第三回企画会議	第四回企画会議
内容	ピノキオシティのアイデア出し	・トラジジ氏からのコメント紹介 ・具体的アイデア決定 (建築家に実施設計依頼)	・段ボールの組み立てテストと広告塔の製作 ・建築家による基本構造と組み立て方法の説明	・部品づくり ・カッターの使い方講座
参加人数	55	30	34	28

(出典：ピノキオプロジェクト2009報告書)

¹⁹ 五感の学校²⁰ ピノキオシティ



写真4-10 エドワード・マルジジ氏とのワークショップの様子

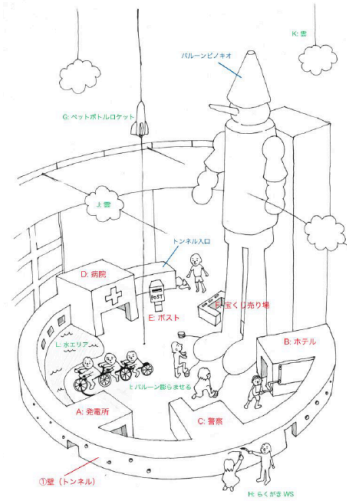


図4-12エドワード・マルジジ氏による構想案

②建設

10月8日からの3日間が建設期間（準備段階）となり、リーディングメンバーの小学生や高校生は学校の放課後を利用して参加した。保護者を含めてボランティア参加で延べ85名で建設した。図4-13はこれまでのアイデアを建築家によって構想案として提示されたもので、この図面をもとに建設された。

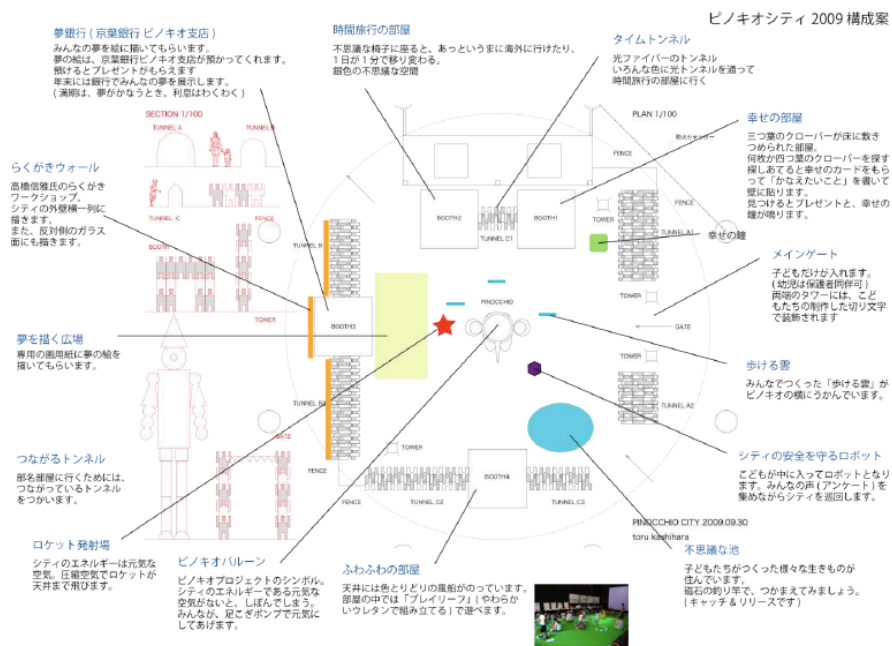


図4-13 ピノキオシティ2009 構想案
(出典：ピノキオプロジェクト報告書2009)



写真4-11 2009準備の様子1



写真4-12 2009準備の様子2

<当日>

ピノキオシティ当日はリーディングメンバーが交代で運営を担当した。役割は誘導係、夢銀行受付係、ロケット係、ロボット係、プレゼント係などであった。

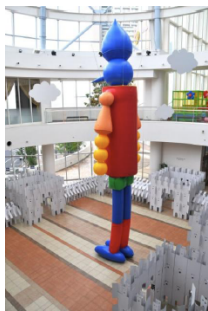


写真4-13
2009当日の様子1



写真4-14
2009当日の様子2



写真4-15
2009当日の様子3

片付けはリーディングメンバーで行った。



写真4-16 2009片付けの様子1



写真4-17 2009集合写真

(写真4-10～17 出典：ピノキオプロジェクト報告書2009・2010)

<フォローアップ>

最終日にリーディングメンバーの子どもと保護者計30名を集めて打ち上げを行い、リーディングメンバーの認定とエドアルドマラジジ氏とインターネット回線による交流を行った。

・2010年

2009年に引き続き、ピノキオプロジェクトではピノキオマルシェとピノキオシティのコンテンツがあり、リーディングメンバーはピノキオシティの中にある「ピノキオリーディングチーム運営コンテンツ」を担当した。

(図4-14) このコンテンツは以下の2点である。

- ・江戸川大学との環境パターゴルフ
- ・9月26日実施の風グレースライトワークショップで考案したアトラクション

上記2点を発表するにあたり、リーディングメンバーでは2010年5月より4回（ワークショップ1～4）に渡って、江戸川大学社会学部ライフデザイン学科恵研究室・伊藤研究室とともに子どもたちが環境に関するワークショップを行い、そのまとめとして「環境パターゴルフ」として提案し、成果を遊びながら追体験できるコンテンツを用意した。

また、9月26日にはメディアアーティストである森脇裕之²¹を講師に風で色が変わる「風グレースライト」を使った遊び空間を展開し、ワークショップを行った。空気の塊を発射する「空気砲」を制作し、ピノキオリーディングチームが運営を行った。

表4-10 ピノキオリーディングメンバー2010活動内容

日程	2010/03/07	2010/05/22、 06/06	2010/08/01	2010/0920	2010/10/07～09	2010/09/26
内容	ワークショップ1 環境歴をつくる	ワークショップ2 水質調査	ワークショップ3 熱環境調査	ワークショップ4 ・部品づくり ・カッターの使い方講座	ピノキオシティ 建設	ワークショップ 「風グレースライト」を使った 空気砲製作とアイデアワーク ショップ
参加人数	—	—	12	19	述べ147	29

(出典：ピノキオプロジェクト2010報告書)

²¹ 森脇裕之

ライト・アーティスト、多摩美術大学准教授

1964年生まれ。LEDなどの光るパーツを用いたインタラクティブなインスタレーション作品で知られる。

光の作品は美術の世界に留まらず、舞台美術や街にも進出。数多くのイルミネーション作品に取り組む。

柏の葉キャンパスでは2006年にイルミネーションイベント「未来予測」で作品を発表。以降ペットボトルを使ったイルミネーション「ペットスター」などが毎年展示されている。(出典：ピノキオプロジェクト2010報告書)

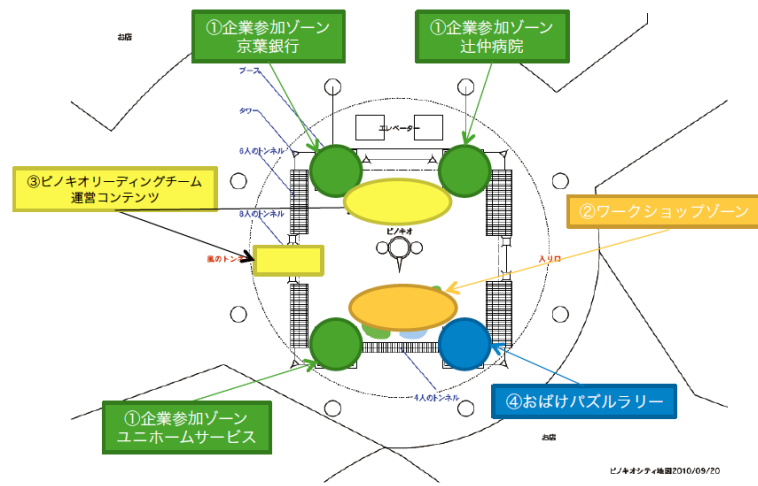


図4-14 ピノキオシティ2010構成図
(出典：ピノキオプロジェクト報告書2010)

<準備（事前ワークショップ）>



写真4-18

2010事前ワークショップの様子1



写真4-19

2010事前ワークショップの様子2



写真4-20

2010事前ワークショップの様子3

<当日>



写真4-21

2010当日の様子1



写真4-22

2010当日の様子2



写真4-23

2010当日の様子3

<フォローアップ>

12月4日に子ども2名と保護者2名の計12名が集まり、ピノキオプロジェクトの「振り返り」を行った。当日の写真をプロジェクターを使って映し出し、反省会と次回（来年）の提案を話し合った。

【活動実践におけるプロセスの分析】

■ 時期別分析

図4-15の時期別分析では、「活動立ち上げ期」はピノキオプロジェクト単独の活動ではなく、「五感の学校アートプロジェクト」の一環として2007年に開催されたが、それをきっかけに独立した活動として2008年から始動した。このため、2008年の活動においては、五感の学校参加者によるリピーターが生まれていた。また、2009年から住民・市民の主体的な参加を促すため、「リーディングメンバー」の募集が行われ、結成された。これによって、2009年、2010年の運営がリーディングメンバーの積極的な関わりを考慮したプログラムとなっている。

	2007	2008	2009	2010	
時期	活動立ち上げ期	活動始動期	活動発展期	活動成熟・継続期	
	step2	step3	step4	step5	
活動主体	10 五感の学校 ピノキオタウン デザイン	11 ピノキオ プロジェクト	11 ピノキオ プロジェクト	11 ピノキオ プロジェクト	
	<ul style="list-style-type: none"> 五感の学校における活動のきっかけ 活動の発信 	<ul style="list-style-type: none"> 活動プログラムの試案 運営体制の調整 活動の発信 	<ul style="list-style-type: none"> 市民運営の立ち上げ 	▲リーディングメンバーの募集	
市民・住民	活動内	▲リピーター	▲リーディングメンバー		
	活動外				

図4-15 ピノキオプロジェクト時期別分析

■ 運営のプロセス

リーディングメンバーの運営への関わりについては、ピノキオプロジェクトそのものの企画は活動主体で行っているものの、リーディングメンバーはピノキオシティの企画から携わっている。よって図4-16では企画の途中段階からとなっている。また、2009年には活動当日に振り返りのための時間が設けられた。また、2010年には、別日に振り返りの会が行われた。ここでの内容は活動の内容の反省、次回の内容の検討などである、リーディングメンバーは地域の運営を目指して結成されたが、現在はまだ活動主体の力が大きく、リーディングメンバー独自の活動はない。今後の展開としては、現在小学生のメンバーが中学生になることで、積極的にメンバーを引っ張っていくことができる存在になっていくことが期待されている。

運営のプロセス	企画・計画	準備	運営	フォローアップ
UDCK	<ul style="list-style-type: none"> 企画の検討 運営の計画 	<ul style="list-style-type: none"> 広報 	<ul style="list-style-type: none"> 当日運営 	<ul style="list-style-type: none"> 活動のまとめ
活動主体				
リーディングメンバー		<ul style="list-style-type: none"> ワークショップ ピノキオシティ建設 	<ul style="list-style-type: none"> 当日運営 	<ul style="list-style-type: none"> 当日の振り返り

図4-16 ピノキオプロジェクト運営のプロセス

■ ピノキオプロジェクトにおける住民・市民の関係分析

図4-17にあるように、リーディングメンバーの構成は参加者の一部で構成されており、2009年の募集以降は正式な募集を行っていない。2010年の募集は行っておらず、2009年のメンバーが連れてきた友人によるメンバー増加のみ受け入れている。この図からもわかるように、リーディングメンバー結成による展開はまだ起っていないが、今後はリーディングメンバーによる活動の展開が期待できる。

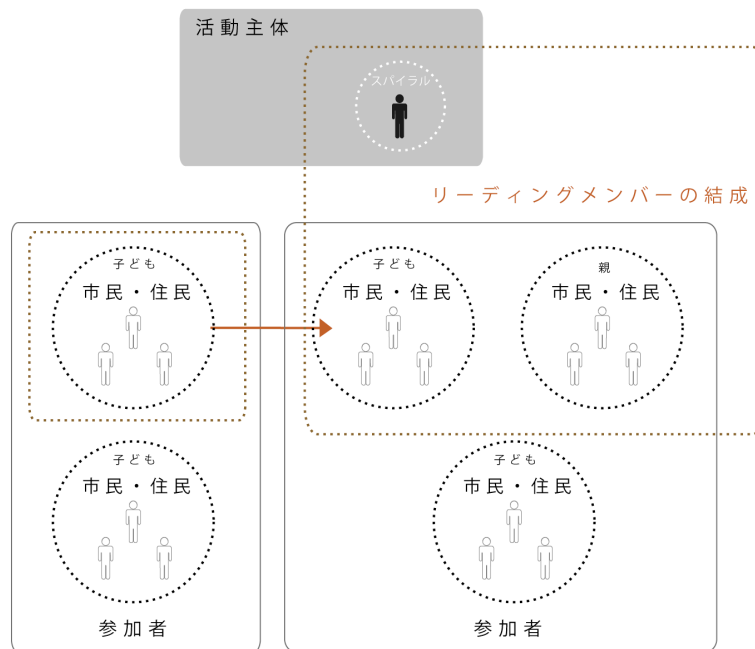
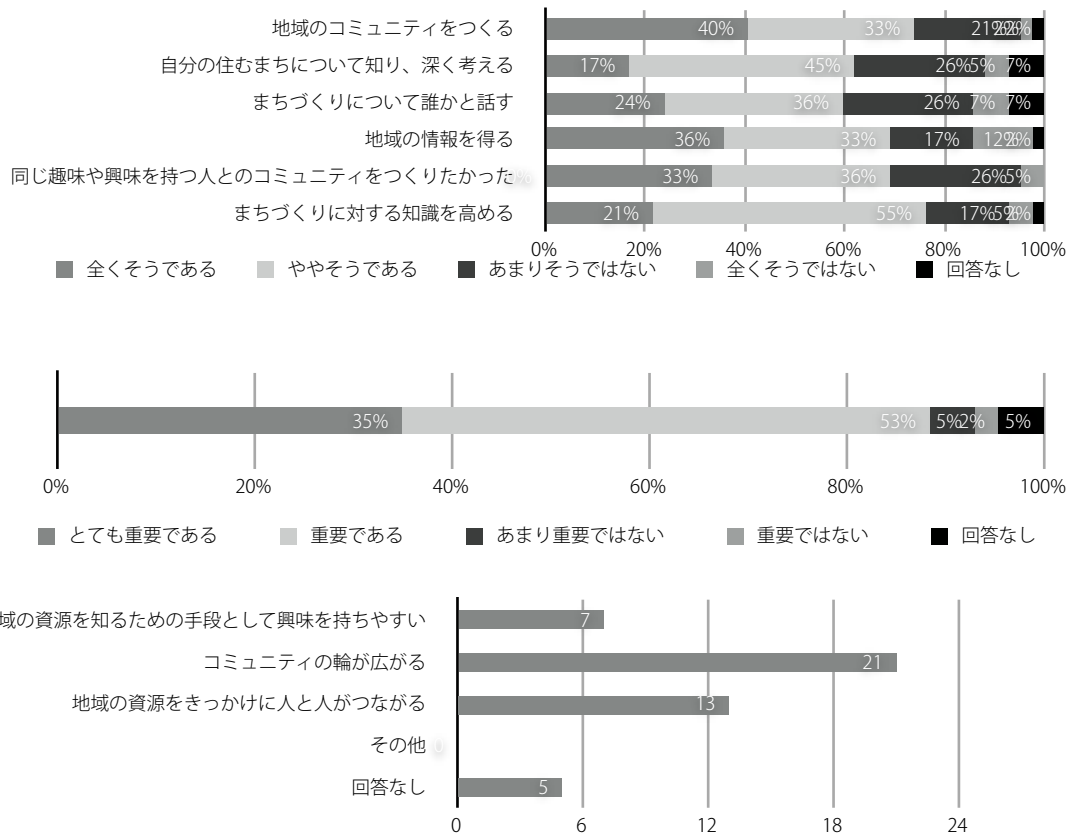


図4-17 ピノキオプロジェクト 活動と住民・市民の相関図

4.2.4 商店と市民のコラボレーションまちづくりの実践 【マルシェ・コロール】

(1) 定期開催、活動の継続によるネットワークの広がり

「みんなでつくる、みんなのマルシェ」をキーワードに活動を行っており、出店者や参加者の交流を目的に行われている。また、出店者へのアンケートでは、参加の目的を「地域のコミュニティをつくる」や「同じ趣味や興味を持った人とのコミュニティをつくる」という項目に「全くそうである、ややそうである」と答えた人が70%を超えている。また、地域のまちづくりにおいて活動の重要性については88%の人が「とても重要である、重要である」と答えており、その理由として「コミュニティの輪が広がる」と答えた人が一番多く、コミュニティに関して意識が高いことがわかる。



また、ヒアリング調査²²からも「顔見知りが増えるにつれて、人に会いに行く楽しみができた」「商店と住民が連携プレーでイベントが成立するところが面白い」「お店とは違うコミュニケーションが生まれる」「色々な職種、世代の人とコミュニケーションを取る事が出来た」「マルシェへの参加がきっかけで活動に広がりがあった」「人の繋がりや輪が広がった」などのコミュニケーションや繋がりといったことに対する意見が多く聞かれた。マルシェがきっかけで地域の中に繋がりや輪が生まれたことは大きな成果であると言える。

²² 飯島氏、関口氏、佐々木氏、笠井氏、石井氏によるヒアリングより

(2)コラボレーションの発生— 柏の葉ドッグチーム結成

マルシェ・コロールから生まれた動きの一つに「柏の葉ドッグ」がある。これは、「出店者同士で何かできないか」と、出店者の方から声が挙がり、さらには出店者がまちのクラブ活動で知り合った地域住民を巻き込み、「地域住民のコラボレーションしよう」といった声のもと、動き出したプロジェクトである。

一番最初に誕生したのは8月19日の「マチの店長シリーズ」の子ども向けソーセージづくり教室を行った時である。「マチの店長」の講師だった関口氏²³によって提案された。その後10月10日・11日のピノキオプロジェクトのコンテンツであるピノキオマルシェの際に、「ピノキオカフェ」として「柏の葉ピノキオドッグ」を試作することが決まった。(図4-18、4-19、表4-11、写真4-24~27)この動きをもとに、その後は時期毎に旬の食材と企画を用意し、柏の葉の新たな名物として定着させることを目的に活動が定着した。

10月24日の「マチの先生コラボ企画」では、ソーセージ作りとビールの講習会有り、このイベントによって黒ビールを使ったソースが誕生した。この商品は翌月の11月5・6日のマルシェで販売された。



写真4-24 柏の葉ドッグ
(写真提供：小溝敏央)

表4-11 柏の葉ドッグの動き

日程	8/19	10/10・11	10/24	11/5・6
柏の葉ドッグの動き	柏の葉ドッグ誕生	柏の葉ピノキオドッグ発売	ソース開発	黒ビールを使ったソース 柏の葉ドッグ発売
イベント	マチの店長シリーズ ソーセージ作り	ピノキオマルシェ	マチの先生コラボ企画 ピアフエスタ (ソーセージ作りも)	マルシェ
備考	—	—	11月に販売	—



図4-18 ピノキオカフェのチラシ



図4-19 ピノキオカフェメニュー

(出典：ピノキオプロジェクト2010報告書)

²³ 関口久也

マルシェコロールへの出店をきっかけに「マチの店長シリーズ」に店長として参加。



写真4-25 ピノキオカフェの様子1



写真4-26 ピノキオカフェの様子2



写真4-27 ピノキオカフェの様子3

(出典：ピノキオプロジェクト2010報告書)

■ 柏の葉ドッグ新商品企画から販売までの流れ

今後の柏の葉ドッグ開発までの流れを整理すると、新商品の開発と共にイベントを行ない、そこから試食会やミーティングを重ね、マルシェでの販売となる。(図4-20)

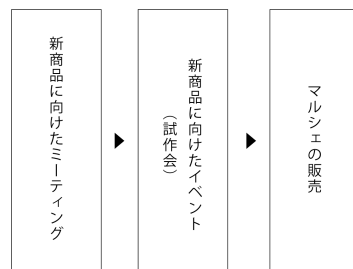


図4-20 柏の葉ドッグ企画から販売の流れ

■ 開発メンバー

図4-22は開発に関わったメンバーであるが、詳細は図4-21のように、ソーセージとパンは商店が受け持ち、ソース作りと販売係を住民メンバーが担っている。また、ミーティング時などはアドバイザーとしてNPO支援センターのメンバーが加わる場合がある。また、ポスターやパッケージづくりはマルシェ出店者のアーティストがメンバーに加わり、企画を行っている。

このように、アドバイザーとしてマルシェの運営者は関わっているものの、企画・開発から販売までを全て商店、住民の市民メンバーで自主的に行っていることが特徴的であると言える。商店同士の交流を目的にできた動きではあるが、商店の枠組みを超え、地域住民も巻き込んだプロジェクトとなった背景として、住民にも役割が明確に与えられたことが大きいと言える。

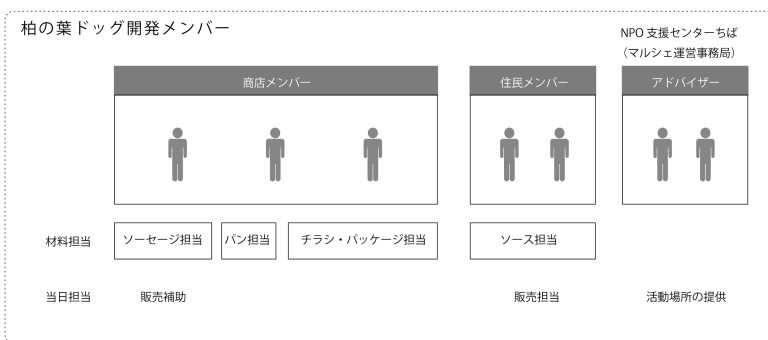


図4-21 柏の葉ドッグ開発メンバー



図4-22 柏の葉ドッグ開発メンバーチラシ

■ 柏の葉ドッグによって生まれた関係、出来事

- ・ 柏の葉ドッグを通して商店を知ってもらうことができた
- ・ 自分の作品を通じてコミュニケーションができた
- ・ 意見交換をしながらつくっていくことが刺激的
- ・ お客さんとして参加していた住民が売る側として、商店の人とコラボレーションしている
- ・ 考えたものを形にして発表する場がある、共有する場があることが楽しい
- ・ 商店だけでなく、住人が関わることで消費者の意見をダイレクトに聞くことができる

【活動実践におけるプロセスの分析】

■ 時期別分析

「活動立ち上げ期」として2008年に地域の交流事業として立ち上がった。その後、2009年5月からは定期開催となり、活動主体の中でもNPOが主体的に活動を担うようになり、この時期を「活動始動期」と位置づけることができる。また2010年にはサポートスタッフの募集を行ない、さらに出店者同士の連携が取れてきたこともあり、出店者と住民によるコラボレーション企画などの動きが出はじめ、この時期から「活動発展期」と位置づけた。現在はその他のこれらのコラボレーション事例などが出ている時期であり、「活動発展期」がしばらく続きそうであるが、上記のコラボレーション企画が徐々に安定した活動となってきてからは、さらなる展開が期待できると考える。このように時系列で辿ってみると、活動が立ち上がってから2、3年の間に展開していることがわかる。

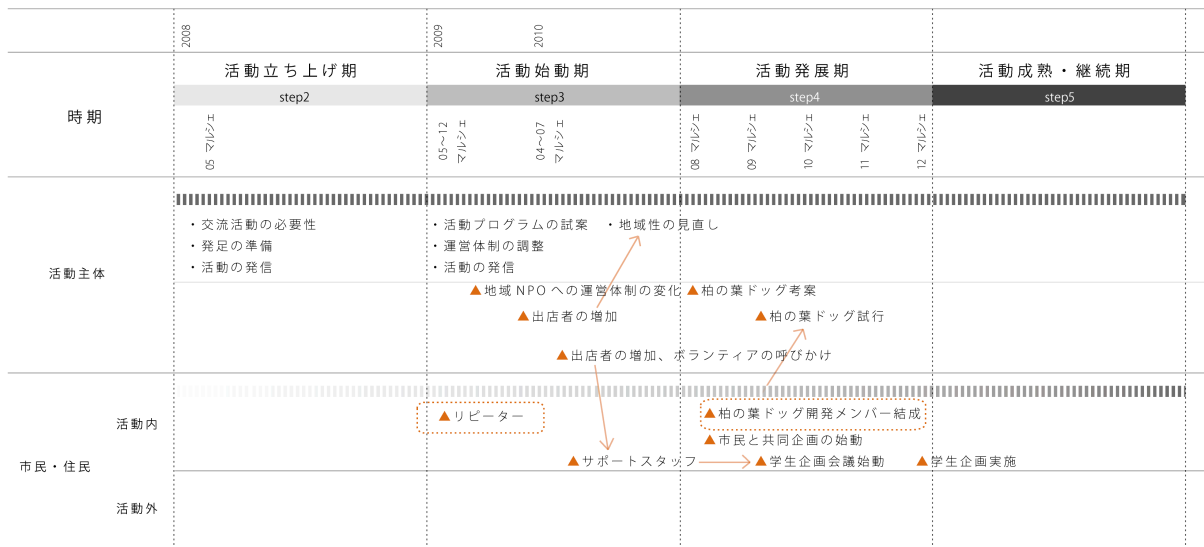


図4-23 マルシェ・コロール時期別分析

■ 運営のプロセス

自発的な活動に展開した「柏の葉ドッグ」の運営プロセスを図4-24に示す。基本的な企画は住民・出店者側から出される。これを受けた活動主体は、ミーティングの場やイベントの連携などの調整を行ない、当日の運営も住民・出店者が自ら行っている。自発的な活動に展開した活動の中でも企画から運営までを進めることができる活動であるということが出来る。この図からもわかるように、現在は柏の葉ドッグ販売までの実践が行われた後に、次の活動に向けたフォローアップはまだ行われていない。

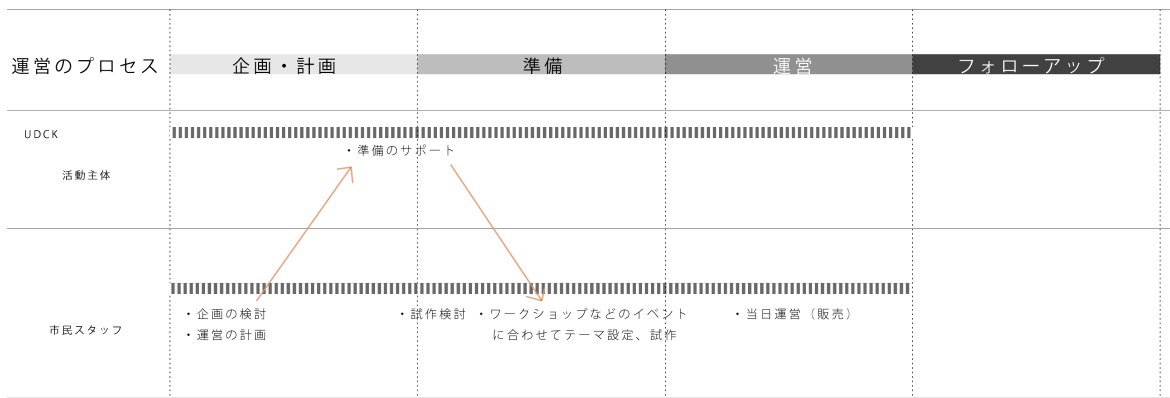


図4-24 マルシェ・コロール運営のプロセス

■ マルシェ・コロールにおける住民・市民の関係分析

図4-25にあるように、マルシェ・コロールでは出店者間の交流がや住民との関が生まれ、そこから自発的な活動が展開したことが特徴的であるが、この関係が生まれた背景には、マルシェ・コロールだけではなく、「まちのクラブ活動」において、出店者と住民の交流があったことも大きく影響していると言える。これは、活動主体が常に繋げることを意識して行っていたことによって生まれたものと言える。また、参加者と活動主体の間にサポートスタッフの層ができたことで、今後の展開の幅が広がるのが期待できる。

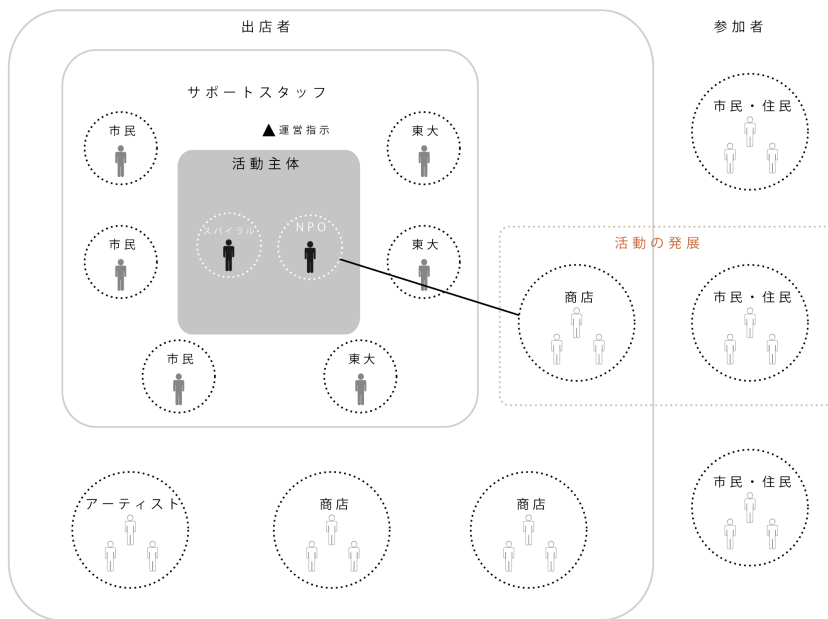


図4-25 マルシェ・コロール 活動と住民・市民の相関図

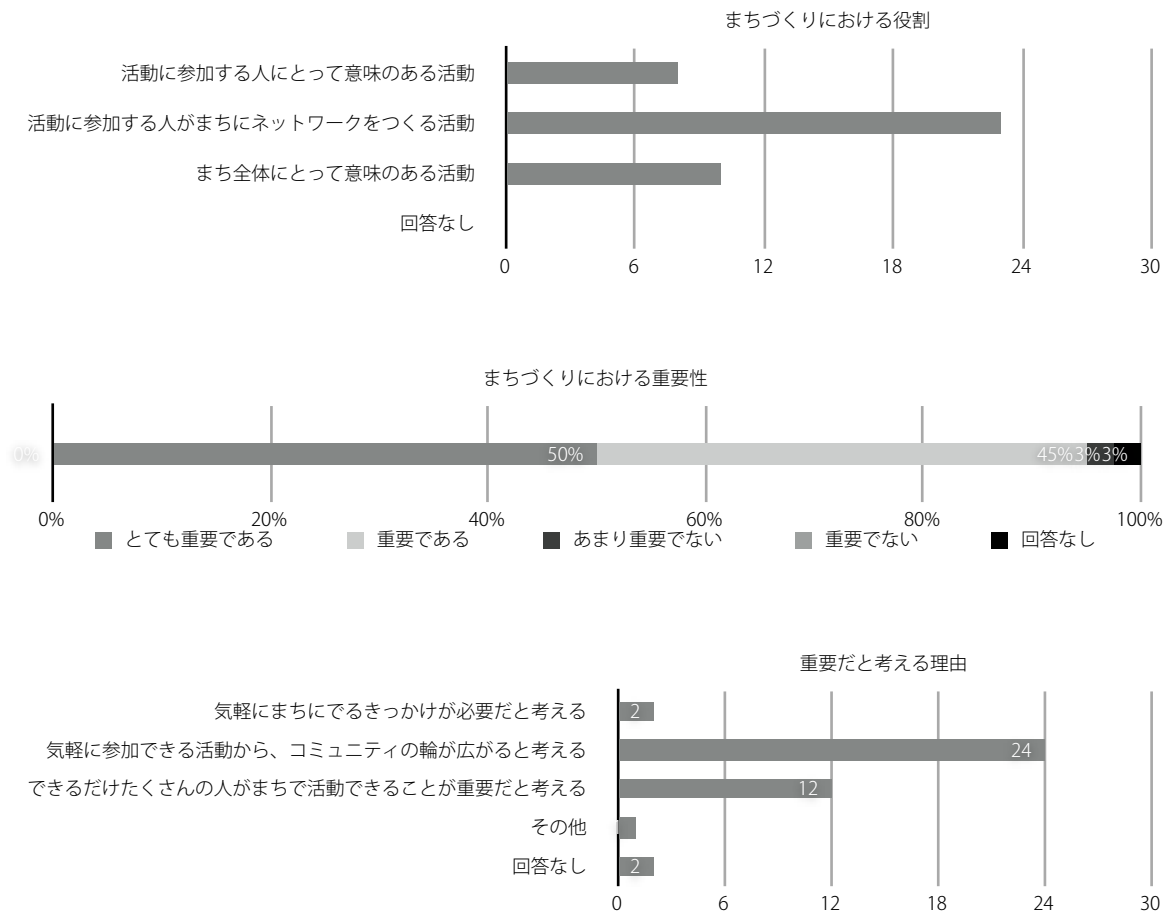
4.2.5 市民ネットワーク形成に向けたまちづくりの実践 【まちのクラブ活動】

(1) 住民ネットワークの形成

まちのクラブ活動はこれまでに多くの活動を行ってきた。この活動は、コーディネーターのNPO支援センターちばの考え方の一つである「まちのあったらいいなを実現する」をコンセプトに、子どもから大人までが参加できるプログラムを考案し、実践している。たくさんのプログラムを用意し、参加の入り口をデザイン²⁴することで、それぞれの活動では多くの関係が生まれ、コミュニティがつけられた。

アンケート調査では、まちのクラブ活動が地域のまちづくりでどのような役割を担っているかという問いに対し、一番多くの人々が「活動に参加する人がまちにネットワークをつくる活動」と答えており、ネットワークに対する意識が高いことがわかる。また、まちのクラブ活動がまちづくりにおいて重要であるか、という問いに対しては、95%の人が「とても重要である、重要である」と答えており、その重要性について「気軽に参加できる活動から、コミュニティの輪が広がると考える」と答えた人が多いことがわかった。

これによって、地域におけるコミュニティやネットワークが大切だと考え、活動に参加している人が多いことより、地縁コミュニティが稀薄な新開発地において、この活動が担うコミュニティ育成の役割は非常に大きいと言える。



また、多くのクラブが活動し始めたことで、活動間の交流が図り難く、顔が見えない状況が起きてくる。これを回避するため、事務局では「クラブの連絡会議」を2010年から企画した。これは、各クラブの部長を集め、個々の活動報告や情報交換を行うものであり、これまで事務局が繋げてきたネットワークの限界を超え、それぞ

²⁴ 参加の入り口をデザインする NPO支援センターちばの考え方。

れのクラブを繋げることが目的である。この連絡会議はまだ試行段階であるが、既にコラボレーションしようと立ち上がった企画²⁵も出てきている。

さらに、クラブ活動の枠を超え、2009年からは、クラブ活動で知り合った住民同士で「木漏れ日喫茶」というサークルがつくられた。このサークルは、マンション住まいの高齢者が集える場を企画するというもので、高齢者が地域に出る機会が少なく、顔が見えない付き合いができないという危機感から生まれた。住民で企画し、お茶会のようなサロンを開き、週に1回活動している。特記すべき点は、まちづくりの拠点が仕掛けた活動以外にこうして住民同士で活動を生み出し、動き始めたことであり、さらにはクラブ活動事務局とも連携を図っている点である。お互いの情報交換、運営ノウハウの継承など、事務局の担当外であれ、サポートするしくみがあることで、地域のネットワークの基盤ができるきっかけと考えられる。

また、事務局側の意図でマルシェ（前節）出店者を紹介し、上記のサークルではイベント時に出店者からお菓子の注文を取る関係ができていたこともヒアリングにより明らかとなった。²⁶

(2)自発型プロジェクトの発生

3章で述べたように、まちのクラブ活動は活動主体によって4つのタイプに分類されている。（表4-12）

「実証実験型」「しかけ型」「アート型」「住人発案型」であり、本章で着目する点は「住人発案型」である。なぜならば、まちづくりの活動によって発展した市民・住民の自発的な活動であり、他の3つのタイプとは異なるからである。

住人発案型のクラブ活動が発生したのは2008年11月の「もっとカメラクラブ」であり、その後2009年に「バンビクラブ」「もっとセツヤクラブ」「みんな一緒にリズムング♪クラブ」「柏の葉タンゴクラブ」「ニイハオクラブ」「柏のフラダンスクラブ」、2010年に「ビーチボールクラブ」が発足している。

表4-12 クラブの種類

実証実験型	実証実験の住人グループとして発足されたクラブ
しかけ型	クラブ事務局しかけ型クラブ
アート型	アートプロジェクトの移管先として発足したクラブ
住人発案型	住民発案で発足したクラブ

（出典：柏の葉キャンパス コミュニティサポート事業2009年度報告書）

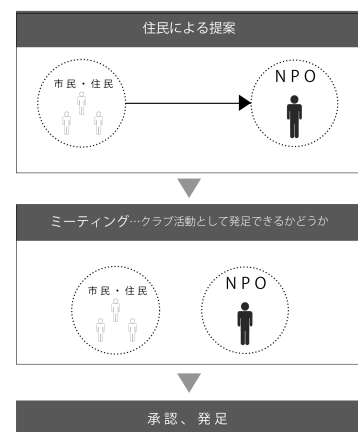


図4-26 住人発案型クラブ発足の経緯

■住人発案型クラブの発足経緯

住人発案型の活動の発足経緯は活動により様々であるが、他の活動でクラブ活動事務局と会う機会に、「こんなことをやってみたい」という声が挙がり、事務局とのミーティングを通して、まちのクラブ活動の主旨を伝え、クラブ事務局の承認を得た上で発足される。（図4-26）

²⁵ ピクニックペタンク、ビアフェスタ

²⁶ 佐々木愛氏のヒアリングより

【活動実践におけるプロセスの分析】

■ 時期別分析

「活動立ち上げ期」として2007年にまちのクラブ活動発足に向けたミーティングなどが動きはじめた。2008年からクラブ活動が順次立ち上がり、始動した。この時期を「活動始動期」とする。その後、2009年には住民提案による活動が生まれた。このような自発的な活動が出始めた時期を「活動発展期」とし、その後も様々な性格を持つ活動が活発になり、活動のリーダーのネットワークを強化する動きが2010年から見られるようになった。

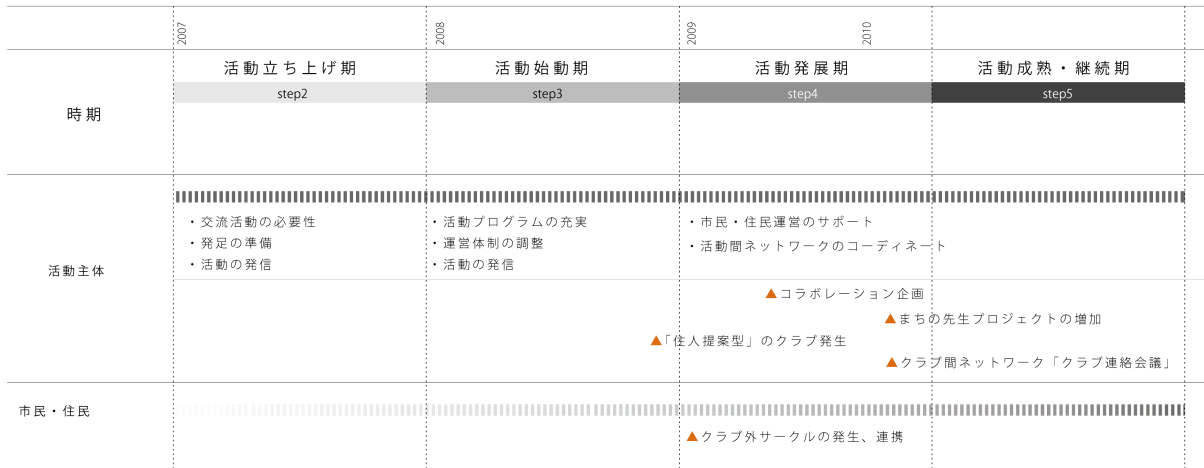


図4-27 まちのクラブ活動時期別分析

■ 運営のプロセス

住民発案型のクラブ活動の運営プロセスを図4-28に示す。住民から発案された提案の運営プロセスは、企画自体が住民から出され、これを活動主体が受け、ミーティングを行なう中で企画内容が決定される。これは、活動主体からしかけた活動とは大きく異なる。しかし、活動が活発化することで、住民の中で運営する人の負担が大きくなり、継続することが難しくなった事例も挙げられる。

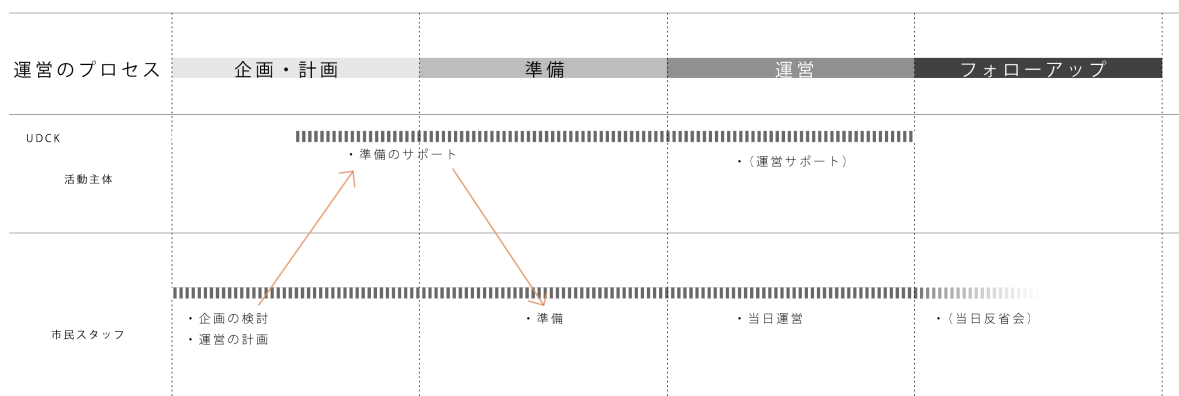


図4-28 まちのクラブ活動運営のプロセス

■ まちのクラブ活動における住民・市民の関係分析

図4-29のように、多くの活動が発足したことで自発的な活動が生まれる、活動間のコラボレーション企画が生まれるといった動きも見られるが、現在は活動主体の顔が見える関係となっており、活動主体の負担が大きいと考えられる。全体の活動のネットワークの必要性が出てきたため、現在は活動間のネットワーク形成に向けた動きが見られる。

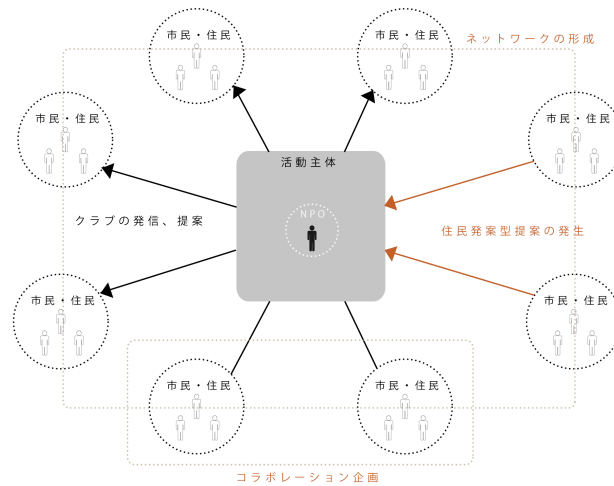


図4-29 まちのクラブ活動 活動と住民・市民の関連図

4.3 関係づくりのプロセスの違いによる市民・住民のまちづくりへの影響

関係作りのプロセスの全体図を図4-31、4-32により比較し、考察する。これにより明らかとなったことを以下に示す。

- 殆どの活動において2回目の開催時にstep2としてリピーターが存在すること
- 全ての活動も2009年から2010年の間にstep3の「活動発展期」を迎えており、UDCK発足から数年間の間に活動が活発化したこと
- 参加者が提案を行うような企画があるプログラムによって、活動の展開が生まれていること
- 殆どの活動はまだstep5にあたる「活動成熟・継続期」の段階ではないこと
- まちづくりスクールは活動主体のサポートというよりは、学生スタッフと学生スタッフの紹介によるUDCK関係者のサポートが大きく、今後のサポートについて考える必要がある。「まちづくりの担い手」を育てるために、まちづくりスクールを通じてどのように育成していくべきなのかということについて、スクール後のフォローを含めて考える必要がある。
- カレッジリンクはフォローの体制ができており、カルネットの社団法人化に向けた動きを進めているが、活動の中には専門家のアドバイスが必要な場合や、大学側のフォローが必要になってくる。
- ピノキオプロジェクトは他の活動に比較して、まだ住民・市民で進める動きは出ていない。リーディングメンバーは子どもの参加が多く、自発的に何かを進めることは難しい。子どもだけでなく、大人のリーディングメンバーをどのように育てていくかも重要になってくる。

- マルシェ・コロールとまちのクラブ活動については、活動主体の提案ではなく、住民・市民が自ら立ち上がったものであり、サポートの必要性が低い。しかし、実際に運営を行う中で、活動主体であるNPOのアドバイスや協力が活動を成立させている要因となっている。

これらの結果により、運営プロセスによる活動の発展や自発的な活動が発生した要因の共通点や違いを生み出したものとして、以下の項目が考えられる。

- 1) プログラム先行によるもの
- 2) ネットワーク先行によるもの
- 3) 土台形成によるもの

1) はまちづくりスクールとカレッジリンクに見られるようなボトムアップ提案型のものに当てはまり、活動の中の実技（ワークショップや実践）というプログラム形式があったことによって、提案が発生し、実現に至ったものである。

2) はマルシェ・コロールの柏の葉ドッグやまちのクラブ活動のコラボレーション企画など、活動参加者の間にネットワークが形成され、このネットワークによって提案が実現されたものである。

3) はまちづくりスクールのスタッフへの参加や、ピノキオプロジェクトのリーディングメンバーのような、活動参加者に対して活動主体が担い手育成を目的とした枠組みを作ったことで、積極的な参加が促され、その結果、提案の実現や他の展開に繋がるものである。（図4-30）

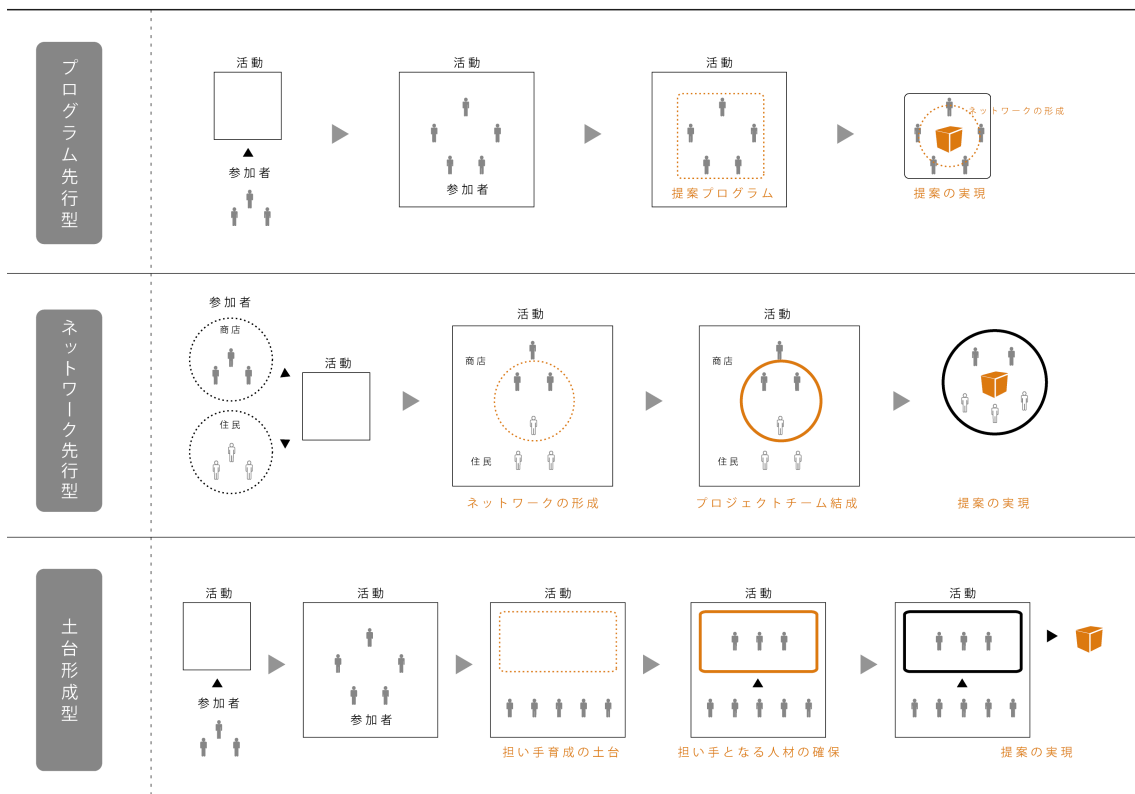


図4-30 活動の発展や自発的活動を生み出した要因

またこれらの活動の今後のサポート（step3～4）として①場所の提供②専門家の派遣③運営のサポート④広報のサポートが考えられる。現段階におけるサポートの有無を表4-13に示した。①の活動場所については、どの活動も活動場所を提供していることがわかった。これは、UDCKという開かれた場があることで、気軽に場所の確保ができるという点で非常に大きな役割を果たしている。また、②の専門家の派遣については、活動そのものに専門性が必要な場合はそこから生まれた活動にも専門性が伴う傾向があり、専門家の関与の必要性を個々の事例で考慮し、対処できることが必要とされる。③の運営のサポートは、ピノキオ以外は基本的に住民・市民が自ら行っている場合が多く、相談事が発生した場合に協力している場合が多い。④の広報活動に関しては、チラシやポスターを作る場合は住民・市民で行うことが難しい。しかし、マルシェコロールではイラストが得意な住民のを巻き込み、チラシの作成を行った。さらに今後もパッケージのデザインなどを任せることになっている。このように住民の中から協力者を探し出すことが必要である。また、宣伝方法として、それぞれの活動が使っている広報活動と合わせて宣伝することが多く、活動元のチラシ、HP、メールマガジンなどに載せることで、自発的な活動を支援している活動が多い。最後に⑤の資金については、それぞれの活動に応じてタイプがあり、資金を必要としないもの、資金を自分たちで募っているもの、活動元の中で収まっているもの、活動の売り上げによって賄っているものなど様々である。

以上のように活動を今後どのように維持していくかという段階において、サポート側である活動主体に求められる内容を具体的に示した。

表4-13 活動展開、自発的活動発生後のサポート

	リピーター	活動の展開	活動展開 自発的活動 発定期	展開後のサポート				
				① 場所の 提供	② 専門家 派遣	③ 運営	④ 広報	⑤ 資金
まちづくりスクール	○ リピーターの偏りが懸念されている	・スタッフへの参加 ・ボトムアップ提案型の活動発生	・2008年 ・2008～ 2009年	○	△	×	○	必要なし
カレックジリンク	○ リピーターの偏りが懸念されている	・ボトムアップ提案型の活動発生	2009年	○	○	○	○	○
ピノキオプロジェクト	○ —	・リーディングメンバー（運営協力）への参加	2009年	○	○	○	○	○
マルシェ・コロール	○ 徐々に増加傾向	・コラボレーション企画（自発的活動）の発生	2010年	○	必要なし	△	△	×
まちのクラブ活動	○ 徐々に増加傾向	・住民提案型活動の発生	2010年	○	必要なし	△	○	×

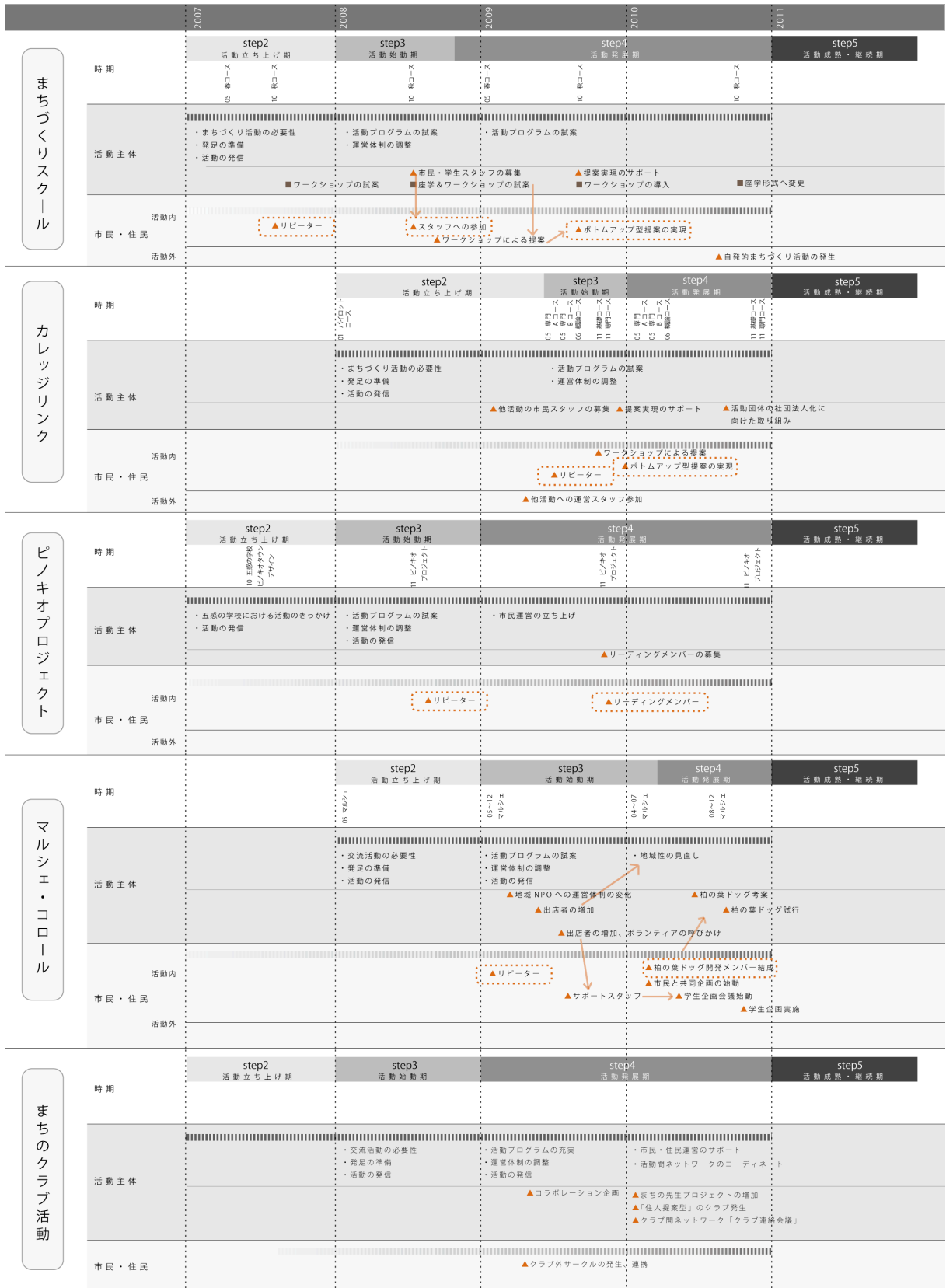


図4-31 活動の時間別分析

4章 まちづくり活動の実践から生まれる市民の関係づくり

活動の運営プロセスを見ると、企画の段階から関わっているもの、準備段階からのものなど活動によって様々である。提案型で生まれたものに関しては企画から住民・市民が関わる体制であり、活動主体側にはフォローを求める動きが現れている。

ほとんどの活動に対して活動後のフォローアップが今後の課題であることがわかった。一つ一つの活動をしっかり振り返り、地域の中における活動の位置づけを考えていくことが、第一歩である。このような点で、ピノキプロジェクトは活動後に「振り返りの会」を設けており、記録として残していることがフォローアップへと繋がっている。

最後に、本章では個々の活動によって、住民・市民と地域・まちづくりの「関係づくりのプロセス」は様々であることがわかった。step3のからstep4の展開を活動主体側が把握し、地域全体のまちづくりの中でそれら自発的な活動を捉えようとするのが重要である。なぜならば、こうした活動の展開・自発的活動の発生が、住民・市民の「まちづくり」であり、それをサポートしていく方法について考えることがまちづくり拠点としてのUDCKの役割と言えるからである。従って、このような活動によって生まれた動きを拾い、次のステップに繋げていくことで、住民・市民が地域へ関わる大きな一歩の手助けとなり、「まちづくりの実践」へと繋がる。

運営のプロセス		企画・計画	準備	運営	フォローアップ
まちづくりリスキル	スタッフへの参加	<ul style="list-style-type: none"> 企画の検討 運営の計画 	<ul style="list-style-type: none"> 広報の準備 スタッフの招集 講師の調整 	<ul style="list-style-type: none"> 当日運営 	<ul style="list-style-type: none"> 活動のまとめ
	学生スタッフ		<ul style="list-style-type: none"> 準備のサポート 	<ul style="list-style-type: none"> 当日運営 	<ul style="list-style-type: none"> 自発的活動のサポート（ある場合）
	市民スタッフ			<ul style="list-style-type: none"> 準備のサポート 当日運営 	
ボトムアップ提案型活動	活動主体	<ul style="list-style-type: none"> 実現に向けたサポート 			<ul style="list-style-type: none"> 他活動への応用
	学生スタッフ	<ul style="list-style-type: none"> 参加者への呼びかけ 企画の検討 	<ul style="list-style-type: none"> 勉強会、実験 	<ul style="list-style-type: none"> 提案実現 	
	参加者	<ul style="list-style-type: none"> 企画の検討 	<ul style="list-style-type: none"> 勉強会、実験 	<ul style="list-style-type: none"> 提案実現 	
カレッジリンク	活動主体	<ul style="list-style-type: none"> 実践に向けた検討 	<ul style="list-style-type: none"> ミーティング、勉強会 	<ul style="list-style-type: none"> 提案実現のサポート 	
	参加者	<ul style="list-style-type: none"> カレッジリンクによるアイデア再検討 	<ul style="list-style-type: none"> ミーティング、勉強会 	<ul style="list-style-type: none"> 提案の実現 ①養生別かるた作成 ②生け垣製作 	
ピノキオプロジェクト	活動主体	<ul style="list-style-type: none"> 企画の検討 運営の計画 	<ul style="list-style-type: none"> 広報 	<ul style="list-style-type: none"> 当日運営 	<ul style="list-style-type: none"> 活動のまとめ
	リーディングメンバー		<ul style="list-style-type: none"> ワークショップ ピノキオシティ建設 	<ul style="list-style-type: none"> 当日運営 	<ul style="list-style-type: none"> 当日の振り返り
マルシェ・コロール	活動主体		<ul style="list-style-type: none"> 準備のサポート 		
	商店・住民	<ul style="list-style-type: none"> 企画の検討 運営の計画 	<ul style="list-style-type: none"> 試作検討 ワークショップなどのイベントに合わせてテーマ設定、試作 	<ul style="list-style-type: none"> 当日運営（販売） 	
まちのクラブ活動	活動主体		<ul style="list-style-type: none"> 準備のサポート 	<ul style="list-style-type: none"> （運営サポート） 	
	住民・市民	<ul style="list-style-type: none"> 企画の検討 運営の計画 	<ul style="list-style-type: none"> 準備 	<ul style="list-style-type: none"> 当日運営 	<ul style="list-style-type: none"> （当日反省会）

図4-32 活動の運営プロセス

	名前	活動		性別	年齢	住所	住み始めた時期	柏の葉周辺に引っ越した経緯	活動について					
		ヒアリング対象活動	その他参加活動						知ったきっかけ	参加のきっかけ	参加の目的	内容について感想（悪）	内容について感想（良）	知ったきっかけ
1	間島克哉	まちづくりスクール	カレッジリンク	男性	30代	若柴	2008年～	・家族ができたため広い家を探した ・きれいに整備されている ・今後発展しそう	ポストティングのちらし	・地域の情報を知る	—	・単発のイベントが多い ・誰のためにどういう目的で行っているのかわかりにくい ・深く関わりたい人にとっては目的がブレやすい ・対象が明確でないため、内容のレベル幅が不明確 ・座学形式だけでは不満足な人が多いのではないか ・自主的に何かをしたいと求めてきている人にとってはもの足りない	・「まちづくり」を知らない人や市民にとっては面白い活動 ・活動そのものについては賛成	・実際に見たのはパークシティ見学时 ・引越す前からHPで見ていた ・子どもの散歩でUDCKにも来ていた
2	水上征隆	まちづくりスクール	カレッジリンク はっぱっぱ体操	男性	50代	若柴	1996年～	・不動産業を営んでいることから、建て売り分譲した土地の一角を事務所兼自宅にした	三井不動産からの紹介	・都市計画に興味があった ・まちが変わっていく様子に興味がある ・自分が生活するまちの変化を自分の目で見たい	・地域の情報収集 (中小企業にとって情報収集はとても大切)	—	・これまでの「産・官」協働という考えに「学」が入ることを考えていなかった ・「学」が加わることは素晴らしい ・ワークショップなどで理想論を議論しながら、「産・官」が現実的なことを話していくという分担ができることが良い ・座学形式よりワークショップが楽しかった	・以前から資料などで知っていた
3	校藤邦夫	まちづくりスクール	カレッジリンク	男性	60代	若柴	2008年頃～	・利便性 (商店、鉄道、病院が近い、東京から近い) ・車がなくても生活できる場所を探した	地域情報誌 (カレッジリンク)	・退職後の生活として、何かやりたかった ・カレッジリンクへの参加をきっかけにまちづくりスクールを知った	・以前住んでいた地域のようになりたくなかった →行政の都合だけの町内会 →地域のつながりがない →「生活」に疑問	—	・知人ができたことが良かった。コミュニティの第一歩。	・ほとんどの人にとっては何に施設かわからない ・もっと出入りが自由に来てオープンなことがわかるようにした方が良い ・KFVみたいなものが併設されるとか、図書館みたいなオープンなものなど一般の人が出入りする機能が横にあると良い
4	豊田美奈子	まちづくりスクール	カレッジリンク エコデザインツアー 土の学校	女性	30代	流山	2010年～	・TX沿線で探していて、単身で住み易いところ	—	・プログラムを見て興味を持った ・以前にエコデザインツアーで東大に行ったときに先生の話が面白かった	・最初は趣味程度 ・何度か参加するうちにどういうまちづくりにしていきたいかを真剣に考えるようになった	—	・座学とワークショップが両方あって良かった ・後から印象が強く残っているのはワークショップ ・行政向けや専門家向けの内容もあり、対象が不明確で分りにくいところがあった	活動に参加したことがきっかけ
5	戸田麻子	まちづくりスクール	カレッジリンク エコデザインツアー	女性	30代	柏の葉	2004年～	・公園の前に住みたかった	エコデザインツアーに参加したことがきっかけ →メルマガ登録	・プログラムを見て興味を持った ・環境について興味があった ・気軽に参加できる、安い	・ワークショップを行ううちに提案したものが実現するよ良いなというようになった	—	建物を知っていたが活動に参加したことがきっかけ	
6	網野敬司	まちづくりスクール	カレッジリンク 桜並木協議会	男性	50代	高田	1992年～	・結婚をきっかけ	—	・北沢先生と以前会ったことがあり、その考え方や生き方に共感した	・企画やプレゼンについて学ぶこと ・北沢先生の思いを実現すること	・サラリーマン層を組み込める何かがあると良い ・高齢者をテーマにしたが、そういう問題は市の中で多く取り上げられている→全部とは言わないでも繋がっているしと良い	・ワークショップのやり方がとても勉強になった →市民をどう巻き込んでいくかなど ・市の職員が研修の場として参加するべきだと思う、市の人材育成の場 ・市の職員の一人ではなく、一人として発言し、意見を持てる場になってほしい	—
7	晴浜祥之	まちづくりスクール カレッジリンク	—	男性	60代	柏ビレジ	1992年～	・東京からの利便性 →ビレジに住んでみると、東京へのアクセスはよくなった (TX開発変更など) ・緑が豊かな自然が多いところで戸建てを探していた	・新聞でカレッジリンクを知った	・「社縁」から「地縁」を求めて退職後は活動しようと考えていた →カレッジリンクの募集の内容が、自分の興味と合った	・趣味を通して生き甲斐を持って生きたい ・若い人へのメッセージとして伝える	・住民は具体的な地域の問題について関心があるが、講師の話は抽象的なことも多いため、わかり難い回もあった ・ステップアップするに従って、若い人の参加ができなくなっている →若い人が集まるものとしてでないもの分かれても、そういう活動間をコーディネートする役割をUDCKが担うべき	・様々なまちづくりの授業を通して、色んな人がまちづくりに取り組んでいる事例を聞いて、市民も意見を持ってそれを発信していくことで地域の人が目覚めていくことがあると思う様になった。 →このような活動に関わっている充実感、面白さ →「地縁」だけでなく「知縁」にも繋がる ・多くの世代の人と関わる事ができる	・カレッジリンクの上野先生に進められてまちづくりスクールのスタッフをしたことがきっかけで知った
8	河合都志子	カレッジリンク	まちづくりスクール かしはなプロジェクト	女性	60代	若柴	2000年～	・庭の手入れができなくなったことで、マンションを探した ・息子が買うマンションを見に来た際に、自分も買った	・カレッジリンクのチラシ (ポストティング)	・マンション暮らしをはじめ体験し、部屋で何か起っても誰も気づかないのではないかという不安感が出てきた→地域に入り込んでいかなければいけないと感じる様になった→チラシを見た	—	・専門コースでもまだ物足りない ・専門的なことをもって行うと思っていた →大学院への進学を考えている ・まちづくりスクールで残念だったこと →ワークショップで空き地に公園の計画をし、実現すると考えていたがそれはあくまでも空想だったこと →実現可能かどうかで真剣さも楽しさも違う →グリーンフィールド (生け垣プロジェクト) では実現が決まって	・他の活動とは違った知的な活動をすることが楽しい ・ワークショップでは知識を得るだけでなく、自分の意見を発表し、受け身ではないことが良い →それが故に知人を誘っても参加しない人が多い	・引越してすぐ建物は知っていた
9	山内文子	カレッジリンク	まちづくりスクール	女性	50代	流山	—	—	・ららぽーとの掲示板を見た	・元々植物が好きで、千葉大の園芸学部で学ぶことができるとうことで参加した ・グループワークで様々な人とディスカッションすることができること ・自分の年代が求めているプログラム 「食・健康・環境」が揃っていたこと	—	・座学では、普段聞く事ができない先生の講義を受けることが新鮮で、それを地域で応用することを考えなければ意味がない	・何の建物だろうと入ってみた ・カレッジリンクの冊子でみた	

	名前	UDCKについて	まちについて		活動から生まれた関係性			今後の関わり方	その他	
		感想	まちについて	まちづくりについて	1	2	3		1	2
1	間島克哉	<ul style="list-style-type: none"> ・予想していたよりも活発 ・市民がイベントを企画できるようなくみ（小さなことからでも） 	—	<ul style="list-style-type: none"> ・住民のまちづくり →住民同士がコミュニケーションをとって、お互いを知って、それぞれがまちに愛着を持つこと ・「産・官・学」の役割は柏の葉のブランドをしっかりとっていくこと ・役割分担が大切 ・まちづくりにオリジナリティがない 	<ul style="list-style-type: none"> ・住民同士が仲良くなり易い ・愛着が持てる様になった（住んで半年頃） 	—	—	—	<ul style="list-style-type: none"> ・色んな活動に主体的に参加したい 	—
2	水上征隆	<ul style="list-style-type: none"> ・アーバンデザインセンターという名前が取っつき難かった ・実際に関わって、スタッフの受け入れがとて良かった ・当初は限られた人たちのための場所だと考えていたが、違った ・新旧住民の交流活動の拠点として機能している 	—	<ul style="list-style-type: none"> ・公民学協働でやっていくべき ・子どもたちが「ふるさと」と呼べるまちにすることがまちづくり ・まちづくりに対する考え方が変わった →経済性優先でやってきたが、もっと理想的なことも大切だと考えるようになった →まちづくりがハードだけではいいことを知った 	—	—	—	<ul style="list-style-type: none"> ・福祉に興味がある ・まちづくりに高齢者を巻き込む 	—	
3	校権邦夫	<ul style="list-style-type: none"> ・UDCKのオープンさや市民活動拠点との連携や大きな模型を活かしていくことを考えることがまちづくりに繋がっていくと思う 	<ul style="list-style-type: none"> ・文化施設、福祉施設が不足している→ハードの計画が今後どうなっていくのか見え難い、行政の計画の中でどう位置づけられるのか ・駅前ロータリーだけあって人々が集う場所がない ・田中と柏の葉では、農家とサラリーマンというようにわかれていて、無理に繋げる必要はない 	<ul style="list-style-type: none"> ・新しい地域にとって、様々な活動が動き出すことは良いと思う ・まちづくりが町内会のような小さなものを捉えるのか。地域全体を捉えるのかまだわからない→議論できると良い ・ハードを考えるしくみに市民が入っていけない、住民ニーズを把握していない ・市民の目、生活者の目を取り入れていかなければいけない 	<ul style="list-style-type: none"> ・知人ができた、コミュニティの芽が出てきた →コミュニティの第一歩 →市民が自発的に活動し始めるまでには時間がかかる 	—	—	—	<ul style="list-style-type: none"> ・主体的に引っ張っていく元気はないが、参加できることはしていきたい ・継続的に参加し続ける 	—
4	豊田美奈子	<ul style="list-style-type: none"> ・まちづくりスクールの時も、サイクルカフェを提案している班があった ・掲示板があったら良い、イベントのお知らせが貼ってあると良い 	—	<ul style="list-style-type: none"> ・行政やディベロッパー行イメージはあった ・住民でもとても積極的な人が行う活動だと考えていた ・普通の人でもできることだとイメージが広がった 	—	—	—	—	<ul style="list-style-type: none"> ・途中で曜日が変更して参加できなくなった 	—
5	戸田麻子	<ul style="list-style-type: none"> ・とても入り辛い、カフェを併設するなど誰もが入り易い機能があると良い ・活動に参加する前までは全く関係のない施設だと考えていたため、地域のことを考えてくれる施設だと知り、距離が縮んだ ・マンションのための施設だと考えていた 	—	<ul style="list-style-type: none"> ・大きい規模だとディベロッパーが行うイメージだった ・自分が行う活動がまちづくりになるという発見があった 	<ul style="list-style-type: none"> ・同じ世代の人が多かったこともあるが、チームでコミュニティができた 	—	—	—	—	
6	網野敬司	<ul style="list-style-type: none"> ・北沢先生のやろうとしていたまちづくりが、できる環境であったならば、いずれは地域に溶け込んでいくものだから、他と比べる必要はない、しかし他から影響を受けたことで、ここでできることは何だったか、どうしてこのようなセンターを残したのかを考える必要がある ・UDCKの活動がもっと市の中で繋がっていくこと、そういうアピールをすることで、職員ももっと関わり易い、市の中で自動的に反映できる 	<ul style="list-style-type: none"> ・柏の葉だけでなく、柏全域で捉えることが必要 ・柏市は市の資産が繋がっていない 	<ul style="list-style-type: none"> ・様々なテーマを持ってできるだけ多くの人にとっての拠点となることも必要 ・まだ地域に根付いていない ・北沢先生が来て、色んなものを繋いだが、またそれが空中分解している ・市の職員が個人として市民の視点で素で関与していくと違ったものが見えてくる 	<ul style="list-style-type: none"> ・ファシリテーターのような存在に市の職員になって、市民との媒介の役割を担う 	—	—	—	<ul style="list-style-type: none"> ・どのような人づくりをしていくことができるかがUDCKの役割なのではないか ・色んなまちの要素を俯瞰できることも大切 ・情報ソースが集まる場所 ・危機感があるまちではベクトルが 	<ul style="list-style-type: none"> ・スタッフをやったきっかけ →ものごとの表と裏を見ることが大切だと考えているから →自ら運営面の企画から関わった →スタッフ同士でメールでやりとりをして、前回の内容を次回に活かす対策を考えた
7	晴浜祥之	<ul style="list-style-type: none"> ・UDCKを知らない人が多い自ら紹介している ・右のようなことを話し合う場所であり続けてほしい ・あとは情報発信の拠点としての存在 ・近隣センターの活動と比較すると、UDCKは知的な活動が多い 	<ul style="list-style-type: none"> ・文化施設が少ない 	<ul style="list-style-type: none"> ・まちづくりはビルをつくることや駅前で賑やかになること一他人事だと考えていた。自分の考えがまちに反映されるなんて考えがなかった ・「市民がつくるまち」が実現可能ということを知って、まちづくりやまちづくりスクールに興味を持つようになった ・100%ではないにしても、努力の積み重ねでできることがあるのではないかと思った ・活動を通してまちづくりに興味が出た。徐々にかつ急速に 	<ul style="list-style-type: none"> ・新住民に柏の地域のことを教えるなどの触れ合いを持つことができた ・色々な世代の人と交流することができた 	<ul style="list-style-type: none"> ・スタッフをやったきっかけ →上野先生から声をかけられた →丹羽さんと役割について話し合った→買い出しと記録係 →まとめるにあたって、参加者以上に後で復習をし、まちづくりに関する内容の理解を深めた（大変勉強になって、良い経験だった） 	<ul style="list-style-type: none"> ・カルネットの取り組み →講義のみの関係ではなく、プロジェクトを通してお互いの関係を深めようというもの ・養生訓カルタ ・グリーンフィールド構想 →修了生が活躍できる場 →机上のプランではなく、具体的なプロジェクトを進めることで、目に 	<ul style="list-style-type: none"> ・色々と継続的に参加しているから、「地縁」の実感は湧いてきた。 「こうりたい」という自分の生活石域にも繋がっている。 ・参加を重ねる度にまちづくりの「当事者」の一人だという意識が強くなってきた。 →受講者の「一生徒」からも少し参画意識を能動的に深めて話を受け 	<ul style="list-style-type: none"> ・趣味で「合唱」をしていることで。地域の「地縁」はさらに強くなってきている ・色んな活動が繋がりを持って展開してほしい 	
8	河合都志子	<ul style="list-style-type: none"> ・UDCKのようなセンターがあることについては幸せなこと、発展途上のまちづくりだからできた ・新しいまちにとって必要な施設 	<ul style="list-style-type: none"> ・独居老人の問題が心配（マンション） →木漏れ日の会というサロンを開いて、マンションの繋がりをつくろうとしているが、把握できない 	<ul style="list-style-type: none"> ・まちづくりは行政が行うものだと考えていた →柏の葉に来てから考え方が変わった →市民も一緒にいるのは市民の声が大きく出せるまちづくりという考えになってきた →小さいことからできること 	<ul style="list-style-type: none"> ・カルネットの活動 養生訓カルタ 	—	—	—	—	<ul style="list-style-type: none"> ・参加申し込みの際に小論文の提出があるため、参加しないという知人が多い →今は先生がいなくて回らない状況
9	山内文子	<ul style="list-style-type: none"> ・国際キャンパスタウン構想ということがとても楽しみで、他の地域にどのように波及していくか興味があった →周辺地域にも広がって、周辺ともコミュニケーションをとりながら、意見をききながらやっていくことが課題 →柏の葉だけが活発でも意味がない ・人々が集う場所が駅前にあることも良い ・高齢化に対応したソフト的なものが必要になってくる→今後の展開が楽しみ 	—	—	<ul style="list-style-type: none"> ・カルネットの活動 生け垣プロジェクト →植物への興味があるため、カレッジリンクで学んだ事を地元（流山）に持ち帰って実践したい →どのように広げていけるかを考えて活動している →活動がフレキシブルに対応できることが良いと思う（人によって参加 	—	—	—	<ul style="list-style-type: none"> ・他の活動と繋がるものとして「植物」というキーワードは良いと思う 	—

結章 まちづくりと市民の関係性におけるアーバンデザインセンターの役割と存在意義

-
- 5.1 アーバンデザインセンターのまちづくりによる地域志縁コミュニティづくりの可能性
 - 5.2 市民まちづくりを支援するUDCKの役割
 - 5.3 地域におけるアーバンデザインセンターの役割と存在意義
 - 5.4 研究の成果と課題

結章 市民とまちづくりの関係性におけるアーバンデザインセンターの存在意義

5.1 アーバンデザインセンターのまちづくりによる地域志縁コミュニティづくりの可能性

町内型の「地縁コミュニティ」は地域という範域性を持ち、その枠組みの中で包括的な活動が行われる。一方で「テーマ（志縁）コミュニティ」はある特定の目的を持ち、部分的な範囲の結びつきで活動が行われる。これら両者の比較は、古くはマッキーバーの「コミュニティ」と「アソシエーション」¹の対比で知られるが、これらを本研究では前者を「地縁コミュニティ」と「テーマ（支縁）コミュニティ」と定義した。またこの両者は交錯することが難しいとされてきた。さらには地縁コミュニティの中では分科会的に一種のテーマ性を持った取り組みも行われてきたが、その運営主体の人数や参加者のエリア性には限りがあるとされ、「地縁コミュニティ」の限界も挙げられる。

本研究で対象としているような新開発地において、テーマ（志縁）コミュニティは広がり易く、UDCKのまちづくりにおいてもその活動の多さからして同様のことが言える。しかし、一方で「地域」というある一定の枠組みを必要とした要素が再び見直されていることも確かである。さらには「地縁コミュニティ」と「テーマ（志縁）コミュニティ」の重なり合いを意識する様になってきたと言える。なぜならば、昨今福祉の分野で「見守り」や「見かけること」の重要性が言われ、距離的に「近くにいること」つまり地域性や近接性といったものが見直されていることと同様に、まちづくりの分野においてもこれらの地域性を求める動きが注目されているからである。それは、一般的な市民活動や市民の趣味の活動がテーマ性のみを持ったコミュニティを形成している場合、それが地域に還元されず、「趣味の活動」という個人的な取り組みとして終始してしまうが、そこに地域性を踏まえた要素を挿入することによって「まちづくり」という大きな枠組みで捉えることが可能となり、本研究で扱ったケースのように、個々の活動が全体のまちづくりの中で位置づけられるようになる。このように考えると、まちづくりにおいて、範域性は無視できない領域であることがわかる。

ではまちづくりにおけるコミュニティは旧来の地縁コミュニティと同じものかと言えばそうではない。そこには開かれたコミュニティが存在し、地域性を持ちながら外に対して常に開かれた存在となり、外部との関係性を保つことが必要とされる。テーマ性を持った活動を地域性を意識しながら行うことで、このような活動の捉えるエリアの重層化が起る。これは、安心して暮らすことができるまちづくりへの第一歩であると考え、そのコミュニティのあり方を「地域志縁コミュニティ」と定義することとする。UDCKが一つの拠点を持ち、活動を展開していることは、開発地域の単位である「柏の葉エリア」や行政単位としての「柏市」と言った地域性を持ちながら、さらには多くの人が興味を持てるようなテーマ性も合わせ持ったものとして活動していくことが今後のUDCKの役割と言える。（図5-1～5.3参照）

¹ アソシエーション

¹ ある特定の関心を追求し、一定の目的を達成するためにつくられる社会組織であり、R.M.マッキーバーによって、コミュニティとの社会集団の2類型として設定した概念。コミュニティが一定の地域のうえに展開される共同生活を意味するのに対し、アソシエーションはそれを基盤としてその上に個々の人間の共通関心に従って人為的、計画的に形成される結びつきであるとされる。

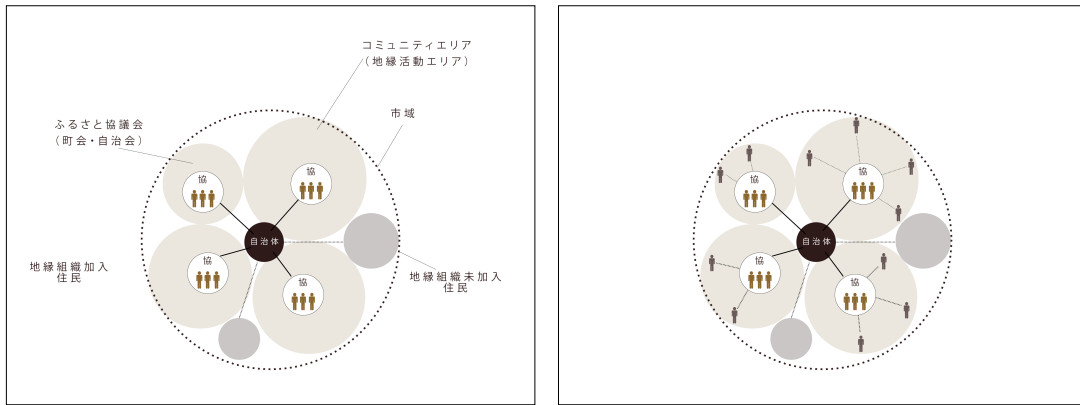


図5-1 地縁コミュニティの概念図

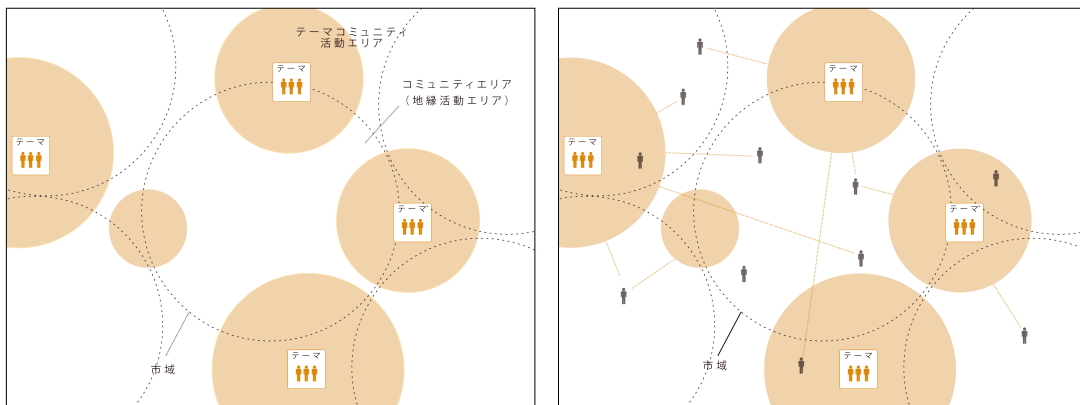


図5-2 志縁（テーマ）コミュニティの概念図

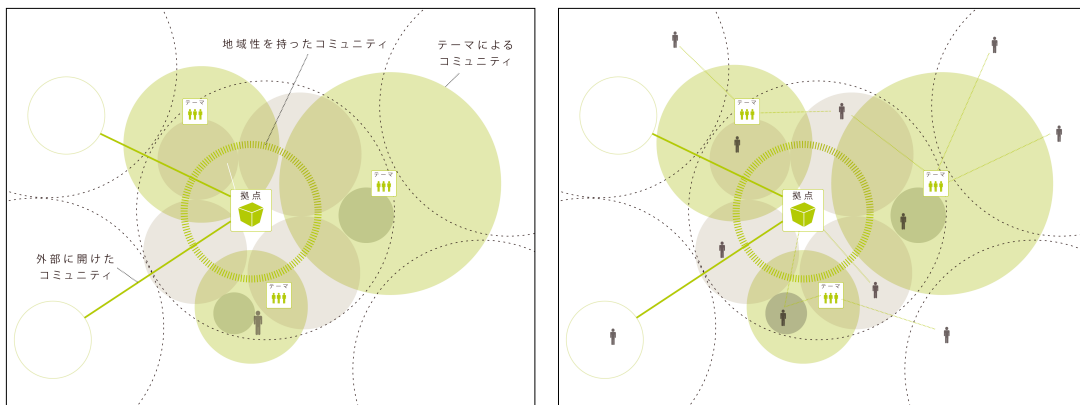


図5-3 地域志縁コミュニティの概念図

5.2 市民まちづくりを支援するUDCKの役割

目的2のUDCKが発信する活動による住民・市民への影響について明らかにする。5.1では地域志縁コミュニティの可能性について触れたが、UDCKの持つテーマ性は「まちづくり」がキーワードとなっており、アプローチは様々であっても、それらが地域に還元されてはじめてまちづくり活動と言える。市民・住民ができるまちづくりには様々な規模があり、その関わり方は多様であることがわかった。さらには、同じ活動でもその関わり方や立場によっては「まちづくりである」と捉える人と「まちづくりではない」と捉える人に分かれることがわかった。一方で、参加している住民・市民からは「自分の行っている活動がまちづくりと考えるようになった」「まちづくりという意味の捉え方が変わった」などの意見が多く挙げられており、活動に参加することでまちづくりに参加しているという意識を高めるきっかけとなっていることがわかった。従って、UDCKが捉えるべき市民まちづくりの領域は実に多様で曖昧な領域である。ここで、注意すべき点として、UDCKが行っている活動がその領域性は曖昧であってもまちづくりというある一定のテーマを持って活動しているという意味において、興味のない人にとっては全く関係のない施設となり得るという点である。そもそも地縁コミュニティはある一定の地域に住む全ての人に開かれており、認知度の高い活動を行っている。このため、地縁コミュニティと関係をあまり持たない人にとっても、問題発生時やその必要性が出た際には常に開かれたものである。一方でUDCKはまちづくりというテーマ性を余儀なくされるという点において、さらにアーバンデザインセンターという馴染みのない拠点であるという点において、知らない又は興味のない人にとってはほとんど存在すらしていないものとなる。「公・民・学連携のまちづくり」である限り、その公共性は常に意識する必要があると言える。また、この曖昧な領域は創設当初からのものではなく、市民が関わる活動が活発になっていく過程で、顕著に現れてきたことであり、固定的なものではなく地域の状態と共に変化するものである。まちの変化に伴い、地域の活動も変化する。この変化する活動をどのように捉えていくかが大きな課題となる。

ここまでUDCKの抱える市民まちづくりの曖昧さ・多様化について述べたが、それらの活動が市民にどのような影響を与えているかということについて、その影響を与える段階を以下に示す。

- 1) 認知：UDCKの活動を通してUDCKそのものや地域のまちづくりについて知ってもらうこと
- 2) 興味：活動をきっかけに「地域」や「まち」に興味を持ってもらうこと
- 3) 意識：活動に参加することで「まちづくり」を意識するようになること
- 4) 行動：活動をきっかけに地域に還元するきっかけとなる行動が生まれること

これらの段階を辿ることで、個々の活動が、まちづくり活動となり、まちに還元するきっかけとなるのではないだろうか。1) はまちづくりやアーバンデザインセンターというまちづくりの拠点について住民・市民が認知する段階である。ここで、アーバンデザインセンターが担う役割は、情報発信の機能である。2) については、様々な活動の広がりによって、興味を持ってもらう人を増やす段階であり、生活の多様化が進む現在において、できるだけ多くの人に興味を持ってもらうための多種多様な活動・イベントの企画を行うこと、参加のデザインをすることがアーバンデザインセンターの役割である。3) については、活動がまちづくりとして、地域の中でどのような意味があるかということについて意識する段階であり、活動主体は全体性を意識した取り組み方を考え、次の展開に繋げるしくみを用意することが必要となってくる。そして4) では個々の活動が地域のまちづくりに還元されるきっかけのものとして自発的な活動の発生が見られる段階であり、アーバンデザインセンターはこのような自発的な活動に対して、丁寧に対応することが重要となってくる。4) に関しては4章で述べたように、その活動内容による運営プロセスへの関わり方に違いが見られることがわかっている。

さらに、1) から4) の段階後に、これらの市民まちづくりを地域の空間形成に還元・フィードバックしていく方法を考える必要がある。このフィードバックについては、その方法や仕組みはできておらず、今後の課題と言うことができる。

5.3 地域におけるアーバンデザインセンターの役割と存在意義

5.1、5.2ではアーバンデザインセンターが捉えるべき住民・市民のコミュニティの領域と、住民・市民のまちづくり意識や活動を支援する上でどのような役割を果たし得るかということについて考察した。

UDCKはアーバンデザインセンターという新しい施設と、それによって生み出された活動によって多くの活動を発信し、住民・市民を巻き込んできた。その結果、住民や市民の活動の多様性を活発化し、多様な関わり方に応じた活動の実践によって、これまでの「まちづくり」に対する住民・市民のイメージを再構築し、「まちづくり」という言葉の多くの解釈を生み出した存在だと言える。「まちづくりは行政が行うもの」「まちづくりは建物を建てること」「自分とは関係のないこと」という考え方から、「自分の行っていることはまちづくりかもしれない」「まちづくりの枠組みの中で何かできるかもしれない」といったまちづくりに対する意識の変化をつくり、実際に「何か活動してみよう」「自分のためだけでなく、まちのために何かしたい」と言った行動を生み出すことができる場所であり、住民・市民と地域を繋げる存在となることがわかった。

以上のように、UDCKの役割として、住民・市民が、活動を通して地域を知り、興味を持ってもらうきっかけづくりを発信し、そしてまちづくりに対する意識の変化を与え、活動の転回や自発的な活動をサポートする役割を担っており、今後はこれらの住民・市民の意向を、空間へ還元していくことが、さらに必要な役割となってくる。

図5-4は上記の内容を図に示したものであり、矢印1空間が存在し、地域を知ってもらい、興味をもてるような活動を行うこと、矢印2でその活動が、まちづくりに対する意識の変化や行動が生まれるような活動にしていくこと、矢印3で地域

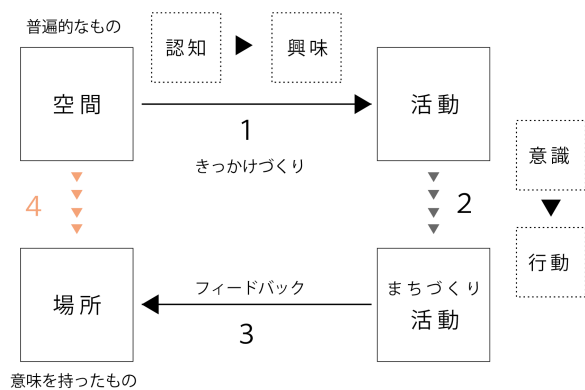


図5-4 UDCKの役割

に広がった個々のまちづくり活動を空間へフィードバックさせること。こうした役割を担うことで、4普遍的に存在する「空間」を、個々の人々にとって、地域性を持った固有の「場所」へと変えることができる。このように、アーバンデザインセンターの働きかけによる「空間」から「場所」への変換は、人々が意味を持ったものとして地域を捉える際の重要な役割である。さらにそこには、5.2で述べたテーマ性のある活動の中に地域性を再構築した「地域志縁コミュニティ」を生み出すことができると考える。そして、この役割は地域に暮らす人々にとってより良い環境を住民・市民一人一人が追求できる環境を与える存在として、地域のまちづくり拠点における存在意義を示すことができる。

UDCKでは本研究で取り扱っていない活動において、空間への取り組みも行ってきたが、これらはあくまでも、行政・大学・企業とUDCKの中の都市・建築の専門家に開かれたものが多くで、住民・市民にとっての空間とは言えなかった。UDCKの中でハードとソフトに関する両方の取り組みが行われているにも関わらず、両者のフィードバックはまだ殆どできていない。しかし、このようなフィードバックの必要性は少しずつ考えられており、学生向けの都市デザイン演習におけるの市民の意見交換や、柏の葉キャンパス駅前の空間に対する住民アンケートなどの動きが出始めている。地域に起きている様々なアクティビティを、空間に還元することで、これまでは市民活動はまちづくり・ボトムアップのもの、空間計画はトップダウンのものというようなイメージの乖離を少しずつ和らげることができると考える。

以上から、UDCKが地域の中でその存在を根付かせ、地域志縁コミュニティを広げ、住民・市民にとって身近なまちづくりを実践していくことが、地域における役割である。その一方で、これら一体の取り組みが、研究活動や実証実験などを通じて、常に外へと開かれた存在であり続けることが重要である。

5.4 研究の成果と課題

本研究では、UDCKの活動の一部について着目したものであり、その全体像を捉えるためには、各主体の視点や各活動について調査し、総合的な視点が必要となる。しかし、UDCKの創設から4年が経過した現在、徐々にその活動や活動の影響は広がっており、それらの影響を一つずつ検証することは、今後の柏の葉地域のまちづくりにとって、意味を持つものである。

本研究の成果と課題を以下に整理する。

■成果

- (1) アーバンデザインセンターの活動の実態を、今後の歴史となる資料として残したこと。
- (2) 地域のコミュニティの歴史の中で、UDCKを捉えること。
- (3) 住民・市民の活動が活動内のコミュニティで閉じているのではなく、地域のまちづくりの中で位置づけられる活動であること。
- (4) 住民・市民による活動の展開や自発的な活動を生み出す発生プロセスを明らかにし、今後の活動における運営方法のあり方を示したこと。
- (5) まちづくりを住民・市民の視点から明らかにすることで、住民・市民にとって、アーバンデザインセンターがどのような意味を持った組織・センターとなり得るのかという可能性を示したこと。

■課題

- (1) 住民・市民のまちづくり意識を高める要因、活動の展開や自発的活動を生み出す要因についての分析を活動の特性以外の視点で明らかにすること。
- (2) これまでにUDCKが担ってきたハードのまちづくりについて、その限界や今後の可能性を具体的に示すこと。
- (3) 住民・市民の視点に加え、行政、大学、企業の視点からそれぞれの活動を総合的に捉え、評価すること。

以上をアーバンデザインセンターの地域におけるまちづくりの示唆として、論文の結語とする。

既往研究、参考文献一覧

1. まちづくり、アーバンデザインに関するもの

- ・ 似田貝香門他編『まちづくりの百科事典』丸善（2008）
- ・ 田村明『まちづくりの実践』岩波新書（1999）
- ・ 北沢猛編『都市のデザインマネジメント』学芸出版社（2002）
- ・ 三船康道+まちづくりコラボレーション『まちづくりキーワード事典』学芸出版社（1997）
- ・ 小林重敬『エリアマネジメント』学芸出版社（2005）
- ・ 原昭夫『自治体まちづくり』学芸出版社（2003）
- ・ 秋元康幸+アーバンデザイナー北沢猛を語る会『アーバンデザイナー北沢猛』BankArt（2010）
- ・ 小林重敬編『地方分権時代のまちづくり条例』学芸出版社（1999）
- ・ 西村幸夫『まちづくり学』朝倉書店（2007）
- ・ 秋元康幸他『アーバンデザイナー北沢猛』BankArt（2010）
- ・ 原昭夫『自治体まちづくり』学芸出版社（2003）

2. まちづくりセンター、アーバンデザインセンターに関する研究

- ・ 前田英寿『アーバンデザインセンターに関する経験的考察』日本建築学会計画系論文集（2010）
- ・ 砂川亜利沙『まちづくりセンターの活動特性と拠点となる空間に対する研究』学位論文（2008）同上
- ・ 北沢猛他『公民学連携型まちづくり組織の設立と始動』（2008）
- ・ 前田英寿他『既成ユニット建築を使った小さな公共空間：千葉県柏市における実証実験』（2009）
- ・ 重光健史『住民まちづくりを支援するまちづくりセンターの運用課題』学位論文（2009）
- ・ 松尾真子『地方都市における変容する地域空間構造の把握』学位論文（2009）
- ・ 柏原沙織『地方都市のまちづくりにおける中間機能に関する研究』学位論文（2009）
- ・ 前田英寿他『公民学連携型アーバンデザインセンターによる地方小都市のまちづくり--福島県田村市田村地域デザインセンター(UDCT)』日本建築学会技術報告集 16(32), 339-344, 2010-02（2010）

3. UDCK、関連活動に関する資料

- ・ 『UDCK 年間報告2007』（2008）
- ・ 『UDCK 年間報告2008』（2009）
- ・ 『UDCK 年間報告2009』（2010）
- ・ 千葉大学柏の葉カレッジリンク・プログラム公式ガイド『「市民のチカラ」の活かし方』（2010）
- ・ 五感の学校中間報告（2010）
- ・ 柏の葉イノベーション・デザイン研究機構
『柏の葉コミュニティグリッド―持続可能な空間計画と社会運営システム試案』（2010）
- ・ ピノキオプロジェクト年間報告書（2007、2008、2009、2010）
- ・ マルシェ・コロール報告書
- ・ NPO支援センターちば『柏の葉キャンパス コミュニティサポート事業2009 年間報告書』（2010）
- ・ 上野武『大学発地域再生―カキネを越えたサスティナビリティの実践―』
アサヒビール編集発売清水弘文堂書房（2009）

4. コミュニティ、共同体に関するもの

- ・ 広井良典『コミュニティを問い直す』ちくま新書（2006）
- ・ 横道清孝『日本における最近のコミュニティ政策』（2009）
- ・ 桑子敏雄『風景のなかの環境哲学』東京大学出版会（2005）
- ・ 福岡伸一『動的平衡』木楽舎（2009）
- ・ 内山節『里という思想』新潮選書（2005）
- ・ 内山節、大熊孝、鬼頭秀一、木村茂光、榛村純一『ローカルな思想を創る』農文協（1998）
- ・ 内山節『共同体の基礎理論—自然と人間の基層から—』農文協（2010）
- ・ 伊藤香織、紫牟田伸子監修『シビックプライド』宣伝会議（2008）

5. 柏市に関する資料

- ・ 『柏市都市計画マスタープラン』
- ・ 柏北部まちづくり事業化促進調査報告書
- ・ 柏の葉国際キャンパスタウン構想
- ・ 柏の葉国際キャンパスタウン構想フォローアップ調査報告書
- ・ 柏市コミュニティ報告書
- ・ 柏市史
- ・ 各ふるさと協議会から頂いた資料

図表一覧

序章 はじめに

【図】

図1-1 本研究の構成

図1-2まちづくり拠点における本研究の位置づけ

【表】

表1-1 調査方法

2章 まちづくり拠点としてのUDCKの概要と位置づけ

【図】

図2-1 年度別まちづくりセンター設置件数

(出典：重光健史『住民まちづくりを支援するまちづくりセンターの運用課題』学位論文(2009))

図2-2 柏市の位置 (出典：柏市都市計画マスタープラン)

図2-3 柏市の地形 (出典：柏市コミュニティグリッド)

図2-4 近世以前の柏市 (出典：柏市コミュニティグリッド)

図2-5 柏市の開発の歴史 (出典：柏市コミュニティグリッド)

図2-6 市街化区域面積の変遷 (出典：千葉県HP、柏市都市計画マスタープラン)

図2-7 市街化区域人口密度 (出典：千葉県HP、柏市都市計画マスタープラン)

図2-8 用途地域面積の推移 (出典：千葉県HP、柏市都市計画マスタープラン)

図2-9 時代別DID (出典：国勢調査、柏の葉コミュニティグリッドより編集)

図2-10 DIDの変遷 (出典：国勢調査、柏の葉コミュニティグリッドより編集)

図2-11 明治～大正期の柏市 (出典：柏の葉コミュニティグリッド)

図2-12 柏市と全国の人口推移 (出典：柏市HP、国政調査)

図2-13 柏市と全国の前回増加数 (出典：柏市HP、国政調査)

図2-14 柏市と全国の前回増加率 (出典：柏市HP、国政調査)

図2-15 1930年の柏の葉エリア (出典：柏市資料)

図2-16 1952年の柏の葉エリア (出典：柏市資料)

図2-17 1968年の柏の葉エリア (出典：柏市資料)

図2-18 1970年の柏の葉エリア (出典：柏市資料)

図2-19 1978年の柏の葉エリア (出典：柏市資料)

図2-20 1985年の柏の葉エリア (出典：柏市資料)

図2-21 1990年の柏の葉エリア (出典：柏市資料)

図2-22 1995年の柏の葉エリア (出典：柏市資料)

図2-23 2005年の柏の葉エリア (出典：柏市資料)

図2-24 代表的なふるさと協議会のモデル図 (出典：柏市市民活動推進課資料)

図2-25 コミュニティエリアと近隣センター (出典：柏市市民活動推進課資料)

図2-26 柏市北部地域における近隣センターとUDCKの位置関係 (出典：柏市市民活動推進課資料)

図2-27 柏市コミュニティエリアと中学校区 (出典：柏市コミュニティグリッド)

図2-28 田中地域空間構造

図2-29 富勢地域空間構造 (出典：柏の葉コミュニティグリッドより編集)

図2-30 松葉地域空間構造 (出典：柏の葉コミュニティグリッドより編集)

図2-31 UDCKの位置

図2-32 UDCKの位置

図2-32 柏の葉エリア

図2-33 旧UDCKの平面図

- 図2-34 新UDCKの平面図
 図2-35 HPによるUDCKの役割（出典：UDCK HP）
 図2-36 UDCKの活動における実践プロセス
 図2-37 運営関係図概要
 図2-38 運営関係者図
 （出典：前田英寿『アーバンデザインセンターの経験的考察』日本建築学会計画系論文集（2010）を編集）

【表】

- 表2-1 合併による柏市の形成経緯（出典：柏の葉コミュニティグリッド）
 表2-2 柏市、柏の葉地区のまちづくり、都市形成の歴史
 （出典：平成21年柏市都市計画マスタープラン、空間計画研究室柏の葉歴史資料）
 表2-3 コミュニティ政策の動き（全国と柏市）
 （出典：横道清孝『日本における最近のコミュニティ政策』（2009）より編集）
 表2-4 市民活動推進課ヒアリング内容
 表2-5 田中地域 ふるさと協議会ヒアリング概要
 表2-6 ふるさと協議会ヒアリング内容（出典：柏の葉コミュニティグリッドより編集）
 表2-7 UDCK設立期の各団体の背景
 （作成：著者、出典：砂川亜利沙『まちづくりセンターの活動特性と拠点となる空間に対する研究』（2008））
 表2-8 UDCKの関係者、関係団体組織表（作成：著者、参考：UDCK年間報告2007 2008 2009）
 表2-9 2008年度柏の葉国際キャンパスタウン構想フォローアップ（出典：UDCK 年間報告2008）
 表2-10 2009年度柏の葉国際キャンパスタウン構想フォローアップ（出典：UDCK 年間報告2009）
 表2-11 2009年度までの活動表（出典：UDCK 年間報告2007～2009）
 表2-12 UDCK関係者ヒアリング概要
 表2-13 運営側ヒアリング対象者リスト
 表2-14 UDCK構成団体・協力団体になるきっかけ
 表2-15 UDCKについての意見
 表2-16 UDCKのこれまでの成果
 表2-17 UDCKの今後の課題
 表2-18 UDCKの4年間の変化

【写真】

- 写真2-1 ららぽーと柏の葉（写真提供：宋俊煥）
 写真2-2 田中ふるさと会館（写真提供：宋俊煥）
 写真2-3 柏の葉公園（写真提供：宋俊煥）
 写真2-4 こんぶくろ池（写真提供：宋俊煥）
 写真2-5 東急柏ビレジ（写真提供：宋俊煥）
 写真2-6 布施の家並み（写真提供：三牧浩也）
 写真2-7 布施弁天（写真提供：三牧浩也）
 写真2-8 あげぼの山農業公園（写真提供：三牧浩也）
 写真2-9 三井住宅（写真提供：三牧浩也）
 写真2-10 団地地区（写真提供：三牧浩也）
 写真2-11 戸建て地区（写真提供：三牧浩也）
 写真2-12 メインストリートけやき通り（写真提供：三牧浩也）
 写真2-13 中央商店街（写真提供：三牧浩也）
 写真2-14 旧UDCK外観
 写真2-15 旧UDCK内観
 写真2-16 新UDCK外観
 写真2-17 新UDCK内観

3章 UDCKの活動の実態把握と市民への影響

【図】

- 図3-1 2007年春コース 運営体制
- 図3-2 2007年秋コース 運営体制
- 図3-3 2008年コース 運営体制
- 図3-4 2009年以降 運営体制
- 図3-5 まちづくリスクール参加者分布
- 図3-6 柏の葉エリアの地域活性1（出典：千葉大学柏の葉カレッジリンクプログラムHP）
- 図3-7 柏の葉エリアの地域活性2（出典：千葉大学柏の葉カレッジリンクプログラムHP）
- 図3-8 カレッジリンクプログラムの流れ
- 図3-9 カレッジリンク参加者の推移（出典：千葉大学柏の葉カレッジリンクプログラムHP）
- 図3-10 2007年組織体制（出典：ピノキオプロジェクト報告書2007～2010）
- 図3-11 2008年組織体制（出典：ピノキオプロジェクト報告書2007～2010）
- 図3-12 2009年組織体制（出典：ピノキオプロジェクト報告書2007～2010）
- 図3-13 2010年組織体制（出典：ピノキオプロジェクト報告書2007～2010）
- 図3-14 ピノキオプロジェクト来場者数推移
- 図3-15 ピノキオプロジェクト参加者分布
- 図3-16 マルシェ・コロール組織図2008（出典：マルシェ・コロール報告書）
- 図3-17 マルシェ・コロール組織図2009（出典：マルシェ・コロール報告書）
- 図3-18 マルシェ・コロール組織図2010/04-08（出典：マルシェ・コロール報告書）
- 図3-19 マルシェ・コロール組織図2010/09-12（出典：マルシェ・コロール報告書）
- 図3-20 マルシェ・コロール2009-2010年 店舗出店数（出典：マルシェ・コロール報告書）
- 図3-21 マルシェ・コロール2009-2010年 フリーマーケット出店数（出典：マルシェ・コロール報告書）
- 図3-22 マルシェ・コロール2009-2010年 来場者数（出典：マルシェ・コロール報告書）
- 図3-23 マルシェ・コロール出店者分布図
- 図3-29 2008年度組織・運営体制（出典：NPO支援センターちば2009事業報告書）
- 図3-30 2009年度以降組織・運営体制（出典：NPO支援センターちば2009事業報告書）
- 図3-31 まちのクラブ活動メルマガ登録者分布図
- 図3-32 4つの活動参加者分布図
- 図3-33 活動のまとめ

【表】

- 表3-1 まちづくリスクールの概要（出典：丹羽由佳里氏によるまちづくリスクールまとめ）
- 表3-2 まちづくリスクール広報リスト
- 表3-3 これまでのまちづくリスクール参加者リスト（出典：丹羽由佳里氏によるまちづくリスクールのまとめ）
- 表3-4 カレッジリンクプログラム（出典：カレッジリンクHP）
- 表3-5 カレッジリンク広報リスト
- 表3-6 ピノキオプロジェクト開催日、活動内容（出典：ピノキオプロジェクト報告書2007～2010）
- 表3-7 ピノキオプロジェクト活動プログラム（出典：ピノキオプロジェクト報告書2007～2010）
- 表3-8 ピノキオプロジェクト主催・後援・協力団体一覧（出典：ピノキオプロジェクト報告書2007～2010）
- 表3-9 ピノキオプロジェクト広報
- 表3-10 ピノキオプロジェクト来場者数（出典：ピノキオプロジェクト報告書2007～2010）
- 表3-11 ピノキオプロジェクト活動場所（出典：ピノキオプロジェクト報告書2007～2010）
- 表3-12 マルシェ・コロール年度別開催数（出典：マルシェ・コロール報告書）
- 表3-13 マルシェ・コロール活動内容（出典：マルシェ・コロール報告書）
- 表3-14 マルシェ・コロール主催・協力・後援リスト
（出典：マルシェ・コロールパンフレット ※一部パンフレットなしのため記載なし）
- 表3-15 マルシェ・コロール出店者への広報
- 表3-16 マルシェ・コロール参加者への広報

- 表3-17 マルシェ・コロール過去の出店数リスト（出典：マルシェ・コロール報告書）
- 表3-18 まちのクラブ活動一覧（出典：まちのクラブ活動2009報告書）
- 表3-19 クラブ活動一覧（出典：NPO支援センターちば2009事業報告書）
- 表3-20 マチノ先生・店長 一覧（出典：NPO支援センターちば2009事業報告書）
- 表3-21 クラブ横断型イベント 一覧（出典：NPO支援センターちば2009事業報告書）
- 表3-22 調査概要
- 表3-23 アンケート調査項目

【写真】

- 写真3-1 講師レクチャーの様子（写真提供：砂川亜里沙）
- 写真3-2 ワークショップの様子（写真提供：砂川亜里沙）
- 写真3-3 発表の様子1（写真提供：砂川亜里沙）
- 写真3-4 発表の様子2（写真提供：砂川亜里沙）
- 写真3-5 懇親会の様子（写真提供：砂川亜里沙）
- 写真3-6 修了証授与の様子（写真提供：砂川亜里沙）
- 写真3-7 講義の様子（写真提供：三輪正幸）
- 写真3-8 発表の様子（写真提供：三輪正幸）
- 写真3-9 ワークショップの様子（写真提供：三輪正幸）
- 写真3-10 実習の様子（写真提供：三輪正幸）
- 写真3-11 実習の様子（写真提供：三輪正幸）
- 写真3-12 実習の様子（写真提供：三輪正幸）
- 写真3-13 ピノキオプロジェクトロゴ（出典：ピノキオプロジェクト2008報告書）
- 写真3-14 お給料カード（出典：ピノキオプロジェクト2008報告書）
- 写真3-15 ピノキオ帽子（出典：ピノキオプロジェクト2008報告書）
- 写真3-16 ピノキオユニホーム（出典：ピノキオプロジェクト2008報告書）
- 写真3-17 ピノキオマルシェの様子（出典：ピノキオプロジェクト報告書2007～2010）
- 写真3-18 ピノキオシティの様子1（出典：ピノキオプロジェクト報告書2007～2010）
- 写真3-19 ピノキオシティの様子2（出典：ピノキオプロジェクト報告書2007～2010）
- 写真3-20 ピノキオ銀行の様子（出典：ピノキオプロジェクト報告書2007～2010）
- 写真3-21 ワークショップの様子（出典：ピノキオプロジェクト報告書2007～2010）
- 写真3-22 ピノキオカフェの様子（出典：ピノキオプロジェクト報告書2007～2010）
- 写真3-23 マルシェの様子1（写真3-23～3-24提供：NPO支援センターちば）
- 写真3-24 マルシェの様子2（写真3-23～3-24提供：NPO支援センターちば）
- 写真3-25 マルシェの様子3（写真3-23～3-24提供：NPO支援センターちば）
- 写真3-26 マルシェの様子4（写真3-23～3-24提供：NPO支援センターちば）
- 写真3-27 KFV外観1（出典：株式会社藤崎事務所HP：<http://www.fujifuji.org/gallery/kfv.html>）
- 写真3-28 KFV外観2（出典：株式会社藤崎事務所HP：<http://www.fujifuji.org/gallery/kfv.html>）
- 写真3-29 まちのクラブハウス内観1（出典：株式会社藤崎事務所HP：<http://www.fujifuji.org/gallery/kfv.html>）
- 写真3-30 まちのクラブハウス内観2（出典：株式会社藤崎事務所HP：<http://www.fujifuji.org/gallery/kfv.html>）
- 写真3-31 キッチン会議室（出典：株式会社藤崎事務所HP：<http://www.fujifuji.org/gallery/kfv.html>）
- 写真3-32 がん患者・家族総合支援センター（出典：株式会社藤崎事務所HP：<http://www.fujifuji.org/gallery/kfv.html>）
- 写真3-33 菜園（出典：株式会社藤崎事務所HP：<http://www.fujifuji.org/gallery/kfv.html>）
- 写真3-34 エディブルガーデン（出典：株式会社藤崎事務所HP：<http://www.fujifuji.org/gallery/kfv.html>）
- 写真3-35 今昔写真展（写真提供：NPO支援センターちば）
- 写真3-36 お肉屋さんの料理教室（写真提供：NPO支援センターちば）
- 写真3-37 お肉屋さんの料理教室（写真提供：NPO支援センターちば）
- 写真3-38 お花屋さんの寄せ植え教室（写真提供：NPO支援センターちば）

図表一覧

写真3-39 ハロウィンパーティ（写真提供：NPO支援センターちば）

写真3-40 ネーチャーキッズツアー（写真提供：NPO支援センターちば）

写真3-41 手芸サロン（写真提供：NPO支援センターちば）

写真3-42 ブルーベリー摘み体験（写真提供：NPO支援センターちば）

4章 まちづくり活動から生まれる市民と地域の関係づくり

【図】

- 図4-1 活動の実践プロセス（作成：著者）
- 図4-2 まちづくりスクール提案後の展開（作成：著者）
- 図4-3 市民スタッフによる記録（UDCKスタッフ編集）
- 図4-4 まちづくりスクール 時期別分析
- 図4-5 まちづくりスクール 運営のプロセス1
- 図4-6 まちづくりスクール 運営のプロセス2
- 図4-7 まちづくりスクール 活動と住民・市民の関連図
- 図4-8 養生訓いろはかるた完成案
- 図4-9 カレッジリンク時期別分析
- 図4-10 カレッジリンク運営のプロセス
- 図4-11 カレッジリンク 活動と住民・市民の関連図
- 図4-12 エドワルド・マルジジ氏による構想案（出典：ピノキオプロジェクト2009報告書）
- 図4-13 ピノキオシティ2009 構想案（出典：ピノキオプロジェクト2009報告書）
- 図4-14 ピノキオシティ2010構成図（出典：ピノキオプロジェクト2010報告書）
- 図4-15 ピノキオプロジェクト 時期別分析
- 図4-16 ピノキオプロジェクト 運営のプロセス
- 図4-17 ピノキオプロジェクト 活動と住民・市民の関連図
- 図4-18 ピノキオカフェのチラシ（出典：ピノキオプロジェクト2010報告書）
- 図4-19 ピノキオカフェメニュー（出典：ピノキオプロジェクト2010報告書）
- 図4-20 柏の葉ドッグ企画から販売の流れ
- 図4-21 柏の葉ドッグ開発メンバー
- 図4-22 柏の葉ドッグ開発メンバーチラシ
- 図4-23 マルシェ・コロール 時期別分析
- 図4-24 マルシェ・コロール 運営のプロセス
- 図4-25 マルシェ・コロール 活動と住民・市民の関連図
- 図4-26 住人発案型クラブ発足の経緯
- 図4-27 まちのクラブ活動時期別分析
- 図4-28 まちのクラブ活動運営のプロセス
- 図4-29 まちのクラブ活動 活動と住民・市民の関連図
- 図4-30 活動の発展や自発的活動を生み出した要因
- 図4-31 活動の時間別分析
- 図4-32 活動の運営プロセス

【表】

- 表4-1 関係づくりのプロセス（作成：著者）
- 表4-2 まちづくりスクールプログラムの変遷（作成：著者／出典：丹羽由佳里氏によるまちづくりスクールまとめ）
- 表4-3 まちづくりスクールスタッフ募集条件（作成：著者／出典：丹羽由佳里氏によるまちづくりスクールまとめ）
- 表4-4 年度別スタッフ人数（作成：著者／出典：丹羽由佳里氏によるまちづくりスクールまとめ）
- 表4-5 まちづくりスクールスタッフの役割（2010）（作成：著者）
- 表4-6 生け垣プロジェクトメンバー構成（現在）
（出典：カレッジリンクブログ／みんなのAgora http://college-link-chiba-u.com/agora/08_pilot/）

- 表4-7 養生訓いろはかるたメンバー構成（出典：カレッジリンクブログ同上）
 表4-8 ピノキオリーディングメンバー2009登録者内訳（出典：ピノキオプロジェクト2009報告書）
 表4-9 ピノキオリーディングメンバー2009活動内容（出典：ピノキオプロジェクト2009報告書）
 表4-10 ピノキオリーディングメンバー2010活動内容（出典：ピノキオプロジェクト2010報告書）
 表4-11 柏の葉ドッグの動き
 表4-12 クラブの類型（出典：柏の葉キャンパス コミュニティサポート事業2009年度報告書）
 表4-13 活動展開、自発的活動発生後のサポート

【写真】

- 写真4-1 自転車クラブ活動の様子1（写真提供：関谷進吾）
 写真4-2 自転車クラブ活動の様子2（写真提供：関谷進吾）
 写真4-3 自転車クラブ活動の様子3（写真提供：関谷進吾）
 写真4-4 自転車クラブ活動の様子4（写真提供：関谷進吾）
 写真4-5 生け垣ミーティングの様子（出典：カレッジリンクブログ同上）
 写真4-6 養生訓いろはかるた提案の様子1（写真提供：三輪正幸）
 写真4-7 養生訓いろはかるた提案の様子2（写真提供：三輪正幸）
 写真4-8 養生訓いろはかるた提案の様子3（出典：カレッジリンクブログ同上）
 写真4-9 養生訓いろはかるた提案の様子4（出典：カレッジリンクブログ同上）
 写真4-10 エドワルド・マルジジ氏とのワークショップの様子（出典：ピノキオプロジェクト2009報告書）
 写真4-11 2009準備の様子1（出典：ピノキオプロジェクト2009報告書）
 写真4-12 2009準備の様子2（出典：ピノキオプロジェクト2009報告書）
 写真4-13 2009当日の様子1（出典：ピノキオプロジェクト2009報告書）
 写真4-14 2009当日の様子2（出典：ピノキオプロジェクト2009報告書）
 写真4-15 2009当日の様子3（出典：ピノキオプロジェクト2009報告書）
 写真4-16 2009片付けの様子1（出典：ピノキオプロジェクト2009報告書）
 写真4-17 2009集合写真（出典：ピノキオプロジェクト2009報告書）
 写真4-18 2010事前ワークショップの様子1（出典：ピノキオプロジェクト2010報告書）
 写真4-19 2010事前ワークショップの様子2（出典：ピノキオプロジェクト2010報告書）
 写真4-20 2010事前ワークショップの様子3（出典：ピノキオプロジェクト2010報告書）
 写真4-21 2010当日の様子1（出典：ピノキオプロジェクト2010報告書）
 写真4-22 2010当日の様子2（出典：ピノキオプロジェクト2010報告書）
 写真4-23 2010当日の様子3（出典：ピノキオプロジェクト2010報告書）
 写真4-24 柏の葉ドッグ（写真提供：小溝敏央）
 写真4-25 ピノキオカフェの様子1（出典：ピノキオプロジェクト2010報告書）
 写真4-26 ピノキオカフェの様子2（出典：ピノキオプロジェクト2010報告書）
 写真4-27 ピノキオカフェの様子3（出典：ピノキオプロジェクト2010報告書）

5章 まちづくりと市民の関係性におけるアーバンデザインセンターの役割と存在意義

- 図5-1 地縁コミュニティの概念図
 図5-2 志縁（テーマ）コミュニティの概念図
 図5-3 地域志縁コミュニティの概念図
 図5-4 UDCKの役割

資料1	アンケート調査配布資料	3
資料2	アンケート調査集計資料	35
資料3	ヒアリング調査資料 ふるさと協議会編	99
資料4	ヒアリング調査資料 UDCK創設・運営関係者編	123
資料5	ヒアリング調査資料 活動参加者編（市民・住民）	191

資料1 アンケート調査配布資料

まちづくりスクール参加者アンケート

UDCK まちづくりスクール
 東京大学大学院空間計画研究室

まちづくりスクールの今後の運営の参考とさせていただくためのアンケートにご協力ください。

また、現在、UDCKが今まで行ってきた様々なプログラムの評価を、東京大学大学院空間計画研究室で実施しており、このためのアンケートにもご協力いただけると幸いです。

特に記載が無いものに関して、一問につき回答1つに○をつけてください。複数該当する場合は、より要素が強いひとつをお願いします。

1 まちづくりスクールについて 参加のきっかけ等

1.1 これまでにUDCK以外で行っているまちづくりの講座などに参加したことはありますか？

(①よく参加していた・②たまに参加していた・③参加したことがない)

1.2 まちづくりスクールを知った理由

(①UDCKを訪れて知った・②UDCKのHPを見た・③ポスターやチラシを見た・④友人知人の紹介・⑤以前に何か参加したことがある・⑥その他：)

1.3 1.2で「ポスターやチラシを見た」という人はどこで見ましたか？

(①つくばエクスプレス駅構内・②ららぽーと柏の葉・③東京大学構内・④UDCK・⑤その他：)

1.4 参加しようと思ったきっかけ

1.4.1 まちづくりに興味があったから

(①全くそうである・②ややそうである・③あまりそうではない・④全くそうではない)

1.4.2 UDCKの活動に興味があったから

(①全くそうである・②ややそうである・③あまりそうではない・④全くそうではない)

1.4.3 内容（高齢者のまちづくり）に興味があったから

(①全くそうである・②ややそうである・③あまりそうではない・④全くそうではない)

1.4.4 気になる講師がいたから

(①全くそうである・②ややそうである・③あまりそうではない・④全くそうではない)

1.4.5 知人に誘われたから

(①全くそうである・②ややそうである・③あまりそうではない・④全くそうではない)

1.4.6 何か活動したいと思ったから

(①全くそうである・②ややそうである・③あまりそうではない・④全くそうではない)

1.4.7 その他にあれば書いて下さい ()

1.5 参加の目的

1.5.1 まちづくりに対する知識を高めたかった

(①全くそうである・②ややそうである・③あまりそうではない・④全くそうではない)

1.5.2 まちづくりについて誰かと議論したかった

(①全くそうである・②ややそうである・③あまりそうではない・④全くそうではない)

1.5.3 自分の住むまちについて深く考えたかった

(①全くそうである・②ややそうである・③あまりそうではない・④全くそうではない)

1.5.4 UDCKが行っている活動に興味があった

(①全くそうである・②ややそうである・③あまりそうではない・④全くそうではない)

1.5.5 テーマに関する知識を高めたかった

(①全くそうである・②ややそうである・③あまりそうではない・④全くそうではない)

1.5.6 テーマに関して誰かと議論したかった

(①全くそうである・②ややそうである・③あまりそうではない・④全くそうではない)

1.5.7 その他 ()

2 まちづくりスクール ご感想

2.1 参加した満足度について教えてください。

(①とても満足している・②満足している・③どちらでもない・④不満がある・⑤とても不満がある)

2.2 講義内容について教えてください。

(①とても難しかった・②少し難しかった・③丁度良かった・④少し物足りなかった・⑤物足りなかった)

2.3 参加して一番面白かった・興味を持ったものについて教えてください。

(①講師による講義、座学・②質疑応答・③参加者同士の交流、議論・④懇親会・⑤配布資料・⑥その他：)

2.4 あなたが特に興味を持った内容の回を具体的に教えてください。

(①第1回園田先生・②第2回秋山先生・③第3回木村先生・④第4回小林先生)

2.5 参加費は適切でしたか？

(①とても高い・②高い・③丁度良い・④安い・⑤とても安い)

2.6 1回の講義時間は適切でしたか？

(①とても長い・②長い・③丁度良い・④少し短い・⑤短い)

2.7 全4回の講義プログラムは適切でしたか？

(①とても多い・②多い・③丁度良い・④少し少ない・⑤少ない)

2.8 またスクールに参加したいと思いますか？

(①とても参加したい・②参加したい・③どちらでもない・④あまり参加したくない・⑤参加したくない)

2.9 次はどのようなテーマ・内容の講義を期待しますか。

()

3 UDCKについて これまでの認知や関わりについて

3.1 今回のプログラムに参加されるまでのUDCKの認知度について教えてください。

(①建物も活動内容も知っていた・②建物だけ知っていた・③知らなかった)

3.2 今回のプログラムに参加されるまでのUDCKの利用頻度について教えてください。

(①よく利用していた・②数回利用したことがある・③利用したことがなかった)

3.3 3.2で利用したことがあると答えた方は、利用目的を教えてください。

(①見学・②UDCKで行われたイベントや活動に参加・③クラブ活動の場所だった・④その他：)

3.4 イベントやプログラムに参加された方は、覚えている範囲でイベント名や活動内容の記載をお願いします。

(年 月) (年 月)

(年 月) (その他：)

3.5 3.2で「③利用したことがない」と答えた方は、利用したいと思っていましたか？

(①利用したいと思っていたがきっかけがなかった・②特に興味はなかった・③知らなかった)

4 UDCKについて 印象、期待、感想など

- 4.1 今回のプログラム参加後、UDCKの認識が変わりましたか？
(①とても変わった・②変わった・③どちらでもない・④あまり変わらない)
- 4.2 上の設問で、変わったと答えられた方は、どのように変わりましたか？
4.2.1 (UDCKがどういう組織体なのか：①よく理解した・②なんとなく理解した・③よくわからない)
4.2.2 (UDCKが行っている活動：①よく理解した・②なんとなく理解した・③よくわからない)
4.2.3 (UDCKの役割：①よく理解した・②なんとなく理解した・③よくわからない)
- 4.3 UDCKに期待する「あったらいいなあ・こうなればいいなあ」という機能はありますか？
()
- 4.4 あなたにとってのUDCKのイメージはどのようなものですか？もっとも当てはまる2つに○をつけてください。
(①心の拠り所・②生活を豊かにする場・③知的好奇心を満たす場・④人と語り合う場・⑤まちについて議論する場・⑥まちの情報を入手する場・⑦貸しスペース・特になし)
- 4.5 これをきっかけに、他のUDCKの活動を知りましたか？
(①知った・②知らない・③これから調べようと思う)
- 4.6 4.5で「①知った」と答えられた方は、何で知りましたか？
(①チラシ・②ポスター・③アナウンス・④人から聞いた・⑤HP・⑥その他)
- 4.7 これをきっかけに、他のUDCKの活動に参加しようと思いましたか？
(①とても参加したい・②参加したい・③どちらでもない・④あまり参加したくない・⑤参加したくない)
- 4.8 参加したいと思う項目があれば○をつけて下さい。
(①ワークショップや学習プログラム・②市民活動・③単発のイベント・④実証実験・⑤休憩やおしゃべりなどの空間利用)
- 4.9 4.8で選択した理由
(①自分ができるまちづくりの一步だと思ったから・②内容が面白そうだから・③地域のことを詳しく知ることができると思ったから・④気軽に参加できそうだから・⑤場所として使いやすそうだから)

5 お住まいのまち、まちづくりについて

- 5.1 お住まいのまちの満足度について教えてください。
- 5.1.1 福祉活動
(①とても満足している・②満足している・③どちらでもない・④不満がある・⑤とても不満がある)
- 5.1.2 防災活動
(①とても満足している・②満足している・③どちらでもない・④不満がある・⑤とても不満がある)
- 5.1.3 交流・コミュニティ活動
(①とても満足している・②満足している・③どちらでもない・④不満がある・⑤とても不満がある)
- 5.1.4 教育・子育て活動
(①とても満足している・②満足している・③どちらでもない・④不満がある・⑤とても不満がある)
- 5.1.5 景観や建築
(①とても満足している・②満足している・③どちらでもない・④不満がある・⑤とても不満がある)
- 5.1.6 水緑や自然環境
(①とても満足している・②満足している・③どちらでもない・④不満がある・⑤とても不満がある)
- 5.1.7 経済や産業

(①とても満足している・②満足している・③どちらでもない・④不満がある・⑤とても不満がある)

5.2 あなたの考える「まちづくり」の主体は誰ですか？

(①行政・②専門家・③研究者・④住民・⑤多主体が協働)

5.3 定義はどのようなものですか？該当するもの全てに○を付けてください。

(①建物を建てること、景観を整備すること・②コミュニティ育成・③福祉活動・④防災活動・⑤地域の問題解決に取り組む活動・⑥地域の歴史や文化を伝える活動・⑦まちの目標に向かって行う活動・⑧まちの将来を描く場所・⑨その他：)

5.4 あなたの考える「まちづくり」の主体は今回のプログラム参加後に変わりましたか？該当するもの全てに○を付けてください。

(①行政・②専門家・③研究者・④住民・⑤多主体が協働)

5.5 あなたの考える「まちづくり」の定義は今回のプログラム参加後に変わりましたか？該当するもの全てに○を付けてください。

※上記設問と変更が無ければ記入しなくて結構です。減った場合や追加の場合は、全てに○をお願いします。

(①建物を建てること、景観を整備すること・②コミュニティ育成・③福祉活動・④防災活動・⑤地域の問題解決に取り組む活動・⑥地域の歴史や文化を伝える活動・⑦まちの目標に向かって行う活動・⑧まちの将来を描く場所・⑨その他：)

5.6 今回のプログラムに参加する前、あなたはどの程度、地域のまちづくりに関わっていると感じていましたか？

(①非常に参画している・②何かしら関わっている・③興味はあるがほとんど関わっていない・④興味がない)

5.7 今回のプログラムへの参加を通じて、地域のまちづくりへの興味や意識は変化しましたか？

(①非常に興味が深まった・②少し興味が深まった・③特に変化はない)

5.8 住民として何か主体的にまちづくり活動を行いたいと思いますか？

(①とても思う・②思う・③どちらでもない・④あまり思わない・⑤思わない)

5.9 5.8で「①とても思う②思う」と答えた方はどういうことを行いたいと思いますか？

(①住民のリーダーとして活動を広げていく・②活動のリーダーになる・③頼まれたら積極的にまちづくりに参加したい・④自分のできる範囲でまちづくりに参加したい・⑤自分の興味のあることだけ参加したい・⑥その他)

5.10 まちづくりのどのような分野に興味がありますか？

(①福祉活動・②防災活動・③交流、コミュニティ活動・④教育、子育て活動・⑤景観や建築・⑥自然環境・⑦経済や産業・⑧その他：)

6 最後に ご自身について教えてください

6.1 お名前 () (差し支えなければご記入ください)

6.2 性別→聞き忘れ

6.3 年齢

(①10代以下・②20代・③30代・④40・⑤50代・⑥60代・⑦70代・⑧80代・⑨90代以上)

6.4 就業状況について

(①就業中・②退職後・③フリーター・④専業主婦または主夫・⑤学生・⑥休業中)

6.5 ご職業の職種 ※その他の方は簡単に記入ください

(①技術・②管理・③事務・④営業販売・⑤サービス・⑥保安・⑦農林漁業・⑧運輸・⑨通信・⑩生産・⑪その他：)

6.6 住んでいる地域 (例：柏市若柴)

(①柏市・②我孫子市・③取手市・④流山市・⑤つくば市・⑥野田市・⑦東京都内・⑧その他)

※「①柏市」と答えた方は町名をお答え下さい

() 町)

6.7 いつ頃からお住まいですか？

(①1920～1929年・②1930～1939年・③1940～1949年・④1950～1959年・⑤1960～1969年・⑥1970～1979年・⑦1980～1989年・⑧1990～1999年・⑨2000～2009年・⑩2010～)

6.8 今の地域にお住まいの理由で最も当てはまるものは何ですか？

(①実家または結婚相手の実家・②親戚が住んでいた・③開発と同時に移り住んだ・④通勤の利便性・⑤東京から近い・⑥雰囲気や自然などの地域資源が魅力的・⑦まちの人が温かい、優しいから、⑧地域の活動が面白そうだったから・⑩その他：)

6.9 UDCKまでの交通手段と時間

(①つくばエクスプレス・②バス・③自家用車・④自転車・⑤徒歩・⑥その他：)

5.11 まちづくりに対する自身の考えやまちづくりスクールの感想など自由に書いて下さい。

ご協力ありがとうございました。

カレッジリンク参加者の皆様へ

アンケートのお願い

柏の葉地域では、駅前の開発や柏の葉アーバンデザインセンター（UDCK）の設立に伴い、様々な活動が行われてきました。そこで、研究活動の一環として、これまでの柏の葉地域における様々な活動が住民の方にとってどのような意味があるのか、柏の葉のまちづくりやUDCKという拠点についてどんなことを感じているのかという「UDCKや柏の葉地域の活動における事後評価」を行なうために、実状をきちんと把握し、今後のまちづくりへ繋げていきたいと考えています。

特に、カレッジリンクでは、「市民科学」をキーワードに、住民の方がまちについて学び、自分の暮らしに結びつけて考えることで、その後もまちに出て、様々な活動を展開したり、新しい地域のコミュニティが形成されているのではないかと考えています。

また、柏の葉では、行政だけでなく、大学や企業、そして住民も一緒に「まちづくり」を行っています。それら個々の活動や想いが、反映されるしくみやネットワークはできていません。様々な主体が協同して行っているまちだからこそ、一つ一つの参加者の声を聞いていきたいと考えています。

したがって、この調査は今後の柏の葉のまちづくり活動やUDCKなどの「まちづくりの拠点」、大学と地域の関係のあり方等を考える上で大変重要な調査になると考えております。つきましては、何かとご多用中のところ恐縮ですが、アンケート調査にご協力頂きます様、お願い申し上げます。

同封のアンケート用紙にご記入頂き、11月27日（土）までにご投函頂けると幸いです。

2010年11月20日

UDCK

東京大学 空間計画研究室 福角朋香

カレッジリンク参加者アンケート

UDCK

東京大学大学院空間計画研究室

設問の最後に「※複数回答」と記入していないものに関しては、一問につき一回答をお願いします。

0 はじめに

あなたは基礎コース受講生ですか？専門コース受講生ですか？

(①基礎コースのみ・②専門コースも受講)

1 カレッジリンクについて 参加のきっかけ等

1.1 これまでにカレッジリンク以外で行っているまちづくり系の活動などに参加したことはありますか？

(①よく参加していた・②たまに参加していた・③参加したことがない)

1.2 カレッジリンクを知った理由

(①UDCKを訪れて知った・②UDCKのHPを見た・③ポスターやチラシを見た・④友人知人の紹介・⑤千葉大学のHPを見た・⑥その他：)

1.3 1.2で「ポスターやチラシを見た」という人はどこで見ましたか？

(①つくばエクスプレス駅構内・②ららぽーと柏の葉・③東京大学構内・④千葉大学構内・⑤UDCK・⑥地域情報紙・⑦その他：)

1.4 参加しようと思ったきっかけ

1.4.1 まちづくりに興味があったから

(①全くそうである・②ややそうである・③あまりそうではない・④全くそうではない)

1.4.2 UDCKの活動に興味があったから

(①全くそうである・②ややそうである・③あまりそうではない・④全くそうではない)

1.4.3 千葉大学の活動に興味があったから

(①全くそうである・②ややそうである・③あまりそうではない・④全くそうではない)

1.4.4 気になる講師がいたから

(①全くそうである・②ややそうである・③あまりそうではない・④全くそうではない)

1.4.5 知人に誘われたから

(①全くそうである・②ややそうである・③あまりそうではない・④全くそうではない)

1.4.6 何か活動がしたいと思ったから

(①全くそうである・②ややそうである・③あまりそうではない・④全くそうではない)

1.4.7 その他にあれば書いて下さい ()

1.5 参加の目的

1.5.1 まちづくりに対する知識を高める

(①全くそうである・②ややそうである・③あまりそうではない・④全くそうではない)

1.5.2 まちづくりについて誰かと議論する

(①全くそうである・②ややそうである・③あまりそうではない・④全くそうではない)

1.5.3 自分の住むまちについて知り、深く考える

(①全くそうである・②ややそうである・③あまりそうではない・④全くそうではない)

- 1.5.4 テーマ（環境・健康・食）について知識を高める
 (①全くそうである・②ややそうである・③あまりそうではない・④全くそうではない)
- 1.5.5 テーマ（環境・健康・食）について誰かと議論する
 (①全くそうである・②ややそうである・③あまりそうではない・④全くそうではない)
- 1.5.6 テーマ（環境・健康・食）について深く考える
 (①全くそうである・②ややそうである・③あまりそうではない・④全くそうではない)
- 1.5.7 同じ趣味を持った人とのコミュニティを作る
 (①全くそうである・②ややそうである・③あまりそうではない・④全くそうではない)
- 1.5.8 地域のコミュニティを作る
 (①全くそうである・②ややそうである・③あまりそうではない・④全くそうではない)
- 1.5.9 その他 ()

2 カレッジリンク ご感想

(基礎コースと専門コースに分けてあります。)

- 2.1 **基礎コース**に参加した感想・満足度について教えてください。
 (①とても満足している・②満足している・③どちらでもない・④不満がある・⑤とても不満がある)
- 2.2 **基礎コース**の講義内容について教えてください。
 (①内容が難しくてついていけなかった・②少し難しかった・③丁度良かった・④少し物足りなかった・⑤物足りなかった)
- 2.3 **基礎コース**に参加して一番面白かった・興味を持ったものについて教えてください。
 (①講師による講義・②質疑応答・③参加者同士の交流や議論、ワークショップ・④懇親会・⑤イベントなどの配布資料・⑥実践・⑦その他：)
- 2.4 **基礎コース**の参加費は適切でしたか？
 (①とても高い・②高い・③丁度良い・④安い・⑤とても安い)
- 2.5 **基礎コース**の1回の講義時間は適切でしたか？
 (①とても長い・②長い・③丁度良い・④少し短い・⑤短い)
- 2.6 **基礎コース**の全4～6回の講義プログラムは適切でしたか？
 (①とても多い・②多い・③丁度良い・④少し少ない・⑤少ない)
- 2.7 **専門コース**に参加した感想・満足度について教えてください。
 (①とても満足している・②満足している・③どちらでもない・④不満がある・⑤とても不満がある)
- 2.8 **専門コース**の講義内容について教えてください。
 (①内容が難しくてついていけなかった・②少し難しかった・③丁度良かった・④少し物足りなかった・⑤物足りなかった)
- 2.9 **専門コース**に参加して一番面白かった・興味を持ったものについて教えてください。
 (①講師による講義・②質疑応答・③参加者同士の交流や議論、ワークショップ・④懇親会・⑤イベントなどの配布資料・⑥実践・⑦その他：)
- 2.10 **専門コース**の参加費は適切でしたか？
 (①とても高い・②高い・③丁度良い・④安い・⑤とても安い)
- 2.11 **専門コース**の1回の講義時間は適切でしたか？
 (①とても長い・②長い・③丁度良い・④少し短い・⑤短い)

2.12 **専門コース**の全4～6回の講義プログラムは適切でしたか？

(①とても多い・②多い・③丁度良い・④少し少ない・⑤少ない)

2.13 またカレッジリンクに参加したいと思いませんか？

(①とても参加したい・②参加したい・③どちらでもない・④あまり参加したくない・⑤参加したくない)

2.14 **専門コース**受講生の方はどうして専門コースを履修しようと思いましたか？

(①もっと勉強したくなった・②基礎コースが物足りなかった・③まちについての興味が深まった・④テーマについての興味が深まった・⑤参加することで生活の充実感が増した・⑥その他：)

2.15 **両コース** 次はどのようなテーマ・内容の講義を期待しますか。

()

2.16 **両コース** カレッジリンクの活動が柏の葉のまちづくりの中でどのような役割を担っていると考えますか？

(①市民の力を育てる活動・②大学の力を育てる活動・③市民と大学の力を相互に育てる活動・④柏の葉全体のまちづくりへつながる活動)

2.17 **両コース** カレッジリンクの柏の葉のまちづくりの中における重要性についてどう考えていますか？

(①とても重要である・②重要である・③あまり重要ではない・④全く重要ではない)

2.18 **両コース** 2.17でとても重要である・重要であると答えた方はどうしてそう思いますか？

(①市民が主体的にまちづくりを行うことが大切だと思うから・②大学という資源を地域に活かしていくことが必要だと思うから・③市民と大学が協働してまちづくりを行うことが大切だと思うから・④市民を育てることでまちも育つと考える・⑤その他：)

3 **UDCKについて これまでの認知や関わりについて**

3.1 カレッジリンクに参加されるまでのUDCKの認知度について教えてください。

(①活動内容も含めて知っていた・②建物は知っていた・③知らなかった)

3.2 カレッジリンクに参加されるまでのUDCKの利用頻度について教えてください。

(①よく利用していた・②数回利用したことがある・③利用したことがなかった)

3.3 3.2で利用したことがあると答えた方は、利用目的を教えてください。

(①見学・②UDCKで行われたまちのクラブ活動以外のイベントやプログラムに参加した・③その他：)

3.4 イベントやプログラムに参加された方は、覚えている範囲でイベント名や活動内容の記載をお願いします。

(年 月)

(年 月)

(年 月)

(その他：)

3.5 3.2で「利用したことがない」と答えた方は、利用したいと思っていましたか？

(①利用したいと思っていたがきっかけがなかった・②特に興味はなかった・③知らなかった)

4 **UDCKについて 印象、期待、感想など**

4.1カレッジリンクへの参加後、UDCKの認識が変わりましたか？

(①とても変わった・②変わった・③どちらでもない・④あまり変わらない)

4.2 上の設問で、とても変わった・変わったと答えられた方は、どのように変わりましたか？

()

- 4.3 UDCKに期待する「あったらいいなあ・こうなればいいなあ」という機能はありますか？
()
- 4.4 あなたにとってのUDCKのイメージはどのようなものですか？もっとも当てはまる2つに○をつけてください。
(①心の拠り所・②生活を豊かにする場・③知的好奇心を満たす場・④人と語り合う場・⑤まちについて議論する場・⑥まちの情報を入手する場・⑦貸しスペース・⑧特になし)
- 4.5 カレッジリンクへの参加をきっかけに、他のUDCKの活動を知りましたか？
(①知った・②知らない・③これから調べようと思う)
- 4.6 知ったと答えられた方は、何で知りましたか？
(①チラシ・②ポスター・③アナウンス・④人から聞いた・⑤HP・⑥その他)
- 4.7 カレッジリンクの参加をきっかけに、他のUDCKの活動に参加しようと思いましたが？
(①とても参加したい・②参加したい・③どちらでもない・④あまり参加したくない・⑤参加したくない)
- 4.8 参加したいと思う項目があれば○をつけて下さい。
(①ワークショップや学習プログラム・②市民活動・③単発のイベント・④実証実験・⑤休憩やおしゃべりなどの空間利用)
- 4.9 4.8で選択した理由
(①自分ができるまちづくりの一歩だと思ったから・②内容が面白そうだから・③地域のことを詳しく知ることができるといったから・④気軽に参加できそうだから・⑤場所として使いやすいそうだから)

5 お住まいのまち、まちづくりについて

- 5.1 お住まいのまちの満足度について教えてください。
- 5.1.1 福祉活動
(①とても満足している・②満足している・③どちらでもない・④不満がある・⑤とても不満がある)
- 5.1.2 防災活動
(①とても満足している・②満足している・③どちらでもない・④不満がある・⑤とても不満がある)
- 5.1.3 交流・コミュニティ活動
(①とても満足している・②満足している・③どちらでもない・④不満がある・⑤とても不満がある)
- 5.1.4 教育・子育て活動
(①とても満足している・②満足している・③どちらでもない・④不満がある・⑤とても不満がある)
- 5.1.5 景観や建築
(①とても満足している・②満足している・③どちらでもない・④不満がある・⑤とても不満がある)
- 5.1.6 水緑や自然環境
(①とても満足している・②満足している・③どちらでもない・④不満がある・⑤とても不満がある)
- 5.1.7 経済や産業
(①とても満足している・②満足している・③どちらでもない・④不満がある・⑤とても不満がある)
- 5.2 あなたの考える「まちづくり」の主体はどのようなものですか？該当するもの全てに○を付けてください。※複数回答
(①行政・②専門家・③研究者・④住民・⑤多主体が協働・⑥その他：)

- 5.3 あなたの考える「まちづくり」の定義はどのようなものですか？該当するもの全てに○を付けてください。※複数回答
(①建物を建てることや景観を整備すること・②コミュニティ育成活動・③福祉活動・④防災活動・⑤地域の問題解決のための活動・⑥地域の歴史や文化を伝える活動・⑦まちの目標ex：柏の葉キャンパスタウン構想に向かって行う活動・⑧まちの将来を描くこと・⑨その他：)
- 5.4 カレッジリンクに参加する前、あなたはどの程度地域のまちづくりに関わっていたと感じていましたか？
(①非常に参画していた・②何かしら関わっていた・③興味はあったが、関われなかった・④興味がなかった・⑤どちらでもなかった)
- 5.5 カレッジリンクに参加した後、あなたはどの程度地域のまちづくりに関わっていると感じていますか？
(①非常に参画している・②何かしら関わっている・③興味はあるがほとんど関わっていない・④興味がない・⑤どちらでもない)
- 5.6 カレッジリンクへの参加を通じて、地域のまちづくりへの興味や意識は変化しましたか？
(①非常に興味が深まった・②少し興味が深まった・③特に変化はない・④どちらでもない)
- 5.7 住民として何かまちづくり活動を行いたいと思いますか？
(①とても思う・②思う・③どちらでもない・④あまり思わない・⑤思わない)
- 5.8 5.7で「思う」と答えた方はどういうことを行いたいと思いますか？
(①地域住民のリーダーとして活動を広げていく・②活動のリーダーになる・③頼まれたら積極的にまちづくりに参加する・④自分のできる範囲で積極的に活動に参加する・⑤自分の興味のあるテーマに関する活動にだけ参加したい・⑥その他)
- 5.9 まちづくりのどのような分野に興味がありますか？
(①福祉活動・②防災活動・③交流&コミュニティ活動・④教育&子育て活動・⑤景観や建築・⑥自然環境・⑦経済や産業・⑧その他：)

6 最後に ご自身について教えてください

- 6.1 お名前 () (差し支えなければご記入ください)
- 6.2 年齢
(①男・②女)
- 6.3 年齢
(①10代以下・②20代・③30代・④40・⑤50代・⑥60代・⑦70代・⑧80代・⑨90代以上)
- 6.4 就業状況について
(①就業中・②定年等退職後・③フリーター・④専業主婦または主夫・⑤学生・⑥休業中)
- 6.5 6.4で①、②を選択された方に質問です。ご職業の職種は何ですか？
(①技術・②管理・③事務・④営業販売・⑤サービス・⑥保安・⑦農林漁業・⑧運輸・⑨通信・⑩生産・⑪その他：)
- 6.6 住んでいる地域 (例：柏市若柴)
(①柏市・②我孫子市・③取手市・④流山市・⑤つくば市・⑥野田市・⑦東京都内・⑧その他)
※①と答えた方は町名をお答え下さい
(町)
- 6.7 いつ頃からお住まいですか？
(①1920～1930年・②1930～1940年・③1940～1950年・④1950～1960年・⑤1960～1970年・

⑥1970～1980年・⑦1980～1990年・⑧1990～2000年・⑨2000～2010年・⑩2010～)

6.8 今の地域にお住まいの理由で最も当てはまるものは何ですか？

(①実家または結婚相手の実家・②親戚が住んでいた・③開発と同時に移り住んだ・④通勤の利便性・⑤東京から近い・⑥雰囲気や自然などの地域資源が魅力的・⑦まちの人が温かい、優しいから、⑨地域の活動が面白そうだったから・⑩その他：)

6.9 UDCK・千葉大学までの交通手段と時間

(①つくばエクスプレス・②バス・③自家用車・④自転車・⑤徒歩・⑥その他：)

まちづくりに対する自身の考えやカレッジリンクの感想など自由に書いて下さい。

ご協力ありがとうございました。

ピノキオプロジェクト参加者の皆様へ

アンケートのお願い

柏の葉地域では、駅前の開発や柏の葉アーバンデザインセンター（UDCK）の設立に伴い、様々な活動が行われてきました。そこで、研究活動の一環として、これまでの柏の葉地域における様々な活動が住民の方にとってどのような意味があるのか、柏の葉のまちづくりやUDCKという拠点についてどんなことを感じているのかという「UDCKや柏の葉地域の活動における事後評価」を行なうために、実状をきちんと把握し、今後のまちづくりへ繋げていきたいと考えています。

特に、ピノキオプロジェクトでは、「子どもを地域で育てること」をキーワードに、地域の子どもたちがまちへ出て、アートを通して地域の様々なことに触れ、交流する中で、これからのまちの担い手を育てていく、大変重要な活動であると考えています。

また、柏の葉では、行政だけでなく、大学や企業、そして市民も一緒に「まちづくり」を行っています。しかし、それら個々の活動や想いが、反映されるしくみやネットワークはできていません。様々な主体が協同して行っているまちだからこそ、一つ一つの参加者の声を聞いていきたいと考えています。

したがって、この調査は今後の柏の葉のまちづくり活動やUDCKなどの「まちづくりの拠点」、大学と地域の関係のあり方等を考える上での大変重要な調査になると考えております。つきましては、何かとご多用中のところ恐縮ですが、アンケート調査にご協力頂きます様、お願い申し上げます。

アンケートを同封の封筒にアンケートを入れて頂き、**12月10日（金）**までにご投函頂けると幸いです。

2010年12月4日

UDCK
東京大学 空間計画研究室 福角朋香

ピノキオプロジェクト アンケート

UDCK

東京大学大学院空間計画研究室

1 ピノキオプロジェクトについて 参加のきっかけ等

1.1 これまでにUDCK以外で行っている教育系の活動などに参加したことはありますか？

(①よく参加していた・②たまに参加していた・③参加したことがない)

1.2 ピノキオプロジェクトを知った理由

(①UDCKを訪れて知った・②UDCKのHPを見た・③ポスターやチラシを見た・④友人知人の紹介・⑤以前に参加したことがある・⑥その他：)

1.3 1.2で「③ポスターやチラシを見た」という人はどこで見ましたか？

(①つくばエクスプレス駅構内・②ららぽーと柏の葉・③小学校・④UDCK・⑤DM・⑥その他：)

1.4 参加しようと思ったきっかけ

1.4.1 まちづくりに興味があったから

(①全くそうである・②ややそうである・③あまりそうではない・④全くそうではない)

1.4.2 UDCKの活動に興味があったから

(①全くそうである・②ややそうである・③あまりそうではない・④全くそうではない)

1.4.3 内容(地域で子どもを育てることなど)に興味があったから

(①全くそうである・②ややそうである・③あまりそうではない・④全くそうではない)

1.4.4 気になるアーティストがいたから

(①全くそうである・②ややそうである・③あまりそうではない・④全くそうではない)

1.4.5 知人に誘われたから

(①全くそうである・②ややそうである・③あまりそうではない・④全くそうではない)

1.4.6 何か活動がしたいと思ったから

(①全くそうである・②ややそうである・③あまりそうではない・④全くそうではない)

1.4.7 子どもが参加しているから

(①全くそうである・②ややそうである・③あまりそうではない・④全くそうではない)

1.4.8 その他にあれば書いて下さい ()

1.5 参加の目的

1.5.1 まちづくりに対する知識を高める

(①全くそうである・②ややそうである・③あまりそうではない・④全くそうではない)

1.5.2 まちづくりについて誰かと話す、議論する

(①全くそうである・②ややそうである・③あまりそうではない・④全くそうではない)

1.5.3 自分の住むまちについて知り、深く考える

(①全くそうである・②ややそうである・③あまりそうではない・④全くそうではない)

1.5.4 UDCKが行っている活動に積極的に参加し、地域の情報を得る

(①全くそうである・②ややそうである・③あまりそうではない・④全くそうではない)

1.5.5 地域で子どもを育てるという教育活動を実践する

(①全くそうである・②ややそうである・③あまりそうではない・④全くそうではない)

1.5.6 子どもの学校以外のコミュニティを作る

(①全くそうである・②ややそうである・③あまりそうではない・④全くそうではない)

1.5.7 その他 ()

2 ピノキオプロジェクト ご感想

2.1 参加した満足度について教えてください。

(①とても満足している・②満足している・③どちらでもない・④不満がある・⑤とても不満がある)

2.2 活動内容について教えてください。

(①内容が難しくついていけなかった・②少し難しかった・③丁度良かった・④少し物足りなかった・⑤物足りなかった)

2.3 参加して一番面白かった・興味を持ったものについて教えてください。(子どもが面白そうにしていたものなど)

(①アーティストとの交流・②ワークショップの体験・③参加者同士の交流、友達やコミュニティづくり・④懇親会・⑤イベントなどの配布資料の内容・⑥その他：)

2.4 あなたが特に興味を持った内容について具体的に教えてください。

()

2.5 参加費は適切でしたか？(参加費があった場合)

(①とても高い・②高い・③丁度良い・④安い・⑤とても安い)

2.6 1回のワークショップの時間は適切でしたか？

(①とても長い・②長い・③丁度良い・④少し短い・⑤短い)

2.7 またピノキオプロジェクトに参加したいと思いますか？

(①とても参加したい・②参加したい・③どちらでもない・④あまり参加したくない・⑤参加したくない)

2.8 次はどのようなテーマ・内容のイベントを期待しますか。

()

2.9 ピノキオプロジェクトが柏の葉のまちづくりの中でどのような役割を持っていると考えていますか？

(①活動に参加する子どもにのみ意味のある教育活動・②活動に参加する子どもとその保護者に意味のある活動・③柏の葉全体のまちづくりへつながる活動)

2.10 ピノキオプロジェクトの柏の葉のまちづくりの中における重要性についてどう考えていますか？

(①とても重要である・②重要である・③あまり重要ではない・④全く重要ではない)

2.11 2.10でとても重要である・重要であると答えた方はどうしてそう思いますか？

(①多くの世代でまちづくりをつくっていくことが大切だと思う・②子どもの教育には学校だけでは不十分だと考える・③子どもを育てることでまちも育つと考える・④子どもの柔軟な考えをまちに活かしていくことがまちにとって大切だと考える・⑤子どもをきっかけに多くの保護者がまちに興味を持つことが大切だと考える・⑥その他：)

3 UDCKについて これまでの認知や関わりについて

- 3.1 ピノキオプロジェクトに参加されるまでのUDCKの認知度について教えてください。
 (①活動内容も含めて知っていた・②建物は知っていた・③知らなかった)
- 3.2 ピノキオプロジェクトに参加されるまでのUDCKの利用頻度について教えてください。
 (①よく利用していた・②数回利用したことがある・③利用したことがなかった)
- 3.3 3.2で利用したことがあると答えた方は、利用目的を教えてください。
 (①見学・②ピノキオプロジェクト以外のイベントやプログラムに参加・③その他：)
- 3.4 イベントやプログラムに参加された方は、覚えている範囲でイベント名や活動内容の記載をお願いします。
 (年 月) (年 月)
 (年 月) (その他：)
- 3.5 3.2で「利用したことがない」と答えた方は、利用したいと思っていましたか？
 (①利用したいと思っていたがきっかけがなかった・②特に興味はなかった・③知らなかった)

4 UDCKについて 印象、期待、感想など

- 4.1 ピノキオプロジェクトへの参加後、UDCKの認識が変わりましたか？
 (①とても変わった・②変わった・③どちらでもない・④あまり変わらない)
- 4.2 上の設問で、変わったと答えられた方は、どのように変わりましたか？
 ()
- 4.3 UDCKに期待する「あったらいいなあ・こうなればいいなあ」という機能はありますか？
 ()
- 4.4 あなたにとってのUDCKのイメージはどのようなものですか？もっとも当てはまる2つに○をつけてください。
 (①心の拠り所・②生活を豊かにする場・③知的好奇心を満たす場・④人と語り合う場・⑤まちについて議論する場・⑥まちの情報を入手する場・⑦貸しスペース・⑧特になし)
- 4.5 ピノキオプロジェクトへの参加をきっかけに、他のUDCKの活動を知りましたか？
 (①知った・②知らない・③これから調べようと思う)
- 4.6 知ったと答えられた方は、何で知りましたか？
 (①チラシ・②ポスター・③アナウンス・④人から聞いた・⑤HP・⑥その他)
- 4.7 ピノキオプロジェクトへの参加をきっかけに、他のUDCKの活動に参加しようと思いましたか？
 (①とても参加したい・②参加したい・③どちらでもない・④あまり参加したくない・⑤参加したくない)
- 4.8 参加したいと思う項目があれば○をつけて下さい。
 (①ワークショップや学習プログラム・②市民活動・③単発のイベント・④実証実験・⑤休憩やおしゃべりなどの空間利用)
- 4.9 4.8で選択した理由
 (①自分ができるまちづくりの一步だと思ったから・②内容が面白そうだから・③地域のことを詳しく知ることができると思ったから・④気軽に参加できそうだから・⑤場所として使いやすいそうだから)

5 お住まいのまち、まちづくりについて

5.1 お住まいのまちの満足度について教えてください。

5.1.1 福祉活動

(①とても満足している・②満足している・③どちらでもない・④不満がある・⑤とても不満がある)

5.1.2 防災活動

(①とても満足している・②満足している・③どちらでもない・④不満がある・⑤とても不満がある)

5.1.3 交流・コミュニティ活動

(①とても満足している・②満足している・③どちらでもない・④不満がある・⑤とても不満がある)

5.1.4 教育・子育て活動

(①とても満足している・②満足している・③どちらでもない・④不満がある・⑤とても不満がある)

5.1.5 景観や建築

(①とても満足している・②満足している・③どちらでもない・④不満がある・⑤とても不満がある)

5.1.6 水緑や自然環境

(①とても満足している・②満足している・③どちらでもない・④不満がある・⑤とても不満がある)

5.1.7 経済や産業

(①とても満足している・②満足している・③どちらでもない・④不満がある・⑤とても不満がある)

5.2 あなたの考える「まちづくり」の主体はどのようなものですか？該当するもの全てに○を付けてください。

※複数回答可

(①行政・②専門家・③研究者・④住民・⑤企業・⑥多主体が協働・⑦その他：)

5.3 あなたの考える「まちづくり」の定義はどのようなものですか？該当するもの全てに○を付けてください。

※複数回答可

(①建物を建てることや景観を整備すること・②交流、コミュニティ育成・③福祉活動・④防災活動・⑤地域の問題解決のための活動・⑥地域の歴史や文化を伝える活動・⑦まちの目標ex：柏の葉キャンパスタウン構想に向かって行う活動・⑧まちの将来を描くこと・⑨その他：)

5.4 ピノキオプロジェクトに参加する前、あなたはどの程度地域のまちづくりに関わっていると感じていましたか？

(①非常に参画している・②何かしら関わっている・③興味はあったが、関われなかった・④興味がなかった・⑤どちらでもなかった)

5.5 ピノキオプロジェクトに参加した後、あなたはどの程度地域のまちづくりに関わっていると感じていますか？

(①非常に参画している・②何かしら関わっている・③興味はあるがほとんど関わっていない・④興味がない・⑤どちらでもない)

5.6 ピノキオプロジェクトへの参加を通じて、地域のまちづくりへの興味や意識は変化しましたか？

(①非常に興味が深まった・②少し興味が深まった・③特に変化はない・④どちらでもない)

5.7 住民として何か主体的にお住まいの、柏の葉のまちづくり活動を行いたいと思いますか？

(①とても思う・②思う・③どちらでもない・④あまり思わない・⑤思わない)

5.8 5.7で「①とても思う②思う」と答えた方はどういうことを行いたいと思いますか？

(①地域住民のリーダーとして活動外でも積極的にコミュニティの輪を広げていく・②コミュニティ内のリーダーとして活動を積極的にひっぱっていく・③頼まれたら積極的にリーダーなどを引き受けたい・④自分のできる範囲で積極的に活動に参加していきたい・⑤自分の興味のあるテーマに関する活動にだけ参加したい・⑥その他)

5.9 まちづくりのどのような分野に興味がありますか？

(①福祉活動・②防災活動・③交流、コミュニティ活動・④教育、子育て活動・⑤景観や建築・⑥水緑や自然環境・⑦経済や産業・⑧その他：)

6 最後に ご自身について教えてください

6.1 お名前 () (差し支えなければご記入ください)

6.2 性別

(①男・②女)

6.3 年齢

(①10代以下・②20代・③30代・④40・⑤50代・⑥60代・⑦70代・⑧80代・⑨90代以上)

6.4 就業状況について

(①就業中・②定年等退職後・③フリーター・④専業主婦または主夫・⑤学生・⑥休業中)

6.5 6.4で①、②を選択された方に質問です。ご職業の職種は何ですか？

(①技術・②管理・③事務・④営業販売・⑤サービス・⑥保安・⑦農林漁業・⑧運輸・⑨通信・⑩生産・⑪その他：)

6.6 住んでいる地域 (例：柏市若柴)

(①柏市・②我孫子市・③取手市・④流山市・⑤つくば市・⑥野田市・⑦東京都内・⑧その他)

※①柏市と答えた方は地域、町名をお答え下さい

(町)

6.7 いつ頃からお住まいですか？

(①1920～1930年・②1930～1940年・③1940～1950年・④1950～1960年・⑤1960～1970年・⑥1970～1980年・⑦1980～1990年・⑧1990～2000年・⑨2000～2010年・⑩2010～)

6.8 今の地域にお住まいの理由で最も当てはまるものは何ですか？

(①実家または結婚相手の実家・②親戚が住んでいた・③開発と同時に移り住んだ・④通勤の利便性・⑤東京から近い・⑥雰囲気や自然などの地域資源が魅力的・⑦人柄が良い・⑧地域の活動が面白そうだったから・⑨その他：)

6.9 UDCKまでの交通手段と時間

(①つくばエクスプレス・②バス・③自家用車・④自転車・⑤徒歩・⑥その他：)

まちづくりに対する自身の考えやピノキオプロジェクトの感想など自由に書いて下さい。

A large, empty rounded rectangular box with a thin black border, intended for handwritten text. The box is centered on the page and occupies most of the vertical space below the instruction.

ご協力ありがとうございました。

2010年11月14日

マルシェ・コロール参加者、出店者の皆様へ

UDCK 東京大学 空間計画研究室 福角朋香
アンケートご協力のお願い

柏の葉地域では、駅前の開発や柏の葉アーバンデザインセンター（UDCK）の設立に伴い、様々な活動が行われてきました。そこで、このたび、東京大学の研究活動の一環として、UDCK及びマルシェコロール実行委員会のご協力により、これまでの柏の葉地域における様々な活動が住民の方にとってどのような意味があるのかに調査しております。

柏の葉のまちづくりやUDCKという拠点についてどんなことを感じているのかといった「UDCKや柏の葉地域の活動における利用者による事後評価」を行なうため調査をしており、今後のまちづくりへ繋げていきたいと考えています。

特に、マルシェ・コロールでは、「みんなでつくる、みんなのマルシェ」をキーワードに、住民の方がまちに出てまちの食材、人、物に触れ、交流し、そこから新しい地域のコミュニティが形成され、地域の商店と地域の住民が一体となってまちの活動をつくる重要な活動だと考えています。

また、柏の葉では、行政だけでなく、大学や企業、そして住民も一緒に「まちづくり」を行っています。しかし、それら個々の活動や想いが、反映されるしくみやネットワークはまだできていないと考えています。様々な主体が協働して行っているまちだからこそ、一つ一つの利用者の声をこれからのまちづくりに活かしていきたいと考えています。

したがって、この調査は今後の柏の葉のまちづくり活動やUDCKなどの「まちづくりの拠点」と地域の関係のあり方等を考える上での大変重要な調査になると考えております。つきましては、何かとご多用中のところ恐縮ですが、アンケート調査にご協力頂きます様、お願い申し上げます。

なお、**11月21日（日）**までに返信用の封筒に同封のアンケートを入れ、ご投函頂きます様、お願い申し上げます。

UDCK 東京大学 空間計画研究室 福角朋香
連絡先：東京大学柏の葉キャンパス 6階 空間計画研究室
043-136-4817

マルシェ動参加者アンケート

UDCK

東京大学大学院空間計画研究室

設問の最後に「※複数回答」と記入してあるもの以外は、一問につき一回答をお願いします。

1 マルシェについて 参加のきっかけ等

1.1 これまでにUDCK以外で行っている活動などに参加したことはありますか？

(①よく参加していた・②たまに参加していた・③参加したことがない)

1.2 マルシェの活動を知った理由

(①まちのクラブハウスを訪れて知った・②シビックネットワークを見て知った・③UDCKを訪れて知った・④UDCKのHPを見た・⑤ポスターやチラシを見た・⑥友人知人の紹介・⑦その他：)

1.3 1.2で「ポスターやチラシを見た」という人はどこで見ましたか？

(①地域情報紙・②ららぽーと柏の葉・③UDCK・④KFV・⑤その他：)

1.4 参加しようと思ったきっかけ

1.4.1 活動内容に興味があったから

(①全くそうである・②ややそうである・③あまりそうではない・④全くそうではない)

1.4.2 UDCK・まちのクラブハウスの活動に興味があったから

(①全くそうである・②ややそうである・③あまりそうではない・④全くそうではない)

1.4.3 まちづくりに興味があったから

(①全くそうである・②ややそうである・③あまりそうではない・④全くそうではない)

1.4.4 普段とは違うお客さんに商品を提供できる良い機会だと思ったから

(①全くそうである・②ややそうである・③あまりそうではない・④全くそうではない)

1.4.5 友人・知人に誘われたから

(①全くそうである・②ややそうである・③あまりそうではない・④全くそうではない)

1.4.6 何か活動がしたいと思ったから

(①全くそうである・②ややそうである・③あまりそうではない・④全くそうではない)

1.4.7 その他にあれば書いて下さい ()

1.5 参加の目的

1.5.1 地域のコミュニティを作る

(①全くそうである・②ややそうである・③あまりそうではない・④全くそうではない)

1.5.2 自分の住むまちについて良く知り、深く考えるまちづくりについて誰かと話す

(①全くそうである・②ややそうである・③あまりそうではない・④全くそうではない)

1.5.3 まちづくりについて誰かと話す

(①全くそうである・②ややそうである・③あまりそうではない・④全くそうではない)

1.5.4 UDCK・まちのクラブハウスが行っている活動に参加し、地域の情報を得る

(①全くそうである・②ややそうである・③あまりそうではない・④全くそうではない)

1.5.5 同じ趣味を持った人とのコミュニティを作りたかった

(①全くそうである・②ややそうである・③あまりそうではない・④全くそうではない)

1.5.6 まちづくりに対する知識を高める

(①全くそうである・②ややそうである・③あまりそうではない・④全くそうではない)

1.5.7 その他 ()

2 マルシェ ご感想

2.1 活動内容の満足度について教えてください。

(①とても満足している・②満足している・③どちらでもない・④不満がある・⑤とても不満がある)

2.2 2.1でどういうところが良かった、または良くなかったのかその理由を教えてください。

()

2.3 参加して一番面白かった・興味を持ったものについて教えてください。

(①活動そのものによって得た知識、技術など・②活動を通じて出会った人との交流、コミュニケーション・③活動を通じて知った地域のこと・④その他：)

2.4 1回の活動時間は適切でしたか？

(①とても長い・②長い・③丁度良い・④少し短い・⑤短い)

2.5 今後も活動に参加したいと思いますか？

(①とても参加したい・②参加したい・③どちらでもない・④あまり参加したくない・⑤参加したくない)

2.6 次はどのようなテーマ・活動内容を期待しますか。

()

2.7 マルシェの取り組みがまちづくりの中でどのような役割を担っていると考えていますか？

(①出店側にとって普段とは違う場所で商品を提供できる場所・②住民にとって地域の産物について詳しくなる活動・③地域の商業と住民を繋げる活動)

2.8 マルシェの柏の葉のまちづくりの中における重要性についてどう考えていますか？

(①とても重要である・②重要である・③あまり重要ではない・④全く重要ではない)

2.9 2.8でとても重要である・重要であると答えた方はどうしてそう思いますか？

(①地域の資源を知るための手段として興味を持ちやすい・②コミュニティの輪が広がる・③地域の資源をきっかけに人と人を繋げることができる・④その他：)

2.10 マルシェの活動にあっという間ということはありませんか？

()

3 UDCKについて これまでの認知や関わりについて

3.1 マルシェに参加されるまでのUDCKの認知度について教えてください。

(①活動内容も含めて知っていた・②建物は知っていた・③知らなかった)

3.2 マルシェに参加されるまでのUDCKの利用頻度について教えてください。

(①よく利用していた・②数回利用したことがある・③利用したことがなかった)

3.3 3.2で利用したことがあると答えた方は、利用目的を教えてください。

(①見学・②UDCKで行われたまちのクラブ活動以外のイベントやプログラムに参加した・③その他：)

3.4 イベントやプログラムに参加された方は、覚えていた範囲でイベント名や活動内容の記載をお願いします。

(年 月 内容：) (年 月 内容：)

(年 月 内容：)

3.5 3.2で「利用したことがない」と答えた方は、利用したいと思っていましたか？

(①利用したいと思っていたがきっかけがなかった・②特に興味はなかった・③知らなかった)

4 UDCKについて 印象、期待、感想など

4.1 マルシェへの参加後、UDCKの認識が変わりましたか？

(①とても変わった・②変わった・③どちらでもない・④あまり変わらない・⑤変わらない)

4.2 上の設問で、変わったと答えられた方は、どのように変わりましたか？

()

4.3 UDCKに期待する「あったらいいなあ・こうなればいいなあ」という機能はありますか？

()

4.4 あなたにとってのUDCKのイメージはどのようなものですか？もっとも当てはまる2つに○をつけてください。

(①心の拠り所・②生活を豊かにする場・③知的好奇心を満たす場・④人と語り合う場・⑤まちについて議論する場・⑥まちの情報を入手する場・⑦貸しスペース・⑧イメージがない)

4.5 マルシェへの参加をきっかけに、他のUDCKの活動を知りましたか？

(①知った・②知らない・③これから調べようと思う)

4.6 知ったと答えられた方は、何で知りましたか？

(①チラシ・②ポスター・③アナウンス・④人から聞いた・⑤HP・⑥その他：)

4.7 マルシェへの参加をきっかけに、他のUDCKの活動に参加しようと思いましたか？

(①とても参加したい・②参加したい・③どちらでもない・④あまり参加したくない・⑤参加したくない)

4.8 参加したいと思うものがあれば○をつけて下さい。

(①ワークショップや学習プログラム・②市民活動・③単発のイベント・④実証実験・⑤休憩やおしゃべりなどの空間利用)

4.9 4.8で選択した理由

(自分ができるまちづくりの一步だと思ったから・②内容が面白そうだから・③地域のことを詳しく知ることができると思ったから・④気軽に参加できそうだから・⑤場所として使いやすそうだから)

5 お住まいのまち、まちづくりについて

5.1 お住まいのまちの満足度について教えて下さい。

5.1.1 福祉活動

(①とても満足している・②満足している・③どちらでもない・④不満がある・⑤とても不満がある)

5.1.2 防災活動

(①とても満足している・②満足している・③どちらでもない・④不満がある・⑤とても不満がある)

5.1.3 交流・コミュニティ活動

(①とても満足している・②満足している・③どちらでもない・④不満がある・⑤とても不満がある)

5.1.4 教育・子育て活動

(①とても満足している・②満足している・③どちらでもない・④不満がある・⑤とても不満がある)

5.1.5 景観や建築

(①とても満足している・②満足している・③どちらでもない・④不満がある・⑤とても不満がある)

5.1.6 水緑や自然環境

(①とても満足している・②満足している・③どちらでもない・④不満がある・⑤とても不満がある)

5.1.7 経済や産業

- (①とても満足している・②満足している・③どちらでもない・④不満がある・⑤とても不満がある)
- 5.2 あなたの考える「まちづくり」の主体はどのようなものですか？該当するもの全てに○を付けてください。※複数回答
(①行政・②専門家・③研究者・④住民・⑤多主体が協働・⑤その他：)
- 5.3 あなたの考える「まちづくり」の定義はどのようなものですか？該当するもの全てに○を付けてください。※複数回答
(①建物を建てることや景観を整備すること・②コミュニティ育成・③福祉活動・④防災活動・⑤地域の問題解決のための活動・⑥地域の歴史や文化を伝える活動・⑦まちの目標^{ex}：柏の葉キャンパスタウン構想に向かって行う活動・⑧まちの将来を描くこと・⑨その他：)
- 5.4 マルシェに参加する前、あなたはどの程度地域のまちづくりに関わっていると感じていましたか？
(①非常に参画している・②何かしら関わっている・③興味はあったが、関われなかった・④興味なかった・⑤どちらでもなかった)
- 5.5 マルシェに参加した後、あなたはどの程度地域のまちづくりに関わっていると感じていますか？
(①非常に参画している・②何かしら関わっている・③興味はあるがほとんど関わっていない・④興味がない・⑤どちらでもない)
- 5.6 マルシェへの参加を通じて、地域のまちづくりや地域の活動への興味や意識は変化しましたか？
(①非常に興味が深まった・②少し興味が深まった・③どちらでもない・④特に変化はない)
- 5.7 住民、または地域のお店として何か主体的に地域の活動を行いたいと思いますか？
(①とても思う・②思う・③どちらでもない・④あまり思わない・⑤思わない)
- 5.8 5.7で「思う」と答えた方はどういうことを行いたいと思いますか？
(①地域住民のリーダーとして活動外でも積極的にコミュニティの輪を広げていく・②コミュニティ内のリーダーとして活動を積極的にひっぱり抜いていく・③頼まれたら積極的にリーダーなどを引き受けたい・④自分のできる範囲で積極的に活動に参加していきたい・⑤自分の興味のあるテーマに関する活動にだけ参加したい・⑥その他)
- 5.9 まちづくりのどのような分野に興味がありますか？
(①福祉活動・②防災活動・③交流、コミュニティ活動・④教育、子育て活動・⑤景観や建築・⑥水緑や自然環境・⑦経済や産業・⑧その他：)

6 最後に ご自身について教えてください

- 6.1 お名前 () (差し支えなければご記入ください)
- 6.2 ご性別を教えてください
(①男・②女)
- 6.3 年齢
(①10代・②20代・③30代・④40代・⑤50代・⑥60代・⑦70代・⑧80代・⑨90代)
- 6.4 就業状況について
(①就業者・②定年等退職後・③フリーター・④専業主婦または主夫・⑤学生・⑥休業中)
- 6.5 6.4で①、②を選択された方に質問です。ご職業の職種は何ですか？
(①技術・②管理・③事務・④営業販売・⑤サービス・⑥保安・⑦農林漁業・⑧運輸・⑨通信・⑩生産・⑪その他：)
- 6.6 住んでいる地域 (例：柏市若柴)

(①柏市・②我孫子市・③取手市・④流山市・⑤つくば市・⑥野田市・⑦東京都内・⑧その他)

※①と答えた方は町名をお答え下さい

(町)

6.7 いつ頃からお住まいですか？

(①1920～1930年・②1930～1940年・③1940～1950年・④1950～1960年・⑤1960～1970年・
⑥1970～1980年・⑦1980～1990年・⑧1990～2000年・⑨2000～2010年・⑩2010～)

6.8 今の地域にお住まいの理由で最も当てはまるものは何ですか？※複数回答可

(①実家または結婚相手の実家・②親戚が住んでいた・③開発と同時に移り住んだ・④通勤の利便性・
⑤東京から近い・⑥雰囲気や自然などの地域資源が魅力的・⑦人柄が良い、まちの人が温かい、優しい
から、⑨地域の活動が面白そうだったから・⑩その他：)

6.9 UDCK・KFVまでの交通手段と時間

(①つくばエクスプレス・②バス・③自家用車・④自転車・⑤徒歩・⑥その他：)

まちづくりに対する自身の考えやマルシェの感想など自由に書いて下さい。

ご協力ありがとうございました。

まちのクラブ活動参加者アンケート

UDCK

東京大学大学院空間計画研究室

設問の最後に「※複数回答」と記入してあるもの以外は、一問につき一回答をお願いします。

1 まちのクラブ活動について 参加のきっかけ等

- 1.1 これまでにUDCK以外で行っている活動などに参加したことはありますか？
 (①よく参加していた・②たまに参加していた・③参加したことがない)
- 1.2 まちのクラブ活動を知った理由
 (①まちのクラブハウスを訪れて知った・②シビックネットワークを見て知った・③UDCKを訪れて知った・④UDCKのHPを見た・⑤ポスターやチラシを見た・⑥友人知人の紹介・⑦その他：)
- 1.3 1.2で「ポスターやチラシを見た」という人はどこで見ましたか？
 (①地域情報紙・②ららぽーと柏の葉・③UDCK・④まちのクラブハウス・⑤その他：)
- 1.4 参加しようと思ったきっかけ
- 1.4.1 活動内容に興味があったから
 (①全くそうである・②ややそうである・③あまりそうではない・④全くそうではない)
- 1.4.2 まちのクラブ活動の内容に興味があったから
 (①全くそうである・②ややそうである・③あまりそうではない・④全くそうではない)
- 1.4.3 UDCKの活動に興味があったから
 (①全くそうである・②ややそうである・③あまりそうではない・④全くそうではない)
- 1.4.4 気になる先生や人がいたから
 (①全くそうである・②ややそうである・③あまりそうではない・④全くそうではない)
- 1.4.5 知人に誘われたから
 (①全くそうである・②ややそうである・③あまりそうではない・④全くそうではない)
- 1.4.6 何か活動がしたいと思ったから
 (①全くそうである・②ややそうである・③あまりそうではない・④全くそうではない)
- 1.4.7 まちづくりに興味があったから
 (①全くそうである・②ややそうである・③あまりそうではない・④全くそうではない)
- 1.4.8 その他にあれば書いて下さい ()
- 1.5 参加の目的
- 1.5.1 ミス
 (①全くそうである・②ややそうである・③あまりそうではない・④全くそうではない)
- 1.5.2 地域の人と交流する
 (①全くそうである・②ややそうである・③あまりそうではない・④全くそうではない)
- 1.5.3 同じ趣味を持った人とのコミュニティを作る
 (①全くそうである・②ややそうである・③あまりそうではない・④全くそうではない)
- 1.5.4 地域活動の情報を得る
 (①全くそうである・②ややそうである・③あまりそうではない・④全くそうではない)

1.5.5 まちづくりについて誰かと話す

(①全くそうである・②ややそうである・③あまりそうではない・④全くそうではない)

1.5.6 地域コミュニティを作る

(①全くそうである・②ややそうである・③あまりそうではない・④全くそうではない)

1.5.7 まちについて良く知り、深く考える

(①全くそうである・②ややそうである・③あまりそうではない・④全くそうではない)

1.5.8 まちづくりに対する知識を高める

(①全くそうである・②ややそうである・③あまりそうではない・④全くそうではない)

1.5.9 その他 ()

2 まちのクラブ活動 ご感想

2.1 活動内容の満足度について教えてください。

(①とても満足している・②満足している・③どちらでもない・④不満がある・⑤とても不満がある)

2.2 2.1でどういうところが良かった、または良くなかったのかその理由を教えてください。

()

2.3 参加して一番面白かった・興味を持ったものについて教えてください。

(①活動そのものによって得た知識、技術など・②活動を通じて出会った人との交流、コミュニケーション・③活動を通じて知った地域のこと・④その他：)

2.4 1回の活動時間は適切でしたか？

(①とても長い・②長い・③丁度良い・④少し短い・⑤短い)

2.5 今後も活動に参加したいと思いますか？

(①とても参加したい・②参加したい・③どちらでもない・④あまり参加したくない・⑤参加したくない)

2.6 次はどのようなテーマ・活動内容を期待しますか。

()

2.7 クラブ活動がまちづくりの中でどのような役割を担っていると考えていますか？

(①活動に参加する人にとって意味のある活動・②活動に参加する人がまちにネットワークをつくる活動・③まち全体にとって意義のある活動)

2.8 クラブ活動の柏の葉のまちづくりの中における重要性についてどう考えていますか？

(①とても重要である・②重要である・③あまり重要ではない・④全く重要ではない)

2.9 2.8でとても「①重要である・②重要である」と答えた方はどうしてそう思いますか？

(①気軽にまちに出るきっかけとなる活動が必要と考える・②気軽に参加できる活動から、コミュニティの輪が広がると考える・③できるだけたくさんの方がまちで活動できることが重要と考える・④その他：)

2.10 まちのクラブ活動にあったらいいなということはありませんか？

()

3 まちのクラブハウスについて

3.1 活動拠点としてまちのクラブハウスがあることについてどう思いますか？

(①絶対に必要・②できればあった方がよい・③どちらでもよい・④なくてもよい・⑤ない方がよい)

3.2 まちのクラブハウスで活動できることはあなたにとって良かったですか？

(①とても良かった・②良かった・③どちらでもない・④あまり良くなかった・⑤良くなかった)

3.3 まちのクラブハウスはあなたにとってどのような存在ですか？

(①自分の居場所・②活動場所として適切な場所・③不満はあるが、活動場所として必要・④たまたま利用しているだけの場所)

4 UDCKについて これまでの認知や関わりについて

4.1 まちのクラブ活動に参加されるまでのUDCKの認知度について教えてください。

(①活動内容も含めて知っていた・②建物は知っていた・③知らなかった)

4.2 まちのクラブ活動に参加されるまでのUDCKの利用頻度について教えてください。

(①よく利用していた・②数回利用したことがある・③利用したことがなかった)

4.3 4.2で「①よく利用していた②数回利用したことがある」と答えた方は、利用目的を教えてください。

(①見学・②UDCKで行われたまちのクラブ活動以外のイベントやプログラムに参加した・③その他：)

4.4 イベントやプログラムに参加された方は、覚えている範囲でイベント名や活動内容の記載をお願いします。

(年 月 内容：)

(年 月 内容；)

(年 月 内容)

4.5 4.2で「③利用したことがない」と答えた方は、利用したいと思っていましたか？

(①利用したいと思っていたがきっかけがなかった・②特に興味はなかった・③知らなかった)

5 UDCKについて 印象、期待、感想など

5.1 クラブ活動への参加後、UDCKの認識が変わりましたか？

(①とても変わった・②変わった・③どちらでもない・④あまり変わらない・⑤変わらない)

5.2 上の設問で、変わったと答えられた方は、どのように変わりましたか？

()

5.3 UDCKに期待する「あったらいいなあ・こうなればいいなあ」という機能はありますか？

()

5.4 あなたにとってのUDCKのイメージはどのようなものですか？もっとも当てはまる2つに○をつけてください。

(①心の拠り所・②生活を豊かにする場・③知的好奇心を満たす場・④人と語り合う場・⑤まちについて議論する場・⑥まちの情報を入手する場・⑦貸しスペース・⑧イメージがない)

5.5 クラブ活動への参加をきっかけに、他のUDCKの活動を知りましたか？

(①知った・②知らない・③これから調べようと思う)

5.6 5.5で「①知った」と答えられた方は、何で知りましたか？

(①チラシ・②ポスター・③アナウンス・④人から聞いた・⑤HP・⑥その他)

- 5.7 クラブ活動への参加をきっかけに、他のUDCKの活動に参加しようと思いましたが？
(①とても参加したい・②参加したい・③どちらでもない・④あまり参加したくない・⑤参加したくない)
- 5.8 参加したいと思うものがあれば○をつけて下さい。
(①ワークショップや学習プログラム・②市民活動・③単発のイベント・④実証実験・⑤休憩やおしゃべりなどの空間利用)
- 5.9 5.8で選択した理由
(①自分ができるまちづくりの一步だと思ったから・②内容が面白そうだから・③地域のことを詳しく知ることができると思ったから・④気軽に参加できそうだから・⑤場所として使いやすいそうだから)

6 お住まいのまち、まちづくりについて

- 6.1 お住まいのまちの満足度について教えてください。
- 6.1.1 福祉活動
(①とても満足している・②満足している・③どちらでもない・④不満がある・⑤とても不満がある)
- 6.1.2 防災活動
(①とても満足している・②満足している・③どちらでもない・④不満がある・⑤とても不満がある)
- 6.1.3 交流・コミュニティ活動
(①とても満足している・②満足している・③どちらでもない・④不満がある・⑤とても不満がある)
(※その理由：)
- 6.1.4 教育・子育て活動
(①とても満足している・②満足している・③どちらでもない・④不満がある・⑤とても不満がある)
(※その理由：)
- 6.1.5 景観や建築
(①とても満足している・②満足している・③どちらでもない・④不満がある・⑤とても不満がある)
- 6.1.6 水緑や自然環境
(①とても満足している・②満足している・③どちらでもない・④不満がある・⑤とても不満がある)
- 6.1.7 経済や産業
(①とても満足している・②満足している・③どちらでもない・④不満がある・⑤とても不満がある)
- 6.2 あなたの考える「まちづくり」の主体はどのようなものですか？該当するもの全てに○を付けてください。
※複数回答
(①行政・②専門家・③研究者・④住民・⑤多主体が協働・⑥その他：)
- 6.3 あなたの考える「まちづくり」の定義はどのようなものですか？該当するもの全てに○を付けてください。
※複数回答
(①建物を建てることや景観を整備すること・②コミュニティ育成・③福祉活動・④防災活動・⑤地域の問題解決のための活動・⑥地域の歴史や文化を伝える活動・⑦まちの目標ex：柏の葉キャンパスタウン構想に向かって行う活動・⑧まちの将来を描くこと・⑨その他：)
- 6.4 まちのクラブ活動に参加する前、あなたはどの程度地域のまちづくりに関わっていると感じていましたか？
(①非常に参画している・②何かしら関わっている・③どちらでもなかった・④興味はあったが、関われなかった・⑤興味がなかった)

- 6.5 まちのクラブ活動に参加した後、あなたはどの程度地域のまちづくりに関わっていると感じていますか？
 (①非常に参画している・②何かしら関わっている・③どちらでもない・④興味はあるがほとんど関わっていない・⑤興味がない)
- 6.6 まちのクラブ活動への参加を通じて、地域のまちづくりや地域の活動への興味や意識は変化しましたか？
 (①非常に興味が深まった・②少し興味が深まった・③どちらでもない・④特に変化はない)
- 6.7 住民として何か主体的に地域の活動を行いたいと思いますか？
 (①とても思う・②思う・③どちらでもない・④あまり思わない・⑤思わない)
- 6.8 6.7で「思う」と答えた方はどういうことを行いたいと思いますか？
 (①地域住民のリーダーとして活動を広げていく・②活動のリーダーになる・③頼まれたら積極的にまちづくりに参加したい・④自分のできる範囲でまちづくりに参加したい・⑤自分の興味のあることだけ参加したい・⑥その他)
- 6.9 まちづくりのどのような分野に興味がありますか？
 (①福祉活動・②防災活動・③交流、コミュニティ活動・④教育、子育て活動・⑤景観や建築・⑥水緑や自然環境・⑦経済や産業・⑧その他：)

7 最後に ご自身について教えてください

- 7.1 お名前 () (差し支えなければご記入ください)
- 7.2 ご性別を教えてください
 (①男・②女)
- 7.3 年齢
 (①10代以下・②20代・③30代・④40・⑤50代・⑥60代・⑦70代・⑧80代・⑨90代以上)
- 7.4 就業状況について
 (①就業中・②定年等退職後・③フリーター・④専業主婦または主夫・⑤学生・⑥休業中)
- 7.5 7.4で①、②を選択された方に質問です。ご職業の職種は何ですか？
 (①技術・②管理・③事務・④営業販売・⑤サービス・⑥保安・⑦農林漁業・⑧運輸・⑨通信・⑩生産・⑪その他：)
- 7.6 住んでいる地域 (例：柏市若柴)
 (①柏市・②我孫子市・③取手市・④流山市・⑤つくば市・⑥野田市・⑦東京都内・⑧その他)
 ※①と答えた方は町名をお答え下さい
 () 町)
- 7.7 いつ頃からお住まいですか？
 (①1920～1930年・②1930～1940年・③1940～1950年・④1950～1960年・⑤1960～1970年・⑥1970～1980年・⑦1980～1990年・⑧1990～2000年・⑨2000～2010年・⑩2010～)
- 7.8 今の地域にお住まいの理由で最も当てはまるものは何ですか？※複数回答可
 (①実家または結婚相手の実家・②親戚が住んでいた・③開発と同時に移り住んだ・④通勤の利便性・⑤東京から近い・⑥雰囲気や自然などの地域資源が魅力的・⑦まちの人が温かい、優しいから、⑨地域の活動が面白そうだったから・⑩その他：)
- 7.9 UDCK・KFVまでの交通手段と時間
 (①つくばエクスプレス・②バス・③自家用車・④自転車・⑤徒歩・⑥その他：)

まちづくりに対する自身の考えやまちのクラブ活動の感想など自由に書いて下さい。

A large, empty rounded rectangular box with a thin black border, intended for handwritten responses to the prompt above.

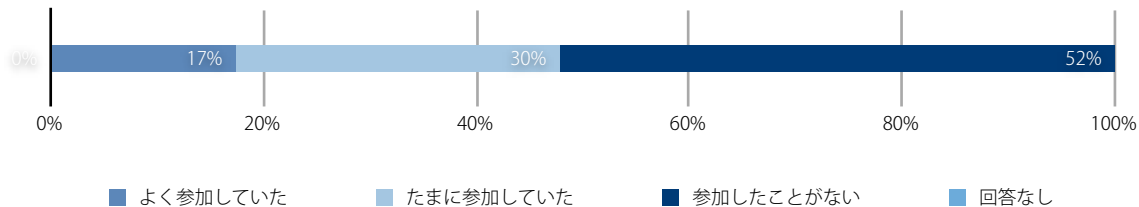
ご協力ありがとうございました。

資料2 アンケート調査集計資料

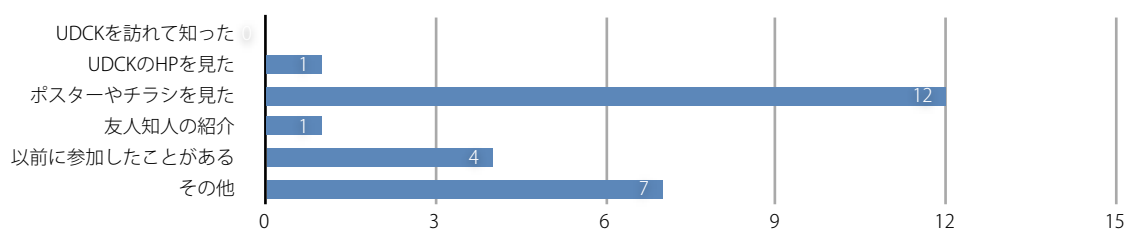
まちづくりスクール分析

1 まちづくりスクールについて 参加のきっかけ等

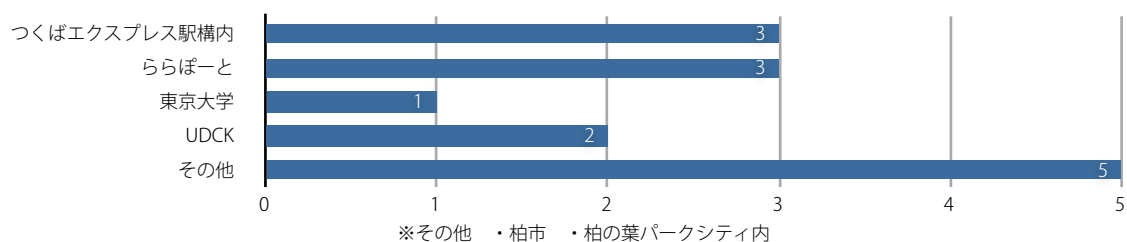
1.1 これまでにUDCK以外で行っているまちづくりの講座などに参加したことはありますか？



1.2 まちづくりスクールを知った理由

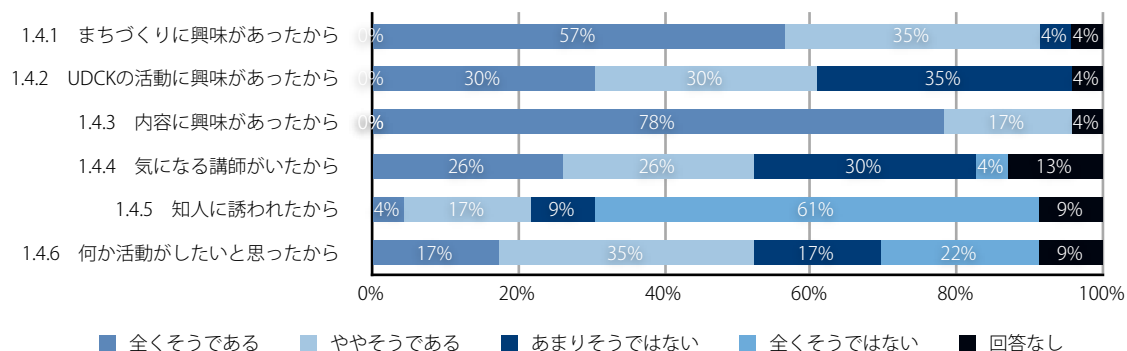


1.3 1.2で「ポスターやチラシを見た」という人はどこで見ましたか？



1.4 参加しようと思ったきっかけ

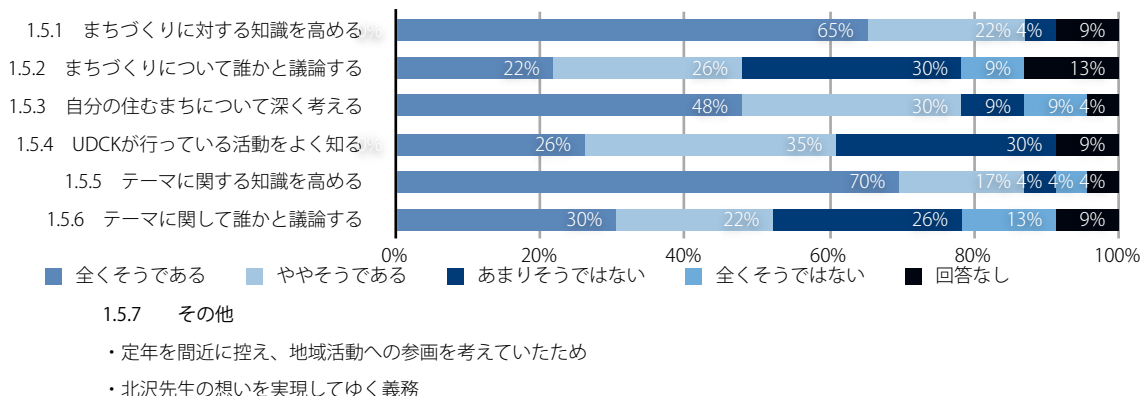
1.4.1 まちづくりに興味があったから



1.4.7 その他にあれば書いて下さい

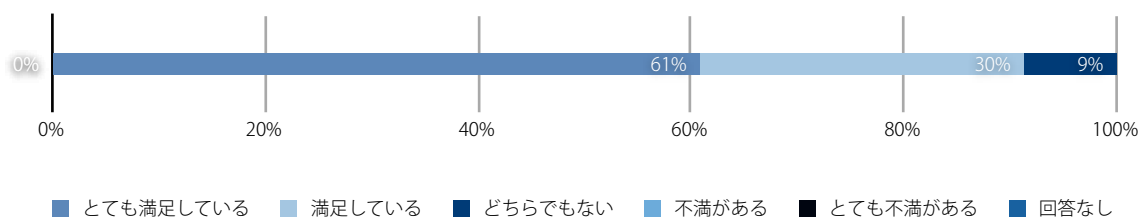
- ・ 知見を広めるため
- ・ アンテナを張るのに最適な場所と考えたため
- ・ 自分自身と親にとってタイムリーな内容だった

1.5 参加の目的

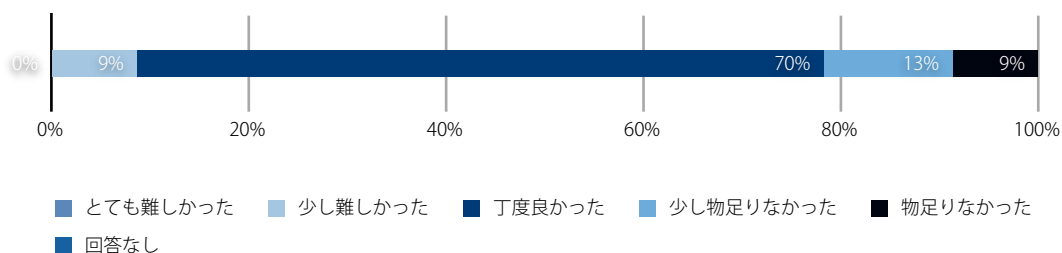


2 まちづくりスクール ご感想

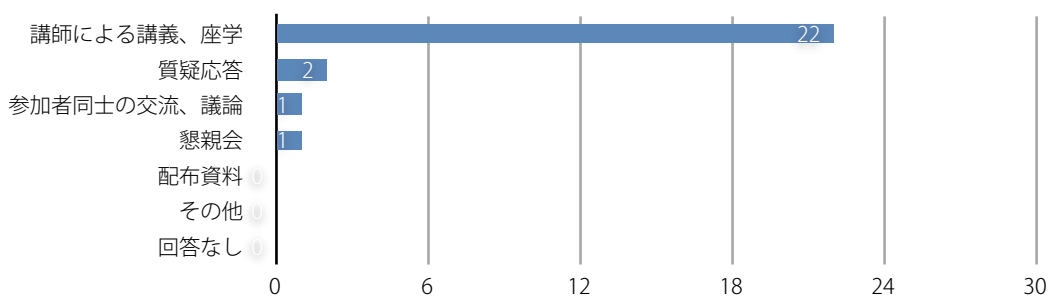
2.1 参加した感想について教えてください。



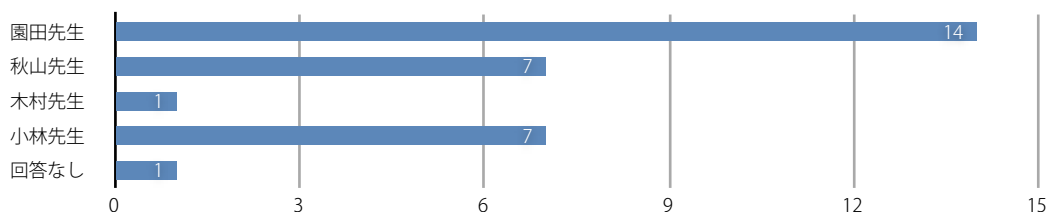
2.2 講義内容について教えてください。



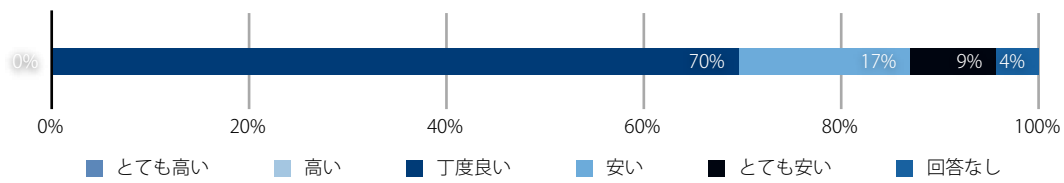
2.3 参加して一番面白かった・興味を持ったものについて教えてください。



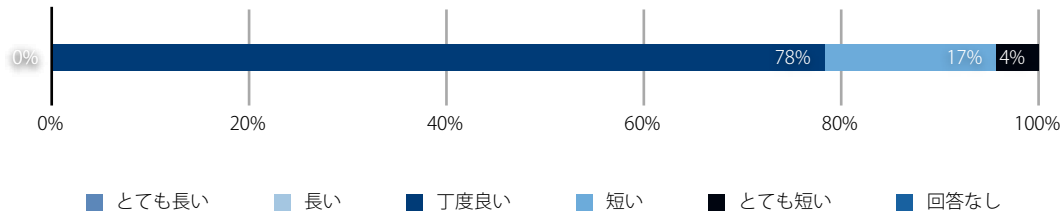
2.4 あなたが特に興味を持った内容の回を具体的に教えてください。



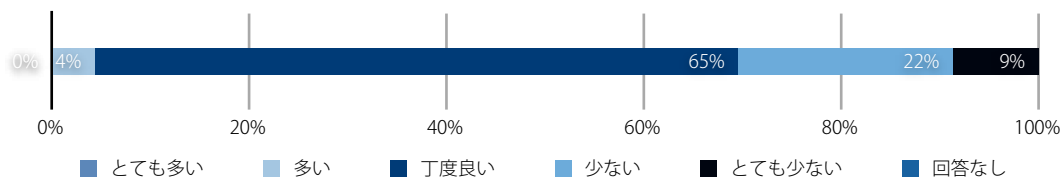
2.5 参加費は適切でしたか？



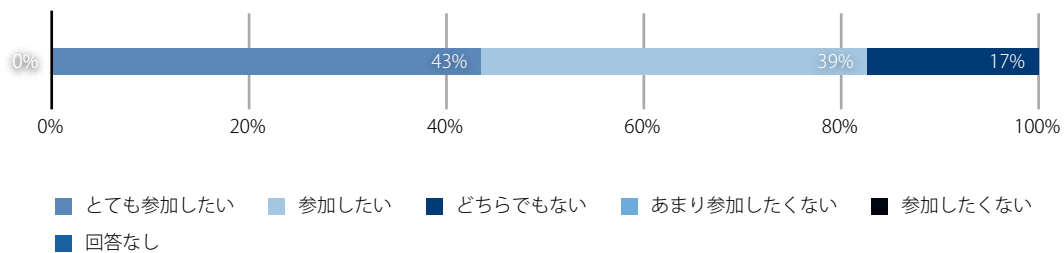
2.6 1回の講義時間は適切でしたか？



2.7 全4回の講義プログラムは適切でしたか？



2.8 またスクールに参加したいと思えますか？

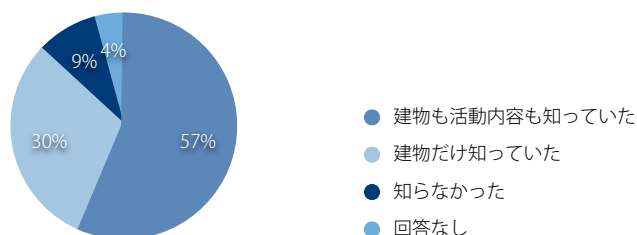


2.9 次はどのようなテーマ・内容の講義を期待しますか。

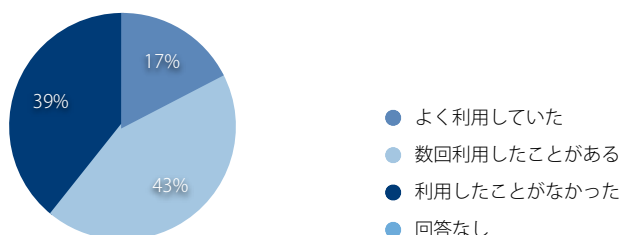
- ・コミュニティ
- ・都市計画
- ・基礎コースと応用コースにわけてほしい
- ・子育て支援について、子育てについて
- ・柏市全域をみつめて、柏の葉を見直すことについて
- ・省CO2のまちづくり
- ・不動産の売りは「便利さ」ではなく「コミュニティ」であることを解き明かす
- ・高齢化社会でいきていくには
- ・柏市が課題として考えているテーマを掘り下げて市役所の職員の方が情報共有できる内容を「市民科学」で！

3 UDCKについて これまでの認知や関わりについて

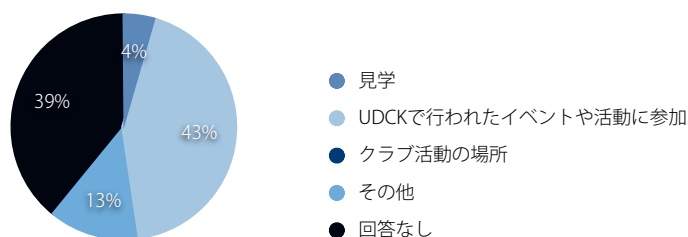
3.1 今回のプログラムに参加されるまでのUDCKの認知度について教えてください。



3.2 今回のプログラムに参加されるまでのUDCKの利用頻度について教えてください。



3.3 3.2で利用したことがあると答えた方は、利用目的を教えてください。

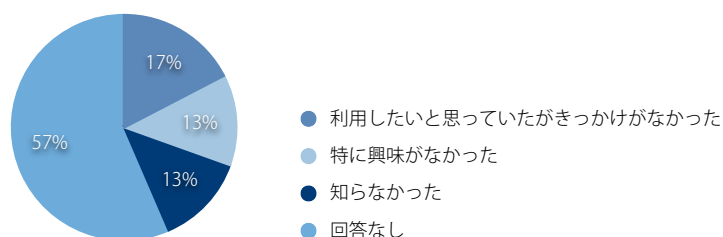


※その他：講習会場として利用

3.4 イベントやプログラムに参加された方は、覚えている範囲でイベント名や活動内容の記載をお願いします。

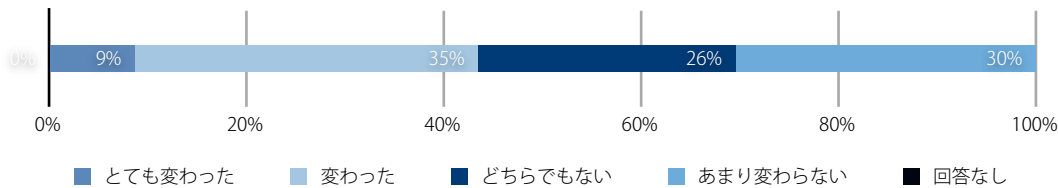
- ・過去のまちづくりスクール
- ・カレッジリンク
- ・当社から参画

3.5 3.2で「利用したことがない」と答えた方は、利用したいと思っていましたか？

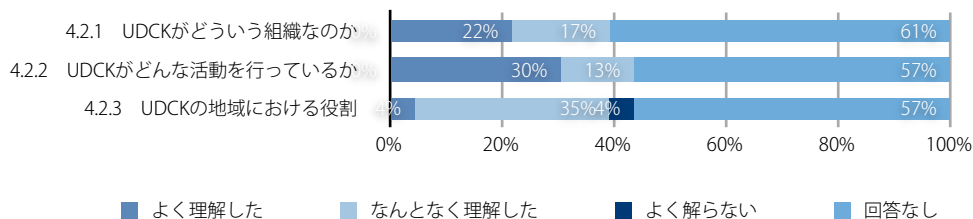


4 UDCKについて 印象、期待、感想など

4.1 今回のプログラム参加後、UDCKの認識が変わりましたか？



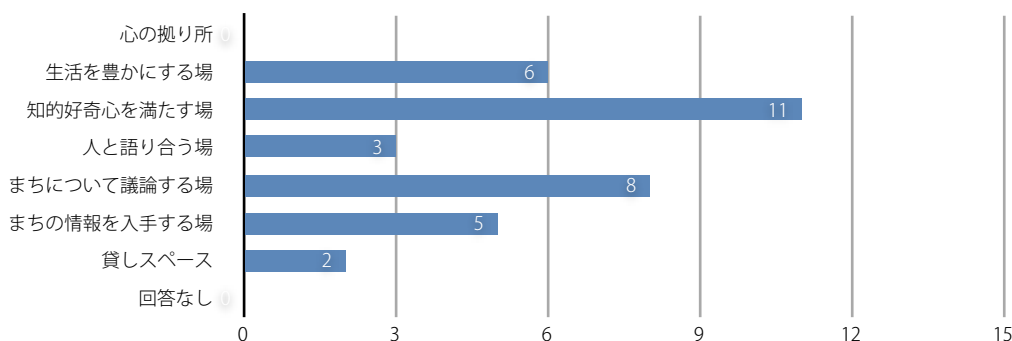
4.2 上の設問で、変わったと答えられた方は、どのように変わりましたか？



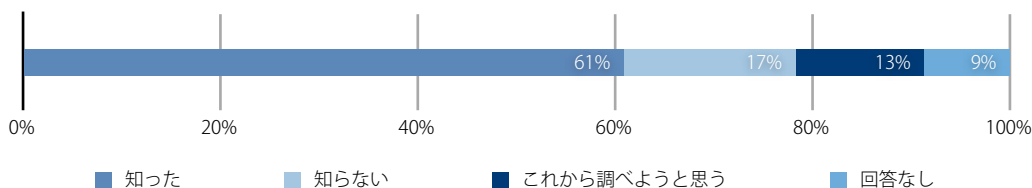
4.3 UDCKに期待する「あったらいいなあ・こうなればいいなあ」という機能はありますか？

- ・コミュニティオープンカフェ
- ・地域密着型
- ・普段の活動を映像や中継等でライブ感を出してほしい。コンテンツは東大・三井中心で
- ・小中高生へのまちづくりスクール
- ・柏の葉キャンパス周辺の住民活動のコーディネート
- ・旧住民も揺れ動かすような存在になってほしい
- ・もっと宣伝してほしい
- ・キャンパスが行く毎の具体的なまちづくり計画が見れるようにする、アップデートも含めて
- ・まちづくりに関係する人たちの交流の場（問題発見／問題解決）

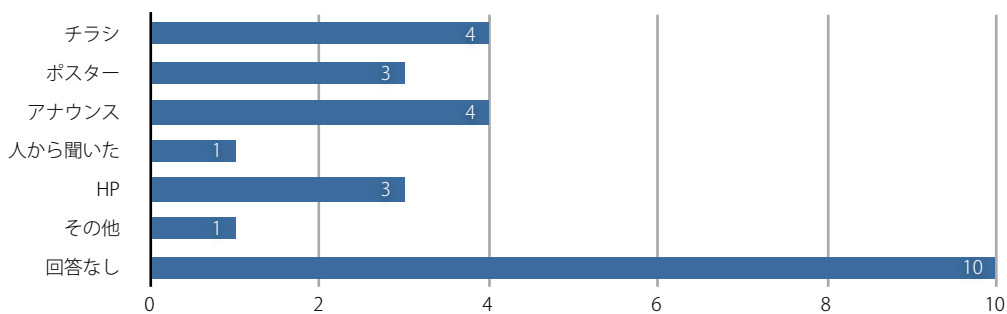
4.4 あなたにとってのUDCKのイメージはどのようなものですか？もっとも当てはまる2つに○をつけてください。



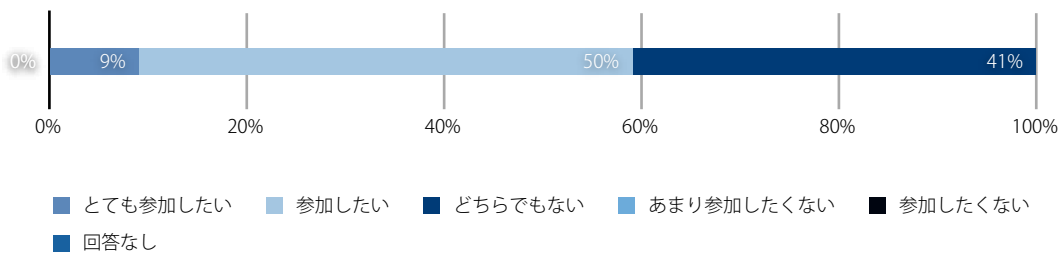
4.5 これをきっかけに、他のUDCKの活動を知りましたか？



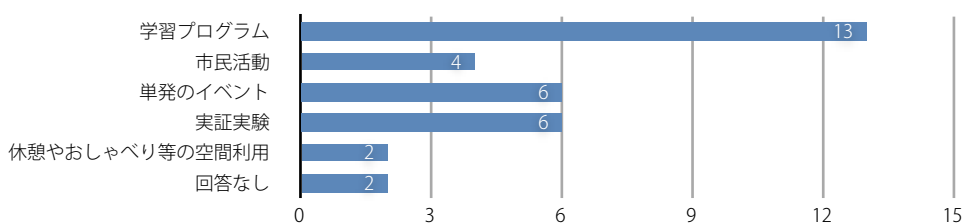
4.6 知ったと答えられた方は、何で知りましたか？



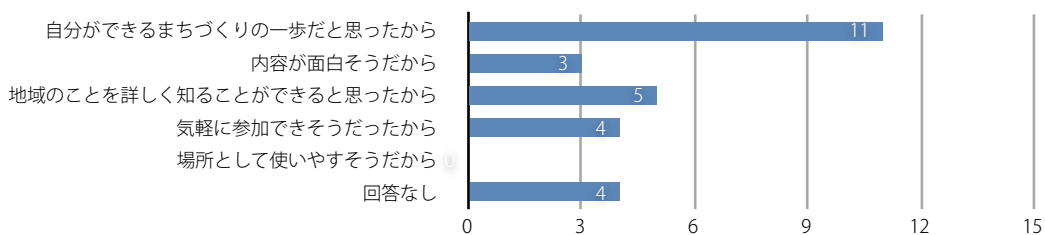
4.7 これをきっかけに、他のUDCKの活動に参加しようと思いましたか？



4.8 参加したいと思う項目があれば○をつけて下さい。

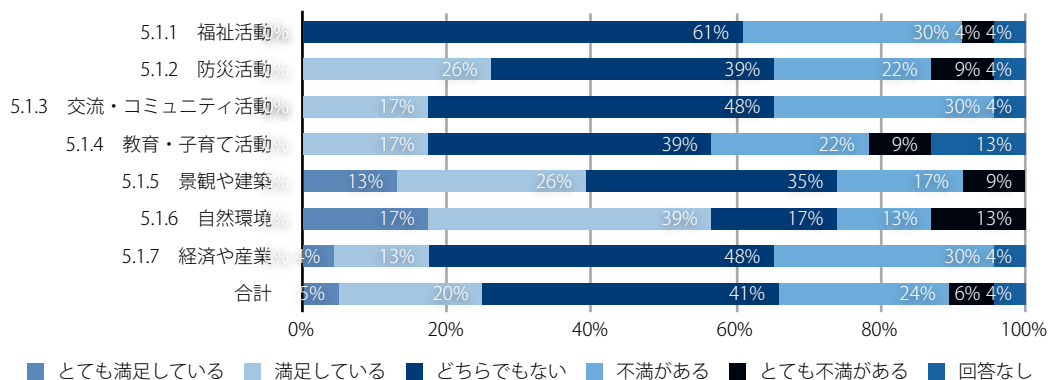


4.9 4.8で選択した理由

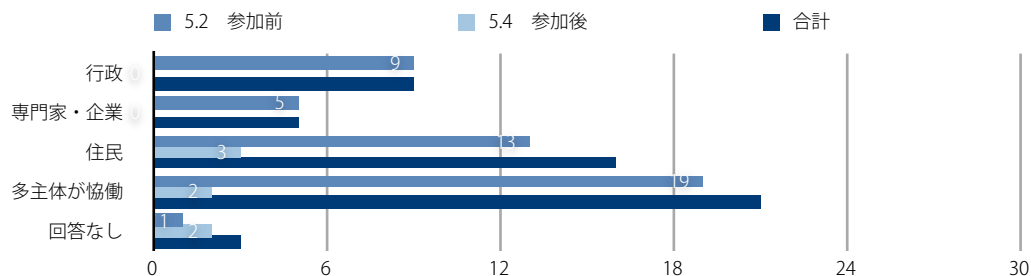


5 お住まいのまち、まちづくりについて

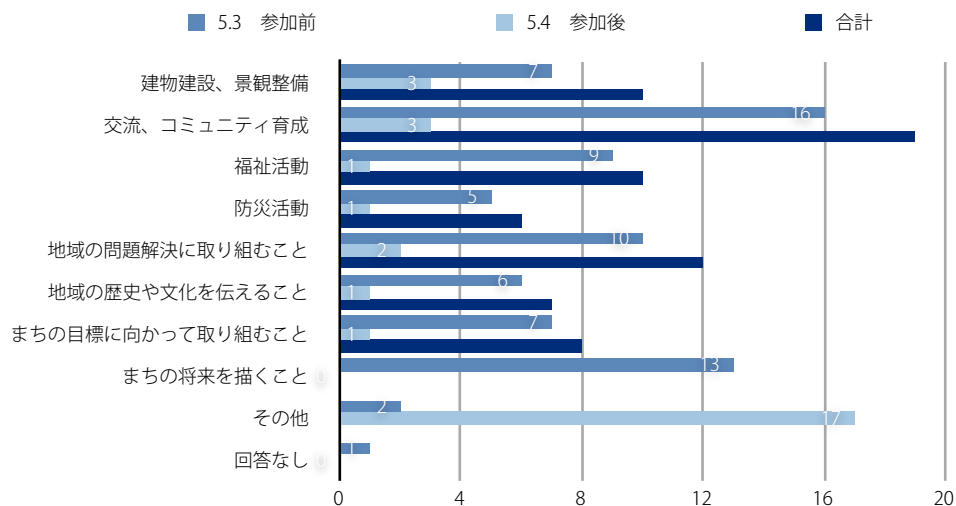
5.1 お住まいのまちの満足度について教えてください。



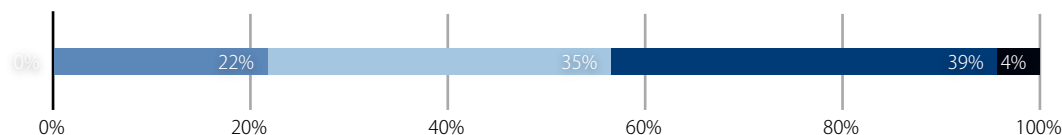
5.2 あなたの考える「まちづくり」の主体は誰ですか？該当するもの全てに○を付けてください。



5.3 あなたの考える「まちづくり」の定義はどのようなものですか？該当するもの全てに○を付けてください。

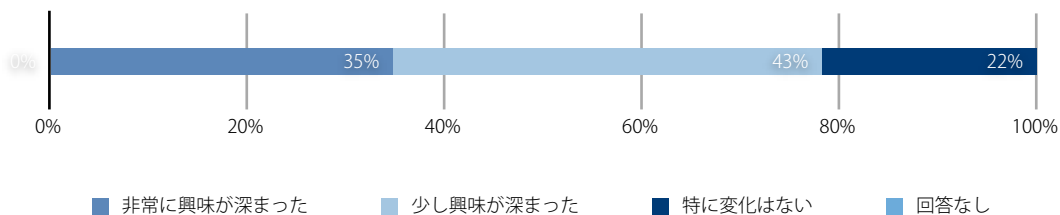


5.6 今回のプログラムに参加する前、あなたはどの程度、地域のまちづくりに関わっていると感じていましたか？

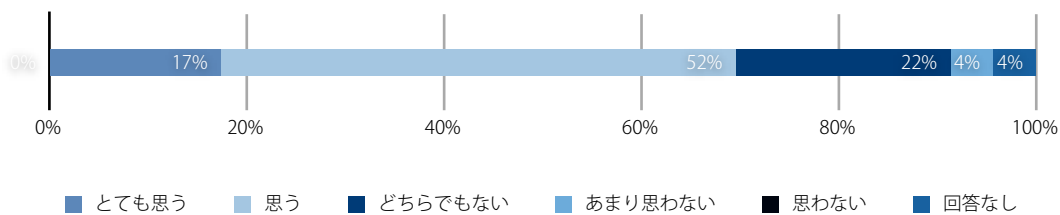


■ 非常に参画している ■ 何かしら関わっている ■ 興味はあるが関われなかった ■ 興味がない ■ 回答なし

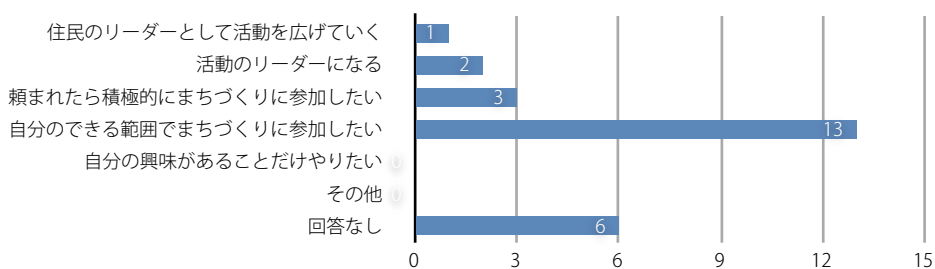
5.7 今回のプログラムへの参加を通じて、地域のまちづくりへの興味や意識は変化しましたか？



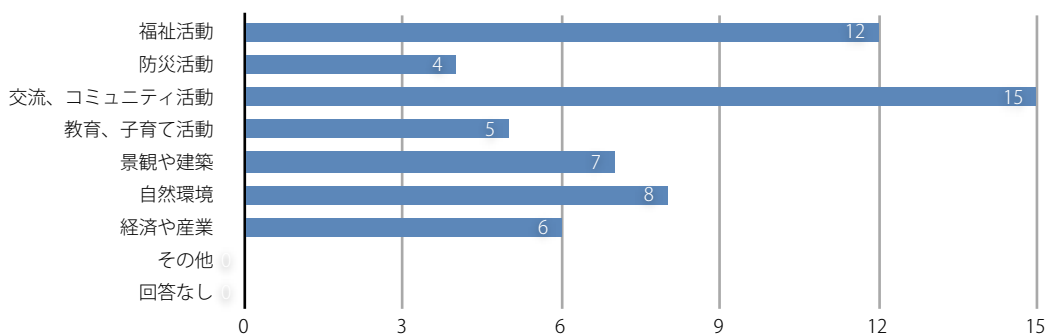
5.8 住民として何か主体的にまちづくり活動を行いたいと思いますか？



5.9 5.8で「思う」と答えた方はどういうことを行いたいと思いますか？



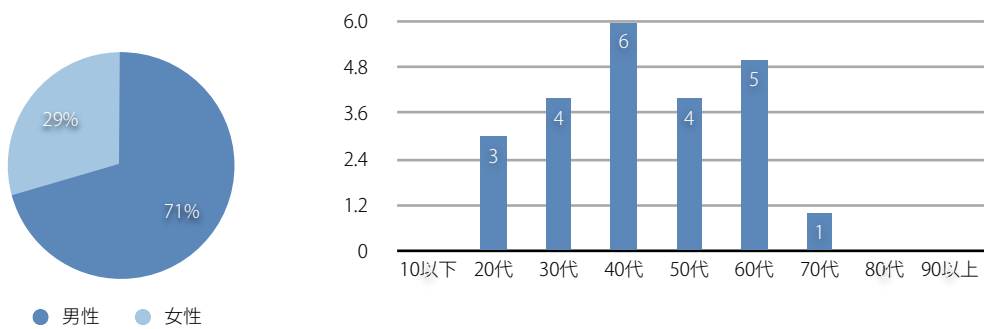
5.10 まちづくりのどのような分野に興味がありますか？



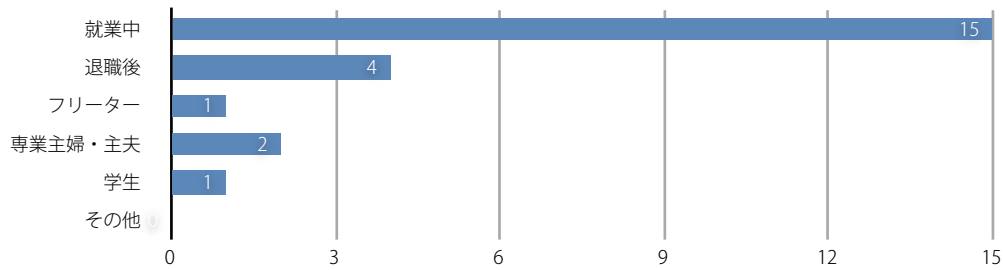
6 最後に ご自身について教えてください

6.1 お名前 () (差し支えなければご記入ください)

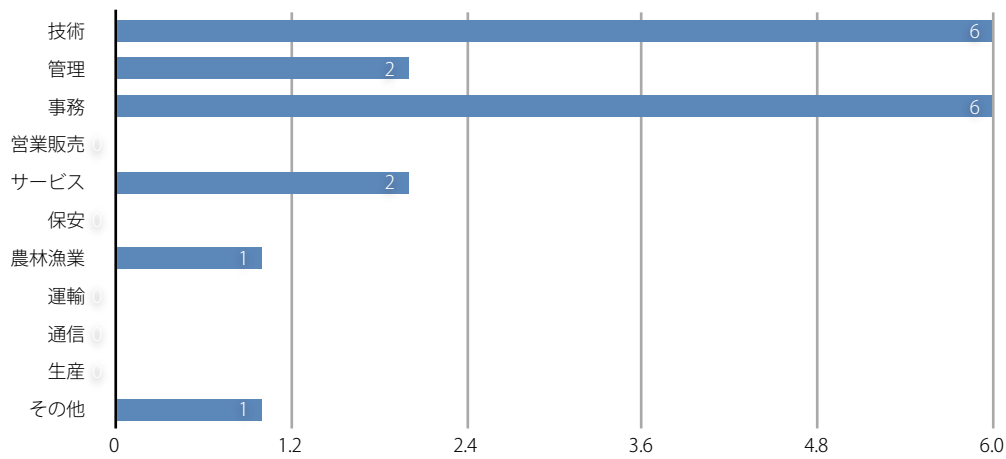
6.後で追加 性別 6.2 年齢



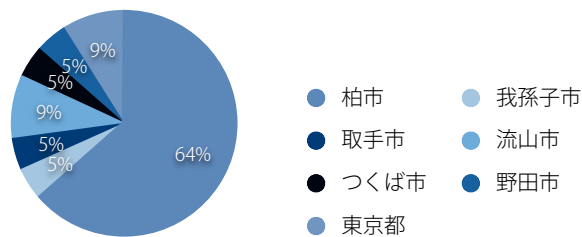
6.3 就業状況について



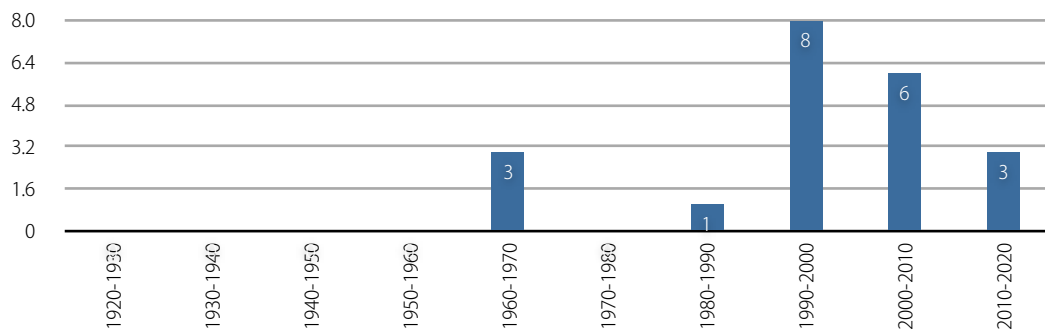
6.4 ご職業の職種 ※その他の方は簡単に記入ください



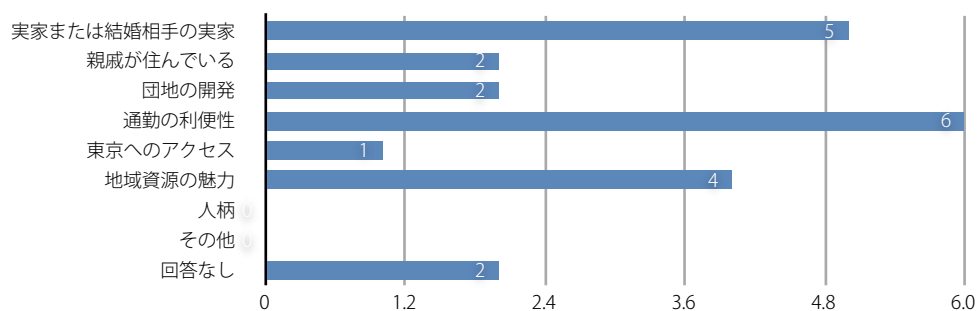
6.5 住んでいる地域 (例：柏市若柴)



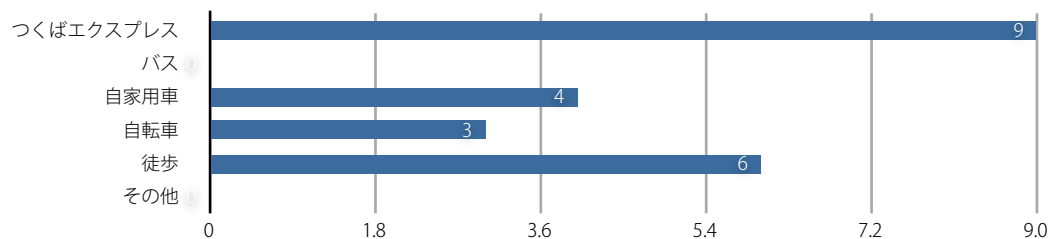
6.6 いつ頃からお住まいですか？



6.7 今の地域にお住まいの理由で最も当てはまるものは何ですか？



6.8 UDCKまでの交通手段と時間



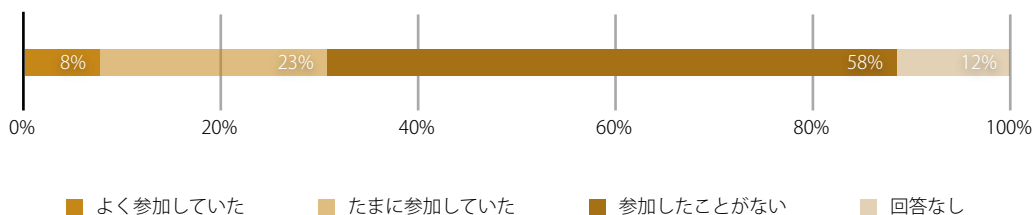
5.9 まちづくりに対する自身の考えやまちづくりスクールの感想など自由に書いて下さい。

<p>スクールの司会は例えば最後の質問をつる場合、単純に「質問はありますか？」ではなく、講義を一端受けて自分で咀嚼して（うそも良いから）簡潔にまとめてから質問をふるべきではないでしょうか。それにはコーディネート力とか力量が問われるとは思いますが。</p>
<p>元々学生時代よりまちづくりに興味があり、それで学問とする学部へ進学し、現在に至っています。ただ、入社後はまちづくりにほど遠い業務をこなし、学生時代に培った熱意が切れかかっていました。しかし、幸い、新規事業等を立ち上げる企画部門に配属され、今再び様々なことを学びつつ、ここで学んだ事を少しでも生かせるように頑張りたいと思っていますところであり。また今後時間が合えば、まちづくりスクールに参加させて頂きたいと思っておりますので、宜しくお願いします。</p>
<p>自主的にまちづくりに具体的に参加することはなかなか難しいと思っております。</p>
<p>もうちょっと深い話を聞き出してほしい（テーマに沿った概要・活動紹介だけでは既に知っている人にとってはおもしろくない） 知識を得るのではなく、考えさせるテーマ、話ができる人選をしてほしい</p>
<p>今回は4回通じて講師が良かったです。たくさん気づくことができました。家を住み替えていく（ライフスタイルとともに）発想は全く持っておらず、でもやはり愛着もあるので、住み続けたい気持ちもあります。そこを両立させていく道も考えられたらと思います。</p>
<p>行政による規制誘導の不用なまちになっていただきたい（究極の理想）</p>
<p>まちづくりスクールはどんどん展開して下さい。そしてなるべく研究者以外の方を講師に招いてくれることを期待しています。東葛地域で活動されている建築設計者や建設業者たちの話も聞きたいです。 レイソルやまちづくり的なことに関わっていると、「柏が好きなんです」と言われますが、好きか嫌いかなどという軽い気持ちではありません。ここで自分の子どもを育てないといけませんし、自分たちがおそらくここで死んでいくわけなので、ちょっとでも自分たちが楽しくなるためのあがきなのだと思います。</p>
<p>柏の葉キャンパス駅周辺だけではなく、柏駅周辺で行うイベント（まちづくりスクール）を実施することで、参加者の確保ができると思います。（スクーリングを事業として成立させられるのではないかと思います）</p>
<p>便利さだけで評価されていた住宅地の地価に代わって、「人のつながり度」が評価されるようになるかもしれない。そうあってほしいとの気持ちもあります。今回は「高齢化」というキーワードがつけばどのような講座でも参加するつもりでした。新聞、テレビで話題にはなりますが、自分の問題としてどうなのか、考える機会がほしかったからです。「エンディング・ノート」なんかテーマとして考えられませんか？</p>
<p>色々な人があたり前に交流できるところが良いと思います。この柏の葉にある広い土地に児童センター、高齢者施設、障害者施設、勤労の場、畑、ピオトープなどが展開するような夢を描いています。実際には無理とわかっていても、とりあえず発信することが大切かと思って、声を大にして夢を掲げています。</p>
<p>地域活動や取り組みについて知らない人が多いと思います。もっと情報発信していったらより活発化するのではないのでしょうか。この地域には優秀な人材がたくさんいらっしゃいます。宣伝・アピールの方法を考えて積極的に人々に知らせる方が良いと思います。 今回の講義は数字や統計がよく出て具体的に色々なものを考えることができると感じました。残念なのは具体的な成功例がなかったことです。まだまだ成功例がないのでしょね。</p>
<p>まちづくりへの考え方、スクールへの参加も今回は初めての経験であるため、これから色々考えていきたいです。来年60歳を迎え、少しの間現在の会社に勤務を続ける予定ですが、この先の自身の生き方について前向きに取り組んでいきたいです。これからもスケジュールが合えばスクールに積極的に参加していきたいと考えております。</p>
<ul style="list-style-type: none"> ・3世代が住めるまちづくり ・高齢者が住みやすい環境づくり ・子育てがしやすい社会環境づくり <p>この3点がまちづくりの基本あと考えている。幸いに地元大学、UDCKが熱心なので、先進的なまちづくりが期待できる</p>
<p>住民の一人として老年になっても少しでも社会の中で役に立てればと思うが、まだ隣人親しくなれる段階に至っていない</p>

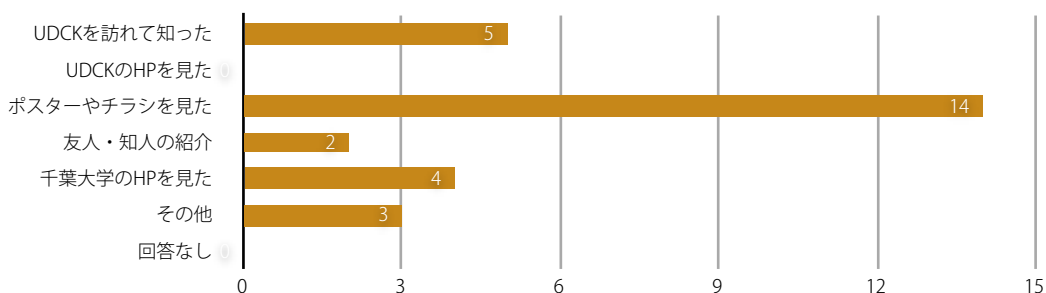
カレッジリンク集計

1 カレッジリンクについて 参加のきっかけ等

1.1 これまでにカレッジリンク以外で行っているまちづくり活動などに参加したことはありますか？

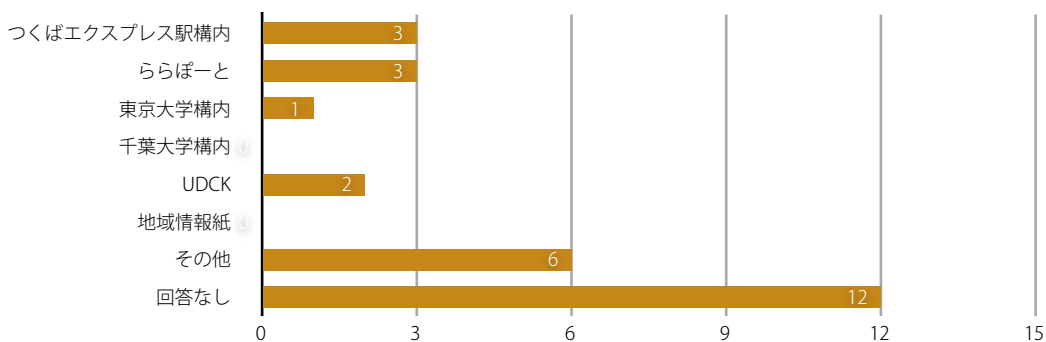


1.2 カレッジリンクを知った理由



※その他：パルシステムの紹介

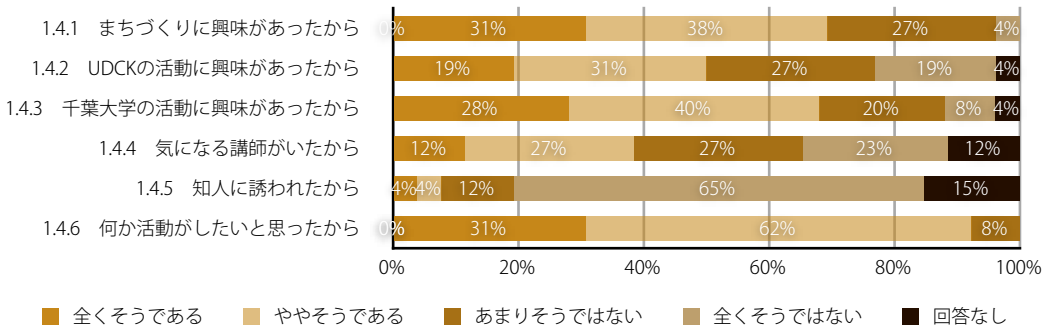
1.3 1.2で「ポスターやチラシを見た」という人はどこで見ましたか？



※その他 ・柏市 ・柏の葉パークシティ内

1.4 参加しようと思ったきっかけ

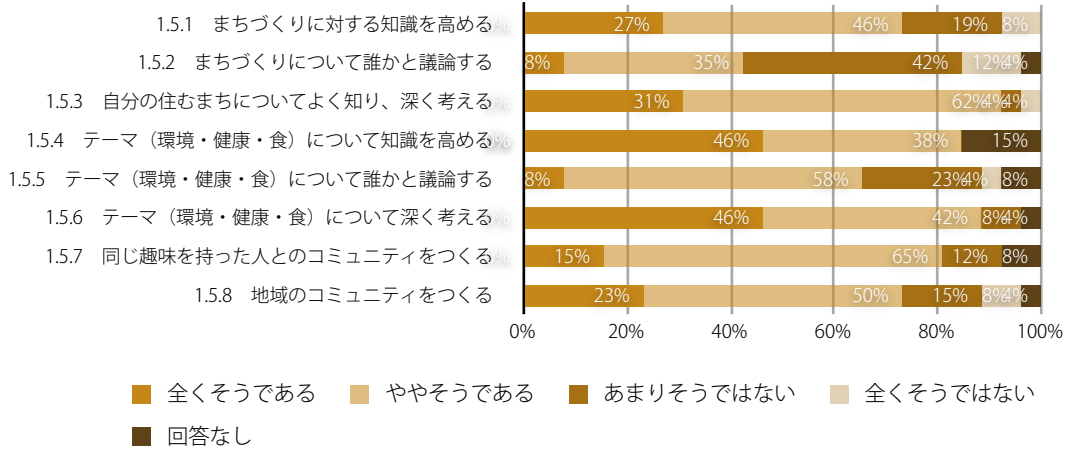
1.4.1 まちづくりに興味があったから



1.4.7 その他にあれば書いて下さい

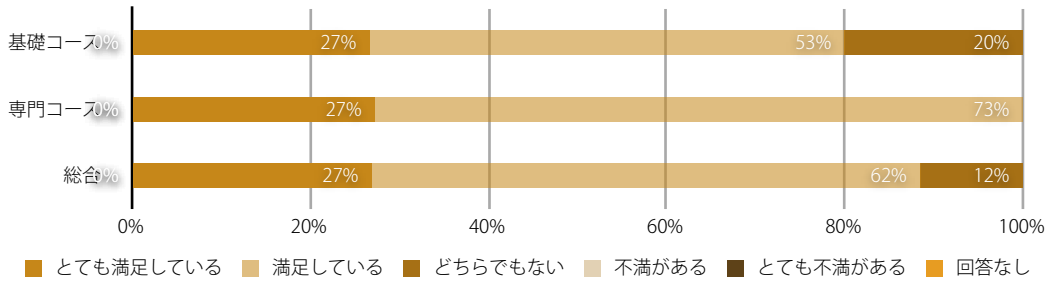
- ・ 地域に溶け込まなくてはという想いから
- ・ 自分にはない世界に触れて刺激を受けたいと思ったから
- ・ 興味のあるテーマがあったから
- ・ 楽しそうだったから

1.5 参加の目的

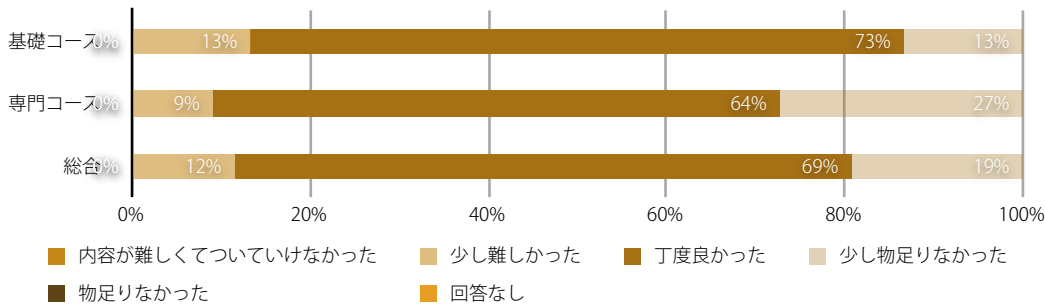


2 カレッジリンク ご感想

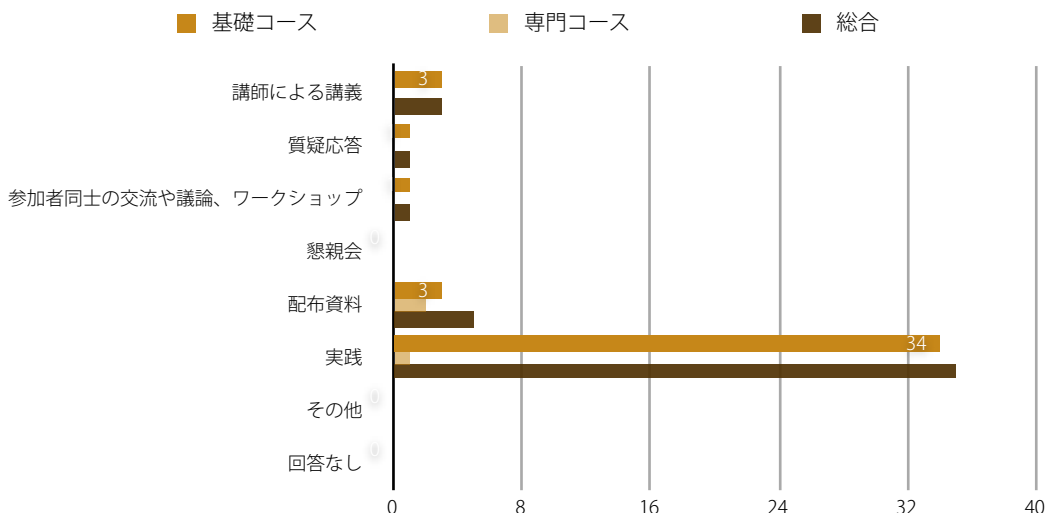
2.1 2.7 参加した感想について教えてください。



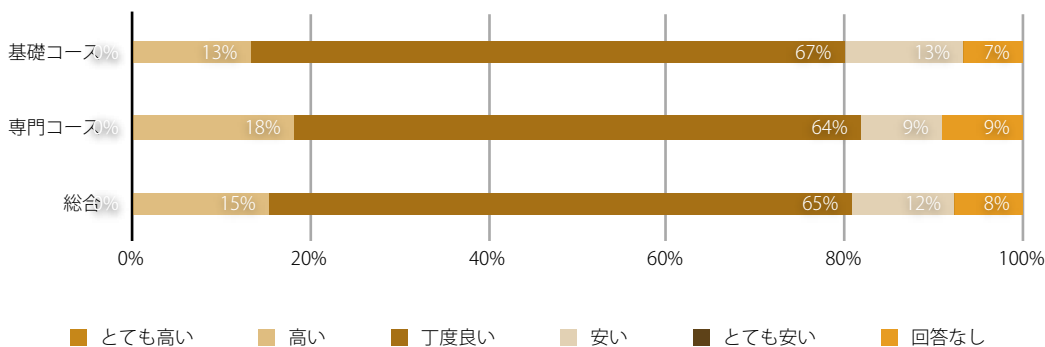
2.2 2.8 講義内容について教えてください。



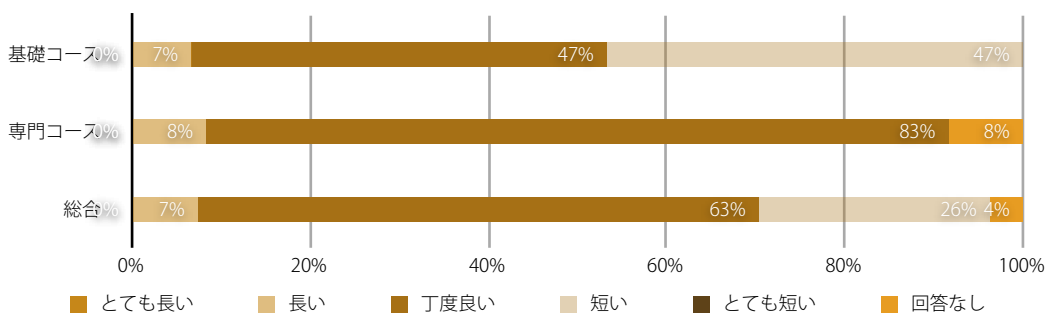
2.3 2.9 参加して一番面白かった・興味を持ったものについて教えてください。



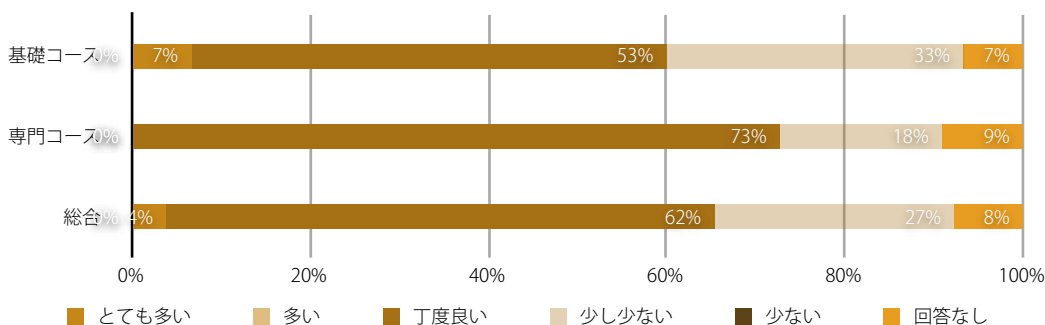
2.4 2.10 参加費は適切でしたか？



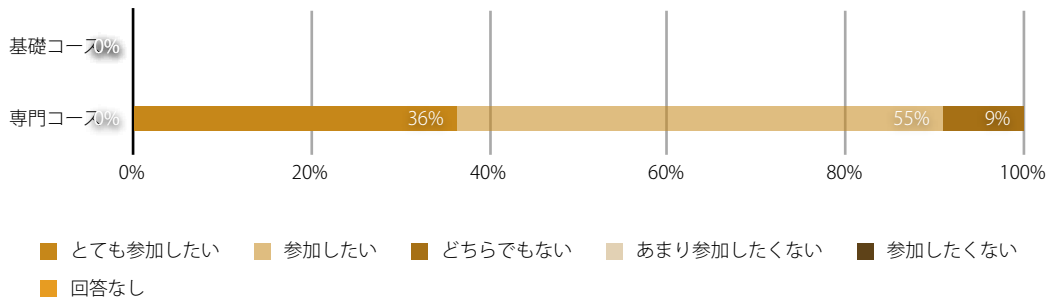
2.5 2.11 1回の講義時間は適切でしたか？



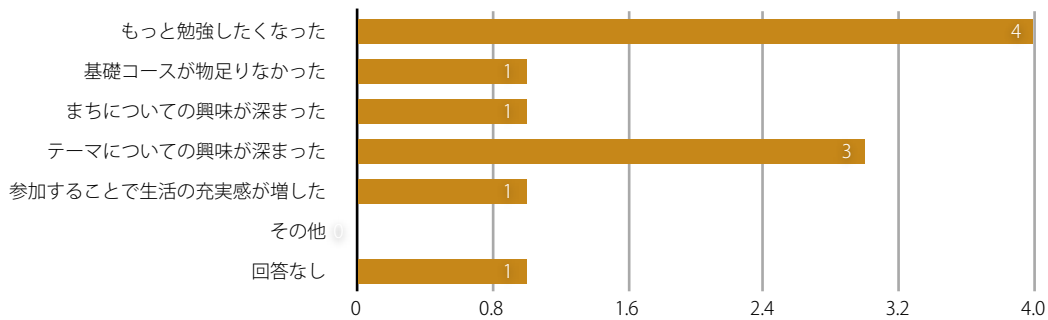
2.6 2.12 全4~6回の講義プログラムは適切でしたか？



2.13 またカレッジリンクに参加したいと思いますか？



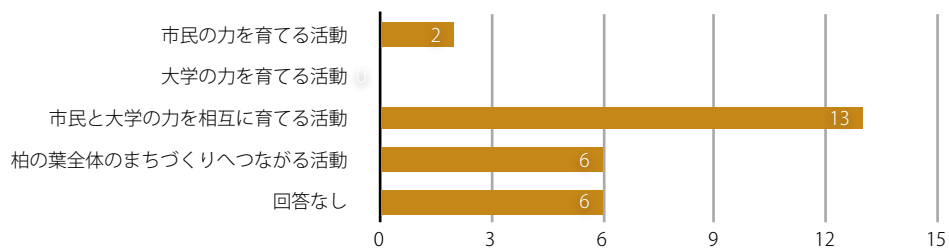
2.14 どうして専門コースを履修しようと思いましたか？（専門コース）



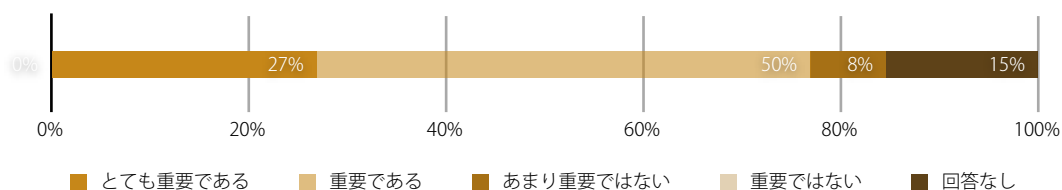
2.15 次はどのようなテーマ・内容の講義を期待しますか？

- ・ 環境倫理
- ・ 文化、歴史
- ・ 右脳、感性、発想、コミュニケーション
- ・ 一つのテーマをもっと深く続けて下さると嬉しいです
- ・ 「もしもドラえもんがいたら」の発想を活かすとどういう展開になるか
- ・ 現在を考える上で参考になるテーマ、視点
- ・ 健康の分野を掘り下げた専門的なもの
- ・ 知識をどう活かすかについて
- ・ 東洋医学薬膳
- ・ コミュニケーションの手段について
- ・ 健康
- ・ 市民園芸に関するもの

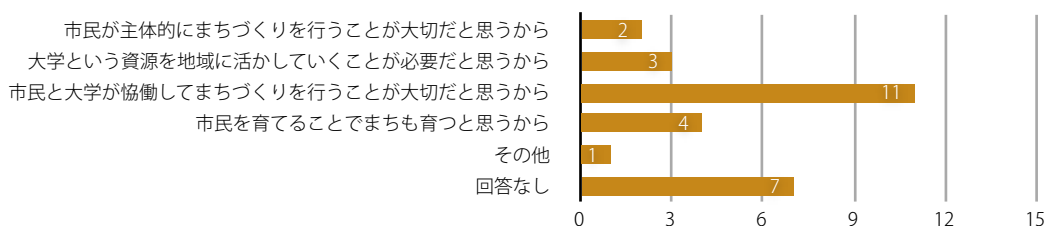
2.16 カレッジリンクの活動が柏の葉のまちづくりの中でどのような役割を担っていると思いますか？



2.17 カレッジリンクの活動の柏の葉のまちづくりの中における重要性についてどのように考えていますか？

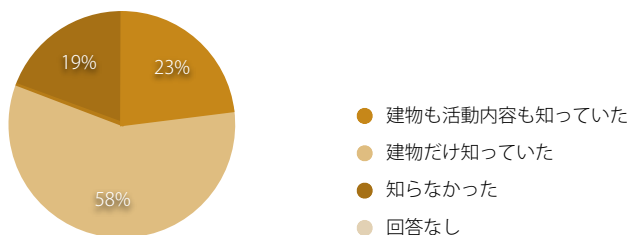


2.18 2.17で「とても重要である、重要である」と答えた方はどうしてそう思いますか？

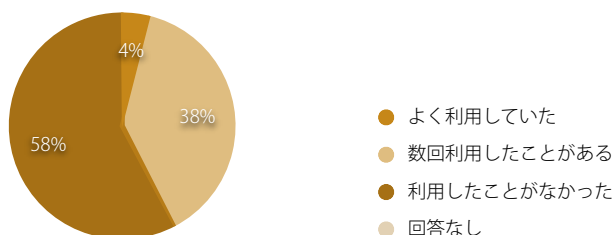


3 UDCKについて これまでの認知や関わりについて

3.1 カレッジリンクに参加されるまでのUDCKの認知度について教えてください。



3.2 カレッジリンクに参加されるまでのUDCKの利用頻度について教えてください。



3.3 3.2で利用したことがあると答えた方は、利用目的を教えてください。

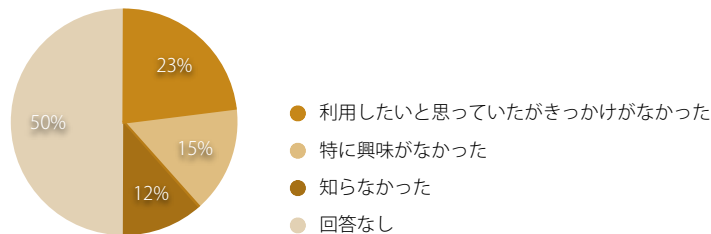


※その他：講習会場として利用

3.4 イベントやプログラムに参加された方は、覚えている範囲でイベント名や活動内容の記載をお願いします。

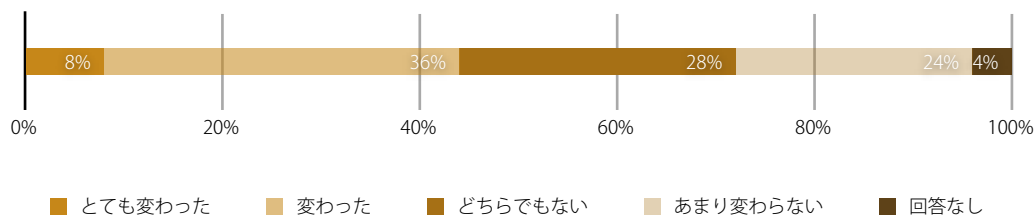
ピノキオプロジェクト・マルシェ・はちみつプロジェクト・かしはなプロジェクト・ゴミゼロ運動・まちのクラブ活動・マチの先生・ビーチボールクラブ・ハロウィンパーティ・ピアフェスタ・まちづくりスクール

3.5 3.2で「利用したことがない」と答えた方は、利用したいと思っていましたか？



4 UDCKについて 印象、期待、感想など

4.1 カレッジリンクへの参加後、UDCKの認識が変わりましたか？



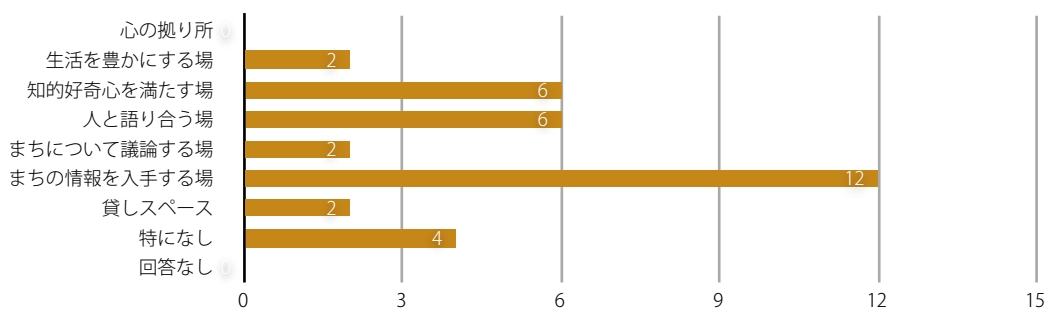
4.2 上の設問で、変わったと答えられた方は、どのように変わりましたか？

- ・身近になった、いつれ参加したいと思う様になった
- ・柏の葉地域での有効性
- ・身近で自分も参加できると思った
- ・予想以上に語○的なのは驚き
- ・そんなものがあるんだなあと思った
- ・存在を知った
- ・活動内容が知らなかったということがあがるが、話を聞いてみ身近に感じる様になったこと
- ・よい方向

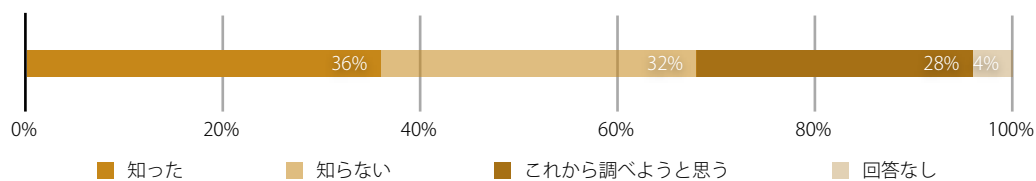
4.3 UDCKに期待する「あったらいいなあ・こうなればいいなあ」という機能はありますか？

- ・部屋を他の活動にも開放してほしい
- ・バーベキュー
- ・新しいまちづくりの意欲が感じられる
- ・何かあったら利用したい
- ・アート・デザイン系のイベント
- ・図書館の開放
- ・未だに本質的な意義を理解していない

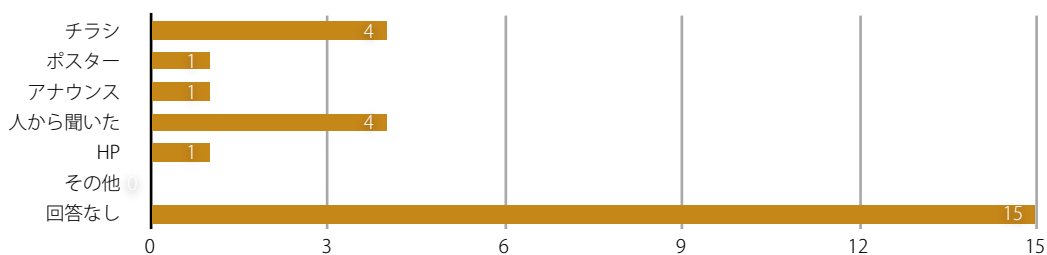
4.4 あなたにとってのUDCKのイメージはどのようなものですか？もっとも当てはまる2つに○をつけてください。



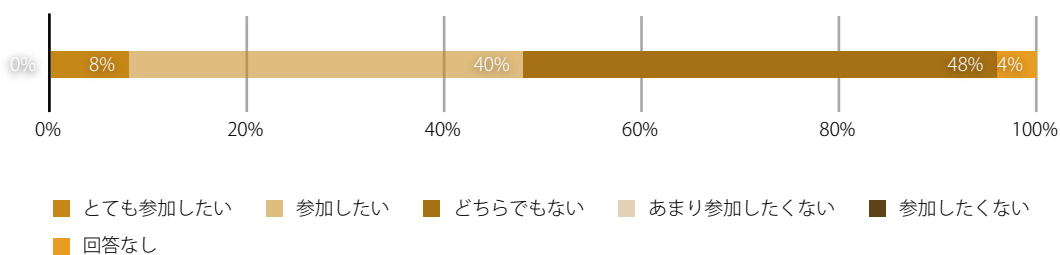
4.5 カレッジリンクへの参加をきっかけに、他のUDCKの活動を知りましたか？



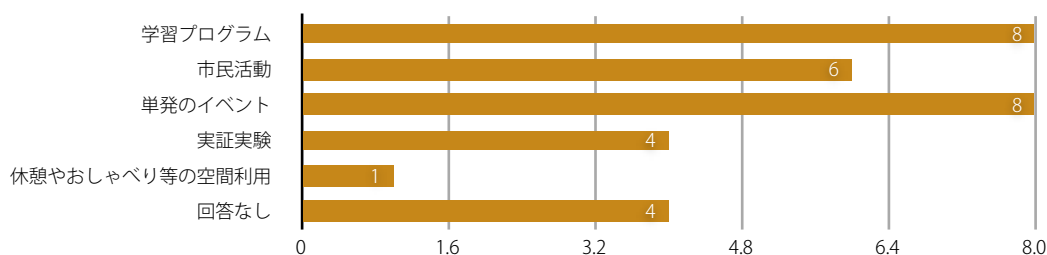
4.6 知ったと答えられた方は、何で知りましたか？



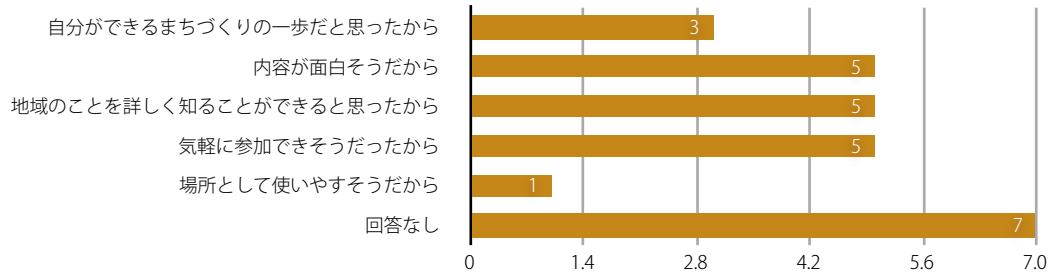
4.7 カレッジリンクへの参加をきっかけに、他のUDCKの活動に参加しようと思いましたが？



4.8 参加したいと思う項目があれば○をつけて下さい。

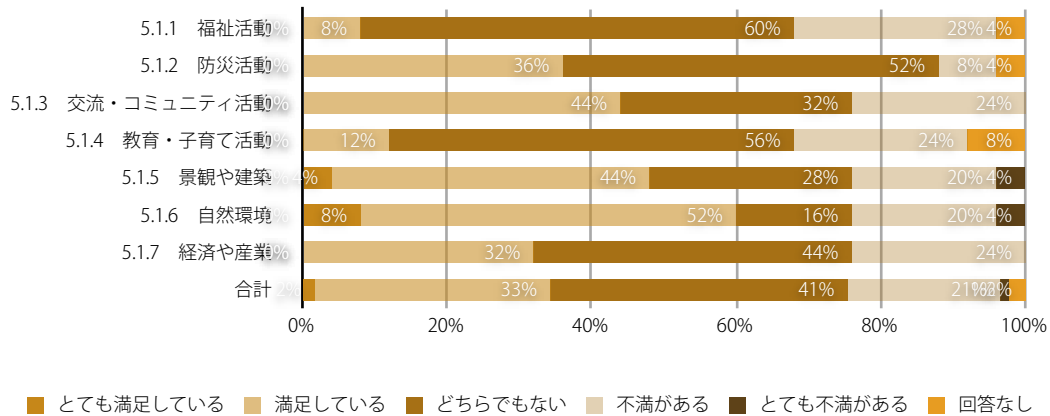


4.9 4.8で選択した理由

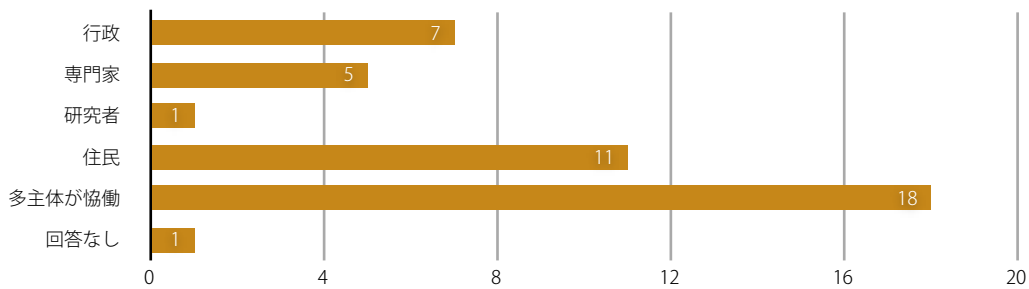


5 お住まいのまち、まちづくりについて

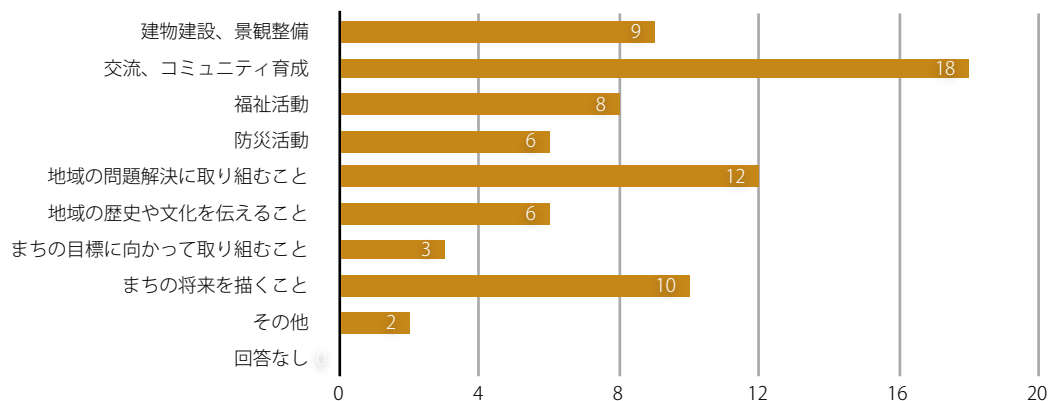
5.1 お住まいのまちの満足度について教えてください。



5.2 あなたの考える「まちづくり」の主体は誰ですか？該当するもの全てに○を付けてください。

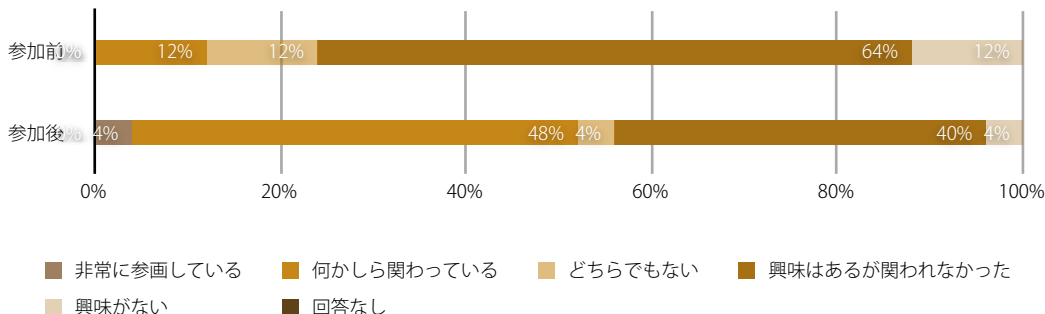


5.3 あなたの考える「まちづくり」の定義はどのようなものですか？該当するもの全てに○を付けてください。

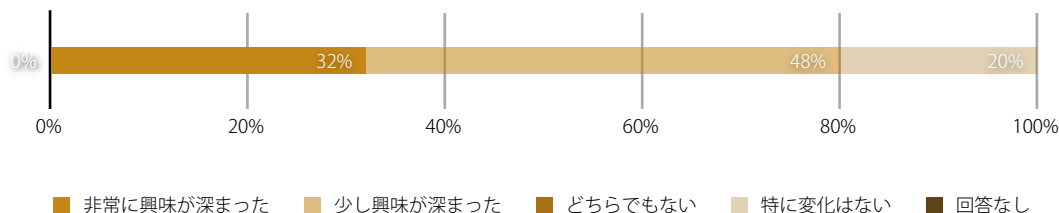


5.4 カレッジリンクに参加する前、あなたはどの程度、地域のまちづくりに関わっていると感じていましたか？

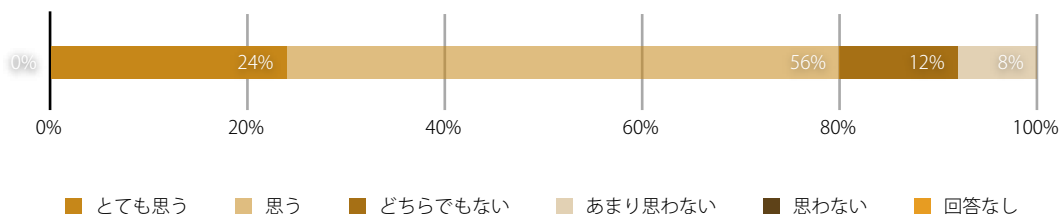
5.5 カレッジリンクに参加した後、あなたはどの程度、地域のまちづくりに関わっていると感じていますか？



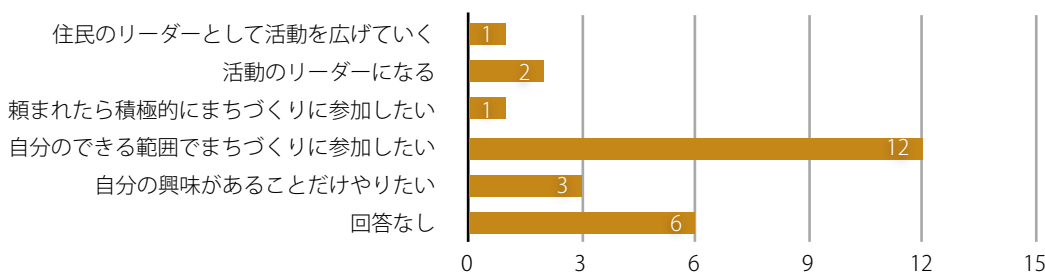
5.6 カレッジリンクへの参加を通じて、地域のまちづくりへの興味や意識は変化しましたか？



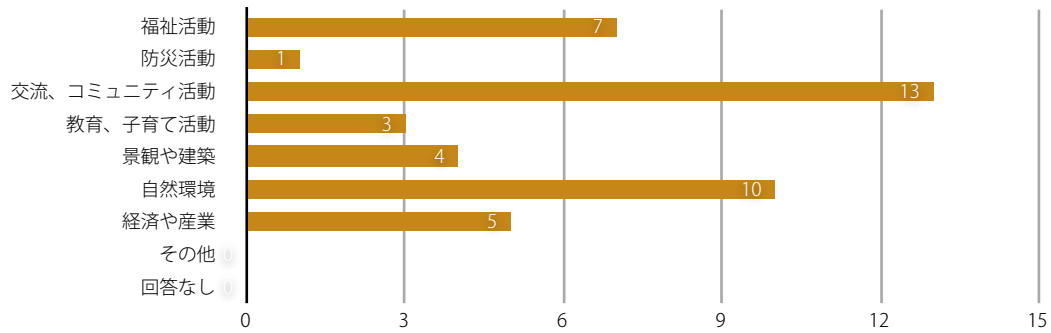
5.7 住民として何か主体的にまちづくり活動を行いたいと思いますか？



5.8 5.7で「とても思う、思う」と答えた方はどういうことを行いたいと思いますか？



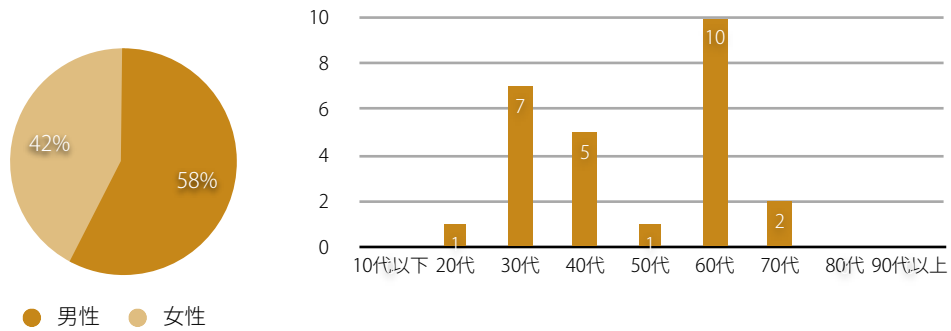
5.9 まちづくりのどのような分野に興味がありますか？



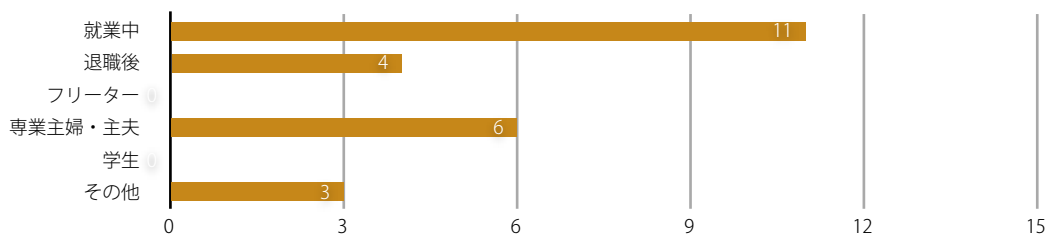
6 最後に ご自身について教えてください

6.1 お名前 () (差し支えなければご記入ください)

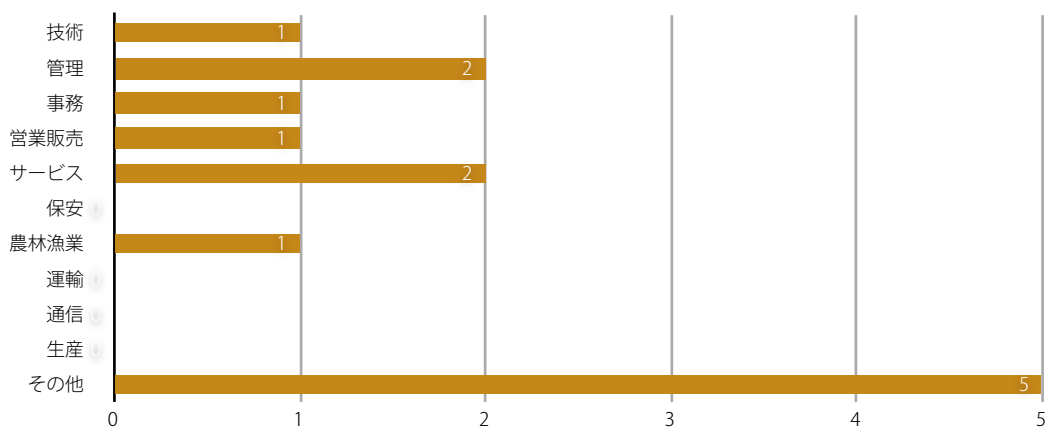
6.2 性別 年齢



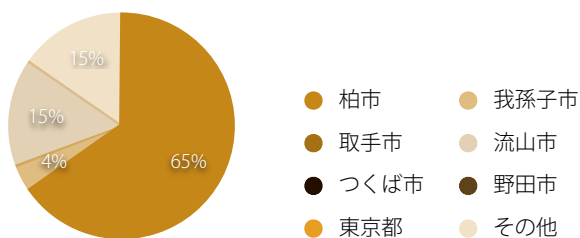
6.3 就業状況について



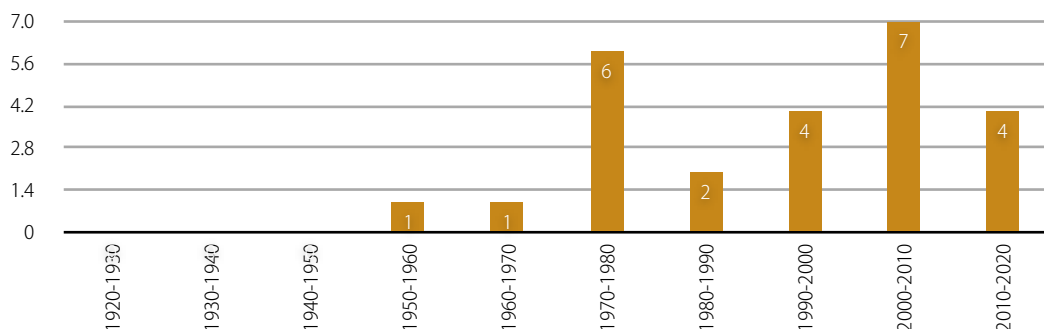
6.4 ご職業の職種 ※その他の方は簡単に記入ください



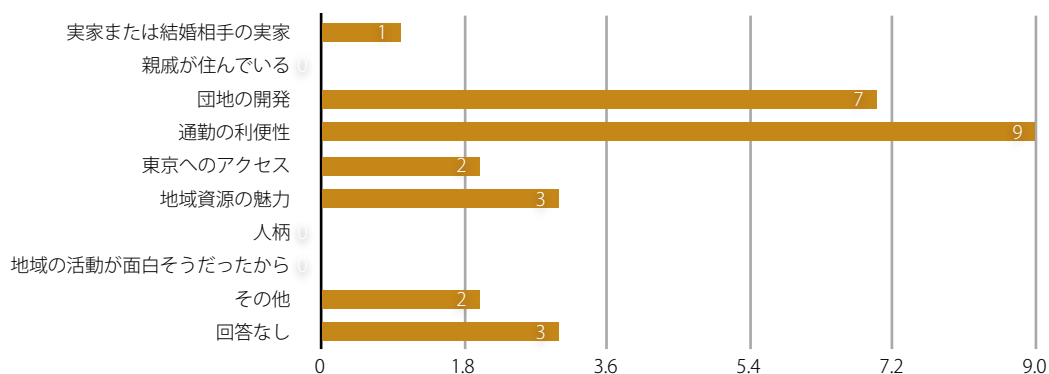
6.5 住んでいる地域 (例：柏市若柴)



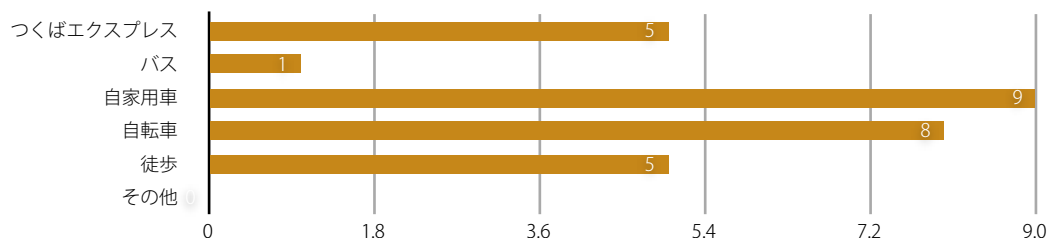
6.6 いつ頃からお住まいですか？



6.7 今の地域にお住まいの理由で最も当てはまるものは何ですか？



6.8 UDCKまでの交通手段と時間



5.9 まちづくりに対する自身の考えやカレッジリンクの感想など自由に書いて下さい。

参加したい気持ちはありますが、仕事やタイミングでなかなか参加できないことが多いです。土日はできる範囲で関わりたいという気持ちはあります。平日のものに参加できないのが残念です。

カレッジリンクに参加して「学ぶ」ことの楽しさを再確認しています。「テーマ」を深く掘り下げることも新鮮。

「市民科学」という枠組みでどこまで迫れるものか、これからこのような機会を利用して前向きに考えてゆきたい。

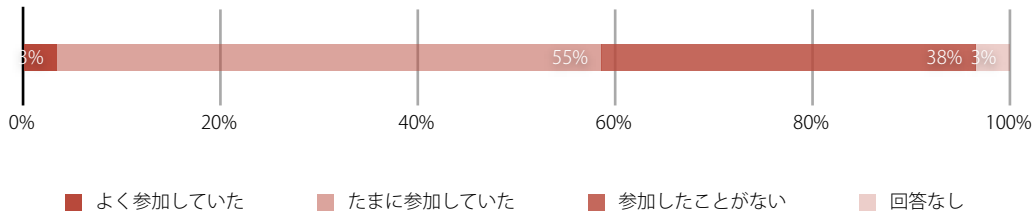
まちづくりと同時に交通ルール、まちの条例などの遵守の教育、指導、ルール違反等の実施を併行して進めるべき。

カレッジリンクに参加してまだ間もないですが、まず「知る」ことからまちづくりは始まるのかなと思いました。興味を持ったり、知ることだけでもまちづくりの一端を担えると感じました。

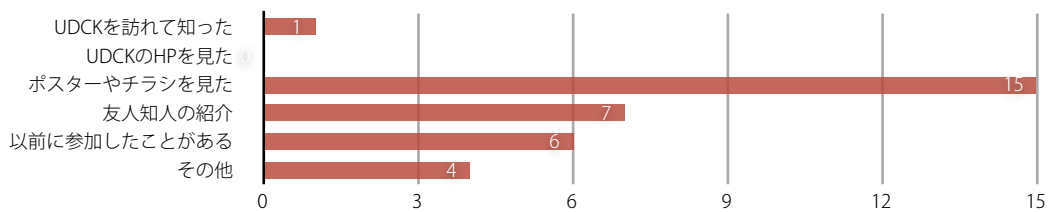
ピノキオプロジェクト分析

1 ピノキオプロジェクトについて 参加のきっかけ等

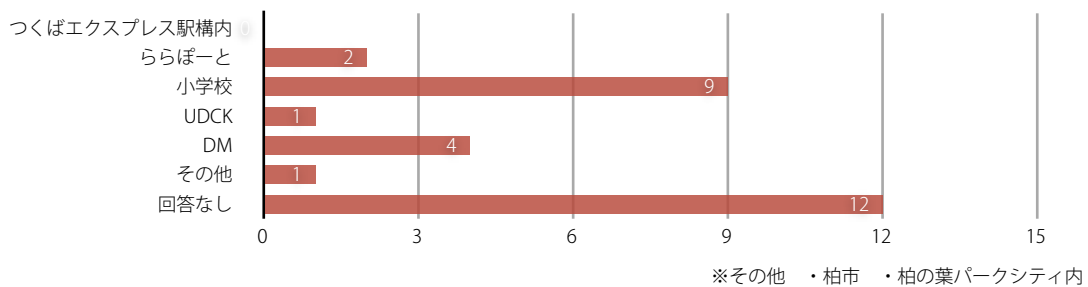
1.1 これまでにUDCK以外で行っている教育系の活動などに参加したことはありますか？



1.2 ピノキオプロジェクトを知った理由

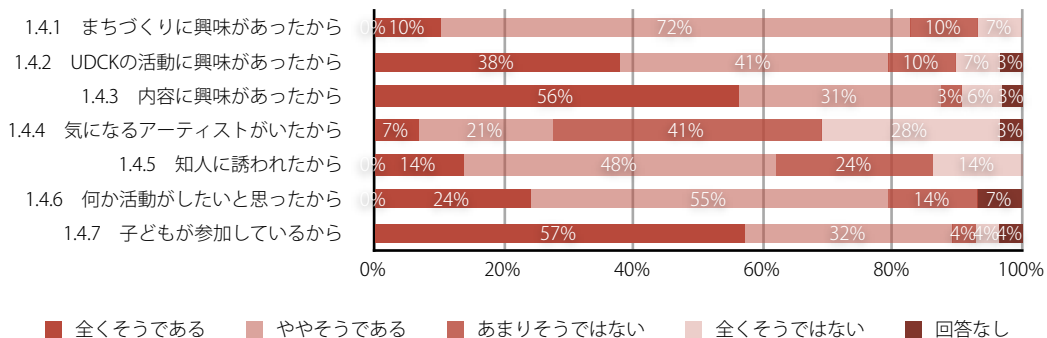


1.3 1.2で「ポスターやチラシを見た」という人はどこで見ましたか？



1.4 参加しようと思ったきっかけ

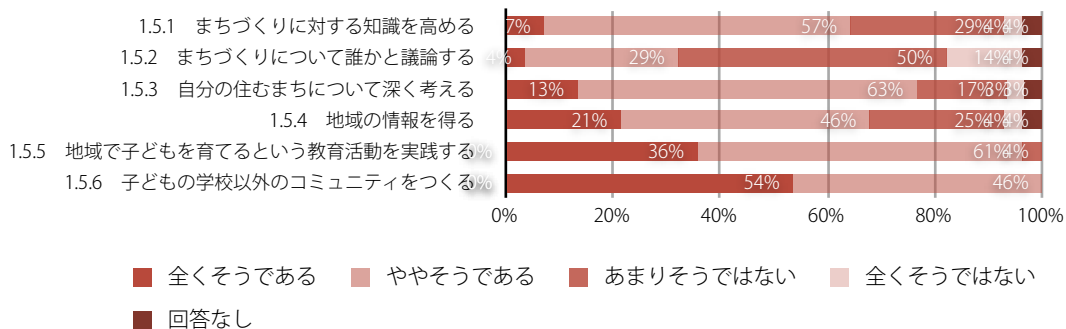
1.4.1 まちづくりに興味があったから



1.4.8 その他にあれば書いて下さい

- ・子どもと親で楽しめる企画があって良いです。
- ・こどもが楽しみにしている
- ・アート系子どもワークショップで子どもがつくるまちというコンセプトがとても面白いと思ったので。
- ・子どもにも考えさせ、行動できる様になってもらいたいと思った
- ・最近柏の葉に引っ越してきたので、友人を作りたかったのと、地域の事が知りたかった

1.5 参加の目的

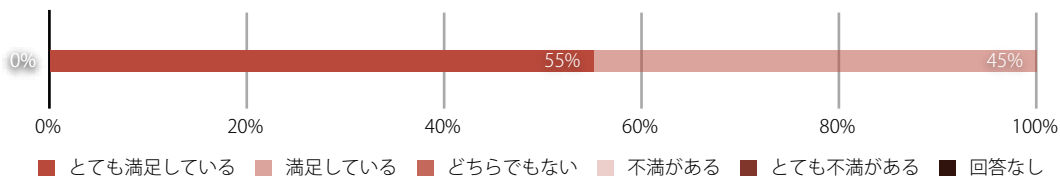


1.5.7 その他

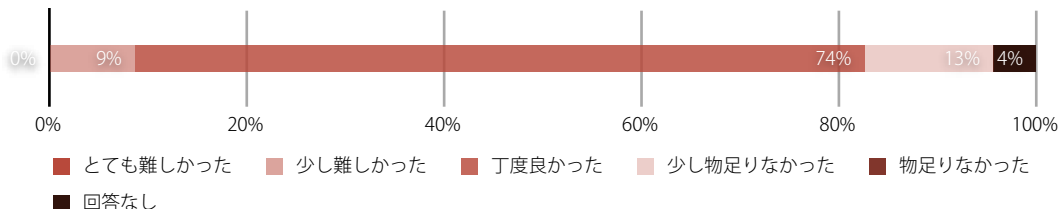
・子どもにとっても自分にとっても貴重な体験になると思ったので

2 まちづくりスクール ご感想

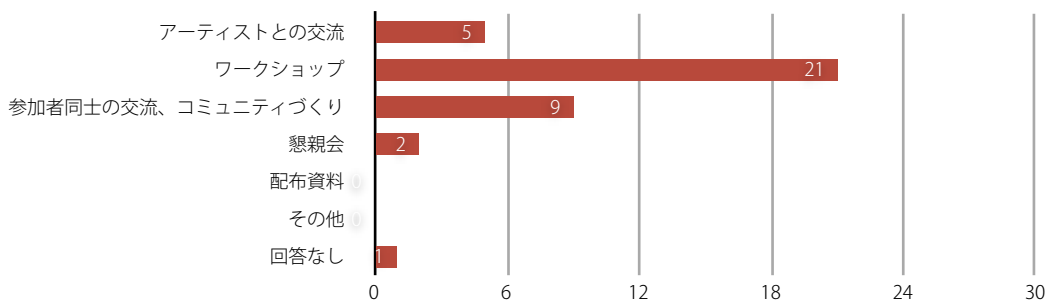
2.1 参加した感想について教えてください。



2.2 活動内容について教えてください。



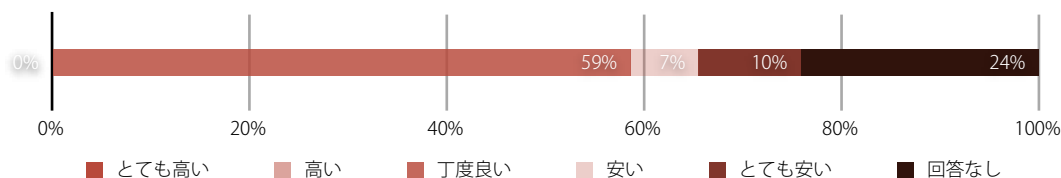
2.3 参加して一番面白かった・興味を持ったものについて教えてください。



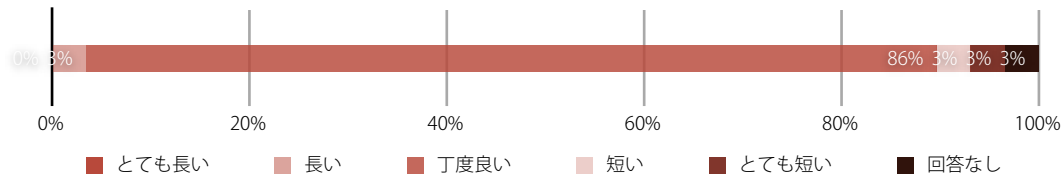
2.4 あなたが特に興味を持った内容について具体的に教えてください。

- ・ものづくり
- ・準備、ワークショップ、当日の運営
- ・ワークショップ体験も興味がありましたが、製作が一番です。
- ・ピンボールカメラづくり
- ・ららぽーと内に子どもがまちをつくること。
- ・子どもが考え、実践するのを共に歩む一分一秒どれもこれも。
- ・職業体験
- ・ピノキオのお仕事体験
- ・カフェの調理係
- ・花屋、エコバッグ作り
- ・子どもが主体で、子どもにも親にも刺激になったと思います。
- ・10月の3連休に行われたイベント。多くの人が力を合わせてイベントを成功させようとしていたのがとても興味深かった。
- ・ピノキオシティ
- ・イベント準備
- ・10月のピノキオ

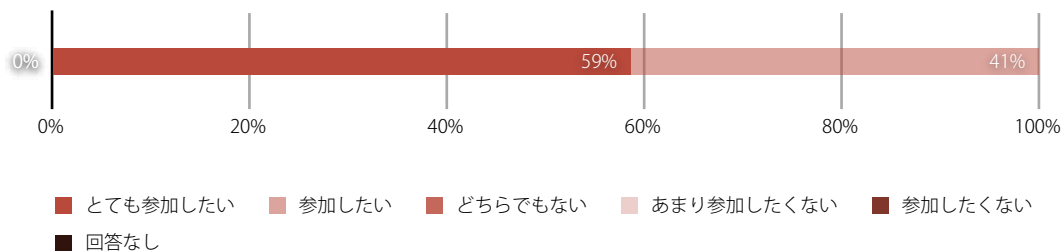
2.5 参加費は適切でしたか？（参加費があった場合）



2.6 1回のワークショップの時間は適切でしたか？



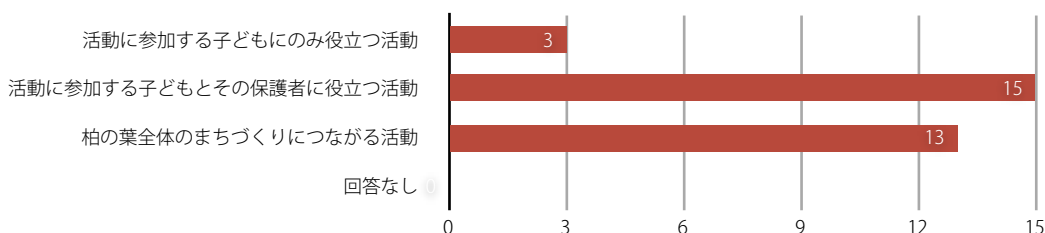
2.7 またピノキオプロジェクトに参加したいと思いますか？



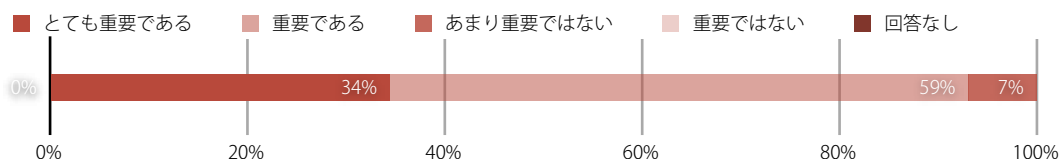
2.8 次はどのようなテーマ・内容のイベントを期待しますか。

- ・ アイディアの実現に期待
- ・ 子ども中心で親がサポートする内容であれば良いと思います。
- ・ 化学系のもの、政治経済とまちづくりについて
- ・ 子どもの勉強以外でのこれから役にたつようなイベント。例えばまちづくりやディスカッションなど
- ・ 子ども自身による時間配分
- ・ 大人があまりお膳立てせず、子ども自身が企画・運営するもの（難しいかもしれませんが理想です。）
- ・ 日帰りキャンプ
- ・ 小さい子どもだけでなく、高学年の子どもが楽しめるイベントを期待する
- ・ 体験型のイベント
- ・ 自然観察

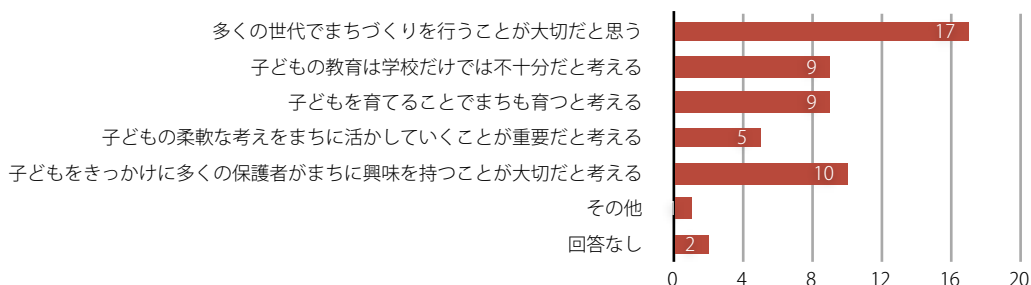
2.9 ピノキオプロジェクトが柏の葉のまちづくりの中でどのような役割を担っていると考えますか？



2.10 ピノキオプロジェクトの柏の葉のまちづくりにおける重要性についてどのように考えていますか？

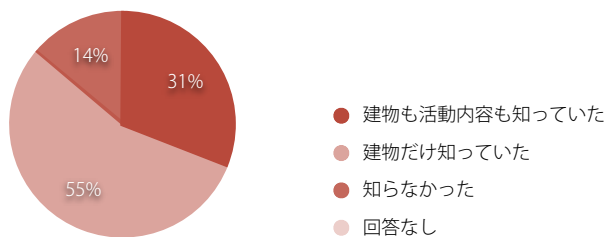


2.11 2.10で「とても重要である、重要である」と答えた方はどうしてそう思いますか？

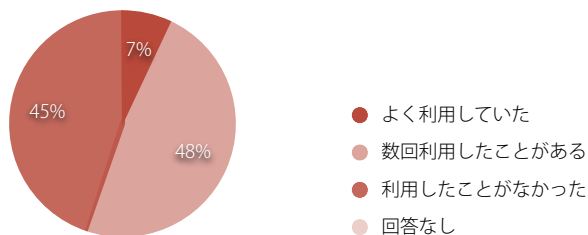


3 UDCKについて これまでの認知や関わりについて

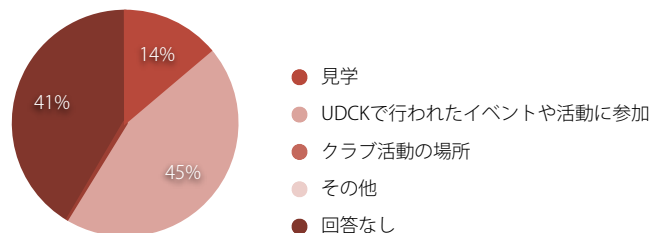
3.1 今回のプログラムに参加されるまでのUDCKの認知度について教えてください。



3.2 今回のプログラムに参加されるまでのUDCKの利用頻度について教えてください。

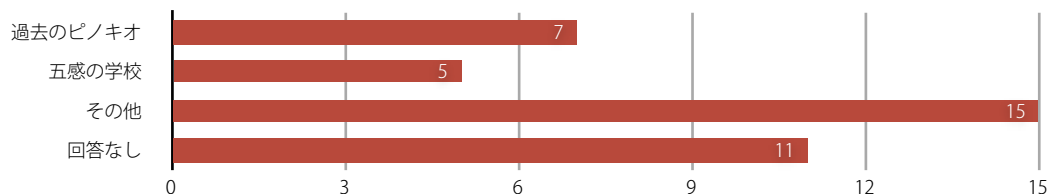


3.3 3.2で利用したことがあると答えた方は、利用目的を教えてください。



※その他：講習会場として利用

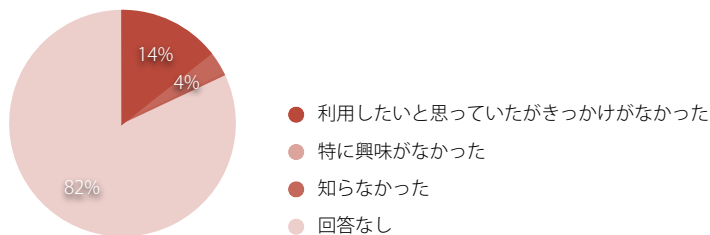
3.4 イベントやプログラムに参加された方は、覚えている範囲でイベント名や活動内容の記載をお願いします。



※その他

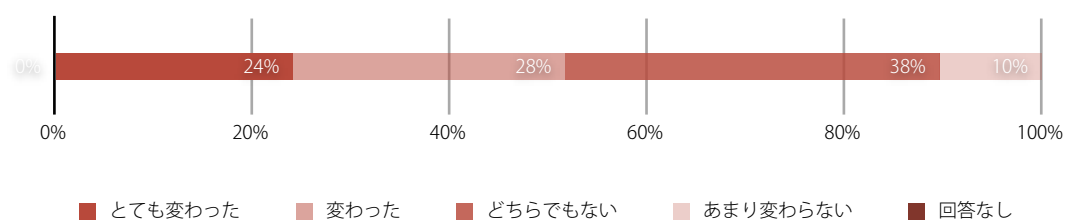
じゃがいも掘り・ヨガ・ピクノポリス・水質調査・カレッジリンク・リトミック・はっばっば体操・マルシェ・グレースライド

3.5 3.2で「利用したことがない」と答えた方は、利用したいと思っていましたか？



4 UDCKについて 印象、期待、感想など

4.1 ピノキオプロジェクトへの参加後、UDCKの認識が変わりましたか？



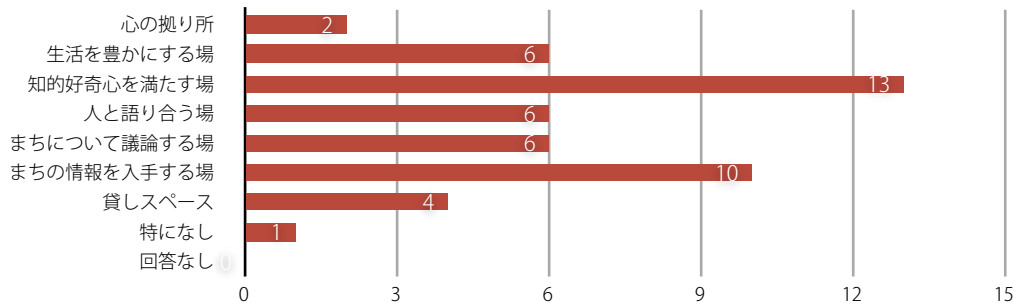
4.2 上の設問で、変わったと答えられた方は、どのように変わりましたか？

- ・より身近になった。
 - ・親子で参加できるプログラムはこの先大切だと思い、UDCKの存在が嬉しい。
 - ・どんなことを行っている場所がわかった
 - ・何をやっているのか不明だったが、足を運ぶにつれてやっている事や目指しているのが、わかるようになった。
 - ・ホームページで調べ積極的に参加するようになった
 - ・存在を知らなかったので
 - ・身近な存在になった。
 - ・ピノキオで子どもを育てることで、家庭も地域活動に積極的に参加できる場があると認識が変わった。
- 知らなかったので、まちづくりのための情報発信をしていることを知り、その内容が高度な気がした。・

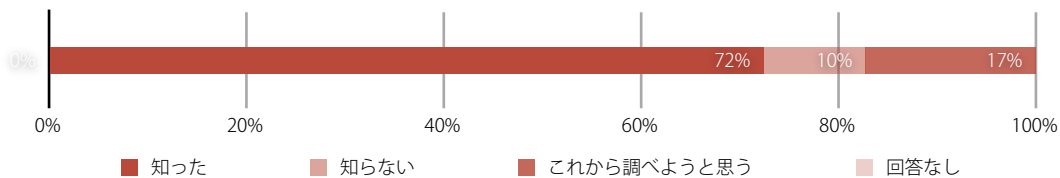
4.3 UDCKに期待する「あったらいいなあ・こうなればいいなあ」という機能はありますか？

- ・親子で気軽に参加できるイベントの企画・書道・お茶などの体験
- ・公衆ラン、カフェテリア
- ・今のままでも十分です。
- ・定期的に参加できる上映会やワークショップなどがあると嬉しい。
- ・一人ではできない大きなイベント
- ・街のごみひろい体験
- ・子ども同士の討論会
- ・お年寄りの交流会→未来の人材へ今までの経験を伝授する！
- ・コンサートホール、誰でも立ち寄れる交流スペース→そこに行けば誰かがいて交流できる昔の井戸端のようなイメージ
無縁社会にならないよう、地域の人どうしがつながれる場所
- ・開放性、休憩所
- ・色んな世代の地域みんなが気軽に集えるような例えば日曜朝のランチできるマルシェ、オープンテラスでのんびり食事で、そこでちょっとしたまちのイベントも同時にできたら、交流の機会になるのでは？
- ・市民（個人）が発する告知コーナー（伝言板みたいなもの）
- ・新UDCK用の駐車場

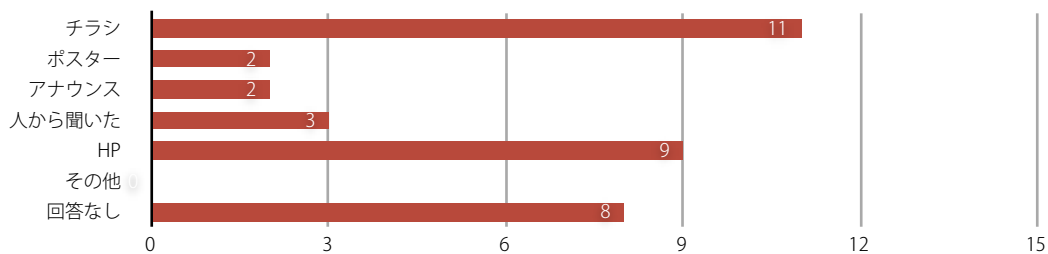
4.4 あなたにとってのUDCKのイメージはどのようなものですか？もっとも当てはまる2つに○をつけてください。



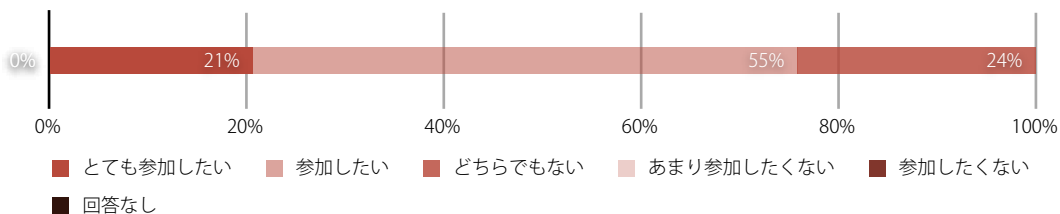
4.5 これをきっかけに、他のUDCKの活動を知りましたか？



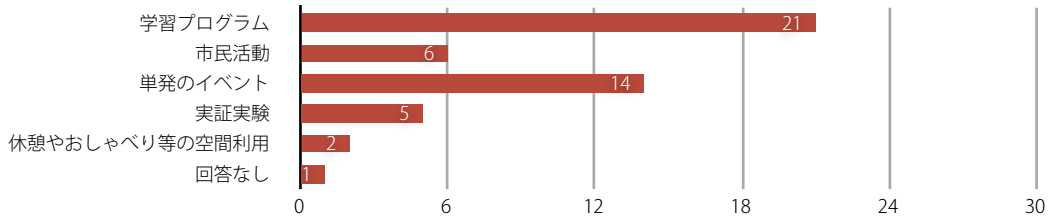
4.6 知ったと答えられた方は、何で知りましたか？



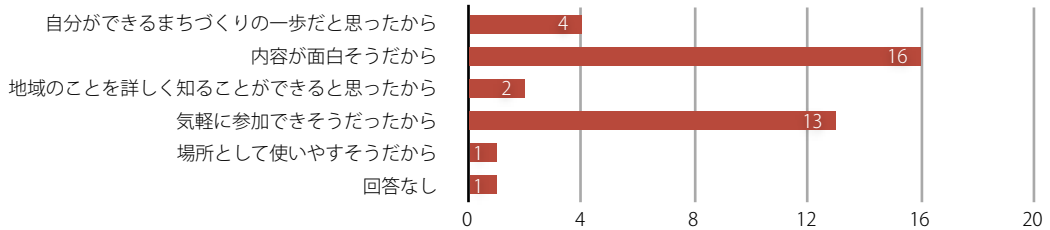
4.7 ピノキオプロジェクトへの参加をきっかけに、他のUDCKの活動に参加しようと思いましたが？



4.8 参加したいと思う項目があれば○をつけて下さい。

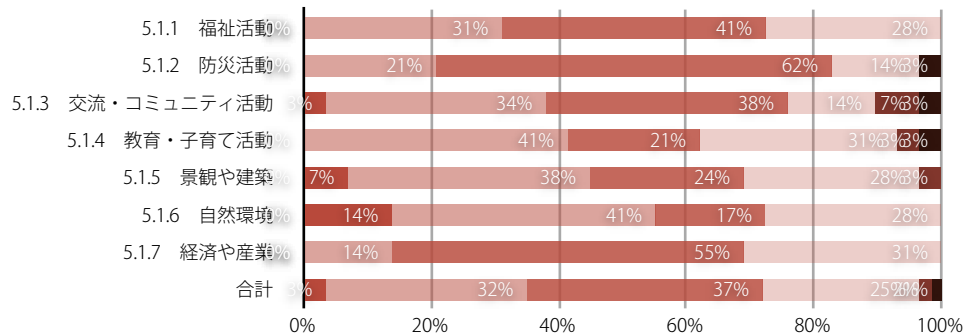


4.9 4.8で選択した理由



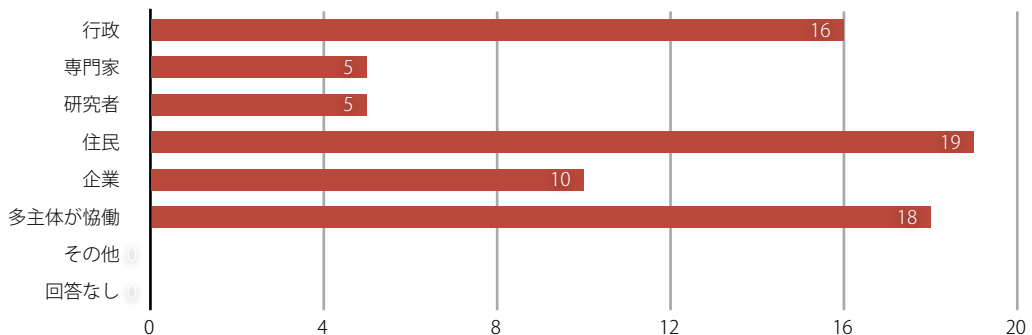
5 お住まいのまち、まちづくりについて

5.1 お住まいのまちの満足度について教えてください。

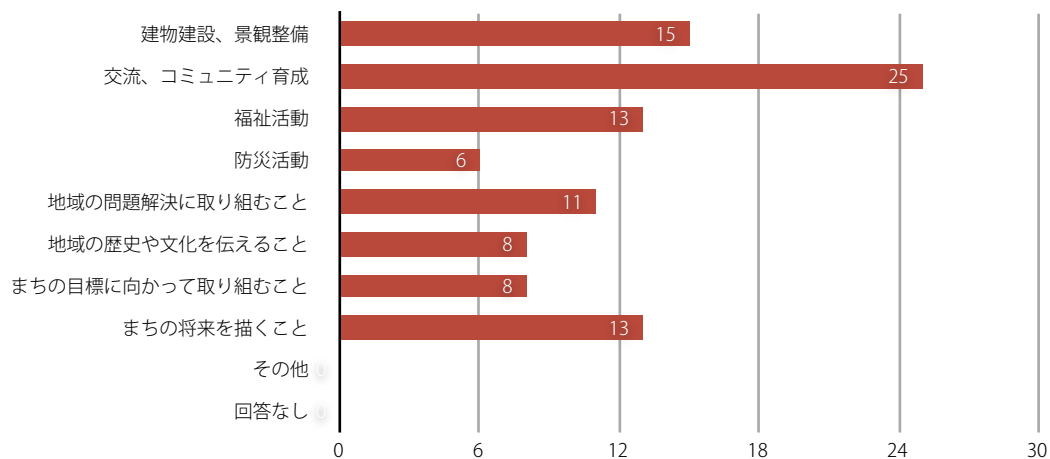


■ とても満足している ■ 満足している ■ どちらでもない ■ 不満がある ■ とても不満がある ■ 回答なし

5.2 あなたの考える「まちづくり」の主体は誰ですか？該当するもの全てに○を付けてください。

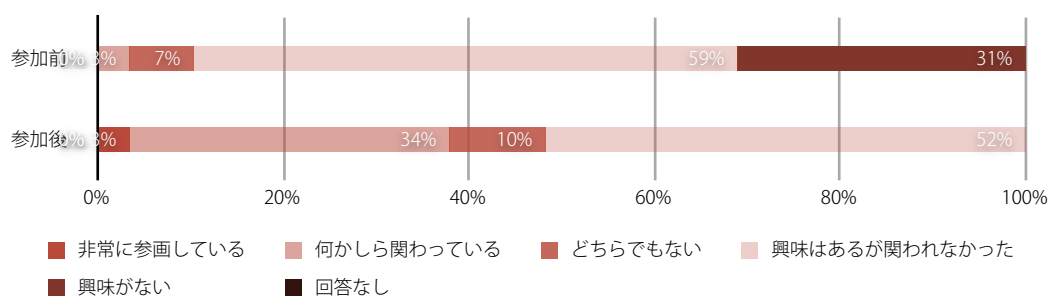


5.3 あなたの考える「まちづくり」の定義はどのようなものですか？該当するもの全てに○を付けてください。

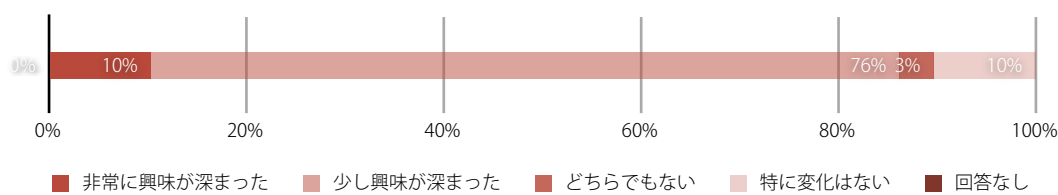


5.4 ピノキオプロジェクトに参加する前、あなたはどの程度、地域のまちづくりに関わっていると感じていましたか？

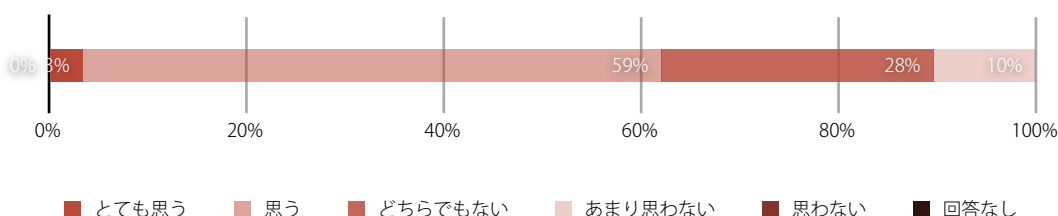
5.5 ピノキオプロジェクトに参加した後、あなたはどの程度、地域のまちづくりに関わっていると感じていますか？



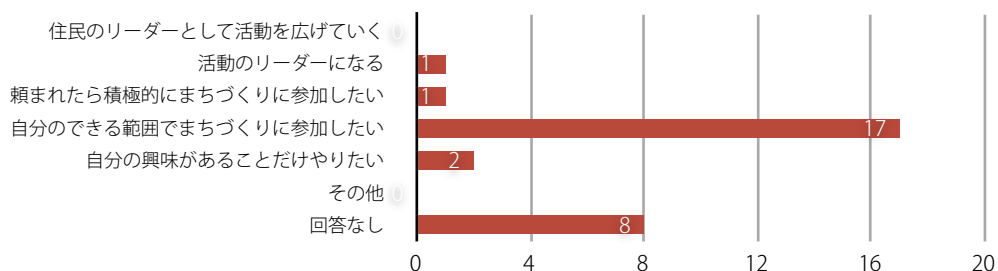
5.6 ピノキオプロジェクトへの参加を通じて、地域のまちづくりへの興味や意識は変化しましたか？



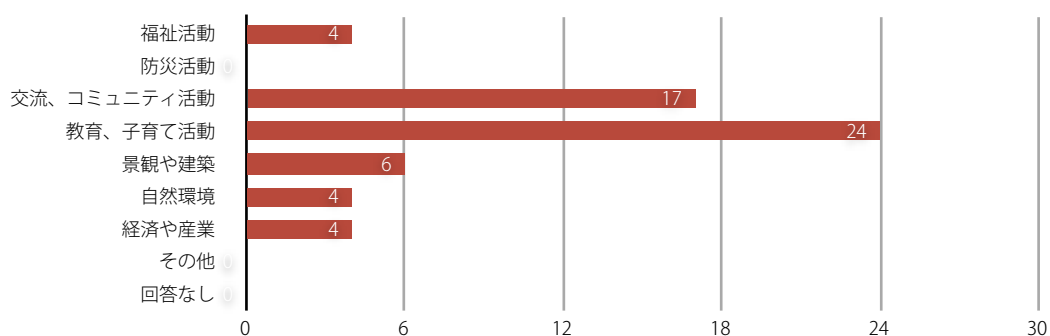
5.7 住民として何か主体的にまちづくり活動を行いたいと思いますか？



5.8 5.7で「とても思う、思う」と答えた方はどういうことを行いたいと思いますか？



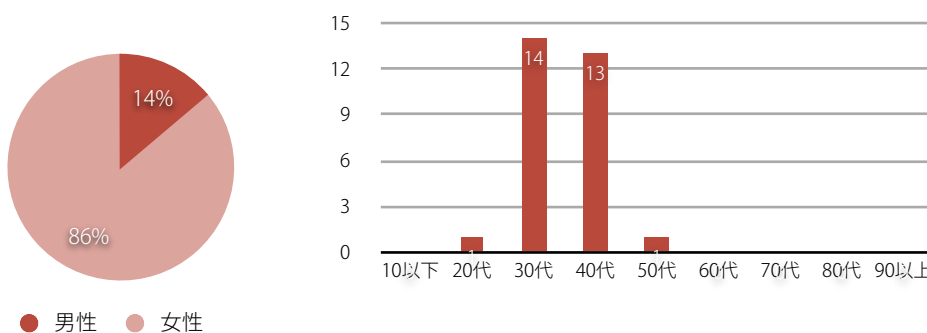
5.9 まちづくりのどのような分野に興味がありますか？



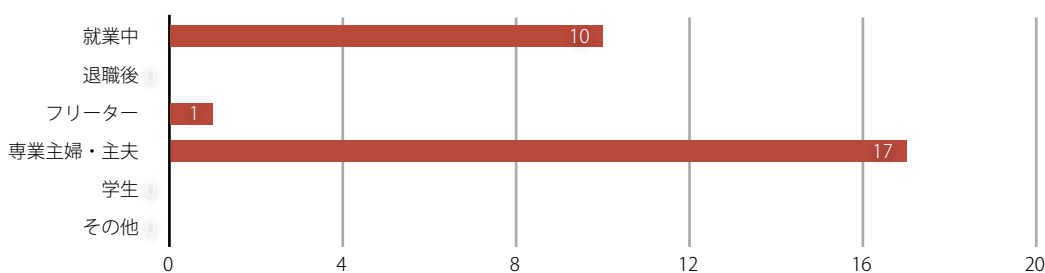
6 最後に ご自身について教えてください

6.1 お名前 () (差し支えなければご記入ください)

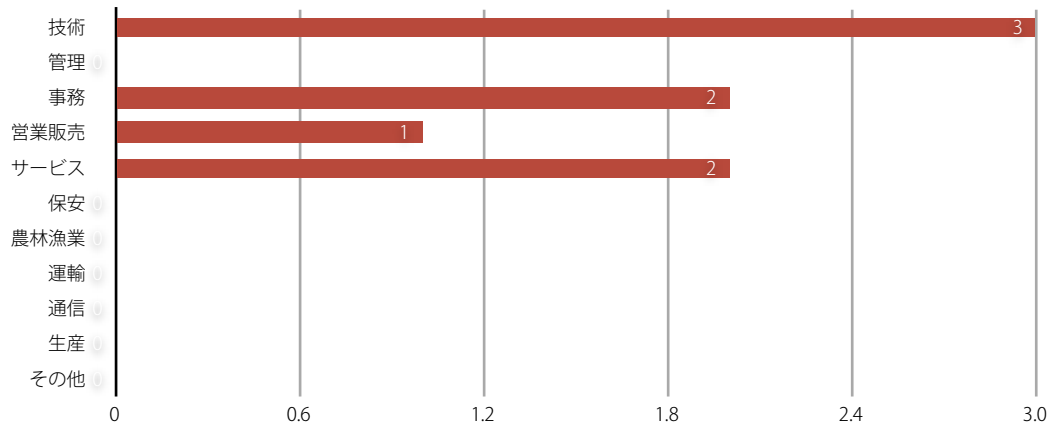
6.2 性別 年齢



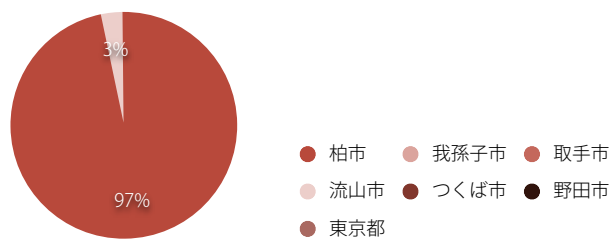
6.3 就業状況について



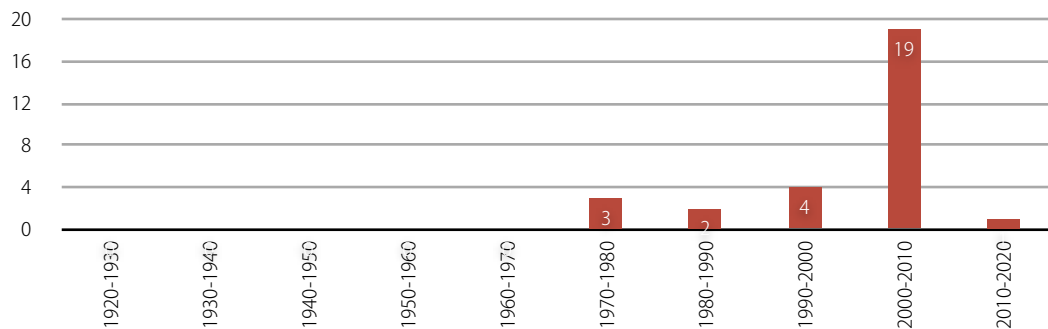
6.4 ご職業の職種 ※その他の方は簡単に記入ください



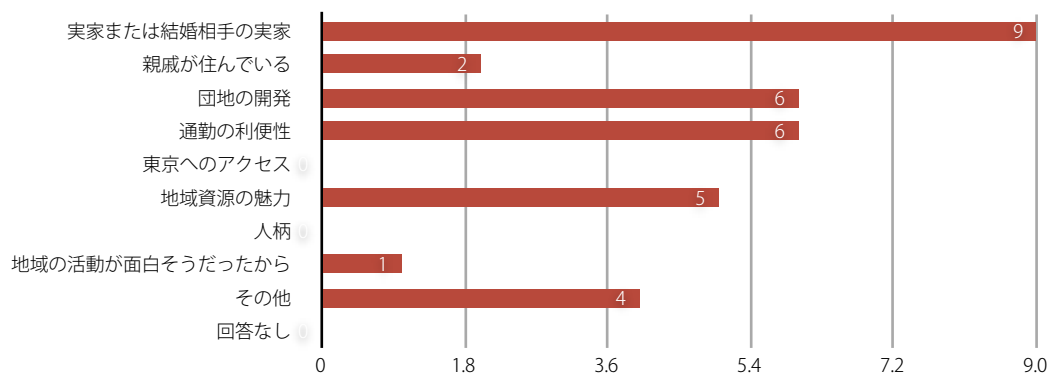
6.5 住んでいる地域 (例：柏市若柴)



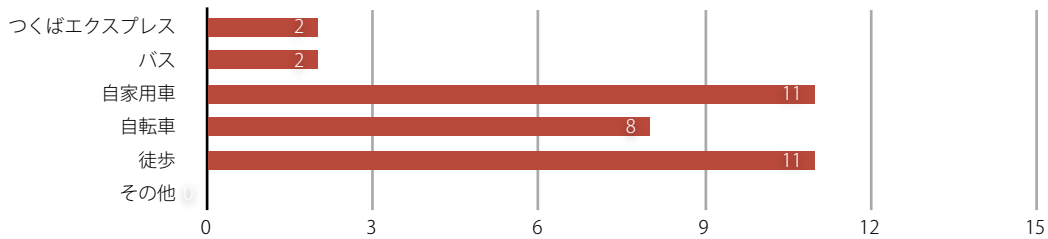
6.6 いつ頃からお住まいですか？



6.7 今の地域にお住まいの理由で最も当てはまるものは何ですか？



6.8 UDCKまでの交通手段と時間



5.9 まちづくりに対する自身の考えやまちづくりスクールの感想など自由に書いて下さい。

子どもがいなければ興味をもたなかった。やはりすべてが子ども中心だと思った。お姉さんやお兄さんのとの交流は貴重！毎回ピノキオが楽しみです。今年は2日前より制作活動に親子で参加しました。大きなものを作るのに、ららぽーとのクリスタルコートにたくさん親子が集まり、自分のスペース確保が大変でした。ららぽーとのバックルームを使用させてもらったり、夏休み頃から少しずつ製作期間があれば混雑もなくなると思います。ワークショップについては1日1回ではなく、1回体験して、また受付することを条件に何度もできるようにするか、1店舗の受け入れ人数を増やし、1日に何回でも子どもが仕事ができると良いです。なかなか希望の店舗での体験ができないのが現状です。

今後もコミュニティー形成やまちづくりに役立つ活動を続けて下さい。子どもの教育関連のイベントに参加したいと思っています。これまでのピノキオプロジェクトで今までの生活では体験することのない刺激的な体験ができました。昨年の様々な材料（モール・折り紙だけでなく、ピーナッツやパスタ、キャスターや醤油入れまで）を用いての模型づくり、どんなまちにしたいか考えて発表したり、今年もららぽーと内に自分たちの手でまちを作り、お客様を案内し、とにかくたくさんのごこと！

そして積極的に自分の考えを伝えたり、形にしたりすることの楽しさを知った我が子は学校や地域の活動にも生き生きと参加しています。そして私自身も子ども達と活動する楽しさを知り、できる範囲は住んでいるまちの活動に参加しています。ピノキオプロジェクトの素晴らしさを一口に語ることはできませんが、とても感謝していますし、まちづくりにもお役に立てたらと思うようになりました。自分の住むまちのことですから。

子どもが良い経験をたくさんさせてもらえて感謝している。と同時に私もUDCKのイベントやヨガや公衆電源サービスなど利用させてもらいありがたいです。新しいまちならではの試みにとても期待しています。みんながあつと驚くプロジェクト、楽しみにしています。

挑むことに作り出すことに育むことにわくわく面白くあれ！あっちいったりこっち行ったり、とんでもないこともある。端を試し、広がりを実感するから、そのときその場その瞬間の中庸をお互いに共感し気づく、発見する。未来が生まれ続ける。

ピノキオはとても楽しいですが、できればもっと子ども主体でできたら良いと思います。デルタスタジオの渡辺健介さんが提唱している「点火プロジェクト」みたいなところから、まず子どもに色々と考えてもらい、（大人も）時間をかけて、プロジェクトができたら良いのでは？

でも、UDCKの色々なイベントやピノキオプロジェクトなど、柏の葉に住んでいて良かったと思う企画が多くあり、嬉しいです。これからも色々な企画（まちづくり）に参加、そして協力もできたら良いと思います。

毎回楽しみにしています。ピノキオが柏の葉で始まって間もなく、上の子が中学生になり、参加できなくなりとても残念がっています。中・高校生も参加できるイベントがあると良いと思います。

今までただのほほんというか子どもを育てるのは親だと思いましたが、親だけでなく地域の為だったり色んな人との出会いをして体験できて、これからの社会で何でもできる良い機会をつくっていただき、とてもありがたいと思っています。私の子どもたちは性格も様々ですが、ピノキオで仕事をやる楽しさや自信が持てる子どもになってもらいたくて参加させて頂きましたが、これからもっと参加してもらいたいです。私も楽しみです。企画・運営など大変だと思いますが、頑張ってください。これからも宜しくお願いします。

柏の葉に越して来てまだ3ヶ月程度ですが、まちづくりに多くの方が関わって積極的に参加している様子に驚きました。私もできる範囲で活動に参加できればと思っています。

大学を出て住宅メーカーに就職しました。最初の勤務先は山梨県で6000戸予定の分譲地の開発チームでした。水道も通っていない仮設事務所に勤務しながら、一件一件と住宅が建って行き、はじめての入居者の家に電気がついたときは感動しました。ランドスケープや10年後20年後の樹木の育ち方を想像しながら計画をつくっていくという仕事を見ているのはとても楽しかったです。そして住民の人たちが自発的にコミュニティ新聞をつくっていく姿やみんながまちを良くしていこうという姿は企業住民の枠を超えていたと思います。ただ、まちも歳をとり、若い人はまちを出て行ったり、地域に出来た小学校の人数も減ってきたり、店舗のテナントの撤退など20年位経ち、少しずつ問題も出てきているようです。ゴーストタウンにならない為にも、色々な年齢層の人たちが住み易く、子ども達には愛着のあるまちづくりは本当に大切だと思います。

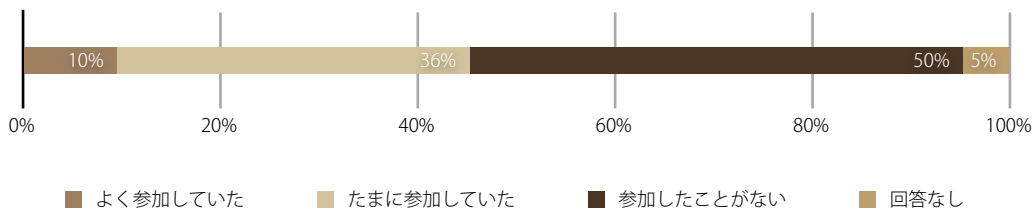
UDCKの役割が最初は企業側が色々仕掛けて行くけれど、それがいざれ住民主体の活動にしたいという話を聞いたとき、とても素晴らしいと思いました。なかなか時間がとれず、参加できていませんが、子どももピノキオリーディングメンバーになれてとても喜んでます。

柏の葉キャンパス駅前住民の意見ですが、子どもたちがボール遊びや自転車遊びをする公園がありません。柏の葉公園という大きな公園がありますが、子どもだけでぶらっと行って遊ぶには遠すぎます。大規模住宅の周りには、小さなちょっとした公園がいくつか必要だと痛感しています。

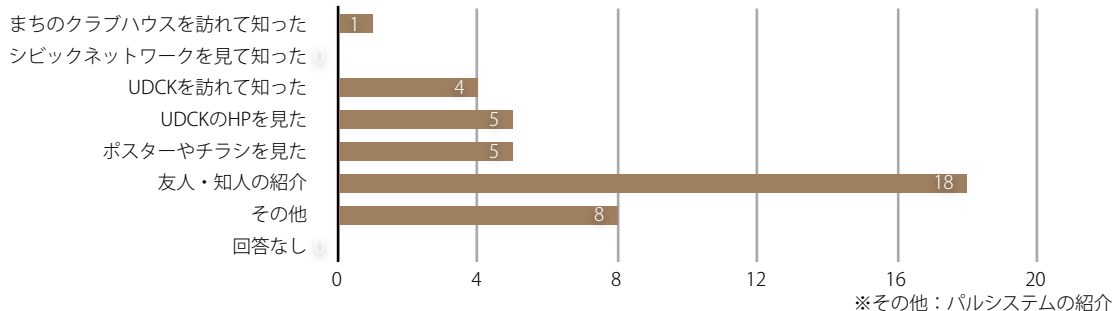
マルシェ・コロール分析

1 マルシェについて 参加のきっかけ等

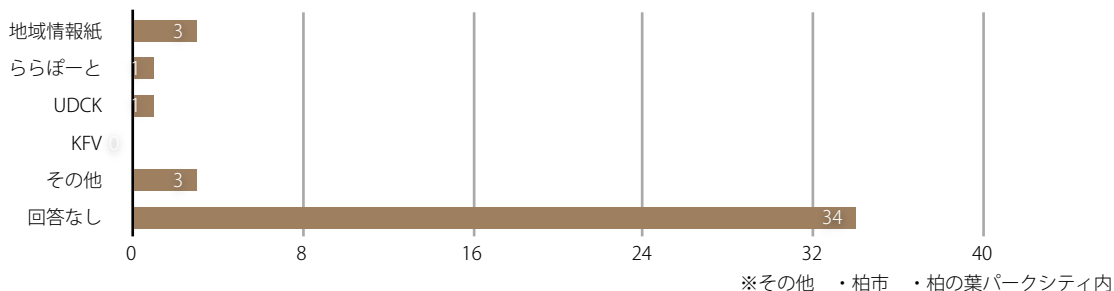
1.1 これまでにUDCK以外で行っている活動などに参加したことはありますか？



1.2 マルシェを知った理由

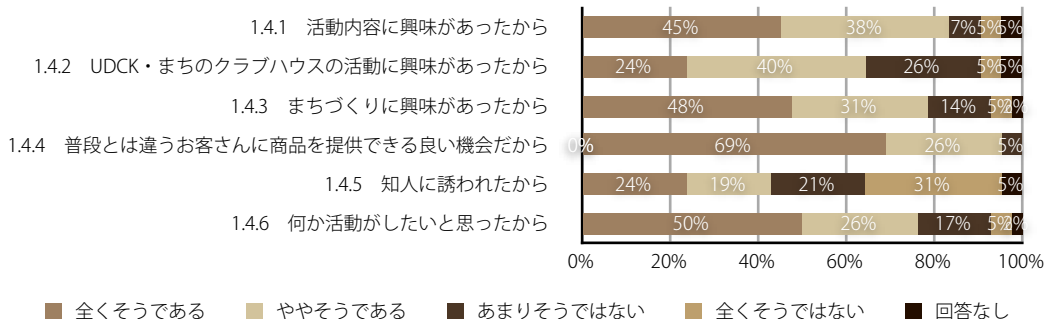


1.3 1.2で「ポスターやチラシを見た」という人はどこで見ましたか？



1.4 参加しようと思ったきっかけ

1.4.1 まちづくりに興味があったから

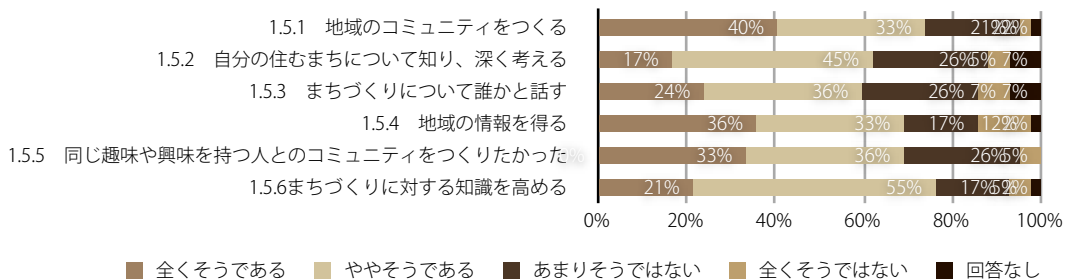


1.4.7 その他にあれば書いて下さい

- ・マルシェが始まるので呼びかけがあった
- ・NPO支援センター千葉の紹介
- ・柏市役所
- ・2008年11月のピノキオの際に来店頂き、お話をうけた

- ・ 小溝さんの営業・来訪
- ・ 柏市主催のワインセミナー講師をKFVで開催したときに知った
- ・ パルスシステム
- ・ 宮奈さんからの紹介

1.5 参加の目的

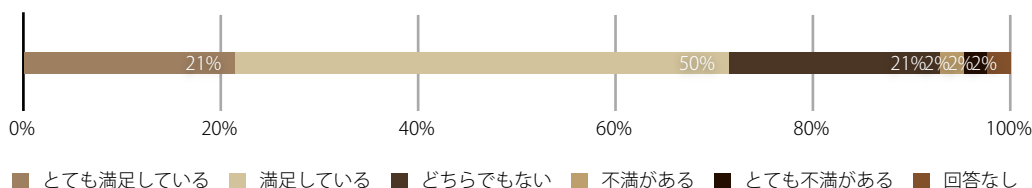


1.5.7 その他

- ・ 施設でつくっている商品を多くの人に知ってもらう
- ・ 自分たちの活動を多くの人に知ってもらうため

2 マルシェ ご感想

2.1 参加した感想について教えてください。



2.2 2.1でどういうところが良かった、または良くなかったのかその理由を教えてください。

【良かった点】

- ・ 色々な人と知り合える
- ・ 当施設の広報や販売活動にとっても役立ちます
- ・ こんなに本格的に全体を統一して活動をしているところはない。もう少し規模が大きく、ジャンルも幅広くると色々なお客様が見込める。
- ・ 色々な人に商品が見てもらえるから
- ・ まちに動きが出る、人が集まり、活気や活動が目に見える
- ・ スタッフが多い
- ・ 若い人が多い
- ・ 3回参加しました。机、傘があり、雰囲気が良かった。机のセットに関心した。
- ・ 地域の人と触れ合えるところが良い
- ・ お客様も企画運営している人も楽しそうだったから。

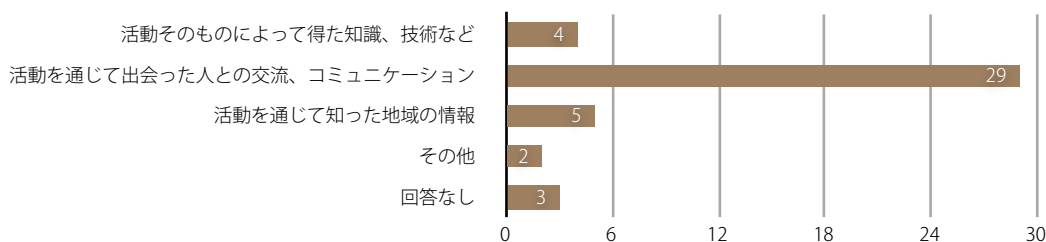
【悪かった点】

- ・ マルシェの売物はららぽーとの前が良いのでは？
- ・ 事務局の方がアマチュアですね。あと学生がボランティアなので動きが悪い
- ・ 開催時間に間に合うようにこちらが準備できる状態になっていない。(テントや机が設置できていない状況)、お客さんがいない
- ・ 柏の葉地域に特化したお店が少ない
- ・ イベント当日に場所が急に変更になったりするのが不満
- ・ 勝手がわかっていないと色々な面でどうして良いかわからないところがある
- ・ 出店場所がコロコロ変わる、出展料が高い

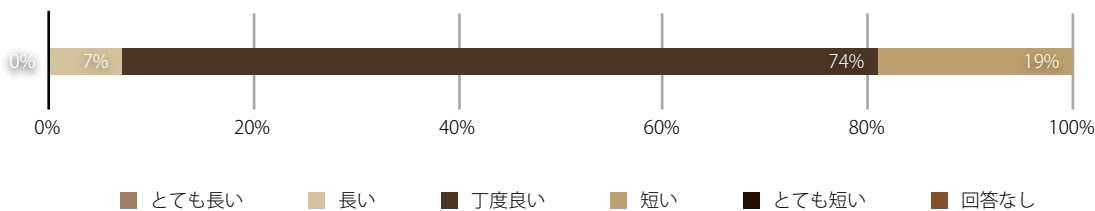
【その他】

- ・ 参加の予定でしたが、数日前に開催できるかわからないと言われ、結局参加はみあわせました。

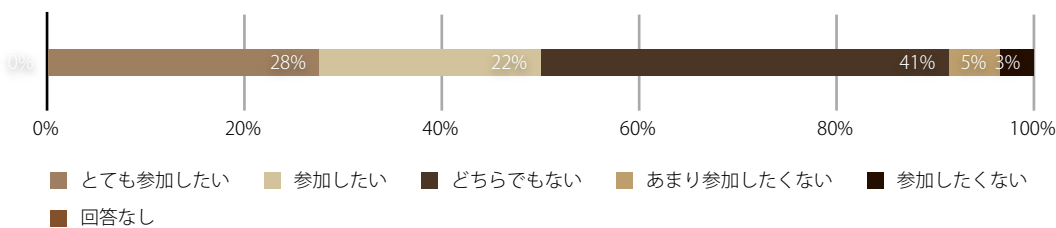
2.3 参加して一番面白かった・興味を持ったものについて教えてください。



2.4 1回の活動時間は適切でしたか？



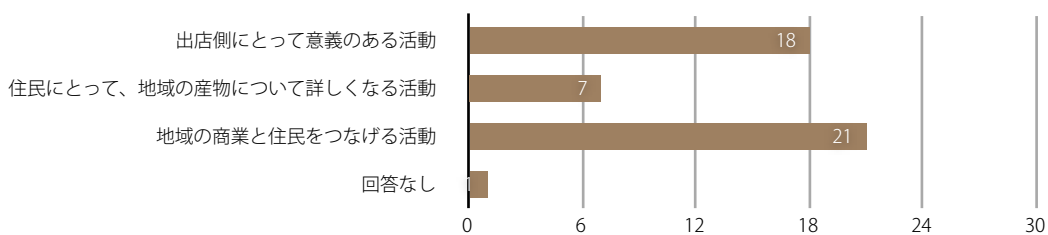
2.5 今後もマルシェに参加したいと思いますか？



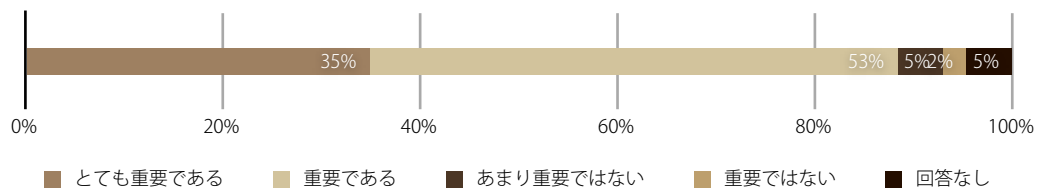
2.6 次はどのようなテーマ・内容のイベントを期待しますか。

- ・ 環境をテーマ
- ・ 自然食をテーマにした感じが良いのではないのでしょうか？
- ・ 地域の様々な人たちとのつながり
- ・ 縁日のような、食べ物やヨーヨー、子どもの遊べる内容、大人も一緒に遊べること。
- ・ 子育て、環境、まちづくり
- ・ 格差社会と消費税について
- ・ 柏の葉のイメージに合った自然を感じるテーマのマルシェ
- ・ 今までのような音楽、アート、部門が引き続きあれば良い
- ・ 幸せな気持ちになるもの
- ・ 一緒にマルシェで出店した方とも交流してみたいと思った。
- ・ 続けることに意味があるので、住民やお客様の声をもっと反映すること。
- ・ 人を集められるメインのものがあと思います。ダンスの発表会とかバンド演奏とか。
- ・ ピノキオの様に、地域の人が参加できるマルシェの活動を期待します。
- ・ 多業種がたくさん関わりの持てる内容
- ・ セミナーを開くのであれば、会費を上げて高級ワインを紹介したい
- ・ 人の流れをうまくつくってほしい
- ・ 環境
- ・ 子どもに参加してもらえる活動
- ・ 色々な企画や祭りなどのコラボ。集客できるイベント
- ・ 参加型のまちづくり
- ・ なるべく駅からの人の動線に近い場所を使ってほしい。TX沿線での告知宣伝を強化してほしい。
- ・ 冬は人足も重いので、パーっと明るいサンバのステージとか。かまくらなどの雪をテーマにしたもの。

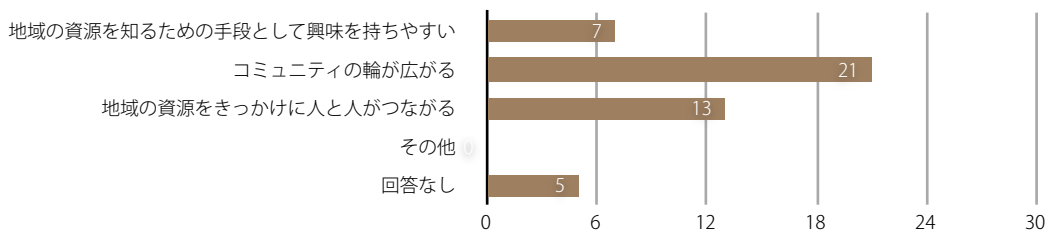
2.7 マルシェの取り組みがまちづくりの中でどのような役割を担っていると考えますか？



2.8 マルシェの柏の葉のまちづくりにおける重要性についてどのように考えていますか？



2.9 2.8で「とても重要である、重要である」と答えた方はどうしてそう思いますか？

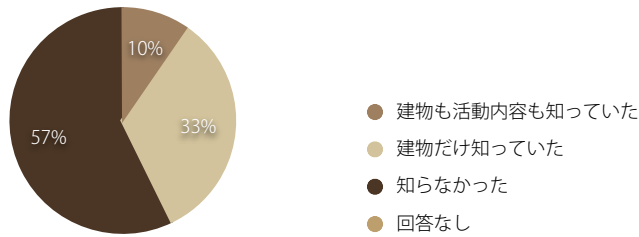


2.10 マルシェの活動にあったら良いなというものがあれば教えてください。

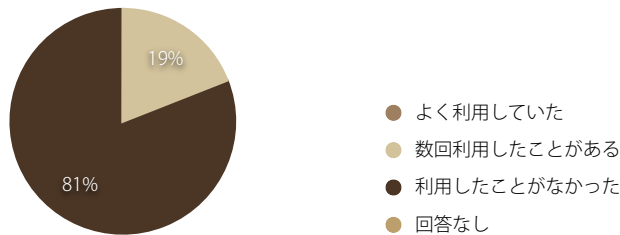
- ・ プロの方を入れた方が良いと思います。
- ・ お買い物でスタンプをため、抽選ができるとか、何かに参加できるなど
- ・ 月に2回位マルシェがあったら良い
- ・ 商品販売に関係しない活動紹介ブース（地域のNPOなど）
- ・ 来店者、出店者にとって心地よい空間
- ・ こんぶくろ池に日本みつばちの待ち箱を置いて、日本みつばちを保護する活動。（市役所にも言ったが相手にされなかった）
- ・ 毎回1店舗ずつクローズアップして紹介したり、インタビューしてチラシに載せるなど、より作り手、売り手の顔や人となりや住民の人たちに知ってもらえるような何か
- ・ 売る側同士のつながりを次に繋げたいと思っている。
- ・ 出店者に聞くべきではなく、住民や来場者に問う方が良いと思う。
- ・ 開始前に葉っぱ体操をみんなで行うとかちょっと一体感のもてることがあると良いと思います。
- ・ ピノキオ以外で子どもの姿を見ないのは寂しい。広い年齢の方楽しんでてもらえる活動があると嬉しい。
- ・ 子どもフリマ（ピノキオの子どもonlyのSHOP）はりきってやりそう。
- ・ 毎回よく準備していると思います。
- ・ 出店者同士の交流会・独自販売網
- ・ 柏市内及びTX沿線にもっと宣伝してほしい。

3 UDCKについて これまでの認知や関わりについて

3.1 マルシェに参加されるまでのUDCKの認知度について教えてください。



3.2 マルシェに参加されるまでのUDCKの利用頻度について教えてください。

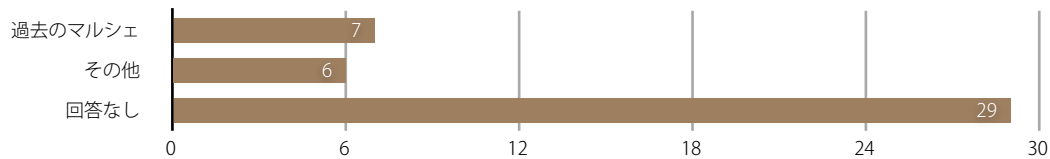


3.3 3.2で利用したことがあると答えた方は、利用目的を教えてください。



※その他：講習会場として利用

3.4 イベントやプログラムに参加された方は、覚えている範囲でイベント名や活動内容の記載をお願いします。



※その他

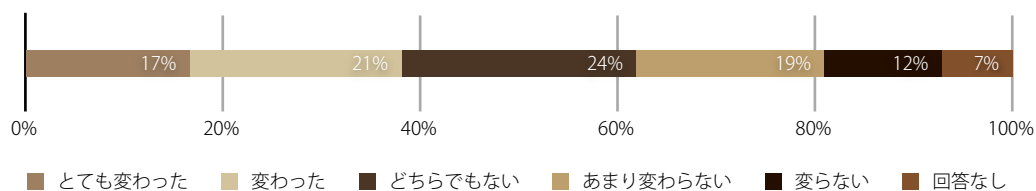
フリマ・記者会見・マチの先生プロジェクト・野菜づくりの講習会・ピノキオ・竣工式

3.5 3.2で「利用したことがない」と答えた方は、利用したいと思っていましたか？



4 UDCKについて 印象、期待、感想など

4.1 マルシェへの参加後、UDCKの認識が変わりましたか？



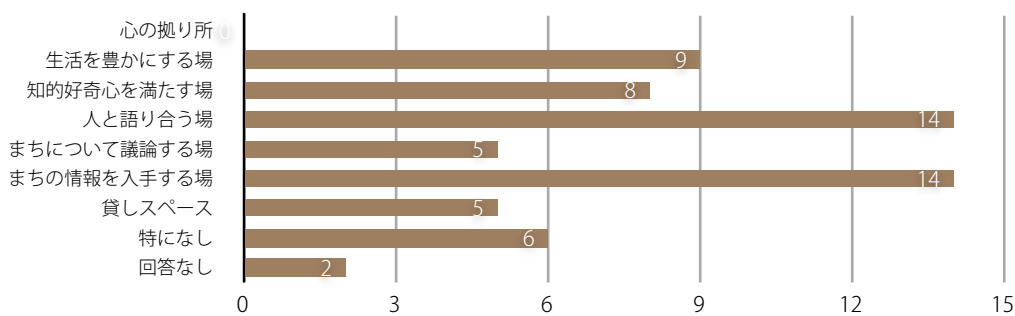
4.2 上の設問で、変わったと答えられた方は、どのように変わりましたか？

- ・ 三井の企業イメージアップの為の施設かと思った
- ・ まちづくりに機能する施設と認識した。でも、何となく「ふつうの人は入り難い」難しそうイメージを感じてしまった。
- ・ 野田煎餅を理解してくれた
- ・ ららぽーとへ行く度に覗いてみるようになった。
- ・ 新しいまちなので、公民館や集会所として利用するスペースならこれだと思った。
- ・ お祭りとかイベントとかまだ知らない人だけです。もっと色々なところで知らせるべきだと思います。
- ・ 柏の葉のまちづくりに対する考え方が変わった
- ・ 商圏が拡大した
- ・ 活動内容がわかった
- ・ 活動内容をよく知らなかったが、参加して地域活性化の活動としてこのような形があるという新しい発見があった。
- ・ 色々な事をする事がわかり、気にかけるようになった。
- ・ とても活動が充実している
- ・ 身近になった。利用したいと思った。

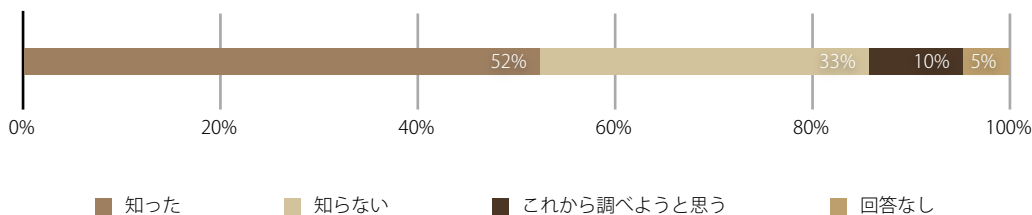
4.3 UDCKに期待する「あったらいいなあ・こうなればいいなあ」という機能はありますか？

- ・ 地域の交流スペースとして広く開放する
- ・ 一日借りれる部屋があって、販売やワークショップを自由にやりたい。
- ・ 乳幼児親子の居場所づくりの拠点となること
- ・ 100円バス
- ・ 子どもたちの冬・夏休みなど柏について勉強になるような話を聞けるとかの子どもイベント
- ・ キッチンの充実
- ・ 市民活動センターのような情報提供、活動スペースの提供
- ・ 活動内容がよくわかりません。参加方法もわかりづらいです。
- ・ 地域の情報（ガーデニングやイルミネーションを行っているような個人から会社まで）
- ・ 少子高齢化社会での中小企業の役割を考える
- ・ 地域に埋もれてしまっている人材を発掘し、活性化させるならどんな活動でもやってほしいです。

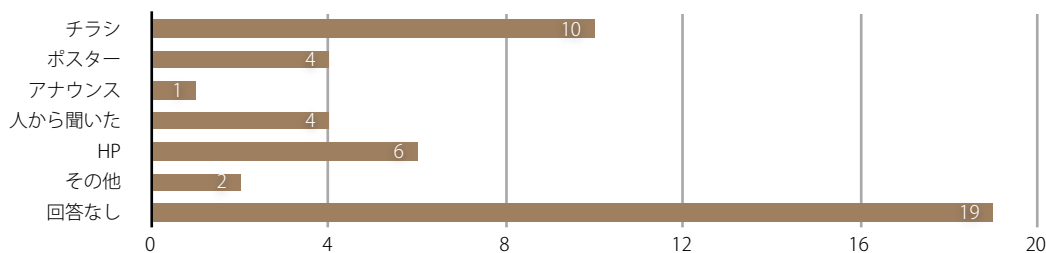
4.4 あなたにとってのUDCKのイメージはどのようなものですか？もっとも当てはまる2つに○をつけてください。



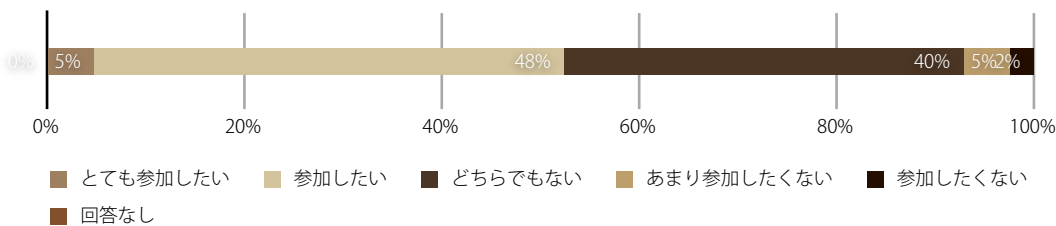
4.5 マルシェへの参加をきっかけに、他のUDCKの活動を知りましたか？



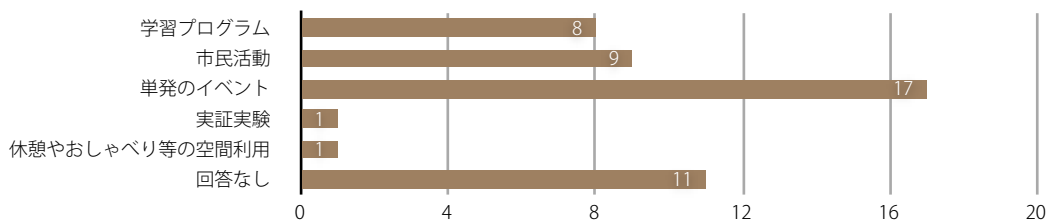
4.6 知ったと答えられた方は、何で知りましたか？



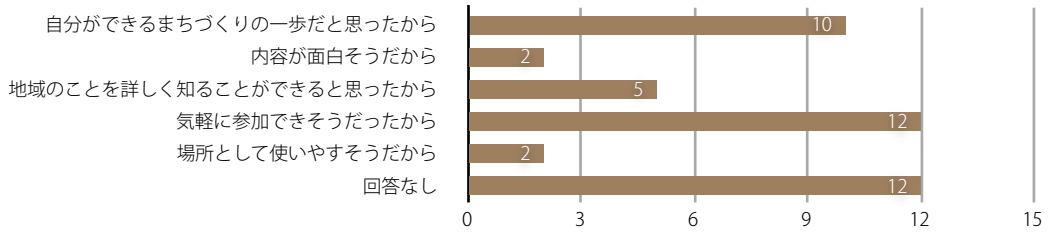
4.7 マルシェへの参加をきっかけに、他のUDCKの活動に参加しようと思いましたか？



4.8 参加したいと思う項目があれば○をつけて下さい。

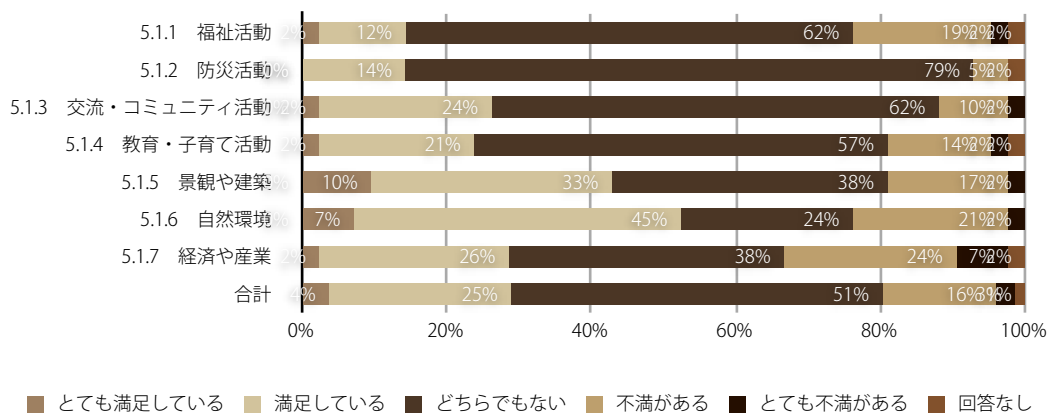


4.9 4.8で選択した理由

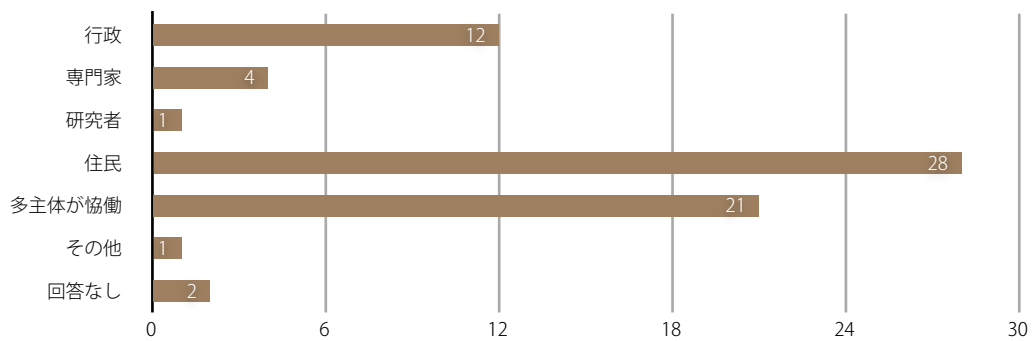


5 お住まいのまち、まちづくりについて

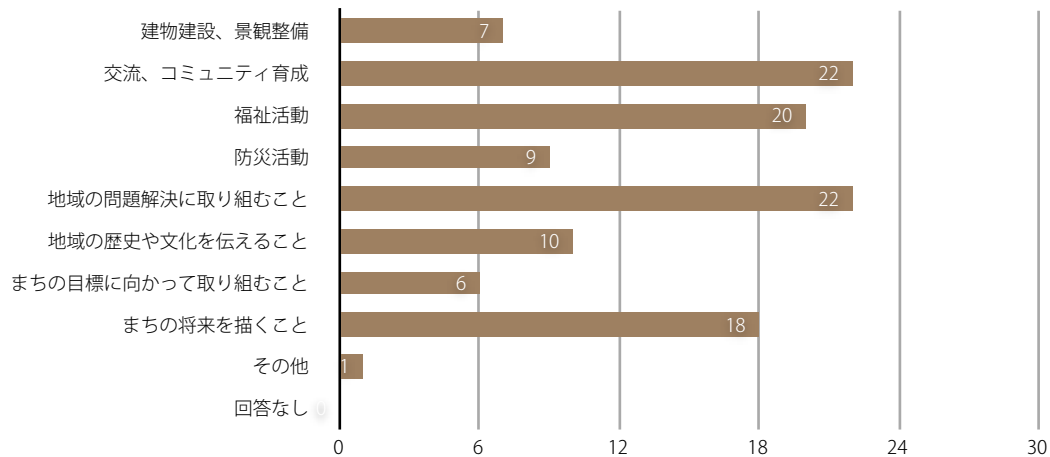
5.1 お住まいのまちの満足度について教えてください。



5.2 あなたの考える「まちづくり」の主体は誰ですか？該当するもの全てに○を付けてください。

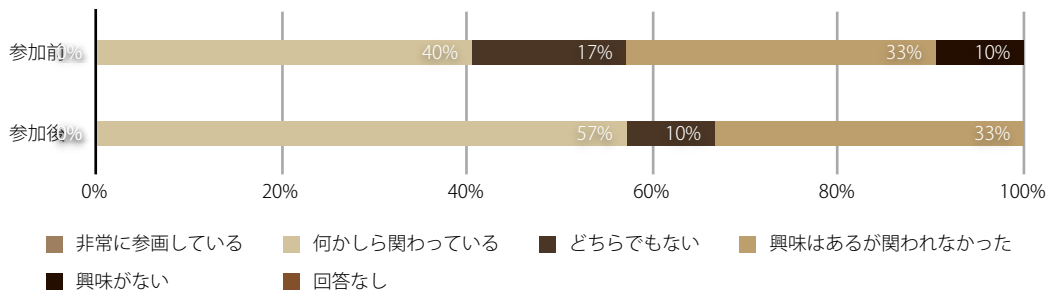


5.3 あなたの考える「まちづくり」の定義はどのようなものですか？該当するもの全てに○を付けてください。

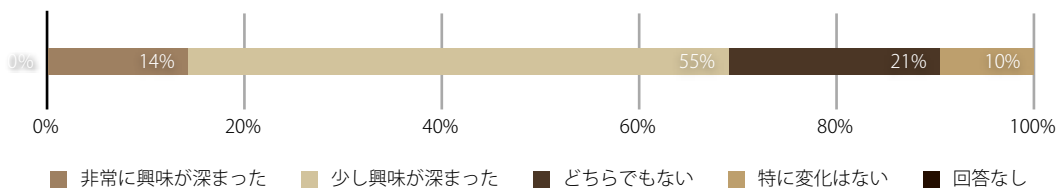


5.4 マルシェに参加する前、あなたはどの程度、地域のまちづくりに関わっていると感じていましたか？

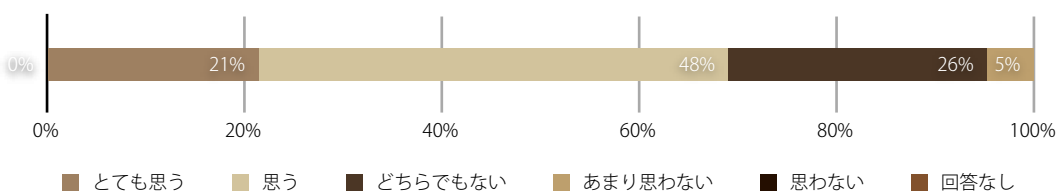
5.5 マルシェに参加した後、あなたはどの程度、地域のまちづくりに関わっていると感じていますか？



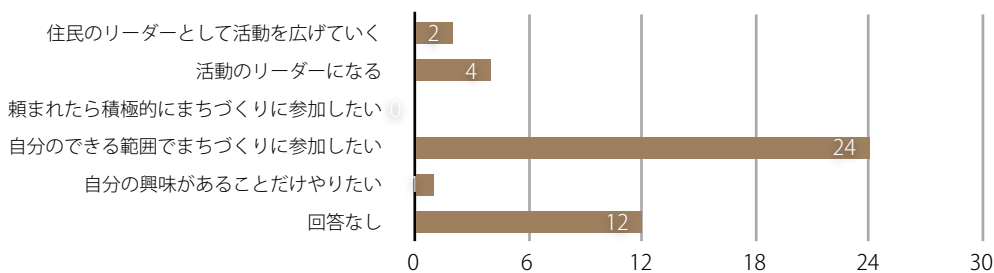
5.6 マルシェへの参加を通じて、地域のまちづくりへの興味や意識は変化しましたか？



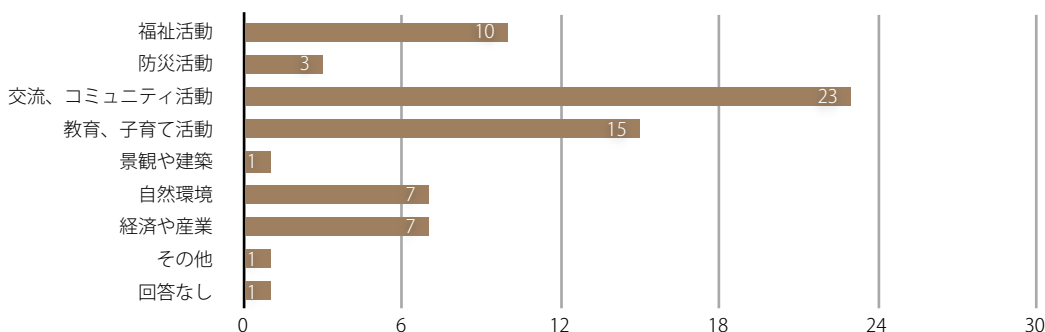
5.7 住民として何か主体的にまちづくり活動を行いたいと思いますか？



5.8 5.7で「とても思う、思う」と答えた方はどういったことを行いたいと思いますか？



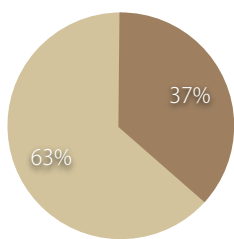
5.9 まちづくりのどのような分野に興味がありますか？



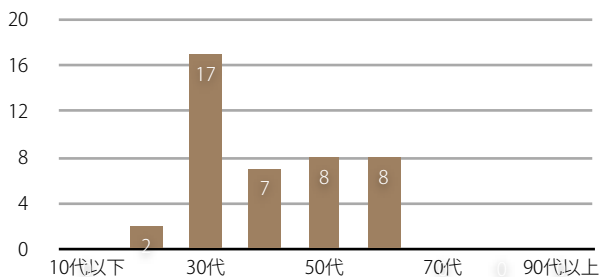
6 最後に ご自身について教えてください

6.1 お名前 () (差し支えなければご記入ください)

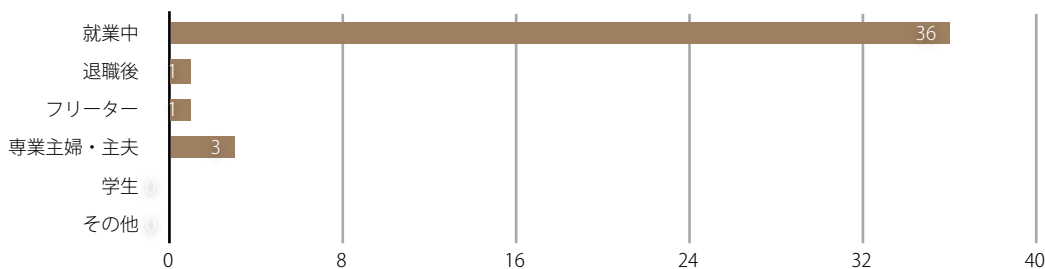
6.2 性別 年齢



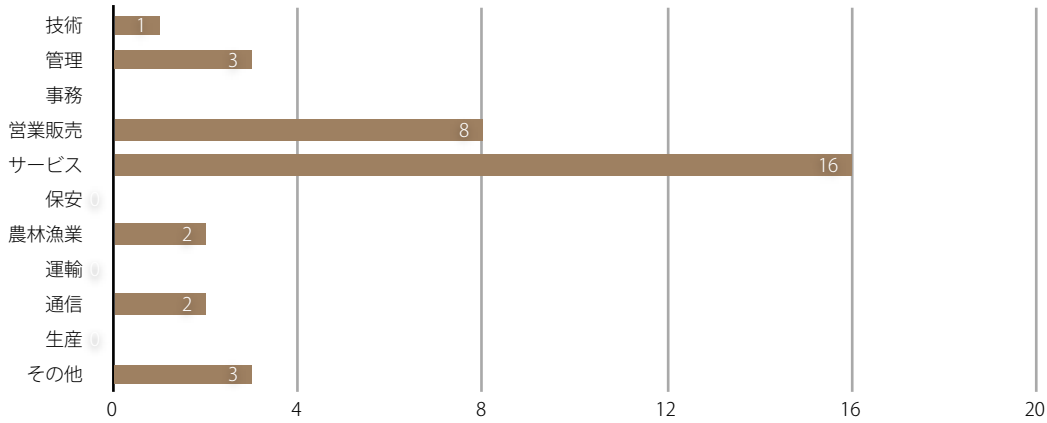
● 男性 ● 女性



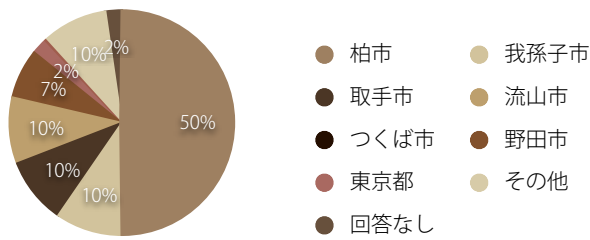
6.3 就業状況について



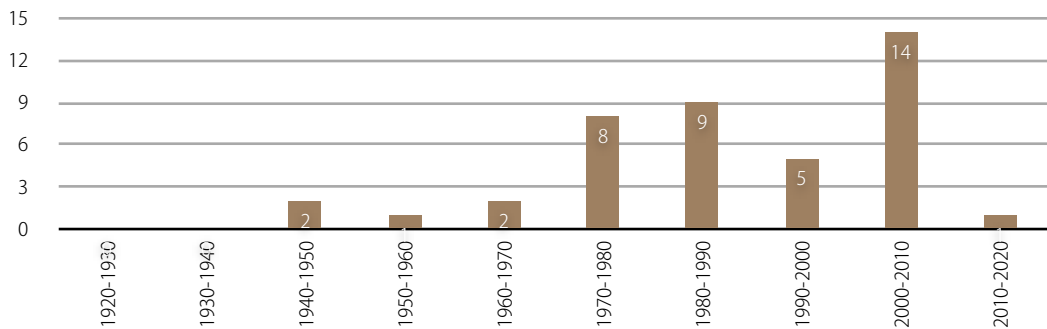
6.4 ご職業の職種 ※その他の方は簡単に記入ください



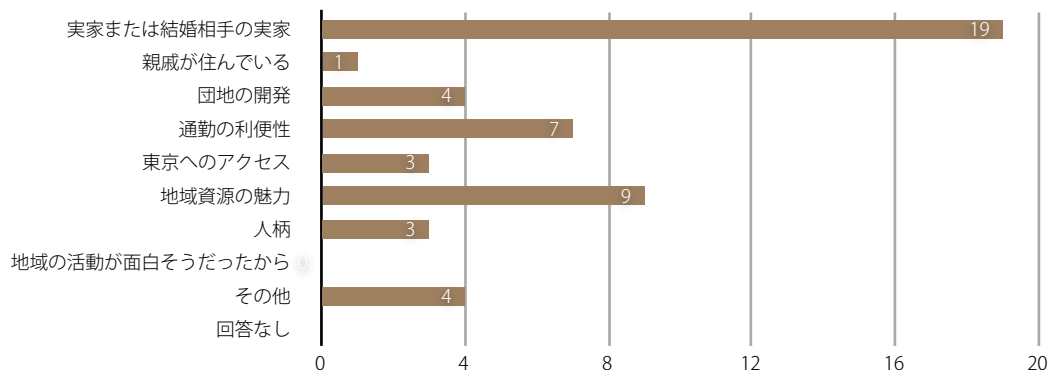
6.5 住んでいる地域 (例：柏市若柴)



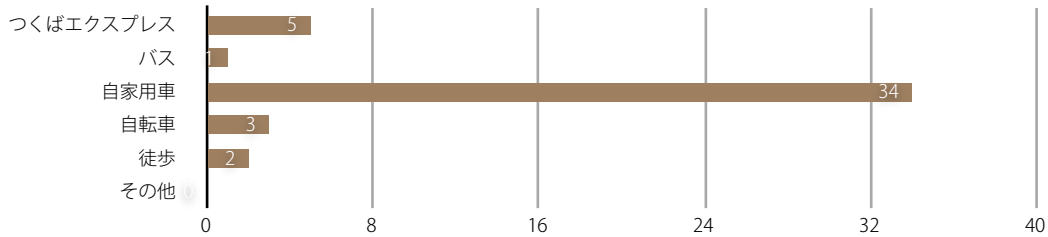
6.6 いつ頃からお住まいですか？



6.7 今の地域にお住まいの理由で最も当てはまるものは何ですか？



6.8 UDCKまでの交通手段と時間



5.9 まちづくりに対する自身の考えやマルシェの感想など自由に書いて下さい。

-
- ・環境を大切に次世代の子どもたちに残すために活動していきたい
 - ・それぞれの特徴を活かしてお互いの力を出し合って協同してまちづくりをしていけるようにしたい
- 福祉関係（知的障害者の方たち）で働いています。彼らが地域で生き生き暮らしていければと支援しているのですが、マルシェでそのような活動をしていければと思っています。
- 彼らとともに、豆腐を製造し、共に販売することで地域とコミュニケーションがとれることを望んでいます。これからもどうぞ宜しくお願い致します。
- 皆様のご活躍を期待いたしております。
場所が変わったことは致命的な気がします。
-
- ・マルシェについて
- 地域の方にアピールでき、交流できるチャンスを得ることができ、有意義だったが、出店準備や家庭の行事との兼ね合いで参加をお休みしています。布おむつショップとして布おむつ、布ナプキンをご提案するイベント等もできたらなあと思います。また、鍼灸師なので、東洋医学を身近に感じてもらい、みんなで楽しむイベントもしてみたいと思っています。
- ・まちづくりについて
- 人と人の直接の交流が格とならと思います。インターネットの普及で買い物も通販になり、会話もメールが多くなるという状況だからこそ、直接会って話す事が楽しいなあと思えるような仕掛けをつくっていかなければいけないと思います。SCを見ればユニクロ、ABCマート、同じような飲食店とわかっていて安心感があるものばかり。もっとわくわくできるものを応援して利用して支えていきたいと思っています。
-
- ・マルシェについて
- 何回か出店して思った事は、売る&買うの関係だけでなく、提供する側と参加する側の間に楽しむという概念が重なり合い、行ってみたい、やってみたい、また来月が楽しみ！と思えるものを取り入れたいと思った。また、月に2回あれば嬉しい。あと、たぶん1人で参加する人にとっては半分のスペースで料金も半分だと気軽に参加できると思います。
- 場所がマンションの下にならば一と側の時より気がついてもらえなく、お客様も減ってしまったので、今後が心配です。
UDCKや実行委員会の動きを注視している一人です。ういず（ワーカーズコレクティブういず）自身はマルシェに年数回程度しか参加できていませんが、今後、まちづくりの話（活動）と一緒に参加させてもらえるように頑張ります。また、乳幼児親子の居場所作りをしています、キャンパス駅周辺で会場拠点があれば今後増々増えていくことが予想される。子育て層にアピールできるのではないかと考えます。子育て層に優しいまちづくり構想も是非力を入れて下さい。
- これからも宜しくお願いします。できる範囲内であれば活動に参加したいと思います。
- UDCKについてのアンケートとのことですが、マルシェに参加しているだけなので、大変申し訳ありませんが、どんなことが行われているのか全くわかりません。また、柏の葉のまちづくりについても同様ですので、今回のアンケートは全くお役に立てないと思いました。ただ、マルシェでは、施設で作っているものを知って頂けたり、色々な出店者の方とお話する機会にもなるので、できるだけ今後も参加させて頂きたいと思っています。しかし、アンケートの中でも書きましたが、当日の進め方に不満があり、それが原因でお客様が離れてしまうということもあります。主催者の方にはお伝えしましたが、スタッフが足りないと言われ、なかなか改善しません。開催中に見ていても、スタッフが少ないと思うこともあるので、ボランティア募集などもっと行えば良いのではないかと思います。
-
- マルシェ自体、「市場」と理解し、フランスのちょっとおしゃれな市場。ちょっとおしゃれなお店が住民（出店者）のセンスで楽しい場所になって行き交う人たちも「ワー楽しい！面白い！かわいい！」と口々に言いながら、手にとり、おしゃべりがはずみ、親しくなっていくもののような雰囲気を感じました。きっと発信性があるものだと思います。又余裕、チャンスがあれば参加したいです。
- ・マルシェにはたくさんのお店が出ていますが、当日はバタバタと忙しくて、他のお店に顔を出したりできず、一人で出店だと結局自分のブースにいてどこのお店の人ともあまりコミュニケーションが取れずに終わってしまうことが多くて寂しいなと感じています。お店同士で回す回覧板のような交換ノートのようなものとか、WEB上の掲示板とか、お店同士のつながりが深まる何かがあったらもっとマルシェのことを好きになれるのではないかと思います。
 - ・UDCKも、まちのクラブハウスもマルシェもまだまだ「知っている人しか知らないもの」というイメージがあり、これから広がっていくものだと思います。「また来たいと思う場所」や「次は誰かを連れてきたいと思える場所」になったら良いなと思います。そのためには、「地域のもの売る」だけでは足りなくて、人と人の繋がりがなくてはならないものだと思います。そのために、「また会いたくなる人」になろうとは思っています。人は場所に集まるのではなく、人に集まるものと考えます。

子どもが0歳、4歳と4人で柏へ越して来て10年が経ちました。子どもの入院があつたりとたくさんの方に助けられて子育てをしてきました。そして子育ても(笑)。今、小5中2になり、二人とも毎日楽しそうに笑っています。私も楽しい毎日を送っています。マルシェに参加してたくさんの方と話をしました。楽しい1日でした。マルシェで出店しなければなかなか全く知らない方と接することがないのです。たくさんの方に助けられて子育てしてきた私にとって今子育ても少しは落ち着き、時間も取れるようになってきました。でも私のような主婦をしてきたものは、気持ちはあってもどう参加したらよいか?とは思っています。きっと子育て中のお母さんや病気を乗り越えている方はたくさんいると思います。少しでも協力できたらなあとか、話をきいてあげられたらなあとは思いますが、なかなか繋がらないんですよね。私は今正社員で、働いてたくさんの方とお会いしています。今の世の中心が痛む話ばかりニュースから流れてきますが、私は毎日お会いしている方々で、たまには???という方もいますが、「頑張ってるね」「寒くなるから風邪をひかないでね」「会うとホッとするわ」と温かい言葉をかけてくれる方がたくさんいます。私はその言葉に救われていますし、頑張ろうという気持ちになれます。人と人のつながりの言葉で、気持ちは変わるんです。

変わるんですよ。私にもできることってありますか?

私は商売人のため、まちづくりについては全くわかりません。マルシェについては商売ベースにたくさん売るといよりは、PRや親交の場と考えています。1年以上、参加させて頂き、徐々に効果を感じ取れています。あまり無理のある企画を先行せず、主催者の満足を求めず、来訪者の声、要望を出して行くの良いイベントになると思います。

まちづくりについて考えていること(自分の活動にからめて)

私事ではありますが、松葉町で子育て支援活動をしております。私たちの立場から申し上げますと、柏の葉は子育て支援に関してとても気がかりな地域となっています。大型マンションの建設で子育て期の家族が多く流入する中、近場に公共の施設(公民館)などもなく、また支援環境も整わず、駅周辺のマンションから多くの親子さんが、遠く松葉町の私たちの活動拠点に足を運んで頂いている状況です。そうした参加者の声を聴くと、もっと潜在的にたくさん参加されたい方もいらっしゃるが、小さい子どもを連れての離れた場所への参加はとても負担がかかるということで参加を見合わせているとのこと。私たちはそうした方々のためには、自分たちが現地に赴き、活動すれば良いと考えるのですが、先にも述べたようにどうにも活動する場所が見当たらず、途方にくれているところで。

現在柏の葉では、住民の自主的な活動を促す活動を援助する形態が主流で行っていらっしゃるようですが、子育ての支援はそういったものとは異なるもので、やはり専門的・継続的に支援者がいる状況で支援を行わなければ効果を期待できないものです。

以上のようなことを踏まえて、柏の葉にあるUDCKにおいて、またそれに付随するような場所にて、子育て支援を専門家との連携をはかり、継続的に行えば柏の葉にもっと豊かな子育て環境を整えられると日々考えております。

子育てという一分野のみに偏ることは公平性を考えたときには難しいですが、ぜひ住民の方が真に求めているものを柏の葉で展開できるような環境づくりのハードとしてUDCKのあり方をご検討頂けたらと思います。

もし、前向きに検討して頂けるということになりましたら、地域の助産師を含めた専門家とのネットワークを活かして喜んで関わらせて頂きたいと思ひますし、それと絡めた研究の一助となることのできるごことがありましたら、協力させて頂きたいと思ひます。

マルシェに何度か出店させて頂いています。でも私の友達など、全然知らなくて、口コミで知らせています。仕事をしている人や家からなかなか出ない人など、知らない人がたくさんいることが驚きでした。色々な場所にポスターやチラシなど置いたら良いと感じています。私はこれからも参加していきたいと思ひています。

住み慣れた場所が生き生きしたまちになるのであれば、とても良いことなのだと思います。今の活動は、キャンパス駅のすぐ周辺のことであつて、実際に自宅近くの住人の方には周知されていないのが現状です。現地の人が参加できるようになればいいと思ひます。これから先を見る為には、周辺の学校(小・中)とのコミュニケーションもあるといいのかなと思ひます。電車で来て、立ち寄る空間ができるといいですね。マルシェも出店している側の人間としては、同じ場所でお店を出しても、個人・個人でやっているようで、チームの気持ちは生まれてきません。モチベーションを上げるためにも、コミュニケーションが必要になっているのかもしれない。

私の考える「まち」に必要な要素は「人」「物」「環境」なのですが、これからの「まちづくり」という意味では、柏の葉周辺にもっと増えてもいいものは「コミュニティ」なのかな?と感じます。

近年は核家族化や少子化で、地域住民とのふれあいが少なくなつてきてます。きっとそれはこの柏の葉というまちにもある身近な問題だと思ひます。

それを解消していくには、「マルシェ」であつたり、「まちのクラブ活動」などのコミュニティ事業が必要不可欠なのだと思います。これからのマルシェには、もっと地域住民を巻き込んだ企画などをつくり、柏の葉の人間だけが知っているものではなく、柏市全体、千葉県や全国が注目を集めるマルシェに育ててほしいと思ひます。

私は「障害者福祉」という分野から柏の葉という「まち」を盛り上げていきたいと思ひます。まだそこまで力はありませんが、ゆくゆくは柏の葉に拠点を置き、障害者の相談事業やコミュニティスペース、ケアサービスなど地域で影に隠れてしまいがちな「障害者福祉問題」の解決に私たち「花工房カモミール」が力になればと考えていますので、今後ともよろしくお願ひします。

協力的かつ行動力があるので、とてもありがたいと思ひます。

マクロ的に見れば少子高齢化と人口減少が同時進行する社会で、中小企業がどのように生き残りを図っていくか?というのは大きなテーマであると思ひます。政策面では人口問題への対応をどうするか?を真剣に議論するべき時期にきている。フランスのように子どもが増えると、累進的に税額控除するのも一法。また行政の協力も必要だが、どちらかと言えば、住民が主体になってまちづくりを考えるべきであると思ひます。

所得が増えないから消費を控える→生産や流通が低迷し、店舗閉鎖となるでは将来性が見込めない。

マルシェは新住民に対し、店舗のPRにもなり、実際に新規顧客の獲得にも役立っているが、まだ集客力が弱い。その辺が今後の課題といえる。

民間企業は慈善事業ではなく、利潤を追求するものであることを忘れてほしい。

フリーマーケットとマルシェをいつも同じ場所で行ってほしい。

何事も長く続けるということは苦労も多く大変なことですが、参加者がいるということは、その人にとって有益な場であるということなので、未永く活動を続けてほしいです。良い活動であれば、自然と人は集まってきます。

マルシェは毎回参加させて頂いていますが、素晴らしい取り組みだと思います。継続は力なり、という言葉がありますが、是非之からも未永く続けて頂きたいです。

店構えをつくってモノを販売すること自体、初めてだったので、大変勉強になりました。お客さんとお話をしながら販売できるのが良かった。

お客さんの声も大変参考になります。正直言って、「まちづくり」のために参加したという意識は持っていませんでした。すみません。

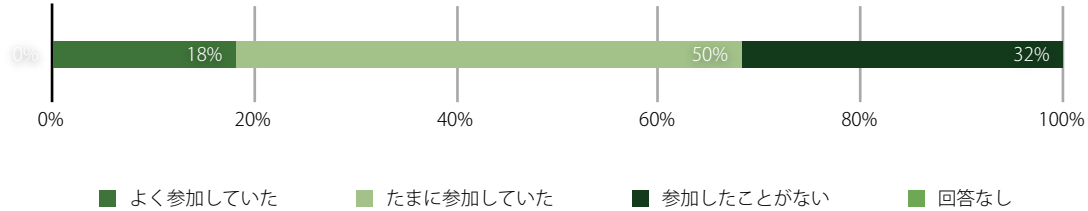
まちづくりに取り組むUDCKのような機構があり、柏の葉が羨ましいです。幅広く市民が参加できるマルシェの存在は私には貴重です。近頃毎回テーマがあって面白いですね。11月のクラフトフェアはちょっとよくわかりませんでしたが、毎月季節感のあるお菓子を提供したいなと思っています。地元の素材を使えると良いのですが、今のところちょっと難しいです。

二番街ができればまた柏の葉の雰囲気が変わりますね。かなりリッチなイメージです。千葉大はどうなるのでしょうか。あまりエコな印象はないのですが、私の住みたい理想のまちは、まちで太陽光若しくは風力発電をし、生ゴミを一ヶ所に集めて肥料をつくり、畑をつくり、産直販売をすることです。井戸があってまわりで井戸端会議も良いですねー。

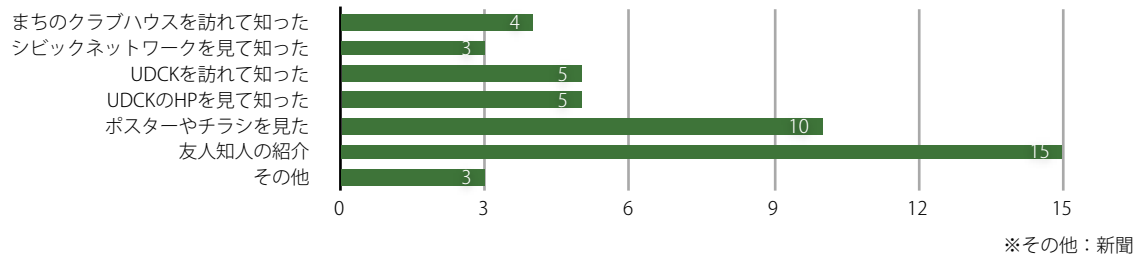
まちのクラブ活動分析

1 まちのクラブ活動について 参加のきっかけ等

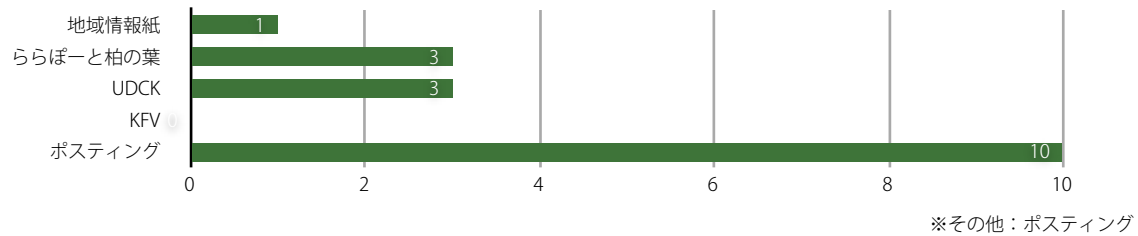
1.1 これまでにUDCK以外で行っている活動などに参加したことはありますか？



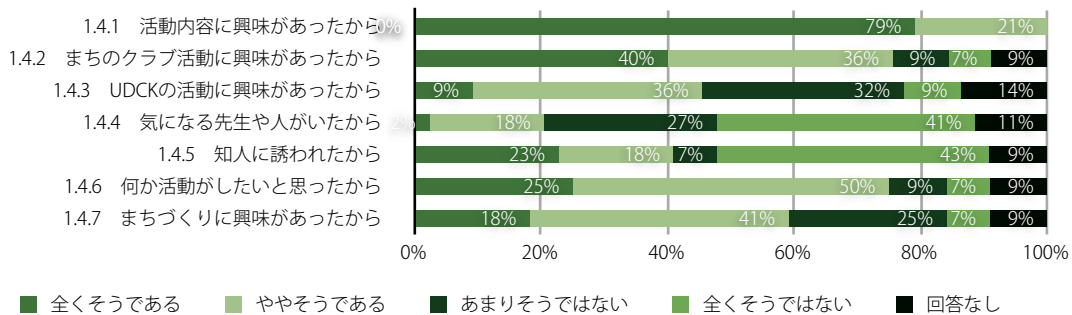
1.2 まちのクラブ活動を知った理由



1.3 1.2で「ポスターやチラシを見た」という人はどこで見ましたか？



1.4 参加しようと思ったきっかけ

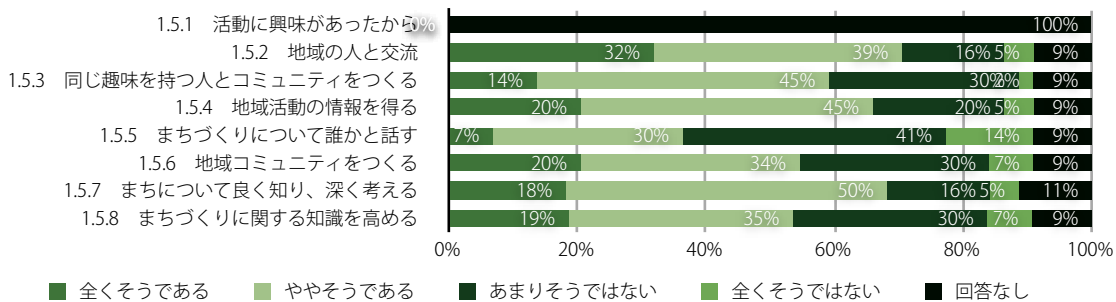


1.4.7 その他にあれば書いて下さい

- ・自分の住むまちで人の輪を広げていきたい
- ・趣味と同じクラブがあったから
- ・地域の人とのコミュニケーションが欲しかったから、自ら探しました。
- ・電球をくれるモニターになりたかったから
- ・地球のために役に立てればと思った
- ・転居してきたため、ネットワークに入りたかった

・柏の葉で知り合いが欲しかった

1.5 参加の目的

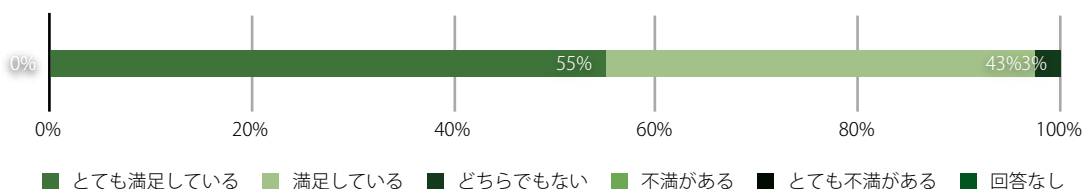


1.5.9 その他

・より良いまちづくりをしていきたい、参加していきたい

2 まちのクラブ活動 ご感想

2.1 活動内容の満足度について教えてください。

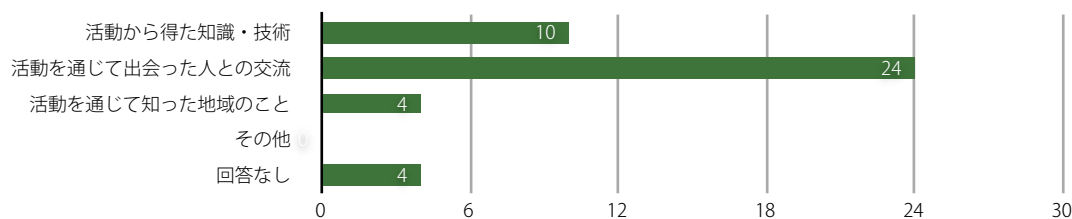


2.2 2.1でどういうところが良かった、または良くなかったのかその理由を教えてください。

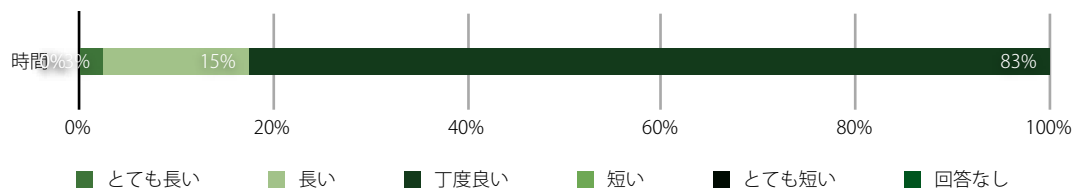
- ・とても入りやすい雰囲気であったことです。
- ・趣味が共有でき、かつ地域資源が得られる
- ・人と出会う
- ・知識が得られた
- ・地域の人と話す事が出来た
- ・友達ができた
- ・先生を始め真面目に集中して取り組んでいるので
- ・想像していたものより、内容が充実していた。
- ・はちを通して地域の自然や身近に色々な花があり、蜜源となっていることを知った、また多くの人たちと知り合えたこと
- ・活動+交流のきっかけをつくって頂いた。一方通行ではなく、活動と一緒にしていける点が良いと思います。
- ・ハロウィンパーティに参加、子どもが楽しめたから
- ・ほぼボランティアでやって下さって、参加しやすい
- ・親も子どもも十分に楽しめた
- ・企画が盛りだくさんで、飽きる暇もなかった。
- ・親子で楽しめました。雰囲気もよかったです。
- ・子ども達がお店を色々回って、お菓子をもらい、楽しそうだった。飲み物が足りない。パーティの途中で持って帰る人がいて、寝て起きてきた子どもの分がなかった。
- ・スタッフが明るい。参加する人も同じような考えで取り組む
- ・親子で楽しめるところが良く、子どもを放ったらかす人がいたのが悪い
- ・内容が楽しめるものだった
- ・エコを意識し、環境を良くするところ
- ・同じマンションの人と知り合えた。
- ・先生はじめ皆さんの雰囲気がとっても良い。内容がとても充実している。

- ・ 地域の人と交流ができた。（色々な世代の人と知り合えるのが特に良い）
- ・ 誰でもwelcomeな雰囲気がまずあるところ
- ・ 一つのイベントに参加することによって、知らない人と交流が持て、楽しさや感動などが得られる。
- ・ 1、2歳等の乳幼児連れで、参加させてくれるところと、参加費が無料、安価なところ。
- ・ 子どもが喜び、思い出になるところがすごく良いと思う。
- ・ 知りたいことを知ることができた。自分一人じゃなかなか得られない知識が得られた。
- ・ 最新のエコシステムに参加していると感じたり、自分の生活が地域の役に立っていると感じた。
- ・ 色々なイベントに参加し、親子で楽しめる。
- ・ 準備の段階から参加してつくりあげることができたから
- ・ 地元の身近な人が先生であること
- ・ 転居で移り住んだため、知り合いがすぐにできて良かった。情報が得られた。
- ・ 講師の方もボランティアなのに、親切丁寧に教えてくれるため
- ・ 知り合いが増えて、話が出来る人ができたから
- ・ 同年齢の子どもを持つ方と知り合えることができた。ボランティアの方など幅広い年齢の方と子どもが触れ合うことができた

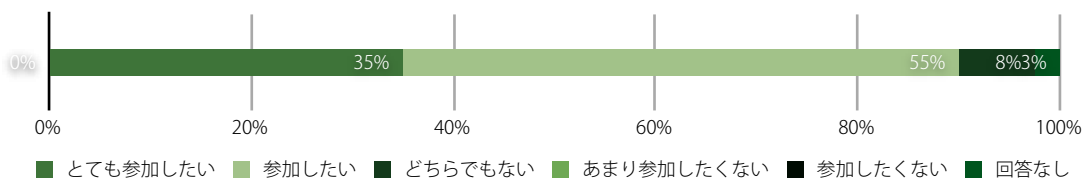
2.3 参加して一番面白かった・興味を持ったものについて教えてください。



2.4 1回の活動時間は適切でしたか？



2.5 今後も活動に参加したいと思いますか？

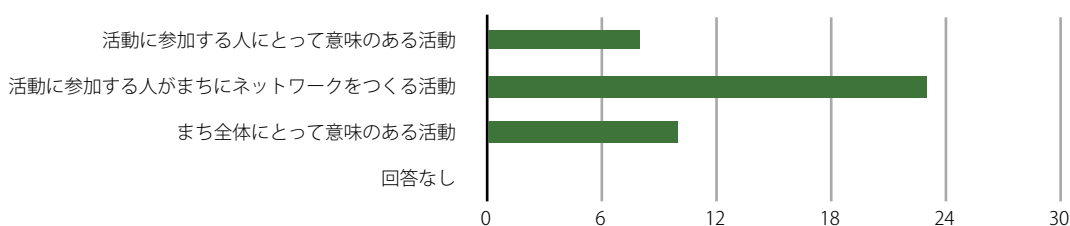


2.6 次はどのようなテーマ・活動内容を期待しますか。

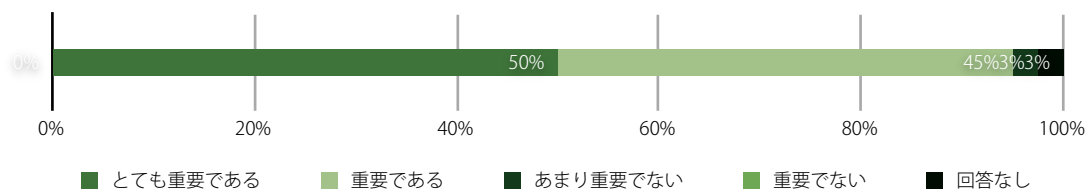
- ・ 自分が出来る範囲で活動に参加でき、まちのネットワークにつながり、自分の参加したことが少しでもまち全体にとって意義のある活動となるような内容
- ・ ソーラ発電の乗り物をつくってみたい、そんなクラブがあれば
- ・ まちぐるみのエコ活動など、海外からの留学生たちとの交流
- ・ 音楽
- ・ やはり季節のイベント
- ・ 男女を問わない、誰でも参加できる活動。めんどくさいことはあまり望まない。
- ・ 留学生や学生との地域住民の文化交流

- ・子どもを対象にしたもの（小学生）。ウォーキング、自然散策、工作など
- ・季節毎の催し
- ・クリスマスパーティ、バレンタイン企画
- ・子ども向けのハロウィン、クリスマス、豆まき、おひな様など
- ・大勢の子どもたちで、一人ではつくれないような大きなオブジェをつくる
- ・クリスマスパーティあと毎年ハロウィンはやってほしい。
- ・室内スポーツ、工作、世代交流のパーティ
- ・家族で参加できるもの
- ・どのような活動があるのか、まだ把握していません。
- ・親子で体を動かせるような内容のイベント
- ・音楽関係など
- ・ペットに関するもの、例えばマナー講座とか。
- ・地域の歴史を知りたい
- ・クリスマス会やお正月行事など、子どもたちが興味を持ちそうな活動
- ・七夕。七夕の劇や短冊作り。どうして七夕をやるのかなどの由来を子どもに教えたい。
- ・将来のまちについて考えていく、人の繋がり
- ・幼児向けのイベント
- ・子どもと一緒に参加できるもの
- ・音楽が好きなので、仲間づくりのきっかけになるようなイベントなど
- ・料理（レパトリーを増やしたいので）
- ・乳児がいる家庭が多いので、公園などで交流を深められるような企画

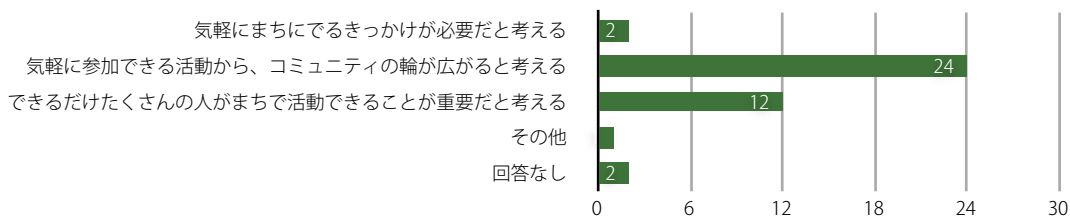
2.7 クラブ活動がまちづくりの中でどのような役割を担っていると考えていますか？



2.8 クラブ活動の柏の葉のまちづくりの中における重要性についてどう考えていますか？



2.9 2.8でとても重要である・重要であると答えた方はどうしてそう思いますか？

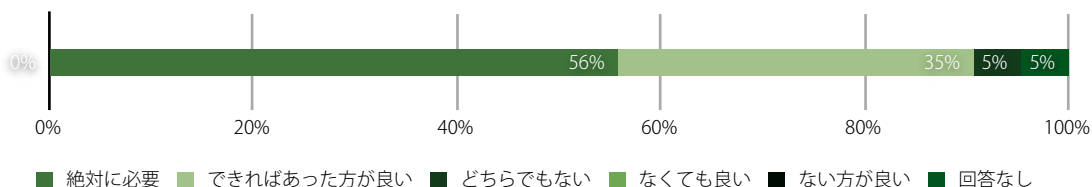


2.10 まちのクラブ活動にあっという間ということはありませんか？

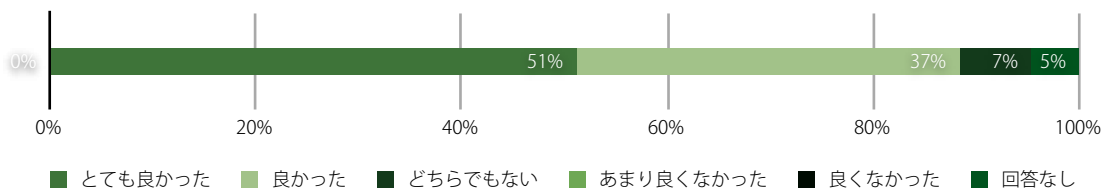
- ・若い方々、中年の方々、高齢の方々がつながっていくものになると良いと思います。
- ・活動に使用できる部屋
- ・年齢や男女の垣根を越える活動
- ・クラブに合った活動場所（屋外活動）
- ・世代間交流、多国籍間交流
- ・料理教室
- ・自然観察クラブ、古い木を観察したり、小川の生物を観察したり、道端の植物や食べられる草花、キノコなど。知識が必要！
- ・バーベキュー
- ・音楽クラブ
- ・皆で何かを作り上げるなど
- ・子どもも参加できる時間帯の囲碁クラブ
- ・フットサル
- ・皆が集える部屋、調理室、体育館のような運動ができる部屋（床に配慮したもの）
- ・子ども向けのおけいこごと
- ・テニス等のスポーツ
- ・季節のイベントを楽しむ（お正月、バレンタイン、イースター、夏祭り、ハロウィン、クリスマスなど）
- ・勉強や読書等をする空間、何かをするだけでなく、自由に出入りのできる場所があれば良いと思う。
- ・地域にある大学や企業、商店などのエコ活動
- ・和算クラブ
- ・常設サロン：いつでも同じメンバー（交替可）のスタッフが少なくとも一人いて、様々な世代がふらっと気軽に立ち寄って話したり、お茶（持参可）したりという居場所づくりが必要かと思います。
- ・ガレージセール、物々交換会、英語で話すイベント
- ・土日・祝日に家族で参加できるような活動

3 KfVについて

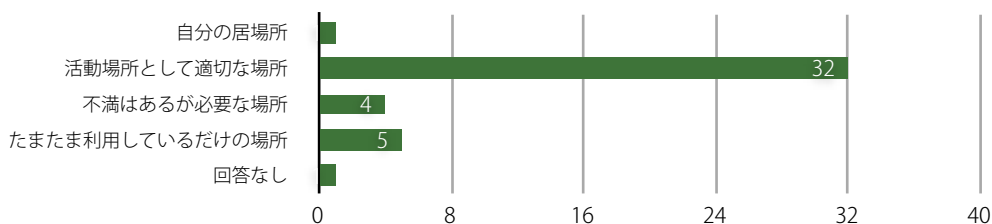
3.1 活動拠点としてKfVがあることについてどう思いますか？



3.2 KfVで活動できることはあなたにとって良かったですか？

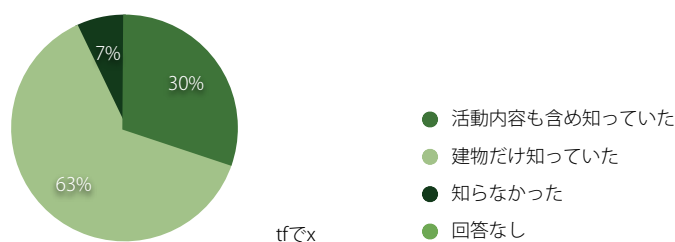


3.3 KfVはあなたにとってどのような存在ですか？

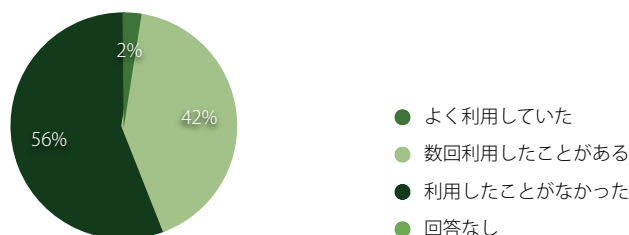


4 UDCKについて これまでの認知や関わりについて

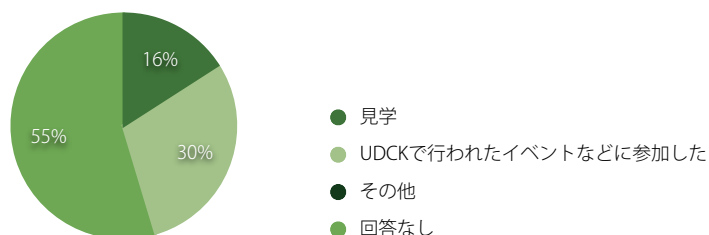
4.1 まちのクラブ活動に参加されるまでのUDCKの認知度について教えてください。



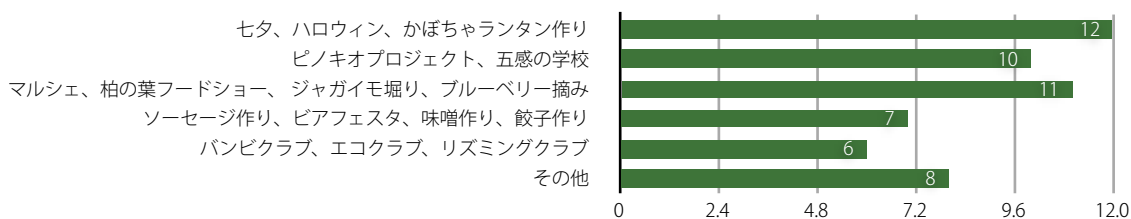
4.2 まちのクラブ活動に参加されるまでのUDCKの利用頻度について教えてください。



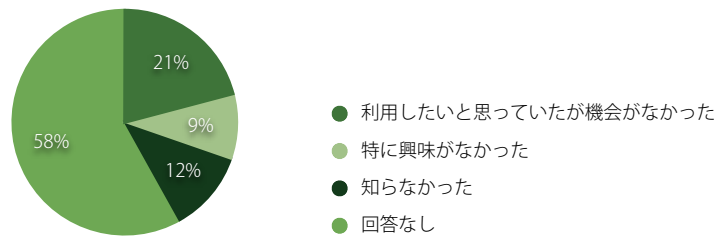
4.3 4.2で利用したことがあると答えた方は、利用目的を教えてください。



4.4 イベントやプログラムに参加された方は、覚えている範囲でイベント名や活動内容の記載をお願いします。

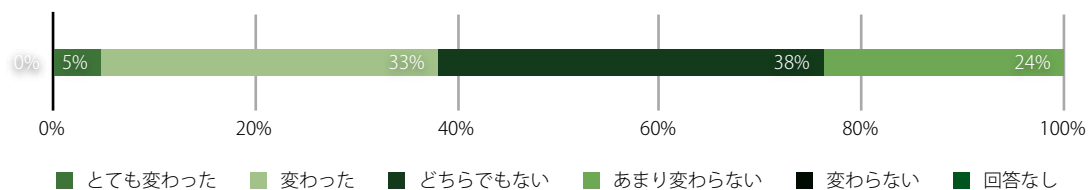


4.5 4.2で「利用したことがない」と答えた方は、利用したいと思っていましたか？



5 UDCKについて 印象、期待、感想など

5.1 クラブ活動への参加後、UDCKの認識が変わりましたか？



5.2 上の設問で、変わったと答えられた方は、どのように変わりましたか？

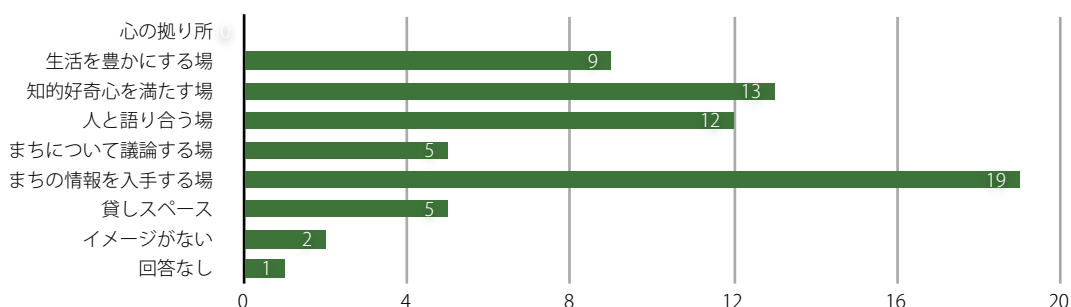
- ・ コーディネーターの方々、イベントで知り合った方々との恵まれた出会いが心のドアを開いてくれ、この地で生活している、そして生活していこうと実感しました。
- ・ イベントに参加し易くなったかも
- ・ 今後もイベントをチェックして、参加してみたいと思った
- ・ 個人ではできないこともクラブに参加することで、大きな行事に参加できる
- ・ 色々なイベントに参加したいなと思いました。
- ・ 何も知らなかったので
- ・ まちづくり、ひとづくり、交流づくり
- ・ より身近なものになった
- ・ おぼろげながら、内容が徐々に解りつつある
- ・ あまり敷居が高くないのかもしれないと感じたこと
- ・ 何の建物かわからなかったが、少しわかるようになった
- ・ こういう活動は良い事だと思った

5.3 UDCKに期待する「あったらいいなあ・こうなればいいなあ」という機能はありますか？

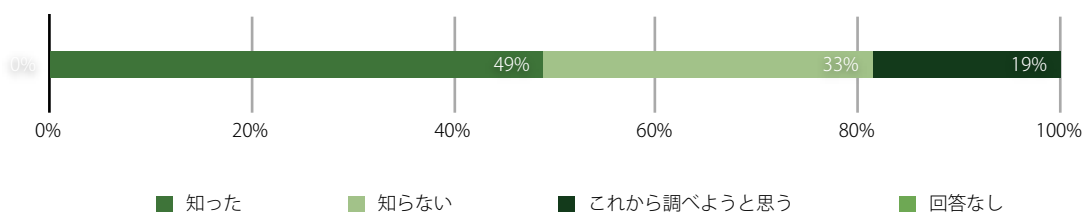
- ・ クラブ活動への参加というと、何か重いイメージを持っている人が意外に多い気がします。できるものに参加するだけで結構です、という感じで呼びかけていき、それが次の活動へと結びついていくという風に、型にはまったものではなくて、できるものからの参加、本当はどういうものかと躊躇している方に気軽に参加できますという印象をもらう事の効果は思っているよりも大きいのではないかと思います。
- ・ 小団体で気軽に使える部屋
- ・ 知識がなければ、イベントに参加できないというイメージがある
- ・ 障害者が働ける場所、廉価でお茶が飲める場所
- ・ ボランティア募集や手助け要請などの交流できる掲示板があれば良いとおもいます。
- ・ このまま続けてほしいが、あまり多くなると、クラブハウスが使いつらくなることもあるので少し心配
- ・ イベント等もっと宣伝した方が良い
- ・ もう少し広ければいいな、音楽を流しても場所を借りられる
- ・ メンバー登録がより身近にでき、登録フォームがネット上にあると良い

- ・特にこれから知って行きながら
- ・広いスペース
- ・カフェ（読書ができる）
- ・貸しスペースとしてイベントなどに貸し出してほしい
- ・読書ができたり、勉強ができる空間
- ・何をしているかわからないので、関係者以外立ち入り禁止みたいなイメージがある。誰でも入って良い雰囲気になると良いと思う。
カフェがあるとか。
- ・子どもが参加するイベントが多い気がします。大人が楽しめることがあったらと思います。
- ・一人では行き辛い、居辛い雰囲気なので、スタッフさんももっとオープンな感じにしてほしい。UDCKとKFVの関係がよくわからない。

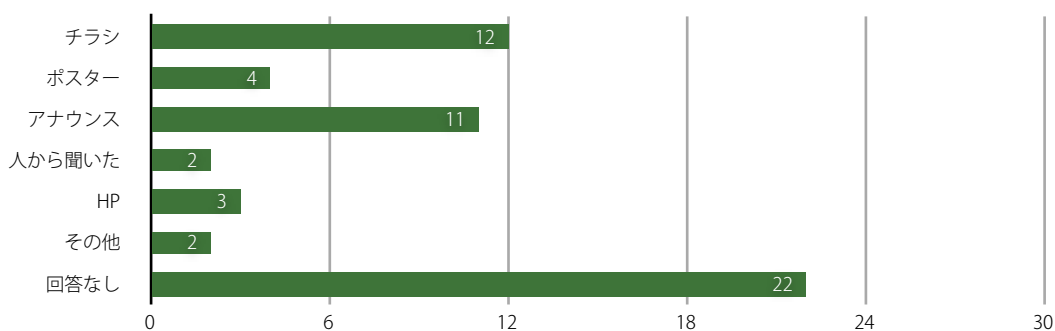
5.4 あなたにとってのUDCKのイメージはどのようなものですか？もっとも当てはまる2つに○をつけてください。



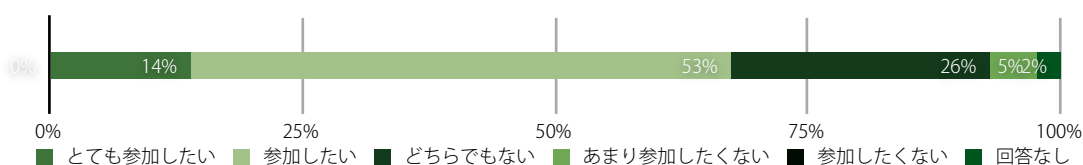
5.5 クラブ活動への参加をきっかけに、他のUDCKの活動を知りましたか？



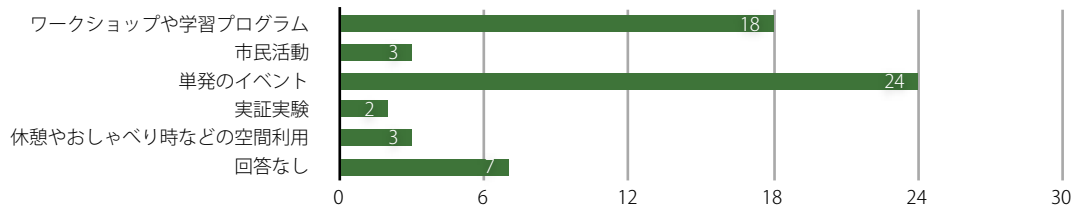
5.6 知ったと答えられた方は、何で知りましたか？



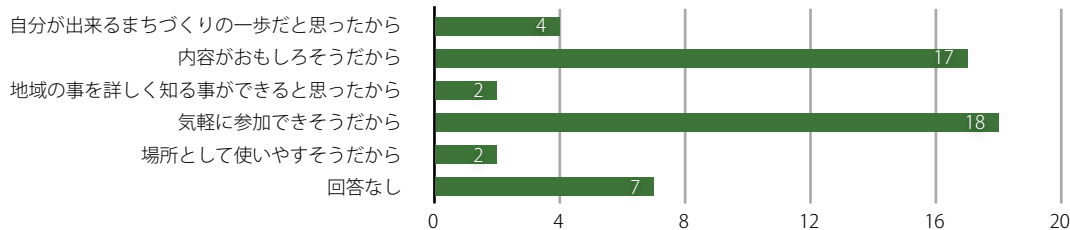
5.7 クラブ活動への参加をきっかけに、他のUDCKの活動に参加しようと思いましたが？



5.8 参加したいと思うものがあれば○をつけて下さい。

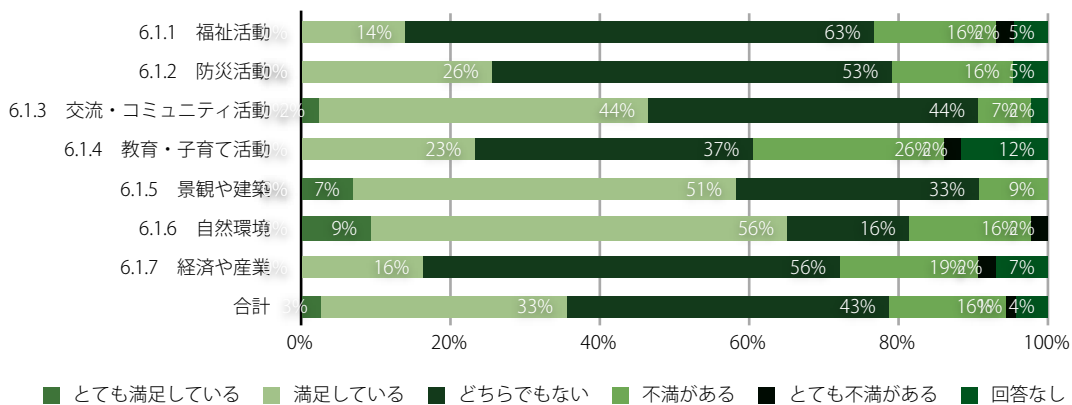


5.9 5.8で選択した理由

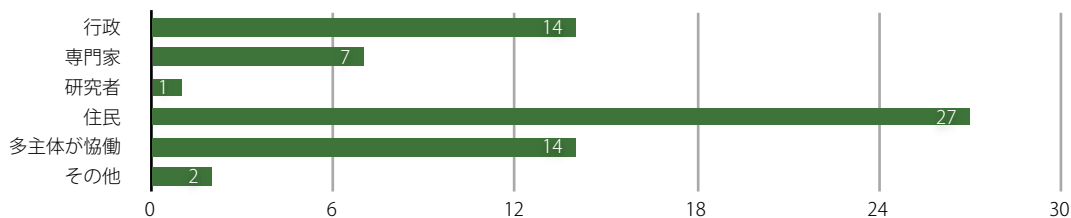


6 お住まいのまち、まちづくりについて

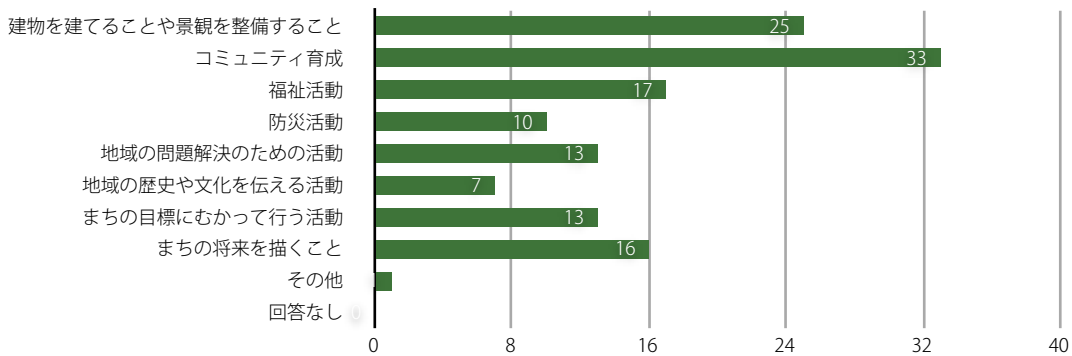
6.1 お住まいのまちの満足度について教えてください。



6.2 あなたの考える「まちづくり」の主体はどのようなものですか？該当するもの全てに○を付けてください。※複数回答

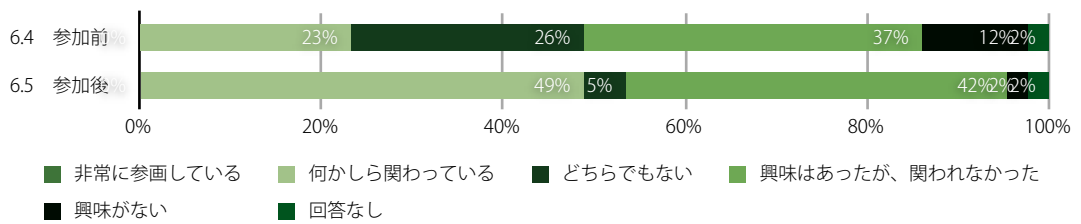


6.3 あなたの考える「まちづくり」の定義はどのようなものですか？該当するもの全てに○を付けてください。※複数回答

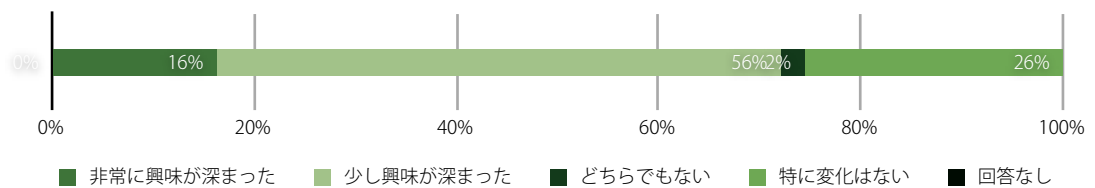


6.4 まちのクラブ活動に参加する前、あなたはどの程度地域のまちづくりに関わっていると感じていましたか？

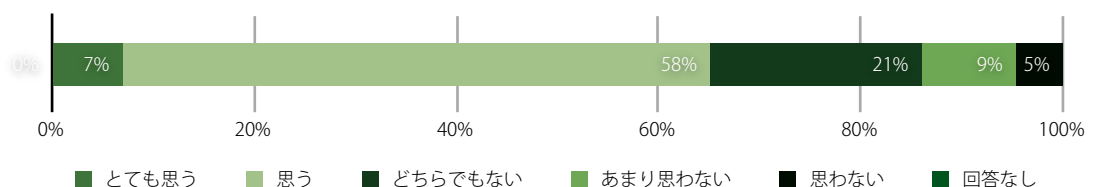
6.5 まちのクラブ活動に参加した後、あなたはどの程度地域のまちづくりに関わっていると感じていますか？



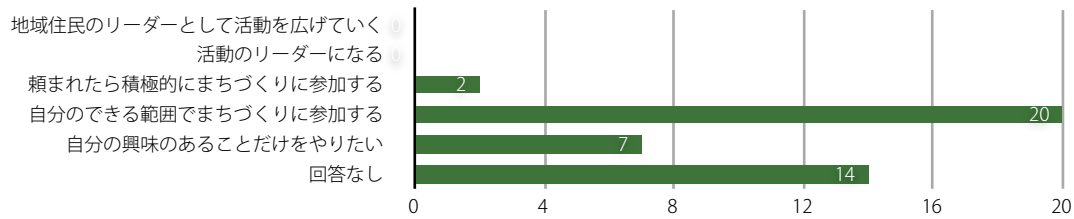
6.6 まちのクラブ活動への参加を通じて、地域のまちづくりや地域の活動への興味や意識は変化しましたか？



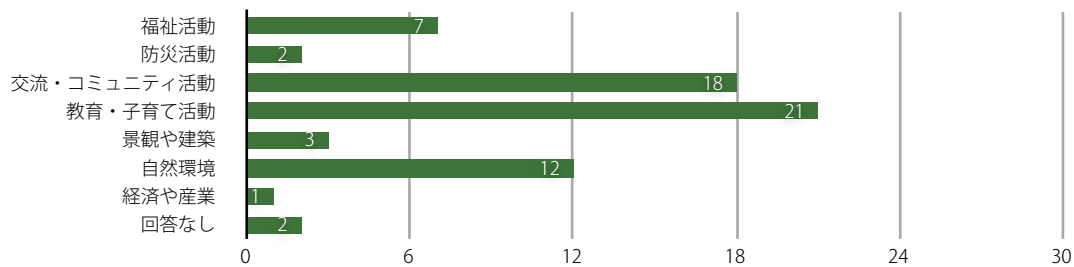
6.7 住民として何か主体的に地域の活動を行いたいと思いますか？



6.8 6.7で「思う」と答えた方はどういうことを行いたいと思いますか？



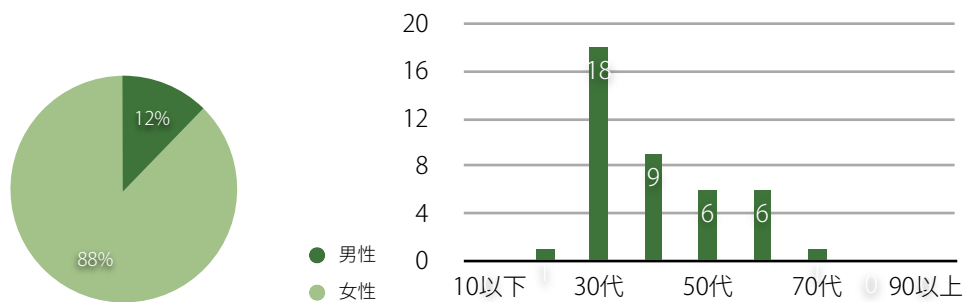
6.9 まちづくりのどのような分野に興味がありますか？



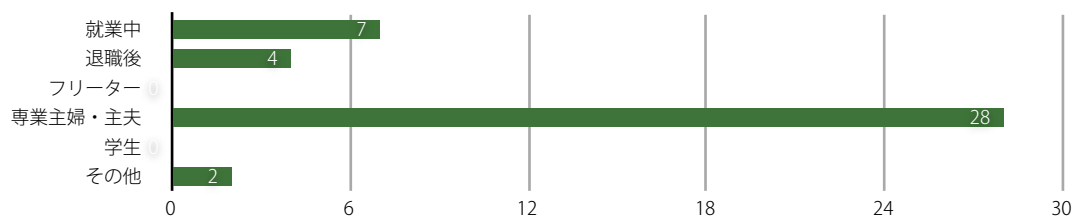
7 最後に ご自身について教えてください

7.1 お名前 () (差し支えなければご記入ください)

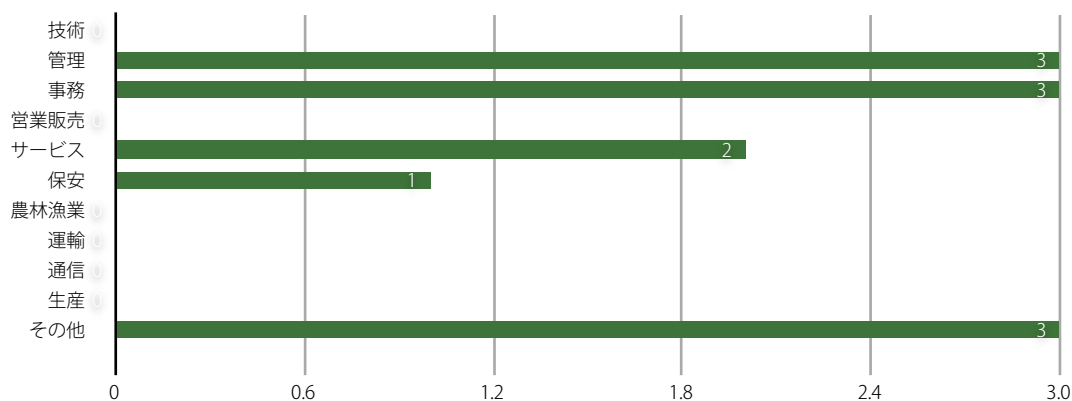
7.2 ご性別を教えてください 7.3 年齢



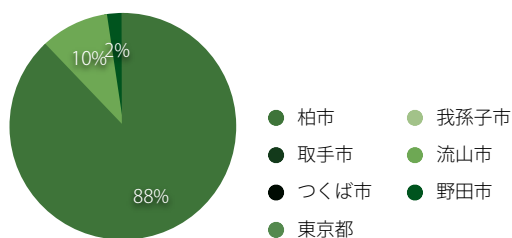
7.4 就業状況について



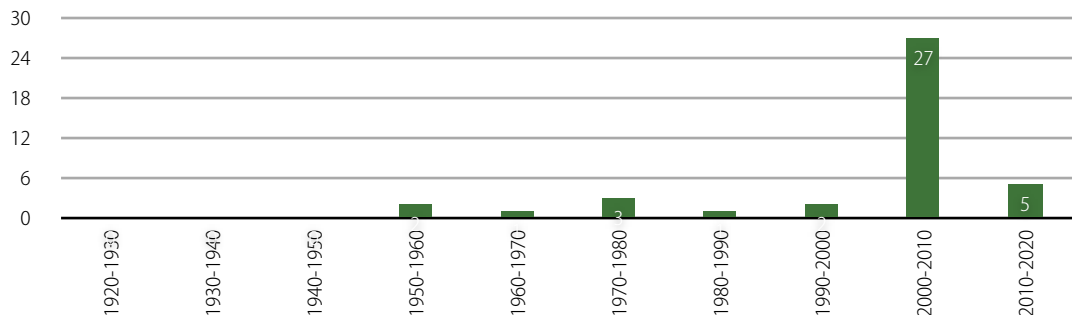
7.5 7.4で①、②を選択された方に質問です。ご職業の職種は何ですか？



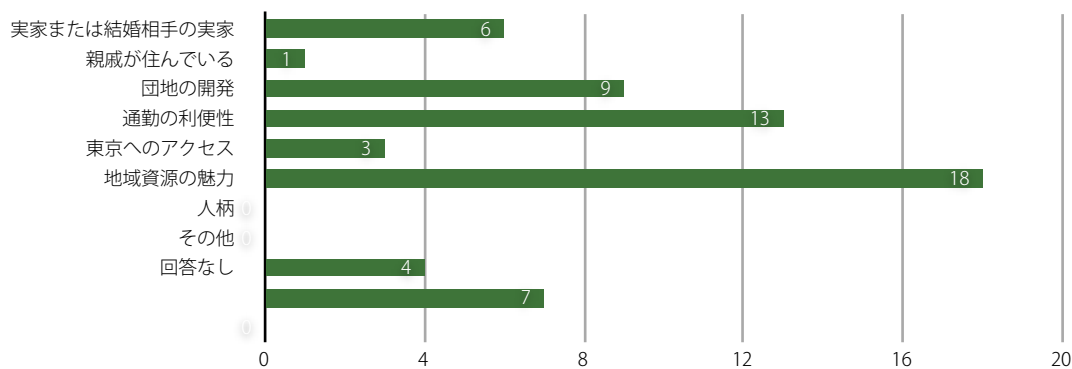
7.6 住んでいる地域 (例：柏市若柴)



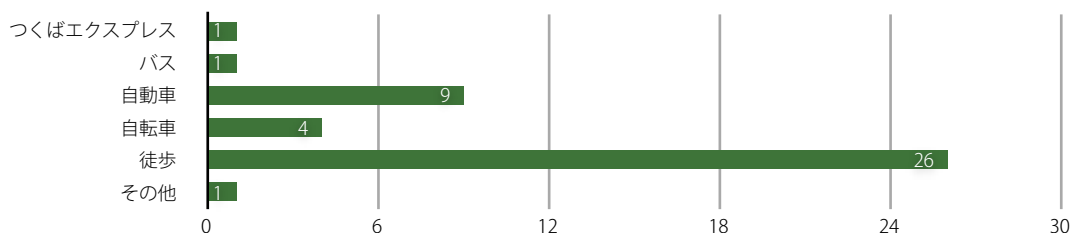
7.7 いつ頃からお住まいですか？



7.8 今の地域にお住まいの理由で最も当てはまるものは何ですか？※複数回答可



7.9 UDCK・KFVまでの交通手段と時間



自由回答

参加したい、参加しないの中間層、自分でもできるものであり、そして溶け込み易いものならば参加したいという方は思っているよりも多いのではないかと推察されます。この層の入り易い導入の方法は、これからの広がりには大きな力を持つものではないかと推測されるのですが。

また、UDCKの建物について

雨天時でも屋外が使用できるようになれば良いと思います。屋外の水道の蛇口が一つというのは、後片付け時、若い人、年長者合同での作業という点から見ても、もう一つあった方が良いと思います。

開発途上のまちに移り住むチャンスなどあり得ないので、この眼で確かめながら、楽しみながら、活動ができれば何かの形で参加していきたい。楽しみの一つとしてクラブ活動に参加するだけでなく、発案もしながら盛り上げていきたい。

このクラブはマンション購買のイメージ作り、PR用として立ち上げられたクラブと考えています。販売活動が終了すれば、企業も手を引くと懸念しています。部屋があれば活動できるクラブは良いのですが、屋外等の活動拠点が必要なクラブはクラブで確保するのは困難です。企業はまちづくりの計画段階で場所を確保しておく責任があると思います。

子育て世代、定年後世代、高齢世代が自然に交流できるイベントやクラブ活動があったら良いと思います。例えば、保育園と介護施設等の交流とか。子育てが終了した世代から、子育て中の若い世代に伝えたい事、伝える事も多くあるかと思ひます。

また、障害を持った方との交流等も自然にできるようなまちになると良いと思います。

リーダーの方の自然な感じで進めてゆくのが素晴らしい。

まちづくりは住民主体で行って行くものだと思いますが、自分を含め、多くの人は自分からそのきっかけをつくれな思ひます。そんな中、まちのクラブ活動はそのきっかけを与えてくれる存在です。そのきっかけをみんなで楽しく、持続できるものにしていくことが、今後の課題だと思います。

クラブ活動、UDCKは特定の人しか利用していないので、年齢・性別問わず利用できるようなプログラムを作った方が良いと思ひう。宣伝も必要。特にUDCKは活動内容のスケールが大きすぎて、一般の人には近寄り難い。(一般向けにも何かあるのかもしれないが、それが伝わってこない)

開発が進み、たくさんマンションが建ってたくさんの方が移り住んでくると思うので、必要な建物ははやくつくってほしいです。便利になる一方で、治安も心配です。

ハロウィンパーティ、とても楽しかったです。親子で楽しめるイベント、主婦のコミュニティ活動に今後も参加させて頂きたいと思ひました。

クラブ活動は興味があつて、参加できるときはしています。家ではなかなか作らないようなものを教えてくれるので楽しいです。小さな子どもを連れて行っても大丈夫なので助かっています。これからも利用させて頂こうと思ひています。

まちのクラブ活動のネーミングが親しみ易く、気軽に入れる活動場所と感じられ、良いとおもいました。また、個人として何ができるか考え、行動して行きたいと思ひます。このまちにきて良かったと思ひています。

UDCKについてわからないことが多い。誰が何のためにつくったのか、活動しているのか。

この地域に移り住んで数ヶ月で活動内容がわからず、それをどう知るのか手段がわかりません。勉強不足でなかなか手が回らないというのがありますが。

UDCKとまちのクラブ活動の関連がよくわからない

楽しく活動しています。もっと色々な種類のクラブが出来れば良いなと思ひます。

このようなまちづくりの活動や、コミュニティの場となる所があることは、とても良いと思ひます。UDCKの入り口をもっと自由に入り易く、入った後の空気を温かいものにすれば、もっとホッとするいい場になると思ひます。今はなんだか冷たい空気が流れていて、誰に話しかけていいのかわからない雰囲気がある。

ハロウィンお疲れさまでした。今年は去年よりも協賛していただけたお店が多く、パーティのお料理も豪華になっていて、子ども共々楽しめました。ありがとうございました。

まちのことはよく知らないので、クラブ活動などを通じて少しずつ知れると良いと思ひます。

新しいまちなので、人と人の繋がりを大切に活動、気楽な活動で人の輪を大切にしたら良いと思ひう。また、せっかく大学や公的機関がまわりにあるので、活用したイベントがあると良いと思ひう。

これ以上キャンパス駅前にマンションを建てるのはやめてほしい

バンビクラブに参加したのですが、とても楽しく近所の方とも交流でき、私自身リフレッシュになりました。今後も積極的に参加したいと思いました。今の家を購入した理由の一つとして、柏の葉のまちづくりに期待したというところもありましたので、今後も色々な活動があると良いなと思います。駅前の便利な場所にUDCKやクラブハウスがあることはとても貴重に思います。ベビーカーも押し易いので、車いすの方も使いやすいのではないですか。

開発された「まち」の変遷にとっても興味を持ち、他の理由もあって、こちらに移り住みました。福祉に強い「まち」は防災にも強いと言われてます。コミュニティづくりは大変重要であると考えています。

建物などハード面のバリアフリーだけではなく、まちのクラブハウスなどでの活動から、コミュニティを形成し、住民が主体となったとりこぼしのない福祉活動につながることを夢見ています。住民の声から地域社会、行政を巻き込んだネットワークが生まれることを希望しています。開発時の企業主導の広告的な活動を50年後にどのような形で継続して行けるのか？一昔前のニュータウンのゴーストタウン化に教訓を得る必要があると思います。今は目に見えないかもしれないまちのクラブハウスなどの草の根的活動にどこからどのように財源を得て充実させることができるのか？難しい問題ですね！

UDCKの方にはいつも楽しいイベントを主催して下さい、感謝しております。

また是非参加させて下さい。

新興住宅地で移り住んできた人が多いので、これからつくりあげていこうという心意気を感じます。近所の方も皆さんフレンドリーなコミュニケーションをしようという姿勢の方が多いように感じます。

資料3 ヒアリング記録1

ふるさと協議会編

no1～no4（合計9人）

No	1 (4人)
日時	2009年11月17日 (月) 14:00～ 16:00
場所	布勢近隣センター会議室
対象	富勢ふるさと協議会会長、副会長、近隣センター所長
参加者	●ふるさと協議会：後藤敏さん（会長）、加藤さん（総務部長）、関口さん ●近隣センター：中島さん △柏市：高波さん、小川さん（柏市市民活動推進課） ○東京大学：前田英寿、三牧浩也、金令牙、著者
質問者	○前田英寿、三牧浩也

●後藤：ここは22町会をまとめて、色々な行事を行っている。ふ

るさと協議会は新しい人と古い人がなかなか交わらないので、昭和55年に鈴木市長が交流をもたなければいけないということではじまった。柏では今20の協議会がある。うち、社会福祉協議会と一緒にやっている。（していない地域もある）以前は24町会だったが、北柏がひとつにまとまったので、22町会でやっている。

加藤：高齢化に伴って、地域のふるいものがだんだんなくなっている、また古いものを活かしていこうということで、富勢の総ざらいを行っており、「富勢百科」を作成している。

また、都市マスタープランとの関係について教えてほしい。

関口：（加藤さんと一緒に百科を作成している／30年前にこのまちに移り住んで来た）地元にあるものをインタビューしたり、住職の話の聞いたり。まちの祠など、富勢幼稚園にある石といった、昔から大切にされているものというものがわかってきた。インタビューをしながら思うことは、戦争体験者もいて、それを若い世代につなげる役ができるのではないかと。富勢百科というのは富勢の100の物語をつくりたいと考えている。

中島：地域の要望と市の要望のつなぎ役。

三牧：趣旨説明。

三牧：一点目からお願いします。 どういう風にこのまちができてきたのか、そしてその中でふるさと協議会がどのような役割をしてきたのかということについてお願いします。

後藤：この辺は布施という地域ですが、弁天さんを中心にしてきた場所です。弁天さんは1200年前くらいにできた。

（神社はだいたいどこもそれくらい）布勢は門前町です。弁天さんからこの布勢入り口までの通りであらゆる商売の発達があり、まちができていった。（旅館、料理、下駄、油、豆腐、等色々）

また渡しがあった。（荷物が渡る際にはひちりがわたし？、人が渡る際には布勢貸し）戦国時代から発展している。人間よりも馬の渡しの方が多かったと言われている。荷物の問屋が5軒ほどあり、そこで仕分けをして江戸へ持っていったという話。

布施弁天の近くにある家は新しいまち。昔は水が入らないように高い場所に家があったため、高い場所にある家は古い家ですね。柏で一番古いのは土村（松戸駅の方）のほうだといわれている。

この辺は国道（6号線）と鉄道ができる前まではすごく栄えていた。弁天さんは成田さんより栄えたといえます。成田さんは弁天さんにお金を借りてつくったとも言われている。ただ布勢の弁天さんは門前町を作らなかったの为荣えなかったのかもしれない。成田さんみたいにつくっていたら栄えていたかもしれない。境内も小さい。

布勢弁天東海寺といっているが、東海寺はこやという部落があり、戦国時代に弁天さんは焼失した。そこで、うちの先祖（ごとうまたえもんさん？）が町会の人を集めて何か建てなければいけないということで小さな社を建てた。それが1674年。祭礼のためにお寺を建立。（その後は3回建て替え）そして誰か留守番が必要ということで、東海寺を呼んできた。（1701or1702年）東海寺自体は300年前にここへ来た。また、20軒位しか檀家がなかったので、留守番をすればいくらか裕福になるのではないかとということもあった。始めから東海寺があったわけではない。

三牧：昔の地図を見ると昭和20年位前までは、昔ながらのまちなみだったようですね。

加藤：まわりは田んぼでしたね。地図をなかなか読み解くのが難しいが。柏市の広報に昔の字がかいてあるものがある。また、「布勢の散歩道」に歴史的な事柄が記載してあるので参考にしてください。今これをDVDに作ろうとしている。散歩道の紹介。

後藤：一昨年の12月に教育委員会でうちの古文書を飾ったので、その時の弁天さんの資料が置いてあると思うので、の史資編？（ししへん）さんというところに高野さんという人がいて、そのところへ行けば良いですよ。

三牧：富勢村というのが大正時代にできて、その際に我孫子と柏でどちらにいくかという話があったということですが、その辺をお聞かせ下さい。

後藤：我孫子と柏でどちらに行くかということは、土谷津と根戸がどっちに行くかでかなりもめた。土谷津は柏と我孫子で入り組んでいる。根土もそうです。富勢村はひたせ駅というところがありました。そこまでは富勢村だったんですよ。今は我孫子根戸、こちらは柏市根戸ということになっています。国道を挟んで分かれている。根戸は我孫子に隣接していたから良いが、土谷津は我孫子から離れた場所にあるんですよ。そうすると我孫子が孤立しちゃうから大変みたいですよ。

布勢という名前と富勢という名前がついた理由は、どうしても布勢という字を残したかったが、富勢以外の人が反対したため、富勢は「ふせ」とも読めるので、この字を使ったといわれている。

三牧：昭和40頃まではまだかなり田んぼが多く、新しい住宅はないということが昔の地図から読み取れるのですが、新しい住宅ができたのはいつごろからですか？

関口さん：布勢新町ができたのが、農地解放されたのが昭和40年前位までで、その当時から。

後藤：布勢新町というのが三井不動産の開発時にできたまち。その頃、お金持ちがたくさん来て、農家の人々との間がうまくいかなかったために、このふるさと協議会ができた。それが始まり。協議会ができてからも10年位はうちとけなかったらしい。

前田：もともと山林だったんですか？

？：もともとは山林ですね。布施新町はそこを開発した。始めに来た人は駅からも遠いし、不便でびっくりしたという。

前田：地盤は良いんですね？

？：地盤は良いですね。

高波：北柏と柏はどちらを中心に利用されているのですか？

後藤：北柏は貨物駅しかなかった。人が利用できるのは我孫子と柏しかなかったし、柏は新しいので我孫子が主流だった。

三牧：布勢新町の開発は我孫子の方で続いているように見えるのですが、全部一体で三井が開発したということですか？

藤田：そうですね。

加藤：恐竜の形をしているのが、頭の方が近隣センターで、しっぽの方が我孫子の久寺家、これはかなり大きなところで、ここが今約2000戸。

三牧：当時開発がおきた際の地元の反対等はあったのですか？

後藤：あったとは思いますが、安田が多かった土地なので、（あまり良い土地でないためお米もあまりとれない）それを見定めて開発もしたと思う。当時地元の人もお金がほしかったので承諾した。そこまで反対はおきなかったのだと思います。

三牧：昭和40～50年頃に人が来たということですね。

藤田：50年にはもうだいたい来ていた。私が52年に来たが、それ以降は大きな開発というのはなかった。

三牧：その時期にふるさと協議会ができたということですね。

加藤：当時大きな建物はなかった。

三牧：では3、4年で一気に建ったという感じですね。

小川：ふるさと協議会について説明。布勢新町とふるさと協議会のはじまりは関係があるのかもしれない。

後藤：光が丘団地とかはあったと思います。団地と分譲地は違いますからね。

三牧：近隣センターができたのはいつですか？

後藤：昭和55年ですね。

前田：鈴木元市長は有名な人なんですか？

後藤：いや、市役所の職員ですから。歴代協議会の組織という、町会長を主体にしてできた協議会なんですよ。町会長が全役員をやっていたのですが、ある時忙しくなって、誰か代理がいるかってことで、今の状態になってきた。今は町会長ではなくて、代行して行っている。町会長はみんな理事になっている。それから私で今4代目の会長なんですよ。始めは一人1年間だけ大塚さんという人がやって、2代目に16年間海老原さんという人がやって、3代目に坂巻さんという人が6年やって、私が7年目ですから、29年経っていると思います。

前田：会長さんは古い方のまちに住んでいる人が多いんですか？

後藤、鈴木：そうですね。その方が古い人の集まりが良い。地方は古い地縁や校縁、血縁が大切。

前田：幹部の組織の人は加藤さんや関口さんの様に新しく住まれた方も関わってくるのですか？

後藤：ほとんどの人が新しく住んだ人。私だけなんですよ。

三牧：では2つ目の運営体制についてお伺いできますか？

前田：世帯数は？

後藤：富勢の世帯数が10,530世帯。富勢出張所館内の人口が24,926人、世帯数1,586。これは字別になっているので町会別はわからない。町会に加入している人は約70%で世帯数は8721世帯。会費は町会によってバラバラ。うちは戸あたり年間230円それで160万ほど集まる。また、市からは135万円。

三牧：先ほど70%くらいとおっしゃっていましたが、新しいところは半分くらいで、古いところは多いという感じですか？

後藤：北柏の方は入っていない人が多いみたいです。

加藤：柏都民とよばれる人たちが多くいます。アパートやマンションが多い。マンション自体で入ってくれば良いのですが。20、30人のところは関係ないよというところが多い。

三牧：新旧のコミュニティについての話がでたが（いくまでに10年くらいかかったというお話）、イベントを重ねる毎に、少しずつコミュニティをつくっていったという感じですか？

後藤：今は富勢地域というのは新しい人が古い人になってきて、ここに骨を埋めようという人が増えてきたので、積極的に参加するようになりました。

三牧：当初は人があまりこなくて、困ったということですかね。

加藤：一時期、布勢新町は外国人が住んでいるといわれた時期（10年から15年程）があった。今2000所帯あって、この一角が比較的大きな顔をしているが、10年か15年は外国人が住んでいるんじゃないかといわれる程だった。

中島：富勢地区の会合会と6町地区の会合会が別々に行われていた時期もある。

三牧：特に何かがあって、急に仲がよくなったというわけではなく、時間の経過とともにという感じでしょうか？

後藤、加藤：そうですね。一杯飲もうというコミュニケーションがだんだん広がっていったという感じですね。たくさん働きかけていった。

高波：色々地区での行事とか組織の方でイベントをいれながら、その中で少しずつなっていたんですね。情報をお互いが発信することが大切。

後藤：協議会の役目としては、1町会ができないこともありますよね、そういうことを全部まとめてやるということがありますから、ある程度声を掛けて、まとめてやる。運動会や防災訓練をするにしても、当時は敬老会とかも自分たちだけではできないからということでもまとめていったということもありますね。それが協議会の役目だし、それをきっかけに色んな人が集まってくるということがありますからね。今もそのつもりでやっている。町会の代表みたいな。

加藤：センターに保存されている色々な行事のCDにもありますが、このように一回で終わってしまうような行事があって、たくさんの方が顔を合わせる機会があり、いざという時には役立つ。それを前提にそれを取り仕切っていることが協議会の良いところですね。

三牧：組織運営の話になりますが、年間の予算はどのくらいですか？

後藤：負担金も込めると500万くらい。お祭り等を行う際は別なので、260万と135万で350万ほどですかね。

この予算では厳しい。活動費がなくなってしまう。事務費が結構かかってしまう。お祭りの費用は80、90万くらいでくるが、それを他のもので使っているから、ほんの10万くらいしか使えない。事務費が半分くらいかかる。

加藤：後藤さんは良くあちこち車で移動しますが、車のガソリン代はでない。ボランティアです。

後藤：ふるさと協議会の報酬はない。出たお金は自分もち。事務員は協議会で雇っている。年間50、60万円位。

加藤：もらっていないのが強みでもある。ふるさと協議会では報酬は誰もない。

たまに交通費はもらえる時がある。また、うちみたいに事務員を雇っているところもある。一日置きで半日くらいです。年間50、60万ですね。事務員がいない日は所長と寺田さんという方の2人で行っている。

前田：市の任務の中ではふるさと協議会を支援するというのがあるのですか？

小川：あります。コミュニティの所管の話があります。ふるさと運動からの流れ。

中島：ここはB管の設定、協議会の仕事と施設の貸し借りの業務がメイン。しかしA管というのは、松葉のように担当職員というのが協議会もして合わせて市の業務も行うというのがあります。

実際協議会のその他もろもろの援助となったりパイプ役となった場合、やはり担当職員は、B管の方がやりやすいわけですね。もう一点が、協議会の職員は別にして、協議会の方の

レベルによって、市の職員の関与のレベルがかわってくる。富勢みたいなところは楽なんですね。

前田：A管は23箇所ですか？

後藤：Aは22です。22とはうちはここと根戸も持っているのです。根戸の近隣センターもある。

三牧：根戸の方は協議会の活動の拠点にはなっていないのですか？

後藤：あそこはほとんど管理人しかいない、所長は兼務している。

三牧：社協と一緒にいるために運営がし易いという話があったが、どうですか？

後藤：まだうちは合併していない。エリアが一緒だけです。今話合っている段階。なかなか難しい。

今年中に一本化するかもしれない。

中島：今の状況だと来年一本化がさせるのではないと思う。見方としては、協議会としてはいらっしゃいという姿勢だが、福祉ということを見ると、難しい。協議会とは地域の住民に対する見方というか、色が違うと思う。推進課の所管というか、親の考え（市）が強い部分も多いので、一本化するのが難しい。

三牧：組織として一緒にすれば良いでないかと思うけれど、そうでもないんですね。

中島：実際に一本化されている例をみても、各々違う役割をしていたり、違う方向に走ったりということが多くおもう。そういう事例を見て、今回富勢地域では、「はらを割って話しましょうよ」ということになった。お互いに、 $1+1=1$ でなく 3 になるように進めている。

ただし、高齢化という問題はある。これは避けて通れない。

三牧：エリアが同じだから、一緒にすれば良いでないかと思うけれど、そういうわけにもいかないんですね。

後藤：昔は同じときもあった。協議会の中に福祉ネットワーク部というのがあった。これを一時市が分けさせて、また一緒になれといっている。その辺もまた難しいです。

鈴木：個別を対象にした問題と集団を対象にした問題、根は同じなんだけれども、外側から見ると宿命的な問題になるんですね。一緒になったといっても、この問題は無視できない。

後藤：ネックになっているのは民生委員の人ですね。

小川：民生委員というのは、こうどう大臣からの任命というのものもあるし、町会長からの推薦でもある。

中島：自分たちが活動できる範囲というものが民生委員の方々もわかってきて、だいぶかわりました。協議会をさしおいて、自分たちの業務ができないという認識が増えて来たため、変化してきた。上手に協議会の中に入って

？：全部が全部社会福祉協議会の中に入っているというわけではないのですが、相当入っています。民生委員の方が。

三牧：基本的に町会の単位で入っているのですか？

小川：世帯数につき、何人の民生委員を指名しなさいというのが決まっている。

三牧：では次に、どういう活動をされているのかということをお聞きしたいです。

後藤：一番行っているのは八朔相撲（はっさくずもう）ですかね。

加藤：特に富勢で自慢ができるものは毎月出している「ふるさと富勢」という広報を発行している。（協議会の中で一番発行部数が多い）これでふるさと協議会と住民とのつながりがなめらかにいっているのだらうと思っている。これはプランと結果を軸にしている。一枚4円位です。ですから広報誌としては約4万弱です。

三牧：相撲の話をお願いします。

加藤：今年で15回です。もともとは280年前から行っている。資料を参考に、お金がなくなること、戦争などで人が出て行ってしまったことなどの際に中止した時もあった。

後藤：利根川の流域では60ヶ所くらい相撲の行事がある。子供を泣かせるもの等。

家康が入ってきた際のお祝いが始まったとか、色んな説がある。耕作祝いに弁天様に・・・今も耕作祝に行っている。

昭和36年に倒れ、復活したのが15年前。始めは相撲協会等に頼んでいたが、お金もかかるし、他から本物の相撲取りが来て賞金を取っていく。そうすると地域の子どものためにならないということで、青少年健全育成協議会というところと協力して、地区の学校のこどもたちを集めようということで、毎年150、160人程で行っている。

八朔というのは八月一日のことを八朔というんですね、旧暦なんですよ、今で言えば9月末か10月頭ですからうちでは、豊作祈願ということで9月か10月頃に行っている。

三牧：全体ではそれが中心となって、あとは各部会がそれぞれの活動を行っているという感じでしょうか？

加藤：歴史と伝統のあるものとしてはは相撲。

後藤：子供たちの神輿も。

三牧：防災や環境についてはどうですか？

後藤：環境部は2回、こめずるの日というのがあり、利根川で活動を行っている。防災部は東京などに行つて、防災センターで訓練を行ったり、地域での訓練を行う等している。（年2回くらい）また、講演、パトロール（夏と冬に町会長を集めて4回ずつ）をしている。体育部は社協と一緒に三世代ふれあい体育祭というのをやっている。1500人くらい集まる。あとはグランドゴルフとかウォーキング。文化部が柏祭りとか柏祭り、文化祭、ヨガ大会等。

前田：昔は今みたいに灯油がないから、薪を使っていたじゃないですか、そのさいの里山みたいなのはありましたか？地域の方々が誰でも使える等。

加藤：公の林というのはなかったと思います。

後藤：個人持ちですね。昔はみんなやまを掃除しに行ったりしました。

前田：街路樹なども個人の管理ということですか？結構大変じゃないですか？

後藤：そういう場合は市に相談して、管理してもらおうということも多くなって来ている。草刈りを有料で行ってくれる。山がどうしようもないから森林公園になっているところも結構ある。

前田：現在お店などは？買い物とかはどうされているのですか？

後藤：今は京北スーパー、かすみ、コンビニ、イトーヨーカドーとか。布勢の交差点に昔の用品店が1つ残っている。

三牧：農家の状況はどうですか？

後藤：今やっている人だけですね。田は大きな機械を持っている人もいますので、そこに頼んでやってもらっている人も多い。畑が問題ですね。

三牧：市街化調整区域になっていますからどんだん家が建つという状況にはならないですね。

後藤：建ちませんね。自分の土地でもできない。

中島：この辺の大きな特徴はあけぼの農林公園があるんですよ、布勢弁天があって、あと一年中人が入ってくるわけではないが、春のチューリップ、秋のコスモス等、外来者がたくさん訪れる地域としては柏では1番、歴史的なものが

残っている地域というのはこちら辺だけ。古いものと新しいものが多く接するのがこの地域の特徴だといえる。

後藤：あけぼの農林公園とは農家の人が土地を賃して、公園をつくった。そしてその中に組合をつくって、ここで色々な行事を行っている。

小川：都内からもチューリップを見にきたりする。

後藤：チューリップ、コスモス、ひまわりなど。

加藤：さくら山はいったん韓国の人に売った。そしてトムヒョン知事が視察に来て、こんな良い場所をどうして処分するんだ、と補助金をくれて、買い戻した。というわけで山が残っているわけです。

後藤：住民の人が手紙を出したらしい。

三牧：それは10年前くらいのことですか？

後藤：もっと前ですね。40か45年前ですね。昭和47年のことです。

前田：富勢小学校は古いのですか？

関口：明治6年開校。もともと寺子屋だった。それが天心学校ということで明治6年に開校し、そして布勢小学校になってやがて富勢小学校になった。

後藤：根戸のとうようじとこっちの南禅寺（寺子屋）が一緒になって富勢ジンジョウ？小学校になった。その際に戦時中は国民学校になった。そして柏市役所ができたのと同時に富勢ジンジョウ小学校から富勢小学校になった。

加藤：富勢の学校物語編というのがあります。

三牧：では最後に今後の課題についてお聞きしたいです。

加藤：活動主体の高齢化が第一の問題、そしてそれに伴う個人の生活と地域活動のバランスをうまくとっている人口が減っている、コミュニティ活動を理解して推進していく人の減少が問題。

後藤：あとは古い町会ほどイベントに対して面倒臭がり。（既にコミュニティができているから）

新しい場所はそれをきっかけにコミュニティをつくらうとしているが、古いひとはやらない。

小川：やらなくてもできちゃっているんですよ。

前田：若い人は住んではいるのですか？

加藤：東京へ行く人口として住んでいる割合はがどのくらいいるのかという厳密な調査はしていないが、地域と密着した生活というのがある人とない人がいる。ここでは寝るだけと

ということになると、若い人は育ちにくいということになるでしょうね。

中島：ここの高齢化（65歳以上）は3割くらい。市全体がそうなんですよね。ですから、高齢化に伴ってというふうにと考えると、若い人が少なくなっているといえますね。

町会の中で、市街化区域の中では（マンション建設）若い人が入っている、そういう人が協議会活動、町会活動には参加しない。ですからそういうマンションがどこにも属していない、協議会にも入っていない、そうすると、運動会などの協議会が主催している活動に参加したいという際に、どういう対応をするかが問題になる。お金を出していないため、そうすると町会のストレスが溜まっていく。入るか入らないかのどっちつかずの人が問題。また、加入している世帯にしか、広報が届かない、そういう状況が今後考えて行かなければいけない。横のつながりが皆無。そうすると地域コミュニティの結成が皆無。

加藤：この間、運動会の際に子供の参加があり、その町会が弁当を出す出さないでもめた。親の意識次第で、色々な部分に影響がおきていると思う。

中島：こどもに来るなどは言えない。

三牧：それをきっかけに、親が町会にお金を払おうという意識が上がりれば良いですね。

後藤：あとはゴミの問題。マンションの場合はマンションで管理しているが、アパートなど小さいところはどこかに入っていないなくても、ゴミを出さなくてはならないでしょ、その場合町会に出すんですが問題になります。

前田：町会毎に集積所があるのですか？

高波：集積所は市はノータッチ。回収はどこか町会に加入して、それを町会が市に申請して、それで初めて市が回収するという義務がある。

ゴミ当番には出ないけど、ゴミは出すという状況になっている。

前田：各町会にゴミ置き場は何ヶ所くらいあるのですか？

？：町会によって別ですが、だいたい町会の下に区や班というのがあり、そこに1つといった具合ですね。

中島：町会の加入がまだ7割、8割が入っているというのが高い方だと思いますよ。

後藤：ただ、口だけ出して何も出さないというのが現在の現状。

前田：子供会と町会は別ですか？子供会には子供はほとんど属しているのですか？

後藤：別ですね。子供会は学校で行っているからほとんどの人が入っているのではないかと。

小川：行政の縦割りの悪いところで、ふるさと協議会に出しておけばやってくれるみたいな風習があるんです。地域行政が一つになることも大切だが、行政自体がひとつにならないといけないと思う。行政の縦割りがあらゆるところで影響をおきている。

前田：あちこちで色々やっているが、全体のまとまりに欠けているため、役割が重複していたりもする。

加藤：ではそれをまとめた時に、人材をどうするかということが問題。

いくつもの会があるのですが、同じ人がだいたい運営している。

後藤：市がそれをまとめようという動きがあるが、それが進めば良い。

中島：市役所のアンテナが低すぎる。情報収集能力が年々低下しているのではないかと。自助共助のバランスがぐちゃぐちゃ。本来共助であるべきものが自助であったりとか、共助に任せたりとか、そういう部分があやふや。

高齢化がこれほど進んでいるのだから、行政が積極的に行っていくべきことを上げてくるのを待つというのが多い。

前田：市民活動課では全地区センターの長を集める月例等は行っているのですか？

小川：月例まではいかないですが、四半期に一回位の割合で。センターは地域の情報発信、情報収集の場なので共通の課題や集中会議という形で行っている。合わせて、各会長の意見交換会ということで定例会を行っている。

中島：あとやはり縦割りがすごい。もう少し横のつながりが必要。

小川：一つを引き受けると全部を負うことになるんですよ。

中島：市の職員との連携が課題。

小川：市の職員は市民とのコーディネータ役にならなければいけないですね。

中島：何か新しいものをその地域にもちこんでくる際には、そこに見合ったものというものがある。

No	2 (3人)
日時	2009年11月16日 (月) 10:00~12:00
場所	松葉近隣センター 2階
対象	松葉ふるさと協議会会長、副会長、近隣センター所長
参加者	●ふるさと協議会：藤田武志さん (会長)、丸田達夫さん (副会長) ●近隣センター：根本さん △柏市：高波さん、小川さん (柏市市民活動推進課) ○東京大学：前田英寿、三牧浩也、金令牙、著者
質問者	○前田英寿、三牧浩也

三牧：趣旨説明。

三牧：ふるさと協議会が30年程活動をされていて、まちづくりをする際の地域のまとまり、単位がどのようになっているのかということが知りたいです。まず、まちづくりの経緯について協議会の位置づけと共に伺いたいです。

藤田：20年誌の21ページの航空写真 (昭和55年) の説明。その後、配布資料設問1の説明。(松葉町地域ふるさと協議会) ふるさと祭りは、全国色々な都市から人が集まってきたので、柏市では2番目に大きなお祭りとなった。

三牧：区画整理自体はいつから始まったのですか？

根本：区画整理自体は昭和40年代半ばから始まり、入居は昭和54年から始まった。昔は田、畑、山が混在している状態であった。松葉自体、住宅はなかった。真ん中に地金堀というのがあり、その両側に地形があがっていて、そして山になった。こんぶくろ池を水源に、地金堀が手賀沼を抜けている。昔は用水路として使用されていた。

前田：市での協議会等の制度は先につくられていたのですか？

小川：配布資料参照。東京のベッタタウンということで新住民が9割なのですが、柏市に対する共同意識が不足しているということから、当時の鈴木市長がふるさと運動の一環として、「ふるさと柏」というキャッチフレーズでまちづくりに取り組んできた。54年頃から各地域の実状に応じて行っていった。

松葉近隣センターは17番目 (今は全部で20協議会がある) にできた。

三牧：どの位の期間をかけて団地を建てたのですか？協議会ができた当時はどの位住宅が建っていたのか？

高波：協議会ができた時はだいたい建っていたが、戸建てなんかもまばらだった。16ページの写真の様子が近い。23ページの年表 (協議会の歩み) を参考にしてもらおうと数がだいたいわかる。かなり早いスピードで入居していたことがわかる。

三牧：入居開始 (まちがと同時にしくみができていったという感じですか？

藤田：現在約4400世帯で1万4千台。

三牧：町会や自治会は入居してはじめて関わった人たちですか？

丸田：現在18町会があるが、どの時点でできたかはわからないが、過半数は存在した。(この時点では18はない)

高波：自治会をつくるには時間がかかるため、かなり早い段階で組織づくりを行政も進めていたと思う。また、柏市自体が柏をふるさとにしたいという意識があった。

三牧：まさに今柏の葉も旗を振っているという状況なので、参考になります。

入居と同時に地域に根付いていったということは意識が高かったのですかね？

？：柏市の取り組みとして柏をふるさとにという考え方で先導していたのも大きな要因なのではないでしょうか。

前田：近隣センターは当初から市の職員が常駐していたのですか？

根本：当時からはりつかせるということで派遣されていた。前身となる出張所が隣にあったが、それを近隣センターへ入れて、図書館の分館も入れた複合施設としてできている。

三牧：設問2についてはどうですか？協議会、近隣センターの運営組織はどうですか？

藤田：資料3枚目の組織図を参照、それをもとに説明。

(図はHPにもアップされている)

三年前に柏市で、ふるさと協議会と地区社会福祉協議会の一本化を測りなさいという指示。松葉の取り組みは早かった、社会福祉事業本部という形で進めている。合併の際には地区社協が吸収されるという形だったので、反対も強かったが、なんとか今に至っている。現在の運営に関しては、行政の関与について、町会等についての関与は資料に記載。は、柏市市民活動推進課は近隣センターを通して行われている。市民活動推進課が事務局をしている柏市ふる

さと協議会連合会、これは20の協議会だが、ここに加入を
しておりまして、柏市から年間約160万円弱もらっている。
ただし、うちは祭りの助成ももらっているため他のところ
に比べ、少し多い。(他は135万程)

また町会、自治体(他の機関)の関与は、自治会の代表者
が集まる地域自治代表部会というものがあり、地域の防犯
安全活動、あるいは地域の乱開発防止対策、協議会の各委
員会/部会への支援、協議会自体には運営費としてお祭り
を含め、一所帯年間450円(祭り300円、運営費150円)と
いう支援をいただいている。現在会員の所帯は4400程なの
で、その450倍ですね。

(不景気のため450円を値下げしてほしいという要請があ
る)

三牧:今の450円は協議会に対してということで、他にはま
た別にありますよね?自治会活動等。

藤田:自治体活動はまた別です。

小川:だいたい一般的な金額は一所帯100円から200円ほ
どふさと協議会に支援している。

三牧:祭りの予算は市からと自治会からですよね?

小川:だいたい一般的な金額は一所帯100円から200円ほ
ど。

藤田:全ての自治会がふさと協議会に参加しているわけ
ではない。14、15町自治会は加入していない。(協議会に
入るための経費がかかる等の理由あり)

高波:自治会への加入率は78%程(市全体)ですね。

前田:協議会として、年間いくらの事業費ですか?

藤田:約300万円の事業予算です。祭りはまた別会計です。
お祭りはまた商店街の方からも支援をいただいている。

高波:祭りの予算は柏で一番かもしれない。このお祭りは
地域規模にしては大きなお祭り。集客力も強く、多くの人
が来る。

三牧:祭りの予算は市からと自治会からですよね?

藤田:はい、そうですね。

三牧:もともとふさと協議会の中だけで福祉系の活動は
あったのですか?

小川:(参考資料あり、説明)ふさと協議会をつくる際
に、もともとは福祉の役割も協議会が担っていた。社会福
祉協議会というのは全国的にあったが平成10年頃、地区社
会福祉協議会(中学校区単位)というものをつくりなさい
という動きがあり、地区社協はより専門的な活動をすべき

ということで、つくったが、内容が重複するとかの問題も
あり、かつ現在総務省も小学校区の単位だとか、総合的な
役割が良いのではないかという流れで統一された。

地域住民にしてみれば、何かをやりたいという時に総合
的な組織の中で選択する方が良いのではないかという考えに
なっている。そしてふるさと協議会というのがベースにあ
るので、それを総合的に捉えていこうということになっ
た。

最近の課題は増えており、福祉や防災について。

前田:地域総括センター(民生委員と常に連携)と社旗福
祉協議会の違いは?

小川:社会福祉協議会は民といへば民で、地域総括セン
ターは市の中のひとつの組織です。その中で総括支援セン
ターの拠点は民間の介護や病院等で、連携してやってい
る。組織が同じかといえば別ですね。

前田:松葉町の場合は具体的にどうしているのですか?

? :協議会と総括支援センターはほとんど接触がないです。

前田:ふるさと協議会とはどうですか?

? :民生委員が総括支援センターにいますので、常に連携し
ているが、支援センターと直接には接触していない。

? :行政に色々な制度ボランティアがいるが、そういう推
薦等をしてくれという話がよくあり、その際は推薦をする
というような状況はある。

三牧:それに限ったことなく、行政からの色々な窓口にな
っているわけですよね?

? :そうですね。この図の下に(資料参照)色々ありますが、
協議会が推薦したのは、健康づくり推進委員の中の食生活
推進委員、ゴミ減量推進委員などです。民生児童委員は
町会の推薦です。

三牧:自治会、町会が全部で18ということですが、その
町会毎に参加の度合い等が色々だと思いますが、どうす
か?

藤田:各委員会の部会の委員は各町会から推出してもら
っている。ただし、こちらの希望人数を必ずしも全部の町会
が満たしているわけではない。小さい町会もあるので。

三牧:役員の自治代表部会には全町会から参加しています
か?

藤田:自治代表部会は原則町会長がでてきている。

三牧:協議会の会長は持ち回りですか?

藤田：一応、一年間ということになっているが、私は7年もやっている。

丸田：1年間では何にもできない。町会長が1年間でまわしているというのは気がかり。

三牧：町会長は1年間なんですか？

丸田：1年が多いですね。

高波：13ページを参照に。

三牧：地域のバランスをとって行うというのが難しいのかな、想像致します。

藤田：そのために、委員会が合併しまして、例えば教育文化と体育が別だったのを一緒にしたとか。効率化ということで、そういうことがありました。

三牧：では次の項目の活動状況についてお願いします。

藤田：現在力を入れておりますのは、3年程前に本市市長が各エリアで防災事業を充実させなさいという指令を受けて、協議会として松葉町の防災訓練にどう取り組んでいくか、ということになりました。そこで根本所長が、地区災害対策本部長で、ほかに何名かの対策本部の委員がいて、その地区災害対策本部と、ふるさと協議会がタイアップ致しまして、防災訓練を平成19、20年と事業を行いました。今年も予定している。

松葉町は先ほど言いました地金堀の両側が、大地震が起きた際の液化化の可能性が高い場所（柏市調査）であることがわかった。そのため、防災訓練ではここが液化化した場合を想定して行っている。むしろ建物の倒壊はあまり心配のない地域である。

それから地区社協と一本化になりましたので、福祉活動も進めて行かなければならないということで、高齢者のおしゃべりサロンというのを年に19回（昨年度から）行っている。これは高齢者の方が集まって自由におしゃべりして下さいというものです。知り合いが増えたり、元気になってもらったりということを目的にしている。敬老会（春のつどい、秋のつどい等）音楽会などのイベントをしている。つどいに出てこられない方（特に独居老人、70歳以上）についての対策で、ものを配布しようということで、民生委員とのタイアップにより、取り組みを行っている。

それから、環境面（清掃活動、リサイクルプラザ等環境施設の見学、勉強）の取り組み。

学校と地域の連携については、松葉中学の前の花壇にお花を植える企画。（ボランティアの生徒と一緒に）

また、福祉の方で、車いす（現在3台あり：協議会が管理）の無料貸し出し。（利用が結構多い）

松葉の道路（歩道）：けやきが成長し、道がでこぼこしてきた。ということで、貸し出しをして、怪我をされたら困るので、まちの安全状況を協議会自身で車いすに乗って、道路状況を調査した。

三牧：民生委員は松葉町のエリアの単位ですか？

藤田：そうですね、18はないが、ある程度町会ごとに区切られています。現在15名の民生委員がいて、内4名は2つのエリアを掛け持ちしている。

三牧：活動によって、連携する相手を色々変えて行っているのですね。

高齢者が対象となる福祉系の取り組みが多いですね。

藤田：地区社協の方で、よつば会（精神障害者の家族会会長も務めた方）の方が、しんねんばら？の協議会で高齢者が困っていることに対して、「ひまわり会」というものを立ち上げて、アンケートを行った。ゴミ出しや買い物、話し相手の不足、お風呂等の項目が挙がったらしい。ふる協のメンバーと一般から募集した協力員の方が有料で対処しようと、日常のおてつだい（ゴミ出し、おしゃべり等料金制）を来年の4月から実地予定。（ニーズはあるそうだ）その話を聞いて、私たちもイベントだけではなく、このような取り組みも、行っていった方が良いのではないかと考えている。あるいは柏市社会福祉協議会もイベントばかりはやめてくれというもある。

三牧：高齢者のみまわり等は自治会単位の活動ですか？

藤田：松葉町には15の自治防災会というのがある。（柏市からの指示、年間3万円の防災活動に対する補助）その単位で防災訓練は行っている。

また、防犯についても各自治会でお願いしたいということになっている。

6丁目の防犯対策がとても充実しており、色んなところできりあげられている。

内容としては、毎週土曜日に夜回りをしている、平日昼間に旗を持って歩く等。青パトも用意している（市で回っているものがあって、一部防犯活動が活発な箇所が自分たちで回る）

今年6月に自転車に対する色々な規制があり、自転車の安全の啓発・ルールづくりをしてほしいという依頼。インターネットから自転車に関する法規制を学び、松葉町に配って啓発を測ろうとしている。この場合はふるさと協議会の単位で行っている。

根本：地区災害対策本部ということでエリア毎に設置されているが、当初より職員も減ってきて現在13名ということになっております。また、工事もなかなか行き届いていない。自助共助でお願いしたい。ふるさと協議会との連携を

密にしてほしい、そういう組織づくりをしていかなければ
ならない、という声がたくさん挙っている。今までも少し
の連携はあったが、今後はもっとそれを進めて行かなけれ
ばならない。

また、松葉に隣接する地域の人に対する避難体制の把握、
関わり方等が今後の課題になってくる。

あと広域ということで、松葉と隣接するエリアとの関わり、
例えば松葉は地区災害本部からは非常に離れていて隣の
エリアの避難所の方が近いといった場合に隣のエリアの
人たちがどういった活動をしているのか、避難体制はどう
なっているのかということをごちらが知らなければいけな
い。また、隣のエリアの人たちがこちらにどう関わりを持
つのかということが課題になってくる。

三牧：防災だと地域の関わりが難しいですね。

小川：地区対策本部は、何かあった時（震災など）にそこ
が対策本部の地区になりなさいというのが近隣センターに
位置づけられているんです。総会や自治会の防災部等の司令
塔がここになりますので、町会・自治会だけの単位では動
けないので、その総合的な窓口が所長や協議会会長の人が
なって、各町会の防災をここに集約してそれを本部にという
ことになる。

コミュニティがしっかりしているかどうかで震災の被害状
況がだいぶかわってくるということが阪神大震災からの教
訓として考えている。

また、コミュニティ委員会というのがあって、エリア単位
でコミュニティを考えようということで、東大秋山先生の
研究室（とよしき団地）で行われていたり色々な取り組み
もある。

隣を知らないといけない、良いところを話し合うような意
見交換を行っている。

三牧：階層など、単位がたくさんある中で、協議会のまと
まりの位置づけ、役割についてはどう考えていらっしゃる
ますか？

前田：自治会の境界線はありますか？

丸田：あります。

前田：松葉の開発が進むにつれて、境界が変わっていった
んですよね？

丸田：そうですね。

前田：緑がたくさんありますが、管理はどうしています
か？集合住宅の敷地内など。

藤田：それは管理組合（例4-1町会）が行っている。行
政に出したり、みんなで協力したりと、それぞれによって
やり方が異なる。

前田：学童保育はどうなっていますか？

藤田：第一小学校と第二小学校に学童ルームというのがあ
ります。役所で管理をしている。（地域は主に管理してい
ない）

松葉に関して言えば、地域の方たちが交通安全というこ
とで朝、スクールガードに出でいたり、午後のパトロール
（主に老人会の方）を行っている。

三牧：最近の課題についてはどうですか？

藤田

- ・ 公園の老朽化：桜の木が成長するために、芝生が枯れ
て、公園内の凹凸が激しい。雨天時には地面がすべる。
樹木の成長による色々なひずみ。
- ・ 少子高齢化：柏市全体で比べるとまだ高齢化は12%台と
少ないが、少子化はどんどん進んでいる（柏市のなかで
もナンバー2くらい）。
- ・ シャッター街化が進んでいる。ララポート、モラージュ
等の開発により、小さい店が閉店している。
- ・ 協議会の中で役員の高齢化が進んでいる。イベントの運
営が大変になってきている。毎年総会時、役員選抜の際
（担い手）、とても難しくなっている。藤田さん自身も
民生委員を行っており、役員の重複が問題。
- ・ 若い人のボランティア活動への意識が低い。
- ・ 事業のマンネリ化。ほかの地区の活動を聞いて、特に福
祉系で高齢者を対象とする活動を増やしていかなければ
ならない。
- ・ 老人の集まる場におけるテーマ設定。現代の老人の興味
等。同じ趣味の人で集まるが、組織というのはあつまり
にくい。

藤田：担い手の問題について、どこかの教授が、「若い人
に対してまずは簡単なお願いをしていくということが重
要」と言っていた。では松葉でどうするか。

例えば委員会の活動の中で、よく活動をする人とそうでな
い人がいて、よくされる方はマンツーマンで行っている状況だ
が、この方法しかないのではないかと。それでなんとかやっ
ているというのが現状。

前田：NPOとの関連はどうですか？

藤田：NPO自体はたくさんあるが、協議会とNPOの関わり
はない。

小川：全国的に研究者の間でも必要性は叫ばれているが、
遅延型の協議会とテーマ型のNPOが連携するのは難しい。
市の方でもテーマ型と地縁型の融合というものを少しずつ
は進めている。

前田：分譲と賃貸の割合はどの位ありますか？

藤田：分譲が主。1町会のみ全て賃貸。

前田：住み替えはあまりないですか？

藤田：そうですね。転勤時の入れかえはある。その際の貸したり売ったりはある。

前田：商店街とマルエツは共存してきたのですか？

藤田：マルエツはお祭りの際に6万円支援、金銭面で協力してくれた。

前田：商売上はどうですか？

藤田：特に協議会とはないです。

根本：マルエツは殿様商売。まちの中央にあるから寄り易い。そうすると商店街は廃れていくはずだが、ここにセンターがあるから、商店街にも人が流れる。

？：あるいは協議会を利用する人が多い。また協議会がたくさんイベントを行うので、そのついでにマルエツを利用する人もいる。

？：マルエツは決して良いものではない、美味しくもない。しかし文句を言いながらも、需要が続いている。商店街は入れ替わりも激しく、大変。

前田：持ち主は都市ライフ？

？：そうですね。

？：新都市ライフも人を集客するために、イルミネーションや子供の絵画展示など、色々と活動を行っている。夜はきれい。

？：松葉町には、商店街が2つある。（中央商店街と協同組合）センターの前は中央商店街。協議会と商店街はタイアップして色々活動を行っている。約100人規模のミニコンサート等も行っている。

三牧：インフラの更新の時期を迎えているという段階ということですが、協議会としては行政にお願いをするという役割ですか？

藤田：柏市の情勢も厳しいので、すぐに対応というのは難しい。本当に危ないところなどから優先に整備してもらっている。

三牧：協議会の大きな役割としては地元の声を代表して行政につなげる、イベントの運営などを行っているということですね。

三牧：団地の改修はどうかたちで行っていますか？

？：管理組合で積み立てを行い、委員会をつくり、行っている。

？：あとは柏の葉の小学校建設が3~5年後らしい。まつば第一は今30名の生徒を仮受け入れをしている、三井のバス。新年度になればまた人数が増加しそうだが、三井が十分なバスを用意できない状況。

また、松葉第二小学校では学区外できている人が多い。去年から規制がかかっている。こうなると防災の面で学区外からきているとなると問題。第一の方がキャパシティはあるが、バスがない。

柏の葉エリアで田中に通っていた小学生で、約800世帯の中の子供が松葉へ通うかも。駅周辺はたなかのふるさと協議会のエリアではあるが、1~3丁目の柏の葉の町会はたなかで浮いている、今ぬけている。柏の葉のエリアでひとつになりつつあるのではないか。

前田：柏の葉に近隣センターがあると良いと思います。

小川：要望は町会長から出ているが、人口の張り付きがまだわからないので、今すぐは無理だけど、今後その可能性はある。

？：他は新と旧の対立が強いが、松葉は新住民ばかりなので、それがない。

前田：だいたい東京に働きに行く人が多いのですか？交通手段は北柏駅までバスで？

？：そうですね。バスも渋滞などの問題もあり、東部バスと話し合い改善してきたという状況ですね。

三牧：今も北柏を利用しているのですか？距離的にはどうですか？

？：エクスプレスの利用も増えてきた。しかし北柏を利用する人も多い。距離というより今までの癖で北柏駅を利用する人が多いのだと思う。

No	3 (1人)
日時	2010年9月22日11時～13時
場所	寺嶋さん自宅
対象	●寺嶋佳一さん (田中ふるさと協議会会長)
質問者	○著者

○ 福角：主旨説明

● 寺嶋： ふるさと協議会の概要なんです、ふるさと協議会というのは柏市内に20地域ありまして、その20地域の一番北部に位置するのが、田中地域ふるさと協議会なんです。田中ふるさと協議会というのは各町会・自治会の代表者が集まっていて、その代表者会議っていうのがふるさと協議会の中にあるんですね、(代表者会議は町会・自治会の会長さん)そして田中ふるさと協議会には今16町会・自治会があるんですね、そしてそれらの代表がふるさと協議会の代表になっているんですね。そして活動は行政に合わせて、4月から翌年3月までとしている。その中で、柏市の補助金から運営しているものと、各住民のみなさんから集めている町会費(田中地域は27300人、世帯数が1万540世帯かな)から負担金としてふるさと協議会の方へまわしているものと、合わせた形で活動費でやっています。

○ 福角： 町会費は一世帯いくらですか？

● 寺嶋： だいたい一世帯平均で年間4000円位かな(全部がふるさと協議会へまわすわけではない)。そして補助金がプラスされますからね。

○ 福角： その内訳はありますか？同じお財布ですか？

● 寺嶋： そうですね。住民会費、補助金という形でやっている。

○ 福角： ちなみに町会の加入世帯数は？

● 寺嶋： それは行政で正確な数を聞いた方が良いのでは。では住民会費と補助金でどういう活動をしているのか、ということだけど、柏地域20地域の協議会でも色々温度差があって、色々活動しているところもあれば、そうでないところもある。

田中地域は比較的積極的な方だと思う。内容としては、まちづくりのための住民参加のイベントが多いと思う。田中地区市民運動会とかね。他には、7月に田中祭りというのがあって、(田中みこし祭りとはまた別)2つ目がその10月に行く運動会ね、(話が違って)

こういうのはみんな補助金がついているわけですよ。例えば運動会ならば「スポーツを通じて田中地区住民相互の触れ合いの輪を広げ、友情を深め、ふるさと田中を住民自らつくりあげていく」という目的があるわけだね。それでその予算というのは、ふるさと協議会負担金でやっているわけだけど、住民会費と行政の負担金の振り分けはどうかというのは総会資料でも見ないとわからないんだよね。ということ。

そして11月の初旬に田中地区の文化祭があるんですよ。それで年が明けて新春風揚げ大会というのが1月にあるんですよ。

それで今年は田中みこし祭りというのをやったんだけど、これは企業に協力してやったものだから、私どもが先導してやっているわけじゃないけどね、みこしまつりについては、田中地域の行事にはなっていない。2、3年に1回やりましょうというもの。田中地域ふるさと協議会が縁の下の力持ちになって、実行部隊としてやっている。

だから大きな行事はさっきの4つで柱になっている。この他にも色々やっているけどね。例えば環境部では手賀沼の方でもなんかやっていたりね。

まずその組織なんだけど、協議会の下に代表者会議っていうのがあって、この会議で協議会の運営をどうしようとかかを協議する場を持つわけ。で、その下にあの実行部隊が合って、それが運営委員会といいます。それで運営委員会があって、その中に環境部、文化部、体育部、福祉部、総務部、などがある。ではそれぞれの部では何をやるか。例えば環境部なら、まちをきれいにしようとかね、ゴミ拾いをいついつやりましょうとかね、手賀沼が当時汚いワースト1だったのが今はワースト9になったからそれを見に行きましようとかね、それを企画・立案するのが部なんだよね。

○ 福角： それぞれの部がどういう目的でどういう活動をしているのかといったものを書いた資料はありますか？

● 寺嶋： 近隣センターの事務局に行けばありますよ。こういった文化祭のしおりとかそういうのはありますから。運営委員会でこういう風にやろうか、と協議されたものを、代表者会議にかけられるわけ。それで代表者の会議を私の権限で集めてやるわけ。そこで決定して、運営委員会に許可が出る。そういう組織。各地区の代表者は各町会・自治会に持ち帰って、呼びかける。

○ 福角： 近隣センターはどうですか？

● 寺嶋： 近隣センターは20地域のうち本家のセンターが20あって、分家があと少しあるわな。田中は範囲が広いから3つある。(距離の問題)職員も分家には留守番しかない。本来の運営というのは本家がやるわけ。

近隣センターがどういう風につくられたかという、柏がまだ発展途上にあったときに、ただハードのまちづくりでどんどん開発してもだめだと、ソフトの部分がないと、本当のまちづくりーふるさとをつくるには交流という部分がないといけないと。ただ家がたつだけでは本当のまちづくりできないということで、当時の市町が考案して、はじめた。そしてその拠点施設として各地域に市の予算でつくったわけ。そしてハコものをつくるだけではじょうがないからといって協議会ができたわけでしょう。

○福角： つくられた当時は、新しくやってきた人と昔から住んでいる人の新旧住民の問題を解決したりとか、この地域をふるさとと思ってほしいという市町の意向ではじまったと思うのですが、当時の活動と現在の活動ではその役割に違いや変化は起きているのでしょうか？

●寺嶋： 当時はね、名前がだいぶ変わっているんですよ。当時はね、田中の住民だと言って、「田中地区住民協議会」と言っていたんですよ。その時代が長く続いたんですよ、それで開発が進んで田中地区も緑がいっぱいだった地区なんだけど、どんどん開発と共に新しい住民が入ってきたんですよ。そして田中の仲間に入りたいと、そうなるわけでしょ、そういったときに、「地区住民」という名前がついていると、新しくきた人が入りにくい感じでしょ。もともと住んでいる人だけのものみたいでね、新しく来る人が入ることに違和感を持つでしょ。それで「地区住民協議会」から「地域協議会」とした方が良くないか、ということで名前が変わったわけですよ。

○福角： その田中地区住民協議会だった頃というのは、ふるさと運動が起る前ですか？

●寺嶋： そうだね。

○福角： ふるさと運動が起きたことで、協議会も名前を変えたんですかね？この運動会（冊子見ながら）は、地区住民協議会だった頃からやっているわけですね？

●寺嶋： この冊子には昔の名前が残っていますね。地区のままだね。

○福角： 運動が起きたことによる活動の変化はありましたか？

●寺嶋： 活動に変化は、起きていると思います。例えばね、その当時は新住民というのがないわけでしょ、根っからの田中生まれの人が集まっていたわけだよ、それが年々新住民が入ってどんどん膨らんでいったわけだよ、その段階で、結局ひとつのイベントやるにして

も、合わないところが出て来ちゃうわけだよ。古い田中地区の農村地域の人たちが集まった行事ー運動会一つにしたって、競技内容をこの地域（農村地帯）に合わせ米づくりに合わせて、俵を編んだり、縄を編んだり、するから、「縄綱え競争」とか「俵担ぎ競争」とか、そんな種目もあった。そうすると、新しい住民というのはそういうのに合わないわけでしょ、そんなのできないよと、ということになるでしょ。そうするとそういう競技は全部切り捨てていって、新しい人も楽しめるような種目に変わっていったんだよ。

○福角： そうすると当時は田中らしい運動会というものだったのが、みんなができるようにつとということで、どこでもできるようなものになったんですね。

●寺嶋： そうだね。まあ先ほど世帯数が1万540位じゃないかって言ったでしょう、田中地域というのは急激に世帯数が増えているんだよ。つい最近までは6000から7000だったと思うんだけど、それが今は10000超えちゃってるんだよ。だからそれだけ、この地域の開発が進んでいるということが言えると思うんだけどね。

○福角： あとから来た人も活動に参加しているんですか？

●寺嶋： していますよ。

○福角： そうすると、新旧住民の交流という当時の目的が、現在の開発においても活かされているということが言えますね。

●寺嶋： そうですね。

○福角： それは例えばどういうところで実感されますか？

●寺嶋： 運動会や文化祭など、それ自体が重要なわけではなくて、そこで知り合った人が、近隣センターに来たときとか、まちですれ違ったときに、「この間はどうも、運動会ではどうも」といった挨拶がされるわけですよ。話ができるわけですよ。それで交流が生まれるというわけだよ。

○福角： 同じ北部地域でも、松葉町は一気に開発がされて、同じ世代の人が固まっているけど、そういうところに比べると、ここの人徐々に開発がされていることによって、新しい人を受け入れることになれているのかな、と感じます。

●寺嶋： そうですね、そういう古い人だけで固まるとかっていうのはあまりないですね。それは時間をかけて受け入れてきたことによるのかな。だからそのなんて言うのかな、地区の沿革というのは、田中の近隣センターじゃなくて、柏市じゃないとわからないかもしれないね。

○福角： 松葉とか富勢とか同じ北部地域でも全然性格が違うのは面白いですね。

●寺嶋： それで、今度はTXが開通しましたよね、それで柏の葉キャンパス駅と柏たなか駅ができましたよね。それで「公・民・学」協働で良いまちづくりをしましょうかということで北沢先生がUDCKを立ち上げて、ハード面は三井不動産がやって、ソフト面では地域の田中に住む住民と力を合わせながら、良いまちづくり、住民参加のまちづくりをしようということで、田中地域のふるさと協議会も一緒になって考えていきましょうか、ということで、UDCKの構成団体になった経緯なんだよな。

○福角： それは北沢先生から連絡があったのですか？

●寺嶋： 北沢先生からお話が合ったというよりも、北沢先生を紹介してもらったというのが、柏市。柏市から三井不動産と北沢先生を紹介された。そこで構成団体に入ったんだよね。

○福角： その話をはじめに聞いた時はどういう印象を持ちましたか？

●寺嶋： まあね、田中地域にTXが通って、田中地域に2つの駅ができるということについて、地元の住民も非常に興味がありましたからね、柏たなか駅の方ではURがやっているけど「まちづくり協議会」といのがあって、それにも参加しましょうか、ということで住民団体の代表ということで私が呼ばれたんですよ。

○福角： 構成団体に入ったのは2006年ですよ、まちづくり協議会に入ったのはいつですか？

●寺嶋： 2008年だね。

○福角： 当時北沢先生からふるさと協議会が構成団体に関わることで、どのような役割を担ってほしいと言われましたか？

●寺嶋： あの、北沢先生がよく言われていたんですよ、同じまちづくりでも、その地域によって違うんだと。田中地域の住民のみなさんがどのように考えているかということが重要、その地域の特徴というものをUDCKに反映してくれないかということ言われた事があるかな。それでこの地域にマッチしたまちづくりができるんじゃないかなってことでね。

○福角： 具体的にはその時にどういうことですか？

●寺嶋： 始めはどうして構成団体になったのかな、と疑問に感じた時期があったんですよ。ところがね、その後色んなことが起きてきたわけ。例えばね、この地域の交通

を考えると、オンデマンドバスというのをやりましょうと、そういうときに、「何とか寺嶋さんの力で実験に協力してくれる人を紹介して頂けないだろうか」ということで、UDCKの構成団体に入ったというのは、こういう意味かという風感じた。

○福角： 紹介した時に、普段寺嶋さんが活動しているコミュニティの中で、「UDCKはこういう場所だよ」とかって言う話をして、実際にUDCKが実験したいという時にはすぐにその橋渡しができるということでしょうか？

●寺嶋： そういうことだと思う。始めは疑問に思っていたんだけどね。どういうことをすれば良いのかな、とかね。そうこうするうちに、「寺嶋さん、これから色々な実験が出てくるから、その時に住民の皆さんに協力してもらわないと出来ないことだから」と。あとね、構成メンバーとして、田中地域の文化（例えばまつりとか）を伝えることができたらねー、とかっていう話が柏市からも出ていたんだよね、そこからみこし祭りはできたんだよね。それでその時に、UDCKの構成団体にいるなというのを実感した。それまでは会議に出てはいるものの、その会議を協議会に持ち帰って、難しい話をするのも違うなーと思ったしね、やっぱり学者が考えていることと、住民が考えていることは違うしね、住民にはわかりづらいところがたくさんあった。

○福角： 田中地域でUDCKのような新しい組織ができたときに、寺嶋さんのような方（新旧住民をつなぐ組織であるふるさと協議会の団体をされている方）が入っていたことで、田中地域の住民とUDCKが、いざというときに繋がっているような体制ができたのかな、と感じます。

●寺嶋： この地域はね、新しく入ってきた人を「どうぞどうぞ」という感じで、「仲良くやりましょうよ」という感じで受け入れるのはありますよね。昔からこの地区にある「風土」みたいなものだと思うんだけどね。

○福角： UDCKと昔から田中地域に住んでいる人を繋げる役割として、田中地域ふるさと協議会（もしくは寺嶋さん個人なのかもしれないのですが）の存在が重要なのかな、と感じるのですが、キャンパス駅前の柏の葉地区には協議会はないので、コミュニティ活動はUDCKが担っている部分もあると思うのですが、それについてはどうお考えですか？

●寺嶋： あれはあれで良いんじゃないですかね。みつばちの研究グループとかね。あれも研究材料になっているんですかねー。あれは新しい住民の方の寄り合いでしょ？ コミュニティづくり。あれは良いんですけどね、市にも

言ってるんだけど、柏の葉が活性化するまでは田中地域もお手伝いしますよ、と。そして活性化してきたら、柏の葉で協議会をつくるのが良いんじゃないかって言うてるんですよ。そしたら西原協議会か田中どっちかじゃなくて、あそこにつくったらどうかって。どうしても田中協議会に入れてくれて言ったらそれでも良いけど、新しくあのマンションに来る人の意識の問題なんだよね、田中は遠いということになるかもしれないし。

○福角： 柏の葉地区にも活動の拠点ができたとして、UDCKは北部地域全体で活動する時などに利用したら良いのではないかと考えているのですが。

●寺嶋： 仮にキャンパス駅前に協議会ができたとして、西原、田中、柏の葉3つのイベントをやるっていうのは可能だと思う。

○福角： 松葉とか富勢は違いますか？

●寺嶋： 松葉は違うね。だいたい松葉の方の人たちがこっちにきてやるというのはかんがえにくいね。西原はあるけどね。

○福角： それはどうしてですか？

●寺嶋：それは西原はももとの田中ですから。地域性です。今後、UDCKがどのような役割を担っていくかというようなことは、そんな感じじゃないですかね。

○福角： 構成団体として関わっていたことで、ふるさと協議会もしくは住民の方にとってのメリットというのは何かありますか？

●寺嶋： メリットもデメリットもないね。デメリットというのはふるさと協議会が非常に忙しくなったというだけだね。

○福角： では関わっていたことによって寺嶋さんの中に価値観の変化みたいなものはありましたか？まちに対する意識とか。

●寺嶋：それはあるよね、今までまちづくりというものに対して考えてなかった新しいものがある。まちづくりに対する価値観というのは変わった気がする。今までまちづくりと言ったら、ただ単にハード面の開発という意味しか考えてなかったわけですよ。でも、開発することだけがまちづくりじゃなくて、やっぱりソフト面も大切だということが、ふるさと協議会の皆さん含め、学んだことなんじゃないかな。

○福角： 例えばUDCKに関わる中でまちづくりに対する意識の変化があって、それを自分たちのコミュニティ（ふ

るさと協議会とか）に持ち帰ったときに、活かせることとかは何かありますか？

先ほどお話を伺っていると、田中地域は比較的問題点とかが少ない地域なのかなと感じたのですが。

●寺嶋： 問題点はそんなにないよね。高齢化による担い手不足みたいなものはどこの協議会でもあると思いますよ。ただ田中地域は常に発展途上の地域だから、どんどん新しい世代が入ってくるんですよ、そうすると、地域の活動にも参加してくれるから、他の地域に比べるとまああんまり問題になっていないと思うんですけどね。

○福角： 田中の近隣センターにはスタッフの人がいるんですか？

●寺嶋： 根本所長さんという人がいるから、その人に聞くと良い。相談に乗ってくれると思いますよ。

○福角： 今はどういう時にUDCKに行かれますか？

●寺嶋： 運営委員会のとき。

○福角： キャンパスタウン構想会議には出てないんですか？

●寺嶋： 出てないです。

○福角： 活動は？

●寺嶋： 田中みこし祭りと、八重桜並木協議会。

○福角： 最近八重桜並木協議会は何か活動しているのですか？

●寺嶋： やってないですよ。これは千葉大でやっているんですけどね。ここ1年位会議やってないなあ。

○福角： あとは臨時で何かを頼まれたときに行くという感じですか？

●寺嶋： 北沢先生が亡くなられた時期に、何かリセットした感じがするね。北沢先生はUDCKができたときに、その位置づけについて良く考えていたみたいだけど、開発が進むにつれて、三井不動産の事業にのっているわけだから、西口のも第二段階ということで、東口に移動して、新しくUDCKができましたよね。人も色々変わったしね。リセットしたみたいだね。色んな研究してるんだね。この間も頼まれて老人が端末機を持ってその活動を把握する研究会にも誘われたしね。その研究に協力してくれる人（住民）を集める役目を担ったわけだね。それでこちらから働きをかけて、何月何日に実証実験があるから、といったときに私の方で人集めをするという役目。

- 福角： つなぎ役という面で本当に機能しているのですね。
- 寺嶋： 田中地区の社会福祉協議会というのは、言ってみれば65歳から高齢者になりますよね、その高齢者のことを考えるのが社会福祉協議会。
- 福角： それはふるさと協議会の福祉部とはどういう違いがあるのですか？連携しているんですか？
- 寺嶋： 連携はしていません。
- 福角： 他の地区では一本化の動きもあるようですが。
- 寺嶋： この地域は、はっきりわかれているんです。ふるさと協議会、社会福祉協議会、青少年健全育成協議会、この大きな3つに分かれますよね。子ども会や親子会は青少年健全育成協議会、老人会とかは社会福祉協議会だしね。その中心になるのがふるさと協議会。
- 福角： 中心にはなるけど、ふるさと協議会の中にあるそれぞれの部とは繋がっていないんですね。
- 寺嶋： 繋がっていないですね。結局社会福祉協議会では老年層の人たちをお世話するっていう役目があるんですよ。ふるさと協議会の老人部は、老年層も参加できるイベントの企画をするわけですよ。目的が違うの。社会福祉協議会は老年層に対するハード面、ふるさと協議会ではソフト面を担っているという感じかな。それでふるさと協議会はソフト面を担っているわけだけよね。
- 福角： その役割分担が徹底した地域なんですね。
- 寺嶋： 市としては、協議会が多いから、取りあえず併せさせようという動きがあるんだけど、この地域では難しいんだよ。なぜかというと、ちょっと仕組みがややこしいんだけど、東十余二地区というのがあって、そこが学区がめちゃくちゃなんだよね。キャンパス駅ができたところがだいたい十余二で、十余二自体がまず田中地域ふるさと協議会に属しているんだけど、学区が違うの。だからイベントとかやっても非常にやりにくいんだよ。例えば一部の子どもたちは西原地域の祭りに行くにも関わらず、敬老会は田中とかね。柏の葉1、2、3丁目の学区は田中じゃないから、ふるさと協議会には入っていないの。だからそうすると、田中地域ふるさと協議会のイベントには同じ田中の住民であっても、参加しないわけです。連絡も行かないわけです。だからそれは致し方ないところなんだよね。以前は同じ田中なんだから、十余二学区が田中地域ふるさと協議会に属していることもあったんですが、PTAの人がどうしてあんな遠い田中のイベントに行かなければいけないんだ、ということ

になるわけですよ。だから子どもたちが田中のイベントには出なくなった。こういうことがあるから、キャンパス駅ができたことをきっかけに、あの地域で協議会を作ったらどうかと柏市に提案している。じゃないと今柏の葉1、2、3丁目の人が浮いちゃってるんです。もう1,000世帯超えてるんじゃないの。だから中には、前は田中のイベントに参加していたのに、学区が十余二になってから違和感がでてきたわけですよ。コミュニティエリアというのはね、そういう意味で田中では、ふるさと協議会と社会福祉協議会が合併するのはだめなんですよ。

- 福角： 社会福祉協議会とかはどのようなエリアで？
- 寺嶋： 今はね、もう合併しているところが多いんです。何の問題もないところは合併している。合併していないのは6地域位ですよ。
- 福角： 今は青少年健全育成協議会も20地域ある、社会福祉協議会は合併しているところとそうでないところがあるという感じですか？
- 寺嶋： 田中地区青少年健全育成推進協議会というのは昔からあるんですけどね、これはPTAを中心とした協議会なんですよ。
- 福角： 建物としては何かあるんですか？
- 寺嶋： 近隣センターが拠点。活動拠点は全協議会一緒、近隣センター。田中地域のふるさと協議会は各町会自治会の住民会費と市の助成金で運営しているという話をしましたよね、そうすると柏の葉1、2、3丁目、新しくできたマンションの自治会の人は属していないから会費がないわけですよ、そうするとふるさと協議会が運営するイベントに参加できないということになりますよね、それじゃだめだということで、行政連絡は柏市の職員が各町会長さんに連絡を頼んでいるということになっているんだよね。ただ社会福祉協議会だけは、ちゃんと全部属しているんですよ。年寄り部分だけ田中に入ってるんですよ。
- 福角： 小学校区などの学区とコミュニティエリアが一致している地域では合併できるんですね。
- 寺嶋： そうですよ。それであの地域ではUDCKを拠点にした田中みこし祭りをしようということになったわけですよ。田中でも西原でもないもの。そういうものをやって、いくらかカバーしていこうとした。

No	4 (3人)
日時	2010年10月19日11時～12時
場所	柏市
対象	●柏市市民活動推進課 (以下市民) 小野健一郎さん、布施博さん、橋爪良洋さん
質問者	○著者

○福角： 主旨説明

●市民： UDCKの場所はもう一つコミュニティエリアが必要だと言われている地域で、南部の方とは事情が違うんですね。つくばエクスプレスが通ったりとか。本来は田中とか西原じゃなくて、もう一つ必要だと言われている地域なんですけどね。なかなか進まないという状況です。なので、UDCK周辺は柏市内でも特殊事情かなと思います。

○福角： そういう事情があったことで、UDCKが市民活動の拠点として役割を担った部分もあるのかなと。一番始めにお伺いしたいことは、全国的にコミュニティ政策が行われた中で、柏市も同時代にふるさと運動を提唱し、ふるさと協議会がつくられたと思うのですが、柏は東京等からの流入者も多く、ふるさと意識を持ってほしいという想いもあったんですね。このような背景は他の市町村と比較してどれ位特徴がありますか？

●市民： 他の所も同じような問題はあります。ただ常磐線沿線であったり、国道沿いの東京から近いところというのはそれが顕著だったと。あと松戸の小金原団地や柏の豊四季台団地など大きい団地を造成して入居者を入れて新しい人がどっと入ってきたというのはあると思います。徐々にではなく団地で一気に。

●市民： ベッドタウンの地域問題だね。

●市民： あくまで町会自治会が基本となっているふるさと協議会ではあるのですが、それだけに留まらない、町会同士の連絡調整だけに留まらない活動をしていただきたい。町会自治会プラス、地域の色々な団体—老人会であったり子ども会であったり防犯協会であったり、全部含めた地域住民組織というのをやっていますね。

○福角： 全部がまとまっているのですか？

●市民： 全ての地域が同じ様に全部が入っているというわけではないのですが、規約としては、そういうものが参加できるようなかたちでつくっているところがほとんどですね。実際は参加しているところもあれば、参加が薄いところもあると思います。こちら(市)で当初お願い

していたのは、地域の組織をまとめたものということでしたが。

○福角： それは当初つくられたときは、例えば子ども会の対象としているエリアと、町会が対象としているエリアは同じところは巧くいっても、違うところでは難しかったのですか？

●市民： そうですね、それを巧くいかせるために、他の市で多い所では小学校単位で作っているところも多いですよ。子どもの繋がりだと親も協力し易いので。柏市の場合は、中学校単位で広くとっているんですよ。その経緯は？

●市民： 今は小学校区が増えてきているのですが、当初の昭和55年頃ですよ、その頃は周りの地域でそのようなものはまだ始まってなくて、柏市の着眼点と取り組みの早さは良いと思うのですが、その周りの状況が整理されないうちでとりあえず単位は中学校区だろうという位だったと思うんですよ。なぜ小学校区にしなかったのかということについては記録が残っていないのでわかりませんが、ただ今やってみて、中学校区だと単位が大きすぎるので、やっぱり小学校区と連動したコミュニティエリアが一番良いのではないかなと思います。一番多いところでは2万人位いるんで、それをまとめてというのはちょっと難しい。しかも学校区って人口の動きによってどんどん変っていくものだから、もうイコール(コミュニティエリア=中学校区)じゃなくなっているんですよ。中学校区ぐらいの大きさではやっているけれども、完全にはみ出ちゃっている。そういうのも含めて正直子どもの繋がりが薄い大人同士がやっているという状況はありますよね。

○福角： それはとくにどの辺の地域がとかはありますか？

●市民： 住宅街の多いところですね。南部の密集地は特にぐちゃぐちゃになっていますね。

●市民： 市のコミュニティ施策がまだまとまっていない頃で、縦割りで色々な組織をつくってしまって、縦割りごとのエリアがまだあるということですね。エリアが統一されていないことがまず問題。例えば地区社協(社会福祉協議会)もそうですし。

○福角： 今一本化の動きがありますよね？

●市民： まだ形上だけだね。

○福角： それもやはり地区社協が対象としているエリアと、ふるさと協議会の対象としているエリアが重なっているところはやりやすいが、そうでないと別の方がやり易いということですよ？

- 市民： 地区社協は概ねコミュニティエリアと分け方は同じなのですが、ただその（社協）中で2つに分かれたりするところがあるんですね。団地とそれ以外とか。光が丘と豊四季もそうだったんだけど、6月に光が丘の地区社協が一本化しました、それと同時にふるさと協議会とも一本化した。
- 市民： 労協とか老人クラブとか、エリアの概念はそれぞれバラバラなんですよ。
- 市民： 今あとのこり4つの地域でまだ一本化ができていない状況ですね。
- 福角： 田中エリアの特徴を教えてください。
- 市民： あまり人が住んでいない地域なんですよ。昔からの大地主が取り仕切っているというか。そこに新しいTXができて、柏の葉と柏たなか駅ができて、そこに団地などをつくると。ここに昔の問題の縮図が再現されているのかなと。そうするとやっぱり新旧住民で乖離していきますよね。そこでなんとかひとつにまとめるというのを、うまくやっているかという、今のように柏の葉だけでエリアをつくった方が良いんじゃないかという問題がでてるように、なかなか難しいのかなと。
- 福角： 松葉の例をみていて思うことが、新しいまち独自の組織が必要だと思う反面、新しい団地だけでつくってしまうと、何十年後に松葉と同じような問題がでてくるのかなと思うのですが。今後の市の取り組みとしてはその辺はどのようにお考えですか？
- 市民： 何をもちってコミュニティエリアとするかということだと思うんですけどね。住民にとっては線引きってあんまり関係ないじゃないですか、行政にとってのものなので。だからコミュニティエリア構想が行政側がどのように考えているかという大きな話になって、時代が変われば同じような問題が出てくるでしょうし、田中は田中で古くから伝統ある地域だと思うんですけども、TX開通に伴う新たな課題もありますし、一言では言えないですね。何を優先に考えるのか。
- 福角： そういった話は行政の中で話題になりますか？
- 市民： コミュニティ委員会の活動についてはご存知ですか？ふるさと協議会の連合会の方で、情報交換とか活動に対する意見交換会とかやっているんですけど、ただ本当地域事情に関する話は取り上げられないですね。
- 市民： こちらの資料が差し上げられないんですけど、各協議会で現状の抱えている課題を挙げて下さいとってまとめたものなのですが、田中だと後継者不足、新住民との融和ですね、それで行事の参加者が少ないとか。あとは一本化は難しいとか。去年だったか田中で子どもの数が増えすぎて収集つかない状況だっていう話もありましたけど。伝統行事とかにはたくさん来るんじゃないかな。
- 福角： 柏の葉はふるさと協議会に入っていないんですよね？
- 市民： そうですね。動くのは小学校の単位が大きいし、わざわざ田中の方まで行って色々できないし、負担金を治めるメリットがないってことが一番大きいと思うんだけど。あとは面積が広いこと。結構住民にとっては切実な問題みたいで、田中以外での地域でもあったんですけど、ふるさと協議会の活動には協力したいけど、近隣センターまで行く足がないとかバスがまっすぐ繋がっていないとか、それで協力したいけどできないという意見もありましたね。それでエリアをかえてほしいとか。柏の葉の住民が人数が多いのに、田中まで行ってというのはなかなか難しいのはありますね。
- 福角： コミュニティエリアの問題というのはやはり大きいですね。
- 市民： 市から出す行政連絡で出すお知らせというのは各町会にいくんですけど、ふるさと協議会からのお知らせってなるとね、、、かといって入っていない人を無視しても良いかということ違いますからね。各町会に直接お知らせを回しているんですね。ふるさと協議会の存在意義みたいなものも問われているのかもしれないですね。町会があれば成り立っていくから、それ以上にふるさと協議会に何を望んでいるの？と。期待はないということだろうね。入っていても意味がないというか。お金と人を出させられて、みたに。
- 市民： それはふるさと協議会の危機だよな。
- 市民： そういうことと少子高齢化もあって、参加者・協力者の減少であったり役員の担い手がいなかったことにも全部繋がっていくんでしょうね。
- 福角： そうすると今まで市の施策として、コミュニティ形成の目的でふるさと協議会が位置づけられていると思うのですが、今後はどのように変わっていくのでしょうか？
またコミュニティ施策が行われた当時バラバラだったコミュニティは、既につくられてしまって、ふるさと協議会で行う行事への参加をしなくなる人もいると聞いたのですが。
(コミュニティだけの限界？)
- 市民： 地縁のコミュニティって、柏市は昔から取り組んでいるので、役割はある程度果たしてきたのかなと思いますが、今後もコミュニティの軸となるのはふるさと協議会しかないと思うんですね、それが今後どういう役割

を担って行くかということだと思うのですが、正直に言いますと、活動が空洞化しているところがあって、住民の意識も以前よりは低くなっていますし、行政としても本当に地域のことがわかっているかというところではない。ずいぶん前から協働協働って騒がれていますが、お互い協働という意味がまだわかっていない。本当にこの「協働」という言葉はこれからどこに行ってもキーワードになってくると思うので、柏の地域づくりを進める上では欠かせないことだと思うんですね。そこら辺を行政と市民双方が理解しあうこと。市の職員は意外とわかっていないし、住民はそれ以上にわかっていないかもしれない。特に古くから住んでいる方は中心的な役員などをされているので、行政依存とか、何かあれば行政に頼るとか、そういった考えがまだまだ主流だと思うんですね。そうではなくてまず、パートナーとしてというように早く意識を改革しないといけないんじゃないかなと思いますね。

○福角： ふるさと協議会は町会自治会の住民組織を組織の単位としながらも、やはり行政のトップダウンの施策で始まったと思うのですが、その方法自体が変わっていかないといけないかなと思うのですが、そういった時にUDCKで行っているような活動が近隣センターで行うときは、また違った経験（例えば他の活動を知ったり、情報を得たり、刺激されたり、まじに関われるかもしれないと思ったり）ができれば良いかなと思うのですが。

●市民： 本来近隣センターもそういう目的だったんだよね。

●市民： まさに松葉サミットはそういったところを目指しているんですね。イベント中心の課外活動から、課題解決型へ移行する（問題意識の認識、解決に向けた取り組み）の一つとしてこちらから提案したものは、近隣センターで行っているコミュニティ講座、生涯学習講座というのを人材発掘を含めたもので、ふるさと協議会からも一人コミュニティ委員を出してもらって、それが講座の企画運営に協力してもらってという形で地域の人たちにこんな人材がいるよとかこんなことを考えている人たちが集まってきてるよとかを見てもらったり感じてもらうように仕掛けたものがありました。それだけじゃもちろん足りないものがありますが。

また、今度松葉近隣センターで地域にあるNPO団体をいくつかピックアップしたものを一度に会して、松葉について語ってもらったり、見に来てもらった方にそれぞれの活動を知ってもらうことを目的に企画している。

●市民： 地縁と志縁のマッチングみたいなこともねらいがあって。我々が動かないとやっていけないところもあ

て。ただ、自分たちの地域にも地縁団体や志縁団体があることを知ってもらえるように。マッチングのきっかけづくりと活動の拠点づくりが松葉近隣センターを中心にやっていこうかという企画です。

●市民： 松葉のふる協の藤田会長さんもかなり乗り気で積極的に協力して頂いている状況です。会長は今年度から連合会の会長にもなりました。増々精力的に活動しているという感じなんですけど。1回顔合わせで軽くサミットを行ったのですが、その問題点を解決した上でもう一回やろうということ企画している。NPOの担当の方とも絡みながらやっています。

●市民： 地域活動センターという名前が近隣センターの中に配置しようとしているんです。地縁も今までは我々だけでやらなければいけないんじゃないかってことでやっていたのですが、これからはNPOなど連携してできることってたくさんあるので、そういうことをは始めるきっかけになると思っています。あとは志縁の方は地縁と何かやりたいという想いもあったりして、お互いに手を繋いでやりたいなっていう気持ちはあったみたいなんですけど、なかなかそういう機会がなかったということで、出会いの場をつくったという感じですね。

○福角： 松葉の志縁団体は、松葉の人に限定して対象をきめているわけじゃないですよね、それは地縁と一緒に活動したときにコミュニティエリアの考えはどうなりますか？

●市民： 今の段階だと、地縁と志縁って基本的に仲が良くないっていう認識なんです。意識、フィールド、 Territoriesの違いと言いますか。その解決策は具体的にどうでしょう。

●市民： 地縁は自分たちのエリア内でうまくいけば良いじゃないですか、志縁はこっちにもあっちにもあるという感じ。それで良いと思う。あんまりそれが固まっちゃったらそれは地縁になるし。重なってれば良いということだと思います。ただその線を薄く考えて行かなければいけないのだと思いますね。それがこれからのつき合い方なのではないか。

エリアを意識するのはやはり地縁の役割じゃないかな。NPOの力を自分たちのところでうまく使えるようにしないと。NPOの方々も広いフィールドの中で重なった部分は手を貸してあげるというような。

○福角： 松葉にそういった動きがあるということですが、それ意外の地域ではどうですか？

●市民： 先ずは松葉をみてからということなんじゃないかな。

○福角： 松葉は他の協議会と比べて元気な方なんですかね。

●市民： 元気です。基本的に近い世代の人があって高齢化しているので、危機意識が強いみたいなんですよ。問題がこれから見えているというか。今はまだお祭りをすれば檜の前に小さい子や大人も集まってできるけど。なんとかしなければいけないという想いが強いと思う。あとは会長が新しい事を受け入れる体制ができる方（考え方が）なので、こちらの提案にも積極的に乗って頂いていますね。

●市民： 地域活動センターの第一回目は、風早南部地域ふるさと協議会の高柳近隣センターで一番始めに行われたかな。あとは町会自治会とか小学校が一体でうまく事業を行っているところで、もともとそういう風潮があったみたいで。社協もかんでいるところで、高柳地域はそういう土壌があったということで最初に行った。次に松葉だった。ここで巧くいけば、他のところにもという動きはあると思うんですけどね。今はまだ松葉がこれから、ということなので、どれくらいのスピードで広がっていくかはまだわからないですけどね。連合会を通じて色々情報は流すんですけどね。それぞれの会長さんやトップの方がどう考えるかなんですよ。今のリーダー次第というか。問題はとても活発に挙げてくれるんですよ、それに対する案もいくつか出してはくれるのですが、今までとかわからないものばかりですね。

○福角： そもそもコミュニティエリアをつくるときに、昔のムラの特長や地域の暮らしで線引きを行ったと思うのですが、それに関する資料は残っていますか？

●市民： どうだろう。そこら辺のことは湘南庁舎の柏ムラの生い立ちを展示してるんですけど、うん、線引きはわからないな。
正確に言えばコミュニティエリアも微妙に動いているんです。町会やめるとかね。近隣センターを建てて、そこをコミュニティ活動の拠点としましょうとして、その運営を地域にまかせることになった経緯は既に知っていると思うのですが。（関連資料参照）平成7年に配られたものはこれですね。
ただ本当に最初の資料はないんじゃないかな。

○福角： 昔のムラは農業と暮らし（仕事と暮らし）が密接に結びついていたと思うのですが、今は仕事と暮らしが別々で、そういったときに地域の伝統を伝える上でもふるさと協議会は重要だと思うのですが。

●市民： 行政の施策がヘタなことあって、なかなか良い方向にできない。本当は御神輿を担ぐことだけでも意味のあることなんですけど、そこに意味を感じないまま引

き継がれたりとか、運営側も確固たる信念みたいなものを持っている人も中にはいますけど、ほとんどの人が言われたからやっている、持ち回りでまわってきたからやっているという意識が強いと思います。ふるさと運動というのはとても大事なことなんだよ、というこちらからの発信がもうなくなっているんですよ。ふるさと運動というキーワード自体がこういったものに少し残っている位で、実際に市の広報などで発信しているかというともうないですからね。それはもうふるさと協議会にお願いしているんですが、どうも難しい様子ですね。会長さんは会長という名前を守るためにやっているんじゃないかとか、役員という肩書きだけが好きなんじゃないかとか。こちらからはこういった仕掛けをしていって、意識の改革をしていきたいんですけど、こちらから仕掛けてがらっと変るかといえばそうでもない。やはり自分たちからの自発的な意識改革を期待しているのですが。

●市民： どうやれば変えると思いますか？

●市民： UDCKとかの良い見本があると有り難い、という風に頼ってしまう部分もあります。

○福角： UDCKが対象としているエリアは、ハード的には開発のエリアだと思いますが、ソフト的にはそれぞれの活動によって違うという特徴があると思います。なので、ソフトの活動は柏の葉エリアに限定せず、北部、市全体から色々な人が関わって、またそれぞれの地域に持ち帰ってもらうということができると良いなと思います。

UDCK自身ももう少し地域に根付いた形を考えてほしいなと思います。今は柏の葉に限定したPRセンターと捉えられなくもないので、もし三井が撤退した後になっても良い組織となつてほしいなと思っています。

●市民： 近隣センター毎に行っているコミュニティ講座というのでUDCKも利用させてもらっているのですが、田中と西原と松葉協働で柏の葉公園でピクニックをする、そこにUDCKの方も手伝ってもらう、というイベントをしたんですよ。柏の葉にはこういう施設があるんだよとか、そういう紹介もしたりして。柏の葉を知ってもらうという活動もしている。

主催は近隣センターで。3つのセンター共催で。

○福角： 目的を詳しくお願いします。

●市民： コミュニティ講座の目的は「講座を通じて人と人が繋がりを持ってもらい、その繋がりが今後活動などに活かしていきたい」というもの。

○福角： そうすると内容は何でも良いのですか？

●市民： 何でも良いと思うんです。

○福角：企画は誰が行っているのですか？

●市民：非常勤職員のものです。外部講師を呼ぶ事もあります。

今回もピクニックでできる遊びを紹介しながら体験してもらうということだったので、講師を呼びました。

○福角：それはそれぞれの協議会で企画するものではなくてですか？

●市民：非常勤職員は2館に1人の割合で現在10人います。それぞれが企画や講師選定をして、実際に講座を実施しています。

○福角：参加費は？

●市民：基本的には無料です。材料費などの実費がある場合のみとっています。もちろん講師の方に大しては謝礼は払います。それは市の予算です。そこに、ふる協にも参加して頂いたりして。

○福角：その事業の要綱はありますか？→探してもらう

●市民：ただ今回の事業仕分けで廃止になった。成果が見えづらいということで。

○福角：成果がみえづらいとなかなか持続することが難しいですね。実際のコミュニティにどう影響しているかは計る事が難しいですね。

●市民：高柳の講座で東大の人と一緒にコミュニティ講座をやって、その時に受講者の意識に変容を探ったのですが、そこでは「最初はなんとなく面白そうだから来てみたけど、何度か来ることで意識がかわった」というような調査はしたのですが、そういうところが成果だと思えますよね。なかなか出しづらいですが。それをペーパーにしろって役所は言われるんですよ。受講者が学んだ事を活かして自主グループをつくる、そしてそれが趣味でつづけるだけじゃなくて地域の活動に参加する。という数え方になっちゃうんですよ。

東大の牧野先生に関わってもらってやったのがアロマの講座。そのアロマを使ったハンドマッサージを地域のお祭りのときに自主グループでやった。

○福角：その数を把握されたんですか？

●市民：それを指標にするのもどうかかってことで数えなかった。

○福角：UDCKも活動を通じてできた自主活動もありますね。評価は難しいですね、研究でそこら辺を扱いたいと思うのですが。

●市民：お金が結構かかるんですね。（カレッジリンクの話）対象者はどの地域で行っているのですか？柏在住とかの制限はあるのですか？

○福角：制限はないです。チラシやポスターの配布先によっても違うのですが、TX沿線で配布もしているみたいですね。

ただ市民の育成という面で考えると広げすぎるのもよくないですね。

●市民：広くの人をつなげるのは面白そうですね。近くの人をつなげるだけでも大変ですが。

○福角：興味のある人はどこからでも来ますからね。コミュニティ活動をしてできるだけたくさんの方が興味を持てるものを企画するというも行っていますが、それを今後もUDCKが担うのかという議論はあります。これまでは近隣センターもないので、そのような役割には大きく貢献したとは思いますが。

●市民：コミュニティ講座も平成13年からやってはいるんですけど、継続するのは難しいですよ。

○福角：コミュニティ講座はどうしてふるさと協議会に任せるのではなく、外部から非常勤を呼んで活動することになったのですか？

●市民：行政主導によるまちづくりも必要だということですかね。できるだけ地縁を意識しながら、やりたいということもありますが、色んな人がいるのでその関わり方はバラバラですね。もともと地区公民館の事業にかわるものとして始まりました。柏市は生涯学習をどこでやっているかという市民活動推進課だったんですよ、それは教育委員会との棲み分けがうまくできてなくて、私も本当は地域づくりとか人づくりをやりたかったのですが、教育委員会から一貫されたのですが、公民館事業に地域づくりを入れるという曖昧なものだったので、一般的な教養講座みたいなものをやれば良いのか、何か生み出さなければいけないものなのか、迷いながらやってきたこともあって。あとは成果も見えずづらいので、今回のような結果になったのですが、本来ならば市民活動推進課でやるべきものは、地縁を意識した地域づくり、そのための生涯学習、地域講座だったら良かったのですが、目的が曖昧だったということが一番指摘されたんじゃないかなと思います。地域振興課とか地域活性化という名前でも良いと思うんですよ。そのための講座ね。だから集まるニーズが少ないと言われて、狙いはそこじゃないと思うんですよ。先生を呼んでたくさん人を呼ぶというのであればたくさん人集めをしなければいけないけど、そうじゃないですからね、それで集まる人数少ないよね、って事業仕分けで指摘されたみたいなん

ですよ。これで地域に貢献してますよと言うためには持っている玉が小さかった。これは永遠の課題ですからね。

ります。そこはちょっと考えなければいけないかなというのがありますね。ボランティアでやってもらっているのでこちらから言いづらいところもありますけど。

○福角： もっと多くの人を集めることは、地縁コミュニティを活性化するためには役立ちませんか？

●市民： 講師を呼ぶことに、地域の課題解決に役立つ内容のときは良いのですが、そればかりやっているわけにはいかないんですよ。人を集めることが目的ではなくて、内容に合わせた規模でやる。毎回毎回大先生を呼んで講演会をするなら実績を残せるとは思うのですが、そういうことじゃないでしょ、と。

○福角： ふるさと協議会の担当の方と、非常勤の方とが集まった時に誰かを呼んで講演をするということはあるのですか？

●市民： あります。そこが生涯学習という位置づけにはしていなくて、コミュニティ委員会だった。これがふるさと協議会の連合会の下部組織。これは大きい講演会をするための意味合いがあった、だからその前はリーダー育成事業だった。昔は有名な人を呼んだりしていた。

●市民： ポイントはね、その担当の市民の人の意識だと思うんですよ。意識が変われば自分の役割をみつけると思うし。今後は名前も変えて、役割も変えて、そういう組織を大事にしていきたいと思うのですが。

●市民： コミュニティアリアリーダー育成事業だったものを、より地域の課題を吸い上げて解決していくことをリーダーに限定しないでおこうと思っています。

○福角： コミュニティという言葉をコミュニティ委員会ではどう捉えていますか？

●市民： 地域社会とか地域のつながりということだと思います。

○福角： 地域のリーダーになる人は、人と人を繋げる力を持っているんですよ？

●市民： そういう意図で選出してほしいと伝えましたが、実際はそうでもないこともあります。ただ、ここで経験した方がふるさと協議会の会長になった人もいます。ここではまあ、コミュニティエリアを対象としたコミュニティと使っていると思います。

推薦してもらっているにも関わらず、ふるさと協議会の中でコミュニティ委員の位置づけが高い所と低い所とバラバラなんですね。本来はコミュニティ委員会で活動したことを、ふる協でフィードバックしてほしいのですが、そこで発言を与えられる方と与えられない方とバラバラなんですよ。だからコミュニティ委員という位置づけをもっと行政からふる協に言ってくれという要請もあ

資料4 ヒアリング記録2

UDCK創設／運営関係者編

no5～no20（合計17人）

No	5 (1人)
日時	2010年5月22日15時～16時
場所	UDCK
対象	NPO支援センターちば ●宮奈由貴子
質問者	○著者

○福角：趣旨説明

●宮奈：うちがよく使う言葉は、「いかに参加の入り口をデザインするか」ということを言っていて、UDCKって発信することは非常に長けているじゃない、あらゆる実証実験を目まぐるしい速度でやっては終わり、やっては終わりという感じでやってきたわけじゃない、本当に一つ一つを蓄積して繋いでいくという作業がへたくそだったんですね。コミュニケーションというのは、徳山先生（千葉大）が受信こそ大事なんだと、発信ばかりだと自分よがりになったりとか、地域と乖離してしまったりとか、いかに人の声をきくかとか、UDCKってわかりづらいうねってことをものすごく多くの人に言われるけど何もできていない。だから参加の入り口と言ったのは、色んな頻度で色んな負担度で、色んなテーマで、切り口でまちについてどうなんだろうって思ってますよね、そういう人たちの入り口をどうデザインして、それを受け取るためには中にいる人やシステムをきちっと持たないと、受けたはいいいけど、やりっぱなし、ききっぱなし、何も動いていない、何も見えないとって離れていってしまうと思うんですね。でも聞くためだけに色んなイベントをやっているかというそうじゃなくて、やはり将来的に例えば子育ての面で、高齢社会の面でこのまちがどうなっていったら良いのかなと、そのための下地づくりで今何が必要かとか、もっとビジョンをここが持つべきじゃないかなと私は思っている。それがいいことにはなかなか。今現場から積み上げてきたことを丁整理しているんだけど。

うちの組織って三社でやっていて、NPOサポートセンターと、パルシステムと、江戸川大学の恵教授と一緒に、行政とパートナーシップをとって、地域の共通の利益とか課題をそれぞれの地域資源を持ち寄って解決していかなければいけないということで、「公・民・学」の考え方と一緒にのね。わかりやすく言うと、住民の人が「あったら良いな」ということを実現するお手伝いをするNPOなんです。暮らしとまちが豊かになるためには「地域力」が高まらないといけないう。地域力が何かと言うと、困ったときにいかに色んな助け合いのかたち、

サービスの選択肢があるかということだと思っていて、ただサービスを受けるというだけではだめで、提供する側にもなりえる「コミュニティ・ケア」という言葉があるんだけど、いつもは行政のサービスを受ける、という何かをしてもらうという消費者としての感覚に慣れてるんだけど、してあげるとか、自然とやって当たり前というような、そんな機会が今は少ないんですね。だけどそれはもっとごく自然に（今日も昔写真展の人みたいに）出会いから始まって、じゃあ一緒にやろうよというようになっていかないと、、、例えば昔は「うちのおばあちゃんちょっと見てて」っていうときに、隣のお姉さんがいる、八百屋のおばさんがいる、とかがあったかもしれないけど、今はどんどん核家族でおばあちゃんもいないし、プライバシーとセキュリティでマンションなんかだとばったり会うこともなかったり、行政も財政難やニーズの多様化で追いつけなかったり、つ町会も組織化されていないじゃないですか、昔は地縁・血縁の関係で解決できたものができなくなって、お金を払ってサービスを買うというやり取りで解決するようになった。それを、もっとサービスを担う側にもなれる力を持つというのが、今行政だって当てにならないし、企業だって儲からなければできないし、だからNPOという市民活動が大事だって、官から民へとかってよく言われるんですね。だけど、市民活動とかNPO活動って言うと急に他人事に聞こえるじゃない、「えらいわねー」とか。だから私たちはこのまちでは言わないでおこうと。さっき参加の入り口の話をしたけど、「コミュニケーション装置」というものを4つつくろうとしている。一つがクラブ活動、一つがマルシェ、三つ目がマンションイベント（これは三井向けにビジネスとしてやらなければいけない）の祭り、ああいう町会イベント、あとは介護や子育てなどのコミュニティケアとかそういうことに関してもこのまちはこうあるべきで、そのために今こう動こう！ということがUDCKでどこまでできるのかということも考え始めなければいけないと思っているんですね、そういう形で今UDCKがこの参加の入り口をどうデザインして、誰が中にいて、これをちゃんと耳をたててどっちの方向に引っ張って行くか。だけど、決めてかかってしまったら終わりなんですね。一緒にやりましょうから、何かやりたいという声があったときに二言目には「いっしょにやりましょう」と言い続けて、それを企業の人にとってはインパクトと成果が求められるから、短時間で最大限の効果を！でしょ、だからお金をかけてプランナー会社を入れて派手にやれば一つの効果なんですけど、それをやっちゃうと継続的な運営とか、次はどうしようかと思う間もなく過ぎ去って、住民たちがそれを繋いでいくということが育たないんですね。ただUDCKの役割はその両方が必要で、全国的にも世界的にも実験

をどんどんやるインパクトも必要で。だけどやるなら、計画の段階からいかに住民とか学生とかが一緒にその後続けていくことができるかということを組み込む、ということですよ。そういう部分が今とても必要だと思っていて、学生ももっとやりたいプロジェクトに手を挙げて、名刺を持ってスタッフとして動ける立場を与えたら良いと私は思っているんだけど、まずはこの中を良く知っている担い手がちゃんと窓口の担当をつけるということをしていかないと、いくら住民の意見が大事だと言っても、こっちがつぶされちゃう。

○福角：今は宮奈さんが発信もして、受信もして、という状況ですよ？

●宮奈：齊藤が現場で住民と顔を合わせて、こんな人がいたよとかこういうことをやろうという話がでたよということを持ってきて必ずそれを次に繋げることをしている。逆にお金がない方が助けてもらえる。「齊藤さんいつも頑張ってるもんね、だったらうちがこれを持ってくるわよ。」とかそういう関係性って、お金があればすぐ人は動いてくれるし、見つかるんですよ。けどなくなった瞬間に終わりなのね。だからない中で地域資源—色々な場の提供とかノウハウの提供とか、なによりもUDCKやKFVのような拠点を提供してくれていることが大きいんだけどね。

社会教育ってさ、教育委員会が公民館とか図書館をつくるじゃない、それでその部屋で講演会とか生涯学習講座を企画するのね、柏の場合は近隣センターがあるじゃない、あれって別に社会教育のための施設じゃないんですよ、ふるさと運動のためにつくられたから。そうすると教育委員会がやっている社会教育って非常に枯渇してきていて、NPOに企画提案をしてもらってお金を払うということをしたの。それはある意味良いことだと思うんだけど、一方で市民活動推進課が近隣センターを拠点としたコミュニティ講座を始めたんですよ。まちづくりを主眼においた講座さんですよ。社会教育って何の為かという、地域の中でいくつになってもいきいきとか、地域の課題を解決する担い手を育てようとかそういうことじゃないですか、でもやっぱり拠点の中だけで学んでも、実践がなければ、カルチャースクール化しちゃいけないですか、とすると市民活動推進課がやっているのは、生活部（自治会とか）の管轄なのね、いかにまちづくりという枠の中で動ける人をつくるかということでコミュニティ講座でやろうとしているのね、「今昔写真展」の人とかはコミュニティ講座で集まったメンバーが継続してやっているんですよ。そういう意味では、コーディネーターの人がいてね、コミュニティ講座は社会教育指導員って言ったかな、村田さんって人なんですけど、もともと学芸員の経験があるから、とても企画力が

あってね、すごく良い企画をつくってくれたんですよ。だけど、問題なのが、この文科省の補助金ところでは、今なかなかつくられていない公共施設（社会教育施設）ってあるじゃない、それを使って公民館活動で何か動けなかっていうことなんだけど、そもそもこのエリアって、社会教育施設がないんですよ、というのが一つ。地域課題の解決っていう面から見れば、町会自治会っていういわゆる昔からある自治構造も今やマンション管理組合が取ってかわって機能していないんですよ。もう一つ。商店街っていう経済活動はやっぱりサービスの担い手だし、まちにとって情報が集中する機能は大事なんだけど、今やショッピングセンターとかかわってるじゃない、このまちはその典型で、社会教育施設がない、自治体が機能していない、商店街がない、けどこんなまちは沿線にたくさんできているでしょ、じゃあ何もないうちで何ができるのかということ、この補助金で取れたらなと考えています。一方で行政がやっているコミュニティ講座とか、半分UDCKってというのは市のお金だからやっているのはあるんですよ、けどこれだけ民間とかのプログラムがあって、NPOとか大学がそれにかかわっていると。例えばカルチャー系とかアカデミック系とかにわけてみると、これくらいありますと。

申請の話をもう少しすると、そこでは3つのことをやられて言われているんですよ、一つは研究会、実践のプログラムを組む事。これは他地域に応用して行くためのプログラムづくりをまとめなさいということ、それで学習会を開きなさいというのは社会教育施設がないところで、市にとっても近隣センターが抜けている地域なんです、田中地区つてもとからとても大きいじゃない、昨日も町会担当の方と話していて、この地域に新しいふるさと協議会をつくることは可能なのかという話を聞いてきたんです。もともと中田さんとまちづくり協議会を一番街、二番街、三番街の中で立ち上げようとしているんですよ、ただそれは柏市の制度で言うふるさと協議会にあたるのか、自治会にあたるのか、どっちが良いのかということを相談してきた。そういう枠組みを既存のエリア（20）では収まらない。柏市も田中地域が大きすぎることはわかっている、これだけ沿線開発もしてね。やるなら良いタイミングだになってことがあったんですけど、やはり防犯の面から見ても大きすぎると。一番街は田中地域ふるさと協議会には入っていないんですよ。けど入ることが一番スムーズかを考えると、二番街や三番街ができたときには、ここのエリア駅前周辺という単位で必要になってくるだろうし、あれって中学校位じゃないですか、中学校ができたときなんかはなおさらわかれた方が動き易いんじゃないかとかあってね。やっぱり大きくなると運営するだけで大変になるでしょ。だからそんなこともあるんですが、学習会の開催では、色々なものを

全部やろうと思うと大変なので、クラブとこれ、クラブと例えばカレッジリンク、クラブとららぽーと等の協働企画をして、参加の間口を広げて行きたいとおもっている。住民へのグループインタビューとか関係者間でのインタビューとかをしたいと思ったんですね。それを事前事後やりなさいということなので今やろうとしていたんですよ。

なので、おっしゃって頂いた部分を取り組みたいと思っています。

○福角： UDCKの活動とふる協の活動がどう繋がるのかとか、繋がることはあるのかとか、ふる協の活動だけでは見えてこなかったの。

●宮奈： どういう風に住民に聞くのが良いのかを考えている。住民にとっては事前事後じゃない気がする。住民は、このエリア（柏の葉）に住んでいる人と、周辺に住んでいる人に分けて考えなければいけないと思っている。ここは行政がつくったいわゆる「拠点」がないでしょ、だからないエリアで知り得ている情報量とか、選択肢とか、アクセスのし易さとか、この中の人はどうで、周辺はどうかとか。でも周辺も拠点があるといっても、実は参加者が固定かしてておじさんばかりかもしれないし、アクセスが以外と良くないかもしれない。そういう新旧の違いも知りたい。あとは、近隣センターと協働プログラムをやっているんですよ、だから実は周辺の人だけ、ここは意外と駅前だし、車も停められるし、アクセスが良いし、きれいだし、周辺の近隣センターでやると参加者が決まっているけど、こっちでやったらもうちょっと結活プログラムができるかもしれないということをやったんです。その効果もきつとあって。拠点がなくてどうするか、そのときにサポーターとなっているのが、うちで言うと三井不動産がクラブハウスの拠点、ららぽーとの中のスペースを貸してくれたら商業施設としてのまちへの貢献の切り口だし、何より大学だってそうだし。そういう資源がたくさんあるエリアだと思っているので。

○福角： 一つ意外だったのは、UDCKはこの地域の拠点だと考えていて、そこまで近隣センターがないことを意識していなかった。

●宮奈： 場所として、機能として、コーディネーターがいるかないかを考えると、果たしてここが今までの集会所と一緒に考えると全くちがうじゃない、場所としての拠点は住民にとってはこんなに広いスペースを他で借りたら一時間何百円払わなければいけないけどそうじゃないっていうのは非常にありがたいとよく聞く。それは機能しているかもしれないけれども、ここに来たら何がわかるかとか、あと逆にUDCKの中にいる人たちが住民のた

めって言って何かをやっているかというところじゃない、常に社会に発信する為の拠点としてしか考えていないじゃない、それはその通りで良いんですけど、それは住民にも伝わるんです。だから住民のための拠点としてつくられてきたかと言うとそれは違うと思う。

○福角： 利用者から見た「公民学」が実感し難い気がします。住民がここに来て、色々な人と交流や活動できることがどう良いのかわからない。

●宮奈： 明らかにここがあると、例えば既に交流事業の一貫としてやっているわけだけど、投げ込み易いんだよね。それは私たちが住民の声を代弁しているんだけど、それはやっぱり段階があってさ、住民のやりたいっていった声をここでこうやってやっているのは、例えばそこで（デッキ）コーヒーをやっているのも、マンションに住むおじいちゃんおばあちゃんが散歩に出てくる良い機会だし、それをここ（UDCK）の中の人にも見てもらいたいですよ。UDCKが今後どこまでやるのかという話になると思うんですけど、受け皿をどこまでつくるかということを見極めていかないといけないと思っている。できないならできないで参加の入り口をつくらないと行けない。誤解されて、かえって反発を持たれたりするわけですよね。こういう組織じゃないのか！とか。これってすごく大切なことで、行政組織じゃないので、できることとできないことはあるんですよ。じゃあ誰の為の組織で何をしてくれるのかっていうことをちゃんと「見える化」しないと、やっぱり裏切られたって思われたり、何にもしてくれないよね、UDCKはって思われてしまう。何か逆に、住民がやりたいって言ったときに、行政の何課の人運営会議に居るから伝えますね、とかそれは本当に恵まれているとおもう。普通は運営会議であれだけの県や市から来ているのってないでしょ、一NPOにとっても、ここに協力団体として動いているのは、それだけで信用部隊となっている。UDCKがやっているの、っていうのでとてもやるやすい。だからそれをつくったという意味ではすごいことで、ほかじゃないこと。すごく草の根的な話で言えば、子どもがまちで学べるっていうことや、いくつになっても生き甲斐になる活動ができるとかね。今欠けているのはお父さん世代。土曜日に出て来れるものをつくりたいと思っている。だけど、残念なことにそれぞれのプログラムは分断されちゃってるのね。だから今回カレッジリンクに言って伝えたり、これからは一緒に会議をしようという話になっている。あとは、これからいかに住民が主体的にできるしくみ、お手伝いができるかという話になっていて、今うちがやろうとしているのは、二番街にコモンスペースができるんです。コレクティブハウス。そこを次なるクラブハウ

スの拠点にしようと思っていて、クラブハウスもあと1年半位で終わってしまうので。

そこで今やりたいのは、クラブで自己実現の練習問題をやっていると思っていて、今度のもっと継続的に例えば子どもの遊びの広場を運営したいという人が出てきたときに、まちの中のコレクティブハウスでおじいちゃんが昔の遊びを教えてくれたりとか、東大生が勉強を教えてくれたりとかすると良いじゃない、保育園もできるんだけど、そこの運動場を使ったりして。それを運営して行きたいという人がでてきたときに、資金が必要だったり、場所が必要だと思うんですね。だから企業化サロンみたいなものをやろうと思っているんですね。それは単にベンチャーとかではなく、ままさんやおじいちゃんが0ベースで動く運営システムをつくる。それをコンパシして、まちの人が投票する、というようなことをしたいと思っている。まちぐるみで住民のためのサービス企業を応援するしくみをつくりたいと思っている。それができた暁には、住民が欲しいって投票したんだから、つくるプロセスがマーケティングになっていて、できた時にはお客さんになっているじゃないですか。コミュニティビジネスとかソーシャルビジネスって、売るものを作って、それがモノだったりサービスだったりするけど、それを増やしてお金が増えるというしくみなんだけど、それをやり始めると、効率化を求められて一元管理化してくると継続するためのシステム開発でお金が必要、そのための総務みたいな現場じゃない人を雇わなくてはいけなくなったり、場所も大きくなったりどんどん経費がかかる。そんなのこのまちで無理なんです。そうじゃなくて、証券を決めてしまう。その中で0ベースで動けるしくみをつくるのが要。普段は必要だと思わないネットワークでも、いざというときに使えるシステムなんだと思います。そういうのって、企業はできなじゃない。儲からないから。だけど本当はそれで良いと思う。困ったときに使えるというような。そういう部分をつくるお手伝いをしたいと思っていて、そのために拠点って大事だと思っていて、あそこに行けば相談できる人がいて場所を貸してくれる。その為の総合ステーションみたいなものをつくりたいなと思っている。そういうのがあると、介護のこと、障害者のこと、子育てのこと等色々情報が集まってくるし、地域のNPOとか介護事業者を繋いだりとか、医療で言えばがんセンターとかと連携していくとか。それがうまくいけば独居老人の見守りになるとか。そういうことまでやりたいと思う。

○福角： 何年後、自主運営をしていけるしくみになると良いと考えていますか？

●宮奈： まだね、計画まではいっていないんです。構想どまりで。ただらば一とさんだったり三井さんだったり

が今回柏の大きなきっかけで、こういうことをサポートするメンバーをいかにしてくれるのが大切だと思っていて、うちのスタッフだけでは不十分で。

まちづくりには、プレーヤーとサポーターとコーディネーターの三者がバランス良くやるのが大事で、今プレーヤーがいないんです。というか私たちがコーディネーター役に徹しなければいけないんだけど、プレーヤーと兼任している状態。今一生懸命プレーヤーを育てようとしていて、コーディネーターとして認められるにはやっぱりNPOさんいないとできないねって思われるくらいじゃないと成功じゃないんですね。でも私たちがいないとできないというようにはつくっていく。それはサポーターというのは企業だったり大学だったり、県だったり市だったり。ただ企業とかは特にメリットがないとできないでしょ、お互いにwinwinの関係がお金からなくてできるのであれば、やるべきじゃない、そういう関係を文科省の中でプログラムというかモデルをつくりたいなと。それができちゃえば、他の地域でも応用できるかなと思っている。なかなかこのエリアのように場所も豊富で大学もあって三井みたいな財閥がいてなんてことはないですよ。けどお互い0ベースでwinwinの小さいプログラムはたぶんこういう条件じゃなくてもできると思う。それが大なり小なり分野を超えて。

○福角： それは三井も協力的なのですか？

●宮奈： 今やろうという話は進んでいて、河合さんなんかはMOC（三井オープンコミュニティ）というマンションをつくるときに、市民を呼んでモニターみたいなことをしてヒアリングする機会を作っていて、それをMOCと呼んで、それをこのまちでもやりたいと。それはね、三井のMを「まちづくりオープンコミュニティ」というまちづくりに掛けてやろうかなと思っているんだけど。三井さんも住人がどういう声を持っていて、これからどういうまちにしていくかというのは前向きですね。このまちで培ったノウハウがあると、他の地域でも使えるじゃないですか。それは本当にお互いにとってメリット。今回ね、みこし祭りにマルシェを入れて下さいという日なんです。同時開催できないかなと思って。

みこし祭りってそんなにテキ屋さんを入れていないから、食べ物が少ないし、マルシェにとっても良いお客さんになるからといって。みこしまつりはもともとサンバがきたり、チアリーディングがあったりだから、マルシェのコンテンツで大事にしているのがパフォーマンスとかワークショップなので、そこまではみこしまつりの時にできるかわからないけど、一緒にできないかなと。マルシェもさっきコミュニケーション装置って話をしたけど、私たちにっては二つ目のコミュニケーション装置だと思っていて、マルシェ×らば一と、マルシェ

×JAかしわでとか色々なテーマでまちの人たちに関わってもらえる良い装置だと思っています。わかり易いじゃない、あれだけ賑わいがあるからインパクトもあるし、お祭り気分のできるし。まずはこのまちのステークホルダーを繋いでいくための装置だと思っているから、そこさえ繋がってしまえば、さっき言ったみたいなまちの人たちの声を聞いて一緒にやろうというネットワークになると考えている。

○福角： 繋げることで、バラバラでやっているときよりも、声を拾い易いということもあるのですか？

●宮奈： 市民って言ったときに、住んでいる人が一番思い浮かぶと思うんだけど、地元のお店もそうなんです。マルシェは地元のお店が参加できる機会だと思っていて、店主も市民ではあるんだけど、お店という単位と単位が繋がると、商店街じゃないですけど、テーマを替え、手法を変えていき、まちの見本市とかをやるとか、住民にとっても、クラブで継続的にするのはできないとか仲間づくりがこそばゆい人もいないじゃない、そういう人はマルシェで気軽にものを買うっていう行為で来れば良いんだけど、ものを買うで終わらないマルシェを目指していて、マルシェに行ってみたら、片やクラブハウスの説明ブースがあって、とか社会実験のモニター募集があって、とか発信のチャンネルを普段UDCKが持っていて、来ないじゃない。マルシェに出て行こう、という使い方をしたいなど。

全部相互乗り入れでやっています。逆に言うと、そうやらないと財源

うちはもともと柏の葉だけの事業をやっているわけではなく、野田で農園もやっていたりとか、園芸福祉農園をやっているんだけど、

○福角： どういう地域が規定はありますか？

●宮奈： それはね、そこに課題があるからそこでやるという感じなんですけど、だから柏に限定しているわけでもなくて。うちはどういう生業をしているかというと、柏の葉で言えばコミュニティづくりをする事務局機能を業務委託でやっているんですよ。でもそれだけではやっていけないから例えばマルシェの出典料から稼ぐとか。例えば他の園芸福祉の事業なんかはこれはまさに業務委託とかではなくて、野菜の販売をして年間500万の収入をあげているんですね。販売だけではなくて、田んぼの親子イベントを毎年400人でやったりとか。その参加費収入とか。それをうちがやることで25%事務局手数料をもらっている。他にも色々なネットワークがあって、それも事務局代行手数料で何%やったりとか。それで今3000万の団体なんですね。

そもそも色々なエリアでやっているNPOなんだけど、柏の葉では事業内で赤字にならないように回さないといけないから、レジデンシャルからの業務委託一本と、マルシェの出店料とか、あとは協賛金をもらうしくみになりました。総収入500万円であれが300万円くらい今年は稼げると見込んでいる。あらゆるものがやりっぱなし、継続する担い手がいないという状況になっているんですよ。そういう意味ではどんどん仕事が振ってくる。でもうちもやりきれないわけ。いかに住人がはじめから携われるしくみをどうしてはじめてやらならないの？ということがすごく残念なんです。だからお金も必要不可欠で、あるかないかでこういうすごくゆるい上下関係もしがらみも緩くできる要因の一つですよ。三井さんが出してくれているから、こんなゆるいネットワークができているんだと思います。これが利害関係があったら、今のようにはなっていない。

文科省のプロジェクトが採択されなくても、そのプログラムはつくっていきたいし、クラブ活動の価値づけを行いたいと思っているので、だから是非一緒にやりましょう。

No	6 (1人)
日時	2010年6月23日10時30分～12時
場所	麻布十番カフェ
対象	●丹下由佳里 (旧姓：丹羽)
質問者	○著者

●丹羽：テーマは？

○福角：「UDCKの市民活動拠点としての評価」（仮）UDCKが市民活動を切り口とした時に、どのように評価できるのかという論文になると思います。ただ、住民にフォーカスするまでに、全体のことを知りたいです。

●丹羽：UDCKは研究の場、行政のサービスの場、まちづくりの場、三井のコーポラルの場、色々と重なっているから読み解くのが難しい。普通の公共建築よりも対象がバラバラ。ほめながら批判していくと良いかもしれない。

○福角：UDCKの組織の話と、建築的に丹羽さんの抱いているイメージを聞きたい。

●丹羽：後者から。トゥルーマンショーみたいだと思った。新しいまちだから、朝なかったものが帰りにはできているものを体験することに不思議な感覚だった。もし柏の葉が低層で開発していったら面白いのではないかと思っが、会社の利益も必要だから仕方ない。

また、UDCKは「三井に対して貢献する」という意識は強く持っている。三井の力はすごい。三井のために良いまちを演出していくという意識はあった。

○福角：丹羽さんがUDCKに来るきっかけを教えてください。

●丹羽：大野研のドクター3年の時に北沢先生から誘われたことがきっかけ。北沢先生は論文の副査。その時はUDCKのことは何も知らなかった。まちづくりも専門外だった。都市計画もほとんどわからない状況だった。実際に北沢先生の下についてから、学生と一緒に勉強しながら仕事をしていった。

○福角：初期の仕事は？

●丹羽：入った直後からものすごく多くの人と会った。北沢／前田／丹羽であちこちに挨拶巡り。挨拶したらその数日後には仕事の依頼。「会う」ことも仕事。建築とアーバンデザインの大きな違いは、建築は作品を出すまでは閉じてもって作業する期間があるが、北沢スタイルはそうではない。早い段階でどんどんディスカッションが始まる。スタディする時間がないと感じた。また、相当数の人に会うから簡単な言葉で表現しないとわからな

い。誰もがわかるキーワードを掲げないと末端の人にまで伝わらない。そこら辺の配慮をしていた。北沢先生なのかアーバンデザインなのかはわからないが。

○福角：スタッフの中の仕事分担について教えてください。

○丹羽：図で説明。2年目か3年目から北沢先生なしで動くようになった。（それまでは1日40件くらい指示メールがきた）前田／丹羽で判断するように。その後、田口さん、宮奈さん、小林さん、ジャパンライフなどが入ってきてからは、（北沢先生は市民に対する活動に対して厳しかった。）それぞれの仕事が細分化し、分担するようになった。北沢先生はあまり口出ししなくなった。（初めの2年間は口出ししていた）このような広がりができるようになったのは三井。管轄を前田／丹羽が行っていたとしても、三井のおかげ。

○福角：それだけ三井の力が大きいと、他で応用していくのは難しいですかね？

●丹羽：みんな三井がキーだと言う。お金がかかるものと認めざるを得ない。ただ、しくみとしてやるとしても、東大のような上から目線も大事。北沢先生のイメージとしては、他にもこのしくみを売っていけると言っていたが、そのまんまのコピーは難しい。先生は「行政にとってくれる。」と。行政がうまく大学や企業を使うことに繋がる。

もう少し「市役所が株式会社にならなければいけない」「戦略的に考えないといけない」と言っていた。ゆくゆくは行政にアピールするつもりだったと思う。

○福角：住民が入ることで何か意識が変わることはありますか？

●丹羽：初めは人付き合いが苦手だったため、余りにオープンなことが大変だった。でもしばらくして慣れた。先生からは「向いている」と言われる。真剣に聴くことが本当に良いことなのかわからなくなった。聞き流すことも必要。完全に市民目線になってしまうと何もできなくなってしまう。

アーバンデザイナーという職能に必要なことは、模型をきれいにしてくれるかというスキルと住民の人と巧くやっていくということは同じ位重要。

行政から全然関係ないような仕事も降ってくる。そのような仕事をするうちに、UDCKの中だけでは出会わない人も出会うし。色んなスキルが身に付いた。

No	7 (1人)
日時	2010年6月21日15時～16時30分
場所	UDCK
対象	●砂川亜里沙
質問者	○著者

●砂川：1期生が柏に来た2006年のまちの様子は本当に何もなくて、駅前のコンビニしかない状況。これからどんなまちになっていくのかという感覚が10月位まで常にあった。

10月までは、建物の検討やラボの建設が始まる。

市街地を再開発する様子はこれまでも見てきたが、まさらなところから立ち上がるものを見たことがなく、かつ関東圏では最後の沿線開発になるのではと言われていたが、実感がなかった。

ただ、半年の間に、「なにもないところに建っていく」とこと「UDCKはずっとあるものではない」、「北沢先生もやったことがないこと」、「UDCKに常にいたのが学生でも砂川さんだけ」という状況で、話す相手が大人しかなかった。

0ベースで様々な専門家が集まっているが、実質動く人がいなかった。

私自身も、すごいところに身を置いているのは分かっていたが、自分に何ができるかわからなかった。その中で、大人ができないところを補えるのではないかと考えるようになった。

大学教授が話している専門の話を一般の人と話していけるようなしくみをつくっていききたい。先生と近くに住んでいるおじさんが話すよりも、自分が話した方が近い立場で話すことができるのではないかと、思っていた。また、将来的にもコンサルなどの職に興味があり、ファシリテーターになりたいという気持ちも関連していると思う。

当時は日高さんと私しか動ける人がいなかった。UG、スパイラルなど関連企業の専門家の人もとても一生懸命動いていたが、UDCKとしての実働部隊はやはり砂川さん。それが始まり。

そこからマップ作成や、周辺住民のヒアリングが始まった。動いてみて見えるもの、わかることを大切にしていた。

その頃第一回の都市環境デザインスタジオが始まった。北沢研は参加もするが運営をするホストでもあるから、自ら積極的に事業の進め方を考えていった。また、当時の千葉大、理科大生も意見を言うてくれることが多く、UDCKも積極的に利用していた。

大きな渦の中で、UDCKの全体構想を考えている人もいるが、実際にまちに対して開いていくのは自分だ、と思った。運営会議に参加する中で、自分のやりたいことを見つけて行っていた。運営会議はM1の4月から。（先生の呼びかけで全員参加）4月5月くらいはキャンパスタウンはどうするのか、どんな建物をつくるのかという話を議事録を取りながら聞いていた。しかし、聞いているだけだと実感がなかった。8月9月になると建物も建って、具体的な話が進んでいた。

自分がUDCKで学生生活を送ることが、実験の一つだと感じていた。

新しいまちに住む人にとって、新しいものがどんどん建っていく状況は怖いのではないかと、思っていた。その中でUDCKがまちの施設ですよ、と言っても使い方もわからないと思うし、マンションギャラリーだと思われていた。しかし、こちら側としても色々準備していて、住民の人とも一緒に考えて行きたいという思いがあったため、自分が間に入ってやりたかった。

スーツ着た大人ばかりがいるのではなく、自分がサクラになってここで色んな生活をした。

また、2年間ということは「試されている」と思っていた。環境・文化・まちは特別なことではない。小さい頃からの教育によっては自然に身に付くものだと考えている。自分自身ももっと早い時期にまちについて色々知りたかったというもあり、UDCKから若い人が巣立っていく場所になればいいなと、思っていた。

○福角：2年間いてどうですか？

●砂川：本当にたくさんの方が来る。また目的を持ってここで何かをしている人が多く、学生だからといって何も教えてくれないということがなかった。何かしようとしている人に対して、とても協力的だった。学生としても「やりたい」と言った瞬間に責任もあった。

将来的にまちについて考える人が増えてくれると嬉しい。UDCKがなくなったとき、かたちがなくなった時にでもしくみは残そうという意識が当時のメンバーにはあったのではないかと。

具体的には、当時のKサロン（月に1回）の様子。BARでアルバイトをしていた経験を活かして、カクテルを振る舞う。缶だけじゃ寂しい。また、環境のことを掲げているにもかかわらず、Kサロンによって大量のゴミが出るのが嫌だったことから、マイコップ制にしてゴミを少しでも減らす。そのことがきっかけで、東大の先生と話す機会があり、ガラスのワークショップに繋がった。

ここの凄いところは、自分たちで実際にまちをつくっていくことに係れること。そのようなWSに参加してみて、

自分がまちをつくっていると実感してほしい。学生がやることができることは、住民にもできるのではないか。

○ 福角：WSに参加する人はどこから参加しているのか？新しい住民だけでなく、昔からここに住んでいる人も、砂川さんの意図していたことを感じているのか？

● 砂川：横張研の学生がUDCKのことを知っていた。きっかけは「田中まつり」。小さなことだけど、驚いたし嬉しかった。

ここで感じたのが、自分が思っている柏の葉エリアと、住んでいる人が思っている柏の葉エリアは違うのではないかと思った。案の定、住民は住所のイメージが強い。一方、スタジオでは広くエリアをとっている。この差が面白い。また、最近ではポストिंगの範囲などもさらに広がって、どんどんUDCKが対象とするエリアが広がってきている気がする。

住民の人と一緒に作り上げてきたと感じることは、1回目のガラスの花のWSに参加してくれた人が、その後のメンテナンス（草むしりや掃除など）に積極的に参加してくれた。忘れてなかったんだ、ということがわかった。しかし、問題・課題となるのは、どうしてそのWSを行ったのかという証を残していないこと。参加してくれた人に対しては、私たちがしたいことを伝えましたが、参加していない人に対しても表現し、伝えていければいいと思う。

私がいたときはまだ走り始めで、最近やっと浸透してきたのかなと感じる。しかし、ピクニッククラブも参加が今年もあったことを聞くと、嬉しい反面、私を感じている「住んでいる人と一緒にやる」という意味は、参加者としてきてくれることから運営をしてくれることだと思っているから、まだ違和感があるかもしれない。

にぎやかしのためにやっているのでは決してなく、アーバンデザインを実際にやってみるきっかけの一つだから、そんなにたくさん人を呼びたいわけではなく、本当はそれを続けて行く人ができれば良いなど。運営に興味を持つ人がでてくると、「お、きたな！」というかんじがする。

○ 福角：先日までPLSで「かしわ昔写真展」を住民の人が運営していた。それを見ると、運営することが大切だなと感じた。

● 砂川：運営は大変。呼びかけ、責任、まちに対する本気度など。でもきっとまちづくりってそういうもの。UDCKの中で楽しく自分が動いている、それを見せていたことは良かった。

どうして色々な活動を行っているのか、しくみはどうなっているのか、

宮奈さんのような人がいなくなった時にどうやって運営するのかということに興味がある。

○ 福角：宮奈さん自身も活動を主体的に行っている人を育てていきたい、そのシステムをつくっていきたくておっしゃっていた。

昔から住んでいる人の中にも興味を持ってくれる人はいますかね？

● 砂川：以前松葉町の団地の人で「使ってみたくて使いがわからない」という声を聞いたことがある。その時にやってみたのは、広報の仕方を工夫すること。団地に住んでいる人世代はインターネット世代じゃない。紙媒体でやってみた。情報の発信の仕方にもまだ考える余地がある。

また、UDCKは「みんなに使ってほしい、みんなが使える場所ではない」と思う。あくまでセンター。まちの至る所で活動が行われるための起爆剤となれば良いと思う。全部の活動がここに集中してしまうと、まちのアクティビティが一点集中型になってしまい、あまり良くない。参加して体験したものを自分のまちに持ち帰って広げていってもらいたい。

ここが想定している「利用者」はどういう人なのか、それをもう一度考える必要がある。

○ 福角：もし参加させて体験したものを自分のフィールドに持ち帰って広がっていれば、UDCKの性格として他のセンターとは違う。

● 砂川：発信と受信が同時進行である必要はないと思う。様々な発信があれば良い。ここは7:3（発信：受信）くらいが良いと思う。

他のセンターはほとんど受信。住民がこないと動かない状況。

UDCKは行政、企業、大学、住民というそれぞれの主体と一緒にできるのはやはり特徴的。

他のまちづくりセンターは地図すらも置いてないところが多い。活動支援がメインのところが多い。UDCKはそうじゃないはず。UDCKはどこを対象として、誰に向けて発信しているのかがわかりやすいセンターだと思う。

○ 福角：対象のエリアを考える際に、例えば歴史的な建物が拠点だと、使っていない人にとってもまちにあるその

「空間」を共有でき、そのことで「自分のまちのもの」という意識が生まれやすいが、UDCKのような建物は使っていない人にとってはどういう価値を持っているのだろうかということが気になる。

● 砂川：歴史的建造物は建物そのものが価値を持っているが、UDCKはまだ5年しか経ってなくて、地域の人が「価値」と思えるものは何だろう。それを考える場がUDCKかもしれないし、「新しいもの」をこのまちに浸透させて行くことが活動であったり、これからの歴史なのではないか。昔からいる人にとっても「あなたたちのものですよ」と発信していくことも重要。

○ 福角：やはり「運営」ですかね。運営してくれる人が増えると、「自分のもの」という意識が出てくる気がします。

● 砂川：ここにいる運営者は「歩くセンター」であったら良いと思う。UDCKの名札がついたものがまちの中へ広がっていくと良い。

また、技術的なことと市民活動が同じハコにあるというのがこの珍しいところ。KFVはここから市民活動を持っていったと考えている。専門家が受け入れにくいところに移ってしまったという状況に感じられる。

事務所の中も、オフィスと学生スペースが見えるようにつくったにも係らず、見えないように使われている。その辺の検証も必要。

○ 福角：プロジェクトの中で興味があったことは何ですか？

● 砂川：人をつなげること。北沢先生が色々な人を連れてきて、そこで出会った人が繋がって新しいことができる、そこから新しい商品が生まれたりすることに興味があった。情報としてだけではなく、ビジネスモデルとしての可能性もあると思う。

UDCKはまちの人だけではなく、経済的なことも視野に入れているところが良いのかもしれない。そういう意味では、UDCTとの比較をすることでわかることもあるかもしれない。

今のUDCKは見えない部分が多いのかもしれない。見える部分と見えない部分をしっかり分けていかなければいけない。

No	8 (1人)
日時	2010年7月5日11時～12時
場所	UDCK
対象	三井不動産 ●中田聖司さん
質問者	○著者

● 中田：私は2008年の1月から関わっています。まず、三井不動産のUDCKの関わりから話します。元々このエリアは三井の土地でゴルフ場だった。当初、ゴルフ場を閉鎖するということに対して苦労があった。（ゴルフ場を閉鎖するなという動きもあった）閉鎖した後に再開発をし、事業をしていくのは難しいのではないかという意見だった。基本的には柏市や千葉県、もしくは違う不動産に譲って、中心となって開発を進めるのはやまた方が良いということが2002、2003年まで会社の中で続いていた。2001年にゴルフ場が閉鎖し、閉鎖後まではどちらかというあまり積極的にまちづくりには参加しないという方向だった。しかし、そういう流れと並行して東大の小宮山先生とかがこのエリアを活性化して行こうとかなりイニシアティブを取ってやっていたのを横目で見ながら、我々としても不動産屋にできることがもっとあるのではないかということで、会社の中でたくさん議論があり、2004、2005年からはもっと積極的にまちづくりに関わって行こうということで舵を切り直した。その理由の一つが駅前に商業施設（ララポート）をつくり、住宅もやっていくということに決まり。正直これだけの土地をやっていくのはリスクが高いということで、東大や地元の人と一緒にやっていくことで何か見えてくるのではないかということになった。まちづくりセンターをつくって一緒にやっていこうという話が出て、そこに参画するということになった。また、副社長の林さんがと東大の都市工の1期生ということもあって、何か新しいことをやってみようという動きになった。そして2006年11月にUDCKができるわけだけれども、同時にららぽーともオープンをして一緒に盛り上げていこうという感じだった。ただその時の資料はあまり残っていないためわからないが、1、2年最初のきっかけをUDCKが作ってあとは撤退するのかなというイメージだった気がする。商業施設ができてマンションができる最初の時期にUDCKがあって、まちづくりというものを紹介するセンターみたいな位置づけとして協力するという形で入り込んだのだと思う。

○ 福角： 当初の関わり方としては短い時間を想定されていた様ですが、3年間UDCKと関わってきて、今後はどのくらい関わっていこうと思っていますか？

● 中田：UDCKは恒常的な組織になると思ってやっている。今ちょうど新しいまちづくりをはじめているが、それは①交流活動と②実証実験の2つだと考えている。新しい開発が進むからこそ、今それが必然として積極的に動いているのだと思う。新しいところに住むとか、古い人とどう交流するかとかが大事な命題だね。もう一つは環境であつたり高齢化であつたり色々な問題に対して新しいまちから発信しなければならぬし、求められているし、やっていきたいと思うている。既存のところであるのも良いのだけれども、新しいところの方がやれる余地は高いから、そういう意味ではここで色んなしゅみを頂きながら、それをしっかり返しながらやっており、それを今の開発のステージには必要だと思うのだけれども、10～15年で建物としての開発が終わってそれ以降必要じゃなくなるかといえばそうではなく、違うステージの課題が出てくる、そしてそれはその時になればすごく重要な課題になってくるかと思っていて、そこを地域と大学、行政と一緒にやっていくことの意味が消えないのだと思う。

○ 福角： 建物ができあがった後も、企業にとってメリットがなければ関わる意味がないとお考えですか？

● 中田：デベロッパーとしては関与を下げていくのが自然だろうね。間違いなく。それがデベロッパーにとって良いというよりまちにとって良いことなんだろうね。私たちはまちづくりの主役になるつもりはないし、大きな顔をして不動産屋がのさばるのも良くないことだと思っている。あくまでも支える立場の組織だし、それが不動産会社だと思う。それは例えば経済的なところでいてくれた方がありがたいという意見があるかもしれないが、歪んでいると思う。今は我々としての土地も多いし、そういった意味では我々が主体的になるのは当然だからやっているのであつて、そこに色々な企業や人が入って広がるわけだね。そうなったらその人たちが一緒に（組織のあり方から）考えていくべきだと思う。我々が完全に関与しなくなるということは全く想定していないけど。

○ 福角： 参加の仕方が変わっていくということですね。今まで柏の葉以外の事業ではだいたい（建物完成以降）どのくらいの期間まちに関わっているのですか？

● 中田：我々の事業は2つに分かれていて、①分譲事業と②資産保有事業に分かれている。①は売り切り型、②は商業施設やオフィスなど長く持ち続けることで利益が上がる事業。①は売ってしまえばそこで終わり、分譲マンションの管理組合から管理費に対する商売はしているが、基本はなくなる。柏の葉もマンションは①だけれども、ララポなどは②にあたる。そういった意味ではずっ

と関与する。ただ柏の葉に限った話ではなくて例えばらば一とであったら船橋や横浜などいくつかあるが、それも同じようにまちに関与し続けるわけだ。毎年10%位店を入れ替えている。ただ、そういった既存のまちに対する関与はその新しいものをつくるダイナミックさで比較すれば柏の葉とはちょっと違うよね。ここで言うと分譲の方が割合的には多いが、駅前中心でそういうことに取り組んでいこうと考えている。ホテル、オフィス、商業施設というものを1つの中で行うというのは、普通適正立地というものの考えからすると1つのものに集約した方が良いわけだから、とてもリスクがたかい。余計なものにチャレンジすると焦げるじゃない、でもそれを今やっているわけだから、「作っておわり」じゃないことをやるしかない。全て簡単にいかない事業をやっているから、そういう意味ではまちの価値を開発のときだけでなく、その後も上げていかないと、商売はなりたない。

○福角：そのようなリスクのあることをここでやろうとしているのには、会社側の意図なのか、中田さん個人が柏の葉に関わることで生まれてきたことなのか教えて下さい。

●中田：相乗効果だね。担当者が熱く変わらないと会社も変わらないし、会社がそれを受け止めてくれないとできないし、三井不動産は顔を見て話することができる（規模の）会社なので、会社が大きな方針を決めることはありえないよね。場所によって全部ケースが違うわけだから、一つの方針で全てが決まることではないし、一人の社長がやりたいと言ったからといって、そこで決まるわけじゃないし。だからもしかししたら違う担当者が来たら、違う切り口で違うやり方でやるだろうね。

○福角：中田さんが柏の葉を担当するきっかけとなったことなどありますか？

●中田：きっかけは人事異動だけだ。ただ、以前は本社で経営計画とかを考える部署にいて、新規事業をどうするかといった時に、郊外開発やりたいですよ、もっとまじめにやるべきですよ、といった話をしてた。たまたま柏の葉が一つの事例として重要じゃないかということで柏の葉のレポートを8、9月にやっていた。そこで人を増やさなければいけない、となった時に「やった本人がやれ」ということになったんだろうね、会社の。それで1月に来た。そういう意味では人事異動だけれども、自分でやると言い出したと言えるかな。

○福角：2年間やってみてどうですか？一番力を入れてやってきたことは何ですか？

●中田：何に力を入れてやっているかという、私は地元に入っているわけで、新しい郊外開発をつくるというだけだけど、じゃあ何が新しいのか、ということを見問自答して、結果的には地元にある魅力のものをどう高めるかとかどう我々が新しいことをやろうとしていることと組み合わせていかしかかかっている。都心だともっと違う切り口があって、そこに新しいものを作る、創造するというのが（人も多いし、共感する人も多いから）成り立つけれども、ここでは無理してつくっても無理だと思っていて、それよりは（我々の手が届かないことなんだ）今もっと魅力的なものが躍っているし、うまく組合わさっていないという現状を変えること、まちづくりに活かすことが新しいモデルだと思っている。そういう意味では東京大学・千葉大学など大学や企業、団体と何かやっていくということに時間を割いてきた。それをやった感想は、非常に魅力的な施設がたくさんあって、活かしていければ可能性はあると思っている。例えば、大学で言うと千葉大とやっているカレッジリンクなどは、今までだったら学生しか知り得ないこと、面白い話が実際に体験できるわけだ。それから閉ざされた空間でやっていたことを開放することができる。ああいったことはもっと地域の資源としてアピールして良いと思うし、大学の先生も学生だけに教えるのではなくて、もっと他の人にも教えたいという潜在ニーズがあった。大学の知というものは、大学だけにとどめるべきではないということ、やっているうちに実感した。もっともっと色んなところで使えるし、求められていると思う。あとは、産業振興的な話でいうと、たくさんベンチャー企業が個々にやっていて、そこをうまくネットワークにして、またそれを支援したいという人もたくさんいる。それがTXアントレプレナーパートナーズというもので、ああいうものもまちの魅力だね。とうかつテクノプラザというところにそんなすばらしい会社があることを知らなかったし。そんな会社が柏発ということで、もっと支えていけたら良いよね。この地域の魅力としては、そういった企業がある、そして大学があること、あとは都会と田舎が共存するエリアと言っているが、両方のフリンジーそういうのも魅力だと思う。それを活かしていこうと思っている。マンションだと「都会から30分、駅から近い」というのではなくて、「あなたが住んでいる近くにはこれだけの畑があって、近くにある自然の恵みをダイレクトに受けれるとか、参加できるとか、そういう喜び一機能性（安心、安全）じゃないもの、そこに住むことで周囲に活動領域が広がるのがこのマンションの価値だと思っていて、その1つが農業。こういったことを地域の資源として捉えることができるかどうかが大変なのだと思う。

○ 福角：例えば、農業といったときに、農業をするためのノウハウだったり、周辺農家とのやりとり、連携というものを考えなければならないと思うのですが、その辺で何か苦労された点などはありますか？

● 中田：今具体的にやっている体験農園で広がってこうとしている。農業関係者、レストラン経営者、まちづくり関係者、市長で懇親会をやった時に、柏で農業をやっている人はいま1700世帯あって、その中でも「かしわで」の方以外でも新しくやろうとしている人がいて、かたやレストランでも、地元の食材をつかって美味しいものを提供したいという人がどんどん増えていることが分かった。その中でまちづくりとしても橋渡しをしたいと思った。

○ 福角：それは柏市全域の話ですか？

● 中田：どっちかといえば市全域。市が今年「都市農業活性化計画」というものをつくって、力を入れようとしているものもある。ただ、私の興味としては北部地域だけ。でも狭い領域を捨てて、広い視野で考えなきゃいけないのかもね。この辺でできる野菜は、1世帯の農家の野菜で200世帯位を支えている。そういうことを実感できる機会が東京にいるとほぼない。そういったことを感じることができたり、体験するというのを、ららぽーとなどを使ってここの価値にしていきたい。農家と個人の接点をつくっていきたい。その結びつけ方はいくつもあるのではないかな。

○ 福角：その資源を結びつけるという役割を担うことで、周辺地域に住んでいる人と関わりを持ってこうとしているのですね。

● 中田：やはりニュータウンという言葉は限界があるし、新しいだけではなくて、別の魅力ももたせないかね。元々単質的なものをつくるのが効率的だし、1960年代あたりからずっとそうしてきたわけだね。でもさすがに苦しくなっている。でも異分野を入れるというのはその分苦労があるんだけどね。新旧住民の交流が良いですね、と一言で言ってしまうと簡単だけど、なかなかそうはいかない。相手を理解しようとするのは面倒なことだしね。だからいかに苦労を苦労と思わずに楽しみながらできるネタを探さないといけないと思う。

○ 福角：ニュータウンとしての新しいまちの限界もあるし、旧住民の地縁コミュニティにも限界がきていると思うので、そういったときに、このまちが両者にとって意味のあるものになると良いな、と思います。

● 中田：かたちだけでやっても続かないしね、交流会とか。政策的に必要なことだけやっても人の心は動か

ないから、「本当そうだね」という具体的なことを積み重ねていくしかないんじゃないかな。理念じゃないんだろうね。みなさんが知りたいのは理念じゃなくて、交流したらどんなメリットがあるのか、とかが大事じゃないかな。

○ 福角：そういうことは中田さんがUDCKにきてすぐの頃から考えていたのですか？

● 中田：やっていく中で感じたと思う。今まで自分が関わったプロジェクトをみても、ここまで地元に入り込んだものはないし。振り返って整理して思うことは、今までのこの郊外開発は、「都心でできないものをいかに郊外ですか」だったり、「都心より安いから、都心だと土地がないから」など東京だったらどうする？ということが発想の中心。郊だから東京の事例をよく勉強することが郊外開発のモデルだった気がする。だから郊外そのものを見なかったのだと思う。ここでは東京のことを無視しているわけではないが、あえて東京じゃないものをつくろうといったときに、見る場所がなくなる。東京との関係を否定した瞬間、結局は地元を見つめ直すしかない。今でも「東京から〇分」というキャッチコピーはあるじゃない、それもポイントだけれど、それだけでは五万とあるし、それじゃだめでしょ、ということが世の中もわかっているけどできていない状況だね。

○ 福角：最後にUDCKの運営の話をお願いです。例えば、創設当初に比べて、活動が活発でとても多くのものが動いているため、スタッフの中でも共有できないことが多いのではないですか？それについてはどうお考えでしょうか。

● 中田：現実の課題であるけれども、「環境、健康、創造、交流、、、」とそこまで幅広く謳っている限り、一つには留まっていられないと思う。色んなパッケージでこのまちはやるんだと決めた瞬間、個々の思い入れでは仕事は広がらないし、このまちで求められていることには広がらないと思った。そういう意味では、中途半端でも良いから、たくさんやろう！という考え。正解はわからないし、高い精度を求めて時間がかかる位であれば、何でも取り込んでいこうと思ってやっている。頭が良くなれば良くなるほど失敗できない人が増えてきて、自分がやることに対してしっかりつくりこんで、誰の意見も取り入れないというやりかたもあるが、郊外開発なんて日本各地で100戦100敗しているわけだね、そこでそんな簡単に正解は出せない。だから失敗して当たり前。一つでも成功することが大事。たくさん打席に立つことが大事だと思う。それが全体を把握できなくなるとか情報共有ができなくなるとするのは、しょうがない。努力はしなければいけないが、その為に時間を割くくらいなら、

前に進めと私は思う。全部理解しないと前に進めない人が大部分。そういう人間は無視すると決めている。

○福角：そういう意味ではここにいる人たちはうまくまわっているのですね？

●中田：組織の中だけだと、個人的な恥ずかしさやリスク管理上の問題上、知らないことがあるとだめとか、凄く難しくなるのだけれど、ここは複数の組織でやっているから「あなた知らなくても良いですよ」と言い訳を与えられる。全部の意見を聞いていたら何もできなくなる。ごまかしながらでもどんどんやっていった方が良いと思う。

○福角：複数あってもバラバラにならない理由は何だと思えますか？

●中田：キャンパスタウン構想というのが的を得ていて、立場や個々の思いは違っていても、問題意識の共有ができていないか。そういう意味では目標設定が正しいのではないか。目標が共有できなければいけないと思う。郊外開発の正解は出していなくても、方向性は示唆しているのではないか。それに対してなんとか同じ思いでやっていこうという人たちが集まっていくのだと思う。

No	9 (1人)
日時	2010年7月8日10時～11時
場所	UDCK
対象	千葉大学 ●上野武先生
質問者	○三牧浩也、著者

○福角：主旨説明

●上野：千葉大学の関わりといのは、まず北沢先生の動きとは別に千葉大独自の動きというのがあって、環境健康フィールド科学センターというのが2003年にできた。その時にここにTXの駅ができるということも分かっていたので、昔は千葉大の入り口が向こう側（今と反対）にあって、東大の敷地も千葉大の敷地だった。東大に少し譲るといことも決まっていた、キャンパスの顔がまるっきり反対になるので、キャンパス計画を見直そうということがあった。そこで、私は千葉大の4つのキャンパス計画を担当するポジションにいて、ここにも関わって、その時に、学内でも千葉大学で総力を上げて取り組もうとって、栗生先生、宮脇先生、園芸学部の造園の先生と一緒に計画を始めた。その時にキャンパスの中だけ考えていたらマズイだろうということで、周辺地域全体に対しても千葉大学から何かメッセージを出して、一緒に何か考えるしくみを考えようということで、千葉県に行ったり、本田市市長に会ったりということをしてきた。一方でこの場所の事業コンペみたいな話がでていた。もともと三井のゴルフ場の土地だったわけだけど、三井がやるというわけではなく、いくつかの事業チームを作ってもらってそこからの提案を受けて決めましょうということで、その審査員になったのが、千葉大からは栗生・宮脇、東大からは北沢・大野先生がでて、今も続いていますけど、ここの選考委員会がデザインを確かめて、当初のコンセプトと合致しているか審議する組織が千葉県の下にあるんだけど、そういう背景があった。一方で北沢先生は千葉県の参与をしていたり、ここのあたらしいまちづくりのエンジンになるような組織が必要だろうと千葉県や柏市に働きかけてUDCKの立ち上がりの準備をしていたと思う。それでUDCKを作るという話を聞いて、その時にこの建物をどう作ろうか、大学から誰が参加するかとかそういった話が始まった。スタート時点では市民が関わるというよりは、専門家集団という形だったと思うんだけど、組織が目指すところは市民をどれだけ巻き込んで、このエリア全体のマネジメントをやっていけるかという。その時に市民だけでは難しく、柏市だとか県だとか所謂「公」ね、あと大学とうまく連携するしくみをつくっていかうと。それがここの売りでもあ

る「公・民・学連携」のまちづくりということだったと思う。市民を巻き込んで色々やろうとしたのはスタートした後の話で、当初からそういった目的でやってはいった。こういう模型（柏の葉エリア）をつくらうといったのも、市民の人たちに一目瞭然でわかってもらうのが良いんじゃないかとか、本当はもう少し変わった部分に手を加えていかなければいけないのだが、そこがいまいちできていないというのがあるんですけどね。この模型はいかに安い予算で仕上げるか、中国で作ってもらおうか、とかを議論した。そんなこんなで11月20日にららぽーととほぼ同時にオープンした。その時は前東大総長小宮山さん、千葉大の学長だった古在さん、三井不動産社長の岩沙さん、堂本知事、本田市市長も参加されてかなり盛大にスタートした。その後の活動はわりと記録を残しているの、わかると思うんですけど。その中で千葉大の関わりはどういう感じか考えると、大学でというよりも個人的に運営会議などに参加したりして意見を言う、関わるという雰囲気だった。北沢先生も東京大学がというよりもアーバンデザイナー北沢猛としてどういう風にしていくか、それをここにぶつけていたと思うんですけど。しかし「公・民・学」をキーワードにしていることもあって、個人だけでなく組織としてやっていくしくみをつくらないと長続きしないし、人がいなくなると終わってしまう、みたいになってしまうので、それをやるためにずいぶん苦労したと思う。東大はオンデマンドバスで大和先生に参加してもらおうとか、色んなことができてきたと。一方で千葉大学は、何をするかと考えた時に、その環境健康フィールド科学センターというのは設立の主旨が、「食と健康、農業と健康みたいな話と環境をどうからめて持続可能な地域社会をどうつくるか」だった。そこで元々は園芸学部の附属農場だったんだけど、医学部の先生とか教育学部、薬学部、工学部の先生など全学的に領域横断的に集まって、環境と健康と食の問題を扱うという話になっている。その中で千葉大として、そこをテーマとしてまちづくりに関わっていかうということで色々やろうとしていて、ここで始まったエコデザインツアーなんかも、その先生たちが講師を務めたりだとか、あとは八重桜並木協議会というのがあって、これ実はUDCKよりも発端は早い。キャンパス計画を立てた時に、日本一の桜並木道をつくらうという計画があった。UDCKの前も元々は桜じゃないものがうわっていたのだけでも、それを柏市とかにお願いしながら、三井不動産にもららぽーとのところをお願いして、柏市には市道のところをお願いして、あと128街区ができればもう一列並木道ができる。それが千葉大学主導で関わったプロジェクト。あとはケミレストアプロジェクト。これはスタートがUDCKとほぼ同時期だと思うけど、化学物質をできるだけ少なくした健康な住宅をどうつくるか

というのをやっている。予防医学プロジェクトにも関わっていますね。環境、健康、食の部分でできることを色々やってきたというのが現状ですね。（地図を見ながら、）ここを市民に公開できるグリーンフィールドとしてつくろうというのも一つのコンセプトだよね。それで、それはプロジェクトベースなのですが、もう少し大学としてできることはないかと考えたのが「カレッジリンク」です。都市計画的な話で言うと、まちづくりの担い手をどうつくるかという話、それを環境とか健康とか食といういわゆる建築とか都市計画とは少し離れている普通の市民の人がどうやってまちづくりに関わっているのかというのを生涯学習プログラムのなただけでも、大学が開く公開講座みたいな感じではあるんだけど、もうちょっと話す側を受講する側もまちづくりに対する色々なアイデアを生み出していこうと。それを千葉大では「市民科学」と言っているが、その市民科学を何かつくり出さないかと。これまでの学問は例えば医療の話で言うと、非常に学術的にも科学的にも進化しているんだけど、目線としては医療を施す側はいかに治すかは発達したけども、一方で患者側からみた時にそれはどうだったの？という話があって、確かに手術だったり薬だったりを投与されて、病気は良くなるんだけど、入院している時の患者の心の問題とか精神の問題から考えられてきたかというところじゃないか。患者からの見方をすれば「患者学」のようなものが必要なのではないか。教育にしても、一方的に教える側からの目線で考えられているものが多いが、教育を受ける側の「学制学」というのももしかしたらあるかもしれない。とかね。そういう中で「市民科学」というのがあるのでは、ということも古元学長と話していて、始めたのがきっかけ。どっちかというと、東大の人は怒るかもしれないが、柏の新領域は先端のことをやっているでしょ、柏の産業育成とかわりと大きなレベルでの関わりが多いと思う。一方千葉大はもうちょっと市民に分かり易いところで行っていた。住みわけという役割分担みたいなものができていたのはすごくUDCKが動いている理由じゃないかと思う。（私個人の考え）これが例えば千葉大だけだったら、きっとだめなんですよ。今の大きなレベルで、例えば産業的な何かの誘致をしようという実験をした時には先ほどの環境、健康、食だけではできない。一方で市民の生活からかけ離れたところでそういった話をしてもここにやってきた人たちは（CO2見えるかプロジェクトとかはあるけど）実感としてその生活に役立つところってなかなかないじゃない。その両方がうまくいっているのがこの場所の特徴的なポイントなんじゃないかな。同じ大学でそういう風にやるっていうのもあるんだけど、たまたま東大新領域が都市や建築に関わる人はいるけれども、例えば健康とか農業とか

てあんまりないでしょ。そういう意味でわりとうまくいったのかな、と思う。その中で東大にジェロントロジーの研究所ができるといった時に、それも連携しながらできると面白いと思う。あとこころ辺にいくと農業ということがわからないけども、隣（田中）やちょっと外へいくと農地がいっぱいあって、農家の人が多い。そこをやはりどうにかしなければいけないというのは柏市としても課題なので、そこに関わる資源を持っているのは千葉大かな、という気はしている。

○福角：例えば住み分けの一つに市民に分かり易くするという千葉大の役割があるとおっしゃいましたが、カレッジリンクを行う中で、市民の反応はありますか？

●上野：カレッジリンクも2年経ったんだけど、例えばそこを終了した人たちがまちづくりスクールのファシリテーター役をやったり、カレッジリンクプログラムの講座が終わったらおしまいというのではなく、そこを出て何かできるしくみを作らなければいけないというのがあって、まだあんまり実際にできているわけではないけど。今少しずつできているのは、養生くんカルタというのを作ろうとしている。いわゆる健康に生活するためのカルタを参加者が自発的にはじめた活動だったり。あともう一つは桜並木のグリーンフィールドのもので、研究領域と市民開放領域を分けるのに、生け垣をつくらないかね、という話になり、柵をつくるのにアルミのフェンスじゃないだろうし、生け垣が良いな、ではその生け垣を何で作ったら良いのか、管理はどうするのかとかを考えていこうという動きがでてくる。八重桜並木というのでできるのは良いんだけど、管理はだれがやるの？といった時に、市民のボランティア（おこずかい程度の報酬とかはあっても）とかの小さなビジネスができないかな、と思っている。

○三牧：キャンパス計画はいつできたのですか？

●上野：平成19年の3月。大学の部局長会で提案して決まりました。大学としてもこういう方針でOKということで決まっている。今田口さんがやっているような「農あるまちづくり」なんかはUDCKスタート当初はまだスタートに入ってなかったと思う。去年くらいから田中の方も。それは田中のまちづくりの主体がUR。URが柏の葉が成功しているので、自分たちもなんとかしなければいけないということで北沢先生に相談して、（千葉大）センター長の前のセンター長だった安藤先生というのを座長、北沢先生が副委員長で進めている。環境コンビにステーションというのができたりとか。あっちの活動もここが

なければスタートしなかった。いわゆるURのこれまでのやり方でいっちゃったんじゃないかと思う。

○三牧：都市環境スタジオも対象地区をたなかにして今年2年目で行ったんですね。

●上野：あとUDCKのセンターの大きな役割として東大のデザインスタジオがここで行われていて、学生が参加して、真剣にこの周辺のことを考えて、それを周辺の人たちの意見を聞いてというのを、継続してやってきたことというのは非常に大きいと思う。このキャンパス計画の大きなフレームというのは決めていたけれども、少しずつわかってきた部分もあって、例えばインターナショナルロッジというのができたでしょ、ここに東大と千葉大と共同で小さな広場を作ろうというのがあるんだけど、そのきっかけはスタジオの小さな公共空間がきっかけになっているPLSも学生の提案が実現したものだね。もう一つはみちのプロジェクト。地域の人を巻き込んでワークショップをしたり、ピクニッククラブと一緒に企画をしたりしてた。その中で大学側に何ができるかなといったときに、この広場をつくらうということになった。きっかけは学生の活動。そういう下地があったから、千葉大側から東大と一緒にやりましょうといったときに、受け入れてもらえたというもある。県とか柏市も応援してくれる。あともう一つは、色んな主体がここに関わっているでしょ、それぞれの組織から代表で出てくると、それぞれの利益・利害代表みたいになって、それしか話さない会議って以外と多いんだけど、この場合はもちろん組織から出てきているけれども、同じ目標に向かって、会議を毎週のように（最初）やれたというのが良かったと思う。

○福角：同じ目標というのはキャンパスタウン構想とかですか？

●上野：そうそう。まずキャンパスタウン構想をまとめよう、というのがあったよね。

○福角：それはこの地域の問題意識や郊外開発に対して何かしたいということですかね。そのまとまりが、活動が活発になっている今は拡散してきていますよね。

●上野：その拡散してきたのをどうまとめていくかだ。横につなぐか、、、第二フェーズになっていると思う。

○三牧：全部をUDCKで抱え込むというのは無理になってきているので、例えばしみん活動は外へとかしていかないと。

●上野：はちみつプロジェクトとかかしはなプロジェクトはそれほどUDCKが関わらなくても成果をあげつつある。関わっている人たちはわかっていると思うし。

○三牧：最初は千葉大はキャンパス計画からの関与という感じでしたが、徐々にカレッジリンクなどの取り組みができてきたと思うのですが、それはやはりUDCKがあったからこそそれができたのですか？

●上野：そうです。実際にUDCKに関わり始めた当初のメンバーはここ（柏の葉）にいないわけだ。あそこ（千葉大センター）をやる気にさせないとダメだと思った。我々もうまくここを利用させてもらってさ、「UDCKは東大も柏市も千葉県も一緒になってやっているんですよ、千葉大が名前だけが入っていて何もしなかったらだめじゃない」と言えたのが良かったのと、初代センター長が古在先生で、その後学長になったでしょ、学長になって（専門も園芸の先生です）このことが愛着があったと思う、そのバックアップも大きかったと思う。国際キャンパス構想をまとめるにあたって、東大と千葉大から毎年300万円ずつお金を出しているの、それは大学の本体からでなきゃいけない、その時に、やはり理解がないと。東大は小宮山先生に北沢先生が色々と言ったと思うし、千葉大は古在先生がここの状況をわかってくれたので、出してくれたというのもあると思う。

○三牧：はっぱをかける良い材料になったんですね。

●上野：本当はUDCKの運営会議にも千葉大センターの人が入ってくれるように徐々にしていきたいと思っている。そういう意味で今カレッジリンクプログラムの野田先生（マルシェなんかにも関わっているし、そこに住んでいる）やはちみつプロジェクトのみや先生がやったりしているので、もう少ししたら、、、と思っているんですけど。今運営会議もちょっと寂しいよね。

○三牧：それなりに色々なプロジェクトがあるので、話題には事欠かないのですが、やはり活力という意味ではもの足りないところがある。

●上野：ちょっと連絡会議みたいになっているんじゃないか。それはそれでもうちょっと事務的にやっても良いから、なんか次の動きをつくる本質的なところを議論する何かが必要だね。

○三牧：テーマを設定してみんなで議論できるようにしないと、というのはありますね。

●上野：去年から今年にかけて人の動きが色々あったりね、北沢先生が亡くなられたのは最大のショックだね。右肩上がりできていたものが今停滞して、もしかしたら

下がるかもということもあるかもしれない。あとは三井がお金を出してくれているのは大きいよね。

○三牧：この規模の活動を維持していくというのは金銭的にも難しいと思う。形を変えながら、UDCKのコアな部分は残っていくというようにしないといけないな、と思う。

○福角：たなかの農の活動と、キャンパスエリアの新しい活動をうまく連携させることで住民のつながりも何か変わっていくのかな、と思う。

●上野：URがここの運営にも関わり始めているので、そういう意味で情報共有はかなりやりやすくなっている。それは随分良くなったと思う。あとキャンパスエリアの活動例えばカレッジリンクの参加者はここの人だけではなくて、ここの人は2割くらい。（集めるのに苦労しているというのは実際のところだが）流山から来ている人や野田からきている人が多い。この地域の人は昔からの柏のことも好きで、一方でこういう風に利便性が高くなることも歓迎しつつ、昔の良さも残したいと思っている人も多いと思う。例えばここに来る人たちがそういう風に思ってきている人もいれば、それこそ交通の便が良いとかで来ている人もいて、そういった人が例えば自分達が作物をつくる場所を見つけようというときにこの近辺は難しいけど、隣（田中）にいけばすぐできるじゃない。たなかの農業体験も、周辺的生活エリアの人に来てもらいたい、電車に乗って東京から来てもらうんじゃないかと、割と近いところで農と関わるのが良いかなど。問題としては、住宅地の中に農地があって、それは生産農地というように都市計画的には位置づけられていて、例えばそこには休憩場所とかいわゆる建築物になったらたてられないとか、国交省と農水省の、、あるんですよ。そこの境界領域をうまく乗り越える制度づくりとか、あるいは特区みたいにして実験的にやってみるとか、そういうことをやりたいと思っているんですけどね。

○福角：そういう話はミーティングで挙がるのですか？

●上野：話は出るけど、「問題だね」で、乗り越えるには補助金を取りに行くとかそのレベルだね。その辺の戦略をたてるのは北沢先生がうまかった。その辺の戦略をたてる人が今ちょっといないかも。僕も都市計画専門じゃないんで。今の制度の中でやろうとしても、あまりたいしたことはできない。「農あるまちづくり」ってかっこいいし、今の時代世に合っているが、実はその建築とか都市計画のような問題もあって、小さな拠点施設を農地に建てることすらできない。クラインガルテンなんて話も日本ではなかなかできない。いわゆる生産農地を使うから。都市計画決定されたなんとか地域に建てなければ

いけないと、そうすると税金がどんとかかって、地主はそこで税金を払えるような事業計画をたてないと無理なわけだ。

○三牧：三井とも特区の話をしてはいるんですけどね。田中で何かおもしろいことをやろうとすると必ず、、

●上野：こないだ奥田さんの面白かったな。今生活者と農業ということしか考えていなかったけれども、レストランといういわゆるビジネスをやる人が入ることで、おもしろくなるかなという気はしている。その辺は三井もこれはいけるかも、と思っているかな。

○三牧：三井も今農とか食ということに力を入れ始めていて、そういう意味では田中との連携というのは必ずおこる。

●上野：都市計画という学問として、そういうことをやるというのは、やはりここで実証実験をして、いわゆる地方都市がどうなっていけるかという提案をすることが目的でもあると思うんだよね。三井もここだけじゃないわけだし。地方都市のプロジェクトもあるし、その辺も会社として考えていると思う。

○福角：三井の関わり方というのは今後どんどん変わっていく、経済的にも自立していかなければならないと思うのですが、そういった時にUDCKの拡散した（目標は共有しつつも）運営状況がどうなっていくべきでしょうか？

●上野：三井不動産としてというよりはレジデンシャルとかが作って終わりではもうだめだと思っているので、そういう意味ではずっと関わっていくとは思っていますが。あとこの街区にできる色々な業務系のものできたとき、大学のキャンパスができたときにどういう風に動いていくのか。あと東大で色々しているIT技術をどうそれらにうまくからんでくるとかね。

○三牧：この街区が完成した後、UDCKの役割が再度問われるのではないかと。

●上野：この街区が完成すると、三井としても一段落になってしまうね。

○福角：何年後のこのまちをイメージとしてもっていますか？

●上野：まあ10年というところじゃないの。

○福角：私は50年、100年経ったときのことを考えるのですが、イメージできないんですよ。50年経ったときに、建物はどうなっているのか、とか。

●上野：僕も同じことを思うよ。超高層とか嫌だった。100年後に壊さなきゃいけなくなった時にどうするか。あまり経験していないことだからね。

- 福角：住民が力をつけるしかないですかね？
- 上野：住民で全部ができると思ったらだめで、専門家とどう一緒にできるかということが重要。そこがないと良いまちってできていけないような気がする。住民だけだと誰がコントロールして、どういう決定をして、という風になってそうするとだんだん多数決になってしまう。あるデザインのレベルとか空間の質を保つには多数決じゃ決まらないと思う。その時にしっかりと専門家が関わりながら、方向を誘導することが必要だと思うし、そういう意味では専門家の責任は重たいと思う。多くのまちづくりセンターというのが今ひとつ専門家というか質の高い専門家がきちっと仕事をしつつやっているところは少ないんじゃないかな。質を担保するために一生懸命になる専門家は。
- 福角：このエリアの建築的な質を保つ専門家は？
- 三牧：内部にゆくゆくは抱えていくのかな。
- 上野：あと大学なんかがどうかかわるかな。
- 三牧：本当は市役所の職員が一人、ここに居座って、職員が育っていくと良いんだけどね。当初の目的でもあったと思うし。
- 上野：当初のイメージはもうちょっと市民が日常的に来てくれるイメージがあった。
- 福角：できていない理由は何が考えられますか？
- 上野：まだ近所の市民が少ないから。
- 三牧：それだけの情報発信をするネタがないのかもしれない。イベントでは日常的にはいかないしね。情報発信に改善の余地はあると思う。
- 福角：千葉大キャンパスの先ほどの生け垣管理の話のように、自分がここへきて何か管理をしなければいけないというような、そしてそれが楽しみに変わるようなものがあれば良いですね。

No	10 (1人)
日時	2010/07/09
場所	UDCK
対象	東京大学 ●日高仁先生
質問者	○著者

○福角：趣旨説明

●日高：建物で言うと何に使われるのかよくわからなかったんですね、要するにアーバンデザインセンターというものが何なのかよくわからなかった。北沢さんの構想の中には何かあったんだろうけども、あまりそういうものが周りになかったし、一応世界の事例みたいなものを知ってはいたんですけどね。ただ実際に柏でやるときにどういう機能が要求されるのか、Sどういう部屋がどのくらいの広さ必要なのか全然わからないでみんなやっていて、300平米という外は決まっています、中をどうするかみたいなやり方なんです。その中で試みにこういうものですかね、という感じで決まったのであくまでも想像でやってたということですかね。

まあ面積に限界があったので、外にデッキを貼ったり、パーゴラをつくったりしたのと、一応外に対して中の活動を開こうとした。こういうところで展示とか打ち合わせとかできないかな、ということで実際はなかなかそういう風にはできなかったんですけど。

この開口部もできるだけ大きくしたくて、外からよく見えた方が良いとか。でもこれが仮設の限界で、壁量的にも。そういう制約は普通の建築でフリーでできるのに対して、大きいし、それが顕著に現れているのが「閉鎖感」かなと。

この手の施設って、オープンであればあるほど、良いようなところもギャラリーに関してはあるだろうから、それが改善できればもっと良いだろうと思いますね。それと後はオフィス機能なんですけど、オフィスもよくわからなかったんですよ、どれくらい必要か。最初に僕はもっとオープンに作っていたんですよ、大野先生と。間仕切りなしで。そしたら北沢先生が、完全にオープンだとできない話もあるということで、壁はあるだろうということで、オフィスを設けることにした。単純に1/4ということで。実際開けてみると、今のようなアクティビティなんだとすると、オフィスが圧倒的に足りていないし、その辺（学生スペース）も結局オフィスみたいになっちゃいましたよね、だからこういう使い方ならば、オフィススペースは半分位は必要なんだろうなと。あと

この高さだと2階もとれるんですね、ただ仮設の問題で補強が必要ということでコストの関係でできなかったのですが、ここに2階があって、別の部屋とか倉庫がちゃんととれているとまた全然違ったと思いますけどね。

当初は模型も下に収納スペースをとろうとやってたんですけどね。色々やったんですけど、コストの問題と時間の問題で解決しないままスタートというところはたくさんありましたね。だから改善できるところは多いと思います。活動がやっとなってきたので、次に何かできるとしたらもうちょっと良いものができるだろうけどね。

後は活動の内容に関しては今の使い方がベストかどうかはちょっとわからなくて、北沢先生の構想だと、アーバンプランニングセンターというかもっと実務的なことをどんどんやっていけるような、東大の関わり方としては実践的なデザインをもっと（発注を受けて）つくっていくような、そういうのを市や県からプロジェクトの依頼があって、それを東大の中でやるのか、東大で検討したものをコンペにするのかはわからないけど、どんどんそういう形で通常の発注の形式から変えてしまえば、このエリアに関しては。そういう構想を持っていらっしたと思うんですよ。

○福角：そういった話はよくされていたのですか？

●日高：よくされてましたね。それが実際にはすごく短い時間だったからできなかったのと、そこはやり残した感がすごくあるんですよ。

まあ市の体制としても難しかったのかもしれない。ただ北沢先生って都市デザイナーとしてすごく実践的な方じゃないですか、その実践的で横浜で大きいプロジェクトでやっていたようなことをこの地域でも考えてらしたんだろうなと思いますね。今振り返ってみると、このUDCKをつくったことが最大のプロジェクトとして終わってしまっているという感じが僕はあるので、本来はそうじゃなくて、UDCKから始まるたくさんのプロジェクトが本当はもっとあったんだろうなと。

○福角：それはハード面でということですか？

●日高：アーバンデザインそのものじゃないですか。アーバンデザイン構想としてつくっているけど、あれはマスタープランのイメージ図みたいなものじゃないですが、あれをもっと具体的にプロジェクトをまとめて設計までやっちゃうのか、そこをオープンにするのか、どんどんプロジェクトをつくりながら、実際に実行していくことをイメージしていると思うんですよ。まだできると思うんですよ。ただそこが今すぐできるかと言えばそうでもなくて、それはかなりやるのは大変なので、この延長でやるのかという疑問はかなりありますけどね。でも残された大きな可能性だと思っていますけど。

○福角：ハード的な広がりはないかもしれないですね。

●日高：三井が単体でできることにはもちろん限界があるわけだし、こういう場所があるからできることってあると思うんですよね。だから別に誰の問題というわけではないのですが、UDCKの将来像とか可能性はそういうことが大きいと僕は思う。ただそれができる体制になっていない。
 すごく難しいことじゃないですか。

○福角：具体的にどういうところを見てそう思いますか？

●日高：アウトプットとして実際にここでプロジェクトがつくられて、オープンコンペもたくさんできるとかね、そういうような発信源になることができると思うんです。そうしたら日本中の人、例えば横浜だったらフェリーターミナルのコンペとか、たくさん北沢先生が仕掛けて実際に面白くなっていますよね。あれぐらいのスケールのことが柏市でもできるはずなんだけど、まだまだですよ。すごくローカル色が強いじゃないですか、まちとしても。やっぱり全国的に話題になる柏の葉モデルということ、柏の葉は大学も一緒に参加する実験都市みたいなもので、どんどん社会実験をして、そこで成功するか失敗するか見極めて、成功するものに関しては柏の葉モデルとして全国に発信していけるのではないかと。そうしたらここでやったことが全国に役立てて役に立つのではないかと。
 そういう試みは色々やっているとは思いますが、それが広がって行かない理由としては、体制的な問題とかプロジェクトの作り方にあるんだろうなと思います。大変なことなので、どうやってやれば良いかは難しいですけどね。

○福角：大野研究室で柏のプロジェクトが始まったということですが、詳しく教えて下さい。

●日高：これは環境省の研究プロジェクトなのですが、今までずっと長岡で研究していたものを、柏市を対象にしてやるということです。それは柏市全域を対象としているんですね、柏は結構細長くて、北部と南部では状況が全然違うし、とらえどころが難しい市だと思うんですね、長岡なんかだと経済的にもある程度自立していて、人の移動も長岡市内で起ったりするんだけど、柏の場合は東京のベッドタウンという側面もあるし、でもそれなりに商業の集積もあるし、周りからも人が来ているという複雑な構成なんですね、都市の成り立ちとして。その辺の難しさがまずあって、なおかつ柏市に地域的に限定して計画するとしても、その中の特色が地域によって違うと。それが市域の話ですね。柏の葉エリアについて言えば、ここはここでこの地域でやっていくことはでき

るわけですね、ちょっと柏の葉についてどうすれば良いかというイメージはないのですが、アーバンデザインの匿名性みたいな話というのは、北沢先生がやっていたことというのは、北沢先生としても割と表にたっていたし、北沢メソッドみたいな感じで責任もとりながら提案をしていくという感じで、個人的なデザインの提案という側面もあったかなと。そこまで所謂作家性がものすごく強いわけではないけど、（建築家が提案するような）やっぱりアーバンデザインの考え方として、誰がどう考えてどうやって形になるのかが見えにくいですよ。アーバンデザインセンターはそれをオープンにしていくための一つのツールだと思って我々はスタートしているんだけど、まだ実践力が足りないところも大きいと思うんですよね。本当はこの模型もどんどんプロジェクトが増えて更新されることを想定していたのですが、そういうこともないし、話だけはたくさんするんだけど、実際のプランニングという側面でもう少しここでやりながらUDCK初のプロジェクトとして出していかとか、UDCKプロデュースのプロジェクトとして出して行くのかそんなことがもっとできると良いと思うんですけどね。どうしても北沢先生がいなくなっちゃうと、体制だけが残っちゃうんですよ。顔がなくなるという状況があり得るんですね。その辺がちょっと心配ではある。しくみだけが残って、実際に何かクリエイティブなことが今後起らないんだとすると、この活動を続けていても意味がないような気がするので、実験性と具体的なプロジェクトを推進していく活動内容がもっと広がればおもしろいだろうなと思っていますけど。

まあ時間がかかると思うんですよね、こういうことをやっていくのは。できた時は本当にスピーディングにできましたけど、そういう意味ではできてから作り始めることばかりだったので、今まさにその状況できているので、やってみてわかることもだいぶあっただろうし。それを今後どうしていくかは考えなければいけない時期だしね。

○関谷：今学生が駅前を改善しようとして動き始めています。

●日高：たぶんプロジェクトをしきるときにしきり方でアーバンデザインって変わってくるじゃないですか、もう敷地や与件が決まるようなものなので、だからプログラムのデザインの組み立てがまずあって、その次に具体的なデザインという風になるわけだけど、最初の段階にもっとコミットしないと結局たいしたことはできないですよ。その最初の段階からできる可能性がUDCKにはあって、市や県も巻き込んでいるわけだし、法律改正もやるプロジェクトってありえると思うんですよね。

駅前でこれだけ決まっただけで、まだ新しいものを変えるのもおかしい話だし、たぶん北沢さんがイメージしていたり僕が考えていたものというのは、もう少し大きな枠組みの話で、やっぱりそういう可能性はあると思うけどね。デザインスタジオなんかは仮想のプロジェクトをやるという自由さはあるけども、実際そこまでそういう体制をつくってやるという次のフェーズには難しいですよ。政治的なことも絡んでくるし。本当はそういうことも含まれるとすごく面白いと思うんですけど、ここの活動が。そういうことをするのは今までにないしくみをつくるのは大変だし、誰がどう使うのかもわからないし、それが誰にとって幸せなのも見えないし、そんな中でそういう方向にしようという動きはなかなか見えて来ないと思うんですよ。それを実験し、実践し、変化を起こす活動になると良いと思います。柏の葉だけの問題ではないと思いますけどね。

まあでもここまでの母体ができているところも少ないから、それを活かしていけると良いと思います。

この研究は難しいよね。事実を拾うことは重要なんだろうけど、だから何？ってところが難しいよね。アンケートってやってもクリエイティブな内容はでてこないからね。それをどうやって考えるかということがね。

まだまだUDCKができたものというのはごく一部だしね。未来のための論文なんだから、こういうものを見ながら色々と考えてもらえると良いなと思います。

No	11 (1人)
日時	2010年7月21日16時30分~18時
場所	本郷11号館1階
対象	横浜市役所、元東京大学特任教授 ●信時正人さん
質問者	○著者

●信時：2006年1月に大学に来了。2006年の3月に2日間かけて、柏市が内閣府の『地域の知の再生事業』に応募するからということで、東大・千葉大・理科大とかで提案するという動きが出ていて、僕は東大の取りまとめをやってことでやっていた。東大といってもほとんど環境系。生命は向井先生1人だけ。基盤は2人。環境は17個位出した。その中の一つが北沢先生の出したUDCKだった。『地域の知の再生』は柏市として、大学と企業と連携してお金を取ってくるというものだけど、それ以上に僕らとしてみれば、これをもとに、産学連携のネタを探したいということだった。そういう意味では、20以上あった案の中でUDCK案はトップだった。三井と北沢先生で話がついていたんだと思う。県も堂本知事と北沢先生は手を組んでいた。本田市長は後がまだったと思う。一つは駅前の有効活用ということがあって、三井不も「まちのブランディング」の施設をつくりたいし、まちのイメージをつくりたいということだった。北沢先生の頭の中では海外のアーバンデザインセンターのことがあって、日本にも作りたいたいという思いがあったんだと思う。日本の場合はトップダウンの計画が主流だった。しかし、国にアイデアがなくなってきて、(1990年代にも中曽根さんの時にも「民活」ということで盛り上がったが)民間に任せるという流れになってきた。自治体がアイデアを出すことが90年代からはじまっていた。世の中にできていた。その中、一口に産学連携といっても、東京大学の新領域のところに千葉県との産学連携の会議に出されても、堂本知事が司会をして、千葉県の色んな産業団体とかがでてきて、役所の人がたくさん来て、大会議をして、それで本当に産学連携になるの？と。やはりそこでは何もでてこなかったんですよ。そういう会議は何回やってもだめなんですよ。僕は産学連携って、産業と大学では価値観が全然違うんですよ。産業はやはり商売のことが大事だし、大学の先生は好きな研究がしたいし、組織に馴染まない人が多い。そういう意味ではタレントなんですよ。そういう人の価値観と組織の中にいる人の価値観は違う。机上の空論になる。机の下では殴り合い。それを逆にしよう。机の上で喧嘩誘って議論して、机の下ではしっかり手を握っている。「地域をどう

していこうか」ということでコンセンサスを得て、その上でお互いをフラットな中で産業と大学が一緒に考えていこう、という状況をつくらなければいけない。そこに官も入ってくるし、市民も入ってくるというのが必要だということで、そういう意味では、なんでも良いけどハコがほしいよね、るつぽがほしいよねということになった。特にるつぽの意味があると思う。海外よりも日本は縦割りが激しいから、るつぽみたいな場がほしい。県と市と大学で始めたけど、そこに企業を入れる。大学も、研究室の枠を超えて、発表などはUDCKでやるとかね。柏市も、まちづくりの委員会をUDCKでやるとか。県も市も、どこでも良いんだったら、取りあえずUDCKを使ってもらおうということをしてきた。地域のイベントなんかでもできればあそこでやってもらいたい。イベント、会の誘致を力を入れてやっていた。はじめは「ハリボテのところでは何やってんだ」と言われていたと思うので、取りあえず使っして下さいということをやっていた。

それとあとは1/1000の模型だよね。あれはやっぱ良いですね。自分の家がああ敷地内にあったら、「これが俺の家」とすぐわかるくらいの縮尺でしょ、だからあれはね、ものすごく地域／都市というものを身近に感じさせるものだと思う。どこの国のアーバンデザインセンターでも、あれくらいはあるから、やっぱりアーバンデザインセンターにとっては必須のものだと思うよ。発注は大変だった。700万円かかった。上からの写真を貼付けていくんだけど、特許がいるんだよ。森ビルと小出先生とね、アーバンアソシエイツ(鹿島の子会社)とこの辺が特許を持っている。六本木ヒルズの上にもあるでしょ。銀座のまちづくりもあるし。そういう、身近にまちを感じられる模型を置いて、会議やイベントをすると。それから始まったんですよ。その時に、僕がつくったしかけとして目的のない形の会を設定した。それがKサロン。あれは無目的でできたもの。無目的で来て、目的ができるんですよ。長く続けるためにも、「あそこに行ったらどんな人が来るかな」と思って気軽にくるだけ。あれも地域のアルミ会社にスパイラルの呼びかけでアルミの椅子をつくった。あれも地域のものに対して新しいデザインでつくるということで、柏の産業とコラボしたもの。どんな時にどんな繋がりができるかわからないのですね。もう一つはもともとアーバンデザインセンターというのは地域の都市計画情報が全部集まるというのが基本なんですよ。そこに行ったら全部わかるぐらいのもの。今のところまだできていない。そういう意味でも、模型をつくるという意味は大きい。更新する予定だったけどね。一度地域の住民が模型を見て、「ここにTX通るの？」とか聞かれた。地域の人と気軽にまちについて話すことができるわけですよ。

もう一つは教育の側面。駅前の地権者たちと色んなことがあった。日本は自分の土地に好きなものを建てたっていいじゃないかという人が多いじゃない、駅前にしたって、東大が「キャンパスタウン構想」です、と偉そうに言ってたって、地域の人にとっては関係ないじゃん。建築基準法でも、都市計画法でも阻止できない。だけど、それはもう教育しかない。ここにはこういうまちができるんですよ、と。地権者の人に対してプレゼンもした。そういう風に産と学と民ををつぼでぐちゃぐちゃとする、融合させる。

もう一つはUDCKそのものとしてどうするか。僕たち自身が、市に対して、県に対して「新しいまちはこちら」ということを雑多な人たちの集まりから生み出して、発信し、提案してこうという主体になっていきたいというのは、民間の三井不動産の発想でもなく、市役所の公的な発想でもなく、市民の発想も入れこんで、新しい発想をしてこうというのは教育でもあり、啓蒙でもあり、そういう機能を持っていこうというのはあったんですよ。TX沿線全体に対する計画調整機能は持ちたいというのもあってね、秋葉原からつくばまであってね、インテリジェンスの交流という言い方があったが、では「知の交流」って一体なんなの？と。単なるイメージだけじゃないかと。各駅がそれぞれどういう開発をしてけば駅全体として、広い視点で、自治体を超えてやっていきたいということも、これからやるべきこととしてある。北沢先生ともやりたいね、とは言っていたが、具体的にできなかった。都市計画の悪いところで、県は東京／埼玉／千葉／茨城と4つに股がっかけているでしょ、プラス市レベルだともっとあるじゃない、その小さいつつ切りの中で開発計画ってできていくものなんですよ、沿線開発全体を見ている自治体ってどこにもないですよ。国交省もないよね。TXぐらい。でもTXは運行することが目的だから、本当は大学がやるべきじゃないですか、と書いていたんだけど、大学だけの発想でもだめだから、UDCKの発想でTX全体を睨んだ開発を進めましょうということになった。いまのところうまくいってないよね。なぜかと言うと、柏の葉キャンパス駅でララボがあるが、隣の流山おおたかの森には高島屋があるといった同じ様なものができている。これはどっちかがいつか失敗しますよ。結局そうせざるを得ないのはなぜかと思ったら、都市計画法がだめだと思う。区画整理と再開発で駅前の土地が坪80万～90万の土地になっちゃう。そんな土地を買ってまでできる事業といえば商業しかないんですよ。あるいは住宅。あるとき大野先生が駅前に芝生広場にしたいと言っていた。その周辺に中層の町並みが広がっているような、イギリスのまちなみみたいな。実際には絶対無理だもんね。そういうことが可能にならない日本の制度。日本の都市計画の制度の中でつくられたま

ちの中で、本当に素晴らしいまちはどれだけあるのですか、と。区画整理を行ったまちというのは、整理はできているけれども、豊かではない。だから理想のまちをつくっていくには今の法律で良いんですか、ということ、今の法律を守りながら、勉強しながら考えて下さい、と社会人の方々に言っている。反省がなかったら、ずっと同じようなまちしかできないからね。駅前はもう全部区画整理ができてから仕方ないけど、少なくともできる施設のテストとかね、お互いが補完関係になるとかそういうことをTX全体で考えていくためには、レイヤーをぐっと上げたところの大きな視点というのが必要になってくる。UDCKはそれをしたいね、と言っていた。まあでもそういう機能はこれから重要になってくると思う。UDCKだけでなく、他のUDCシリーズでもやりたいと思っている。UDCYも東京湾全体で見たいと考えている。トータルな視点を持って、そういう方向も見据えて、UDCKみたいなものを全国に広げていきたいと思っている。細かいこと言えば、三井不動産がどこまで出すの、ということでした。最初3000万でした。多分今トータル1億超えていると思いますよ。その調整（ハードの）は日高先生がずっとやっていた。県が、ひいたんですよ。県が主導でやりますというのはまずいので一歩引きますと言って。斉藤さんはよく来てくれてはいたけど、オフィシャルには県は引いていると。柏市が前に出て。

○福角：現在についてはどうですか？

●信時：北沢先生がなくなって、心配だったけど、活発に活動していると聞いて安心したよ。僕は丹羽さんが最適だと思った。旅館の女将さんタイプだね。みんなが集まる場所にするにはね、人間的な魅力がないといけない。施設としてそうなら良いな、と思うけど、それじゃいけない。やはり人間的に惹かれる人がいないと、話したいと思う人がいないと、人は集まってこない。そういう意味で丹羽さんは適任だね。やはり人って大事だね、継続が大事だね。ころころ変えていたらだめだね。やっぱり「安心感」というのは必要だから、いつ行っても迎えてくれる女将が必要。そういう意味でもまだまだこれからだと思うけど、継続してほしいね。

○福角：一番力を入れて取り組んだことは何ですか？

●信時：融合をはかるということですかね。自分自身が旅館のおじさんにならないといけないなと思ったことと、色んな人がUDCKに来たときに、要求に応じたり、適任者を紹介したりできるようにしたりね。来る人みんなと仲良くしなければいけないな、と思ったので、営業に回りましたよ。砂川さんとか佐古さんとか色々回ったり。

「安心感」をつくるために、自分としては友達をたくさんつくった。それが一番力をいれたことかもしれませんね。限られた時間の中で、UDCKをうまく回していくためにも、まずはUDCKのファンになってもらいたい。建物としても、人間としても。

○福角：UDCKのスタッフの中での融合もありますが、実際の利用者に対してはどうですか？

●信時：チームが必要。情報が集まる「システム」になってしまったら、「システム」をつくらうとしたら、それは失敗の道だね。話したいと思う人、チームがいなければ、情報は集まってこない。情報を出して何になるの？という状況になってしまう。関わる人数が多くなるとそうなりがち。その時に得てして「システム」を、という話になってくる。そうすると、強制になってしまう。強制になってきたら、だめ。そこに情報に出したことによって、メリットを感じさせなければいけないね。メリットの一つは何かと言ったら、例えばUDCKが自由に使えるとか。何か情報を出したら、何かとコラボレーション、コーディネートしてもらえると信頼、安心感があるとかね。自分たちの組織に足りない人脈やノウハウを提供してくれる場所になれば、何か情報を出してくれるかもしれない。そんなものがなければ、誰も情報を出してくれないよ。

ここまでできたら、なおさらKサロンをもっと活用していくべきだよ。あそこに行けば何かを得られるというように。ローカルに繋がっていくようなものがいい。その中で人間や情報を集めるシステムをつくっておけばいい。ここは中心になるように。1人で無理なら、チームでできればいい。一人で200人位いけるでしょ。それで十分。そこまで来たら、自然に転がり始めるよ。集めるシステムと言い始めたら終わり。

○福角：それぞれの組織間のゆるい繋がりがうまくいっているとしたら、その要因は何だとお考えですか？

●信時：組織が組合わさることのできたもの、成果がいくつかあると思うのだけど、それを1つ1つみていったら良いんじゃないかな？何かコラボできたものを挙げてみたら？何か共通項があるかもしれないよ。

まあUDCシリーズは真ん中にいかに魅力的な人がいるかにかかっていると思うよ。あとは参加している人に対するファンクションをどこまでできるか、コーディネーターとしてどこまでやっていけるか、とかはUDCKとしては必要だと思う。

ボトムアップのまちづくりに変わっていったからね。色んな主体の意見を収容する場所であり、そこから出てくるものを消化して行って、一つの方向へもっていく

と、そういう役割があるよね。いかに収容できるか、そしてそれを自分たちのものにして方向性を示していかるかーこれはとても知的能力が高いけどね。①雑多な人を集めることと、②プロジェクトができればそれを実行する人を集めること。これはレイヤーが違うからね。2つの人を集める能力が必要だね。旅館の女将は①。その次が必要。プロジェクトメーカーですよ、これは事業家です。都市計画家であり、事業家であり、という人が必要。三井はそれを目指しているのかもしれないけど。今までの縦割り社会では①の部分ができなかったからね、それはUDCKがあったからできることなのではないか。でもこれからやるべきことは②をできる力をつけていくことだと思うよ。

それを全体に噴水効果のようにね。それができたら都市計画のプロだよ。都市計画家って計画するだけじゃだめだからね。かたちにしないとだめだからね。

○福角：人の魅力づくりだけでなく、かたち（建物）の魅力という意味ではUDCKはどうでしたか？

●信時：建物としてはだめだったね。ただ模型は良かった。必要だったと思うね。展示物もインテリアとしては良いと思うし。ただ高橋さんの絵もストップしちゃったけど。まあ3000万でどこまでできるのという話だったからね。仮設だしね。

○福角：仮設だから仕方ない部分は多いのですが、東大の駅前キャンパスに入る段階でできることはありますか？

●信時：インテリアじゃないかな。お金があれば良いけど。

○福角：何十年後にも存在し続けるような建物、存在になれば良いと思うのですが。

●信時：商業建築だから無理だと思うよ。

○福角：ハードとソフトの融合と言っているハードという空間はどういったものなのでしょう。

●信時：というか中でこう色々なことをしたいと言っている人が設計に対してどのようなことが言えるかだと思うよ。具体的に指示を出せるかだと思うな。

○福角：そういうプロが必要だと思うのですが。その辺を北沢先生はどこまで求めていたのかな、という所が気になります。

● 信時：北沢先生は求めていたけど、コスト的な面ですね。少し、せめてもの抵抗が天井窓をつけるとか、通りに面した部分をガラス張りにするとかだよ。内部でどのように利用したいか、どういうコンセプトでやるかという意味ではオープンパブリックとして抵抗していると思うよ。でもまあ3年だからっていうのもあるし。本格的には次に移るところで、というのはあったんじゃないかな。

やはり中を使う人が建築側にものを申すんだろうな。

○ 福角：そうすると、UDCKの場所がある意味はどうなんでしょう。極論は場所がなくても良いという意見も出ています。

● 信時：UDCYが今そうなんです。BankArtの池田さんのご好意で現在活動しているが。現在、佐々木先生のところの1ブースを借りているがあと半年で建物が壊されるし。やはり場所はあった方が良く、というのが私たちの意見で、どこかにつくろうかという動きになっている。場所はあった方が良い。

○ 福角：アーバンデザインセンターは活動ができる場所があればそれは立派な建物でなくても良いということですかね？

● 信時：世界のベルリンとか海外の市役所みたいに地域の象徴みたいにならなくてもいいんじゃないかな。

○ 福角：私も地域に合った規模で、地域の人から愛されるようなものだったら良いと思います。

● 信時：小さくても魅力のあるような、そういうものじゃないかな、そこに集まる人たちの気持ち・考え方を表しているようなもの。そこにいけばわくわくするとか、ドキドキするとか、何かをつくる意欲が湧くとかそういうことをインスパイアする場所であれば良い。それは内装の工夫もあるかもしれないし、中にいる人をやる気にさせるような雰囲気も必要かもしれないけど。そういうものがにじみ出てくるような外観だと良いんじゃないかな。外観だけ立派でもだめだしね。やはり中にいる人が積極的にアイデアを出していくべきだと思う。

○ 福角：内部空間は色々な人が使うし、使い方が限定されないようなフレキシブルな空間であつたら良いと思うのですが、外部空間に関しては地域の人が安心できるような（変わらないことで）ものだと良いのかなとも思うのですが。今すぐは無理でも、いつかそうなれば良いと思います。

● 信時：三井は商売だからね。当初は今の場所じゃなくってららぽーとの中に入れようかという話もあった。UDCシリーズはね、建物外観とかあんまり関係ないと思ってる

んだよな。さっき言ったように、なくても良いんじゃないかという意見も出るくらいだし。なんかこう活発に議論されているとか活動しているとか、そういう空間があれば良いのかなと。

○ 福角：まちによっても違うんですね。田村だとシャッター街の1角でやっているのが良いんだろうし。

● 信時：そうそう。そのまちが何に重点を置いて、やるかという。横浜の場合はバンクアートで良いし、田村も商店街で、柏は東大だったら東大の中で良いと思うし。そのまちの特徴を表したものであったら良いよね。それは建築家の技量なのかもしれないけど。

今まででまずいのは、お上が決めたことに対して、はいそうですかと受け入れて、建物さえできればそれで良いという状況だったけど。

より内容を考えないとつukれない時代なのではないか。場の意志、場の雰囲気、場の歴史を考えて設計するのが建築家じゃないですか。これから増々求められるのではないかな。

○ 福角：最後にUDCKの評価できる点、できない点に関して教えて下さい。

● 信時：トライアルしたことというのは評価できる。十分できたかといえはできていないところがあるからそれは評価できない点かな。つまり日本で最初のアーバンデザインセンターとして公民学連携となって組織をつくったということは評価できるけど、最初東京大学は横を向いていたからね。東京大学の広報に載せることすら拒否されたからね。「何の意味があるんですか」ってね。そのときサポートしてくれたのは磯辺先生、大和先生かな。まだ100%当初の思惑はできていないことかな。人が変わったというのもあるしね。ああいう施設にとっては痛手だと思うよ。結果論、人は継続した方が良いと思うけどな。あともう一つ、三井のおんぶにだっこはそろそろやめてほしいな。地域の市民ファンドとか地域企業からも出してもらって、「我等のまちのUDCK」というようになってほしいね。もう少し行政が出てくる必要があると思いますけど。主体は自治体が良いと思う。

○ 福角：公共施設としてはどうですか？

● 信時：公共施設かな。お金が三井から出ているという意味では公共ではないよね。ファンクションは公共か。本当に公共施設だったら公共がお金だしてほしいよね。PFIと言えなくはないけど。三井のPR、三井のまちづくりという位置づけにはなってほしくないよね。要するに自立していく方向が欲しいのではないかな。NPOにする

いう話もあったんだけどね。でないとお財布が持てないよね。社団法人でも良いけどね。法人格を持った方が良いよ。

○福角：自立というのは財源の面でも、活動の面でもキーワードですね。

●信時：公的な立場、を考えないといけないね。

No	12 (1人)
日時	2010年7月23日10時00分～11時
場所	本郷11号館1階
対象	柏市副市長 ●石黒博さん
質問者	○著者、三牧浩也

○福角：主旨説明

●石黒：私がUDCKに関わった当時はのポジションは企画部長というところで、市の全体の計画とか事業の調整とかが役割でした。もう一つ、部長になる前には企画調整課長だったので、その時に大学との連携というのをやっていた。産学連携とか大学と地域の連携というのは特に工業の関係が今まではイメージが強くて、そういうところで東大と地元企業の連携は産業が強かったんですね。私の想いとしては、大学をもうちょっと産業だけでなく、幅広く地域と連携して市民、地域のために大学を活用したいということがあった。特に地域に戻る段階の世代がどうやって地域で元気に暮らすかという時に、やはり大学というのはきっかけとしては非常に貴重だなというのがあった。また、東京大学は本郷にも駒場にも柏にもキャンパスがあって、先生と事務の付き合いがまとまった窓口がなく、何か困ったことあった時にどこに言ったら良いのかわかなくなるということもあった。そういったこともあって、もっと大学と地域が連携するためのきっかけをつくる必要があるということで、「大学コンソーシアム柏」というのができた。（大学からの）地域の窓口になったら良いなというのを企画調整科の時からやっていた、そういう流れで大学との連携とかをやるポジションにいたんですね。もう一つはTX沿線の開発については、北部整備課（区画整理とか下水の整備とかを個々に対応するのですが、柏市として全体を調整する役割）というのがあるのですが、今までは区画整理をするにしてもまちづくりというのには特に関わっていなかったんですね、そういう意味で柏市の行政としては、個々の区画整理事業とか鉄道の整備促進とかそれぞれの課題には対応するが、その後の土地利用と合わせてどうしようというまちづくりの観点では考えていなかったんですね、そういう中でたまたま柏の葉キャンパスの駅前については、拠点、新都心をつくらうということで、千葉県と一緒に方針をつくらうという動きがあった。そこには私は関わっていなかったのですが、アーバンデザインの考えがまとまったというので当時北沢先生が関わっていたみたいなんです、案ができたので柏市町に話したいということで、柏市町と堂本知事が

柏にきて、北沢先生が説明した。それが北沢先生と初めて会ったときですね。

○福角：北沢先生は一人でこられたのですか？

●石黒：一人だったと思います。そのときは企画部長ということで声がかかったんです。それが2006年の5月位だったんですね。それ以降北沢先生が駅前だけでなく、地域全体でまちづくりを（地域と連携して）するというところで進めるという話がでてきて、私と、当時企画調整課だった齊藤と東大に行った。北沢先生が公民学連携で、場所も作ってやるという話を聞いた。その時に既に先生と三井さんは話通っていたと思う。行政としては、当時は積極的に関わっていたというわけではなかった。北沢先生がこういうことをしたいというところに、その話に乗ったという感じです。

○福角：初めて北沢先生から話を聞いたときはどう思いましたか？

●石黒：おもしろいなと思いました。良いまちをつくっていくという意味では、企画として直接関わっていくことではないが、大学と地域の連携という意味では非常に関わり易かったんですね。あとは都市計画の北部整備課の岩崎さんが当時課長だったので、岩崎さんもそういうことに熱心な職員だったので、面白いんじゃないかという感じでしたね。たまたま私はその中で市のまちづくりの公社ということで「財団法人：柏市都市振興公社」というのがあって、その理事長もやってたんですね、そこは資金的には少し余裕があるので、この話を受けたときに、資金をどうやって確保していくのかと、場所は三井さんが確保してくれたけれども、受付とか中のスタッフの費用をどう負担するかといったことを、本来は市がもっと負担するべきなんですけれども、市の中では経験がないので、市の予算で対応するのが難しい状況だった。その中で自分が関わっていた振興公社というところでうまく活用しようということになった。そういうことがきっかけでしたね。市長も北沢先生の大学の先輩後輩ということもあって、まちづくり活動に抵抗がなかったということもありますけどね。庁内に整理されて、みんなが理解して進んでいったというよりも、ある程度人の勢いで進んでいったというのが実際のところですね。

○三牧：ちょうどタイミングよく職員の方々が集まっていた動き易かったとうのがあっていいですね。

●石黒：動くきっかけはその時関わっていた人がそういうものに興味をもったり、あるいは課題として認識してうまくそれを使っていこうという人がいるかどうかで。そういう意味では岩崎さんとそれから行政の中で事務的に

しっかりと組織をつくるにあたって規約とか色々なものを整理できる職員がいるかどうか、その点で齊藤さんは優秀な職員で法律関係も詳しいし、やはり事務的に支えてきたのは齊藤さんですね。

○三牧：規約とかを作るといのは市の方でそういう流れになっていたのですか？

●石黒：たまたま齊藤さんは私とずっと一緒にやっていたので。

○三牧：例えば三井が書くとか東大が書くということもあると思うのですが、やはり市の方で書くということになったのですか？

●石黒：それは自然にかな。齊藤さんならできると北沢先生も思ったのかもしれないですね。三井さんはそこをやる気はなかったと思いますけどね。ある程度こう大学が中心になりながら、三井さんはあまり中心に出ない方が良いというのはありましたね。非常にスピード感よく、半年ぐらいできてしまっただけ。

○福角：その当時、北沢先生はUDCKのことをアーバンデザインセンターというふうにおっしゃっていましたか？

●石黒：駅前の147、148街区ですかね、あれを県の企業庁が持っていたんですね、それを民間に公募で売却するときに、どういう考え方でそこを整備するか、それをアーバンデザイン方針とかが呼んでいましたね、そこを高く買ってくれるところに売るというのではなくて、地域でひつような機能を担ってもらうしかないのだから、こういう考え方で利用してくれるところに売るという感じだった。それがあつたし、その頃から北沢先生はアーバンデザインとかまちづくりとか言っていたと思うんですね、それがあつたので、柏のアーバンデザインセンターとつけたのかなと思った。そういう意味でアーバンデザイン方針というのがあつたので、それもちょっと区域を広げて（区画整理をしている440haですね）、駅前だけでなく、やるのかなと。もうひとつあつたのは、東京大学が柏の葉キャンパスをどうしていくのかというのをまとめていた。柏については国際キャンパスとして整備していくと、海外から積極的に誘致していくということで、その時の調査を色々やられていた。その時に、地域と一緒にやっていくという案がでてきた。それをまとめていたのは三井不動産のSEの椎名さん。椎名さんが担当していた。東大が3つの部門（まちづくりとその他2つ）に分けてコンサルを使って柏の葉キャンパスの今後というのをやっていた。担当者は椎名さんで、所長さんは多田さん。

知事と市長と、総長と年に1回顔合わせをして話す機会があつた。（トップリーダー会議）小宮山総長の前からあつた。小宮山総長は特に柏への思い入れも強くて、国際キャンパス構想への想いも強かつた。

それが堂本知事もすごく気に入って。はじめは「国際」という言葉がつくなんて誰も考えていなかった。たまたま東大が国際キャンパスとして位置づけて、海外から留学生や研究者を集めて研究していくということが東大の中で行わせていて、それが繋がっているんだと思いますね。

まちづくりを考えるしくみとして、新しい組織をつくって、地域の民間の人も入ってやろうという想いを投げかけたのだと思いますね。

市として当時ここでまちづくりをこうしようという目標はあまりなくて、とりあえず関係する人みんなが集まって、議論してつくっていきながら、その後のエリアマネジメントをつくった後も良いまちを維持していくための管理まで考えないといけないね、そういうことでつくってこうと。特に北沢先生が意識していたのは、地域の一人一市民が（当時はあまり人が住んでいないエリアなので、地元組織があまりないのですが）エリア的にはたなかのふるさと協議会というのがあって、そこの会長さんにははじめから入ってもらおうというのを意識されていたね。

○三牧：UDCK設立の最初の会議には寺島さんですかね、入っていたんですね。

●石黒：寺島さんと、あと会議所を入れて。やはり地元というのを大切にされていましたね。行政と大学と三井さんと直接関わっている人はすぐできるんですけどね、やはりそれだけじゃなくて、地元に住んでいる人を入れなければいけないということで。

○福角：そのように色々な団体が議論する場で、はじめは北沢先生とかがリードしていたと思うのですが、だんだんとみんなが議論しやすい場になっていったのでしょうか？

●石黒：11月20日に立ち上げて、年明けから具体的に動いていって、当時市に対する注文とか、県に対する注文とかそういうものを先生の方からあつたんですね、市に対しては、職員を一人専任で派遣してほしいというのが一つと、あとは人材育成みたいな今でいうまちづくりスクールみたいなものを作って、地域のリーダーみたいな人を育成していくようなことをしてほしいということと、あと自転車みたいなものをシンボリックにやっていきたいというのがあつた。本当は市長からは今の柏版のCASBEEで具体化しているんですけど、それはもともとTX

沿線、良いまちをつくりたいというのがあって、その中で今の都市計画とか建築基準法とかがあるけど、良いまちをつくるにはもうワンランク上の基準、ガイドラインみたいな形で示さないといけないだろうと、そういうことを研究してほしいという要望があった。それで、少し勉強会みたいなものをUDCKの事業としてやりながら、今回かしわ版CASBEEというのができたんですけども。それが具体的になってきてから（2年目くらい）市としても関わり始めたという感じですね。やはり具体的な事業が動いていかないと関わり方がわからないので。そういう意味ではまちづくりスクールとかをやっていく中で、色々な人も関わるし。寺島さんとか当時の国会議員の桜田さんとか、どこからかわからないけれど、北沢先生の人脈でうまくまきこんでいくというのはやっていたね。誰が間に入っていたのかはわからないですけどね。

あとはKサロンをやって、そこでまちづくりスクールの色々な方も入ってきて先生とも良い関係でおつきあひしていましたね。

○福角：やはりKサロンはざっくばらんに話す機会として良かったですか？

●石黒：そうですね、でも継続が難しいですね。というのは同じようなもので、とうかつテクノプラザというのがあって、あそこも坂口さんという地元の企業の方が事業が思わしくなくて、東大の先生と連携してやったりしていて、毎月1回ハナミズキの会というのをやって、色々な人を連れてきていたんですね、経産省の産業系の人とか。ただやっぱり2年とかは続くけど、それ以降は難しいな、と。ソフト的なところもあると盛り上がるんですけどね。だから僕はUDCKも地元の企業や若い会議所の人も入って、はじめは何回か行くんだけど、そこで自分が何ができるかということがないと遠のいていってしまう。

○三牧：人を呼んでそこでレクチャーみたいなものをKサロンをやっていたと思うんですけど、それに関係ない人は遠のいていくし、関係ある人は懇親会みたいな単なる飲み会になってしまうし、意味のある会にしていくのは難しいだな、と思いますね。

●石黒：先ほどまちづくりスクールの話がでましたけど、一番始めのときには、地権者の方も入って、三井さんみたいなところは良いんですけど、大事なのは個人の地主さんとかを巻き込んでいくために（目的を共有するためにも）、北部整備の方で声をかけて入ってもらったんですね。やはり土地を持っている人は実際に土地利用がされる段階になるまで関心を持たないんですね。土地を

持っている人とそこに住もうとしている人、新たにそこを使う人が初めから関わってみんなで知恵を出していけば良いかな、と思ったんですけども、難しかったですね。やはり土地を持っている方は農家の方が多く、まちづくりとかに興味がある人は少ない。最近2、3年目となって、行政の職員の教育のための場としては有効だなという気はするけど。

○福角：農家の人に対する効果はないですか？

●石黒：そうですね、地権者の方には2年目以降は参加してもらえなかったの、入ってもらうためにはもうひと工夫必要なのかなと思います。土地利用の段階とはタイムラグがあるのでね。

あとは常駐で前田さんと丹羽さんに入ってもらったというのがよかったですね。市の職員を一人というのは1月にあって、そういう話を市長とも相談して、しかし今までそういった経験がないので、良い人材がいないと話していた。また、もし良い人材がいたとしても市の中で使いたいというのもあるって、それを北沢先生に話した。先生の方で推薦していただける方がいれば、それを振興公社の方で人件費を負担するという形でやりたい、ということで、丹羽さんを雇うことになった。市としても将来的には職員が常駐する形で、研修の場にしたいと考えている。そうしないとそのノウハウが市の財産にならないので。もう少し都市計画とかまちづくりを担当する部署が問題意識が高ければ、市の人材育成としてUDCKのようなところで教育するというのは良いと思うのですが、残念ながら柏市はまだそこまで意識がなかったんですね。

○福角：3年経ってどうですか？

●石黒：今はそういうのが大事だという意見は増えてきている。やはりUDCKに実際に関わってやっているの、特に若い人たちが興味を持っていますね。しくみとしては振興公社に送って、そこからの派遣ということになりますね。今回砂川さんが来て頂くことになりましたが、もう一人くらい市の職員を置きたいなと思っていますね。当時関わっていた市の職員が人事異動でほとんどいなくなってしまったのが心配ですね。引き継いでやる中でUDCKの価値についてちゃんと理解している人がいるかということが心配ですね。

○三牧：徐々にではありますけどね。CASBEEの方とか。色々な場面でUDCKに関わるが増えてきたので、常駐というわけでもなく、UDCKのプロジェクトを通じて、横で繋がるような場所であれば良いと思います。

- 石黒：安井さんはたまたまCASBEEのことを民間の時からやっている方ですね。行政の方も仕事をやっていく上で、UDCKをうまく活用しようという人がでてくると良いと思います。最近はUDCKを良い資源だと捉える人も増えてきている。
- 福角：柏市の中で、UDCK以外にまちづくり組織を増やしていこうという動きがあると伺ったのですが、それはやはりUDCKの存在が広く知られてきたからなのでしょうか？
- 石黒：そうですね、やはり行政と土地利用する人が直接やりとりするとなかなか許認可とかがうまくいかないが、そこに大学とかそういうところが入ることによって非常にうまくいくなど。行政から離れたところにある場で事業調整する場があるとうまくいくのかな、とっている。それで柏の駅周辺で石戸さんというまちづくりスクール1期生がいて、非常に熱心に考えている方がいらっしゃるんですね、他にも。そういう方が駅周辺でもそういうのをやりたいというのがあって、今まちづくりのNPOの「ソーシャルなとか」というのを作ったんですね。その方と話していて、振興公社もUDCKみたいな形を広げていこうということになった。駅周辺と手賀沼の地域についてもそういう組織をつくりたいと。行政が直接地元の人に呼びかけても、地元でそういう自分たちが主体的にやっていきたいという方がいないと発展しないので、たまたま駅周辺はそういう方がいらして、NPOをつくったので、公社T他にもどこか大学にも入ってもらって、駅前版UDCKを作りたいということになった。
- 福角：UDCKと駅前のと、近隣センターなどの関係や位置づけについてはどうお考えですか？
- 石黒：今のところこういう組織がどうやって継続できるかといったときに、今は東大と三井さんが非常に支援していただいているからできるのであって、特に三井さんにおんぶしているところもあるので、それをいつまでも続けるわけにはいかないので、施設の場所の提供とか運営費とか、今後は公が担うところが出てくるのかなと。持続するために、行政—柏市がどのように関わっていくのが良いのかなと、やはり基本的な部分は柏市が負担すべきなのかなと思っていますので、振興公社をまちづくりの研究所みたいなものにしていきたいと思っています。そういう公民学連携のセンターを市内で展開していきたいと思っています。
- 近隣センターについて、柏の葉は本当に何もなしかなので、土地を持っている人がどういう風に関わっていつもらえるかということですね。駅の方は地域のコミュニティ組織を入れるかというのはあまり意識はしていないのです。
- 福角：柏市として、ふるさと協議会についての目標とかはありますか？
- 石黒：ふるさと協議会は今歴史も長いので、色んな活動を展開しているんですね。一番はじめは本市市長の前で、柏市が人口急増で発展してきたまちなので旧住民と新住民の交流する場所をつくりましょうと。とりあえず近隣センターというハコを作って、公民館活動やスポーツを通じて仲良くなりましょうということで、次に色々な地域の課題を市民参加で取り組んでいこうということで、環境ゴミゼロ運動などの環境美化の運動とか健康づくりとか災害地の応援体制とか協議会の中に組織をつくってもらって、割と幅広い分野で協力はしてもらっていますね。
- 福角：地域によって運営の仕方や行事の内容は違ってくると思うのですが、高齢化や少子化などで、持続が難しくなっているセンターも多いのかなと思います。また、当時新旧住民を繋げるための場所として機能した近隣センターと、現在新旧住民を繋げるための場所としてのUDCKでは、期待する部分が違っているのかなと思うのですがどうでしょうか。
- 石黒：近隣センターも役員の硬直化が問題で、世代交替しなければいけないけれども、難しい状況。それは前から新しいリーダーをどうやってみつけるかは課題。最近やはり地域という枠で活動する人と、NPOのような目的別に活動する人がいますね、新しいかたちの団体と既存のコミュニティの団体とうまく役割分担してやっていくだろうなど。どれか一本でしようとする、対立みたいになってうまくいかないところがあるから。今までの組織を活用しながら、新しい団体が活動できるような。
- 福角：どうやって既存のコミュニティを活かしていくかといった時に、市の職員の方が常駐されているようなので、そのノウハウが試されるのかなと思うのですが。
- 石黒：職員は今までは決まった業務をこなすというのが主だったわけですが、やはりコーディネーター役になるんだと思います。地域が担うべきところは担えるようにしていかないと。そういう意味では説明責任を果たして、コーディネートしていけるのが大切だと思います。
- 三牧：ふるさと協議会が20から30年くらい経ってますよね、その時に、たぶん色々な問題も見えてきて、UDCKのようなものがその突破口になれば良いなと思う。うまく連携していけると良いのかなと。

- 石黒：柏にますおという駅があって、その前に東急があった。東急ストアが撤退するという事になって、その後には葬儀場ができる事になった。そこで地元から反対がおきた。今の制度ではそれを認めざるを得ない状況なんですね、そういうことが困るなら、本来地区計画とかそういうことをしなければいけないと。

そういった経験を活かして、現在地区計画を勉強しながらやっています。各地域で都市計画とかまちづくりの観点から課題があった時にサポートしていくとかはあると思う。柏の葉キャンパスは新しいまちなので、ある程度地域の課題になっていることは具体的にセンターとしてUDCKが担っていけるのかな、あとその地域の中でまちづくりに関連して課題が見えたときにはそこうまく連携してやればよいのかなと思います。ですから、協議会そのものがUDCKに入るというのはないのかなと。たまたまここは地元の人がないので、協議会の会長に入ってもらったのですが、幅広く市民と協議会とに入ってもらおうと考えると難しい気がしますね。

- 福角：UDCKが公共施設（みんなが使える場所としての公共）として評価できる点、できない点があればお願いします。

- 石黒：みんなが使える場所として、「場所がある」というのは良いことですよね。柏コンソーシアムを作ったときも場所を提供してほしいという意見が多かったし、柏の駅前も支援センターを作ったが、色々な団体の人が困っているのは活動する場所がほしいということだった。それはやはり公共施設として市がやると、制約が強いので、少し柔軟にできる場所が必要なんだろうなと思います。そういう意味でUDCKは使い易いと思う。今回もUDCKを東大の駅前キャンパスの中に入れてたいということで、それは公社が東大に借りるという話になっている。今後は市の中でUDCKの位置づけをきちんとしていかなければいけないと思っている。

No	13 (2人)
日時	2010年7月23日11時00分～12時
場所	柏市役所
対象	●岩崎克康さん（柏市北部整備課） 斉藤智之さん（柏市行政課）
質問者	○著者、三牧浩也

○三牧：アーバンデザイン方針の時に既にUDCKをつくるという話はあったのですか？

●岩崎：基本的にはない。ただ、新しいまちだから、ちゃんとしたグラウンドデザインのもとに空間デザインをしていかないと、特に駅前じゃない、そういったことから、じゃあそのデザインなり町並みを今後外へどうやって展開していくの？147、148街区以外にどうひろげていくの？という話をしたよね。その時に、地域ともしくは三井とその辺を一緒にやっていかなければいけないという話があった。たぶんね、UDCKの話はもともと横浜で活動されていたじゃないですか、古き良きものを残しながらのまちで。そういうのをこの新しいまちで、どうしていくかっていう話でね。核となるようなものがほしいと言っていたね。アーバンデザイン方針の中の施設の中に何か入れることはできないの？ということも言っていた。三井の企画提案の中にあっただろうかは私はちょっと覚えていないけども。そういう地域型のセンターみたいな話はあったかなあ。それとも委員会が何かの場で決まったのかなあ。ただもともとが駅前が商業業務系、北側の147街区が住宅系と色分けされていたところだから、それぞれ別々の会社が手をあげたのね、三井だけが両方に手を挙げたのね。というところがあって、まあその頃から三井が北沢先生とか大野先生とか栗生先生に持ちかけていたかもしれないね。まあ僕らがみても三井の提案が一番よかったし、北側はもう一社も良いところがあった。

○三牧：一応処分する段階で基本的な方針を出して、それに対して各社が提案を出したんですよね？

●岩崎：そうそう、特に地域への還元というか、そういうものを県の条件として出したし、北沢先生の専門である空間デザインの話というのは結構具体的に整理されたので。ただUDCKは北沢先生の構想があって実現したわけだけど、それ以降は斉藤くんとか石黒副市長（当時部長）がいたからこそ立ち上がったんじゃないかな。まあ三井という大きなバックもありながらね。だいたいK細かい話は斉藤くんに任せちゃったからね。

●齊藤：北沢先生もたぶんアーバンデザイン方針に基づいて駅前周辺を整備していこうと、そのために拠点施設が必要だという考えはあったと思います。企画の方で北沢先生との関わりを持ち始めたのは、市の企画で大学連携とまちづくりということで、平成18年の4月に、東大の先生とかがんセンターの医師の方と一緒に2日間にわたってほしい15、16人の先生に自分の研究テーマについて話してもらった。それを市内の企業や行政の方に聞いてもらって、研究のテーマとまちづくりをうまくマッチングできないかということをした。その中の一つの提案に、「まちづくり推進のためのセンター構想（現在のUDCK）を作ったらどうかという話があった。ただ、他の先生の提案もそうだが、その時は話として30分位お話をさせて頂いて、そこできたというのがあるんですね。なかなかストレートに行政や民間とマッチングしてやっていくというのは難しかったんですね。そういった中で、それとは別に、まちづくりということで、アーバンデザイン方針という147、148街区の駅前以外にも東京大学の方で柏キャンパスを使って学位としてのどう運営していくかというのがあって、柏キャンパスは東大の国際の拠点にしていくということだった。これについては18年の3、4年程前から大学の中で委員会みたいなものをつくって研究されてきたようなんですよ。その中でせっかく国際化ということをやるのであれば、キャンパスの中だけでやるのではなくて、大学とまちが一体となって、国際キャンパスタウン構想（これが今につながっているやつですけど）を行政と民間と大学が連携してつくっていくという話が平成17年度くらいにはできていた。そしてキャンパスタウン構想の話し合う場ができていて、4月から動いていった。ところが構想を色々研究していく中で、おそらく三井が動き始めたと思うのですが、5月か6月位にUDCKを作ろうという話がポツと浮上ってきて、場所と建物については三井が面倒みると。運営については大学と行政が中心になってくれということで組織づくりと建物づくりが急ピッチでスタートした。実際にその都市の11月にオープンしていますから、話が出て、形になって見えるまでに、本当に4、5ヶ月でできてしまったと。

○三牧：最初の15、16人の先生を集めてやったのは2005年の4月ですか？

●齊藤：2006年ですね。

○三牧：数ヶ月後にUDCKをつくるはなしがでていたのですね。

●齊藤：数ヶ月後というより1.2ヶ月後ですね。数ヶ月後にはもうできてましたからね。

● 岩崎：大変だったけど。確認から何からね。あれ仮説だけだね。

● 齊藤：その後は月に2、3回のペースでキャンパスタウン構想は少し脇において、まずはUDCKの組織づくりと建物づくりに11月位までは進めていったという感じですね。

○ 三牧：2006年の最初からUDCKの話とキャンパスタウン構想の話があって、とりあえずはUDCKのことを、という感じだったんですね。

● 岩崎：要するに、2005年に三井が取得するにあたって、三井も当時、北沢先生を委員長とするアーバンデザイン会議というところで、結構取得後にどうまちをつくっていくかということと相談してたと思うんだよね。駅前を買っちゃったわけだしさ。結局三井はまちづくりの話と並行して、もう一人糸井重里先生のところへ行ってるんだよ。それが開業前の17年の取得してすぐ2月とか3月。その時の連休4月の29日に現場に見に来るという話になって。要するに全体の方針は、三井の後ろ盾は、糸井先生なんだよ。先生と一緒にまちを回ってね。そこにそういうまちづくりを進めていこうというのがあって、具体的に北沢先生とかとやっていった。それが1年くらいはなしてた。それで翌2006年にそういう話が。まあ三井が承諾してたから北沢先生も言ったんだと思うんだよ。あとは柏市がやるかどうかの寸前まで用意されていた。そこに石黒さんとか齊藤くんとか前向きな2人がいたから動いていったんだと思うね。

やっぱりあいう施設って、市が積極的に関わらないとうまくいかないと思うんだよね。北沢先生も横浜とはまた違った場所で、不安もあったとおもうんですよ。実際のところね、公共的役割センターとしては活動も盛んになってきたし、市の中でのセクションが北部でやるときはうまくなってきたと思うんだよね。そこに至る経緯として、公共がいかに関わり込んでくるかということが大切だと思うし、それがたまたまスタッフがいて、私みたいなちゃんぽらんみたいなのが北部の課長やってたんで、やりたいことはやっていこうというような話になったと思うんだよね。

○ 三牧：本当にちょうど3人（石黒、岩崎、齊藤）がそろっていたのは大きいんだと思います。

● 岩崎：立ち上がったら立ち上がったで前田さんがね、一生懸命やってくれたし。

● 齊藤：秋に立ち上がって、その年度末までは専門のスタッフがなくて。それで振興公社の方から受付とか最低限のスタッフは用意して、三井の方からはUGの後藤さ

んに入ってもらって。その後に丹羽さんと前田さんが入ってもらって、ぐっと延びた。

● 岩崎：専任スタッフが一生懸命やってもらえると、全然違うよね。たぶん地域のコミュニティの核として動きたいと、そういう役割もあったから、色んな人たちが訪れるようになったんじゃないかな。あんまりまちづくりの専門的な話でいっちゃうと、どうしても近寄りたいたいものになってしまってたね、だったらちょっと成功してなかったかなと。

○ 福角：地域のコミュニティの核として一番よかったことは？

● 岩崎：新しい地域だから、コミュニティがまだないところなんだよ、古い人はそれぞれもうコミュニティがあるからね。そこでねむってた神輿をやろう！ということでみこし祭りを始めた。新旧住民が一緒になってね。だからそれまでは大学と行政と民間がどうするかっていう話をあそこ（UDCK）でしてたの、できた頃はさくら並木を増やす話とかね。だからやっぱり何かをやるとするその場所にセンター（何か）があるっていうのは最高だよ。例えばそれを市役所でやったって議論にならないんだわ。ちっとも前向きじゃないんだよね。やっぱりまちかその場で見えて、それに対して思うことはストレートにでるじゃないですか、こういうかしまった場所（会議室）でとなると、どうしてもお上品な言葉になっちゃうんだけど。ああいう施設というのは今まで柏市になかったから。中央公民館とか近隣センターだとかね。

○ 三牧：会議の場所としては（UDCK）が悪いんですけどね、逆にそれが良いのかもしれないですね。

● 岩崎：会議やってる後で知らない人が歩いていったりね、それがいいんじゃないの。

● 齊藤：主催もね、行政がやるとどうしても堅苦しくなっちゃって、説明会になってしまう。しかしUDCKだと色々議論しやすいと思う。

● 岩崎：公共施設として評価できる点としては、オープンな施設ということだね。公衆電源とか、地域の人々がBBQやったりね。あとはね、（北沢先生がどういう風に考えていたかは分からないけど）最初できたときは、何にも周辺に施設がなくて、ぼつんとできたわけですよ、ららぽーととね。でね、みんなが住宅の販売場だと思ったわけ、これをなんとかしなくちゃいけないと思ったわけ。デッキのところを開放したり、椅子を置いたり、一時はKサロンのときに電飾を置いたりね。要するにここは誰でも利用できるんですよ、というのをスタッフなり

関係者がつくろったというのが良さだよね。今度つくる時もこれは続けていかなければいけないのかな、と思いますね。

- 齊藤：当時はKサロンって月に1回くらい意見交換をするような機会をつくりましょうとやってたんですね、
 - 岩崎：模型はあれは結構色々な人が見てたよ。
 - 齊藤：最初に人が集まってくるにはあれはよかったですよ。
 - 岩崎：やっぱ写真を見るだけじゃだめなんですよ。立体の方が興味をそそられる。
 - 齊藤：あれも最初は更新していく予定だったんだけどね。
- 三牧：更新のプログラムがね、ちゃんとできていなかったの。今回の移転時に手をいれる予定です。
- 齊藤：当初の案（UDCK）としては2階建てだったんですよ。もうちょっと天井が低くて。それが大野先生が30分くらいみて、「だめだね」って言って今のようになった。
- 三牧：今のUDCKの状態を見て、当初から比べてみてどうですか？この辺は予想外にうまくいったな、この辺はもっと強化しなければいけないなというところはありませんか？
- 岩崎：最初のスタートが理想がわかってなかったんですよ、こういうのはじめてだったし。だからどこを目標にしておくというのがわからなかった。北沢先生の頭の中にはあったと思うんだけどね。あんまり当時に対して今という評価はできないんだよね。
 - 齊藤：当時はまちづくりの核になるんだと。具体的にそれぞれがどういう役割を持って何をしたら良いのかという考えに及ばなかった。そういった意味では北沢先生が色んなアイデアを出されて、まちづくりスクールとか。
 - 岩崎：地域でまちをつくる、リーダーを育てていきたいというのがあったからね。だから田中地区からは地権者の農家の方で若い人とかにも参加してもらっていた。こういう人で積極的に意見を言う人も。今は体験農園をやったりね。できるだけ地域とまちづくりと一緒にやっていく、新しい住民と一緒にやっていかなければいけないんだよね。
 - 齊藤：あとスタートのときを考えていくと、当初1年か1年半くらいの計画だった。仮設的な活動拠点という形で。組織的にも、財政面でもくんでいない。だから三井

さんの建設のスピードが遅れて、UDCKが予定より長く今の場所で活動している、さらに今度は組織化されてきて、常設が良いねという風にみんなの考えが一致してきて、あそこがなくなっても、場所を移して、組織体として継続していこうねという風になってきた。それはやはり、やっていく中で何だかの成果が見えてきたし、みんながここがあった方が良いねということでもできたと思うんですよ。大学の方も当初が北沢先生の研究室オンリーに近い形だったし、千葉大もあのセンターが入ってきたわけではないし。また行政の方も、オール柏市、オール千葉県ということもなかったし。それがだんだん実績が積まれてきて、行政も大学も、広がってきたという動きは今に繋がっているのかな。そういった意味では当初思ってたなかった、次元的にも考えていなかったものが、延びてきていると。それは逆に裏返していけば、良い方向に向かっているから続けているということだと思うんですね。それが具体的にどういう方向か、というのはわからないんですけども。そういった意味ではまだ模索状態かもしれないんで、また場所を移して継続していけば良いと思います。ただ組織的にも予算的にもどうするかというのは2、3年前から問題にもなっていますし、まあ法人化するとかしないとかいう話も出ていますが。そういった意味では場所を移す際にこれから先を考えるきっかけにもなりますし。

- 岩崎：私が北沢先生と話していた時を思い出すと、たぶんUDCKがまちづくりにおいて、ある一定のコントロールもしくはフィルターをかける組織として残していった方が良いだろうと。要するに通常で言う建築とかだと景観法とかに基づいてやるんだけど、そうじゃなくて柏の葉ではキャンパスタウン構想というのをつくったんだから、それに基づくまちづくりというのがあって、そのまちづくりをどうするかはUDCKがぐっと手綱を握ってて、そこを経由して行けば、柏に建築基準法を通す、景観法を通すといった時も既にコントロールできている状態なわけですよ。市としては楽になるし。そういったとことをセンターとして、まちづくりを進める上でのビルドアップに関しては、UDCKがお目付役にならないといけいね、という話はしていた。ただそれを何でやるかということはあるんですけどね。例えば地域で開発計画がある、その相談はUDCKが助言しながらいくとかね。
- 三牧：今まさにそういうことをやりたいと思っています。まちづくりの拠点といった時に、コミュニティとかソフト系の話はかなり広がってきたのですが、ハードのところがちよっと等閑になっているので。
- 岩崎：コミュニティの方はそれで自立していけば良いのかなと思います。別のところで活動してもね。

- 三牧：そうですね、連携が取れていればそれで良いですよ。宮奈さんがずっとディレクターで入ってもらいながら、活動場所は別にあるみたいなね。建物をうまく誘導してく話についてはもうちょっと県とか市とかあと専門家も入れて体制をつくっていきたいと思います。CASBEEも動き始めたというのもありますしね。
- 岩崎：あれは結構画期的だと思うよ。というのは、当時は柏市の建築指導課はやる気はなかったんですよ、それが勝手にCASBEEをキャンパスタウン構想の中で建築指導課を除いた人たちで話していて、できあがった時に建築指導課を入れたんだよ。まあ彼らは怒ったけど。たぶんはじめから入ってたら進んでいなかったし。たまたまCASBEEの担当者が経験者（安井さん）だったこともタイミングがよかったね。

No	14 (1人)
日時	2010年7月29日13時~14時
場所	芝浦工業大学 (前田さん研究室)
対象	●前田英寿さん (元UDCK副センター長)
質問者	○著者

○福角：主旨説明

●前田：まず、北沢先生はアーバンデザインセンターもそうだけど、アメリカの事例をすごく意識されていたんですね。視察もされて、(遠藤新さんとかと「都市のデザインマネジメント」出版時に調査)その時にもアーバンデザインセンターには常駐で専門家がいたんだって。アメリカの場合はアーバンデザイナーとかプランナーとかが職能としてははっきりしているから、そういう人たちもいただろうし。

2006年の11月にUDCKができたでしょ、そして2007年の4月に僕が来たから、この半年の間に、北沢先生はイメージしていたんだと思う。僕とか丹羽さんとか常駐する人を。しばらくやって、やはり必要だなというのを北沢先生以外の人、三井不の人とかに感じてもらって、僕と丹羽さんのお給料を用意してもらった。

直接のきっかけは、北沢先生の僕の兄弟子であったのは確かだけど、はじめは知らなかった。ドクターの審査員が西村先生、北沢先生、大方先生、内藤先生だった。それで北沢先生が気にされて。あと僕の世代でゼネコンとか以外で設計をやっているのが(個人で動いている人が)都市工の人脈にいなかったの、比較的気軽に声をかけ易かったんだと思う。

○福角：一緒に仕事をされたとかではなかったんですね。

●前田：ないね。たまたま性格が合ったんだね。3月の20日位に言われた。

○福角：入ってからはどういう流れで仕事が進みましたか？

●前田：具体的に言うと、5月のゴールデンウィークに色々イベントがあって、ほとんどは三井のプロモーションのお金が動いていたんだけど、せっかく僕と丹羽さんがいるんだから、まずはもうちょっと三井だけじゃなくて、開いた形でお金をとって来ることをやりなさいと。つくばエクスプレスを構成団体にいれようとまず言われた。うまく三井と結びつけることによって。5月のサイクルフェスタというのを、三井とTXと一緒にやっているように見せたり、イベントをUDCKでするとか。

もともとアンダーでの結びつきは合ったんだけど、(事業パートナーではあったんだけど)まちづくりのパートナーではなかったから、そういう場をセッティングした。だから割とアーバンデザインセンターってさ、やっていることはみんな目立たないところでやってるんだよ。ただそれを、よく北沢先生が言ってたんだけど、かってよく見せなさい、誰が見てもわかるようにしなさい、という場なんだよね。

○福角：その中で一番力を入れて取り組んでいたことは何ですか？

●前田：1年目はね、UDCKってお財布がなくて持ち寄り型なんですよ、だから北沢先生は「UDCKがやってる！」というのを取りあえず作れと言ってたね。UDCKでお金を取りなさいと。PLSも県への申請だったし、三協フロンティアも協力的だったし、もともと三協フロンティアの会長さんが商工会議所の会頭なのね、だから商工会議所っていうのはUDCKのメンバーじゃん、三協フロンティアはUDCKのメンバー的な関わりだった。商工会議所を通じて僕たちにコンタクトしてきたの。それで一緒にやりましょうと。1年目はそれが割と。

あとはキャンパスタウン構想がまだできて議論の段階だったのでそれをまとめる、というのが最初の年かな。

2年目は、キャンパスタウン構想を、できたペーパーでなくて実行体制、フォローアップをしなさいということ、もちろん費用のことも。ボランティアじゃだめなので。UDCKがとつぷで体制を組んでやりなさいということでもやりました。3年目もフォローアップと、UDC会議。毎年毎年テーマがあったんだよね。

○福角：キャンパスタウン構想は大きかったのですか？

●前田：やはり僕の中では大きいし、専門性が高い。でも今言った3つ(PLSとキャンパスタウン構想、UDC会議)はやらなきゃいけないことだったし、やってよかった。

○福角：キャンパスタウン構想は想定通りにできていますか？

●前田：まちづくりの事業としてはまだまだこれからだよ。僕と北沢先生と丹羽さんのジェネレーションは構想づくりで終わりだと思う。実際にものはできているとは思えない。公共サイドとしては相当お金を使っているんだけどね。例えば三井のマンションとか、今までのマンションと違うというものができて、それが世の中に評価されたならば、最初にUDCKが鍵をかけたんだというように評価されると思うけど、ちょっとまだUDCK自体は評価されるけど、その効果が評価されないと。まだ早いかな

と。どんなに早くてもだいたい10年くらいかからないとわからないのではないか。

○福角：建物的な新しさは何かありますか？

●前田：ないと思う。デザインはね。

○福角：今までのニュータウンとはどこが違うの？とかは何かありますか？

●前田：ニュータウンとは僕は違うと思うんだけど、駅前には建物ができてきて、その周辺がどうできるかじゃないかな。アーバンデザインとしては厳しいな。

○福角：日高先生にヒアリングをした時に聞いたのですが、本来はUDCKが建物のコンペを主催するなどといったことも想定していたようなのですが、その辺についてはどうですか？

●前田：それは僕が来る前の話だね。

○福角：前田さんの柏の葉のまちの印象とかはどうですか？

●前田：駅前がどうしても高容積になっちゃうという建物以前に都市計画の話がなかなか突破できないな、と思う。実際には周辺の開発が進まないわけでしょ、だから全体の事業としてはそんな早くは動かないわけね、だったら最初に駅周辺に大きいものをつくらなくても良いんじゃないか、もっと適正配置してね。そんなやりかたを分散できないのかな、と思っていて、柔軟に土地利用を変更する事例も全国的にあるわけだし、最初のマスタープランが旧態としたやり方をしているから、都市計画突破できていないところ。それ以外の建物についてはまあ幕張をやっていたこともあって、グレードとしては全然低いよね。物件の密度も違うし。同じ高層マンションだとしてもだよ、だめだと思う。それは、非常に難しく、幕張と柏の葉ってデベロッパーも同じだし、状況が似ているんだけど、あのころはバブルだから、みんなが幕張に建てたい建てたいっていう時代なわけ、ここはやつとの思いで三井がやっているから、デザインは難しいね。経済状況のファクターがかかっているからね。

○福角：突破できない最大の要因は何ですか？

●前田：区域が大きすぎるんじゃないかな。もうちょっと小さい単位でやっていくとかね。そうしないと事業が動かなくなっていくんだよね。よくいうのは臨海副都心、売れる状況で分譲を作ったが、売れないわけ。そこで売れないよりは安くてもいいから賃貸にした。簡単にいうとそろばんを変えているわけ。やらざるを得ない状況なわけ。逆に言うと危機があれば起きる。それで議会を説得できる。そうになったら最初からできないのかな、と。

○福角：UDCKに3年間関わったことで、変わったことはありますか？

●前田：色んな人とやると、スピードがすごくあって、良かったと思う。たくさん協力者がそれぞれ動くので効果が早く見える。自分たちもやる気が出る。

○福角：早く効果が見えるのは良いことだとお考えですか？

●前田：やはり小さな目標を積み重ねて、大きな目標はキャンパスタウン構想なり環境都市なり柏の葉にはあるんですよ、でも役所の人もどんどん変わっていくし、僕なんか3年で変わったし、そういう人にとってのやりがいも必要じゃない。大きな目標の中に小さな積み重ねみたいなものがいつも動いている。大きな目標に向かってずっと坂道を上っていたらつらいわけですよ。やっぱりどこかでスピードアップしたり、楽しめたりすることが必要。これがたくさんあると思うね。この3年間は役所の中でも面白かったと。ものも動くし、アウトプットがあるからと。一種の特区なんだけど、関わっている人間が楽しかったというのはすごく重要だよ。ブレイクダウンというのは大切だよ。

○福角：具体的にはどういうブレイクダウンがあったのですか？

●前田：例えばキャンパスタウン構想ってすごく立派なことが書いてあるじゃない、でも毎年フォローアップするのって、すごく具体的なことだよ。例えば自転車の実験とか、アーバンデザインセンター会議をやりましょうとか。そしてそれには必ず予算が背景にあるから、できるってわかるわけ。小さなPLSだって、あの位の規模だからできた。

○福角：他にUDCKと関わったからこそ感じたこととかありますか？

●前田：個人的には、案外ああいうのもあったのかな。人がたくさん来てがやがややっているのが、迷惑そうに見えて案外楽しかったなど。僕と丹羽さんなんかはじめは向いてないよなとか思ってたけど、慣れてきてね。

○福角：それは何かきっかけがあったのですか？それとも序々にですか？

●前田：色んなところで北沢先生が布石をうってくれたんだよね。市長と直接話することができたり、三井だったら副社長とかさ。そういう幹部と話せるようなものを北沢先生の一言が色々なところに散りばめられていて、気持ち良くできるんだよね。あとやっぱりね、三井不動

産という会社はすごいなと思った。やはりリーディングカンパニー、懐が深いから、少々のことでは目くじらをたてないわけ。少しの失敗とかね。だけど現場でちゃんと動いてくれるし、相談にのってくれるし、という人がいる、そのシチュエーションをつくった北沢先生はやっぱり働く人のことを考えてくれていたんだなと思いましたね。

北沢先生とあと丹羽さんだね。非常に明るいし、やっぱりできるもののクオリティが高いじゃない、だから僕は恵まれたよね。何の不自由もなく、仕事ができた。

○福角：他のスタッフの方とはどうですか？UDCKがなかったら出会っていない人とか。

●前田：面白かったのは広報の小林くんとかあと中里くんとか。彼らは僕が普段の仕事では出会えない人たちで、すごく専門性が高いから、一応僕が指示を出すことになってたんだけど、それよりも良いアイデアが出るんだよ。だからある意味楽。こんな感じというところを提案してくれるし。宮奈さんに関しては僕が市民活動支援に関してあんまり評価していないところがあって、彼女に対してもっとできたんじゃないかと反省している。例えば色んな市民を巻き込んだプロジェクトってたくさんあるじゃない、ほとんど僕が関わるようなまちなクラブ活動以外のことは僕と丹羽さんあたりでやってたんですよ。本当はそれを宮奈さんにお任せして、宮奈さんが丹羽さんの代わりにUDCKの顔になってくれるようにすべきだったんだけど、僕がコントロールしなきゃいけないなと思いついてまかせきれなかったなと。

○福角：どうして宮奈さんが顔になった方が良いと思うのですか？

●前田：やっぱり市民との接点とかやり方とかさ、一回イベントとかシンポジウムをやって終わりじゃないんだよ、その後をフォローする、次こういうのがありますとかあるいは有志とかボランティアとかやってくれる人を巻き込んでいくことは結構手がかかるし、丁寧にやらなければいけない。それが、僕と丹羽さんはそういうのを全くやらないひとだから、宮奈さんみたいな人—それを専門にやっている人がもうちょっとUDCKにいたことができるようにできないかなとか。結構お金がかかるしね。ちょっと専門家としてのプライドもあってさ、僕らとしては空間デザインにダイレクトに繋がる仕事をやらなとまちづくりセンターになっちゃうなと思ったんで、あそこに来て市民が色々やることに対して拒絶してたの。

○福角：ではKfVができて、そちらで市民活動が盛んになってきたことは前田さんにとっては良いことだったのですね？

●前田：うん、助かる。いつもこの問題は起きるんですよ。一般的なまちづくりセンターと、大学が関わっているセンターとかこういうアーバンデザインセンターがどっちの顔を持つてくるのかという。柏市はまちづくりセンターっぽいものを求めているんだよね。でも北沢先生はそうじゃない方を求めているんだよね。前者は日本にたくさんあるし、後者はない。しかも後者は柏だからこそできると思っていた。そういう風にやってたから宮奈さんにはつらい面もあったと思う。

○福角：ではその後者のアーバンデザインセンターが市民と関わるというときにはどのような関わり方が良いのでしょうか？

●前田：それは永遠の課題なんだけど、今までのUDCKは無理矢理一緒にやってきた。それが良かったのか、あるいはもっと専門性を高めてもうちょっと地域のシンクタンクとかコンサル的な仕事に特化して、人間もそういう人たちを集めるみたいなものにするのなかなか難しく。三井の事業の話もNあるじゃない、大学っていう研究、そして市民があるじゃないそこで市民と企業はうまく結びついたんだよ。三井が巧く柏の葉を売るには市民との共同みたいなもの—クラブ活動とか畑とかをやった。ただ大学と企業みたいなものは幕張とかがうまくいったんだよ。UDCKでこの3者がうまくいくとしたら大学と市民が一緒になることだよ。体制としては一緒なんだけど、お互いの活動が盛んになると、そこにコンフリクトが生じるよね。僕らの時にはそれをあえてそれをセーブしててコンフリクトが起きないようにしていたけれど、今後は三牧くんなんか僕よりも若いしオープンな人だからもう少し自分なりのやり方で近づく方法を試行するかもしれないよね。

○福角：市民を入れなければいけない理由をどうお考えですか？

●前田：マンションができちゃうと三井がいなくなる、そうなった時には大学だけになったら別に大学のキャンパスの中にあってもよくなる。まちにでるとなるとやはり関係を築いていかないといけないでしょ。アーバンデザインセンターが市街地の中にあるためには必要だし、そこら辺清水先生なんかは結構割り切って考えているよね、もっと積極的に研究と一緒にやっていくとかって。大学が東大じゃなきゃね、もっと繋がると思うけど。

○福角：上野先生はそれを千葉大が担うと言っていましたね。

●前田：千葉大のスタンスとしてはそれで良いんだと思う。ただ悲しいことにあそこは学生がいない（柏の葉に）んだよね。だからやりたいと思っても難しいんだよね。

あるいみ三井は千葉大をうまく使ってるよね。

○福角：UDCKがまちづくり組織として評価できる点があれば教えて下さい。

●前田：フラットに連携しているという点ですね。

○福角：フラットだからこそ良かったことは？

●前田：とにかく大学と柏市と三井不動産、4者がこれまでの3年間、喧嘩もせず問題なくできた。お互いがやりたいことをお互いに言って、できないことはできないって言ったけど、一緒にできることは協力してできたしね。なかなかないんじゃないかなと思うね。単純に手をつないで仲が良いねというのではなく、ものができたり、活動とか実績を上げだじゃん。仲が良い成果が目に見えたから増々仲が良くなったんじゃないかな。さっきと同じ、小さい積み重ねだよ。

○福角：評価できない点は何かありますか？

●前田：比べるところがないんだけど、やっぱり自分自身が東京にできちゃうとわからないかな、って思う。自分が柏の葉にいるときは小山の大将で、いいぞいいぞって頑張ってたんだけど、相対化していないからかなって思う。なかなか学会の中でも指摘される。UDCKだけのことだとそれが社会的に意味があるかどうかとか判断できない。その点は足りなかった点。だからもっと色々できたんじゃないかなとか思う。アーバンデザインセンター会議だけじゃなくて。

○福角：公共施設としてはどうですかね？

●前田：平屋で小屋として建っていることは最高。あれがビルのテナントに入ったらさ、管理上も大変でしょ、時間規制もあるし。っていうのが使い易くて良いなと思います。

○福角：でも東大の駅前キャンパスに入ってしまったらその良さはなくなってしまうですね。

●前田：あの安普請的なところが良いんじゃない。笑

○福角：他に何かありますか？

●前田：ミュージアムというか展示のこと、もちろんまちづくりの模型を展示するのもよし、もっとBankArtみたいにアーティストの作品を展示するのもよし、なんかそれ

ができれば、やっぱりそれはキュレーターじゃない。それは頭では大切だと分かっていたけれども、限界だった、できなかった。最初から北沢先生にも言われてたんだけどね、そういうこともちゃんとやれって。ある意味宮奈さんとかの市民活動とアートの活動、アートの人が一人ほしかったね。スパイラルのように定期的でなくて、館の展示も含めて企画・プロデュースしてくれる人。場合によっては市民ワークショップであるし、ギャラリーであるし。

○福角：それは北沢先生は当初からやりたいと言っていたんですね。

●前田：やりたかったんだと思う。

○福角：これからですね。

先ほど東京との話が出ましたが、柏の葉エリアよりもっと広域でUDCKを見た時に、どんな存在になっていたら良いとかありますか？

●前田：柏市という都市自体を考えると、それぞれが東京との関係を持っている。田村でやってみたいにさ、ある都市における閉じた関係みたいなのはしない方がいいんじゃないかな。それなりの都会的なセンスがあって、柏市ってそういう人が住んでいるからね、地域でやってるふるさと協議会じゃなくて、アーバンデザインセンターみたいだね。

近隣センターにヒアリングに行った時も、年配の人が多いじゃない、もっと若い人を巻き込んでいきたいよね。なんかそういう人が参加できるようなものができれば良いんじゃないかな。そうすれば、役割分担して、連携していけば良いしね。

○福角：田中地区のふるさと協議会の人はキャンパスタウン構想のメンバーにも入っていますよね？どうでしたか？

●前田：柏たなかの方の市民農園とかガイドラインを作るといった時には大活躍だったね（寺島さん）。町会の人たちを説得したり、結構まだ反対が多いしね。寺島さんがうまく翻訳して話してくれているんだろうね。

No	15 (1人)
日時	2010年11月17日14時～15時
場所	首都圏新都市鉄道 本社 (御徒町)
対象	●石井慶範さん (現担当者)
質問者	○著者

○福角：主旨説明。

●石井： 当社の場合には、主体的に関わっているというのはほとんどないですね。元々は構成団体は6団体でしたよね。ですからTXは入ってなかったんですね。19年の5月ですかね。その位から入ったのかな。当時の担当者に、その経緯を聞いたが、積極的な理由ではなくて、運営会議なんかにはオブザーバーとして参加していて、その時に鉄道会社も入ったらどうだ、と北沢先生から担当者に誘いがあったみたいですね。会社としても、断る主旨でもないの、地域振興とか地域連携という感じで入ったんですよ。

○福角：北沢先生からお誘いがあったんですね。

●石井： オブザーバーでも会議に出ていたというのがポイントで、まあ特にそういうのに出てなければそういう話もなかったでしょうし。あと宅鉄法でできている路線なので、その主旨からしてもお断りするものでもないの。お引き受けというかいいですよ、という感じで。

(資料参照)

なので結局、鉄道の整備と沿線地域の整備を一体的にやっぺいこう、乱開発を避けるためにも自治体が計画を立ててやっぺいこうということですので、そういうことからすると、その地域地域の取り組みも本来であれば加わって行って、鉄道と地域の一体的な振興というのが主旨にあるので、名を連ねているということですね。ただですね、やはり鉄道会社って安全、安定、安心ということが大原則で、かつ新しい会社ですから、それでもうアップアップというのがあるんですよ。そこをやるだけで大変という。ということなので、安全安心で貢献はするけれども、その他のことで地域の取り組みに入って鉄道業以外で何かバックアップするということとはなかなかできていない。まあお手伝いできたりしても、駅でポスターを貼るとかチラシを置くとかそういうことかな。あとは、イベントでブースを出してグッズを売るとか、そんなことしか実際はできていないですね。

○福角： UDCKの構成団体になる前は、柏の葉のまちづくりというものを、どういう風に捉えていましたか？運営会議に出ることになった経緯ですとか。

●石井： たぶん、お声がけがあったので、出たのだとは思いますが、鉄道会社にということが期待されているかというのは最初は難しいんですけども、誘われて断るものでもないのということだと思います。

○福角： TXさんの考える沿線のまちづくりについて教えてください。

●石井： TXというよりは、一体なので、各自治体の計画があるので、そういったとろに合わせるということですね。

○福角： それぞれの自治体と一緒に協議するというよりは、自治体が決めたことをやっていくという感じですか？

●石井： そうですね、計画は自治体で作るものなので。ただその計画をつくる時には鉄道会社とも協議することになっているので、そういったスキームはありますけどね。

○福角： そういった時に、柏市との協議においてどういったことが話し合われたのかはわかりませんか？

●石井： 区画整理の話になりますよね。

○福角： 開通してから5年が経ち、それぞれの駅にも特徴が出てきたと思うのですが、柏の葉はどういう風に捉えられていますか？

●石井： 柏の葉はですね、乗車人数に関してなのですが、増加率は200%以上になっているんですね、これは柏の葉キャンパス駅位の規模の駅で、それぐらい増えているというのは増加率が高い方なんです。ですからそれだけ非常に住宅が建ってきて、見た目も変わった地域ですね。だからうちとしては非常に重要な地区だという認識はあるんですね。で、会社としては駅が20あって、担当者としては、土地柄が劇的に変わって実証実験とかも行われる地域なので、市も含めて、要望とか投げかけが多いんですよ、困っちゃうんですよ。鉄道会社にそんなこと言われても困る、みたいなね。ただ、一方で非常に勉強になるというか。うるさいとか色んなことに対して問題意識を持っている人が多いなど。非常に若い方も多くて(住民)刺激になるというか。そういう意味ではありがたい。鉄道会社なんて安全に走ってれば良いみたいな感じで世間と隔絶されたようなところがあるんですけどね。そんなところが担当者としては良いと思います。

○福角： 例えばどのような要望が今までにありましたか？

- 石井： 発車のメロディをはっばっば体操にしてくれとか。私はそういう話があると、すぐに「だめだよ」と言わないようにしている。なるべくできるところは検討してやりたいと思っているので。でもあれはだめでしたね。他の地域でやっている地域もあるんですけどね。ただ今はできないという感じですね。
- あと色々あるんですけど、デジタルサイネージのデジタル看板が置いてあるんですけど、散々揉めて置いたんですよ。まあでも他の鉄道でも取り組んでいるので、やった方が良くということでは何かやったんですよ。まあそういうので色んなものを置かせるとかは多いですね。ピノキオの段ボールとか。後は広告とかそういうものが多いですね。市とかは、8両にしろとか東京への乗り入れとかね、重たい問題は色々ありますけどね。
- 福角： 例えば改札前の広い空間を地域のための場所にするという話はないのですか？
- 石井： ありますよ。この間も1件ありましたね。東大の学生がやっている駅前の提案みたいなもの。それもすぐ断ったわけじゃなくて検討して断ったんですけど、看板と違って、人が対流しちゃう。それは通行の妨げになるんで、ダメですと。またそれは学生の取り組みであって、UDCKの純粋な取り組みでもないんで、そこを認めると他（の大学）も認めなければならなくなるので、そこは少し人の流れを不便になっても開放する、とはならなかったんですよ。
- 福角： 私はあの空間がとても広くてもっと人が留まることのできる空間だったら良いなと思います。あの場所がもう少し使えたら良いのかなと感じていて、それがUDCKなど地域の活動とリンクしていると良いな、と思うんですけどね。
- 石井： しかしあの空間にブースとかを出すと、通れないじゃないかという苦情を言う人もいますよ。
- 福角： たまにプリンとか売ってるじゃないですか、あれは許可を出しているんですよ？
- 石井： あれはお金をとっています。あと三井不動産とかも時々中で広告を配ったりしていますが、あれも有料です。
- 福角： 何か意見に応じてそれを反映していくことは厳しいのですか？
- 石井： そんなことはないですよ。そういう風にしたいとは思いますがね。
- 福角： 社内で話が出たりしますか？
- 石井： 出ます。やっぱりそれがなくなると困った会社で。そういうもの（情報や取り組み）に触れていなければいけないと思うし、それが出来る地域だと私は考えています。
- 福角： 他の駅ではどうですか？
- 石井： UDCKみたいなものはないですよ。防犯はどうか清掃がどうかというのはそれぞれの地区でよくありますけどね。ですからUDCKのポスターとかも20駅で貼ったりとかしますけど、多いですよ。できる場所は、ということですが。
- 福角： 設立当初に比べて、UDCKが対象とするエリアということを見ると随分変わっている部分もあるのですが、当初はTX沿線での活動の広がりということも期待されていたと思うのですが。
- 石井： そうですね、つくば大の方は関わりないのですか？
- 福角： 学生の設計スタジオに筑波大の学生が来ていることはありますが、それくらいですね。あとは住民の方で活動に参加される方がいらっしゃいますが。
- 石井： 砂川さんから言われたのですが、まちづくりスクールへの参加のきっかけがTXのポスターという人が結構多いと。
- まあ駅は影響ありますよね、秋葉原とか筑波とか。まあ鉄道会社がどこまで、というのがありますけど、そういうところをうまくできると良いですよ。
- 福角： 鉄道会社にできることということから一步新しいことをしよう、という動きが会社の中でどのくらいあるのかということと、担当された方が何人かいらっしゃることでそこから広がりができたこと等はありませんか？
- 石井： 正直なところ、まだUDCKがあったことでこれだ！っていう具体的なものは思いつかないのですが、でも鉄道会社も何かやっていこうというのはもちろんありますけど、どこの会社でもあるようにそういうのって、キーマンみたいな人がいて始まったりすると思うのですが、私の前任なんかもここに携わっていた人で積極的な人もいたと思いますが、具体的には思いつきません。ただ柏の葉でうちがやっているイベントだと自転車の活動があるのですが、あれが何かどうにかしたいというのはありますけどね。UDCKで自転車というスマートサイクルとか色々ありますけどね。何かできないかな、と思っていますけど。今年のサイクルフェスタでは、いつもだと撤去した自転車を利用してサイクリングするのですが、今回はメーカー品の新品を利用してやったんですよ、だからメーカーとのタイアップみたいな。そうすると地域

というよりはメーカーって感じですけど。そんなことを考えているのですが。それ以外にも地域とうまくできればなというのはありますけどね。

○ 福角：地域の自転車屋さんとかはどうですか？

● 石井：地域の自転車屋さんはスポーツ車を取り扱っているところがあんまりないんですよ。そうするとどこで売っているんですか？ってなると「流山の、、、」とかになってしまいうんですよ。
地域の自転車屋さんに自転車の乗り方講習とかを手伝ってもらったりとかがあったら助かりますよね。

○ 福角：住民の活動の自転車クラブの方とは何か一緒にできないですか？

● 石井：知らないのですが。

○ 福角：まちづくりスクールに参加された方で結成された活動で、まちづくりスクールの時に自転車を利用したまちづくりを提案されて、それが実現したような感じで、地域を自転車で回る活動です。

● 石井：それはよくやっているのですか？

○ 福角：ここ最近では停滞ぎみらしいのですが。これまではいくつかのコースをつくって活動されていたようです。

● 石井：サイクルフェスタの時も、通行の妨げになるといった苦情がやはり出た。マルシェもそうだと思うんですけどね。だから何でも良いわけでもないし。一緒にすれば良いわけでもないしね。コースもあんまり遠くでもだめだしね、最近は決まったコースになっています。もっと田中の方も行きたいと思うのですが。

○ 福角：そうですね、田中の「農あるまちづくり」というのが実感できるようになるとまた良いかもしれませんね。

● 石井：私もあの協議会に一応参加しています。あそこ雰囲気は良いんですけどね、まだ開発が半分もできていないしね、環境コンビニの取り組みが手詰まりな感じをしている。もう少しうまくできないかな、と感じている。貸し農園とか参加できる人が限られている気がする。もっと多くの人が参加できるように考えられないかなと思っている。

○ 福角：協議会でそういったことを話し合われているんですか？

● 石井：最近参加できていなくてわからないのですが。環境コンビニも、高架下を使ってもらってるので、多くの人に利用してもらいたいと思いますけどね。でもまだ人が全然いないし、ちょっと寂しい気がしますね。あとの辺の人があの農園に来るのかなって思う。近所の人には来ないだろうし（旧住民）柏の葉の人とかは車で参加されるだろうし。

○ 福角：筑波や東京から来る人で、電車で参加される方もいると思いますけどね。

● 石井：前にも協議会で話したのですが、あのポスターを田中とかキャンパス駅とかしか出さないんですよ、例えば都営住宅のある足立区とかに出した方が需要があると思うのですが。農具も靴も貸し出ししているし、電車で参加し易いしね。それはどうですか？という話もしたのですが。

○ 福角：どうでしたか？

● 石井：それはそれでそれっきりという感じですね。

○ 福角：話が変わりますが、これまでの柏の葉の活動において何か成果や課題といったものはありますか？地域への関わり方についてはこれからの課題になってきますか？

● 石井：そうだとはいえ、会社としてはどうか。借金も多いし、鉄道の営業も大変なので、会社としては余裕がない感じなんです。担当としては、もっとどういう風に関われるのかなってというのはありますけどね。他の会社の取り組みも参考にしながら。
直接まちづくりになるかはわかりませんが、例えば高架下に保育施設をつくるか、そういうことも良いと思うのですが。ただうちだけでできないので、どこか市が何かに貸して、ということだとおもいますが、そういうことを何かしらやった方が良いとは思んですけどね。ただうちの高架下はスペースが限られてて、可能性はいくらでもあるのですがちょっとね。流山おおたかの森の駅でも、アベニューという商業施設が入っているのですが、あそこも店舗があいたら、高齢者施設でも構わないと思うんですけどね。

○ 福角：そういう風に考えるようになられたのは、この地域を担当することになったことがきっかけなのか、それとも昔からだったのですか？まちづくりという言葉が捉える範囲も、それぞれの人の立場で考えるまちづくりも違うと思うのですが、それが会社の立場というよりも、担当者個人として、どうですか？

● 石井：それは会社でそういう意識がある人はそんなに多くないと思います。昔は色々な主体で連携するといっ

も、「地域連携」位のイメージで必要だよ、という感じだったことからのまにかまちづくりというようになっていた。あとまちづくりは、おたかの森なんかを見ると、市が主導している。森のマルシェとかも。それに比べて柏の葉では、市がもっと主体性を持って良いんじゃないかって思うくらいあんまりね。それはそれで良い面もあるかなと。あんまり市が主導しすぎるのも良くないかなと。たぶん市主導だと続かない気がする。ただ柏の葉もお金の面で三井さんの資力があるとか、そういうのも違うんだろうなと思いますけど。サイクルフェスタをやったときも三井さんにはかなり協力していただいているんですね。

○福角： そのような動きを見られていて、石井さんの中でまちづくりというものが身近になっていくような感じはありますか？

●石井： それはありますね。始めはやっぱね、面倒くさいとか、鉄道動かせば良いだろうという考えだった。余計な事はしたくないと。ただ今は、そうじゃないと思っています。

○福角： それはどういうことがきっかけでそう思うようになったのですか？

●石井： きっかけというか徐々にですね。色んな駅で色々な投げかけがあると、その中でも「これはやってみても良いな」と思うのがあって、それを社で話したときに「理屈がないからだめ」とか「やったことがないからだめ」とかということもあって、そういうのはいけないと感じる事があって。あと基本的に地元で行うもので、良いものは協力したいという思いもあるんですね。だから今は面倒くさいと思いつつも、話を聞いてみる、という感じですね。

○福角： 担当は何年に一回かわるのですか？

●石井： 2年くらいですよ。

○福角： 各地域の担当者への引き継ぎはどのように、どの程度行われるのですか？

●石井： そんなに引き継ぎはないです。もっと引き継ぎ時間をとるのが普通なのですが、1日とか半日という感じなんです。ですから、この地域も、UDCKに触れないわけではないけど、ほんの少しです。

○福角： では始めて担当になった時は「UDCKって何？」という感じでしたか？

●石井： そうですね、それはもう勉強しなければいけない。こういう地域なので、協力してあげてね、なんてことはないです。

事務的に引き継ぐ感じですよ。

○福角： ではどういう風に関わっていくかというのは、各担当者の方によるんですね？はじめにUDCKを知ったときは、どのようなイメージを持ちましたか？

●石井： 難しそうって感じた。東大とか千葉大とか。あと、始めはもう少しハード面のまちづくりという話だと思ってた。それで鉄道が行って何ができるのかな、と思った。

でも実際入ってみると違った。ハード面もあるけど。例えば自転車置き場とか。あれは何年も前に2階建てにしようという動きがあり、実際に予算まで考えていたが、市からダメだしが入って、それはUDCKも絡んでいて、見た目に対する批判だった。そのままでは普通のまちになってしまうというような。柏の葉はそういう場所じゃないでしょ、みたいな話が先生からもあったんじゃないですかね。

だからまあそういう絡みはありますけど。

○福角： イメージされていたよりはソフトの活動の方が大きかったという感じですか？

●石井： そうです。また特にうちはキャンパスタウン構想のメンバーには入っていないんですよ。オブザーバーで聞きには行ってますけど、あちらの方が少しハード面が強いのかな。

復習的に（紙を）もう一度見ますか。

—UDCKを捉えているか

申し訳ないのですが、そんなにUDCKに期待しているとか、どういうことをやっているかというのをわかっている人はあんまりいないですね。担当者としては巧み情報収集にしる、刺激を受けるにしる、うまく使いたいと思っています。正直なところ、たぶん他のところよりは要望が多いので、面倒くさいと思っている職員が多いと思います。

今置いてある電子掲示板も、誰かがやっていかないとだめなんですよ。もともとは置くことを想定してないので、紙のポスターと違って前例がなく、掲載料の値段も決まっていなわけです。だからそういう基準をつくっていかなければならない。他の鉄道会社でも広がっていくと思うし。

No	16 (1人)
日時	2010年11月26日11時~12時
場所	UDCK
対象	UDCKディレクター ●田口雅之さん
質問者	○著者

○福角： 田口さんがUDCKに来た経緯からお願いします。

●田口： 前田さんと仕事をしていた、（僕が前の事務所をやめた後にね）こういう仕事があるけどどう？って声をかけられた。僕が柏出身っていうのもあるしね。それで良い機会だから是非というのが始まりだね。

○福角： それまで北沢先生とは面識はありましたか？

●田口： ない。横浜の展開とかの活躍は知っていたけど、同じような仕事をしていたにも関わらず、僕個人は前の事務所で建築を中心に仕事をしていたからね。前にいた環境設計研究所としては、たぶん川崎の臨海でご一緒していると思う。あと北沢さんとうちのボスは知り合いだからね。

○福角： その時に建築ができる人を探していたという話があったのですか？

●田口： 前田さんから最初に打診があったのは、キャンパスタウン構想を1年間まず基礎調査をやって、具体的な都市像の検討だとか、そういうのをやっていくんだ。それで実際に絵が描ける人を探していたという感じだね。あと細かい話で言うと、CASBEEとかも始まっていたから、まあそういった都市と建築についてできる人という感じかな。

○福角： それでいつ頃来られたのですか？

●田口： 2007年の8月に日本橋で北沢さんとか丹羽さんとかと初めて会って、その前に一度柏の葉に来たな。それで8月の終わりからは週2位できてたかな。家で作業しながらね。まあ他の仕事も持っていたしね。それで10月位かな、フルタイムになったのは。最初は前田さんが週2位のボリュームだろう、と言っていたのと、着任してすぐはいきなり始まるわけではないから。

○福角： 10月からはほぼ毎日ですか？

●田口： そうね。

○福角： 前の事務所を辞めてからは、ご自分で会社をされていたのですか？

●田口： 会社ではないね。個人事務所だから。株式会社ではない。今もそれは維持しているね。だから肩書きがたくさんあるな。ディレクターになったのはいつだろう。年明けかな。絵を描きながら北沢先生と色々詰めていくな。それで対外的にもプレゼンテーションとかも多くなってきた時に、ディレクターの方が良いなという話になった。それまでは一スタッフかな。

○福角： ではUDCKに来てからはどのような仕事をされてきましたか？

●田口： 最初はやっぱりキャンパスタウン構想のための基礎研究的なものだよ。それで具体的には区画整理事業をやるための報告書（市とか県がつくったもの）はたくさんあって、ただそれはほとんど反映されていないんだけど。UDCKができて、広域の調査は都市環境研究所が頑張ってるんだけど、もっと空間に落とす部分—都市計画からアーバンデザインとか建築に落とす部分ではあまり手がついていなかったの、実際の現地調査をして区画整理の道路線形なんかを読み取ったり、ここには歩道がついているね、とかそういうことを読み取って、道を少し高質化しようとか、大学に至る道をこうしようとか、そういう話。

○福角： それは田口さんが考えた話をキャンパスタウン構想のミーティングの際に発表していたのですか？

●田口： もちろんその前に北沢先生とやって。その時は前田さんは忙しかったので、あまりいなかったかな。丹羽さんは勉強も兼ねて一緒に話していたけど。そうだね、前田さんとは都市分析的な事、都市の骨格のことについて前田さんとは議論したかな。あとは「緑園の道」—当時は「緑園の道」という名前はついていなかったけど、—大事だよとか、そんなことを北沢先生に話して、「緑園の道」、「学園の道」というのは北沢先生の言葉だと思うけど、設定したと。

○福角： それをキャンパスタウンのミーティングで決定するのですか？

●田口： そうそうそう。

○福角： 議論になりましたか？

●田口： ならなかった。北沢猛が必要なんだ、というもので決まったね。それに変なことを言っているわけではないしね。普通の当たり前のことを、当たり前に提示しているだけだからね。

○福角： 桜並木協議会についてはどうですか？

●田口：それはね、ほとんど状況わからない。僕が着任した時にはもうそれはありきで、もちろん当時のレポートは見たけど。ただその線+他に何があるかとか、強化するような提案をしたというのが最初の一本でしょ。それで緑園の道が決まって、基本計画を空間デザイン部会で進めていったという感じ。

県から民地を道路化する話がでていて、でも民地を誘導する以上は公共が良くならないと、筋が通らないでしょという、僕らにしたら普通で当たり前のことなんだけど、でもまあ齊藤さんが頑張ってくれて街路樹の整備だとか、舗装材の高質化なんてところを合わせてやろうよ、という検討をやったね。

○福角：みちはいつできるんですか？

●田口：去年基本設計をして、今年実施設計するんだと思うんだけど、ちょっと後退化してるね。やっぱり色んなしがらみが入ってきちゃって、単純に木を植えると管理が大変だとか、お金がかかるから木を減らしましょうとか。でもそこで、いやいやそうじゃないでしょ、目的は管理することじゃないでしょ、ということを書いていかなければならない。

○福角：それは田口さんの役割ですか？

●田口：まあそうだけど、三牧さんも同じ想いだし。あと空間デザイン部会の座長とか進行役の中心は鈴木先生（千葉大）だからね。

あとは田中かな。田中は元々北沢先生と前田さんが実行委員会に入って、農あるまちづくり実行委員会かな、あと上野先生も入っていたんだけど、いよいよ空間情報を整理していく、絵を描く段階になって、2年間やったね。もともと田中はURだから、デザインの検討とかはしていたんだけど、ガイドラインになることも視野に入れてね。一方で、どうやったら農あるまちづくりが実行できるかといったことを委員会で話し合ったりして。UDCKからは、環境コンビニみたいなものが必要でしょ、という提案をして、次の都市に実現したのかな。

○福角：協議会はいつごろ結成されたかわかりますか？

●田口：実行委員会は市とかURとか地元の地権者、あとは町内会長で構成されているんだけど、随分前からあると思うけど、農あるまちづくりというのをやり始めたのは5、6年前なんじゃない。

○福角：どうして関わり始めたのですか？

●田口：やっぱりUDCKがあるからじゃない。北沢先生や前田さんがどういう経緯で関わることになったのかはわからないな。市が連れて来たのかもしれないね。

○福角：他の担当したものはありますか？

●田口：それらがメインかな。

○福角：運営会議の進行とか、レジュメのまとめ役とかも田口さんがやられていますよね？

●田口：最初は前田さんがやってて、振られたんだよ。

○福角：でも全体の活動の流れを把握することができるのではないですか？

●田口：そうだね、ただそれが建築都市デザインの担当ディレクターがやるべきかという、怪しくて、砂川さんが着任したときは、彼女に任せた。確かに全体の動きは見えるけど、僕そっちの仕事じゃないから。UDCKとして本当はその全体の動きを把握して、まとめて、整理して、分析して、次の戦略を立てるということをしなければいけないと思うんだけどね。

○福角：単発のイベントに協力したとかはないですか？

●田口：本当に協力程度だよ。僕が地域の図とかハード的な情報をそこそこ持っているから、図面の提供とか、みこし祭りの配置図を検討するとか、その程度かな。

○福角：3の田口さんがここに来て良かったこととか悪かったこととかはありますか？

●田口：やっぱり人かな。北沢さんみたいな変ったアーバンデザイナー（変ったというのは、都市計画ってやっぱり学識的なところが大きいじゃない、それとは違って現場でやっていくというスタイル）は初めてここで感じて、何を学んだかというのははまだちょっとわからないけど。というのが一番大きいのと、あとは多分柏市以外の人でなんとなくでも地縁があるスタッフって僕が唯一なんだよね、そういう意味で、フラッと帰って来た出戻りっていうのもあって、受け入れてもらい易かったことかな。役所とかもそうだし。僕こういう口調だから乱暴なことも平気で言うからそのうちわからないけど、でもそれでも受け入れてもらえて。それは地元の農協とかもそうだし、行政もだけど。まあ父親が役人だったっていうのもあるんだけどね。あたりさわりのない悪くない役人だったっていう。だから「あ田口さんの息子さんですか」から始まってさ。石黒さんも当時の父親の部下だったから、最初からよくしてくれた。それでどンドンネットワークが広がっていったし、あとは中心市街の人も、期待をしている人もいるし、敵対している人もいるんだけど、どっちも気になるわけじゃない、こういうセンターができて、大学がこれだけ関わっていて。彼らは彼らなりに勉強してて、そこに僕みたいな地元出身者がいるとなると何かでどンドン繋がってって、そうすると

僕も地元で色々繋がっていくよね。それが一番メリットというか面白いかな。

○福角： UDCK外だけではなく、この中での出会いで、これまでの仕事とは違うところとか面白いところは何ですか？

●田口： 全然違うんだけど、僕の土壌として、元々いた事務所がアーバンデザインも建築もやっていた事務所だし、建築も都市の活動とかを気にしながらやるプロジェクトが多かったのね、作って終わりではなくて。だからその点に関してはあんまり変わらないかもしれない。あとやっていた建築も、極端なんだけど、300haみたいなものから50,000haの大きい施設まで幅広くあったんだけど、その大きい建物についてはボスがコラボレーションが好きで、照明デザイナーや家具のデザイナー、アートのキュレーターとかと一緒に建築を作っていたから、異業種の人とガヤガヤやって建築をつくるというのは肌で持っていたから、違和感はなかった。ただ成果という意味でいうと、そういう人たちが一緒に成って何かまちの空間ができたとか、しかけたというのはまだここできていないと思う。本当はUDCKの建てかえなんかもそういう発想でやっても良かったと思うんだけどね。ただどうしても自分たちのお金でこれを建てるわけじゃないしね、他の人のお金で建てているから。あとは時間がない、エイヤーでできた感はあるけど。でもまあどっちでもあると思うけどね。みんなで考えてつくるのと、取りあえず作ってから、徐々に変えていくのと。UDCKはどちらかと言うと後者だと思うけどね。色んな人が出入りするの、単純に楽しいよね。でも僕みたいな仕事だとなかなか検討はしたり、議論したりはするけど、実際に実現させようというところまでも時間がかかるし、やろうとなつてからも詳細の検討をしたり工事をして完成するまでには時間がかかっちゃうから、この3年（着任してから）で目に見える成果はまだ見えてないかもね。

○福角： 建築物としての完成は見えませんが、様々な活動の成果が見えることが面白いと前田さんがおっしゃっていたのですが、そういった感覚は田口さんもお持ちですか？

●田口： 面白いと思うよ。特に副センター長の立場だと、広く見て、束ねて運用していかなければならないと思うし。僕はポジションが違うから、本当はもっと建築とかの仕事をしなればいけないと思うんですけどね。ただちょっと引きずられてるよね。周りの活動に。

○福角： いいんじゃないですかね。ここで公民学連携でハード的にできたことはまだそんなにないですよ。も

う少し緑園の道なんかができるようになって違うんでしょうね。

●田口： そうね、道ができる時は小学校もできているから。

○福角： 小学校についてもう少し詳しく聞かせて下さい。

●田口： 小学校は、建物自体の計画はUDCKはしてない。当初丹羽さんとかが関わっていて、配置検討とかをしていて、それを市と教育委員会にこういう考え方でまちをつくっていかなければいけないんじゃないかと模型をつくったりしてね、それを1回2回やってたり、事例研究をしたのは知っている。ただやっぱり小学校ってハードルが高くてさ。やっぱり普通の小学校をつくらうとするじゃない。ハコとして。でもそういう時代じゃないのも一方であって、そんな中で、UDCKが公民学連携で意味があったかなと感じているのは、あの小学校を一般競争入札じゃなくて、プロポーザルにするところまで持っていたということ、お金だけで決めるのではなく、絵を持って決めさせて、それで設計者を決める、という今は普通のことなのだけど、そういうことを柏市はなかなかできないから、それが実現できただけで、結構レベルが上がるじゃない。その後デザインレビューというのかな、緑園の道とか周辺の道とかの関係とかを提示しながらこういうところを配慮するべきだよ、っていうのを、主観じゃなくて、こうあるべきだよ、というのが議論できていたところが良かったと思っている。ただやはり全部実現しているところまではいかないのと、ハードと合わせてうちが展開しているカレッジリンクもそうだし、東大だったり千葉大だったり高校もあるんだから、教育の施設として協働してやっていこうよ、というのはこれからかな。

○福角： 設計者もそういう場にはいるんですか？

●田口： うん、建物の部分はね。設計者が模型を作ってきて、色々設計者の考えを説明してもらったりね。まあ事業者は教育委員会だから、そっちの顔を見て、そっちと打ち合わせしたものを、UDCKで提示してやった時に、教育委員会がうちの考えはこうです、と例えばフェンスは必要ですかそういう話をするから設計者はそんなに機能しなかったかもしれない。

○福角： プロポーザルをやって、UDCKが小学校部会で色々説明しなければいけないという条件になっていたわけではないですよ。

●田口： 始めは柏市が段取りをして来たんだよね。

○福角： 来なくてもよかったですか？

● 田口：でも来るよ。設計者もプロポで手を挙げてくるわけだから。興味のない人は来ないし、楽しんでいたかはわからないけど。ただ柏市がまだまだだなど思うのは、そういうプロポーザルの過程をさ、きちんと公開しなければいけないと思う。UDCKも努力しなければいけないと思うんだけど、プロポーザルの評価の過程と、デザインレビューの過程の公表ね、今回こういう案がでて、議論したというのを積み重ねていかないと、なかなか周りは周知しないよね。それは小学校もそうだし、この地域の景観重点地区というのも全部そうだけだね。

○ 福角：キャンパスタウン構想の中に色々な部会があるじゃないですか、その部会の構成員はどうやって決めるんですか？

● 田口：キャンパスタウン構想の部会自体は、膨大な構想でしょ、膨大な構想だけれども、できるところからやろうというので、部会って7個ぐらいあるのね、でもそれ以外のプロジェクトがすごいあるのね。市とか三井とか大学とかがここでやっているのが。基本的にそれらはキャンパスタウン構想というところに集約できるよね、と。場合によっては個々のプロジェクトもキャンパスタウン構想というのがあって、その中で自分で位置づけて、補助金をとったりして、それで補えないものを空間デザイン部会（7部会）でやっているわけね。要は放っておけば誰もやらないもの。ただ基本ディレクターにはそれぞれの色があるから、空間関係のものならば僕が関わったり、教育とか市民活動系のもは宮奈さんが入ったりとか。それは適宜決めてやっている。

○ 福角：例えば空間の話で、宮奈さんが一緒に議論することとかはあるんですか？

● 田口：あるある。例えば最初は柏たなかの農業系の部会もあって、最近会議が多いからやめちゃってるけど、あれなんかは空間を伴うから当然僕は関わっているんだけど、やっぱり市民活動とかも関わるから宮奈さんというかNPO支援センターちばの視点も入れてもらって、喧々諤々やっています。でも以外と空間デザイン部会は難しい話が多いからか、宮奈さんに出てもらったことはないかな。

○ 福角：空間を決めるプロセスに市民が関わる余地はないですかね？

● 田口：ケースバイケースじゃないかな。

○ 福角：このまちで市民を巻き込んでと言っても、既成市街地ではないので、景観の問題を何とかするとかっていったことはないですし、カレッジリンクの卒業生が

やっているような生け垣プロジェクトの関わり方がかなと。

● 田口：公共空間ってどうしてもお金がない時代だから、市民の手を狩りたいというのが行政の一般的な発想で、それをすぐボランティアっていう発想で位置づけようとするんだけど、僕らが言っているのはそういうことではなくて、検討の段階から市民を入れて、市民が自分たちで例えば木を選んだらそれを管理したくなる可能性は高くなるじゃない、落ち葉が落ちて文句を言わない可能性が高くなるじゃない、そのプロセスを入れるべきだろうと。行政がマスタープランをつくるときに市民参加しました、タウンミーティングやりましたっていうのではなくて、一緒に座ってやるのが理想的。ただ難しいのは、市民って色々いてさ、うちの庭の前だけきれいにしてよ、って陳情するような方もいるし、UDCKに出入りしたりカレッジリンクに参加している公共的な市民もいるし、それをどういう風にプロセスに巻き込んでいくかは難しい。田中なんかでは、昔から部落意識が強くて集落単位の結が強い地域だけど、そういうのをうまくつかって、そういう人たちが最初から区画整理事業の中でどういう空間を担保していくべきかとかね。まあ景観の話なんかをするときも、町内会長さんだけだね、入ってもらって、想いを巧く絵とか字とかに落としてガイドラインをつくることで、何とか想いを担保するガイドラインとして機能しないかなという試みで始めようとしているけどね。

○ 福角：駅前プロジェクトなんかはどう見えていますか？

● 田口：あれは実は難しく、僕もどう関わっていくかが難しく、色んな捉え方があるんだけど、ちょっとずるい大人の見方からすると、北沢さんも言っていたけど、駅前の完成度は低いじゃない、でもこれは三谷さんという有名なランドスケープアーキテクトがデザインしてくれて、お金がない中でやってくれたわけじゃない、ただまあ完成度が低いと。それを高質化しようとなると、でもそれは2次整備3次整備になっちゃうから投資する理由が行政としてはないわけであって、許可する判断が難しい。そういう中でああいう提案が出て来て、今のままだとまだまだ足りないよねっていうことを理解してもらおうツールにはなるよね。ある程度的確にこの高架下の問題だとか駐輪場の問題だとかを盛り込んでもらえてるから、やっぱりこれは問題でしょと、そしてそこに市民の意見も入れてくれるしね。だから問題点をみんなで共有して、じゃあどうしようという議論のスタートにはまずなると思う。そこまでは僕も持っていけるんだけど、あの絵が良いか悪いかとかそういう話はまた別かな。ただ一生懸命やってるから、具現化させたあげたいという

想いがある反面、僕もプロ意識があるし、あとは三谷さんがデザインしたものを何も考慮していないところとかはある意味問題かもしれないと思うし。まず三谷さんのコンセプトを読み解いてさ、どう高質化していくかの議論とかさ、あとは細かい話で言うと、たぶんあれはアーバンデザインにはなっていないんだよ。デザインしすぎじゃん、全部が。だからなんかそのバランス感。地としてのデザインを本来はしても良いのかなと思う。例えば周りの建物がデザインされているまちで、地べたまで○とか△でデザインされていたら気持ち悪いよね、ひいたデザインも必要だろうなと思う。そういう位置づけかな。僕の中で。

○福角：ハードの部分に市民が関わっていくことができる初期段階というか、きっかけになると良いなと思っているんですけどね。

●田口：あれで吸い上げられているのは一般の利用者というカマスの意見だよな。戦略的に何かを仕掛けていくときに、どういう市民を選んで、ある意味企業市民も含めて千葉大だって東大だって三井だってこのまちでは市民でさ、企業市民としてこのまちがどうあるべきかを考えると、UDCK自体それをはじめていると思うんだけどね。それはちょっと目立つ市民だけださ。

○福角：もう少し何も知らない人にとってもオープンな場所になると良いと思うのですが。

●田口：そうだね、まずはさっきも言ったようにプロセスを開示することだね。あとはこの間環境フォーラムをしたけど、50点は取れたと思うんだけど、行政とかも開発事業だからあまり手をつけたくない（かもしれない）自然環境というのをあえてテーマにして、それを調査したのは市民で、それを報告してもらって、一方でUDCKが抱えている空間デザインの課題とか、プロセスを一応その場で報告して、それを横張先生がまとめてくれるっていうプログラムにしたんだけど、開発と自然保護の関係って難しいからさ、どうしてもバランスを図っていかねければいけないんだけど、その落としどころをああいう市民参加でやるっていうのはあるかなと。スタートとして。その後、空間部会に松清さんとかパネラーだった青木さんとか自然の目を持った（こんぶくろ池の里山隊もあるかもしれないけど）人に入ってもらって。ある意味では僕らなんかより専門性が高い市民だし、そういう人たちとはどんどん協力できるおと思うね、まず。他の市民は課題だよな。逆に柏の中心市街地なんかは一般市民、商業者が中心となってまちを進めている途中だからね。こっちでもできないことはないと思うんだけど。

○福角：マンションだと難しいですよな。

●田口：マンションの怖いのは、あるテーマ性をもって、つまりはプロモーションして、柏の葉ってこんなところですよ、と。昔だってそうだな、大規模開発をするとある30代がわっと住んで、高齢化してみたいな問題が出て来ているけど、時代が変わって、あるイメージでまちを売っているじゃない、だからそのイメージを共有した人がここで何割か住む訳じゃない、そうすると結構価値観が偏るんだよね。その偏った価値観の人と共有してものを作っていくのが良いのか、先を見ながらつくっていくときに専門家だけの方が良いのか、そこにどんな市民が入れるのかはちょっと考えなければいけないよね。多分都市の人たちは口ハスみたいなイメージで住んで、だからかしはなとか色んなことが展開できているんだけどさ、これからどういくなかというのね。もっとアカデミックな人たちが2番街に住むかもしれないし。そのバランスが図れるのはもしかしたら専門性がないとだめかもしれないね。

○福角：私が今回論文で取り扱う活動は5つなんですけど、カレッジリンクとまちづくりスクールに参加している人は、クラブ活動には満足できないとか。

●田口：今はまだサークル活動だからね。

○福角：でも意識としてはそれではだめで、市民同士が繋がっていかねばいけないと思っているらしいです。

●田口：カレッジリンクの修了生が企業しようみたいな動きはないの？

○福角：卒業生で社団法人化しようという動きにはなっているようですね。

●田口：そういうのがでてくれば、それを僕らもサポートしたり、補助金取ったりとか。千葉大の仕事かもしれないけど。鈴木先生とよく話しているのは、これからどんどん緑を推奨していくときに、まずは法整備、アメとムチで言うとアメは税制優遇などの制度を柏市とつめていくのと、あとは、ガイドラインをつくるもの、あとは楽しんで管理をしてくれるしくみを模索するのと、そういう人たちと協働していく。それはボランティアである必要は全然なくて、人件費位で楽しんで動いてもらえるとか、そういう仕組みを考えなければいけないと思う。

○福角：今カレッジリンクは基礎コース、専門コース、カルネットという3段階構成になっているらしく、その動きが活発になってくると良いと思います。

●田口：はやく住宅をつくれば良いのにね。カレッジリンク自体がそれを含めてなんでしょ、本来。まあ学生がい

ないっていうのが大きいんだもんね。東大の学生も単位になると良いのにな。

○福角：始動期と現在の運営体制の変化についてお聞かせ下さい。

●田口： やっぱり始めの3年はプロモーションがメインなものと、基礎的な調査—キャンパスタウン構想の作成はその調査のアウトプットなわけだけど、北沢さん自体は対外的には2年頑張る（本人は3年、5年をイメージしていたかもしれないけど）と言いつつしていた。だから前田体制の時は、柏の葉という場所が今ホットスポットなんだというのを世にしらしめる。そうすることで投資効果が期待できるから、開発事業だからね、ある程度みんなの注目が上がってこないとも実現しないからね。それをやって、ある意味全てのプロジェクトがプロモーション的なプロジェクトを担っていた部分が大きいと思うし、あとはブラップジャンパン（広報）みたいなところが座ったことで、彼らが座った瞬間に発進力—メディアに対する発信で、どんどん取り上げられる様にもなったし、そのおかげなのか海外からの視察が増えたりとか。だから最初の3年のプロモーションをしっかりするという点に関しては成功しているのではないかと思う。それは前田さんが頑張ったんだと思う。もう一つの基礎調査も、キャンパスタウン構想を2年かけてつくって、課題なんかをみんなでも共有して。そこに市民というのが抜けていたかもっていう部分もあるかもしれないけど。だからキャンパスタウン構想ができた時に北沢さんと話していたのは、「そういえば社会福祉とかの視点が抜けていますよね」って言ったら、「それは次の宿題だな—」って言ってたけど。でもやっぱりああいう構想がまとまることで、課題が共有できて、みんながなんとなく寄りかかりながら、使いながら説明をしたり、お金をとってきたり、町内で口説いたりできるといのは大きな成果だね。で、僕は最初の3年は十分だと思っていて、これからは三牧さんたちともよく話をしていたけど、やっぱりそれを実行しないといけない3年になっていて、一方で専門家として斜めから見ると、プロモーションばかりじゃ、って言う人もいるのね、何が悪い？って僕は言うんだけど、そのプロモーションばかりだったものを、どんどんアウトプットというか地に足がついたものに変えていかなければいけない3年だと思う。だから教育系のカレッジリンクだとかまちづくりスクールだとかサイエンスカフェだとかの個々の展開を、三牧さんなんか結ぼうとしているじゃない、それを例えば小学校を巻き込んで結ぼう、とか。そういうのを戦略的に行う。それが三牧体制の特徴なんじゃない。なんとか今までぼんぼんつくったものを、ネットワークさせて、地に足がついたものにしよう

と。場合によっては中田さんなんかやろうとしているエリアマネジメントなんかもそうかもしれないよね。とにかくいっぱいできたものを、あるエリアマネジメントというくりの中で持続させようとしたり。と思ってたんだけど、また2年後に東大に入るといって、また引越し騒ぎか、、、というのがちょっと心配だね。体制も東大に入るといって、エリアマネジメントを切り離すサポートや協力はするにしても、主たる目的はUDCKがシンクタンク機能がまだまだ弱いからそれを強化するのはこれからの流れになると思う。その体制づくりがまだまだ検討しないと。法人化もそうだけど。そっちで結構パワーを使わなければいけないかもしれないね。とにかく今後は市に対しても構成団体に対しても、専門性があるってというのがまちづくりセンターとは全然違うところだから、戦略を持ってしかける側にどれだけできるか、かな。実証実験なんかもそうだけど、意図を持ってやれないと。その体制をつくらなきゃだめなんだよ、きっと。

○福角：専門性がある人の中での「公民学」って結構できていると思うんですけど、一般市民の人の人にとってはそこに入り難いじゃないですか、だから公共施設みたいな誰でも入れる機能と一緒にいると良いのかなと思います。

●田口： そうだね。でもね、ここ（新UDCK）自体の計画は街区の角じゃない、例えば隣の敷地とはデッキと繋いで今事務所の横に庇がついているのは、その後ろにくるだろう施設との関係とかそういうことを考慮してるからだと思うよ。UDCK自体がたまり場になるのは、情報共有の場としては担いたいけど、一方で専門性は担保したいから、そのせめぎ合いが1つのハコでやっているからすごく難しく、クラブ活動も交流という言葉でくれば、まちづくりなんだけど、斜めから見るとやっていることは市民サークルだね、それがUDCKのホールでやらなければいけないことかって言うとなんて難しく、でもあれをきっかけに来てくれてUDCKの活動を一つでも二つでも焼き付けてもらおうというのも戦略としてあるしね。1つのハコだと難しいね。

○福角：活動している様子を、そこら辺を通る人が見ることも良いかなと思うんですけどね。

●田口： 僕なんかは前のUDCKの方が迫力があって、昔は建物が真っ黒だったし、まさに北沢猛があそこに立っているみたいな感じだったんだよね。（まあ先生が白くしたいとって白くなったんだけど）やっぱりそういう面も欲しいよね。そのバランスだよな。当時はPLSができる範囲でのしかけだったのかもしれないけど。

- 福角：でも意識の高い市民の方は、入り辛くても、何の施設なのか確かめるために入る人もいるみたいですね。特にまちづくりスクールとかカレッジリンクに参加してる人からはそういった意見も聞きます。
- 田口：それはそれで良いんじゃないかって思いますけどね。そういう人こそどんどん参画して下さい、だから雰囲気としてハードルを上げるって言い方もあるかもしれないし。ただ少なくとも東大の建物の中に入ったら今より入り辛くなるし、エリアマネジメントは切り離していくだろうから、なおさらクラブ活動をUDCKで展開していくことはイメージできないじゃない、それを割り切りと言うのか戦略と言うのかはわからないけどね。もっと学生が来てても良いと思うけどね。市民に負けちゃってるもんね。
- 福角：駅前に出来ると全然違うと思いますけどね。ちょっと遠いですからね。空間によって人間の行動がかなり左右されますからね。
- 田口：そうだね。

No	17 (1人)
日時	2010年11月20日17時~17時半
場所	千葉大学
対象	千葉大学 ●野田勝二先生
質問者	○著者

●野田： 私は基礎コースの講師から入ったのですが、基礎コースを修了した人がさらに次のステップで学ぶという「場」を用意しなければいけない。ということで、専門コースを立ち上げています。専門コースと基礎コースの大きな違いは、基礎コースで環境・健康・食について、広く浅く学んでもらい、専門コースでは、どれかに特化した一要素にプロジェクトワークに近いもの、実際のまちづくりに役に立つようなアウトプットを出してもらうというのが専門コースです。

○福角： アウトプットが違うのですか？

●野田： 違いますね。基礎コースではそういったものは求めておらず、まずは基礎。という形なので。専門コースだと何か提言だとか、まちにこういうことが役に立つとか、それをまとめてもらう。

○福角： それは毎回違うんですか？

●野田： 毎回違います。毎回違うテーマをたてて、やっています。

○福角： 最終成果物は？

●野田： 今日やっていた生け垣のプロジェクトも成果物の一つです。毎回違いますが、グリーンフィールドの時は、グループワークで行った後にコンセプト案をつかって、その後におこなったシンポジウムで各グループの案を一つにまとめてもらった。公の場で出してもらいます。それは、カレッジリンクの受講生が千葉大学に対して提案を行うというもので、それを千葉大学が受けるという形で発表しています。

だから色々な回があって、他には養生訓カルタですよ。養生訓というのをつくろうじゃないかと。健康について勉強しましょうということで。これは、受講生がここで学んだことを地域に役立てるためにはづしたら良いだろうということから自ら考えてできたことが、カルタにしようということだった。カルタによって普及させたら良いのではないかと。そして話し合う中で、カルタというのは、使う場面がとても限られているので、カルタ冊子というものにしようということになった。カルタな

んだけど、本みたいにして、気軽に読めるようにしている。

○福角： 例えば、カルタのプロジェクトと、生け垣のプロジェクトというのは、今のお話を伺っていると、専門コースの修了生がさらに、実現したい、もっとやりたいということに対する運営側の受け皿になっている気がして、基礎コース、専門コース、カルネットの活動というように3段階になっているのかなと思ったのですが。

●野田： そうですね。今は3段階ですね。ただ将来的には変わるかもしれない。大学としては、基礎→専門→大学院でもう一度勉強しようという人が入って来てもよいな、と思っています。そこから研究という分野に移る人もいて良いかなと思います。またはもう本当にまちづくりとか市民活動に今のようにシフトするのも良いですし。将来的にはカルネットも社団法人とかにしようという話も出ている。近いうちにそうなるかもしれません。

○福角： カレッジリンクが対象としている「市民」というのはどのくらいのエリアを指していますか？

●野田： 基本的につくばエクスプレス沿線をイメージしていますが、遠いところから言えば横浜から来ている人もいたり。埼玉から来ている人もいますね。

○福角： 広報活動の仕方としては、市内やTX沿線という感じですか？

●野田： そうですね。まあでもHPにも出していますから、どこからでも来ようと思えば来れますけどね。広報を配っていないところから来る人もいますからね。

○福角： カレッジリンクとUDCKの関わりについてですが、カレッジリンクがありますよ、とか広報活動の場所とか、参加者同士の交流（紹介）とかなのかな、と思うのですが、何かイベントなどを行ったこととかはありますか？

●野田： シンポジウムなんかは何回かやらせてもらったけど。UDCKって、私のイメージだと、まちづくりのハブ的なイメージがあるんですけど。理想を言えばカレッジリンクの修了生が、UDCKがハブの中心にいるんだけど、そこについている活動を主体的に活躍してくれるようになるのが理想。その人材を育成するのがカレッジリンクかなと、位置づけています。ここはグループワークを中心に必ずやるし、プレゼンテーションも課しているので、人の意見をまとめるということはずごく勉強になると思います。要するに、自分の意見だけではなくて、色々な考えの人がいるということ認識して、それをまとめて一つの方向性を持っていくということ、非常に勉強する場なので、それはおそらくUDCKなんかがコアに

なって動かしている色々なまちづくりの活動の中心になっていけるのではないかと考えている。それがあいながら、人のつながりですとか、カレッジリンクを紹介してもらえらる広告、宣伝の媒体としてもUDCKはあるのかなと思っていますけどね。だからまちづくりスクールなんかはカレッジリンクの修了生が行ったりしていますよね。

○福角： そうですね。とても多いですね。積極的な方というのは、まちづくりスクールにもカレッジリンクにも参加されていて、繋がりがあるのだな、ということが感じられますね。

●野田： もう少しね、まちづくりスクールだけではなくて、色んなところには行って行けると良いなと思うんですよ。

○福角： 学習プログラム以外の活動にはやはりまだあまり広がっていないですね。違う層の方が多いですし。

●野田： まだそこまで行ってないですね。カレッジリンク自体も、将来的には、修了生が運営していけるようなことは考えています。教員がコーディネーターはやりませんが、そのサポートで。

○福角： 始めはお手伝いスタッフから、徐々にという感じですか？

●野田： そうですね、最終的には細かい調整だけこちら（大学）でやって、コーディネーターまでいけたら良いなと思っています。

○福角： 企画はどうですか？

●野田： 企画はまあ人脈とかもありますので、一緒にできたら良いなと思いますけどね。

○福角： まちづくりスクールではスタッフに住民の方も参加して頂いていますが、まだお手伝いスタッフの段階なので、企画をやりたいという方も出て来ています。企画から関わられるようになると良いなと思います。

●野田： そうですね、その予備段階として、今日の生け垣とカルタというのは、完全に企画から入っていますよね。勉強するだけではなく、勉強したものを地域に還元しなければいけませんよね。ただ勉強するだけだったら自己満足で終わっちゃう。だからその部分は自分たちでやってもらう。大学はそれをサポートするという感じですね。今日みたいに会議をすとなれば、場所を提供します。

○福角： そうすると、ステップが上がっていくに連れて、何度も参加してもらうことが重要になってくるので、リ

ピーターを増やすことも考えなければいけないと思うのですが、その辺に関して何かお考えですか？

●野田： 今のところまだそこまで考えていませんね。専門コースは毎回テーマを変えているので、気に入ったテーマがあれば受講して下さい、という感じなので。今日生け垣に来ていた方の中にも、今回の専門コースはテーマが合わなかったで、こないという人もいますし、それぞれ皆さん興味がありますからね。それは特にやっていませんけど、バランスよくプログラムは組んでいるつもりです。

○福角： これまでの成果と課題について教えて下さい。

●野田： 成果は、ようやく動き始めて来たというのが正直なところで、時間がかかるなど。こちらも慣れていないし、受講生もこういったプログラムははじめてだし、どうして良いのかわからないですよ。ですから最初の方が一番大変だったろうと思いますね。そういう方もようやくカルタをやるとか生け垣について主体的に企画・計画の段階から関わっていくということがようやくできるようになってきたので、その方々が動き始めると、次がついてくるのではないかと思いますね。それが1番。その人たちを動かす事ができたということが成果ですね。小宮山先生も言ってたけど、人生80年、90年で設計していかなければいけないんだという話をよくしてますよね、だからやっぱりその辺が主力になっていくと思うんですけど、その人たちがもう1回勉強して、その人たちが何を考えているかって、やはり社会の役に立ちたいという思いがあって、私はここ以外でも色々活動していますけど、一緒に関わっていると、社会に役に立ちたいという人が多いので、その場をうまく提供するという事ですよ。それがこれからのポイントかな。ようやくその人たちが、かなり主体的になれるところまできているので、それが途中経過であれ成果だと思いますね。

そして課題はたくさんありますけど、まずは、大学の一番苦手なところでもあるマーケティングですよ。特にうちの大学みたいところは、苦手なんですけど、受講生を集めるための宣伝活動というのは非常に苦手なんです。これはもっとやっていかなければいけないなと思いますね。修了生の口コミだけでは限界がありますよね。そこはもっとしっかりやらなければ。これがおが1番の課題ですね。

それから受講された方の感想なんかを見ていると、結構満足度なんかは高いので、リピーターの方が非常に多いんですよ。そう考えるといかに広報していくかというのが課題かなと。

あとは大学内の問題では、こういうことができる教員がなかなかいない。今専門コースを動かしているのが、私

と徳山先生の2名だけなのですが、専門コースはかなり負担が大きいので、もうちょっとね。専門コースはその後のプロジェクトも関わっていかなければいけないので、それも考えるとその辺の人材が課題ですかね。

だからそこら辺に修了生が入ってきてくれるとうまく回るんですけどね。

あとは広報はお金の問題もありますね。広報ってお金かかるんだっていうのが大学はようやくわかったという感じですね。ちょっと収益的なこともこれから考えていかなければいけないだろうなと思っていますね。

○福角：今は受講料だけで運営されているのですか？

●野田：はい。だから広報活動を今はUDCKなんかでもやってもらっていますけど、これを大学だけで宣伝から全てやるというと、そんな予算はないので。授業料だけではできないですね。人件費で終わってしまいますね。あと一つ成果として、大学の本部もようやくこういった活動について注目してくれるようになりましたね。何か柏で変なことやってるぞみたいな感じだったけど、最近はカレッジリンクっていう不思議なプログラムをやっているところから、かなり評判が良いみたいだけど、どうやってやっているの？みたいな話になっている。将来は、大学としてこういう講座も大切になってくる。これまでの公開講座というのは、大学の「知」を提供するだけだったので、これからは一緒にむしろ市民が主体になって「知」をつくっていこうというスタンスなんです。

○福角：それはどういう風なことがきっかけで、伝わるようになったんですかね？カルネットのように次のステップへと進む人が現れたりしていることですかね？

●野田：そうですね、あとは視察に来て実際に受講生から話を聞いたりしてね。ここにもう一つカルタの冊子ができるとか、生け垣のプロジェクトでおそらく図鑑のようなものができると思うのですが、そのような具体的なアウトプットがでてくると、また全然違ってくると思うのですが。特に古在先生が提唱する「市民科学」というのは、そういうところから出てくるだろうなと思うのですが。

○福角：カルネットの動きについてももう少し詳しくお伺いしたいのですが。

●野田：動きというか、現在の問題についてですが、結構高齢の方が多いので、若い人が入ってきて難しいというのがあるんですよ。高齢の方とうまくチームをつくって、コミュニケーションをとっていくことが苦手な若い人は多いので、カレッジリンクには来たけど、お年寄りばか

りのところにはちょっと行きたくないなという人もいて、その辺がカルネットの問題なのですが。将来的にどうなっていくかについては今は何とも言えないのですが、社団法人に移行しようかという話もあるので、そうなるるとまた話が変わってくると思うし。そうなるよりもオープンになってくるのか、よりクローズになってくるのかはすごく難しくなってくると思うのですが、できたらオープンな方でいきたいと思っています。どういうふうにつくっていくかというのはまだ読めないですね。

イメージとしては、カルネットという社団法人の中に色々なプロジェクトがあって、みたいな。例えばかしはなプロジェクトってありますよね、それをOBの人に運営を任せるとかね。社団法人になればお金も預けることのできる。例えばカルタ冊子なんか販売して収益事業として行うとか。あとは、レイズベッドの管理なんかは障害者の方にやってもらうとか色々なことが考えられると思うので、どうなるかはわからないが、オープンな方にいけば良いかなとは思っています。

○福角：先ほど少しお話が出ましたが、若い方が多く参加しているような、クラブ活動ものと、こういうものが組合わさる仕組みができてくるとまた違うのかなと思います。

●野田：カレッジリンクに来ている若い人がその辺をうまく繋ぎ役になってくれると良いのですが。理想的ですよ。まあ4年目にしようやく動き始めたなという感じがありますね。

○福角：それぞれの活動によって対象としているエリアというのはやはり違ってきて、そのあたりは面白いなと感じています。

●野田：そうだね、行政はあくまで行政の単位しか考えていないしね。まあでもカレッジリンクもそのうち行政を無視できなくなってくると思うのですが。市民が行政を使いこなせるようにならなければいけないと思うんだよね。今はそういう過渡期なのかなという感じがな。

No	18 (1人)
日時	2010年12月9日17時～18時、13日14時～14時半
場所	新UDCK、NPO支援センターちば
対象	NPO支援センターちば ●小溝敏央さん
質問者	○蛭川さん、著者

【1回目】

- 蛭川： マルシェ誕生のきっかけ、経緯からお願いします。
- 小溝： このまちができたときから、ということで、マルシェがあるまちにしようという考えがあったと思うんですね。UDCKの中でマルシェは、交流ということに位置づけられていて、あとはアートということですよ、最終的に青写真がある中で、そういう住民の交流の場であり、アートとして1本の並木道ができるという。そこに地域のお店であったり、住民の交流の場があったら素敵だということがはじまり。
- 蛭川： 一番始めは2008年ですよ？
- 小溝： 5月ですね。私はまだいないのですが、東京の有名店を連れてきてゆったりしていましたよ。三井さんの販売促進の広告費がうちに来ているんですよ。こういうまちだってことをアピールしたいと。
- 蛭川： マルシェって市場じゃないですか、でもただの青空市場とは違う点というのは何ですか？
- 小溝： それはアートという切り口であったり、マルシェの五か条というのがありますが、地域性だったり創造性だったりね。
- 蛭川： 出店条件は？今までは曖昧な基準できてますよね。
- 小溝： 2月からは地域に密着した顔の見える人たちで、構成していこうと思っています。今まではフリマと一緒にやっていなかったときは、数の問題、面積がないとお客さんも来ないし、全く新しいまちで有名なお店でもなければ集まってすらくれない時期があったんですよ。2009年の夏が最悪で500人来たかどうか。最初は10店舗から始めているんですよ。あの時期の人は本当によくやってくれたなって。本当に売り上げをど返して、残ったものをスタッフにあげてくれて。そういう協力をしてくれていて。

- 蛭川： 今は何店舗ですか？
- 小溝： 今がピークでマルシェが43店舗＋フリマが145。過去最多。
- 蛭川： 出店店舗を増やす方法は？
- 小溝： こちらからも地域のお店さんとかにアプローチもかけたのですが、結構だめで、すごい苦労したんですよ。案外こちらが望んでないところから来たりも。12月に関しては10店舗くらい向こうから来たいというところがあった。
- 地域住民が繋がって、交流の場になって、柏の葉を、イベント会社がアピールするのではなく、地域住民が地域を紹介するみたいなものが、普通の市場と違うと言えるのではないのでしょうか。東京だと、必ず人が集まっている場所に有名店が来て集まる雰囲気があるとおもうのですが、うちは有名無名関係なく、ここで柏の葉ドッグというものが発生してたり、お店同士のコラボがあったり。お店がお店を連れてくるのがすごく多いのです。出店者で一番多いのは口コミなんですよ。そこら辺も手応えにもなるだろうし、まちづくりをやっていることだと思う。それがここのマルシェの良いところかな。
- 蛭川： お店だけがあるだけじゃなくて、売り物だけを売っているのではなく、まちびとオンステージがあったりクラブ活動を紹介していたり、柏の葉の見本市みたいになっていますね。
- 小溝： もともとスパイラルさんが、柏の葉の水準というかアート水準みたいなものを決めていったと思うんですよ。やっぱりそういうものがこのまちということで、柏の葉はこういうまちだって決めたかったんだと思います。やはりワークショップはそういう意味でも意味があると思いますし、柏の葉らしさというのをマルシェというものを通じて、お互いに知り合えるというか、考えたと思うし、来た人も柏の葉を感じてもらえるとおもう。
- 蛭川： もともとマルシェは住民の運営にシフトしていきたいというのがあったと思うのですが、マルシェクラブはどうなりましたか？
- 小溝： 最近はサポーターも増えてきて、最初からいる人もいるし、それこそ僕より前からいる人もいますし、北沢研の尾瀬くんが来てくれて、その後に東大生が来て、他にも美術関係の子がきて、まちづくり系の子も来て、あとは柏市の公務員になりたいという子も来て、ここ3ヶ月くらいはだいたい10人くらい来ているんですよ。
- 蛭川： その人たちはサポーターなのですか？

●小溝：そうですね、マルシェ学生企画会議というのが7、8月頃にできて、最初は結構こちらからお仕事をお願いするという状況になっていたんですね、でもそれだと今後も続かないなって思って、やはり学生が思ったことを自分たちの手で実現して、それをサポートする側に回らないといけないなと思って。そういうところはクラブ活動とかも同じだと思うのですが。それで企画会議を作って、月2回か3回位集まっています。今は10人位ですね。

○蛭川：例えばどういうことですか？

●小溝：12月マルシェだったら、ひげサンタマルシェを考えたりとか、ウォークラリーを考えていたんですよ。マルシェクラブという名称はやめて、企画会議にしたんですよ。今ホームページつくっているんですよ、マルシェの。インターンか当日サポーターで募集して、インターンはそういう形で企画から。まちづくりを体験したり、制作物をつくったり。

○蛭川：マルシェって今は出店料を払って、設備は実行委員から借りて、サポーターが手伝うという感じですかね。

●小溝：かなりサポーターがいなかったらまわらない状況になっている。設営から電気配線、とか抽選会の準備、運営など。

○蛭川：サポーターは無償ですよ？

●小溝：交通費だけです。

○蛭川：そのサポーターのモチベーションはどこにあるんでしょうね。

●小溝：聞きたいですね。まだまだ聞けていないですね。今度マルシェの忘年会に15、16人来るので、それでも来れない人もいますので、25人くらいはいるんじゃないかな。

○蛭川：さっきの10人は？今まで述べは20、30人ということですか？

●小溝：そうですね。たまに高校生が来たり、大学生、僕くらいの年齢の方も来たり。東京ボランティアというボランティアで有名なところにも募集をかけていて、一人繋がればやはり広がるので。今後は柏の葉という地域性を探しているところでもあるので、地域に根ざしていきたい。

○蛭川：これまでは知ってもらうことが大事だったりしましたが、これから精査していくといえますか。

●小溝：東京に頼っちゃいけない。地域性にフォーカスしないと。

○蛭川：手応えはどうですか？

●小溝：そうですね、最近は6000人位来てますね。今回4会場でやりましたからね。

○蛭川：例えば出店者の話を聞いてどうですか？

●小溝：すごく良いですよ。まちが繋がっているという実感がありますね。柏の葉ドッグも関口さんのように、自分のお店が売れるためにどうするかということが当然の人が多く、このまちでマルシェでどういう位置から働きかけることが重要かということを考えてる。そこから色々な関係者の視点を探ってくるんですよ。それで実際に色々な人を巻き込んで行く。それはすごく良いなと思っていて。あとそれ以外でも、よく話をしている声が聞こえるのが良い。出店者同士が交流している姿が見えるので。

○蛭川：課題はどうですか？

●小溝：テーマ性というか、飽きられないようにするためにはどうするかということですね。まちの交流の場ではあるけども、今までよりも低予算でどこまでできるかも課題。

今は三井に協力している活動なのかという目で見られる。だから今柏市北部整備課で話しているのは、柏たなかと連携して、もっと北部地域として、連携していきたいと思っていて。やはり公益性というところですよ。

これまで柏市は何もマルシェには関わっていなかったのですが、今回12月からはじめて後援を始めたんです。農政課なんですよ。南部でも南部市って言うてトラック市が開催されているんですね。その北部版はマルシェでやっていけば良いのではないかと持ちかけている。でもまだまだ出店者にとって、トラックで来てそのまま帰るのは楽なんですよ。マルシェはそこから商品を出して、陳列して、一時間も二時間もかかるんですね。

あとは秋には収穫祭をやったりしたいという話をしています。農家支援という位置づけで北部のまちづくりをやったり。

この間も市のウォークラリーで2000人くらい参加者がいる中で、ゴールを柏たなかにして、そこにお店を出そうとしてもお店が集まらないらしいですよ。一方でマルシェはこれだけいる。そこら辺の協力体制をつくっていくことも考えている。

あとは一店一品とかもやってますけど、柏のB級グルメコンテストというのをやりたいなと思っている。柏で選ばれたものが、また関東に広がってけると。柏も都会なので、商店はすごく下火ですよ。だからそういうとこ

ろがどんどん元気になるしかけを作れないかと思っています。

○蛭川： 今あるマルシェというツールをつかって、田中と繋げて北部を盛り上げるとか、柏の農家や商店を盛り上げるといふようにもっと地域を結びつけて行くという構想であり、課題なんですかね。

●小溝： そうですね。やはり来る人にとって飽きられるのは怖いですし、継続しているからこそ難しいところもある。だからテーマで切っていくこともあるかな。一度それでクラフトマルシェとかやってみただ、とはいえ、一気にクラフトを集められるかというところでもないし。ゆるやかな住人の交流でありつつ、全国的にも注目されていなければいけない。その両面性が課題ですかね。

○蛭川： ゆくゆくマルシェが柏の葉のまちづくりにおいてどういう存在になっていきたいですか？

●小溝： そうですね、やはり何もなかったまちじゃないですか、それが変化を遂げていて、新しいマンションが建ってきて、でもそうかと言って人がたくさんいるかと言えばまだまだで、一方で構想としては柏の葉キャンパスタウン構想があって、すごく色々な人が関わっているUDCKがあって、その中で恵まれた、今までのしがらみがない場所。それだからこそあっさりマルシェが続けて来れたんだろうなって思います。まちのドンみたいな人がいる地域では難しかったのかなって。そういう意味でもっとまちの人によってつくられるものですよ。

こちらは制限をかける立場。ほとんど否定はしない。

○蛭川： 今後はどうやって運営していく予定ですか？

●小溝： そういう意味も含めて市の予算を考えたり、URのことも考えたり、あと今回HPをつくっているのは、店長さんの顔が見えるページをつくって、広告料をもらったとかを考えています。自主運営を目指しています。企業の方にスポンサーとか協賛で入ってもらって。でもどのくらいでやっていけるのかは考え中です。

○蛭川： それができたら本当に地域のものになりますよね。

●小溝： 出店者のコラボも推奨、まちびとオンステージも推奨。ここから発信しよう！というのがあって。全国にとっての先駆けになりたい。

○蛭川： マルシェって、流山と連動しないのですか？

●小溝： 流山は半年やって、半年作戦で休んでやっていきますし、やろうと言っても出店者の取り合いになったりね。だから難しいんですよ。沿線でそういうマル

シェが始まったらよいと思うんですよ。だからTXももっと積極的になったら良いとおもうんですけどね。

○福角： 先ほどからおっしゃっているマルシェが捉える「地域」はどこを指していますか？

●小溝： マルシェだと、柏市周辺5市くらいを地域と呼ぼうと考えている。広いです。マルシェはここだけじゃ成り立たない。

【2回目】

●小溝： 三井不動産とスパイラルと読売広告の三者でやっていて徐々に、住民以降をやっているのですが、うちはその一つのような形で、業務委託としてまちのクラブ活動と一括で委託されている。

○福角： スパイラルから運営の体制が移ったと思うのですが、いなかですか？

●小溝： 2009年の5月からほぼ定期開催になったのですが、その頃からほぼうちがやっているという状況ですね。体制としてはあまりかわっていないんです。イベントミーティングという形でやっている。レジさんに対してクライアント説明会をするのですが、読売広告、スパイラル、うち。当初UDCKは入っていませんでしたね。マルシェの際の道路申請をする際とか、他にも色々UDCKとして名前を出していった方が良いということになって、UDCKの名前を入れるようにしている。それが2010年から。だから今も変わらないんだけど、決裁権がうちに移りつつあるという感じなんです。前まではスパイラルに問い合わせないといけないという関係だったのですが、今はうちが全部やっていた。前はスパイラルさんの出店者を集めるためにうちがやっていた。そこが2009と2010の違いですかね。2009の途中から徐々に。

○福角： UDCKが協力していることは場所の提供だけですか？

●小溝： チラシでは最初UDCKは協力に入っていて、その後主催の中に入った。結構最近。

○福角： 広報活動ですが、出店側と参加側と両方お願いします。

●小溝： 出店者の広報はかなり出典者が出店者を呼んでくるところと、あとはインターネットを見てくる所と2つに分かれている。もともと協力的だった生協関係の店があり、いくつかその関係のお店がある。あとは関口さんが連れてきたとか。あとは老舗のお店が誰かを連れてくるとか。

○福角： 一番最初のお店の集め方と、営業をしなくなってきた状況から教えて下さい。

●小溝：2008年とかから協力している人たちが10店舗くらい。そこが母体になっていて、そこから今が110ですね。口コミ、HP、営業はね、数える程しかうまくいっていない。江戸川台とかも回ったのですが、全部だめだった。あの時期はマルシェ自体を広げるのが精一杯だった。40、50ぐらい集まってきてから、それを回すのに忙しくなってきた、もうそんなことできなくなって、どんどんきた。今は地域性を重視して絞っていきこうと思っている。ネットの口コミとかで広がっているらしいから。でもやっぱり地域のことを考えてくれないところはお断りするし、また向こうも売り上げがあがらないと感じる人は引いていくと思うし。あとイベント自体はプラップさんが相当やってくれている。フリーペーパーですね。あとこっち（柏駅周辺）でも取材に来るんですよ。あとはネット上も1、2本載っている。あと広報って、最初の時期は載せ易いけど、それが継続しているというのは取り扱いづらいと。それであまり大きな記事にはならないのですが、ということで。

○福角：フリーペーパーは3、4部ですか？

●小溝：そっちはUDCKに来ているので、こっち（NPO）に来ているのがプラス1、2件。

○福角：ポスティングは？

●小溝：してます。9月11日の田中みこしの時に裏面に折り込みをした。25000部だったかな。それもあって、あの時5万人来たという発表になっている。その時は柏市北部地域全域と中央の一部に配った。それが1回だけ。普段はマンションと、パルスシステム千葉に最初のうちは1万人位で今は6000部位。ポスティングは障害者施設に一枚3円をお願いしている。いつも1000部位若柴、高田に配っている。

○福角：フリマとマルシェの関係は？

●小溝：フリマはスパイラルさんが地元の人でも参加してもらおうとって、出展費1000円でやったんですが、最初は3件とかだった。こっちからもメルマガとかで流したりしたものの、来なくて。僕が個人的に知り合いのところをお願いしたら来ると思うので聞いても良いですか？って聞いたら許可を貰えたので、聞いてみた。そしたら100来た。フリマはマルシェの中に住民枠も作ろうと言って始まった。最初は集客に苦労した。8月とかは300人位だった。熱い人がこない。とにかく閑散としてた。これは今年いっぱい持つかという議論があつて。それで集客にはやはりお店の数が必要ですよ、という話があつて、でもまち

づくりは多くするだけじゃだめだ、と色々議論があつたのですが、結局は絶対数の面積は必要ということで、フリマを始めた。それが2月位かな。

最初は警察の申請がいらぬ時期は歩道でやっていた。その時期が一番すごかったですね。人が通れない位。ただ田口さんが言ってるんだけど、フリマを増やすのはどうなの？って。やっぱりフリマの人って客層も違うし、何かマルシェが求めてきたものと、お客さんが集まってもね、違うところも、という議論がある。でもかなりリピーターはいると思うのですが。

○福角：主催は？

●小溝：マルシェ・コロール実行委員会があるじゃないですか、そこに全部入っていて、そうなるとUDCKはNPO支援センターとしては三牧さん、砂川さん、田口さんにはいつもメールをしているのですが、道路のときとか色々助けてもらいましたが、ミーティングには参加していない。広報の小林さんは入っている。三井レジはスポンサー。

○福角：過去の開催場所は？

●小溝：図面があります。場所がよく変わるんですよ。UDCKが移転したのもありますが。あと道路の問題。警察としては民地でやれば良いじゃないですか、という考え。でも我々としては、三井の土地にとかマンションにあることではなく、まち全体にあることが重要なので、そういう風にやってきました。でも一区画2500円ずつ警察に支払わなければいけない、さらに全部申請書を書くというのはやってられないので、民地に入ってしまったんですよ。それと後はマンションを使うか議論。マンションは水回りが取れないので、保健所の申請が取れない。だからやはりUDCKが良いよねってことで落ち着いた。10月は工事をしていたから、マンションでやったのですが、あまり人が来なかったの、だめだなって。11月、12月は落ち着いた。

No	19 (2人)
日時	2010年12月10日17時~17時半
場所	新UDKC
対象	NPO支援センターちば まちのクラブ活動担当 ●宮奈由貴子さん (2回目)、齊藤香代子さん
質問者	○著者

- 宮奈：経緯で言うと、大枠は2006年に三井レジデンシャルさんとかとお会いして、彼らの理念でいけば経年優位。年が経つにつれて優れていくという。そういうまちづくりをしていくのに、ハードだけで建てていくのではもうないだろうと。いかにまちができる前から住民の方にこういうまちにしたいと思ってもらえるように、つくっていくというのがこれからのまちづくりであるとお話に来てくれた。結局三井さんが住人をまちに繋ぐ枠組みとして最初からマルシェやまちのクラブ活動のようなことがあったら良いなという考えがあったのですが、三井がそれ全部はできないじゃないですか、そういうことを一緒にやってくれるパートナーが欲しかったから、うちに話が来た。うちが契約として具体的に話が決まったのは2008年。2008年の8月にはクラブハウスがオープンした。一番始めにできたのがエコクラブ。エコクラブは実証実験型のもので、もともとCO2削減実現のためにも企業側や大学がやっても、実際に住む人が下げなければ意味がないから、それを楽しく、色んなモチベーションを持てるようにクラブみたいな交流の場をつくること、環境においても交流の場が必要ということで、エコクラブをつくったんですね。身近なエコが話題になると。その後にしたのが、はちみつクラブ。これはアート型なんだけど、結局クラブハウスに養蜂箱を建てるのがすごく大きなきっかけで、それをきっかけにスタート。それが2008年の11月。
- 齊藤：三井不動産からの委託で、お手伝いしてくれているのが藤崎事務所。
- 宮奈：このまちは、緑地40%を開発後も保とうということがこのまちのコンセプトなので、その象徴として蜂がシンボルになって、蜂が人と人の話題になったりとか、はちみつという自然の恵みを頂けるといことも非常にわかり易い。それを大学と一緒にやろうと。それがキャンパスシティならではの一つの象徴になるのではないかとという位置づけ。
- 齊藤：それでスパイラルにお願いしてアートイベントとしてやると。最初リーディングでやっていた。それで部長

としては、千葉大の徳山先生を筆頭にやっていた。徳山先生の理念を活かしてさらにアートのものというしかけで。

○福角：組織図はないですか？

- 宮奈：ないです。はちみつクラブだけは最初総会もあって、徳山先生を顧問に、アドバイザーに三輪先生が入って、会計もやって、広報もあってという感じだった。
- 齊藤：はちみつクラブだけは最初にスパイラルが組織図をつくったんですよ。でも今はスパイラルは離れているので、今は会長さんという形で徳山先生に入ってもらっている位。あとは副会長と会計と広報がいて、回しているという感じ。

○福角：それはみなさん無償ですよ？

- 宮奈：そうですね、高校の部活みたいな感じ。リズムングの野村さんははちみつの広報でもあるんですよ。

○福角：ちなみに、NPO支援センターちばさんは三井から雇われているという関係で宜しいですか？

- 宮奈：業務委託ですね。このまちの交流事業の部門を、UDCKの協力団体として、やって下さいと。UDCKに集まっている企業って何らかの形で三井から業務委託を受けているわけじゃない、それと全く同じ構造で、クラブの部分で業務委託を貰っている。マルシェは実は業務委託を貰っていないんだけど、その分売店料で稼げるしくみを一緒につくろうということをやっている、まだまだ採算は合っていないけれども、やっています。

○福角：交流事業の一環というのは、三井グループの経年優位というコンセプトを基に、ハードとソフトの一体があると思うのですが、UDCK自体のコンセプトもハードとソフトの一体みたいなことがあると思うのですが、三井だけでなく、他の方とも話合われたのですか？

- 宮奈：UDCKってキャンパス構想をもとに、色んな人はお金を持ってきてやっているじゃないですか、だから体系だたせて、誰かがトップダウンでやっているわけじゃないでしょ、だから北沢先生はシンボルで大きなキーパーソンではあったけれども、結局8つの指標によかれと思ってみんなが色々持ってきてやっていると。こうじゃないけどこうだよってことについては、キャンパスタウン構想とか北沢先生のアドヴァイスとかで、みんな足並みが揃っているという感じじゃない、だからあくまで三井レジの業務委託ということは端的にあるんだけど、三井がこうしてほしいというから私たちそのままやっていますというわけではないんですよ、あくまでUDCK—このまちの交流事業、市民活動事業の役割を担う存在として、ここにいないわけじゃない、だからレジはマンションを売るた

めの言葉を使うし、ここは手法になってしまう。言語が違ふ。けど言っていることは同じ。私たちとしてもマンションを売りたいということもあるけれど、実証実験都市としてとか、色々思惑はあるけれども、結局まちの人にとってあるべきものをつくっているということですよ。結局みんなついつい実証実験の数値目標とかインパクトとかを求めらるんだけど、逆に私たちがそうじゃないでしょということを下から地道に積み重ねて吸い上げて行くことをしている。だから三井のことだけをやってるつもりはなくて、常にキャンパスタウン構想はあるけれども、結局それってまちにとってそれが実現するとどうなるかを見据えてやっている。

原資があったから動き出したということはあるけれどもね。

●齊藤：場所をつくってくれたということは大きいですよ。原資ももちろんだけど。

○福角：これまで活動されてきた中での成果と課題を教えてください。

●宮奈：UDCKって未だにパチンコ屋やモデルルームみたいに思う人もいるけれども、これだけイベントやクラブ活動を介して、UDCKってこういうことをやっているんだって知ってもらい入り口をたくさんつくってきたことが成果かな。ここの活動は色々先進的な事もやっているんだけど、結局住民がどうかということは見えていないわけじゃない、そこを繋ぐ役割としてはすごく重要な部分を担ってきたのではないかと考えているんですね。身近な存在になってきているのではないかと。

●齊藤：まだまだ全員とか言うわけではないけど。クラブハウスで言えば、わかり易い例ですと、去年ハロウィンをやってほしい200人位来たんですね、今年も同じ位来たんですね。でも去年と大きく違うのは、みんなで作る、まちぐるみでつくるということを実感して頂くために、何か一つ、お手伝いを条件にしたんですね、事前準備を手伝うとか後片付けをするとか。だから絶対人数が減るだろうと思ったんですね。そしたら去年より多い人数が来たんですね。それで最後まで後片付けをして帰ったんですね。そうすると去年も参加した方から、「去年と全然違うわね、人が育ってきているわね」って言ってきて、そういう部分がすごく表に見えて数値化して見えることではないけれども、非常に人の雰囲気とか良いコミュニティの土台ができてきたのではないかと。

●宮奈：まちに関わるきっかけが特段増えたんだと思うんですね。例えば町会もまだないし、子ども会もないし、UDCKだけでできて、そんなに来る機会もないじゃないですかそれが小さいコンテンツの積み重ねなんだけれども、まちのために何かをやることとか、何かが変わっ

てきたということだけでもすごいことだと思うんだけど。

●齊藤：ハロウィンのまとめで、このイベントを機会に自分も何か参加したくなったとか、子どもが好きじゃないと思っていたけど子どもが好きになったとか、あとはこういう機会じゃないと、一人だとかいうところに出て来れない。声を掛けてもらい、出てきたことで多世代と触れ合う事ができたとか。UDCKを中心にここが交流の場になっていくと良いですねって言っていた人もいたり。このまちに来ると知り合いが増える、そんなまちになると良いですねとか。そんな良い意見ももらえたりするんですね。

○福角：UDCKがやった活動を通じてそこに参加した市民にとっては良いこともあったと思うのですが、でもまだまだ知名度は低いかもしれない。そうすると、興味のある人、中間層、興味のない人がいることについてはどういふ風にお考えになりますか？市民というのはどのことを指しているのでしょうか。

●齊藤：ここは2極化が激しい地域で、あえてそこを対象にしたりしているのですが、全部を拾えているとは思わない。こういうことに興味のある人。だからこそ良い雰囲気をつくられているんだと思うし。でもとにかく種を蒔いて広げて、拾えない部分の人に少しでも顔が繋がっていくように努力すべきだなと思う。ひよんなことで拾えてくるかもしれないので。あとは参加しなくても、こういう活動が地域の中にあるということ。変らないでいるものがあるということは、非常に人に安心感を与えようと思うので、たとえ全然参加しなくても、いつか参加してくれるかもしれないので、なるべく種まきを続けていこうかなと思っていますね。

●宮奈：同じ話なんだけど、結局色んな入り口があるということが今のまちづくりに重要視されていることで、昔は町会ができればみんな一斉動員しなきゃいけないみたいなところがあるんだけど、色んな人がいるのは当たり前で、やらない人とめっちゃ頑張る人がいて、やる人をちゃんと救わないといけないなって。でもその人たちも世代や好みが違うから色んな選択肢があることがまず重要なんですね。それがまちづくりの豊かさのこれから指標になると思うんですね。あとはそれを紹介したり拾ってくれる人がいないってことがまちづくりの課題なんですよ。これを齊藤さんや私やUDCKや関わっている人がどういう風に拾っているかということがすごく重要で、ラッキーなことだと思う。あとは普段は困らなときはなくても良いやっというか困らなと思うんですけど、いざと言う時に、実はずっとあるというか変らないというか、そういうところが普段は行かないけど、困った

ときに行ける場所があることがすごく重要で大事なファクターだと思う。

●齊藤：この地域は新しいので。もともとコミュニティがあるわけじゃないじゃないですか、そして頭の良い方がすごく多いのもあると思うのですが、そうするとすごくまちづくりということがし易くて、こういう活動をしていると、野村さんとか良い例なんですけど、どんどん人を巻き込んでいく人がいるわけですよ。そういう人たちをたくさんつくって、そういった小さい巻き込みをたくさんつくって、まち全体の雰囲気をつくっていくのではないかと思う。

●宮奈：今は齊藤さんがいて、その周りに色々な人がいて、という構図だけど、これが2番街もできるともっともって人が増えるわけじゃない、そうすると今のような顔が見える関係が崩壊していくんですね、そうするとお客さん化してきてクレームが増えてよくわからないってことになってどんどん関係が悪くなってくる可能性がある。だから、巻き込んでくれる人が齊藤さんみたいになって、「まちのクラブ活動ってこういうことをしているんですよ」とか「こういうことあるからやってみない?」とか、今私たちがやっている、伝えてきたことを半分位は知っていて、伝える側になってくれないと、顔の見える良い関係はできないと思う。

●齊藤：野村さんとかまさにそういう状態。柏市民活動課でつながったりとか、若柴の民生委員とつながったりとか、そうしてその人がまた集めてくれて。

●宮奈：たくさんセクターが入ってくれるということは今意図してやっているんですね。結局福祉や子育てのことといった時に住民だけじゃ解決できない。それを行政枠、大学枠とか、そういう人たちがいかに私たちが繋いでいくかということだと思うんですよ。

○福角：この地域にふるさと協議会ができるという話はどうなりましたか？

●宮奈：今はふる協にかわるような、ものを2番街3番街につくろうとしていて、マンションは管理組合があるでしょ、1番街は管理組合に町会があって、という感じなんだけど、2番街は管理組合で町会をつくらずに、駅前まちづくり協議会みたいなものをつくる予定なんですよ。もちろん地域的には田中地域ふるさと協議会のエリアだけど、実際は1番街も2番街も入っていないんですよ。これが3番街もできてきたら、このまち協がふる協にかわるような役割をしていけば良いんじゃないかっていう方向にあります。

まち協って何が町会と違うかっていうと、住人だけじゃない組織なんですよ。企業とか大学とかが入ってっていうそんな組織を2番街の中に作っちゃおうということ。

●齊藤：1番街は管理組合から派生してできた町会があるんですよ。

○福角：行政活動は？

●宮奈：自治会が行政からお願いされることって回覧板でしょ、あと防災訓練でしょ、そういうのはまち協でできれば良いと思っている。町会をつくと補助金が出るんですよ、それも誰が入っているかという決まりはなくて、まち協でもそれに該当するんですよ、だからそれで一家族迎いくらという形で補助金ももらい予定。

○福角：まち協が町会に変わって機能している例は柏市ではじめてですか？

●宮奈：唯一、どこかの団地であるって聞いた。普通はまち協ってふる協みたいなもので、基本は中学校区域なんですよ。町会ってほしい小学校区域とかそれより小さいとかでしょ、柏でふる協が中学校区域だというのがたまたまで。

○福角：近隣センターにあたる拠点はコレクティブハウスを利用するのですか？

●宮奈：もちろんコレクティブハウスはまち協のためだけの場所ではないので、まちのための交流事業のためのクラブの拠点です、ということに違いはないけど、近隣センターにかわるというと、私たちも家賃を払って事務所にするからそこまでオープンにはできないんだけど。

○福角：対象としている地域、エリアは？

●宮奈：どこでやるかって言ったらこのまちでやるけど、誰が対象かって言えばこのまちで体験したい、交流したいと思う人だったら誰でも良いという方針。

○福角：口コミやHPからだと確かにどこからでも参加できますが、チラシには限界があると思うのですが、そうすると広報としての対象範囲ができちゃうのかなと。

●齊藤：広報活動としては、メルマガと、あとは私が手刷りでやるか、あとはUDCKの広報を通じてたまに地域情報誌に載るんですよ。あとは口コミですね。あえてオープンにしていますよね。

●宮奈：地域情報紙は東葛エリアだけど、結局生活圏でTX沿線か車でさっとこれるところじゃない、だからあんまり広げることを目的としてやってはいない。伝わればどうぞ、というくらいで。

●齊藤：ここの人にとっても、新しい人が増える場所でもどんどんコミュニティがクローズしていると入り難くなってしまいうんですよ。だからたまに外からポンって来たりとか、新しい人が来る、常にオープンな状態にしておいた

方が、ここにいる人にとっても入り易いし、中にいる人にとってもマンネリ化しなくて楽しいですよ。だからあえてどこからどこまでという決まりはない。両方にとって良いので。

●宮奈：逆に何を求心力にするかっていうと、このまちだからこういうことができる、とかこのまちらしさっていうものがあることが、わざわざ来たりとか、ここで何かしてみたいということに繋がるじゃない、これがララポのキツザインアみたいになっちゃうと、もうどこにあるうがたまたま柏の葉にあるっていうだけになっちゃうと、そうになってしまうと良い関係ではなくなると思う。

●齊藤：知り合いが増えるまちにしたいと思っている。柏の葉に来たら友達が増える、柏の葉に来たら、声をかけられる、みたいな。すごく深い関係になるまで私たちはサポートしようと思っていない。とにかく知り合えるきっかけ、をつくる。

○福角：地域で根付いて活動していることが、柏の葉の特徴でもあるし、それをもっと外へ向けて大学や企業がアピールするというバランスがとれてきたのかなと思います。

●齊藤：柏の葉は、まちを良くしていくために住んでいる人たちだけでなく、ここに関わってくる色々なセクターと繋がって、一番は顔が繋がっていること。そうすると企業やお店も頑張るし、まちの人も頑張っているお店をかわいがるといいしくみになっていくと思うので。

その辺の地域性はすごく重要視したいので、まちの先生のアーティストにしても、一番は地元。地元の人が活躍できる場にしたいということですね。

○福角：企画や運営についてお伺いしたいのですが、体制の変化があったと思うのですが、その経緯について教えてください。

●宮奈：学生会議が始まったのがいつかは覚えていないけど、10月頃からサポーターみたいな形で関わり始めてもらっているんですよ、それで学生メンバーの交流もやらなきゃってことで会議を設けているのですが、それを11月に入ってからやったんだと思いますね。

○福角：そこに住人が入ってくるということはないですか？

●宮奈：私たちとしてははじめはあまり学生ということを用意していなかった。でもはじめに学生が来て、同年代で盛り上げるじゃない、どうしても同年代で盛り上がるし、仲良くなる。でもそこに住人も来るけど、力仕事で早朝からとなるとお母さん方に参加してもらうのは難しい。今はそういう仕事しかつづけていないから、学生が

多くなっているけど、柏の葉ドッグなんかは主婦の方が入ってやってもらっているじゃない、そういう色々な入り口からの協力はまだまだこれからだと思っています。

○福角：これまでは参加の入り口をデザインするということで、たくさんの企画や活動をされてきましたが、今後は色々な人が運営に関わっていけるようなしくみづくりもはじめることですね。

●宮奈：役割を持ってもらうということは、仕事を細分化して任せるということができないと、やりがいもないし、結局何すれば良いんですかってことでなくなる。それが追いつかない。そういう意味では齊藤さんが1から10までじゃないけど、はじめは全部やってた。それが段々とむしろまわりから「これは私がやるよ！」と言ってもらい、助けてもらいながらできてきて、それがもっと仕事が明確に細分化して良い意味でわかりやすく示していくこと、システム化はしていくべきというのが今の課題ですね。

○福角：今は企画は誰がどのように決めているのですか？

●宮奈：今は柏の葉事業全体で収支の予算計画と事業計画をたてなければいけなくて、その全体の内部の検討をはじめています。今の企画メンバーの学生には、現在どのような課題を持っていて、ここまで持っていきたいというかたちでマルシェをつくりたいというたたき台として提示した上で、こういうことをやったらとか、アイデアをもらうということ段階かな。

(内部というのはNPO支援センターちば)

○福角：読広などは？

●宮奈：入っていないですね。というのは、マルシェについてはもともと三井レジさんが読広を通してスパイラルさんと始めたものだから、毎回のテーマとかアートをどう入れるかというのはその会議で決めていたんだけど、今はそのイベント会議はあるんだけど、ほぼ企画についてはうちの現場レベルにまかされていて、逆にこういう調整をしたいから、ここをお願いします、とかっていう提案型になっている。だから決済を誰がしなきゃいけないというのは決まっていらないですね。

○福角：いつごろからそういう風に移行してきたのですか？

●宮奈：つい最近な気もするけど、マルシェが月1になってのが2009年の4月でしょ、それから1年が経って、一応その時期からお金の流れも今まで読広が管理していたのがうちで管理するようになったんですよ。そこから段々と彼らからすれば今までのノウハウ、業務を移管したわけで

すよ。私たちは徐々にやれるようになってきたということ
とで、今年1年たった位かな。

○福角：それはどういう風に受け継がれたのですか？

●宮奈：ひたすら一緒にやる中で、例えば電源の配線とか
区画の区切り方とかを現場で決めるということを繰り返
したからかな。

○福角：予算のことは？

●宮奈：これはそんなにたいした事はなくて、道路申請の
こととかチラシ代とか。あとはアートワークショップを
やってくれているところに業務委託をしているからその
調整くらい。あとはもう出店者との窓口対応なんです
ね。丁度去年と今年で出店料やボランティア数の推移を
まとめたものがあるので。

●齊藤：マルシェは準備にすごく労力が必要でそこにサポー
ターとかボランティアとかがいたのですが、まちのクラ
ブ活動は色々な活動があって、気をつけていることが、
変にキューっとしたコミュニティにたくないんですよ
ね。だからプロジェクトとか内容によってそこそこに小
さいコミュニティができて、いつでも誰でも入ってこれ
る環境は常に整えておきたいと思っている。そういう意
味ではインターン生はすごく良いなと思っている。私た
ちの代わりになれる存在だと思っている。もちろんまち
の人たちだけでできれば良いのですが、同じ住民という
立場では言い難いことも、第三者が発言することですご
く良い関係になることがよくある。

○福角：風通しが良くなるのですね。
活動場所については？

●齊藤：基本的にはKFV、あとはUDCKと1番街のコミュニ
ティルーム。何かとコラボする時には柏の葉公園に行っ
てみたり、じゃがいも掘りで畑にいたり、ネイチャー
キッズでこんぶくろ池に行ったりとか、ブルーベリーの
畑（カモミールさんの畑）に行ったりしていますね。

○福角：市民活動推進課など他の組織とコラボする場合に
は、UDCKとコラボしているという形なのですか？

●齊藤：まちのクラブ活動事務局とコラボしているとい
うことなのですが、まちのクラブ活動って何？という認知
度が低いので、UDCKという言い方をした方が良いとい
う話になってるので、書き方的にはUDCK（まちのクラブ活
動事務局）ということにしている。住んでいる人から見
ても、まちのクラブ活動事務局の齊藤というよりもUDCK
の齊藤というイメージで見ている人も多いと思う。

○福角：広報活動について教えてください。

●宮奈：チラシは一番街（三井レジの営業さんによる）の
プスティング、あとはらぼーとの掲示板、UDCK、クラ
ブハウス、コラボ先（柏市、防火センターなど）。あと
はメルマガ、HP、地域情報紙にタイミングが合えば。

No	20 (1人)
日時	2010年12月24日16時～17時
場所	新UDKC
対象	スパイラル ●中澤徹さん
質問者	○著者

○著者：説明。ピノキオ始動の経緯をお願いします。

●中澤：もともとの経緯はこのまちで交流の仕掛けを入れていこうという話があって、そのひとつとしてピクニックをやったんですね。社交の場をつくって人々の集まる場をつくって、賑わいを作ろうということで。それが春だったんだけど、秋にも何かイベントをやりたいということで、その時にまちの担い手をつくる子どもを中心にしたイベントをやろうという企画がはじまった。その時に、別口でエドワードマルジジさんの話があって、おもしろそうな人がいると。何かうまいこと柏の葉でできないかって。彼はもともと小さい積み木とかシリアル箱を使って大きなピノキオをつくるというプロジェクトをやっていたのですが、そういう彼のプロジェクトを柏の葉バージョンでできないかと。そういったときに、上がってきたのが実際に子どもたちが試行錯誤しながらまちの中で働くというプログラムなんですね。それで試行錯誤と実践というのは彼のもともとのテーマなので、それを柏の葉に持ってきたときにらぼーととか色んな周辺企業がこのまちにはあるので、そこに子ども達が働いて社会との関わりをつくっていくのをやりたかったんです。当初はらぼーとの中に子どもが働くというのが目標でらぼーとも調整はしていたんだけど、初年度はやはり難しく、らぼーと自身が最初の年だし。なので、まずはUDCKの中で子ども達の市場を模擬店的につくって、そこに働くようにしようということで始めました。

○著者：この関係図（報告書より）の説明をお願いします。

●中澤：基本的にレジさんから読広、それでうちというのが基本的な流れなんですね、これは結局お金の流れもあって、ただマルシェに関してはそれは、結局ずっとお金があって続くわけではないので、地元の団体に移行しようとかそういうこともあったんだけど、それで最初はNPOをつくろうとか色んな話があったんだけど、丁度その時にNPO支援センターちばさんをお願いしようという話が出て、部分的にパスしたりとか。

○著者：ピノキオは今後はどのように運営していくのですか？

●中澤：ピノキオは今度議論を進めている最中なんだけど、将来的にはまちの中で担い手をつくって、そこが運営していくようなスタイルにしなければいけないねって。それはクラブの形だったりとか学校を巻き込むとか。今はプログラムが結構広がっていて、予算はあるけど我々のようなイベント屋がいなくなるとなるとたないという状況になっているのですが、それは将来的にどうするかは今検討中で過渡期になっていると思います。

○著者：2008年から2010まで、イベント別に担当者や委託先が書かれているのですが、これはどうやって決めるのですか？

●中澤：基本運営スタッフは限られていて、スパイラルの中では数名とそこから業務委託で小山田さんとか飯田さんとかをお願いしている。飯田さんはアーティストなんですけど。ワークショップだったらそういうことをやってくれる人をお願いしたりとか、ピノキオカフェの運営はフードコーディネーターの人に入ってもらったりとか。それぞれのプロに入ってもらっている。基本的をお願いしている人は毎年あまりかわってないです。この図だと細かく書かれていないですけど、2009年のマルシェでは宮奈さんにずいぶん入ってもらっていたんですよ。だいぶ出店調整をやってもらいました。

○著者：広報活動についてお伺いしたいのですが、小学校に基本的にチラシを配っているということですが、その小学校のエリアはどうやって決めるのですか？

●中澤：この企画そもそも柏の葉エリアのイベントとして始めていたのですが、初年度はイベントの第一回目認知度を上げなくてはいけないので、とにかく周辺の小学校にひたすら声をかけたんですね。チラシをつくって持っていくとか。エリアとしてはこの（柏の葉キャンパス駅）を使う人という感じだったかな。西原とか田中とか。流山の方はやっていない。2年目以降は認知度も上がって参加者も増えてきたので、そこまで広い範囲でチラシをまくことはしないで、今メインで協力してくれているのは松葉第一、松葉第二、花野井、田中、十余二。（チラシ）あとはこの地域のエリアにポスティングをしています。それは生協さんがクレジットで入っていて、生協さんの折り込みと一緒に入ってもらっている。生協の契約者なので結構広いです。NPO支援センターちばさんのネットワークですね。

○著者：参加者の属性がわかるデータはありますか？

●中澤：参加書に小学校名を最初は書いていなくて、どこから来たのかわからない。ただ我孫子とかから来てい

る人もいますね。広報だとプラップさんが入っているので、ミニコミ紙とか新聞に告知しているので、純粋にイベントとして参加しているということもありますね。

○ 著者：どこからでも受け入れる体制なんですね。

● 中澤：はい。

○ 著者：主催者と運営者の関係ですが、どのような流れで企画ができるのかと、リーディングメンバーがどうして生まれたのかの経緯をお願いします。

● 中澤：基本的に三井さんとしてはまちづくりのプロモーションにしたいわけですよ、効果的に見えるようにということでアートを使っているんだけど、それは我々が企画を出して、三井さんに承諾してもらうという感じで。読広さんは我々と三井さんの調整役として入っているので、企画はこちらでやっている。月に2回程の運営会議で今年の企画案だったり三井さんとやりとりをして、実際のプログラムに移していくという感じですね。関係としてはずっとそんな感じで、その間にらぼーさんとNPOさんとかが入って、色々な調整をやっている。リーディングメンバーができた理由としては、将来的にピノキオを誰に引き継がせるかといったときに、2009年から始めたのですが、ピノキオクラブみたいな形でじりつ的に保護者が入って運営できるという仕組みはつくっていかねばいけないという話があって、まずはきっかけとなるチームをつくらうということで、始まった。もともとのベースになっているのは、五感の学校ワークショップというのがあって、すごくその中でリピーターが増えていたんですよ。それでメーリングリストというか、直接そこで声を掛けて始まった。初年度2009年にピノキオシティということで、彼らが自分から企画をして制作までやらないとやった感じがしないので、何回かワークショップをやった企画して、最後ピノキオシティまでやるということを実践した。それはとても評判が良くて、子ども達もその間に仲良くなった仲間が増えたりしたので、これは続けていくべきだということで、今年も春先から何回かワークショップをやってきて、夏に企画会議をして、今年のコンテンツをこうしましょうということでパターゴルフを今回つくったりとか。

○ 著者：春から行っているワークショップは最後の企画に持っていくためのステップなのですか？

● 中澤：少し複雑なのですが、去年に県の助成金を取ったんですね、そこで大学と組んで何かをやるというプログラムだったんですよ。そこで我々は、江戸川大学さんとピノキオのプロジェクトで助成金を取って、それを前年度の段階でワークショップをやったりしていたのですが、継続して何

かやりたいねという話を江戸川大学さんとしていて、それでリーディングチームをからめて、江戸川大が前からやりたかった環境の調査を行ったんです。それをベースに勉強の成果をただパネルにして発表するだけでは面白くないので、パターゴルフという形でクイズにしたりとか、アウトプットを我々がピノキオの中で行ったと。

○ 著者：リーディングメンバーは親子が対象ですか？

● 中澤：基本は親子で参加ですが、我々はどちらかと言うともっと親に参加してもらいたかったなって。将来的にはうちがこれを提供するよ、とかそういう関係が広がると良いなって思います。ピノキオの企画会議に関しては基本子どもがメイン。ただ今後はもっと親に入ってもらいたいというのがあるので来年のプログラムの中では、親子セットで何かやることを考えています。

○ 著者：過去の活動場所に関する資料（図面など）はありますか？

● 中澤：図面はないのですが。場所の説明（記入）

○ 著者：今後の対象とするエリアについてはどうですか？

● 中澤：これからどんどん広げていこうと言うよりは、このエリアで継続してくれる人を探していこうという感じですね。あくまでもまちづくりで、このエリアに住んでいる人同士を繋げるための企画だったりするので。今は認知度も広がっているので狭めている状況です。

○ 著者：ピノキオをきっかけにして生まれた関係やコミュニティはどうですか？

● 中澤：一つは寛容性がずいぶん上がったなあと思っていて、子ども達がリーディングの中で仲良くなるというのはもちろんなんですけど、例えばらぼーとなんかは初年度は「そんなことできないよ」という感じだったんですね。でも今年はピノキオが実際にらぼーの中で働くことが実現されたし、周りの企業も千葉銀行とか京葉銀行とか辻中病院とか毎年参加してくれるし。ピノキオの認知度が上がったこともあるし、子ども達が働くということについてすごくおっかなびっくりだったことが、1年2年やることで余裕がでたというのはありますね。これはピノキオだけじゃなくてマルシェなんかもそうだけど、結構何かやっているなーというのが段々わかってきたのかな。なのでそういう意味ではすごく色々な企業や住民との関係性ができているのではないかな。

○ 著者：ピノキオのコンセプトとして、「子どもを地域で育てる」というのがあると思いますが、地域というベースがあることでできたことなどはありますか？

- 中澤：実際それがどこまでできているかということを評価する軸はないんですけど、やはりでも子どもたちの中でまちに愛着を持ってきている人が増えていると思うんですね。子どもたちと話をしていると、どこで何をやって、どういうことが楽しかったとかを覚えていて、去年やった何かがおもしろかったからまたやりたいとか。そういう風にエリアに対する愛着は子ども達の中で出来ているんじゃないかなと思います。あとは実際に働いたお店にはまた買い物に行ったりするだろうし、そういうところで繋がりはできていっていると思いますね。
- 著者：自然資源とはいかがですか？
- 中澤：環境調査は実際に学生が説明してくれて、水の汚れを自分で計ったりとか、我々はもう知ってしまっているの、そうだろうなっていう予測はするんですが、子どもたちにとっては新鮮だったんじゃないかなって思います。というのは柏の葉公園って大きな池があるけれども、あそこは全部閉鎖水系で、基本的にはあそこから外に出ることのない水なんですね、それがいかに汚れているとか、そういうのも実際に汚れを計って経験することで、知ったということも面白いと思うし、あとは熱環境調査で、このまちの色んな場所の温度を計ったのですが、それがコンクリートの上と木々の中だと全然違うとか、我々は振り返りとか発表とかを絶対するんですが、それをすることによって、色んな人が体験したことを共有したりして、お互いが気づいていくということもあったんじゃないかなと思います。
- 著者：1回のワークショップで終わるのではなく、その後も発表の場を設けることが大切ということですね。
- 中澤：振り返りをする中で、記憶に残るんですね。だからスライドショーで写真を流すと、忘れる前にこういうことをやったねって思い出すと、そこで子ども達の記憶に残ると思うんですね。
- 著者：リーディングチームができる前までは振り返りを行うことはなかったのですか？
- 中澤：五感の学校ワークショップの中で毎回振り返りをやっていて、それがかなりベースになっている。初年度に関しては顔が見えない状態でやっていて、誰が来るかもわからないし、その時五感の学校のリピーターも少なかったんで、もう純粋に人が来て帰るということでした。でもその時に、柏の葉の活動とか五感の学校の活動をずいぶん知ってもらえたんですね。それから参加率がぐぐって上がったので。意外とみんなUDCKの活動を知らないのかもしれない。
- 著者：今後についてですが、地域で自主運営していけるようにということでしたが、どの位の期間を想定されていますか？
- 中澤：具体的に何年っていうのはないけど、ただざっくりとしたタイミングとしては、まずはマンションが完成するタイミング。要はプロモーションなので、完成したら予算がなくなるので、その時までにはというのはなんとなくありますけどね。
- 著者：あと数年ですね。
- 中澤：イメージ図（メモ参照）。当初から良く目標にしていたものがあって、お金は段々フェードアウトしていくので、それに伴って人的なネットワークが広がって、基本的なイベントの質が保たれるということも言っていたんですね。（スパイラルから）そういう風にやってみましょうと。こうするためには、最初はティーチング。初年度はピクニックだったりピノキオだったり面白いイベントをたくさん見せて、そこで関わる人のきっかけをつくって、その間にティーチングをしていくわけですね。動ける人をつくっていく。その一つがNPO支援センターちばだったり。そして最終的にはそこでできた関係を使って運営するということを目指していた。
- 著者：外部から地域に入ってまちづくりを行う場合は、住民移行がテーマになると思うのですが、柏の葉における具体的な提案は何かありますか？人の面に関してはリーディングメンバーも一つだと思うのですが、他にお金の面や場所の面はいかがですか？
- 中澤：やめられない関係性をつくるしかないかなって。関わっていくことで毎年やめられないメリットをつくるということですね。特にピノキオは地域のお祭りみたいになれば良いなって思うんですね。お祭りって地域のみんながお金を出し合って運営するじゃないですか、あんな感じで一口何万円という形で。メインは三井さんが払うのかもしれないけど、それを周りの企業が宣伝を兼ねて自分たちも出すとか。あとは運営する人、ハブになる人をとにかくみつめて、その人を中心に動かしていけるようにならないといけなないと思います。
- 著者：他の活動との連携はどうですか？
- 中澤：ピノキオが一番始めの企画に立ち戻ると、イベントのために人が集まるというわけではなくて、地域のランニングネットワークにしたかったんですね、四六時中ららぽーとの中で働いても良いわけですよ、でも実際は色んな問題があってできていないのですが、マルシェの中でも子どもが働くとかそういうことは実現できるかもしれない。それをサポートするしくみがあれば。

○ 著者：これまでの活動の成果と課題について教えてください。

● 中澤：一つは、まちの寛容性ができたことは大きな成果なのではないですかね。「ピノキオの何かをやるので協力して下さい」と言ったときに、「何だそれは!？」ってならないで、「あああの子ども達が来るイベントね」、という反応になってきたんですね。それはすごく大きいなというのと、今年はらぼーとの中で参加店舗ができたこと。やはりこのまちで子どもたちの受け入れ口としてらぼーとは残っていく場所なので、らぼーとが意識的に残ってくると、ずいぶん色々とできるんじゃないかなと。将来的にはピノキオはらぼーとのイベントになるかもしれない、そうすると今はマルシェに紐づいてやっているけども、もっとこう負担が減ってらぼーとも集客に繋がるし、社会的貢献もできるというメリットになるのではないかなと思う。

○ 著者：リーディングチームの小学生が中学生、高校生になったときにスタッフ側として受け入れるという話を聞いたのですが。

● 中澤：そうやって、ちょっと先輩みたいな人が今までいなかったんですね。結構他の地域でも、子どものまちっているのを全国各地でやっているんですよ。NPOだったり民間が。それがこの地域だと佐倉とかでもあったり。そういうところではもう7、8年とかずっと続けていて、そこに参加した子どもたちが大きくなって、高校生になって運営を手伝っているというケースが多いんですね。楽しいのを知っているし、やりたい気持ちで集まっている良いし。そういう子どもがコアになっていく関係ができるのもっと良くなるんじゃないかなって。

○ 著者：何か引き継がれるモノとして何かありますか？

● 中澤：今の所そういうものはないけど、これからあると良いですね。
あとは五感の学校の間接報告ということで冊子をまとめたのですが、それはあくまで中間報告なので、それが完成してきた頃にブックにしたいと思っています。

○ 著者：課題は？

● 中澤：運営者がこれから引き継いでいく人を見つけて、やっていく。一番わかり易いのがらぼーとかもしれないけど、もっと公社とかも主体的に動いてくれると随分幅が広がるなと思います。

○ 著者：柏市と教育委員会が後援となっていますね。

● 中澤：これは後援依頼を出して後援してもらっているだけなので、具体的な関係はあまりないのですが、彼らのクレジットがついていると、何かお願いしに行ったときに動き易い。そもそもUDCKが入ってくれていることで、ここは公の機関でもあるので公共性が担保されるというか。小学校に説明に行くときに一番苦労するのですが、三井のイベントに見えちゃうと、良くないんですよ。学校側も協力し辛い。でもそこにUDCKが入ることで、理解を得易いということはありません。

○ 著者：他にUDCKがあったからできたことってありますか？

● 中澤：場所の使い勝手が良いこと、今年は随分らぼーとの会場が増えたのですが、UDCKがないとあそこまで初年度とかつくりこみができなかった。空間として、ここにUDCKがあるからできたと思います。

○ 著者：最後に、アートをこのまちでする意味は何ですか？

● 中澤：新しいまちにおいて、アートはあくまでもコミュニティのツールとしてやろうと。しかし、ハードを中心としたアートのまちづくりはあるけども、ソフト主体のアートのまちづくりは他にはない。それが最終的にパブリックアートとして、これまでの活動を位置づけることが出来れば良いという考え。
また、最初に（お金があるうちに）目に見えるアイコンをちゃんとつくりこむこと。例えばピノキオの制服を日比野さんにつくってもらおうとか、今後運営していく人がほこりに思うようなアイテムを残していくことが大切だと思う。

資料5 ヒアリング記録3活動参加者
（市民・住民）編
no21～no38（合計26人）

No	21 (1人)
日時	2010年11月7日10時半～11時半
場所	新UDKC
対象	市民 ●間島克哉さん
質問者	○著者

(アンケート項目を見ながらの質問)

- 福角： まちづくりスクール以外で何か参加されたことがありますか？
- 間島： 私自身はカレッジリンクに参加していた。あと妻が、エコクラブ、ソーイングクラブ、マルシェなんかをやっている。
- 福角： まちづくりスクールを知った理由は？
- 間島： 広告やカレッジリンクからの紹介です。
- 福角： チラシはご自宅のポストに入っていたものですか？
- 間島： そうですね。
- 福角： 参加しようと思ったきっかけを教えてください。
- 間島： 「まちづくり」という言葉の定義はよくわからなかったのですが、せっかく住民なんで、まちがどう動いていくとか変わっていくとかという変化を見る事が出来たら良いかな、と思った。ボランティアじゃないけど、関わる事ができたらより愛着が湧くかなとか、地元のことを良く知りたいということがきっかけでした。
- 福角： パークシティにお住まいですか？
- 間島： そうですね、2年前の10月から。
- 福角： ここに来る前はどちらにお住まいでしたか？
- 間島： 月島や汐留に住んでいました。
- 福角： 東京ではなかなか得られない地縁的なつながりなんかも求めていましたか？
- 間島： こっちに来たからとかっていうのはないのですが、自分の家族環境が変わったからですかね。東京に住んでいたときは夫婦で2人だったが、子どもができて、こっちに引っ越そうと。妻は専業主婦をやっていて、都会田舎とかはあんまり関係なく、腰を据えて住もうと思っている地域では、友達もつくりたかったので。あんまり都会田舎とかは関係なかった、自分たちの生活の中

で、子どもの友達だとか、輪を広げていきたくったんですね。

- 福角： 他にも東京近郊に住むところはたくさんあると思うのですが、ここを選ばれた理由は何ですか？
- 間島： 特にあんまりここに地縁はなかったので、子どもができたので、広いところに住みたかったという条件的なところと、あとはきれいに整備されていたり、今後発展していきそうなところだとか、駅まで横断歩道なく行けるとことが。
- 福角： 今お聞きしている内容からすると、特にこの地域の「まちづくり」を知っていたという訳ではなく、ポスティング等がきっかけで徐々に知っていったという感じですかね？
- 間島： それぞれの活動についてはそうですね。当時はITキャンパスのまちをつくります！とかって言ってたときに、こういうまちが駅前にできるんだな、というのは知ってたけど、ひとつひとつの活動については、引越して来てからポスティングなんかで知りました。
- 福角： 参加しようと思ってから、どういうことを目的として参加されましたか？
- 間島： できるだけ住んでいる地域の情報は知りたいというのと、当初僕が持っていた目的とまちづくりスクール等に行ってみて感じる目的はズレていた。
- 福角： どういう風にですか？
- 間島： 逆に「まちづくり」というものをどう捉えてこのスクールをやっているんですか？と聞きたい。「まちづくり」という言葉の意味は？
- 福角： 私個人的に思っているのは、同じまちに関わる人が主体的に、まちに対して取り組む、関わる活動であれば、何か建物をつくる行為から、コミュニティをつくる行為まで全てだと思っています。
- 間島： その結果目指しているオブジェクティブは？ニュアンスを伝える事はできても、具体的な内容がぼやっとするのではないかなと考えている。僕の考えで言えば、「町おこし」みたいなものもある一方、ここの地域を考えると、「まちづくりをしているまち」、フレームワークを持っているのが特色です、という感じで、何をやっているまちづくりなのですか？といったらそのもの自体の対象ははっきりしていないと思う。誰の為かな、三井の戦略かなとか。カレッジリンクの友達とも話し手いたのだが、色んなイベントをやろうというのがあるが、単発でやって終わり、というのが多くて、自分が

何か主体的にやっているかという点あんまり満足感はない。企業よりになっていると思うんですね。

○福角： 私自身、「公民学」が利用者にとってはあんまり感じられない部分かなと思っています。

●間島： 三井さんは東大とやっているということアピールしたいのかなと思います。単発のイベントを力を入れてやっているのはわかるのですが、それがひとつひとつ住民に刺さっているかという点、そうでもない気がします。形になって残っているか考えても、形になっても薄っぺらいものに感じる。

何ができてのかな、誰のためかな、とか考えて、もう一度「まちづくり」って何かな、と考え、気づいた人はもう次のイベントは出ないでおこうかなとかって思う人も結構いると思います。なので深く関わり始めると、やはり目的がぶれていると感じる。

○福角： 少し話は変わりますが、そうするとまちづくりスクールに対する感想、満足度といったものはどうですか？

●間島： 良いところ悪いところもあったと思います。参加者を見てみると、住民を対象にしているのか、関係者なのか、学生なのか、その対象者と意図している内容は一致しているのかなと思っています。一般の住民がとかそういう意味でなかったのが、それならばもっと専門的な内容の方が良いのではと思った。

○福角：良かったことは何ですか？

●間島： 住民の方が講義の内容を聞いた面白かったかなとおもいます。ただ、ちょっとでもまちづくりとかを知っている人にとっては、物足りないのかなと。

○福角： スクールの中で一番面白いプログラムは何だと思いますか？

●間島： 僕が参加したテーマだと、座学形式で良いのかなと。感じたのは、住民が集まった時の期待値って、「もっと自分で何かできるのではないかな」とか「何か実現できるのではないかな」と思っている人が多いのではないかな、と思う。その時に座学だけやって帰るとするのは、「自分で何かやりたいな」と思う人にとっては、、、

○福角： こういうところ（まちづくりスクール）に参加して何かやりたいなと思った人にとって、その次のステップに取り組むプログラムはまだないのかなという感じですか？

●間島： そうですね。やっぱりハコはつくってもらっていて、それ以上に何かやろうと思ったら、ハコを出てやるしかないという感じですかね。クラブ活動支援みたいな感じで場所とか補助とか、改善できる点はたくさんあると思う。

○福角： 奥様がクラブ活動に参加されているとおっしゃられていましたが、クラブ活動では住民の方がやりたいと思う内容をできるしくみがあるかなと思うのですが。まちづくりスクールなどはうまく役割分担ができるの良いのだと思います。

●間島： それはやはり「まちづくり」というものの目的次第だと思うんですけどね。活動支援が目的なのか、しくみをつくるのが目的なのか。固定する必要はないのかもしれないが、今の状況だと、役所的と言うか、表面上はあるけど実際使えないみたいな感じ。妻とも最初はエコクラブに入って今ソーイングとかって集まって、こことかパークの中とかで集まって活動しているんですが、この設備を借りて、やりたい人が集まってやれば良いと思うんですけど、その時の支援（場所の提供とか）があれば良いかなと思う。そういう意味ではどこまでのことをできるのかなーと思いますね。

○福角： 話は変わるのですが、参加費はどうですか？

●間島： 安いと思います。

○福角： 時間はいかがですか？

●間島： 講義時間は丁度良いと思いますが、時間帯が難しいですね。

○福角： 全4回から6回のプログラムはどうですか？

●間島： 講義の内容の単発だったら丁度良いと思います。ワークショップとかだったらまた違うかもしれません。

○福角： 間島さん自身は参加したいとは思わないですか？

●間島： 内容というより、その後の懇親会が目的のように感じられる部分もあって、それが目的ならそれで良いのですが、私の求めているものとは違ったかなと。

○福角： 何かお仕事でまちづくりに携わっていらっしゃるのですか？

●間島： 仕事はコンサルティングを、主にIT系をやっている、その中でも観光庁とかブランディングとかに関わっているんですね。

○福角： そうするとスクールの内容だともの足りない感じですかね？

● 間島： 目的がぶれてて、形優先でやっているようにどうしても感じられて、カレッジリンクの時も話していたのですが、何を目的でどうやったら成功なんですか？って先生に聞いたら、「それ考えてなかったね」って言われちゃったんですよ。活動自体は賛成なんですけど、やってて良いのかな、っていう判断がなかなかつかないの、参加しないっていう選択になるのかなと。

○ 福角： UDCKをどうやって知りましたか？

● 間島： パークシティの見学をした時に、「産・官・学」とかUDCKの話とか三井さんの営業で知りました。

○ 福角： ということはこちらにお住まいになる前からお知りになっていたということですね？建物だけではなくて活動内容も知っていたのですか？

● 間島： 移住する前からHP等で見ていた。

○ 福角： カレッジリンクに始めに参加されたということはUDCKを使うことはあまりなかったのかなと思うのですが、UDCKにはいつ来ましたか？

● 間島： はじめは車がなかったので、子どもの散歩コースでした。デッキとか。子どもが遊んでいる間に中に入って活動を知った。

○ 福角： カレッジリンクやスクールをする中で、UDCKに対するイメージは変わりましたか？

● 間島： そうですね、思っていたより活発だなと思いました。ちょっとどうかな、と思うのは、私が使い切れないだけかもしれないのですが、イベントとかも住民の公民館とか集会所というものではなく、提供される場所みたいなものだったので、どっちかと言えば役所という感じがしている。提供する側が役所っぽい。

○ 福角： これからUDCKにあったら良いな、と思う機能とかはありますか？

● 間島： UDCKって何の為にあるんでしたっけ？って言うところに戻らと思うのですが、みんながイベントを企画できるようなものがあれば良いかなと思う。提供されるよりも、そういうのって大きいものって難しいと思うので、小さなことからでも。僕らが使い切れないのは仕方ないと思うのですが、どういう目的で、そういうものを用意してある、そして使い手の僕らが使いこなせてる、という状況が良いなと思います。使いこなせるところは、住民に対してUDCKがアジャストできるものが重要かなと。

僕がこのまちに来て良かったと思うのは、住民同士が仲良く成り易いし、愛着が生まれたな、と。それは参加していて良かったと思う。だからもっと愛着が持てるようなコミュニケーションが育まれるようなものが目的でまちづくりなのか、イベントでマルシェとかって言われるよりも、みんなが求めているものが何なのかっていうのがわかるようなものをしていくことが重要なのかなと。イベントありきになりがち。

○ 福角： いつ頃から愛着が出てきたなと感じるようになりましたか？

● 間島： 住んで半年くらいかな。やっぱり知り合いができてきてからかな。駅で挨拶するのって重要なことだと思うので。

○ 福角： 間島さんが考える「まちづくり」って何ですか？

● 間島： わからないですねー。

○ 福角： 誰がやるものだと考えていますか？

● 間島： 役割があって、引っ張っていく立場の「産・官・学」がやっていくようなものもあれば、住民たちが集まって集会所のようなところでやることもあるだろうし、レベルが色々あると思うのですが、僕が考える住民のまちづくりはコミュニケーションをとって、住民がお互いのことを知って、それぞれが愛着を持つことだと思うんですね、まちづくりのイベントでそういうところを目指してするのは良いなと思いますね。

柏の葉を有名にしたいのか？UDCKが柏の葉を広めることがまちづくりなのか、住民が仲良くすることがまちづくりなのかわからない。そこら辺の役割分担をしっかりと、柏の葉のブランドというものがどういうものなのかというのは、産・官・学の役割なのかなと。住民達が集うコミュニティみたいなものは、自分たちでやっていくかなと思ってます。

○ 福角： クラブ活動なんかは目的に「コミュニティをつくること」として活動していると思うので、活用して頂けると良いと思うのですが。

● 間島： オリジナリティがない。柏の葉って何のまちですか？って言ったときに、マルシェって他でもやってるじゃないですか、「柏の葉って〇〇やってるまちだよ」とはならないじゃないですか。そういうのがあった方が愛着も持ち易いですし、アピールもし易いと思う。「まちづくり」をやっているまちという風にしか僕には見えないので。マルシェも、内容はすごく良いと思うのですが、一般的なものからは抜け出せないのかなと。良い活動だとはおもうのですが。

柏の葉ってどういうまちなんですか？

○福角： たくさんの主体が集まってきたということもとても特徴的だし、自分たちの思惑もありつつ、一緒に何かやりたいと思って活動していることかなど。まちづくりをやっているということ自体は私はプラスに捉えているんですけど。間島さんのおっしゃるようなものがあれば良いとは思うのですが。

●間島： まちづくりのまちですっていうのはおかしいなと思っていて、こういう地元で集まることができるまちですとか、具体的に何のまちっていうのが言えないと、まちづくりという言葉も、ニュアンスを伝えるだけで、その後に発展していかないのかなと思いますね。自分たちがこういうまちに住んでいて、それが住民にとって嬉しいな一と思えるものになったら良いなと思うんですけどね。

○福角： このまちの目指すまちづくりの目的がはっきりしていないと、実際に活動していることが、まちづくりの一環としてやっているとは思えないんですかね。自分が地域のまちづくりに参加しているなと感ずることがあまりないということですね。

●間島： それを探りに参加したが、実際には期待しているアプローチでの参加はできなかったの、枠組みをつくってもらってそこに参加しただけになっている。動機付けにはなるけど、具体的に進めていくということにはならない。ので、今は自分の求めていたものとは違うので参加しないという考え。

○福角： 今後どのようにまちに関わっていきたいですか？ 仕事以外の時間でこのまちにどうやって取り組みますか。

●間島： 色々参加はしたいなと思っているのですが、コーポ型のイベントをやったりとか、住民がやりたいことをサポートしてもらえそうなUDCKのしくみがあれば嬉しいなと思います。

○福角： スタッフをやることになったきっかけは何ですか？

●間島： 5人位スタッフがいるから、カレッジリンクの参加者に呼びかけがあって、丁度仕事が忙しくない時期だったので、どんなものかなと思って参加しました。

○福角： 今回スクールには参加者として参加されていなかったということですが、カレッジリンクには参加者として参加されましたよね？ スタッフとして参加する時とそうでないときでは何が違いましたか？

●間島： まちづくりスクールのスタッフは、スタッフと言うよりも、もう決まっていて、事務方、設営係という感じですよ。だからちょっと考えていた物とは違った。

○福角： もっと企画などからするものだとお考えでしたか？ もし企画をやってくれと頼まれたら、どうですか？

●間島： そういう機会があれば是非。

○福角： 住民の方が企画に入った方が良いとお考えですか？

●間島： まちづくりスクールを誰のためのものにするかですよ。住民向けのものにするかとか。住民向けのもののニーズを探るために住民が企画に関わるというのは良いと思います。今は対象がバラバラなので。まちづくりスクールってなりましたっけってところですね。

No	22 (1人)
日時	2010年11月9日13時~14時半
場所	新UDKC
対象	市民 ●水上征隆さん
質問者	○著者

(アンケート項目を見ながらの質問)

○福角：趣旨説明

●水上：年齢は60代、就業中、不動産業、若柴在住、13・14年住んでいる。

○福角： どういう理由でここに住むことになったんですか？

●水上： 今家のあるところを自分で建て売り分譲したんですよ、それでたまたまそこに電車が通るといった話があったものですから、その一角を売らないで、自分の家にしたわけです。そして事務所も移そうかなと思って。(電車が通ってから事務所を移した)

○福角： それまではどちらにお住まいでしたか？

●水上： それまではね、取手にいたんです。

○福角： 取手とこっちと比べるとどうですか？

●水上： 取手もね、短期だったんですよ、数年しか住んでないんで。それまでは練馬の方に住んでいたんですよ。

○福角： ここまでは徒歩ですよ？

●水上： はい。

○福角： ここにお住まいになって、どうしてまちづくりスクールに参加されたのですか？

●水上： 仕事柄、都市計画というのに興味があったし、不動産をやる前はもともと測量事務所をやっていたんですよ、それで開発関係の仕事をやっていたし、不動産でもまちづくりをやって、開発行為とか区画整理のことをやっていたし、少しでもこのまちがどういう風に変っていくのかな、というのに興味があったわけです。やっぱりね、自分が生活している場所が少しでも良くなってほしいですから。自分の目で見ていきたいなということ。

○福角： どうして知ったんですか？

●水上： 三井さんからの紹介で知りました。

○福角： まちづくりスクールに参加する前までは、市民講座等に参加されていましたか？

●水上： ないですね。

○福角： 参加するにあたって、どういう目的を持って参加されましたか？

●水上： 前はある程度組織の中で仕事をやってきたわけですが、今は個人経営という形になっているわけですから、情報が不足しているわけですね。中小企業にとっては何が一番ほしいかという情報なんです。そういう意味合いで、ここで少しでも情報を頂ければというのが最大の目的ですね。

○福角： 実際に参加されてみてどうでしたか？

●水上： いやあ、良かったです。1、2、3回目それぞれに全部テーマがありますよね。今まで我々がやっていたのは官・民一体とかその程度なんです、そこに学が加わるという形は素晴らしいなと思っているんですけど。

○福角： 学が加わることでどういう良いことがあるのですか？

●水上： 官民だけですと、法的な問題とか、資金面とか、そこに学が入ると理論が入ってくるわけですね、ですから私なんかは今まで開発でまちづくりをやっていたのは民間の事業でやっていたわけですから、どうしても収支の問題だとか、事業性で収支の面を主流に考えるわけですよ。ところがワークショップなんかでまちづくりの計画なんかの話の話を聞いていると、いわゆるお金の計算をあまりされていないような感じがするんですね。お金の問題もないし、法律的な問題もあまりないのかなという印象を受けたんですね。しかしそれはあくまでも理想論であって、それを今度は行政側が法的な問題を、民間が資金面をきゅっと締めたり、3者が一体化して一つのプロジェクトを仕上げていくというのは非常に良いと思うのですが。

ですからやっぱり限られた民間だけで、最初からできないんだ、だめなんだっていう発想のもとでやっているということに非常に魅力があるのではないかなと思う。今後もっとそういう3者の開発事業っていうのかな、まちづくりが行われていくと良いのかなと思いますけどね。

○福角： 水上さん自身は不動産関係ということで、企業という立場でまちづくりスクールに参加されたと思うのですが、ここに住民としてはどうですか？地域にこういったセンターがあること、講座があることについて。

●水上： はじめはね、すごく取っ付きにくいというのかな、アーバンデザインセンターっていう名前が住民に向

いてないんですよね、それこそ何とか会館の方が親しみがあると思うし、今日みたいに、スーツ姿の人が出入りしているという感じだと、地域住民にとってはまあ昔ここが開拓部落だったものですから、そういう面でもね、それこそ地下足袋で入って来られるような体制があると良いのかなと思うんですけどね。まあそれはでも理想論であって、ある程度のラインは必要なのかなと思いますけどね。私は今わかってきて、これで良いなと思っています。最初は側に寄り難い存在でしたね。

○福角： スクールを3回する中で座学形式、ワークショップ形式など色々な講義を体験されたとおもうのですが、どういうものが一番面白かったですか？

●水上： 私はね、やっぱり現場で動いていた人間なんで、ワークショップ形式が楽しかったですね。

○福角： 座学にしてもワークショップにしても、難しくついていけないといったことはありましたか？

●水上： それはありますよ。やっぱりね、私なんか基礎教育ができていないわけではないので、言葉自体も始めて聞くようなものがたくさんある。けども、帰ってからもう一度資料を見直すことによって、そうか、こういうことなんだとかね、思い出されるんで、そういう意味ではどういう方法でも良いと思うんですけどね。

○福角： 3000円の参加費はどうですか？

●水上： 安い！3000円であれだけの講義を受けられるのは良いですよ。

○福角： 講義時間はどうですか？

●水上： 丁度良いですね。2時間以上になると集中力がなくなるので。

○福角： 全部で4～6回のプログラムはどうですか？

●水上： もっとほしいなー。ひとつのテーマで10回くらいあったらいいな。

○福角： まちづくりスクールに参加される前からUDCKのことはご存知でしたか？

●水上： 知ってましたよ。資料も頂いたりしていたので、旧UDCKのデッキの改修なんか私私の会社でやっていたので。どうしてそれをやることになったのかな。田口さんからお願いされたのかな。

○福角： 仕事で来られる以外には何か利用されていましたか？

●水上： 町会の人たちの福祉の問題も考えてて、ここへ来ると結構たくさんいろんなこくがあるし、この地域にも区画整理組合というのがあるのだけでも、その他にまた先の面を考えたときに情報が転がっていたんですね、そういう意味で利用はしていたね。

○福角： イベントには参加されていましたか？

●水上： はっぱっぱ体操をやっていましたね。今でもやっていますよ。今はサクセスホームが窓口という形でやっているしね。

○福角： ここに参加することで、UDCKの認識は変わりましたか？

●水上： 変わってきましたね。UDCKのスタッフの人たちが、高くとまっていなくて、積極的に受け入れてくれたので、良かったなど。始めはもう全然。我々とは別世界だなと思っていましたから。地域の人もそういう風に認識を持っている人も多いのではないかな。

○福角： どういう風にUDCKの認識が変わりましたか？

●水上： 当初は限られた人たちだけで、まちについて議論する場—オープンじゃないところで議論する場だと思っていた。実際は違った。

○福角： それはどういう時に違うと感じる様になったのですか？

●水上： やっぱり2、3と通うようになって、スタッフが閉鎖的でないというのがわかってきたからかな。

○福角： 活動に参加することで情報が得られるとおっしゃっていましたが、他の活動を知るきっかけみたいなものにはなりませんでしたが？

●水上： なりました。チラシやポスターでね。

○福角： それを見て参加したいなと思ったことはありますか？

●水上： ありますよ。千葉大のカレッジリンクなんかも参加したいんだけど、仕事の関係で曜日が合わないの。私はウィークデイの方が良いので。

○福角： 学習プログラムが一番興味があるのですか？

●水上： そうですね。

○福角： その理由は何ですか？

●水上： やっぱりね、自分の仕事（昔やっていたものも含め）に関連することが良いかな。自分の欲だね。

- 福角： まちづくりスクール等に参加して新しい仲間とかコミュニティみたいなものは生まれていますか？
- 水上： まだね、私は人付き合いがへたなので、もうちょっとコミュニケーションがとりたいんだけど。それは常に感じていることなの。名刺交換をしても、その後がなかなか続かない。
- 福角： 卒業生を集めて、また次の活動にいくようなものがあれば参加したいと思いますか？
- 水上： 今ね、私は若柴の歴史をスタッフを集めてやるということ、始めたんです。来年の5月位までにみんなを集めてやるということ。おせっかい活動というのがあって、そこでやっている。例えば前のゴルフ場で使われていたステンドグラスを駅の中でも使っていたりするんですよ。
- 福角： その関連でまちについて色々聞きたいのですが、まちの福祉はどうですか？
- 水上： 先々不安なところは非常に大きいですね。豊四季団地でははっばっば体操を健康のために教えにいったことがあるんですよ、そうすると独居老人が約250名集まってきましたね。その後今度社協のアミゼ柏というところで大学の先生の講演と私のスピーチとはっばっば体操をしたんですよ、高齢者の方は非常に深刻ですよ。今は何とか生きてるけど、今から20年、30年後を考えたら怖いですよ。老人会も市として行うのは今年で終わり、各町会で今後は進めるということになったし。
- 福角： 防災はどうですか？
- 水上： 古いところでは消防団なんかも持っているんですけどね。現実的にあんまり活動していないって感じですね。年末に火の用心で歩く程度で。決まった活動というものないし。
- 福角： ふるさと協議会がやっているのとはまた別なんですか？
- 水上： ふるさと協議会が行っているのは年にお盆と年末の2回だね。
- 福角： コミュニティとか交流活動はどうですか？
- 水上： 各町会においてはあまりないようですね。なので先ほど言ったようなおせっかい活動というのをだんごの会という会で月1回程度交流活動をやったりしているんですけどね。
- 福角： そうすると、いまこの地域でまちのクラブ活動等の新しい住民が入りやすいような交流活動をやっていますよね、それについてはどう思いますか？
- 水上： そういうのは町会単位ではないし、ふるさと協議会がやっている活動も積極的にという感じではなくて、義理でやっている感じ。文化祭で展示する作品を集めるのも大変。だからUDCKがリードしているのはとても良いと思う。
- 福角： もしUDCKにそういった住民の交流機能がなくなったらどうですか？
- 水上： 新旧のコミュニケーションはとれないでしょうね。昔の人は昔の人みたいになっちゃうでしょうね。この地域の人は地域のことを「元村住民＝モトムラ」と言ってるんですよ。そのモトムラの人が閉鎖的だからね。
- 福角： ふるさと協議会がそこを繋げるために作られて、これまで機能してきたと思うのですが、それを今はUDCKが担っているという風にも考えられるのですが。
- 水上： そう思いますね。
- 福角： 田中のふるさと協議会の会長さんに聞いたら、田中は新しい人を受け入れることに慣れてると仰っていたのですが、どうですか？
- 水上： やっぱね、寺嶋さんや社協の人が言っていることと現実はずれているところがあると思う。いくら受け入れますよ、と言っている、現実的には新しい人って飛び込んで行きづらいという話がありますしね。私自身、社協で活動していますが、そういったことを言われますしね。
- 福角： 教育とか子育て活動はどうですかね？
- 水上： 田中地区全体で見ると難しいところはある。若い方ってね、教育に熱心な方が多いんですよ。教育というと、いわゆる上層教育で勉強するのか、それとも学習を主体として行うのかを考えると、田中地区と松葉じゃ違って、今子どもは選べる時代。田中地区の子どもでも松葉に行ける。松葉に行けば、東葛高校に進学率が高いし、そっちに行っちゃう人も結構いるんですよ。のんびりと健康第一で、という親御さんは田中の小学校を選ぶだけだね。今度新しい学校ができたらどうなるだろう、と思っています。
- 福角： 景観とかどうですか？
- 水上： 感性の問題だから非常になんとも言えないのですが、まあまあかなと。ただこれからは意匠がとても重要

になってくると思っています。というのはその時代のニーズに答えられなければいけないわけですよね、そういう意味では意匠の問題も含めて考えなければいけないのではないかと、思うわけです。

そういう意味ではまちづくりも同じで、時代を先取りできないまちづくりはだめだと思うんです。

○福角：ここはどうですか？

●水上：この経済情勢で足踏みしているんじゃないですか。

○福角：自然環境はどうですか？

●水上：グリーンベルト構想を取り入れたり、桜並木のをやったりね、ああいうのは良いんじゃないかと思えますけどね。地区計画は普通なんじゃないですか。もう少しこの独特なものがあれば良いと思います。あとはまちづくりにおいて一つ良いたいのはね、夜間人口は現在増えているけれども、昼間人口も増やしていかないといけないと思うんですよね。駅前に事業所も含めて、トータルな計画をしないと、将来ゴースタウン化していくと思うんですよね。

○福角：今後そのようなまちづくりを担っていく主体は誰だと思いますか？

●水上：3者の協働、コミュニケーションが取れば良いのかなと思いますね。そして学は、やはり理想論で進んで頂きたい。

○福角：水上さんが考えるまちづくりって何ですか？

●水上：私が考えるまちづくりってね、ふるさとと子どもたちが呼べるような、ことがまちづくりかなと思っているんですが。

○福角：水上さんの考えるまちづくりは、活動に参加されて何か考えが変わりましたか？

●水上：変わりました。先ほども言ったように、元々私は経済の出身で基礎がないものですから、そういう面では、ものの考え方が変わってきましたね。

○福角：どういう風にですか？

●水上：いわゆるね、理論的な問題はなくて、実務的な問題でまちをつくるというか開発をしてきたわけですよ。現実と理想が巧くコミュニケーションがとれるようになった、弾力的な考え方ができるようになったというかんじですね。と自分では思ってます。

○福角：水上さんのおっしゃる実務的な部分と、理想的な部分というのは具体的にはどういうことをイメージされていますか？

●水上：今までやっていたまちづくりとは、経済性が第一で収支のことを考えてやっていたわけですね、利益がでなければ失敗というね。余裕のないまちづくり、遊びがないって感じだったわけですね。でもこういう（まちづくりスクール）ところに来て、この現代のまちづくりを見ていると、ある程度遊びがあるのかなと思ってきているんですけどね。

○福角：スクールに参加する前まで、まちに関わっているという実感はありましたか？

●水上：仕事上はね。その程度でしたね。都市計画法の開発行為の許認可を受けたり、旧宅造法のときからやりましたんでね。

○福角：スクールの参加後はどうですか？

●水上：今は、はっきり言って、まちづくりと言うより、もう少し福祉かな。一番興味があるのは、まちづくりも兼ねて、高齢者がどうなっていくのだろうということですね。そこに関わっていききたいというのはありますね。

○福角：そういったことを行う際に、リーダーとして引っ張っていききたい、という思いはありますか？

●水上：うーん、みんなと一緒にかな。それしかないかなと思います。

○福角：スクールに3回参加されたということで、なぜ何度も参加しようと思われたのですか？

●水上：毎回テーマが全然違うでしょ。色んな角度からスクールを開いて頂きたいな、今後も参加したいなと思いますね。

○福角：1回ではわからないこと、何回も行ったからこそ得られたものはありますか？

●水上：私が一番始めに参加したのは公民学のまちづくり、2回目はワークショップを取り入れた内容、3回目は高齢者を含めたもの、それぞれみんな違うんですよ。こうして違うテーマを学んだことで、「まちづくり」ってこんな見方もあるんだ、と意識付けられたのは確かです。ただ単純にまちづくりというのは道路作って公園作って家を建ててというのがまちづくりじゃないんだと言うことがね。それとあとURがやったまちの外構をみんな整えてやるとかね、そういったことはやってきた訳ですけど、ちょっと今回は違うんだよね。高齢者を対象

としたものなんか、このまちの先を見据えてやっていることですからね、斬新なところはありますよね。

例えば県にしてもURにしても、なんて言うのかな、まちづくりコンセプトというのは一応出しているんですけど、実際は違うわけですよね。計画と実行の間に様々な違いが出てくるのでね、やはりUDCKの大義名分をもっと全面的に打ち出していけば良いのではないですか。やはり意識付けが大事ですよ。

○福角：特に印象的だった会ってありますか？

●水上：柏市の福祉部長さんの話。高齢者の実態の話聞いた時は少しショックでしたね。建築なんかやっていて、せいぜいバリアフリーだとかそれくらいしか考えていなかった。これからのまちづくりとは、高齢者同士が助け合っていく、高齢者の中で活性化するまちづくりってあるのかな、と感じた。そういう意味では色んな問題意識、テーマを与えてもらっている。

No	23 (1人)
日時	2010年11月10日14時～15時半
場所	カフェ アゴラ
対象	市民 ●校篠邦夫さん
質問者	○著者

(アンケート項目を見ながらの質問)

- 福角：趣旨説明
定年退職されてからこちらにお住まいのようですが、それまではどちらにお住まいだったのですか？
- 校篠：茨城県の龍ヶ崎市。15年くらい住んでいたかな。それまでは東京のアパートに住んでいたんだけど、自分の家を持つとうということで、龍ヶ崎に土地と家を買ったんだよね。あのね、住み替え理由はね、一つはね、今後高齢になっていくのにな、利便性。住宅公団が開発したまちで、お店があんまり多くない。車があればとても便利だが、車がなくなると生活ができなくなる場所。それから2つ目はね、若い時は庭があったら良いなと思ってたから、庭と家庭菜園ができるところを買ったんだけど、だんだん庭と畑の手入れが面倒くさくなってきた。その2つかな。で、結局鍵1つの生活に戻って来た。それが転居の主な理由。
- 福角：郊外にマンションはたくさんある中でどうして柏の葉を選ばれたのですか？
- 校篠：ここはね、まず買い物、鉄道が近い、その他病院関係も近い。そういう意味で利便性がとても良い。あとは東京に出るのが近い。それが主な理由かな。そこら辺は妻よりも私の志向かな。
- 福角：パークシティの見学の時に、UDCKの説明とかも聞きましたか？
- 校篠：それは聞いていないね。
- 福角：東大や千葉大と何かできそうというのは決め手にはならなかったですか？
- 校篠：それはなかったですね。
- 福角：ではまちづくりスクールに参加するきっかけを教えてください。
- 校篠：きっかけはね、退職後にやることがないから、これからの生活の為に何かやりたいと思っていて、千葉大でカレッジリンクがあるというのを何かの情報誌で見

て、それに参加した。それをきっかけにまちづくりスクールの存在を知って、参加した。

- 福角：ご回答を頂いた紙にはまちづくりに興味があるとかUDCKの活動に興味があるという欄に○がついていたのですが。
- 校篠：カレッジリンクに何度か参加する中で、まちづくりスクールに参加している人がいて、その人から話を聞いた。それで面白そうだな、と思った。
- 福角：参加するにあたって、何かご自分で目的などはありましたか？
- 校篠：きっちりしたものはないけれど、前に住んでいた地域が造成開拓された土地で、大きな開発がされたんですね、だけど、まちづくりとかまちという概念がほとんどなかったんです。ですから町内会は行政の都合でつくっているだけのものであって、自主的に何かをやるわけではないし、そんな感じだった。何の面白みも、地域のつながりもなかった。そういうまちにずっと住んでいて、こんなのじゃな、「生活」ってこれで良いのかな、という想いがあった。この地域（柏の葉）もそういう意味では新しい地域ということ言えば同じで、あぁなっちは（龍ヶ崎のように）いけないと思っていたこともあるのかも。
- 福角：実際に参加されてみて、どういうところが良かったと思いますか？
- 校篠：それなりにここで知人ができていったということですね。それはコミュニティの第一歩ですから。この土地である程度の知り合いができたということは良かったことの一つですね。個人的に顔が会えば話す人ができたというのはね。それと、何かこう動かしていかないと、まちづくりはできないだろうなど。新しいまちではこういったこと（それぞれの活動）をしなければならんだろうな、というのが龍ヶ崎のこともあって、実感を持って感じていたんだと思う。誰がまちづくりスクールの主体になってやるのかもよくわからないけれども、まあここではUDCKが主体になっているのかな？市なのかな？わからないけど、そういった動きは面白いと思うね。
- 福角：校篠さんはカレッジリンクもまちづくりスクールも両方参加されているということですが、違いがありましたら何ですか？
- 校篠：まー考え方は同じに感じる。カレッジリンクもテーマは食だとかなんだとかあるけれども、自分たちでものをつくりあげていくという一種のコミュニティ活動みたいなことをしながら、地域で活動できる人をつくり

ましよう、そしてまちづくりを、大学だけでない行政だけでなく、企業だけでなく、住民も主体で作れるそういったリーダーを作ろうとしているというふうにいるんですね。だからそう大きな違いはないかな。進め方も座学、ワークショップ、なども同じだし。

○福角： カレッジリンクでは修了生を対象とした「カルネット」という住民団体ができて、カルタをつくったり生け垣をつくったりという動きがありますよね？

●校篠： 私も行っていましたよ。ここ2、3回は行ってないけど。生け垣はまだ始まったばかりでしょ。グリーンフィールドね。

○福角： 参加していく中で、UDCKのイメージと違ってかわりましたか？

●校篠：少しはわかってきたという感じかな。UDCKもね、大きな部分から小さな部分までかなり広範囲でやられていますからね、全部というわけにはいかないけども。

○福角： まちのことについて聞いていきたいのですが、福祉についてはどうですか？

●校篠：福祉はまだ何もだよ。

○福角： 防災活動もあまり積極的ではないみたいですね。

●校篠： 町会もね、マンションの中だけでできたけども、町会とまちづくりとちょっと一致してない。本来はイコールなんだろうとは思いますがね。でも今の町会はちょっと違うんじゃないかな。行政がつくったというだけで、誰も帰属意識ないし。私が昔田舎で住んでいた時は町会イコール地域コミュニティだったから、何をやるにも町会でよかったけど、でもそういうわけではないですからね。

○福角： ふるさと協議会はどうですか？

●校篠： 名前は知っているんだけど、全然参加した事ないし。

○福角： 先ほど少しお話にありましたが、今後、住民主体で自らまちづくりに関わって行くという意識はありますか？

●校篠： なんかにいきましよう！とひっぱっていく元気はないんだけど、なんかにしたいな、という気持ちはあるんだけどね。自分からはちょっとね、気力がないな。それだけ強い動機も今は持っていないな。

○福角： 校篠さんが考えるまちづくりって何ですか？

●校篠： よくわからないな一、何がまちづくりなのか。何だろう。

○福角： 活動に参加する前のまちづくりのイメージと、参加した後のまちづくりのイメージって変わりましたか？

●校篠： 変わっているということじゃないと思うんですよね。まちづくりというのは、言葉は知っていて、龍ヶ崎で住んでいたときから、退職したら町内会活動でもやるかなーとか冗談で言っていたんですけど、その頃からまちについて考えていて、ここへ来てあらためてまちづくりということに触れて、自分で色々そういうところへ行ってみて、まちづくりって何だろうと疑問がある訳ですね。いわゆる町内会のような小さなことをいうのか、そうじゃなくて、キャンパス地域全体のしくみづくりみたいなことをやっていくのか、どっちだろうな、どういうことをいってるんだろうなと、私自身探しているのかな。よくわからないな。他の人もどう思っているのかな、と時々思うのですが、そういう議論はしたことがないな。そういうことを（まちづくりスクールとかで）しても良いかもしれないけど。テーマの中だけでやるのではなしに、まちづくりって何だろうっていうテーマでやるのも良いかもね。その中でそれぞれがテーマを見つけるとかね。そんな感じです。

もう一つね、さっき福祉の話が出たけども、一つ気になっているのが、ここの地域で例えばコンサートとか、演芸だとか、そういうふうなことはね、全然機会がないんです。柏の駅周辺まで行けば、あるんですけど、ここは全くないんですよね。それで良いの？ってね。文化施設、福祉施設が。新しいまちだから、当然ないのはわかっているんだけど、これから完成してきた時にどうするんですか？ここらへんの計画を見ても、示されていない。それが気になっていて。ここにつくらないで、柏のものを使うというならば、もっと柏とつなぐとか、そういう位置づけなのか。この地域で最終的に人口が数万人単位になるわけですよね、ここの住民としてどう考えておいたら良いの？と思う訳です。住民が集まって、コンサートをやりたい、となるかもしれないし、地域の人々が色々コミュニティとしてやっていく、そういうのが出てきた時にどこで発表するの？そういう場がないと。まちづくりの中で、そういう部分が出て来なくていいの？ソフトだけじゃなくてね。その部分だけ取り残されちゃったら、おかしなまちーただ住むだけ、ベットダウンになってしまうんじゃない。それは違うんじゃない？って思っている。

そらが行政の基本計画の中にどういうふうに関与されているのかね、まちづくりの基本計画みたいなやつはね、専門家がマニュアル的につくっていくんですよね。今動いている住民が何を要求しているかということが、

専門家を避難する訳じゃないけど、ニーズを把握しているつもりかもしれないが、意外に抜け落ちているんじゃないかという気がしている。だからそういうものが先にできちゃって、ハードの中へ後から住民が入っていくというイメージ。その中でどういうふうにまちをつくりたい？と問いかけてられている感じ。そのところがまだ全部できあがっていないんだから、今のうちに住民の声が合致して行ければ良いと思いますね。

○福角： 今この駅前の広場で、住民の方の意見を聞きながら一緒に考えていけるようにしよう、という動きがあるんですよ。

●校篠： それは賛成だな。ただロータリーだけあって、ここじゃ人が集う場所が全然ないんですよ、そういう意味では良いのかもしれない。

○福角： 生け垣のプロジェクトも、住民の方がハードの部分に参加するという意味で、良い動きだと思います。

●校篠： 千葉大は当初の計画から色々変わってるんじゃないかな。

○福角： まちづくりスクールとかカレッジリンクに参加した人が、その後何かをやりたいと思った時に、その受け皿がないといった問題を持っている人もいます。

●校篠： まだみんな引越して間もない人が大部分でしょ、だから人のつながりがちゃんとできていないんですよ。だからお互いに連絡を取り合って、あそこへ参加しましょうとかそういう話がまだできない。ですから、どこからやっぱり人を集めたりとかをやらないと、参画する人が出て来ないですよ。それがカレッジリンクであり、まちづくりスクールなのかもしれないですけど、しばらく時間かかるんじゃないかな。動き出すまでに。まあ他の人はそうじゃないかもしれないけど、私の場合まだ時間がかかるんだろうなと思うんですけどね。

○福角： そうするとこれからも活動に参加し続けるという感じですかね。

●校篠： うん、できればね。

○福角： 今のお話を聞いていると、校篠さんが考えている時間のスパンでいうと、まちづくりスクールなどに1参加して何か知識を得ようというだけでなく、参加し続けることがひとつのまちづくりの取り組みという風に考えていらっしゃるのでしょうか。

●校篠： そうですね、人のつながりができて行ってね。ここはね、昔の考え方でいうと、まちができて、生まれ育って、例えば青年団があったり、色々あったり、町会もなんでもそこに集まって、議論するんですよ、そう

いう中でつながりができていくんですよ。それは青年団の人同士が子どもの頃から知り合いで、「おい、おまえ」の間柄になって、みんなお互いが分かり合っている中ではじめてできることですよ。それが、このまちで始めて顔を合わせる人たちが来て、そこで本音の話が出来るかと言えば、ほとんどがサラリーマンだし、退職していても根はサラリーマンですから、本音を言うにはものすごい高い垣根があるわけですよ。無意識のうちに。ですからそれが崩れるにはかなり時間がかかる。ですからやっぱり私は、回数をかけて、その中で入れ替わりはありますけど、だんだんそういう人とつながりができていく、その中で人間関係ができて、始めてまちやまちづくりスクール等に対して話す事ができるんだと思う。

○福角： 何回も参加されて良かったことや、気づいたことというのは、内容というよりも、人と人のつながりが徐々に変化していっているところを見れることですかね？

●校篠： そうしたことだと思いますよ。コミュニティの芽が出始めているのかもしれない。

○福角： そういう方達と、まちづくりスクールやカレッジリンクで学んだ事が共通の話題で議論できることについてはどう思いますか？ふるさとではないまちで、新しい人同士が自分たちのまちについて話し合うことってなかなかできないと思うのですが。

●校篠： ここでもまだだともおいますね。ここでまちづくりと言ってもね、実際に例えば鴨浜さんとか、この地区とは言いながら、もともとある近くの開発地にずっと住んでいる人と、我々みたいに最近ポンッと入ってきた人間、そしてこれから相当開発されますでしょ、そのところの兼ね合いもありますから、同じ「まち」でも全然意味が違うと思う。ですから、先ほども言いましたけど、広く捉えたまちなのか、ここの中だけのまちなのか、そういうところも考えて行かないと、ただまちづくりと言って、みんながまというテーマで同じ事を議論するかというところでもないと思う。ですから鴨浜さんなんかはまちは（柏ビレジ）もうできてるから、このエリア（柏の葉）全体の中でまちを捉えていると思うし、私たちはまだここに引っ越してきたばかりで、極論を言えば、隣近所の人もわからない状況ですから、まちづくりの範囲はどこをこのことをいうの？ここの中だけでも1,000世帯ありますからね、ここだけでまちとも言えるんですよ。まちづくりって、実際にはなんだろうなっていうのはわからない。そこら辺をはっきりさせながら、今この場ではこのまちについて考えましょう、全体のエリアで議論したいね、とかそういうふうになっていかないと、何となく違うかなと思う。

○福角： 田中地区で昔から住んでいる人のことを「モトムラ」というらしいのですが、そのモトムラの人と新しく来る人を繋げるために、柏市にはふるさと協議会という組織ができて、これまでに機能してきた部分もあると思います。そしてこの地域（柏の葉）ではUDCKがそれを担ってきたのかなと思うのですが。

●校篠： うん、でもなかなか繋がらないね。前住んでいた龍ヶ崎でも、昔から住んでいた旧市街地の人と新しく来た人の考え方はもう全然違うから、交流はできなかった。ここでも同じだと思う。だから田中というのは市の行政区では田中地区とひとつに捉えるけれども、私たちのイメージでは、田中の人はここと違うという意識を持っていて、それがどうして一緒にならなければいけないの？という考えを持っていると思う。

○福角： 常に何かを一緒にする必要はないと思うのですが、UDCKの活動は対象の範囲を明確に示していないからこそ、モトムラと呼ばれる人がこういうところに参加して、それをそれぞれの地域に持って帰ってもらって、そこでつながりができたら良いのではないかなと思う。

●校篠： それは良いかもしれませんね。まちづくりスクールでも田中から来る人もいて、駅前のプロジェクト（柏たなか駅）についてどうなってるの？って話ができるしね。それは0じゃない。じゃあそれを繋げるといことは、自然発生的にはなかなかでてこない、それは相当な時間がかかりますよ。そうじゃなくて、誰かがもっと意識的に繋げる為の何かを、仲立ちをしないと難しいことだと思う。考え方が違いすぎるからね。容易なことじゃない。だいたいね、田中地区に長く住んでいる人の考え方とこういう地区で暮らしている人の考え方が違うのは、農家とサラリーマンというのが地区で分かれてしまっている。普通のできあがったまちだったら、そこに農家もサラリーマンも自営業もあるから、町内会などの活動にサラリーマンが出れなくても理解していたりできるけど、こういう風に地域で分かれているところは、そういう話にならないじゃないですか、だからそれをくっつけようというのは相当難しいですよ。だからまちづくりというのはそれを一つにするの？という話。柏市みたいなところは、そういう地域がいくつかあって良いと思う。

○福角： 松葉地域も開発と同時に同じ世代の人が入ったわけですよね、そうすると、世代の幅とか職業の幅がないと、元気なときは良いですけど、高齢化が一気にくるし、そこだけで孤立するなと思うんです。

●校篠： そうね、それもあつけど、一定のこれだけのボリュームがあれば、ここの中だけで、みてもここも一定

の年齢が入ってくるわけ。だからそうならないためのしくみをここの中でどうやってつくるか。ここに幼稚園が1つあるけど、ここの住民すら受け入れられない程小さい規模。てことはここで子どもを育てられないでしょ。てことは後から入ってきた人は子どもが小さい人は無理でしょ。そしたらどこか高齢者が出て行ったあとに若い人が入れないじゃないですか、そしたら世代がまた偏ってしまう。ここで育て、大きくなって結婚して、ここで子どもを育てたいというしくみがないじゃないですか。それがどんなエリアで考えられているのか。そういうことを考えないと、20年経ったら高齢者だらけになる。そこで高齢者施設があるかというところでもない。人がいくつなかりをつくってもだめじゃないですか。そういう意味では、行政も入ってれば丁度良い話なんですけどね。龍ヶ崎はまさに子どもがいなくなっちゃったまち。これではね、どうしようもない。寂しいまち。小学校もガラガラ。そんなことが考慮されていない。それは住民個人じゃどうしようもない話ですよ。ここもそうですよ、ここに交番を作ってくれ、郵便局も1つもない。いくら要望を出しても、出来てしまったまちには何もできない。住民ニーズから考えたら必要。最初の都市計画から入ってなかった。その後気づいた時に、どうしてそれを変えることができないのか。もうこれは日本の社会の縮図ですよ。はじめから考えることができないんだつたら、住民が住みはじめてからその意見を聞いてハードのまちづくりを考えないと問題が起きる。それが住民の目、生活者の目でしょ。行政はそういうところはなかなかできないんですよ、昔から。

○福角： 今までのみなさんの生きてきた視点でこのまちを捉えて、色んな意見が出るので面白いですね。

●校篠： そうですね。違う見方があって面白いかもしれない。

○福角： UDCKって半公共施設みたいだと思うのですが、誰でも利用しようと思ったらできる、でも行政の施設ではない

●校篠： 私はたまたま利用させてもらうようになったからわかるけど、ほとんどの人は何の施設かわからないよね。もっと出入りが自由にできて、オープンだよ、というのがわかるようにできないか、と言ってただけだね。KFVみたいなものが一緒になっている方が良いと思う。ああいうもの（UDCK）に、例えば地域の図書館が併設されるとか、一般の住民が出入りする機能が横にあったらUDCKにも出入りするじゃないですか、なんかそんなものがね、あんまり区切り無しにあつたら良いという気がする。

- 福角：UDCKも東大の中に入りますしね。
- 校篠： どういうふうにつくるんだろうな、と思っている。
- 福角： もし2階とかになったらダメですね。
- 校篠： そうですよ。気体しているのは、2番街にたくさん色々施設をつくっているから、むしろああいうところへ入った方が良いんじゃないかなーと思う。独立してポツンと立っていると目的がある人以外は入り難いですよね。せっかく大きな模型とかあるのにね。もっとモデルルームと連携をとったりね。そういう関係をもっとオープンにつくっていったら良いんじゃないの、そういうことがまちづくりに繋がっていくと思う。もっとオープンで。

No	24 (2人)
日時	2010年11月14日13時~14時
場所	新UDCK
対象	市民 ●豊田美奈子さん、戸田紘子さん
質問者	○著者

(アンケート項目を見ながらの質問)

- 福角：趣旨説明
基礎的な質問からですが、年代は？
- 二人：30代で、同じ歳。同級生です。
- 福角：今はお仕事をされていますか？
- 二人：会社員をしています。(別の仕事)
- 福角：会社はどちらに？
- 二人：二人とも千代田区にあります。
- 福角：戸田さんは柏の葉公園の近くにお住まいなんですよ？豊田さんはどちらにお住まいですか？
- 豊田：最近(今年の夏)引っ越しをしまして、今は南流山です。
- 福角：引っ越しをする時に、南流山と柏の葉で迷うということはなかったですか？
- 豊田：迷いましたね。TX沿線であって思ってた、最終的に南流山にしたのですが。柏の葉も良いと思いましたが。決めては、南流山が気に入ったっていうのもありますし、柏の葉を選ばなかった理由としては、私は独身なので、単身者向けの賃貸があんまりなかったの、というハード面が理由ですね。まちそのものは良いと思いますが。
- 福角：戸田さんはいつから今の家にお住まいですか？
- 戸田：6年前位です。
- 福角：その時はどういった理由でそこに？
- 戸田：もともと松葉町に住んでいて、たまに車で用事があってこの辺を訪れたときに、実家だったんですけど、みんなでここに住めたら良いね、と話していた。
- 福角：TXが通る話も？TXの利便性というよりも、公園の前ということが決めてだったのですか？
- 戸田：そうですね。公園の前が一番ですよ。
- 福角：UDCKまでは徒歩ですか？
- 戸田：自転車ですね。
- 福角：豊田さんはTXですよ？
- 戸田：そうですね。
- 福角：このまちでやっている活動で一番始めに参加されたのはまちづくりスクールですか？
- 豊田：もっと前だと、エコデザインツアーからかな。それに参加して、2年か3年前の5、6月だったと思う。戸田さんがここが地元で、「何かこんなイベントやってるよ」というので、私はそのとき八潮が実家で、その当時は八潮からみてつくば側に行くことがなかったんですけど、何かやってるならやってみよう、ぐらいの気持ちで参加しました。
- 福角：それからまちづくりスクールを知った経緯は？
- 戸田：確かそこで、メールアドレスか何かを登録したんですね、それで案内をもらって、また豊田さんを誘ったんですね。
- 豊田：まちづくりスクールでは、前半がレクチャーで、後半がワークショップで、ワークショップのテーマとして最終回には自分たちで何か提案をしようということ、何を提案するかというと、「どんなまちにしたいか」ということでしたね。
- 福角：戸田さんからの紹介で参加されたということですが、それ意外にも参加のきっかけはありますか？
- 豊田：気軽になんとなくという感じですが。どういうまちづくりにしたいかというワークショップはその時念頭にはなかったのですが、プログラムを見たときに、何となく面白そうかもなって思った。具体的に言うと、以前に参加したエコデザインウォークで、東大の先生の研究室で話を聞いて、その時に結構面白かったので、もっと詳しく聞けるなら良いなと思ったのがきっかけですね。
- 福角：戸田さんはいかがですか？
- 戸田：私はあんなにワークショップをやるとは思ってなくて、市民講座というか、エコロジーというか、環境についての話を聞けるということで。あとは金額もすごくリーズナブルだったので、気軽に参加できるなという気持ちで。
- 福角：環境に興味があるのですか？
- 戸田：そうですね、はい。
- 福角：参加する事が決まってから、何か目的みたいなものはありましたか？

● 豊田： 私は隔週で半日でしたから、休日の趣味程度のものであったんですけど、まあその内容を受けているうちに、最終的にどういうまちづくりにしようかみたいなことを発表するということになって、発表するぐらいならちゃんとやった方が良いのかな、っていう気分でしたね。もともとの目的意識というよりは、参加していくうちに、という感じですかね。

● 戸田： 私もかなり同じで、テーマが2回目くらいに決まったのかな。それでチーム分けされて、自転車になったんですけど、多分3つか4つ挙げたうちの1つで、日頃自転車を使っているんで、それでどンドン目的ができていった感じですかね。提案される内容ですとか、実現したら良いなっていう気分にだんだんなっていった感じ。

○ 福角： 内容についてだけでなく、ワークショップをやるうちにチームでコミュニティみたいなものはできましたか？

● 豊田： そうですね、それも良かった。たまたま自転車チームは若い女性が多かったというのものもあるかもしれないが、もちろん年配の人もいた。

○ 福角： 内容が難しすぎたとかはありますか？座学もですが、ワークショップのやり方なども含めて。

● 豊田： 私について言えば、簡単すぎるということはないかな。どちらかと言うと難しいというか、もともと知らないことばかりだったので、はじめてのことが多かった。

● 戸田： 私も知らないこととかばかりだった。あとはワークショップでは時間が足りないな、ということが多くて、早めに来て集まったりもした。あと宿題をそれぞれ持ち帰ってやったり。最後の形に持って行くには時間が足りなかった。

○ 福角： 座学とワークショップという形式はいかがでしたか？

● 豊田： 両方あって良かったですが、終わってから考えると、印象に残っているのはワークショップですね。レクチャーはその時はフムフムと聞いていましたけど、今思うと結構忘れてる。

● 戸田： 私も同じですね。

○ 福角： 全4～6回の回数はいかがですか？

● 戸田： 今回やっているときは、実現しなくても良いから提案をしようという形で持っていたので、回数はそん

なもんで良いのかなと思っていて、結果的に自転車クラブに結びついたのですが、もっと現実的な側面も持ちつつ、実現可能な範囲でやろうとするなら少ないと思います。夢物語で自由に提案する分には丁度良い。

○ 福角： その後また参加しようとは思いましたか？

● 豊田： 確か、継続してきても良かったんですけど、私たちが参加した回の後から、休日から平日に変わったんですよね。それで時間的に行けなくなったんですよね。

○ 福角： 時間が合えば、参加したいと思いますか？

● 豊田： そうですね、だから単発的なものにはその後も参加しましたよ。発表聞くだけのとか。

○ 福角： それはどの様に知ったのですか？

● 豊田： 確かメールで配信して頂きました。

○ 福角： 特に気になるテーマみたいなものはありますか？

● 戸田： カレッジリンクには二人とも参加しましたね。土日だったのもある。

● 豊田： 丁度まちづくりスクールが終わった後に参加した。

○ 福角： カレッジリンクとまちづくりスクールで違うところはありますか？

● 豊田： 前半レクチャー、後半ワークショップという形式は同じ。内容の違いはあるけど、似ていますね。カレッジリンクは千葉大の学生、まちづくりスクールでは東大の学生が参加していて、学生とのコミュニケーションがあるという意味では似ているかな。まちづくりスクールは元々そういう仕事をしていた方が参加していて、仕事の一環みたいなところもあると思うのですが、カレッジリンクはあんまり仕事の一環っぽい人はいないかな。仕事関係なく、個人的に参加してる人が多い気がする。まちづくりスクールはワークショップで最後に発表するところがすごく印象に残っている。前半のレクチャーはカレッジリンクの方が面白かった。興味の対象の問題だと思うのですが、カレッジリンクの方が、どちらかと言うと一般の人の生活に直接関係があることが多くて、こっちは行政的なこととか、ディベロッパー的な面もあったので、直接自分に関係することじゃなかったというのもあると思います。柏に住んでいる人はまた違う見方かもしれませんが。

○ 福角： どうして自転車クラブへ発展することになったのか、その経緯について教えて下さい。

- 豊田： まちづくりスクールの発表で、自転車に乗って楽しいし、まちも発展するみたいなそんな提案でしたね。
- 福角： もともと自転車は好きでしたか？
- 豊田： 好きでしたね。そんなに専門的な自転車に乗っていると違ってわけではないのですが、気軽に乗るレベルで。
- 戸田： 私はもう常に通学のときから自転車で、現在も通勤に使っています。ちょっと遠くても自転車。いわゆるサイクリングと違ってというわけではないですけども、生活の足として。
- 福角： 日常的に使う自転車の提案という感じですか？
- 戸田： そうですね、それとエコを結びつけるみたいな。
- 福角： 発表の前から、実現することは決まっていたのですか？
- 豊田： 発表は発表で終わって、その後、単発で、モビリティ・ラボに参加して、他のグループのメンバーも参加していて、そこで再会して、その日に雨が降って途中の行程で終わってしまったんですよ、それで途中で終わって心残りがあるから、私たちでもう一回やろうよみたいなことを言っていたんですよ。それで日にちを決めて勝手にやっていたら、私たちは自転車クラブをつくろうと思っていたわけじゃないんですが、中里さんがそんなことやっているのだったら、自転車クラブ結成したら？と言われた。タイミングですね。中里さんが、カレッジリンクのスタッフをしていて、わたしたちも受講していて、その合間合間に、最近こんなことやっているんですよ、という話になって、中里さんはモビリティ・ラボの企画とかそういったこともされていて、それで何か話している時に言われた。
- 福角： 結成時のメンバーは？
- 豊田： 私たちと、高野さんと、もう一人の4人、あと学生で柏原さん（柏原さんはモビラボの時のみ）。あとまちづくりスクールに戻るのですが、最後の発表の時に参加されていた新谷さんという方も加わって。
- 福角： その後はどれくらいの頻度で集まっていたのですか？
- 豊田： クラブを立ち上げるにあたって、ミーティングをしましょうということで、目的とか、経路とか、ナビゲーションをどうするかとか。
- 戸田： 千葉県サイクリング協会の人もオブザーバーで加わってもらった。モビラボの時に協力してもらっていて、中里さんがコネクションを持っていたので。
- 福角： 目的ってどんな目的でしたか？
- 豊田： 楽しく自転車に乗る、みたいなことだったと思います。
- 福角： どういう人を対象にされていたのですか？
- 豊田： そういう話もしましたね。告知の仕方とか。
- 戸田： クラブ活動のメルマガに載せていました。
- 福角： ということは基本的には柏の葉の住民の方が多いですね。
- 豊田： と思っていたんですけど、webを見て柏住民じゃない方も参加されていた。といってもTX沿線ですが。
- 福角： 柏の葉のこの辺の経路ですか？
- 戸田： スタートはここ（UDCK）というのは決まっていて、何回かやっているの、経路は色々ですね。
- 福角： 走って楽しいのは一番あると思うのですが、走って帰ってきてから、それについて話し合うこととかはありましたか？お昼とか。
- 豊田： お昼も一応内容に組み込んであったので、午前中10時位に集まって、走って、談笑して、解散してからもお茶したりはありましたね。あとこの辺のサイクリングの取り組みについて野村総研かどこかがアンケートをしていたことがあって、協力したり、そのままディスカッションしたことはありますね。あとは東大のオープンキャンパスに合わせて、自転車で走った後に東大のイベントと一緒に参加とか。
- 福角： まちづくりスクールで提案したことが、一つかたちになっていくという感想はどうですか？
- 豊田： まちづくりスクールでしくみまでは話し合っていないが、たまたまスマートサイクルが始まって、それと似てると言えば似ているが、まちづくりスクールではクラブまで立ち上げようということは考えていなかったの、提案したことが実現したという感覚よりは、流れで実現したという感じですね。実際提案の時は机の上での話でしたが、走ってみると、意外と走り難いところとかもあるので、そういう問題はありましたね。
- 福角： そういう提案と実現のギャップみたいなものは面白いのですか？
- 豊田： そうですね。

- 福角： まちづくりスクールに参加される前までは、UDCKはご存知でしたか？
- 戸田： 私は日々目にはしていたので、建物は知っていました。
- 豊田： 私は全く知らなくて、こんなのあるんだ、みたいな感じでしたね。
- 福角： 一番始めは何だと思いましたか？よく住民の方からは、自分には関係ない施設だと思っていたなどと言われるのですが。
- 戸田： 活動に参加して、どんな施設か知っても、やはり用事がない限りとても入り難い。入り口がスタバだったら良いのにみたいな話は友達としたことがありますね。
- 豊田： サイクルカフェを作ろうみたいな話もしていた。あとまちづくりスクールの時も、別の班がサロンをやりたいと言っていた。
- 福角： 始めのイメージと今のイメージは違いますか？
- 戸田： 最初は全く関係ないと思っていたのですが、今は、この地域のことを考えてくれている場所なんだと、ちょっと距離は一歩だけは縮まりました。
- 豊田： 私の場合はもともと知らなかったので、エコデザインに参加するときに知ったので、イメージは特になかった。
- 福角： ここは、この新しいマンションのための施設だと感じられることが多いのですが、いかがですか？
- 戸田： そうですね。感じますね。クラブ活動とかをみても、単なる想像ですが、このマンションの人が参加しているんだろうな、という内容のものだったり、メインの活動の場所があそこ（KFV）というもありますし。柏市全体ではないな、と感じますね。
- 福角： クラブ活動は柏の葉周辺に限定されていると思うのですが、まちづくりすくーるなんかはTX沿線とか市全域だったりしますよね、実際にここを使う方は対象の範囲をどう捉えているのかなということが気になったので。
- 戸田： 私はたまたまここからみがありますが、私の母とかは例えばマルシェをやっているけど、全然知らないですし、興味はあると思うんだけど、情報を仕入れられない。あと柏の葉に住んでいても、柏駅を使った方が楽なときとかがあって、駅前に来ないとやっぱり情報が仕入れられないことが多いので、同じ家に住んでいてもこんなに違うんだという感じがありますね。
- 福角： ここにあったら良いなという機能とか、もっとこうなったら良いなというものはありますか？
- 戸田： サイクルカフェで、北参道というところに期間限定だったんですけど、そういうのがあって、そこで自転車のレンタルもやっていて、カフェもやって食事も出して、たまに自転車関連のイベントもやって、情報発信もしてるところがあったので、そうやって人が自然と集まってくるのってカフェだったり、イベントやったりっていうのがあると良いかな。どうしてもフラッと来ようとは思わないですよ。
- 豊田： 前に加藤さんという方が言っていたのですが、掲示板みたいなものがあつたら良いなって言っていました。イベントのお知らせとか。張り出してあるといいねって。あとは、ウェブで見て自転車クラブに参加した人はこのイベントに参加したら、三井のマンションの宣伝をされるのではないかって思っていたらしいです。なので確かによそから急に参加し辛いみたいですね。
- 福角： ではまちについて聞いていきたいのですが、まちづくりスクールに参加される前まで、「まちづくり」にどういうイメージをお持ちでしたか？
- 豊田： まちづくりに対してのイメージはなかったというか、全く念頭になかったのと、地元だった八潮にはまちづくりの活動は盛んじゃないので、身近なものではなかった。ですけど、自分はやっていなかったんですけど、流山に住んでいる友達がまちづくり活動をしていたのと、あとここに来てみたらそういうことをやっていたので、何かこの辺の地域は盛んなのかなと思ったのですが。まちづくりスクールのおかげで身近にはなったかな。
- 戸田： 昔はまちづくりスクールって聞いても、すごく漠然としていて実際何をするか全然わからなかったし、どちらかと言うとエコとか環境に大しての意識が自分の中では強かったので、環境問題で自分ができることというとなかなか難しいが、それを地域でできるならって思って参加した気がします。
- 福角： 以前はまちづくりって誰がやるものだと思っていましたか？
- 戸田： こういふ規模になると、ディベロッパーっていうイメージ。
- 福角： 自分ももしかしたらその主体になるかもしれないという思いはありましたか？自分の身近な活動がまちづくりなんだとか。

- 豊田：行政とかディベロッパーがやるものだという思いは当然あったんですけど、市民とかも、めちゃくちゃ志を持ったアグレッシブな人がやるもんだと思っていた。私とか戸田さんもそうだと思うんですけど、志がすごくあったというわけではなく、何となく、気軽に始めたのでそういうイメージは以前にはなかったですね。普通の人も気軽にできるんだな、っていうイメージが広がりましたね。
- 戸田：このまちづくりというのは、これからつくられるまちに対して、住民が何か意見を言ってそれが受け入れられるかみたいなことだと思うのですが、実際はこういうところ以外に住んでいる人が多くて、そういう人からすると、問題があって、その解決を行政に求めて実現していくというイメージ。
わたしたちも、スクールの最後に市長（前の本田さん）にも言ったけど、「今柏市は道路どころじゃないんだよー！」みたいなことを言われて、意見を反映する、まちづくりというのは実際は難しいんだなということを感じた。
- 福角：活動に参加していくなかで、まちに対する意識みたいなものは変わりましたか？
- 豊田：私は柏に住んでいないので、まちが良くなるよやうという意味でそこまで盛んに活動するつもりはないですね。まちづくりスクールも参加したし、クラブ活動もやっていますけど、私としては楽しければ良いみたいな感じかな。自分の住んでいるところに置き換えてみれば、このようになれば良いなと思いますね。そんな取り組みはないので。
- 戸田：私はとても消極的な参加だったのですが、こういう活動もまちづくりになるんだという発見がありました。自転車クラブというのが、始めは友人だったりまちづくりスクールで知り合った人と柏市内を再発見！みたいな目的がちょっとあったりして、実際に自転車で走ってみると、柏市内に住んでいる人もいれば住んでいない人もいて、そういった人と回ることによって、「あ、こう見られているんだ、こういう見方もあるんだ」っていう。行ったことのない場所もある場所もあるのですが、再発見があった。さらにそういう活動がまちづくりにもなっているのであれば、すごい嬉しいなと思います。

No	25 (1人)
日時	2010年11月12日14時～16時
場所	新UDCK
対象	市民 ●網野敬司さん
質問者	○著者

(アンケート項目を見ながらの質問)

●網野： 情報って、流れるようで流れない。ここのUDCKの位置づけだって、他の団体とかがどんな活動をしているのかとかかっていう情報を持っているようで持っていないじゃん、千葉大学も。中ではたくさんあるんだけど、その開示生というのが弱いのと、市民活動センターの沖本さんという人がいるんだけど、彼女にもやはり柏市に300ものNPOがあるんだけど、その情報が巧くね、ある程度同じようなことを考えている人が同じ方向性を持ってできたり、情報が交換できたりね、そういうことをしていかないと、結局単発で、それぞれのベクトル、その範囲だけでやって結局市民協働といっても限られちゃう。そういうのは北沢先生が言っていた「市民協働型のまちづくり」から言うと、そこにしくみをつくっていけないと、そういうのが必要だと思うんですよね。本来なら似たような情報を巧く組み合わせればそれが繋がっていくのを考えるのがね、役所の役割なのではないか。一緒に活動しないまでも、情報はお互いに共有しているとかね。ここはその拠点になるし、それがたまり場になるのかもしれないけれど、やっぱりなかなかね、社会福祉協議会とかふるさと協議会の諸団体があるじゃない、それが一緒になると色々言っているけど、なかなかできない、それに加えて年齢層も高いし。それに今日も審議会で発言したのがね、学校のPTAとかのコミュニティもすごくしっかりしていて、ローカルにあるんですよ、それが小学校を卒業するとなくなっちゃうんですよ。それでまた中学校でやる人が部分的にしかならなくて、だから小さいときのコミュニティって男も参加してるのよ。子どもの為に親が来るっている単純な話だけれども、そのためにそのコミュニティをうまくまちづくりに活かせる資産だと思っていて、それをね、どうしたら個人情報保護法に反対する部分が合ってもつなぐ事ができたりとか、そういうことがすごく大事なテーマな気がして。

○福角： 順番に聞いて行きたいのですが。(趣旨説明)

●網野： 基本的には僕はね、柏の葉周辺だけじゃないんですよ。手賀の方とかにもね、こんぶくろ池の審議委員と

いうのを柏市が募集した時に、あれをどうしていこうかっていった時に参加したことがはじめ。それを2年間やったのね。要するに自然環境保護という側面と、利活用と。僕は利活用しかわからなかったんだけど、そこで保全、保護っていうのがどこまで大事かって。都市の緑なので、資産だから残さなきゃいけないんだけど、それを巧く活用して市民に認知させると。それが8年前ね。だからいっぱい流れは再開とかやっているから(仕事で)どちらかというと都市の再生みたいなものを業としていたんですけど、景気が悪化して、都市というよりは、今住んでいるところが子どもたちにとっての「いなか」になるわけです。僕3人子どもがいるんだけど、いなかっていうものっていうのは僕がもともと徳島の鳴門で育っているから、帰る場所っていう良いイメージを持っているわけです。でも柏で育った自分の子ども達はいなくて言ったらここなんですよ。それが誇れるものかってね。それが自慢できるかって、自分のなかで成立していないとまた出て行っちゃうんじゃないかって。また戻ってきたいと思えるいなかっていうのがね、まちづくりにはあるんじゃないかというので、こんぶくろ池だとか、ここの桜並木のことだとかに取り組んで、意見を言ってきた。

○福角： 1992年から柏に越してこられたということですが、その前まではどちらにお住まいだったのですか？

●網野： 東京。結婚を機にマンションを買いました。住民票を移したことで、自分にとっていなかだと思ってなかったわけですよ、でも子どもが大きくなってきて、大降川っていうのがあって、そこにも桜並木があるんですが、やはりこういうものがね、資産、財産だと感じる様になった。それで中期総合計画の審議会にも参加することにした。そして反映させている。福角さんが考えてるように、ここのポジショニングというのは重要なんだけど、北沢先生を良く知っているから、北沢先生がいた頃のUDCKといなくなったそれでは全く違う。各論の話をする。それは、一人のキーマンが引っ張って、熟成期には分散化する必要性はあるんだけど、それがまだ大学に頼り切り過ぎ。ここの中(柏の葉)が活性化してても、UDCKのKは柏戦域のことを指していると思う。背景として。それをどうみるか。柏市は人の資産が繋がっていないんですよ。北沢先生が来られたから、それができて、途中でそれが空中分解したように見えてる。色々なイベントはやるよ、でもそれは市民に根付いているイベントではない。出てくる人は同じ人が多いし、違ったことを企画することは大切だしやらなければいけないけど、柏の葉だけを見て、全体を見るなっていうのをあえて言いたいのは、ここは柏市広域の拠点でもあるんじゃないかっていう認識も持っていて、それがうまく機能して

くには、人がどう関係してくのか、双方向の関係性。そこに落とし込むには時間とテーマが重すぎるのかもしれないけども、まちづくりってそもそも色々な発展系があるわけじゃないですか、だからその実験場だと考えれば、関わった人がどれだけ新しい人が関わったかということが例えばこの目標—数値目標だとかね、そういった意味では目標設定を考えなきゃいけないんじゃないか。何の充足度ではかるかはわかりませんがね。あの、まちづくりっていうのは色々な年齢層の人が参加するというのを考えるとね。

他のUDCとの連携はありますか？

○福角： 直接の連携はないんです、中にいる人、人で繋がっている状況です。

●網野： もともとここで、センターの事例を紹介するイベントの時に、やはり北沢先生には色々な想いがあったんじゃないかと思ってね。その遺言じゃないけど、それがちゃんと整理できた状態で遺伝子が繋がっているのかと。なんでこういうセンターを残したんだろう、とかね。そもそもそういうことができる環境でありつづければ、地域のなかに溶け込んでいけば結果オーライな気がするのよ、よそと比較するというよりは、よそから影響を受けたことで、ここでできることね。ここで言えばね、新住民と旧住民がどうしたら共生できるかといったテーマで以前にワークショップをしたわけですよ、旧住民とどういう渡り合いがあつてね、それがこの課題でもあったと思うんですよ、そしてそれがね、時間としても定着しているかどうか。というところは大事だと思う。常に原点の話ね、ぶれていっても良いとは思いますが、ちゃんと延長線上にあるのか、という検証は常にしてほしいなと思いますね。研究というのは、当然残すんだろうけど、それが人に伝わっているか、生の声でDNAとしていってらかっていうのがすごく大事な気がして。今日も総合計画の審議会の報告書の立派なものを用意しているんだけど、それで市民に伝わるのかと。目的は何なのかと。今後5年間でやろうとしていることをもっとわかりやすくね、ソフトの部分も含めて浸透しているかが重要なことであつてね、良い報告書をまとめましたでは、意味がないと思う。人にどう伝えるかというのは、こういう場の機能として必要だと思うんですけどね。

○福角： まちづくりスクール以外に活動に参加されていたかということですが、それは先ほどのこんぶくろ池の例とかですか？

●網野： 都市マスとか柏市のまちづくりを考える会とかね、色々だよ。

○福角： まちづくりスクールを何でお知りになりましたか？

●網野： 北沢先生がいるからかな。

○福角： 以前から北沢先生のことをご存知だったのですか？

●網野： 三郷でゆったりしてる自治体なんかかんとかとかあるじゃないですか、そこに呼んでもらっててね、そこでね、三郷の今の企画部長とか三豊の教育部長とも知り合いになってね、そこで合った時に北沢先生の本も呼んでるし。だから北沢先生がいるんだったら参加しよう、というかんじだったと思います。

○福角： 参加にあたって、一番の目的は何ですか？

●網野： 最初はね、仕事で企画や提案をするものがあるから、やはりプレゼンのやり方とかね、あとね、ワークショップについては勉強になりましたね。まちづくりスクールのプログラムの中にワークショップのやり方というのがあるんですよ、あれはね、技術として非常に勉強になった。市民を巧く巻き込んで行くとか、あんまり発言していない人に話をふるとか、ああ、これは職員が学ぶと良いんじゃないのって思いました。それがきっかけで、職員に参加を促している。審議会とかで。何のために柏市がここに参画してるの？と。やはりね、職員の人材育成を中心に考えて、都市計画部門じゃなくても、将来色々な畑に行くときに、自分の意見も持っていないといけないから、こういうところで、役所の人としては言えないかもしれないけど、個人としてね、意見が言えるような人材を育ててほしいと、そう思って発言している。役所の中ってやっぱりたて社会だから、思っても言えないし、言わないし、言う物じゃないと思っている人が大多数。でもつつこんで聞いていくと、やっぱり持つてる。持つてても無駄だと思うから言わない。それは市民の側と対立してるから、逃げようという気持ちが先にあつて、某業のいい方しかなくなる。それはコミュニケーションのやり方が悪い。文句を言いに来た人をお客さんと思えば、ちゃんと答えれば、ちゃんと意見を聞いてくれる一番のお客さんなんだからって。これは再開発の法則があつて、それを市の職員に経験する場としてね、もうちょっとこういう活動—ワークショップ自体が良い活動だと思うので、それを平場で色々できないかなと。ここで学んだ人が他で波及してほしいぐらいのことを北沢先生も言っていたと思うんですけど。常に自分が学んだことは、誰かに伝えないともったいないという気持ちでやっているんで。言うだけで、フォローができていないこともあるのですが。

○福角： その例えば北沢先生の想いを実現して行くということに対する義務感というのは、先生が亡くなられてから特に感じる様になったのですか？

●網野： そうですね、そう思います。最後の方やせられたところで、なんとなく感じたところがあったんですけど、偲ぶ会やったじゃないですか、あおの時にね、道半ばで年齢とね、残したことはいっぱいあるよなーと思ってね、石黒さん（柏市副市長）に今回総合計画のに入れてくれ、と言った。やっぱりね、北沢先生の考えをちゃんと伝播していくのは必要だと思った。たとえばUDCKなんかは三井がいて自動的に回って行くのが眼に見えるけど、だけど他の地域っていうのは、全く知られていないままね、結局関わりをほとんど持たない人が大多数なわけですよ。さっきUDCKのKって柏の葉っておっしゃったけど、やっぱりベースは柏なんですよ。40万都市にあるUDCKなんだと、僕自身は思ったんですけどね。

○福角： UDCKの捉える範囲はその時々で変化するものだと思います。

●網野： そうですね。この間も筑波からまちづくりスクールに来ていたじゃない、いいなと思いましたね。

○福角： ただ1回目しか来なかったんですけどね。残念ですね。

●網野： そうなんだ。それは残念。テーマにもよるのかもしれないね。あれじゃなければ、うちの会社でもね、あそこの建築研究所もあれば、色んな中央の研究者の人たちが、外に出たがっている人たちが多くいますって。研究者が多いから、まあ秋葉原までという遠いけど、柏くらいだったらという発想は十分にある。それはイベントとか、ここはもっとアピールしていった方が良くもされない。

○福角： まちづくりスクールの感想を聞いていきたいのですが、先ほど職員の方がここで職員育成になればという話がありましたが、スクールは職員の方、住民、学生が参加しているじゃないですか、そこで職員向けでない良さみたいなものはありますか？

●網野： やっぱり市民が変わらなければいけないというのは大きな柱なのですが、まず前提条件が、役所の人たちが先に変わって、そこの媒介としての機能を果たして行くことで、市民を変えて行くということがあるのではないかと考えていますよ。市民が最初からというのは難しいと思うので、ファシリテーターのような役割を、市民も育てたいけど、意外と作れないから、そこは役所の人なんじゃないの、という思いがある。だから学生ができたなら良いんだけど、学生は4年か5年でいなくなる

わけじゃないですか、そういった時に、役所はそれで部署は変わったとしても、引き継ぎできるじゃないですか。でも研究っていうのは、研究が終わったらまた次のテーマを探す訳でm継続性がないんですよ。結局はサステナビリティのものをどう繋いでいくかということとしないので、結局そういう論法がいいのかなと。ただそういう若い職員が市の中にいるかというところとわからない。だから上を変えなければならぬのかなと最近思っている。でも課長クラスは50人全員やりあいましたから、基本的には良いんじゃないの、と思いますけど、ただ予算とかね、役所の人は固定観念とか既成事実とかそういった枠からなかなか外れられない。だからこういった違うステージでね、リフレッシュする意味からも、役所の中で担当者の意見って殺さないといけなわけですよ。個人的にはこう思っていますと言ったら、役所の答弁として受け取られるリスクがあるじゃないですか、だからそれが違うので、しっかりと間に立つ立ち位置があっても良いんじゃないかと、まあ僕は個人的にはこう思っていますという意見があっても良いと思ってるけどね。議事録に残すような話ではなく、人と人の信頼関係を築くようなね。そういう人が増えることが一番スムーズにまちづくりができると思う。あと今日の議論で一番多かったのは、高齢者と子どもだけの話をしがちなんだけど、サラリーマン層がおいできばりになっているんですよ。しょうがないですよ、仕事はみんな東京に行っていて、つかれて土日バタンという生活が一般化していて、個人の生活中心型で動いている。それはもう仕方がない。そこで、何かしなにかを組み合わせる方法論が見つければ、ものすごく良いテーマだと思いますよ。それはUDCKのステーションとしての役割ともう少し広げた枠での意味かもしれない。

○福角： 同じ場で市民と行政の人が学ぶということについてはどうですか？

●網野： 行政の人っていう認識があんまりないと思うよ。行政マンです、という風に来てないから。ここに来たら一般の人。

○福角： 住民の方の方が危機感みたいなものが強い気がするのですが。

●網野： 聞く人によるんじゃない。役所の人と一般の人という分け方じゃなくて、市民にも色々な色があって、役所の人にも色々な色があるわけですよ。だから、そこがもう少し素の状態でいられる場所がここなんじゃないかって、僕自身は思うんですけどね。行政として、仕事としてやる人も必要なんだけど、一個人としてやる人も大事だと思っているわけ。例えばね、これまで都市計画部長をやった経験のある人が、市民活動をやったらはまって

きたとかね。良いことだと。今までだったらね、権限を傘にね、色々言ってきた人が、一個人として市民の視点で、素で関与していくと、違ったものが見えてきたって言ってたわけ。それはごく稀なケースだけど、どうしても役所の立場でね、話をしちゃうじゃないですか、それはまちづくりではないかと思っていて、それは一部であってね、やはり本音で関わり合ったり、色んなことを話していくことで流れがもっとスムーズになったり打ち解けていったりね。最終的には税金を少なくともすむような、市民が補完してくれる、直結とはいわなくてもワンストップとしては有効だと思うんだけど、それがとまっちゃうから諦めている人がいるし、市民は自立をもとめられるから自分の方向のベクトルでそれぞれやろうとしているから、それはそれで良いんだけど、もったいないじゃないかと。場合によってはこの指止まれで、協議会みたいなもので進めても良いし、テーマを柏市で困っているテーマをもっと取り上げてほしいと。そうすると、それが地域の中で意味のあるイベントとして認知あるんじゃないかと。そしたら市の職員も、市の中で自動的に反映できるじゃないかと。課題を解決するようなことが求められてきた方が早いと思う。高齢者というのは良いテーマだとは思いますが、接点を多く持つというのはとても大事だと思うんですよ。常にはできないと思えますけどね。

○福角： 新住民にとっては、まだまちの危機感とか共通の意識みたいなものはない気がして、地域の課題に対する問題解決のために接点を作ることはあまりないかもしれないですが、柏市全域で捉えるとたくさんありそうですね。

●網野： 総合計画の審議会をやっているとね、ほんとに千差万別に課題があるわけです。ここのマンションの方のコミュニティとかね、一番身近な問題になってくると思うんですけどね、それが、全域を見たときに、大きな問題ではない。一部ではあるけども。それで高齢者で豊四季だとか範囲を広げたことはイメージとしては良いと思う。その広報部門を担っているとすれば継続性もあるじゃないですか。せっかくこうやったテーマが継続するようなくみをそれぞれで考えてもらって、それは直接関与しなくても、うまく機能するような。それは良いと思うんですよ。そういうことを言いたい。

○福角： どうして何度もスクールに参加されたのですか？一回だけではわからなかったこと、何度も参加したからわかったことなどはありますか？

●網野： 基本的には自己実現であって、自学自習の世界が根底にあるんですよ。でもここに来れば誰かと話をして帰れるということがあるんですよ、最近どうなの？と

か。何らかの触れ合いがあるわけですよ。アナログ的な場があるから来るんですよ。ただセミナーに来るんだったら面白くも何ともない。

あちこちで種をまくと、違う話題で盛り上がったりするわけですよ。やっぱり会話っていうのに、セットになっているという側面はあるかな。おなじまちづくりをやっているメンバーが顔を出して来ていると思うと、ちょっと終わってからとかってなるんですよ。

○福角： UDCKに関わる前と後ではイメージに違いがありますか？

●網野： 結局僕は北沢先生に集約されてしまいますね。なんでその路線をやめちゃったのかなっていう。やれる人がいないんだから仕方ないじゃないですかっていう意見もあるけど。かわりの人がいないから、協働運営体制でいきましょうというのはあるけど、それはまた違う論理だろうと思っている。それは、自分で見ていないと言えないから、関与し続けているのかもしれない。行く末をみておかないと。

○福角： 網野さんが惹かれる北沢先生の魅力って何ですか？

●網野： そこは僕もわからない。課題として持っているだけで、やっぱりもともと行政マンとしての顔があったわけじゃないですか、そこから大学の先生になって、大学の先生らしくない先生で渡り合って、市民を巻き込んで。そのスタイル自体が新風を吹き込んでいると見えたわけです。やはりこういうキーマンを何人もつかもたないか。やはりこれがとても大事だと思うんです。昨日信時さんのプレゼンをビックサイトで聞いてきたんですけど、ああいう人を引っ張れるっていうのも、北沢先生ならではの話だと思うし、信時さんの今の活躍を見ると、横浜のキーマンになっているわけじゃないですか、そういった人たちがあの報告を見ていると、がっかりする位すごいなと。368万人のね、どの位の比率でやってるんだと。CO2削減にしても何にしてもね。その発表時間が1時間しかないのに、時間が足りない。じゃあ柏だったらどうか。どうして北沢先生は柏に来たんだろうと。横浜の方がよっぽどね、規模も大きいし、人もいるのも知っているし、あるじゃない。昨日は改めてそんなことを感じましたね。今のポジショニングは世界が注目した都市なわけですから。だから北沢先生が大学で教鞭をとりながら何をやりたかったのか、それは泥臭さかもしれないし。今までできていないから何か可能性があるんじゃないかっていう思いもあったんじゃないかって思うけどね。横浜はなんか見えてきてるじゃない、中田市長になってね。柏市はすごく対極に移るんじゃないかと思うんだけど、自治体として。そこに一生懸命だったエネルギー

ギーはどこから来たんだろうということは気になりますね。

○福角：先生の考えるまちづくりが、田村や柏をやっていくうちに、ハードなものからソフトなものにかわっていったのかもしれないね。

●網野：ソフトというのはやはり人づくりに通じるところじゃないですか、だからそれをどう伝えていくか、広げていくか、そういう場所を作ろうとしていたのがここのんじゃないか。その機能をリレーしていけるような人とか、が必要かもね。

—信時先生の話

信時さんみたいな良い人脈を北沢先生はもってるんだな—と感じた。あとね、アートライン柏の芸大の中村先生って知ってる？この先生も良いんだわ。芸術とまちづくりをミックスさせて活性化するっていう。そういう人のコミュニティってざいさんじゃないですか。だから色々な要素があって、ここのマンションだけのことじゃないよ、と言いたいのは、色々な動きが柏市でもあるわけ。だからそういったものの要素をもう少し俯瞰できるのも手だし、深掘していくのも手なんだけど、ちゃんと繋がっていますよ、という。情報ソースが集まるとかね。田口君がもう少しやらなきゃいけないのかもしれないけど。

商工会議所の主催でやった催しで、別府市がこんなに良くなっているっていうのはひとつはキーマンと芸術文化が繋がって、活性化した。これは目からうろこ。それはやっぱり観光都市だからできたっていうね、衰退があって危機感がある。そういう危機感があるところはベクトルが集中するんだけど、ここはバラバラなベクトルがあって、

ゆるやかにやるっていうのは言葉では良いかもしれないけどまとまりがない。だからたまには先生的に今年これをやります！とかプロジェクトにまで繋がれたまちづくりスクールのカリキュラムがあっても良いし、つながるしくみをね、考えてほしい。要望ばかりいっても仕方ないね。でもまあそういう人を育てるっていうのを行政にも求められているし、東大生もその中でどうかかわってくれるかっていうのも資産だしね。市にも良い人材もいるしね、そういう人たちからノウハウえおもらうなり、人脈を紹介してもらおうということができれば良いけど、「どうせあの人はこうだからね」っていうマイナスの見方で見える人もいますよ、そういったものが本来北沢先生だったら一喝が入ると思うんですよ。それを巧くまきこんで、まきこんで、その相乗効果なりね、そういうものをコーディネートしていく人とどう育てていくかといったまさにそういう人材をここが創出できるような拠点にしていけば、自然と人は集まってくるし、そ

ういったものなんじゃないかなって。ましてや東大のあのスペースに入るんだったらね。役割としてのひとつとしてね。結局はね、地域コミュニティがしっかりね、顔と名前が一致して、普通にあいさつができてね、ちょっとしたことも話が出せるような田舎の風景に近いものかもしれないですね。普通のことができないのが今なんですよ。

○福角：そうするとUDCKが捉えようとしているまちづくりっていうと色々なエリアがあると思うんですね。今の田舎の地域コミュニティがしっかりした規模でできるようなものだと、柏市全体だと大きいし。そういった時には、柏市全域を捉えたときはまた違ったまちづくりがあるのかなと思います。

●網野：それが矛盾しないのが、例えば小学校区。小学校区がうまく使えるしくみがあれば、それはネットワークで繋がるわけですよ。よく町会っていいですけどね、嫌な人が上にいるところとかってあると思うんですけど、そういうところでは排他的になって参加したくないっていう人がでてくるんで、わかんないけど、一つの単位は小学校区がしっかりしたコミュニティをベースに防災面だとか開かれた学校の中で父親学級があったりとか、逆に父兄も参加し易い場面をね。そこから上にあがるともう関われない。そこでしっかりつくっておいで、コミュニティのブロックとして持っておいてね。色々な似ている組織があるんですよ、同じ人が色々な役割に就いたりね、色々な矛盾があるわけ。全域で考えるというのは大げさなことを言っているわけじゃなくて、それぞれの単位を考えるときに、ベースがちゃんとできていた上で、同じテーマで情報共有ができると。あと小学校って校長先生の権限が高いじゃない、そうすると小学校でやりたいと思っても、教育委員会がだめだといったらできない。そうじゃなくてオリジナルなことをやっていることの奨励があるとして、それを校長会で発表できるとしたら、それは良い歯車が回っていくじゃないですか、他の校長が刺激を受けたりね、そういう波及効果の単位としても小学校区は良いと思う。それはPTAっていうお母さんのコミュニティ、地域コミュニティの核になるようなものがあるわけですよ。コミュニティグリッドも小学校区が入っていないじゃないかと思う。町会でも良いんだけど、小さいコミュニティを巧く有機的に繋ぐっていうなんかね、やり方があるだろうと。やっぱり若い人たちが駅周辺にはいるんですよ、東大の人からは見えてないね。色々なコミュニティがあるんですよ。それがインターネットだけでつながるというのも希薄な感じがするし、ちょっと泥臭いかもしれないけど。この間もここで大学生と高校生のイベントがあったんじゃないですか。まああれは仕掛けたからできるので

あって、本来それは学校なんかであれば父親が入って
 いて普段とは違うことを教えるとかね、そういった参
 加型のものがベースになると、親子でも話をするし、あ
 るいは父親が参加することで、まちづくりの方向性が変
 わっていく可能性は十分にある。もっと言えば定年前の
 人たちから巻き込む仕組みがないと、定年してすぐはで
 きないんですよ。男はサラリーマン社会でずっときてる
 から。女性の中に参画していけないってね。柏市のまち
 づくりにはどういった人の参加が必要かってね。もっと
 引っ張りださなければいけない人がいるじゃない。情報
 だけじゃなくて顔も見えて、身近な楽しみ方もできたり
 ね。

○福角： それはまちづくりスクールとかカレッジリンクで
 はどうですか？

●網野：あるかもしれないけど、カレッジリンクは限界だ
 ね。限られた人だけがやるのはもったいないと思う。基
 礎コースいかないと専門コースへは行けないっていうし
 ばりがあるんだけど、そもそも論ね、基礎コースのPRも
 不足してるし、松本先生という鍼と東洋医学の専門の先
 生がいて、千葉大の外では評価が高くて、千葉大の医
 学部から見ると、柏の葉で左遷されているようなポジ
 ショニング。もったいない人の資産を殺しているように
 僕には見える。もっと千葉大学の資産をPRすべきじゃな
 いか。閉鎖的。センター長も外に対するアピールももっ
 と明るくやってよーみたいだね。そういうのって大事な
 キーマンがいると思うんですよ。知る人ぞ知るで我慢し
 てるって感じで。

○福角： カレッジリンクとまちづくりスクールで違うと
 こって何ですか？

●網野： 両方とも成熟していないよね。試行錯誤だろうと
 思いますけどね。古在元学長の市民科学のレクチャーが
 あったんですけどね、市民と一緒に何かをやることで、
 先生たちの専門にプラスαがあると。カレッジリンクで
 はどうなのか？先生から聞きたい。カレッジリンクは小
 論文を書いて応募するのですが、それだと先生と生徒と
 いう上下の関係を示すわけですよ。でも古在先生は市
 民科学で先生も影響を受けると言ったんだから、先生の
 方も最後に一人ずつ言っていたきたいと。本音はね、
 双方向で影響し合った部分を確認できれば良いと思うん
 ですよ。まちづくりスクールはそういうメニュー（小論
 文）はないので、自由度が高いと思う。でもどっちもそ
 れぞれの殻の中で試行錯誤という感じだと思う。
 カレッジリンクは同じ人が何回も出ている。それは良い
 意味、繋ぎとめる楽しさがあるからなんだと思うけど、
 悪く言えば広がっていない。新しい人が入っていない
 じゃない。新しい人が入って新しい事業をして、そう

いった人を支援するということまで本来は組み込まれ
 ていると思うんですよ。でもそこまでいっていないとい
 うのはやはり中途半端なんだと思います。そこまで求め
 る方がいけないのかもしれないんだけど、同じメンバー
 ばかりというのは良い感覚にはならない。

だから福角さんの取り上げる5つの活動は局所的だと僕
 はみた。もっと他の部分とのファクターを持った方が本
 当はね。最終的には三井さんがコミュニティのためにし
 かけた枠の中に入ったことを調査しているように見え
 た。それは、つくられたものなんですよ、自然発生でで
 きたものとの比較がないから、対立軸がないからわから
 ないんですよ。自然保護団体とかは自然発生ですから
 ね。見えないところが本当は見えた方が、まちづくりの
 流れを分析するには重要だと思って。色んなことを見た
 中で、その5つがどのポジションにいるのかわからな
 いと。しかけたものと、自然発生的に集まったものの根
 本的な違いとかね。

○福角： 最後にもうひとつ。スタッフをやると思った理
 由って何ですか？

●網野： ものごとには表と裏があるじゃないですか、結局
 ね、参加者だったら表しか見ないじゃないですか、それ
 だとしかけやしくみがわからないじゃないですか。その
 中で、スタッフで意見を言って下さいということだった
 からスタッフをやった。意見を言いきりすぎたかも。企画を
 考えるというのは一つのカリキュラムだったんですよ、
 そしてその時はスタッフにも賞状を渡した。参画してく
 れたという思いが伝わるひとつの手だと思うんですよ。

○福角： 企画から関わったのですか？

●網野： 運営の話だけだね。それぞれの回をどうまわして
 いくかとか。もっと大きい枠組みはわからないけど。

○福角： いつ話し合ってたのですか？

●網野： 始まる前にヒアリングの会があって、考え方を話
 し合うために集まった。スタッフとして適任かどうか公
 社の人が見たんだと思うけど。

そこで砂川さんとかね、みんなの得意なことに合わせて
 役割分担した。ワークショップって、そこに誰を入れる
 のが良いとかね。メールでもやりとりしたりしてい
 た。他の方がどこまで関与しているかわからないけど。
 スタッフ同士やチームの人とメールのやりとり。最後の
 感想文を事前に分析して、次の機会に活かしていた。そ
 れは企画とは呼べないかもしれないけど、それが双方向
 の良さみたいなものとスタッフ同士のコミュニケーション
 というまあイメージが共有できてるわけ。そこが
 ね、カレッジリンクというのはそのメンバーがかわらな
 いというのがね、限られた枠の中でやるわけですよ。本

当の意味で成果が出ていない気がする。今までトータルで70人位というのは少ないよ。一長一短だけど。農家出身の千葉大園芸の人が中に入ってきたりするとまた違うかもしれないし、もう少し工夫があった方が良いんじゃないかなと思う。

クラブ活動なんかはある意味では豊かな活動に見えるかもしれないけど、それはマンションに来たからこそ作らなければいけないコミュニティであって、まちづくりの機能ではないと、そこを見落としてはいけないと思う。

No	26 (1人)
日時	2010年7月29日13時~14時
場所	新UDCK
対象	市民 ●鳴浜祥之さん1回目
質問者	○著者

●鳴浜： 柏ビレジに住む前は、豊島園にある会社の社宅に住んでいたんですね。それで都内にどこか家を購入したいなと思って、首都圏の色々な所を探したんだけど、結局今住んでいる柏ビレジに決めただよ。それが平成4年です。4年に決めて、5年に住み始めた。だから今年で17年になるのかな。それで僕はそもそもサラリーマンだったんですけど、銀行に務めてましてね、その当時はF銀行といってね、今はM銀行になったんだけど、合併してなったんだよね、僕がいるときは、F銀行に務めていて、職場は大手町にあったんですね、昭和56年から務めた。(その以前は地方)それから僕は都内(本部)に住みつきそうだということになって、家を探し始めたの。千代田線で通い易いことと、つくばエクスプレスができるという話があって、それができたら随分便利であろうということで、今の家を決めました。

○福角： まずは電車通勤の利便性から選んだのですか？

●鳴浜： いいと思ったんだよ、その頃は。でもね、柏ビレジは期待していた程利便性は良くないんですね。そういう意味では失望しているんだけど、TXの線がもっと柏ビレジに近いところに開発する予定だったんだけど、開発については随分地域の住民が反対してね、自然破壊だとか。先祖代々の土地を提供したくないとかね、だから都市公団の人が話をしに来たら、生卵をぶつけるとかいう抵抗もあったりしてね、それで結果6年遅れて2006年に開通したんだよね。その反対とかもあって、住宅街からは離れたところに線ができたこともあってね、僕らが期待した駅への利便性はないんですね。

○福角： ではTXができるまではこの駅を利用されていたのですか？

●鳴浜： 北柏駅だね。マイカーで駅の駐車場に停めて、通勤してましたね。

○福角： 柏ビレジに住もうと思ったきっかけは、通勤の便が良さそうという以外には何かありますか？

●鳴浜： 戸建志向というか庭、緑が豊かな自然が多いところがね、まあ大手町という都会の町に務めていたからそこから心身共に安らぐような場所というかね、そういう条件が重なっていたんですね。

○福角： ではUDCKができる前からお住まいなのですね。

●鳴浜： そうそう、UDCKができる前から柏のことは良く知っていたわけですね。

○福角： ではUDCKをいつ知ったのですか？

●鳴浜： 一昨年(2008年頃)。そもそも僕自身のことについては、大手町に務めていたんですけども、銀行が合併してMになったんだけど、F銀行が中心としてやっていた企業グループ(芙蓉グループと呼んでいた)で構成する芙蓉懇談会というのがありましてね、その事務局長をやっていたんですね、それで企業グループの幹部の皆さんをの取りまとめるという仕事をしていたんですね、ところがM銀行になってから、もっとグローバルな企業グループにしていこうということで、僕の仕事も変わったわけですね、変わったというのはガラリと、銀行の仕事から芙蓉グループの仕事まで。埼玉県のある会社に出向していたんですね、その会社は缶を作っている会社で、その監査役ということで一昨年までの6年間はそこに務めた。で、結局それまでは会社人間であったわけですね。「社縁」の関係では企業グループ間では非常に人脈も広がったし、例えば昔の企業の仲間とか、先輩後輩の仲間とかの会社の土俵を通じた人の繋がりは非常に充実していたわけですよ、そして今でもその関係は続いているんですよ。一方でね、「地縁」というその土地の人との繋がりは、やりたくても、時間もきっかけもなかった。だから地元とのおつきあいというのは非常におろそかになっていたわけですね。そして2年前に退職して、フリーになったときに、「社縁」でコミュニケーションを深めていくというのね、またいちいち都会に行かなければいけないかという、それ自体が億劫、会社にいるときは仕事が終わってから、仕事を通じて交流を深める事が出来るけれども、やっぱりそれには限界があるんですよ。それでその地元の人との繋がりを持つことが重要じゃないかと思っていたんですよ。退職する前から問題意識も持っていたんです。そこで僕のきっかけになったのは、一昨年の秋に日経新聞にね、千葉大学の「カレッジリンク」の募集の記事が載っていたんですね、そこには「大学の持っている知的な財産を一般市民の人にも開放しますよ」と、一方で「市民もその市民の感覚を大学に提供して、交流しませんか」という呼びかけでもあった。それは、予々思っていた地元の人と交流を持ちたいと思っていた強いニーズと、合ったわけですね。それで是非カレッジリンクに参加しようと。そこで地域の人と

の繋がりを深めていこうと。また大学の知的な財産を使うという貴重な経験もできると。それがね、一昨年秋の11月のことでしたね。それに参加するためには小論文の提出が必要なんです。その時の課題「健康、食、環境」で、僕は健康について書いた。その時の論文というのが、僕の趣味として「合唱」があるんですね、その男声合唱「フロイデ」というグループがあって、その中で柏ビレジの人で80歳を超えても生き活きと歌っている人がいて、その人とまあ歌を通じて仲間になったんだけど。その人が趣味を通じて、生き甲斐を持って生きているという姿が非常に素晴らしい。だから人間というのは、いくら歳をとっても、やっぱり気持ちの持ち方とか、趣味に対する取り組みとか、そういうことによって自分自身を元気にさせる姿がとても良いし、自分自身もそういう風に取り組みたいという主旨の論文を書いたわけですよ。それでそういうことを通じて若い人にもメッセージャーとして、「そういうことが大事ですよ」と伝える担い手にもなりたくて、そう思ったんですね。それでカレッジリンクとつながりをもってね、その頃から地域の人と仲良くなれて、それこそここ（柏の葉）に住んでいる（柏のことをあまり知らない）人とも交流するようになって、柏ってというのはこういう町ですよ、と逆に僕がみなさんにご案内するというような触れ合いを持つ事ができたんですよ。

そういうことで、「社縁」という繋がりに「地縁」へとシフトする生活が始まったわけですね。そうこうしているうちに、「まちづくりスクール」というのがUDCKにありますよ、そのスタッフを募集しているという話があってね。直接上野先生に推薦を頂きましてね、紹介してもらったわけですよ。それまでUDCKのことを知らないわけではなかったけれども、しかし詳しくはそんなにね、その役割とか。存在そのものに関してはね。多少の関心があった程度なんだけど。どんな機能を持って、どんな役割があるのかは知らなかった。それでまちづくりスクールのスタッフになって、北沢先生や丹羽さん、前田さんたちと触れ合って、それで僕はグループの取りまとめみたいな仕事をやっていて、例えばプレゼンテーションとか物事をまとめるという仕事についてやる機会が多かったわけですから、だんだん手慣れていったわけですね。そこでまちづくりスクールでも、丹羽さんに「僕は記録がかりをやりと思うがどうだ？」と言ったら「是非お願いします」ということで、今日まで繋がっているんですね。それはまあ「社縁」で培った色々なノウハウが今生きていて、まあそういうことですよ。

○福角：まちづくりスクールのスタッフをするまではUDCKを知らなかったということですが、近所の人の間でUDCKが話題に挙がるということもなかったのですか？

●鳴浜： うん、あんまり話題にならないし、知らないんじゃないかな。なんか変わった建物があるね、ぐらいの存在で、たぶんまちの人の中にもUDCKに深い関心を持ったりする人、機能を知っている人は少ないと思うね。今でもね。僕は逆にこんな素敵なまちづくりの拠点になるような組織があるんだ、ということは僕の方からPRしているけどね。そういう風になったのはここ1、2年のことだね。

○福角： PRした時の周りの方の反応はいかがですか？

●鳴浜： あ、そう、そんなところがあるの、といった感じでね、例えば今度のまちづくりスクールの参加者の中にも5、6人は僕が声をかけた人がいるんだけど、とても楽しいと。まあテーマにもよりますけどね。まあUDCKというよりもね。テーマに惹かれてという人が多いと思うけど。でもね、そういうことを通じてね、僕と同じ様にだんだんとUDCKの役割なんかも理解していくといったような、広がりがありますよね。

○福角： 先ほどおっしゃられたUDCKの役割というのを、鳴浜さんはどういう風にお考えですか？

●鳴浜： 僕はまちづくりというのはね、今まではいつの間にか高いビルができたとか、駅前が賑やかになったとか、他人事とっていたわけですね、市民が「まちとはこうあるべきだ」なんて大それたことね、自分の考えがまちに反映されるなんて発想自体がなかったわけですよ。だけど僕がUDCKとかまちづくりスクールに強い関心を持つというのは、そうじゃなくてまちづくりというのは「みんなで知恵を出し合って、まちに反映されるんだ」というこれまあ北沢先生がよくおっしゃっていたんだけど、要するに「市民がつくるまち」というのが実現可能なんだと。変な遊興施設、商業施設とか入り込まないでね、自分たちでそれこそ緑あふれる美しいまちづくりというのが実際に僕らの地道な努力の積み重ねで、ひょっとしたら、100%じゃないにしても実現できるかもしれないというね、そういうことを話し合う場としてのUDCKというね、そういう感じで捉えられるような存在であり続けてほしい、情報発信の拠点としてもね、非常に貴重な存在になると思うね。そういう意味では僕はまちづくりのことを他の地域に行って調べたわけじゃないから単純な比較はできないけれども、しかしまあ沿線開発と同時に多々道理の住宅地や商業施設ができましたというだけじゃなくてね、もっと市民参加の立派なまちづくりができる、つくられつつあるというのは貴重な存在だと思いますね。

○福角： 「社縁」から「地縁」へということで、「交流」を求めてカレッジリンクに参加されたと思うのですが、

今のお話を聞いていると、市民という立場でまちづくりの担い手になるということに強い関心が向いてきたのかな、と思うのですが、それはどういう気持ちの変化、きっかけがあったのですか？北沢先生の話とかも影響があったのですか？

- 鳴浜：まちづくりの色々な授業を通じてね、色んな人がまちづくりに取り組んでいる事例なんかを聞いて、それは僕らの活動というのは限界もあると思うし、大それた事はできないと思うし、ありふれた一市民にすぎないと思うしね、だけどまあこういう活動を通じて色々な意見を発信していくことで、地域の人が色んなことに目覚めていくとかね、そういう流れになればいいなと思っているんですよ。そういう活動に一枚噛んでいるという充実感、面白さはね、それは単なる「次の休みにゴルフでも行きますか！」とかで繋がる地域の人の繋がりととはちょっと違うというかね、地縁だけじゃなくて「知縁」にも繋がるのかなと。それはまあ僕らのモットーというか生き甲斐にも通じるものがあるってね、そういう活動はこれからも続けていきたいと思っているわけです。

○ 福角： まちづくりスクールとかカレッジリンクに参加されたことで、実際に自分の生活に起きた変化はありますか？

- 鳴浜： 深い関心を持つ様になったということは非常に良い事だと思いますね。それから僕は昭和16年の11月生まれということなので間もなく69歳になるわけですが、60代後半の人の繋がりとというのは同世代の人同士の繋がりとということになりがちなんですけれども、まちづくりスクールはそれこそ福角さんのような若い世代の（これから色々と活躍される）人との繋がりとか、交流なんていうのは思ってもみないような非常に楽しい触れ合いで、年代を超えたつながりがもてるというのは、高齢者の域に達している僕に撮っては嬉しいことですよ。カレッジリンク本でのインタビューでもそういうことを話したし、それは僕自身の充実した最近のあり方、生活にも繋がっていると思いますね。

○ 福角： そういう意味では河合さんも、、、

- 鳴浜： 河合さんね、河合さんなんか船橋にお住まいになっていて、それで今はここ（パークシティ）にお住まいなんだけど、全く地域の人は僕以上に何のつながりもなかったんですね、この方も僕と同じ時期にカレッジリンクに参加して、その時に僕も知り合ったんですけどね、僕と同じような考えでしょうね、この方は足の大きがをした時なんかもここでできた繋がりの人に支えられたなんておっしゃってましたものね。

○ 福角： カレッジリンクの卒業生で何かグループをつくったという話を聞いたのですが。

- 鳴浜： これはね、せっかくのご縁なので、単に講義のみの関係じゃなくってね、もっと色々なプロジェクトを通じてね、お互いの関係を深めていこうということだね、最初事務局の方からは「地域交流進化なんかかかんとか、、、」とかっていう長い名前になったんだけど、カレッジリンクでネットワークをつくろうというものなんだから、「カルネット」というのはどうですか、と僕が提案しましてね、そして今はカルネットというカレッジリンクのOBがやっているグループがあるんですね。それでまあ色々な活動の幅を広げていこうということで、一つ動いているものがあるんですが、それはカルタを作ろうということで「養生くんカルタ」という健康をテーマにしたカレッジリンクの最終報告会での提案があって、カルネットの中の会議の中で、「養生くんカルタ作成委員会」というのができて、それが今年半位活動をしていて、間もなく完成する予定です。

○ 福角： それは何人くらいで構成しているのですか？

- 鳴浜： カルタに参加している人は5、6人かな。カルネット自体はもっと幅広くな。それからもう一つ、桜並木ってありますよね、桜並木はここからずっと繋がって東大の方までいきましょうという。その中で千葉大学の敷地内ですけど、グリーンフィールドというのは、千葉大学の閉鎖的な広場ではなくって、桜並木から繋がる市民の憩いの場にしようという計画があって、「グリーンフィールド構想」というのがありまして、我々市民が、「市民としてこうあってほしい」という提言を千葉大学にして、（ここで僕はグループを代表して発表した事があるんですけど）そのプロジェクトはカルネットの中でカルタとはまた別のプロジェクトでやっている。これは10人とか20人とかでやっている。ひょっとしたらもっと規模が大きくなるかもしれない。それが実現すると、もっと市民の皆さんがそこで憩うとかね、憩うにしても今度は管理の問題とかね、（千葉大学の農園が犯されたらどうするかとかね）これから色々課題はあるんですけどね、まあそういうことをみんなで考えて、「グリーンフィールドを市民（市民と言ってもカレッジリンクに参加したものの）の意見を反映させるような広場にしよう」というプロジェクトがあるわけですよ。

○ 福角： カルネット自体は何人で構成しているのですか？

- 鳴浜： 何人という厳格な縛りはないんですね。

○ 福角： 卒業生なら誰でもという感じですか？

● 鳴浜：そうですね、従ってカレッジリンクは僕らは一学生なんですけどもう4、5回位になって今は100人位超えているんじゃないかな。

○ 福角：定期的に集まったりしているのですか？

● 鳴浜：カルタは日を決めてやっているよ。

○ 福角：プロジェクト毎にやっているのですか？

● 鳴浜：プロジェクト毎だね。ただそれはまだ発足して半年位だから、一番その定期的に会合を設けているのはカルタ位で千葉大の野田先生という方が中心となって色々やっているわけです。

○ 福角：先生も入ってるんですね？

● 鳴浜：そうです。まあこれからじゃないですか。グリーンフィールドは鈴木先生が中心になってやっているんですが、11月3日にも集まりがあるし。

○ 福角：桜並木協議会とは連携してやっているのですか？

● 鳴浜：連携してやっているんだけど、それはまあ柏のキャンパス駅から始まって、千葉大を通過すると。そういう意味では関係はある。出た途端に東大へとかね、みんなが関係があるんでしょうけど、僕自身はそれには特別メンバーの一員でどうとかっていう関係はないです。

○ 福角：柏の葉のまちづくりに興味はありますか？という質問は今までの話を聞いていると色々な活動を通じて徐々にという感じですかね？

● 鳴浜：そうですね、徐々に、かつ急速に、ですね。笑
そういう意味ではね、人によると思うんですよ。「私なんか関係ないわ」という人だっているわけですよ、呼びかけてもね。でも一方でこれ面白いな！と言って急速に関心を持つ人もいるわけで。

○ 福角： どういう風な立場で関わりたいのか、という話は先ほども少しお伺いしましたが、もっとまちは自分たち（市民）が主体でできるんだよ、というのを広めていきたいということですか？

● 鳴浜：そうですね、まちづくりの推進の一員というかね。それは組織化された「何とか推進委員会」とかというものとは違って、もっとまちづくりスクールのような言ってみればやわらかい組織だと思っただけど、少しずつ市民の意見がまちに反映されるような、そういうことが理想ですね。それにそういうことで僕なんかもささやかな貢献というか、力を発揮していきたいという感じですね。

○ 福角： 今こういう活動に参加し続けて、2年位やってみて、「社縁」から「地縁」へという実感はありますか？

● 鳴浜：それはもう間違いなく色々継続的に参加していますから、「こうありたいな」という自分の会社を辞めてからの自分の生活設計というのですか、そういうことにも繋がっていますしね、面白いなと思っています。
それにね、今日あんまり話していないですが、まあUDCKとはあんまり関係ないんだけど、僕は趣味で（銀行員だった頃から）合唱をやっていますね。退職してから男性合唱団に入っているんですね、それは平均年齢65歳の、規模的には70人弱の合唱団があって、そこに入ったんですね。それはまさに柏市の僕と同じ位の世代の男性ばかりの集団ですから、同じ歌を趣味にする仲間の集まりで、毎週朝9時から12時まで厳しい練習をしているんです。それで2年に1回演奏会をやっていて、そこには柏の方を中心に1500~1600人のお客さんに聞きに来てもらうんだけどね。その日のために毎週毎週3時間の練習をしてね、そういう活動をしています。でそこでは演奏会のためだけじゃなくて、先週も老人ホームに慰問コンサートとって、例えば「ふるさと四季」というみなさんも知っているであろう歌を歌ったり、そういう慈善活動みたいな地域貢献、ボランティア活動にも繋がるとおもっただけど、そういうことも。あるいは都内に出かけて、「東京都男性合唱コンクール」みたいなこともね。歌うだけでなくその後にみんなで美味しいビールを飲むとかね、「地縁」という典型的な活動をやっているんですね。

○ 福角： 地縁とおっしゃいますと、地域の中で共通のテーマを持って集まると思うのですが、例えば地域でも「近隣センター」で様々な活動をしていますよね、そういうものには参加されないんですか？

● 鳴浜：近隣センターはね、練習場所として利用していますけどね。僕は藤心近隣センター（南部地域）とかね。柏ビレジにもあるけどちょっと狭いんですよ。それで例えば藤心文化祭とかにね、いつも施設を利用させてもらっている身として参加したりね。後はいつも全体でやるのではなくて、アンサンブルとって、もっと少人数で集まってやったりね。（光が丘なんかよく使うよ）

○ 福角： 近隣センターで行う活動とUDCKで行う活動はどういう違いがあると考えていますか？

● 鳴浜：ここは知的なレベルの高い集いみたいな、洗練された活動のような感じがするんだけどね。近隣センターは例えばカラオケ同好会とかもっと庶民的な集い気がするんだけどね。

○ 福角： 近隣センターもなくてはならないものですかね？

● 鳴浜：近隣センターは使い勝手の悪さとかそういうのがあるのですが、地域で活動するある趣味の団体にとっては非常に貴重な存在ですよ。近隣センターは管理費に結構予算がかかるから、今財政が厳しい中で、後存立が難しいというセンターもいくつかというか大半はそうみたいだね。

○ 福角：運営面でも高齢化などから存続は厳しいみたいですね。でも近隣センターの果たしてきた役割として、コミュニティ形成には大きく貢献しているな、と思うのですが。

● 鳴浜：それは本当にあると思いますね。まちづくりとっていう紅梅な理想のための集いというわけではないけども、もっと日常的で庶民的な集いの場の提供としてね、あるいはもうちょっと学術的な団体とか、老人の介護問題について考えたりとかいうまじめな会のための場の提供とかね、近隣センターというのは随分役に立ってきたと思いますよ。

あとね、コンサートホールというのは音楽ホールみたいなものがこの辺にできたら良いなと思います。柏市の文化会館は随分老朽化が進んでいて、なおかつ柏駅から遠いんですよ、だからせっかく僕らが高いレベルの音楽を皆さんに聞いて頂きたいと思って普段努力しているんだけど、随分不便なところにお客さんを呼ばなければならないんですよ。柏市というのはそういう文化レベルでも充実した施設があるというようにならないかな、と、個人的な意見だけだと思っていますよ。

○ 福角：まちづくりスクールとかカレッジリンクに参加される方はまちに対して積極的な方が多いと思うのですが、その方々も鳴浜さんのように他のコミュニティにも積極的に参加されているのですか？

● 鳴浜：そうですね、合唱の仲間なんかでも、それだけではなくて、退職した人は「24時間あなたは自由ですよ」と言われた時に、朝から晩まで何をするかは非常に重要なわけですよ。そうした時にどうやって自分自身が充実した毎日を過ごしていけるか、充実感を覚えるようなテーマに取り組めば取り組む程、気持ちの充実感にも繋がるし、身体の健康にも良いと思うんですよ。何歳生きるかはわからないけど、80まで生きるとしたら僕もまだ10年以上ありますから、有意義に過ごしたいと思いますね。昨日もね、訪問コンサートに行ったら100歳のおばあさん（明治生まれで3歳からピアノやっている）が牧場の朝という曲を弾いて、みんな感動しましたよ。鍵盤を叩く力も非常にしっかりしていてね。僕もね、65歳から人生が始まったと思っているんですよ。65歳を過ぎてから、カレッジリンクに参加して、まちづくりスクー

ルに参加して、合唱をやって、それからその関係でボイストレーニングに行って、あとピアノを習い始めて、ボイストレーニングの関係でイタリア語をはじめて、あと正しい姿勢で歌わないといけないということで、ジムに通っていて、今7つの習い事をやっているんですよ。会社に行っているときより忙しいかもしれませんね

No	27 (1人)
日時	2010年11月20日14時30分～15時
場所	ららぽーとフードコート
対象	市民 ●鳴浜祥之さん (2回目)
質問者	○著者

○福角： スタッフをすることになった経緯からお伺いしたいのですが。

●鳴浜： カレッジリンクをやっていたときに、上野先生から紹介されたんですね。僕はUDCKの活動については元々興味もあつたし、カレッジリンクなんかの前からTXの沿線開発のシンポジウムなんかもあつたんですけど、それに参加してね、古在先生とか小宮山先生の講演なんかに参加し、話を聞いていたんですね。それで自分の住んでいるまちがどうなるんだろうかということに非常に興味があつたんですね。それから、会社一辺倒の人間（社縁中心）から地域のみなさんと繋がる地縁とか知縁を広めていくようなきっかけがあればな、と常々思っていて、それでカレッジリンクは日経新聞で知ったんだけど、基礎コースに参加して、その後専門コースに参加してから、上野先生からまちづくりスクールのスタッフ募集の声がかかった。それで当時丹羽さんがとりまとめをやっていて、スタッフの皆さんと役割分担の話をしたんですね、それで大きな役割が買い出しと、僕が進んでやったのが、「記録係」これをやりますって言ったのね、あとは設営とか色々ありましたけど。

○福角： その役割をしたことでわかることや、考えたことについてお願いします。

●鳴浜： 記録係という事は、その日の講師なり全体の流れをまとめて、写真も含めて材料をUDCKに提供するという作業があるいは生徒の皆さんにも次回以降提供するという作業をすることで、参加する皆さん以上に全体のストーリーをまとめてさらに北沢先生がブータンというのは幸せ指数というのかな、それを基準にした国づくりというのを進めていて、そうするとブータンというのはどういう国だろうかとか、短時間のまちづくりスクールでは聞く事ができないような内容も自分調べて、それを付加してそれでスクールの記録をつくったわけです。そういうことで、先生方が話すこと以上にまちづくりに関する内容の理解を深めたように思う。それは大変勉強になったし、よい経験をしたと思う。

○福角： 悪いところとかはありましたか？

●鳴浜： 先生の話がやや抽象的すぎるというか、僕らはやっぱり最終的な柏の葉とか、この辺の地域がどのように変わっていくかというのが一番のテーマなんだけど、ややまちづくりの相対的な話になって、そういう考え方があるのはわかったけど、具体的な僕たちのまちづくりとか地域とどういう関係があるのかがわからなかった回とかも中にはありましたよね。

○福角： スタッフをして、自分の役割（記録係）を持つことで、受講者として参加するだけではわからないことについて教えて頂きましたが、それだけではなくて、そのスタッフを何回も参加されて、回を重ねることでわかってくることは何ですか？

●鳴浜： まちづくりのささやかだけども、「当事者」の一人という意識が段々ついてきたと思う。今までは、考え方によっては「一生徒」という考え方で傍観的に受けている人もいると思うんですけど、もう少し自分の参画意識を能動的に深めて、話を受ける一方ではなくて、自分のケースに当てはめながら考えていくということを先生たちも期待しているだろうと思うし、僕たちも行動したいと考えるようになった。だから1回きりでやめ人もいるけど、せっかくの良い機会なのにもったいないなと思う。だから僕はずっと続けて出たいなと思う。

カレッジリンクでは、養生訓カルタというのをやっているんだけど、提案してからすぐに具体的なカルタづくりに入ってね、今まさに推進中という。これは今まで学んだ健康とか食とかについて具体的に何をすれば健康を維持できるのか、食生活が身体にとってどう良いのかを具体的に言葉で表して、それを記録に残して、そしてそれを僕らのものだけにするのではなく、市民の皆様にも広めていきたい。こういうのが一番実践としては面白いし、目に見える活動としては良いと思うんですね。ですから修了生が活動できる場としてはそういうことが良いと思っています。ただ、例えば新聞にPR活動をやるのか、制作費としてお金をどう集めるのかかを修了生がやらなければいけないんだけど、一つのプロジェクトをやるということは、そういう大変さを伴うものだからね。

カレッジリンクもまちづくりスクールもそうだけど、机上のプランだけでは「ああそうか」で終わってしまうと思うんですね。だけど、まちづくりと言うからには具体的に僕らが行動して、目に見える成果を出していくことも大事だと思うんですね。そういう意味ではカルネットという組織をつくって、そういう想いを共有する人が、カレッジリンクやUDCKというひとつの「場」をベースにして広げていくということが、非常に楽しいですね。

○福角：カルネットみたいな活動は提案の延長線上にあるために、主体的にできると思うのですが、まちづくりスクールのスタッフについては、ある程度与えられた仕事ですよ、そうするとそこには関わり方に違いが出てくるかなと思うんですけど、まちづくりスクールスタッフについてももう少し主体的に関わった方が良いと思いますか？

●鳴浜：僕は冗談半分だけど、どこでも良いけど一部屋ほしと言っている。要するに、一時的に手伝いだけでは本当の想いが完結しないわけ。ましてや抽象的な話だけで終わってしまうなら本当のまちづくりにならないわけ。一度ね、1番街近くの空き地をなんとかしたいということで、市民が使える公園を！ということをおもひでやったことがあって（まちづくりスクールの提案）それは今でも空き地で僕らの提案というのは非常に良いと思ったんだけど、そして当時丹羽さんも市役所の都市整備課に対してUDCKのまちづくりスクールとしてまとめようとしたんだけど。その土地が架空の土地なのか？あるいは現実に予算などの裏付けがつけば、僕らが計画した公園になるのか、、、その時は卯月先生が新宿で取り残された空き地をどう活用したら良いのかという話をされて、それは地域の自治会の方が店を出すほどの広くはないけど活発な交流の広場になったというお話をされた。そういう風に繋がれば良いんだけど、まちづくりスクールではそうならなかった。だからその辺の成果がまだ見えないのかなと思う。あと本当はみんなでワークショップで話した夢が実現（これは僕らが関わり合いを持った公園なんだ）したら非常に良いと思うんだけど。

○福角：実現するというのが一つでも目に見えると違いますよね。

●鳴浜：実現するにはお金もいるし、行政も動かさなければいけないし、地域の人々の協賛も必要だから、そう簡単にはできないと思うけども、実際に目に見えるということが、住民が一人でも多くまちづくりに参加することにも繋がるとは思う。今はややそういうことに関心を持っている人が断片的に参加するという段階かな。地域ぐるみでさっきの卯月先生の例のようにお祭りで次から次へと今まではあいさつもしなかった人がようやく肩を組んで御輿を担ぐ盛り上がりにつながったということはすごいと思うんだけど、まだそういうところまではいってないのかな。このまちもそういうところまでいけば良いと思う。たぶん北沢先生もそういうことを構想しながら、UDCKをつくられたと思うんです。あんまりそのピカピカした夢のような話にはならないかもしれないけど、こんぶくろ池もそうでしょう、NPOの皆さんが池をきれいにしようと集まったもので、そのへんの景観とか環境維持が進んでいるようだけど、ただこんぶくろ池をやる人はひつつのAグループ

で、UDCKでやるのはBグループで、となると色んなまちの広がりというのが限定的になると思うんで、本当はもっとすごい市民同士の繋がりがもっとでてくると良いと思うんだけどね。

そういう意味では明日のタウンミーティングなんかは良い事だと思う。まちづくりスクールにしてもカレッジリンクにしても、まだまだ部分的な試行段階というところから一歩踏み出せていないというのかな、僕らの実感としては、もう少し繋がりを持って発展してほしいと思うんですけどね。

先日宮奈さんから、ららぽーとの掲示板に地域情報のコーナーの広報委員をしてくれて頼まれたんだけど、でも僕はまだみなさんから情報を頂く立場で、発信するような力は持ち合わせていないということでお断りしたんですけどね、できるようになったらおもしろいと思うんだけどね。その中に今のようなプロジェクトが入っているとかな。野田先生からもツイッターをやらないかと誘われたんだけどね。

養生訓カルタも、参加者だけの満足じゃなくて、多くの人にも広げていこうという目的で行われたわけだから、そういう意味ではこれからPRをしていかないとかな。情報を広く市民の皆様に広めていく。そういう活動を行ないながら、その重要性や存在意義を理解してもらい、制作費などにあてていこうとしている。色々これからですよ。

それから若い人ですよ。カレッジリンクの参加者も始めはもう少し若い人もいたんだけど、時間的な制約とかもあるかもしれないけど、専門コースになるにつれて参加しなくなったんだよね。そういう人がでて、老若男女がいた方が良いと思う。老人大学みたいになったらもったいないしね。これからのまちを担う人たちがこういう活動に出て、担い手ができていくことが望ましいと思うけど。課題だね。

他の活動—マルシェとかピノキオとかは若い人が多いですよ？

○福角：そうですね。若い人が集まるテーマなんですよ。若い人が集まるものと年配の人が集まるもの、みたいな線引きがはっきりしちゃうのは良くないですね。まったく一緒に活動しなくとも、何かしら同じものを共有できるようにすると良いと思うのですが。

●鳴浜：UDCKというのはそういうことのトータルコーディネートをする存在であってほしい。僕らはまだ他の活動がまだよくわからないし、UDCKだよりというのがいつも出てますよね、もっとUDCKに目を向けたくなるような存在であってほしいと思うんだけどね。これは地道な努力が必要だと思うんですよ。

No	28 (1人)
日時	2010年12月4日17時~18時半
場所	新UDCK
対象	市民 ●和田富美子さん
質問者	○著者

(アンケート項目を見ながらの質問)

○福角：趣旨説明

このまちに引っ越して来た理由とかきっかけは何ですか？

●和田： もともとは主人の転勤で柏市に引っ越して来たんですけど、その時は社宅に入って何年かいたんですけど、ここ（パークシティ）ができたときに、駅に近いし、子どもが今は小学生なんですけど、中学・高校になって電車通学をするといったときに前に住んでいたところから駅までは自転車か親が送り迎えしなければいけないところだった。バスも利便性良く走っていないし、あとは主人が将来転勤してもし柏を出ることになって、売しやすい。転売し易いのも有利な条件の一つですね。ほぼ衝動買いに近いですね。

○福角： では引っ越してくる前は、この地域のこと（大学があるとか）はあまり知らなかったのですか？

●和田： はい。

○福角： どういう風に活動やUDCKを知られたのですか？

●和田： 柏の葉キャンパス駅ができたときに、UDCKという建物もできて、あれは何なんだろうというところから始まったのですが、中はガランとしているし、大人の出入りは見られるが、常時何かをやっている場所ではなくて、何かのオフィスかなと思っていました。何年前か、第一回のピノキオプロジェクトでチラシを見て、その時は今とシステムが違って、UDCKに行って、ピノキオになる登録をします。それで当日参加して、とても楽しかった。

○福角： ポスターを見られたということですが、どういう点に興味があったのですか？一番興味があったことは？

●和田： ピノキオに関しては、子どもたちが主体で何かつくっていく、そしてその評価や考察を通じて次に繋げていくというのがすごく親として魅力的で、与えられたものだけで「楽しいね」というのではなく、自分で創作もし、運営もするという点かな。私が友達を誘うときによく言うのは、「キッザニア」みたいな感じと。でもキッ

ザニアもつくられたものを楽しむということじゃないですか、それをここでは根本からできる、みんなでディスカッションしてあーだこーだ議論して、試作をつくってこれじゃできない、あれじゃできないと話す。それを子どもが行う上で、大人がすごく良いサポートをしている。押し付けるわけでもなく、ルールを守りながら一つ一つの活動に自信が持てるようなサポートをしてくれるので、親としては願ってもない活動だな、と思います。

○福角： 今のお話は参加していくうちに徐々に感じていらっしゃるのかなと思ったのですが、チラシだけに惹かれる部分はありますか？

●和田： 第1回目は「キッザニアが近くにある！」というイメージですね。

○福角： 参加していくうちに目的ができましたか？

●和田： まちづくりという言葉自体本当に初めてで、つくられたハードの中にただ自分たちがハコの一つに住むという生き方をしてきたんですが、多業種の人がみんなで関わり合って、みんなでのまちをつくっていくことにすごく単純に面白さがある。「まちつつくれるんだ」「できた中でも、変える事が出来るんだ」というのがすごく面白くて、それがただ売れば良いという従来のつくり方ではなくて、教育が絡んで来たり、市が絡んで来たり、住人が絡んで来たり、色んな主体がお互いの利益をミックスさせてディスカッションして一つの案を練っていくというのがまちづくりなのかなというように最近。与えられたものだけではなくて、「いえいえ、うちはこうですよ。」っていうところから妥協点を見つれるところまで歩み寄りをしていくことが、まちづくりだとし、理想だけじゃなくて、比対効果みたいな経済面も関わってくるし、10年後20年後の時間の経過に伴う熟成度も大切になってくるだろうし。だから個人単位では全くできないことが、大きな組織でできることが面白そう、その中に自分がいることが楽しいです。

○福角： 多主体が協働していることを実感できますか？

●和田： ピノキオに参加するときに、私もともと何かをつくりあげるということに興味がありましたし、また子どもを含めたコミュニティをどのように作っていくかということにもすごく興味がありましたので、ピノキオのリーディングメンバーに陰ながら参加させて頂いたんですね、その時にピノキオを支えている大人と、参加している子どもの関わりとかどのように資源利用をしているかを見ているうちに、情報も指導も「一方通行じゃない」ということをすごく感じて、子どもが提案したものに対して「それすごく良いじゃない！やってみようか！」ということで話が進んだりとか。そういう話に

なったときにどうやって周りを巻き込むかとか、それは大人の話ですけど、子どもは自由な発想でどんどんできるように大人が導いていくと。私がリーディングメンバーとして参加させて頂いたときに、子どもの可能性とか夢を引き上げてくれることが本当にすごいなと感じた。

他の活動で言えば、都市スタジオに住民代表として参加させて頂いたりとか、あとはまちのクラブ活動に参加させて頂いたりとか。あとはマチノ先生プロジェクトで先生のお手伝いをさせて頂いたりとか。

○福角： それは自主的に参加されるようになったのですか？

●和田： 何回かそういう活動に参加するようになって、顔が割れてきて、「やってくれる？」っていう感じで声がかかるようになった。それでできる範囲でならということで。本当に色んなところに顔を出させてもらっている分だけ、その奥深さ、真剣さがすごく伝わってきて、今は私がその魅力にのめり込んでいるという感じですね。

○福角： 他のプログラムで、まちづくりスクールやカレッジリンクといったような専門的なことを学ぶ場もありますが、興味はありますか？

●和田： 案内を見て行ってみたいと思うのですが、不定期で仕事を入れているので、全部に参加できなかったらもったいないとか。スケジュールのことが一番ネックです。

○福角： 活動に参加される中でおきた変化はありますか？

●和田： 一番の気持ちの変化というのは、今まではずっとお客さんでいたんですね、「お願いします、楽しかったです、次回も楽しみにしています」みたいな。でも顔を覚えて頂いて、名前を呼ばれるようになってからは、自分なりに役割を与えられる様になって「責任感というか、より良くするためには、みんなに伝えるためには、どうしたら良いのかとか、子育てと同じかな。役割を与えられて、自分の居場所ができてきたことかな。そこから変わったかな。本当に小さいことでも良い。係でも。「あなたに任せたいよ。」ということで自分に任せてもらったということが嬉しくて。

○福角： 周りの方を見ていて感じられることはありますか？

●和田： やっぱり基本的に得意な方とかは統率力があってみたい、巧くまちづくりに参加している人はたくさんいると思うのですが、そうでない方もやはり回数を重ねて参加することで「UDCKが一番近いけど一番遠い存在」だったものが、ちょっと入ってみて、今どんなチラシが

あるのかな、どんなイベントがあるのかなってということに興味がいくみたい。単発ではなく継続的な関わりによるのかな、と思います。

○福角： UDCKは誰でも利用して良いという公共的な面がある反面、図書館などのようにみなさんが「公共施設」として認識しているものとは違う。そうすると、見目は開かれていないのかなと思うのですが、いかがですか？

●和田： 私個人の考えでは、最初のUDCKができて、「国際キャンパスタウン構想」を見たときに、「ここはすごく今後誇れる場所になるんだ」という想いがあった、東大や千葉大のようなこれからの日本を担うような学生さんもいらっしゃるし、まちづくりがこれからできていくし、姉妹都市がこんなにすごい場所なんだ、っていう感じで、これから楽しいことがおきそうなまちだ、って思ったんですね。プチ勉強会とかイベントがあったときに、常にインテリジェンスが高まるようなイベントをしているなと思った。それがピノキオにしても、ただお菓子を配って遊びましょうというわけじゃないし。一つのイベントをやるにしても、裏付けがあつてのことだし、UDCKは「半公共的」だと思う。雨がふっているからといって子どもを連れて遊びに行く場所でもないし、そういう場所でもなくて良い。みんなのインテリジェンスを刺激し、人間性を高めていけるような、そしてそれが一つではなくて色々なイベントで多くの人が集まって、そこで色々なコミュニティができて、そこから波が起きてっていう。それで良いんじゃないかなって思います。

○福角： 今までUDCKができてからは、まずは発信して、何か興味のある人を集めてきたと思うのですが、ここからは興味を持った人がどう動いていけるか、そのしくみをつくっていくことが必要だと思います。

企業と一緒に協働することについてはどうですか？

●和田： 一番は利潤を第一にしていないところです。金銭的利益じゃなくて、ボランティアであれだけ動いていること。数々の企業がここまで賛同して下さって、「ここまでの利潤がないとだめですよ」じゃなくて「子どものために使って下さい」という損得じゃないというか。

○福角： 企業のイメージは変わりましたか？

●和田： 変わりましたね。特に三井不動産。一つの物件が終わればまた次の物件、アフターサービスは仕事の一環で少し。というようなことから、売っておしまいじゃないところ、力を温存してくれているところってなかなかないと思います。色々なイベントに参加する中でとても感じます。

○福角： 2番街ができてしまった後のことも考えないといけないですよ。

●和田： そうですね。KFVもなくなるし。今やっていることが全部撤退になってしまうと、住民が全部それを引き継げるかといったらなかなか難しい。小さな子どもたちが楽しんでいるイベントも、企業のサポートがあるから、「この内容にしてこの参加費」というのが実現できているけど。それが今なら300円でできることが3000円といったときに、誰が来るの？って。それは今後考えなければいけないことだと思います。

○福角： 何十年後にあの頃はよかったにならないように、先のことも考えていけるしくみが必要ですね。そのためにも、これから主体的に関わっていける人を見つけていかなければいけませんね。市民の方の関わりが大切になってきますね。

これからどういう風に関わっていきたいとお考えですか？

●和田： 市民も流動的で、その場所にずっと住むか住まないかもあると思うのですが、それだけではなくて、家族構成。小学生の親ができることと中学や高校に行ってできることとは違うと思う。中学とか高校に進学したら子どもの興味も変わってくると思うし、その時々に合わせて親は応援してあげたいと思う。子どもの年齢とか健康の面、経済面、仕事の事など色々なことで、タイミングによってできることが違うと思う。

だからUDCKは常に発信していくことが大切だと思う。その時に条件にあった人が現れると思うし、やっぱりそうあるべきだと思う。だからまず最低の家族の状況に応じて自分が人としてレベルアップできるように、色々な情報を入れて行きたい。そういう時にUDCKのああいう活動は自分のレベルに応じたところで参加したい。自分の気持ちに素直に、無理せず、新しい事に関わっていけたら良いなというのが今後のことですね。

○福角： 最後に一つ聞きたいのですが、小学校のコミュニティって強いコミュニティですよ、それとは違う良さはどういったところに魅力がありますか？

●和田： ピノキオに関しては、色々な地域から子どもが集まってくる、それが子どもにとっては刺激があって新鮮じゃないかなって。大人にとっても学校の中で通用する常識というのがあって、でも学校を出たら非常識なこともあって。そういう異文化交流みたいなこともできるし。あと子どもにとっては色々な人とつき合えること。学年も違う子どもとか、保護者としての大人じゃない大人と接することもできる、関わる人の幅が広い。良くも悪くも揉まれる、非常に良い機会かなと思っています。

学校だと何にしても正解がある。その枠から外れてしまうとちょっと、、、というのが。でもピノキオの場合はみんなが正解。みんな違う、それが良い。一人一人を最大限に評価してくれる。それは子どもにとっては心地よい場だと思う。

○福角： 地域の中で育てているという感覚はありますか？

●和田： 古い柏に関わっているという感覚はあまりないですが、これからつくっていく中で今ある資源を有効利用、お世話になれないかなという考え方はありますね。

No	29 (1人)
日時	2010年12月8日13時～14時
場所	新UDCK
対象	市民 ●浜野真紀江さん
質問者	○著者

○福角：趣旨説明

松葉にはどういった理由で住まわれているのですか？

●浜野： 前までは八王子にいたんですけど、我孫子に転勤になって、近くで探していたんですけど、八王子で通っていた幼稚園が良くて、同じような考え方の幼稚園に行きたくて、柏のみどり幼稚園に行きたくて、柏を探したんですね。でもその幼稚園がいっぱいで、松葉の幼稚園も良かったので、松葉にしました。
だから幼稚園で探したという感じですね。ただ仕事が我孫子だったので、我孫子で探してもあったと思うのですが。

○福角：松葉がどういう地域かというのはあまり気にされなかったのですか？

●浜野： 全然気にしませんでしたね。生まれも埼玉で、千葉のことはあまりわからなかったのです。

○福角：実際に住まわれてみて、松葉はどうですか？

●浜野： 松葉は良かったですね、緑も多いし、公園もあって住み易いですね。

○福角：団地開発でたくさんの方が移り住んでいて、既にコミュニティができあがったと思うのですが、地域の交流はいかがですか？

●浜野： 前に住んでいたところはマンションで引っ越したときに8年目だったんですね、なので結構新しい人が多かったんですけど、今の所は、結構長く住んでいる人が多くて、親世代の人が多いですね。だから入りやすいところはあった。良い人が多いし。

○福角：ふるさと協議会が主催している行事には参加されますか？

●浜野： 前に役員がまわってきて、その時に参加しました。あと私は青少年健全育成協議会の事務局をやっているので、それでパトロールとかもやっていたので、今年はお祭りに参加していましたね。

○福角：まずはピノキオが柏の葉の活動に参加するきっかけでしたか？

●浜野： そうですね。

○福角：ピノキオはどうやってお知りになりましたか？

●浜野： チラシですね。学校で。未だにここの活動を理解していないのですが。

何か案内が来たら、何でもやってみたら？という感じなので。

下の子は何でも行きたい、参加したいというタイプで。それで私には見られたくないみたいで、いつも帰ってって言われるので、活動を見たことはあまりないんです。

○福角：ではきっかけはやってみたいという好奇心が大きかったのですか？

●浜野： そうですね。リーディングチームのことも、メールが送られてくるので、それを子どもに伝えると出たいと言うので、やっていますが、まだよくわかっていません。

ピノキオがどんな位置づけなのかとか、飯田さんがどんな仕事をしているのかもよくわからないんですね。

○福角：UDCKとピノキオの説明。

●浜野： 一度だけ手伝いに行ったことがあるのですが、いつも嫌がられてしまって。自分もやってみたい気持ちはあるんですけどね。私がいると恥ずかしいみたいです。

○福角：参加していく中で、また行きたいと思う理由は何ですかね？

●浜野： あまり聞いたことはないのですが。

○福角：お母さんがこういう目的を持ってくれたら良いなということはあるですか？

●浜野： この地域と松葉町とは全然雰囲気が違うし、ここに友達がいるわけではないので、生活とは別で考えていますね。本当にピノキオで子どもが参加しているだけなので。ここに住んでいればまた別かもしれないですが。まちづくりに興味がないわけじゃないんだけど、自分の生活とかけ離れている。

○福角：地域というのは人によって考える範囲が違うと思うのですが、お子さんが、松葉町とはまた別に、柏の葉で活動することで、子どもの考える地域の範囲が広がるかなと思うのですが、いかがですか？

●浜野： 一人手賀沼の方から来ている子と友達になってたりはしてたので、友達関係は広がったのかもしれないけ

ど、あまり友達がつくりたいからとか、誰かがいるからっていうのではない感じがする。

○福角：ピノキオは子ども同士だけではなく、色んな大人の人と交流する機会があると思うのですが、その辺はいかがですか？

●浜野： なんせ小学校でも幼稚園でも、他のお母さんから副担任のようだねって言われる位しっかりしているから、学校にいるときでもあまり子ども扱いされているという感覚はないと思う。だからここに来て特別そういうことは感じていないと思う。

○福角：そうすると、ここに来る理由は何でしょう？

●浜野： とりあえず何か色んなことをやってみたいなっていうことか。それで自分に合っていればまた行くんだと思います。何だろう、やってみたい気持ち強いんだと思います。

○福角：どういう内容に興味を持っていましたかね？

●浜野： 何かをつくるのも楽しかったみたいです。あとはお友達と一緒にやるのも楽しいみたいです。どれが一番かはわかりません。

○福角：ピノキオの活動が地域とつながりを持っていると感じますか？

●浜野： 活動のはじめは、作品をつくって、発表してという感じでよくわからなかったのですが、段々やっていく中で病院へ行ったり、地域の色々なところへ行って活動しているのを見ると、そこだけじゃないんだな、と繋がっているんだなと思います。大学に行ったり、水の環境を調査したり。

○福角：それはやはり実際にまちに出て活動しているのは大きいのですかね？

●浜野： そうだと思います。柏の葉はらばーとがあるので、買い物をする場所という感覚が強いと思うけど、まちづくりという意識はないと思うけど、たぶんそのうちに繋がって行くのかなというのは思いますね。

○福角：これまでまちづくりということに対してどういう考えがありましたか？

●浜野： 住民と行政のつながりって、ふるさと協議会とかを通してしかつながりがないというか、何かこうしたいなという時に直接つながりはないと思うのですが。

○福角：この地域で考えているまちづくりは、色んな立場の人が連携して行くことだと考えているのですが、この

活動を通じて、そういったまちづくりの一環としてやっているという感じはありますか？

●浜野： そう言われればそうかなと思いますが、難しいですね。

○福角：まちづくりはどのような活動だと思いますか？

●浜野： 松葉町でもおしゃべりサロンとかあって、それも生き甲斐の一つかなと思うのですが、子どもたちがこれから住んで行く上で、そして自分たちも歳をとっていく中で、これからのまちの将来を考えなければいけないのかなと思いますね。

安全面でもね。地域みんなでのまちをつくる、守るという意味での将来です。何か新しいものをつくるためというよりは。

○福角：まちづくりに参加しているという感覚や、どう関わりたいというのはありますか？

●浜野： 引っ越してきて3年ちょっとなので、まちづくりに参加と言っても、住んでいるわけではないし、興味はあるけど、どう関わるという考えはなかった。自分も松葉で青少年健全育成協議会とか最近関わっているの、ピノキオも場所は違えど少しは関わっているという気持ちになってきましたね。

○福角：八王子にいたときも地域の活動に参加されていましたか？

●浜野： 子どもが小さかったので、特に参加していなかったかな。

○福角：東京に住んでいると、地域という感覚が生まれ難いのかなというイメージもあるのですが、柏に引っ越してからは地域という感覚が強くなったとかはありますか？

●浜野： 今小学校の副会長で本部も3年やっていて、そのつながりから青少協に参加しているんですが、自分が参加するようになって、ふる協の活動を知ったりして、こんなこともあるんだと気づきます。なかなか大人が自分で行こうという気持ちにはならないですもんね。

○福角：そうするとまちとの関わりというのは、お子さんを通じてという感じですか？

●浜野： そうですね。

○福角：そうすると、小学校のつながりがメインになると思うのですが、今回ピノキオに参加することでその輪が広がったとか、柏の葉に対するイメージが変わったとかはありますか？

● 浜野： ここは柏の中でも特別ですよ。生活する場所というよりは、、、ちょっと違いますよね。そういう意味では参加するまでは本当に買い物のためだけの場所でした。

活動を通じて、UDCKに入って大学とか自然の資源とかがここにあるというのがポスターなどを見て、少し実感したかもしれないです。そういう昔からのまちと新しいまちで子どもを見ていけるのは良いと思います。

○ 福角：このマンションの住民のためだけのものではないし、周辺のこの地域に住んでいる方も繋がってけると良いと思うのですが。そうすることで、この場所も、特別にならないと思うんです。柏の中で根付いていくべきだなと思います。だからこそ、周辺の地域からピノキオなどの活動に参加してもらうことは良いことだなと思います。

こういった活動が東京でやっているのと、こうして地域に根付いてやっているのでは違って、地域で活動する良さ、地元意識が高まるようなものだと良いかなと思います。

● 浜野： 確かに東京とかでやっているとその時は楽しいかもしれないですけど、一時ですもんね。

こうやって地域で何年も活動していて、松葉だけじゃなくて行動範囲が広がっていくのは良いかもしれないです。

はじめは UDCKが本当に新しいまちにできた新しい活動なのかなって思っていたけど、最近は、ここら辺周辺の地域としてのものなのかなって思います。

学校ではやらないこともやってくれるし。色々な場所に行って、お金のためじゃなくて、まちの人の手助けになるとかそういう経験をして、というのもよいなと思います。

○ 福角：UDCKという建物についてお聴きしたいのですが、建物は知らなかったですか？

● 浜野： あるのは知っていたかもしれないですけど、デザインセンターじゃないですか、だからマンションの何かだと思っていた。

○ 福角：参加されてどんなイメージになりましたか？

● 浜野： まちづくりの拠点というか、新しいマンションだけじゃなくて、自然のことを話したりとか、街全体のことを話したり、大人も子どもも活動したり、そういう拠点なんだなという認識に変わりました。個人的にここに来てまだ活動をしているわけではないので、そこまでのイメージですが。

○ 福角：ここに来てチラシとかで他の活動を知ることはありますか？

● 浜野： はじめは多かったのですが、最近もらわないです。リーディングメンバーのメールくらいで。

○ 福角：お子様が大きくなると、こうしてまちの関わり方も変わってくると思うのですが、お子さんが大きくなってから、お母さん自身が何かやりたいというのはありますか？

● 浜野： 考えた事はないですけど、歳をとって、自分の時間だけを持てる様になったらわからないですけど、今はもういっぱいいっぱいなので。市民活動も子どもたちがはちみつとかやってるよ、というのを聞くと、興味はあるので、地域のことを知るという意味で市民活動には興味はあります。なかなか単発のイベントだとそれで終わってしまうので、できれば継続的に関わっていききたいので、そういうものに参加したいですね。

○ 福角：すごくたくさんプログラムがあるので、是非。

● 浜野： そういうのも知らないんですよ。入ってみたいとやはりわからないですよ。外にいと通り過ぎるだけかもしれないですね。

No	30 (人)
日時	2010年12月8日14時~15時
場所	新UDCK
対象	市民 ●大野良恵さん
質問者	○著者

○福角：趣旨説明

まずは大野さんのことからお聴きたいのですが、ずっと根戸にお住まいですか？

●大野： そうですね、実家にはいないんですけど、近所に住んでいるので。戻ってきたという感じですね。途中で何年かは違う場所に居たのですが、戻ってきたんです。

○福角： 柏の葉の活動に参加されるきっかけは何ですか？

●大野： もともと何か楽しいことないかな、ってことでネットサーフィンをしてたんですね、たまたま柏の葉ピクニッククラブを見つけて、すごい楽しそうだなと思ってすごい楽しそうだなと思って連絡したんです。それでピクニックが一番最初で、ピクニックのコンテストの前に、砂川さんから他にも色々あるよーって教えてもらって、コミュニティチェアとか教えてもらって、それに子どもと3人で参加したんですね、そしたら子どもがすごく楽しかったようで、その時何か読売新聞のインタビューか何かにも掲載されて嬉しかったようで、そこから五感の学校とかピクニッククラブに参加させてもらったりして。

○福角： 柏の葉以外で何か活動に参加されていましたか？

●大野： 特に参加していませんね。

○福角： ピノキオに参加されて、その前に比べて活動に対してイメージの変化はありましたか？

●大野： 活動に参加したときに、特に他のお子さんとの交流ということは考えていなかったのですが、徐々に仲良くなっていきましたね。あとは何か色んなアーティストが参加していて、普段の日常生活ではそういった機会がないので、新鮮だし、なかなか経験できないことだなと感じるようになってきた。

○福角： 学校の活動とはやはり違った楽しさがあると思うのですが、何か具体的にありますか？

●大野： 自分の意見を発表できる場。頭の中で考えた事を自由にできるのかな。自分達の考えた事を、大人が実現してくれる。

特に長男がスタッフの方ととても仲良くさせて頂いていて、ここに来ると知っている大人とかが居ることがすごく嬉しいみたいで、何かピノキオとかのイベントがあると、前の日から楽しみにしていますね。

○福角： 近所付き合いで身近な大人との交流はありますか？

●大野： そうですね、私が働いていて平日はあまり触れ合うことはないですね。ただ地域の方が通学路に立って見守りをしてくれたりというのはありますね。

○福角： ピノキオ以外の活動も参加されているんですね？

●大野： そうですね、色々と参加させて頂いているので、くり方がよくわからないのですが、どれがピノキオ？みたいな。

○福角： 子どもを巻き込んだ活動がまちづくりの中でどのような意味を持つかということについて、何かご意見はありますか？

●大野： こういった活動がそこまで知られていないと思うのですが、私も積極的に伝えているとは思いますが。例えばピノキオプロジェクトだとお仕事体験ができるから、キッズニアとかに興味を示す人は地域でできるんだよ、とかって誘っているんですけど。

○福角： 反応はどうですか？

●大野： すごく積極的に参加される方と、今度行ってみるねっていう方といますけど。

○福角： ピノキオプロジェクトをしている中で、「まちづくり」の一環を担っているという気持ちになりますか？

●大野： それはなりますね。ただ柏の葉の住民ではないので、どこまで柏の葉のまちづくり活動に参加しているかというのは微妙ですけど。

○福角： 具体的にどういうときに実感しますか？

●大野： 柏の葉のマンションの広告とかにもピノキオは参加させて頂いていて、そういう時に感じる。

○福角： 今まで「まちづくり」という言葉にどんな印象がありましたか？

●大野： 人との関わりでまちができていくと思うので、その人との関わりをピノキオとか五感の学校とかを通して、少しずつコミュニティができていったりするのかな、と思いますね。

柏の葉に駅ができてから、はじめはどんな感じかわからなくて、まさかこんな活動が行われているとは思わな

かったので、多主体が協働して、という意識を持ったのは参加後かもしれないです。

○福角： 活動に参加したことで得られたこと、発見したことなどがあればお願いします。

●大野： 長男はそこで友人ができました。その友人も柏の葉の住民じゃないんですけど、結構仲良くなれたので、住んでいる地域以外で柏の葉の友人ができたのは、すごく良かったと思う。今度トラバースィングウォールというをつくるということでイベントがあったんですが、すごくその友達と楽しく交流しているみたいで。

○福角： お母さんはどうですか？

●大野： ピノキオプロジェクトのリーディングメンバーに参加して、私もお手伝いさせて頂いたのですが、子どもと大人で別行動をしていて、他のお宅のお子さんと一緒に活動したりするのもとても良かったなと思います。一緒にひとつのものをづくりあげる一体感が楽しかったなと。

○福角： UDCKについてお聞きしたいのですが、活動に参加される前までは知りませんでしたか？

●大野： そうですね。活動に参加して知りました。何か楽しい事が行われていそうだなーっていうイメージがあって、うちの子も何かあるとひとまずUDCKに行ってみよう！みたいな。それで誰か知ってる人がいたら嬉しいみたいで、柏の葉に来るとらばーとよりも先にUDCKに行きたいみたいです。それで今日は誰もいないねとか言いながらかえってきたりして。

あの場所の空間も好きみたいで、外で誰もいないときもあそこで軽食をとったりすることはあります。

○福角： 常駐しているスタッフではなくて、ピノキオ関係の人と仲が良いんですよね？

●大野： そうですね、村田さんとか。

○福角： UDCKの他の活動に興味はありますか？

●大野： カレッジリンクとかの存在は知っています。ただ対象が大人だけのものは、仕事をしているので時間が取れない。ピノキオやマルシェの時は仕事を休んでいるのですが。

参加はできないのですが、興味はあります。

○福角： UDCKが心の拠り所という項目を選んで頂いていますが、具体的にお話していただいてもよろしいですか？

●大野： ここに来るとほっとするなって。知っている人もいるということもありますけど、普段仕事と子育てをしていて何かこういう場所で子どもたちが色々な大人と接すると、何か自分たち以外の大人と接して色々なことを一緒にやって、ありがたいなって。

建物だけだとそうでもないですが、プラス人がいるっていうことですが。まだ建物だけではないです。

ここに住んでいたら、学校帰りにでも、というのがあると思うのですが、私はここら辺の住民ではないので、何かイベントがある時にしか来ないのですが、ここに住んでいたら子どももちょっと安心感はあるんじゃないかなって思いますね。

○福角： 活動を通して企業に対するイメージって変わりましたか？

●大野： そうですね、村田さんとかにしても、今までは不動産会社にしてもそこまで蜜に住人と接するということはあまりないと思っていたのですが、ここにきて、そういうこともあるんだなと思いました。

あとは子どもがスパイラルの方とかに絶大な信頼をしているので、中澤さんとか小山田さんとか飯田さんとか大好きですしね。

あと、自分の頭の中で考えたことを大人がよく導いてくれて、導きだしてくれて、かたちにしてくれるってのがすごいなって思います。

○福角： 今の活動が他の世代と触れ合えたら良いなとかは思いますか？

●大野： 思いますね。

○福角： 今後はお子様の成長とともに関わり方が変わってくると思うのですが、子どもが参加しなくなってからはご自身がなにかしたい、と思われることはありますか？

●大野： 思いますね。子どもは子どもで楽しんで、親は親は楽しめると思うので。うちの子は中学生になってもスタッフ側で働きたいって言ってますけどね。この間悩んで、ピノキオは小学生までだけど、卒業したらどうしようって。そしたら皆さんにスタッフすれば良いよって言われてほっとしてました。

私よりきっと息子の方が柏の葉の活動に参加している気持ちだと思います。

子どもが羨ましくて。こういう色々な人と触れ合いながら色々な事、しかも家出は出来ないようなことがたくさんできるので、自分の子どもの時にこういうのがあったら良いなって思うのですが、そういうこともあって、私自身色々なことに参加してほしいなと思いますし、子どもも行きたいって言うので。確かにこういう活動を知る前は柏に対してそこまで思い入れがなかったんです

ね、でも最近はこういう活動に参加して、近くに住んで良かったなって思えるんですね。

今までは色々あるように見えて実際ないのが柏だと思っていたんです、だから東京とか外に出してしまうことが多かったんですけど、こういう活動がたくさんあるので、地元でもこういう楽しいことが行われてて、それに参加できて良かったなって思います。

○福角： 地縁のような、テーマで集まるような、その間のような活動なのかなって考えています。東京で同じようなキッザニアなどもあります、地域で展開していることが良いのかなと。

●大野： 私沢田マンションがすごく好きで、色々な世代が集まってみんなで色々な活動をしているじゃないですか、私個人としてはああいうものがすごく好きで。なのでみんなで住人同士でなにかをつくりあげるといのが好きなんです。柏の葉の活動もそれと通じる部分があつて。

○福角： なにかまちの中で自分が活動できる場所があることは良いですね。

●大野： こういった活動は段々住民主体に移行していくのですか？

○福角： そうだと思います。今はその試行段階だと思います。どうやって持続的におこなっていくのが大切ですよ。

●大野： マンションの中に人が入ってしまうともう企業の人は関わらないのかなって思います。マンションの方の参加ってあるんですか？

○福角： 小学生はまだ少なく、小さいお子様が多いので、そのお母さんの参加はありますけど、それでもまだまだ一部ですよ。

ただ完全な公共施設でもない、住民みんなが参加するのが良いというわけでもないですし、どういう風に広めていくかのバランスが難しいですよ。

●大野： 知らないというのはもったいないですよ。

○福角： 参加した人がどんどん広めていってもらえるのが良いですよ。チラシもありますけど、一言知り合いから説明してもらっただけで興味の持ち方が全然違いますよね。

No	31 (2人)
日時	2010年11月20日17時30分~19時
場所	新UDCK
対象	市民 ●山内文子さん、河合都志子さん
質問者	○著者

質問者：○福角朋香

○福角： 河合さんがパークシティに最近引っ越されたんですよね？山内さんは流山ですよね。

●山内：私は流山と国立を行き来しているんです。

○福角： どうしてこのまちに引っ越されてきたのですか？

●河合： 私は船橋に30年住んでいたのですが、戸建てで庭もあって、ガーデニングが好きで色々やっていたのですが、歳と共に主人も庭のことをやらなくなって、手入れが大変だったんです。庭ってきれいにしていないと近所の人みんなに注目されるし、汚くなると「おや？」ってことになるんだけど、私からするともう体力的に無理だったことだったの。その時に丁度息子がこのマンションを買うからって一緒に見に来たのよ、そして始めは主人もマンションは嫌だと言ってたんですけど、見てみたら「おい、ベランダでガーデニングできるぞ」なんてことで、衝動買いしてしまいました。

○福角： では他に色々なところを探されて、ここを決めたというわけではなく偶然だったのですか？

●河合： そうそうそう。1回しか来てないし。

○福角： ではこのまちの色んな要素で決めたわけではなくて、マンションの中で決めたということですね。

●河合： 公園があるのも知らなかった。

○福角： それなのに、その後のまちへの積極的な活動への参加はすごいですね。

●河合： というのは、引越してきてマンション暮らしが初めてだったんですよね、それでふとマンションの窓を開けたときに、今までは人の歩いている姿が見えていたわけですよね、でもここでは「なんにもない」と。そのときに、このままもしここで何かあったら誰も気がつかないという不安感が湧いてきた。そしてこれは地域に入っていかなければいけないと感じた。その時に丁度、カレッジリンクのチラシが入ってきたの。

○福角： なるほど。ではポスティングでお知りになったのですね。

山内さんはこれまでに何かこういった活動に参加されていたのですか？

●山内：いいえ。特に流山市では活動していません。

○福角： どうやってカレッジリンクを知ったのですか？

●山内：ららぽーとで見ました。一番始めの回から参加しているんですけど、参加に至っては、私自身元々植物が好きで、千葉大ということで園芸学部で参加できる機会があるならば是非参加したいということで、小論文を出しました。

○福角： 地域の市民講座みたいなものは受講したことはありますか？

●山内：単発の講座みたいなものはありますが、こういう形で（カレッジリンクのように）体系的に継続的に受けたことはないですね。

●河合： 私もね、日大とか東大とか近くにあって、たまに参加したことはありましたけど、あんまり時間がないということもありましたし、ここに来てからの危機感で行き始めたので、これまではあまりないですね。あとは自分の卒業した大学でNPOの活動はしていたけれども、それだけでいっぱいだったのね。

●山内：テーマへの興味と、豊かに生活するにはどうしたら良いか、今の私の年代が求めているプログラム「食・健康・環境」が揃っていたことと、千葉大学の先生の講義が聞ける、そして聞くだけではないということ。参加してグループワークをして年齢も職業も違う方とディスカッションしてやっていくものだったので、（ただ受講するだけの市民大学系のものではない）それですぐ申し込んだ。小論文に審査があったのですが、いいかげんな形で申し込んでも受からないと思って、本気でやっただけで大変で時間がかかった。そして参加OKの通知が来てとても嬉しかった。

●河合： 私がカレッジリンクに対して予想外というか期待はずれだった部分は、概論コースは広く浅くでも良いけれど、専門コースはもっと深くやると思っていたけれど、毎回テーマが変わってあまり深くできないことが少し不満がある。いくつかのコースで専門的にやると思った。まあ前回から大学院の方にあきがあったら参加しても良いという話があったけれど、あきがなくて参加できなかったの、私は大学院に進んで関心があるものを深めていきたいなど。カレッジリンクで1、2時間ではやはり消化不良。

● 山内：私は興味がとてもはっきりしていて、植物について学びたい。基礎コースが終わって、専門コースをうけて、その延長線上にある生け垣のプロジェクトを現在行っている。今回のコースとかはちょっと興味からは外れるので受けなかった。カルネットの養生訓のカルタなんかもやりたいと思うが、自分の家の庭と国立の家の庭と管理しなければいけない、やはり自分の周りの生活を豊かにするために、参加しているのに、そちらが忙しくなると自分の庭ができなくなるので、専門コースを修了した段階で、できることを選んで参加している。あと一応流山市なので、千葉大で学んだ事を、自分の住んでいる地域で広げていくという目的を持ってやっているので、あんまり手を広げてやると自分のことができないというのはありますね。柏市民の方とは立場が違うのだと思います。

だから常に私はここで学んだ事を自分の地域でどのように広げていけるかを考えている。

カレッジリンクの参加の仕方はできる人は参加して下さいというとても時間に関してフレキシブルで良いと思う。関わり方はそれぞれの人の目的によって違うじゃないですか。その辺はとてもオープンで良いと思います。

○ 福角： 専門コースと基礎コースでは、やはり基礎コースは物足りなかったですか？

● 河合： 専門コースでも物足りない。

● 山内： 一つのことを深くやりたいと思いますよね。

● 河合： まあでもひとつのテーマ毎に分けてしまうと、集まる人が少ないし、大学院じゃないからカレッジリンクとしてやっていくのはできないよね。それもわかりますけどね。だからせめて生け垣とかカルタとかね。私はカルタをやっているけれど、ここまできたら引き返せない、という感じかな。

● 山内： 私はカルタは途中でフェードアウトしたのですが。あれもつくるの本当に大変だったんですね。レイアウトとか資金調達とか。それでそのつくるプロセスも全部含めて勉強に成るという人にとっては良いと思うのですが、私はそれをやる時間がありませんでしたね。

● 河合： 私も生け垣の方なんかもやりたいんだけど、やっぱりね、主婦だし、子どもがもう育ったといってもどれもこれも参加するわけにはいかないの。だからまずは、カルタが3月で終わるまでは、という感じで、その後もし大学院の方に行くことになったらどうなるかはわからないけれど、それが終わったら生け垣の方にも参加したいと思っている。やはりマンションでもそういう子育てが終わった人のグループを立ち上げていて、そこで

活動なんかもしているんですけど、またそれとはちょっと違った知的な活動をするのも楽しいし、学生時代になんでもっと勉強しなかったのかなと反省している。

○ 福角： 座学やワークショップなどの色々なプログラムがありますが、こういったところに関心がありましたか？

● 山内： 私は前回のまちづくりスクールで、秋山先生が豊四季団地でやっていることに興味があったので参加したのですが、全部の回に参加できるというわけではないのですが。ですから私の関わり方というのは、自分の興味があることと、あとは学校へ行かなくても授業ではなくて、こういうところで先生方の話を聞く事ができるというのはすごく新鮮で、それを学んだらそれを地域で応用することを考えたりとか、学んだ事を自分の中で考えて実際にやらないと意味がないと思うんですね。

○ 福角： 座学で学ぶ事というのは知識がメインですよ、でもワークショップで学ぶ事というのは、知識だけではなくて、コミュニケーションの取り方ですとか、自分の考えを他人に伝える方法とか、相手の意見を聞くこととか、そういった勉強にもなりますよね。そういったことに関しては何か面白いと感じた事はありますか？

● 山内：

● 河合： そういうものは知識だけ得るのではなくて、自分の意見を発表したりすることもすごく大切だし、ただ受け身だけだったらその楽しさだけしかないから、というのはあると思います。ただね、マンションの知り合いの方をよく誘うんですけど、結構みんな尻込みするんです。特に女性の方。カレッジリンクも先ず最初の難関はあの小論文ね。たいしたことかかなくても良いのにな。やっぱり人間だから、かっこよく書こうとかそういった気持ちになるんじゃないでしょうかね。だから恥ずかしいをもっと越えて、素直に自分自身を見せて、間違っていたら間違っていたを知ることの方が大切だと私は思うんだけど、それがなかなかできない人が多いことが残念だと思うんだけど、もっと私は多くの人に聞きにきてほしいのよね。私はまちづくりスクールにはそこまで参加していないんだけど、前は高齢社会がテーマだったので、これは聞かなければ！と思ってきたんですね。そして毎回参加できないのはやはり体力的にも限界があるから、全部は参加できない。話題が自分身の身近なときには参加したいと思う。前回のテーマなんか、もっと女性に参加してもらいたいと思う。女性少なかったですよ。

● 山内： カレッジリンクの卒業生が多いしね。知っている顔ばかりよね。

- 河合： 残念よね。近いところでやっているのに、どうしてこないのかなと疑問。
- 山内： しかもあの回の際はグループワークとかはなかったですね。
- 河合： 自己紹介だけでも嫌だっていう人は多いですね。恥ずかしいの前にも、上手にやろうと思う気持ちがあるんですね。それを越えないと。私なんか恥じをかきっぱなしなんだけど。
- 福角： 若い方はクラブ活動やマルシェ、ピノキオ等には多く参加されているんですけどね。
- 山内： すごいたくさん活動されていますよね！
- 福角： それぞれのテーマで色んな活動はあるのですが、市民同士でつながりはなかなか生まれません。まちづくりスクールやカレッジリンクに興味がある人の層と、まちのクラブ活動などに興味がある人ではやはり興味がわかれちゃうんですね。
- 河合： 私もKFVでやっている活動に誘われて、土いじりの活動に行ったんですよ。そしたら若いお母さんばかりで、合わなかった、私はとてもこわかったの。何がこわかって、若いお母さんたちがおしゃべりをしていて、あちこちに鍬や鎌が落ちていて、子ども達がけがをしたらどうしようと思ってね。お母さんたちは平気だった。だから合わなかったんですね。
- 福角： 本当はまちづくりスクールやカレッジリンクに参加されている人と、若い方と混じると良いと思うのですが。
- 山内： そうですね。それで、繋がる為のテーマとして植物ってあると思うんですね。たとえばかしはなプロジェクトと生け垣のプロジェクトとか。それは植物に関する作業を通して古在先生の言うところの「市民園芸学」というね、共通の何か例えばかしはなをやっている人がこっちに来たときに、「これは何の植物ですか？」「じゃあこれをわけてあげましょ」とかそういうやりとりがあると、どんな人にとっても植物をキーワードに集まって来られて、通る人にも見る事ができて、っていう構想があると良いんですけどね。
- 河合： そうなると良いですね。
- 福角： そうですね。カレッジリンクなんかでは少し専門的なこともしますし、市民の方が運営や企画側に入って、市民の方をひっぱっていくようになると良いとおもいます。
- 河合： あとカレッジリンクは土曜日でしょ、土曜の午前中という若い方はなかなか参加できないかもね。私も子どもが小さかったら難しいかもしれない。
- 山内： あと先生方も土曜日でボランティアみたいに行っているわけですね、大変ですね。
- 河合： やっぱね、カルタなんかもやっても、先生たちは忙しいからといって、私たちが独走しようと思ってもできない。先生は忙しすぎてね。
- 山内： 今は少しずつ市民でできるように社団法人にしようかとかいう動きもあるみたいですけどね。そうなれば、徐々にね。
- 福角： 話が変わりますが、こういった活動をする中でまちづくりという言葉に対して違和感がなくなってきたと思うのですが、参加する前と後ではどういう風に違いますか？
- 河合： まちづくりってやっぱり行政がやることだと思っていましたよね。ここへ来たらそれがそうじゃなくなって、私たち市民も一緒にあるいは市民の声が大きく出せるまちづくりみたいなもう少し軽いまちづくりになりましたね。前は本当に市の企画かなにかで私たち市民には関係のないもの、あるとすれば何か立ち退きかなにかくらいだと思ってた。でもそうじゃなくて、すごく小さいことから。でもね、まちづくりスクールですごく残念だなと思ったことが、空き地に公園を提案したことがあった。私本当にその構想を考えて、現実にはできると思ってたの。でもそれは架空の状態で、もしもの話でしかなかった。それが本当に残念でね。あれが本当に実現していくようなものだったらもっと盛り上がるんじゃないかって思う。私は何を勘違いしていたのか、って気持ちに成った。それで降まちづくりスクールはちょっとな、という感じだった。でも高齢者がテーマということで今回は参加したけど。あの公園のことは私自身、すごく思い入れがあって、どんな公園を作ろうかなと真剣に考えたのよ。それが残念でね。その点で言えば、グリーンフィールド（生け垣）のプロジェクトは実現することが決まっているから、とても良いと思うの。
- 福角： 今のこの地位のまちづくりは、ソフトの活動が活発になってきて、そこで活動する人々が生まれただけでも、それをハードに活かしていくといったときにやはり行政の壁や制度の壁はまだまだ越えられないのかなと思います。市民の方だけではなく、学生もそうですね。でも完全にないわけではなくて、反映していこうという動きはありますね。

- 河合： 私たち市民が必ずしも良いものを作れるというわけではないけれども、もし良い案ができてそれが取り入れられるかもしれないというのがあったら真剣味が違うと思う。だけど、架空の計画で終わるなら、ほどほどでいいか、ということになりますよね。
- 福角： もうすこしハード面でも意見が反映できるようにしていけたら良いと思います。学生でも駅前ですういった計画をしています。
- 山内： 私も流山おおたかの森から来て、駅前を見ていたんですけど、流山は今日マルシェをしていて、駅前の計画はやはり流山の方が良いのかなと思いますね。柏の葉でも駅前にかしはなさんで色々やっているじゃないですか、でももし私がするならもっとアイビーをたらしたりして色々できると思うんですけど。
- 河合： 去年私文句言っちゃったの。センスが悪いつて。だけど、企画会社でやってるのよ。植えたり水やりをしたりするのは市民だけど、企画は藤崎事務所なんですよ。そうすると自分たちで花を企画してもなかなかできない。最初はあまりに酷くて、サルビアばかりで趣味が悪かった。そしてその後はこうした方が良いという提案を出して、夏はまだ良かった。
- 山内： 河合さんは行かれたのですか？
- 河合： 1回行ったの。でも実際にこういう花を植えて下さいとかはできないのよ。藤崎事務所は意見は聞けど、花の選定やらは外注してやってるのよ。
- 山内： だからここに住んでいる人じゃないわけじゃないですか。ここに住んでいる人だったら良いのだど。流山は誰がやっているかはわからないけど、雰囲気はここと全然違う。
- 河合： 結局かしはなの人たちは世話をやっている感じだったんですよ。デザインからできるならやりたいと思うけどね。
- 福角： 参加するきっかけはたくさんあると思うのですが、参加してもっと主体的に、自分で企画や運営もやりたいという人にとっては、そのしくみもないし、満足できるものでもないのかなと感じます。
- 山内： 企画とかはほとんど会社がやっちゃうんですよ。そういう意味では生け垣はある程度できるかもしれない。そこまでの組織づくりができてるのはカレッジリンクかもしれないわね。
あとそうやって業者が機械的に決めてしまうと、植物なんかはやはり愛があって、例えばみんながどの花が良いとか考えて、その過程が楽しいのよね。

古在先生の基礎理念「市民科学」の考えが広がっていつて、福角さんのような修論でまた東大と千葉大がねコラボできたりとかしていくと、しくみからできていくかもしれないですね。難しいけど。

- 福角： そうですね、すごく時間がかかると思います。
- 山内： 5年10年かかってね。まだできたばかりですし。
- 福角： UDCKについてはいつお知りになりましたか？
- 河合： 引っ越してきてすぐかな。目の前にあったから。除いてみたの。
- 山内： 何の建物だろうと入ってみた。あとカレッジリンクでもらう色々な冊子にも載っていたし。国際キャンパスタウン構想とかを見て、私としてはとてもワクワクしている。そしてここだけではなくて周辺にどのように波及しているのかも興味があった。ここの一角だけで留まっていたら意味ないですよ。もともと住んでいる人たちとどうコミュニケーションを取りながら、意見を聞きながらやっているんだろうというところが次の課題だと思うのです。ここだけ活発でも意味がないしね。TX沿線でも、どういう風に開発が進むのかに興味がある。あと私は国立にも行き来していますが、あそこの桜並木は本当にすごくて、運営している人たちのことを考えると本当に30年から40年かけて行っている活動なので、そのようにできれば、と思います。
- 福角： UDCKのようなセンター、拠点があることについてはどうお考えですか？
- 河合： 幸せよね。なかなかこんなセンターがあるところはないし、開発途上のまちづくりの過程だからできたし、一角を三井が持っていたからこそできたし、幸せなことだと思う。
- 山内： そういう意味では、三井さんの動きはURさんなんか比べて、とても良いと思う。
- 河合： 三井さんも徐々に変わってきたのよね。昔はそうでもなかった。
- 福角： そうですね、これまでの不動産のように、建ててすぐに終わりというスタイルでやっても、まちはそこで終わらないですよ。だからこそUDCKが三井のPRのためだけの場所であるのではなく、もっと周りの地域の人にとっても意味のある場所になる必要があるのだと思うんですね。
- 河合： やはり新しくつくるまちではUDCKのようなものを何年間かつくった方がまちづくりにとって良いわよね。

● 山内：人々が集う場所がしかも駅前にあるっていうのも良いわよね。

もうちょっと時間が経つと、高齢化に対応したソフト的なものも必要になってくると思いますし、今豊四季で秋山先生とかがやっている活動が今後どのように展開していくのが楽しみです。

○ 福角： こういう活動に参加することで、何かしらまちに関わっているという感覚があるのかなと感じました。

● 山内：長く続けるにはやはり多少バランスよくしないとだめだと思う。

● 河合： 何もかもやろうと思ったらだめね。ある程度程々に自分にあったものだけを探してやっていくとかね。あとは少し図々しい位じゃないとできないかな。

私も木漏れ日の会というのを毎月やって、みなさんにカレッジリンクとか色々進めるんだけど、そもそもそこに来ただけでも大変なのよ。若い人は子どもにつられて来るのよ。でも年配の人って来なくてもやっていけるのよ。独居老人なんか結構いるらしいのよ。自治会も町会もあるけれどもね。

● 山内： プライバシーの問題も最近は厳しいですね。

● 河合： 私はあのプライバシーの問題は本当に良い面と悪い面があると思う。

● 山内： 私も近所の人のことはとても気にかけている。ゴミ捨てのときとか。

● 河合： 私なんか同じフロアの人を把握するにも大変。全然出て来ない人とかもいるんだから。何回声をかけてもいないとかね。エレベーターの人とか知らない人と会うし。表札さえも出さない人もいるし。マンションはそういうわずらわしいのがなくて良いという人もいるし、それが寂しいと感じる人の二種類いるのよ。またこの個人情報にネックになっていてね。ここも何年か後には孤独死が出ると思うよ。孤独死が出ると本当に大変なのよ。不動産の価値も下がるしね。だから孤独死がでないようにしようって思ってる。

● 山内： 本当にまちづくりって広いですよ。

○ 福角： クラブ活動とかは専門的なものではなくても、先ずはコミュニティのない地域なので、こちらから色々なものをしかけて、コミュニティをつくろうとしているんですね。

● 山内： 本当にたくさん宮奈さんやってらっしゃいますよね。

● 河合： でもまだ住民の一部ですよ。

○ 福角： そうですね、もっと誰でも参加しやすいような施設だと良いなと思いますけどね。市民の方にどのように開放していくかも現在模索中なんですよ。

● 河合： こういうところをたまに借りられたら良いなと思いますね。

○ 福角： 次は東大の中に入るのもまた違う雰囲気になると思うんですけどね。

● 山内： マルシェなんかは結構多くの方が参加するんじゃない？

● 河合： でもあれはもう本当に買う事が目的で来ているしね。

No	32 (1人)
日時	2010年12月6日11時~12時半
場所	新UDCK
対象	市民 ●野村志津江さん
質問者	○著者

(アンケート項目を見ながらの質問)

○福角：趣旨説明
カレッジリンクとまちのクラブ活動に参加されているんですよね？

●野村： はちみつクラブが一番最初に知って、それを通じてマルシェで出店したり、まちのクラブ活動やクラブハウスのことも知った。活動していくうちに、カレッジリンクにも参加することになった。私の中ではそれらの活動は全部繋がっている。

あとはマンションのコミュニティルームで行っているリズムング（先生として）。

引っ越してきた時点で、外へ出て何かをしなければ、たぶんマンションって、人とのつながりがとれないんですよ。取らなければ取らないで済んでしまう。すごくコミュニケーションが取れないというのは防災でも福祉の面でも大変なことがたくさんあるなという感じはもっていたので。

○福角： 引っ越してきた経緯からお伺いしても良いですか？

●野村： 経緯はね、もともと松葉町に25年位住んでいたんです。それで親の介護とかで色々不便になってきた。エレベーターもないし、私たちの老後に向けて、あそこで生活するとなると、車いす一つ降ろせないのを見たので、老後のために、車がなくても暮らせる、買い物ができる、色々なニーズと合って、ここが建ち始めていたということ。あと私が一番選びたかった理由は、「まちづくり」だったんですよ。

松葉町も一つのまちでね、買い物もでき、学校もあり、病院もあって全てが揃っている地域なので、同じマンションに住むならそういったまちを形成しようとしているマンションに住みたかったの。だから例えばマンションが一棟ボンと建っているようなところは嫌だった。でもここは三井が全部開発をしていたので、全て繋がっているという感じがした。だからまちづくりがあるマンション、まちづくりの中にあるマンション、全体が繋がっていたらすごく楽しいなと思っていたので、そこは

少々高くても孤立したマンションには住みたくなかった理由ですね。

○福角： 松葉もURの開発でつくったまちですよね？当時はコミュニティ形成のためにふるさと協議会が機能したと思うのですが。

●野村： そうですね、ただ私が松葉町に引っ越した時には最後の物件だったんです。なのでほとんど出来ていて、出来上がったところに入っていったので。だから松葉町にいるときにはまちづくりにはノータッチ。役員の仕事以外はそういう輪の中には入れなかった。もう輪ができてしまっているから。体操の教室はそこでやっていたので、その繋がりはあったのですが、ふるさと協議会とか、社協に関連することは全くなかった。だからここへきたときには、自分で立ち上げるわけじゃないけど、何かつくって、そこでみんなで楽しみたいと思った。なのでそこで体操のサークルをつくったのが始まりです。そこで齊藤さんに出会ったんです。

○福角： どうやって知り合ったのですか？

●野村： サークル活動をするためにはどうしたら良かったかと思って思ったんです。もちろん営利はだめなので、そのつもりはなかったし、みんなと交流することが目的なので、そのためにできることと言えば体操をみんなですて、お茶のみして、そこから始めたかったの、自分のできることが体操だったと。それで管理組合に使いたいと連絡してもらって。齊藤さんとは、前年度にキャンドルづくりをやっていて、そこに参加したことがきっかけだったんです。その時に、体操をしていることを話していたら、クラブハウスでやりませんか？という話が出たんですけど、体操するには狭くてできなかったんです。だったら、コミュニティルームで開きますので、クラブハウスで宣伝をして下さいということになったんです。宣伝の仕様がなくて。それでそこからポスターづくりしましょうとか、人集めをしましょうとかっていうことになった。最初は2、3人だった。

○福角： それがこのまちに関わる最初のきっかけだったのですか？

●野村： そうですね。そのあとにはちみつクラブに参加したら、すごく簡単に入れますよということで、入ったの。それで今は体操は元気な人が来ますよね、病気の人はいないんですよ。だから次はお年寄りを外に連れ出したい、コミュニケーションをとる場をとりたいたいということで、木漏れ日喫茶というものを立ち上げたんです。そういうものも、齊藤さんにポスターづくりをお願いして。それはクラブ活動じゃないけど、連携してやっていきたいなというのがあったので、齊藤さんに関わっ

てもらっている。そして色々な情報ももらって。みんなが繋がりながら何か活動していきたいと思っているので、できるだけ色んなつてを使って、関わってもらったり、関わったりしながら。勝手な自分の想いですが、そこに人を巻き込んでいるだけで。

○福角： いつUDCKのことを知りましたか？

●野村： 始めはね、ハロウィンだったかな。その前に体操の場所を借りれないときに、UDCKを借りてもらった。音楽は本当は禁止なんだけれど、何回かなら良いですよということで借りたんです。あとはかしはなの会議でここを使った。はちみつクラブとして、はち関係のためにお花に関連するので、はちみつクラブとしてもかしはなとしても両方参加していたので、はちがとまれる花を置いて下さいということで。そこも繋がっていたんですね。ですから、ここで実際に関わったのは、今回の学生のスタジオに斉藤さんから参加していただだけませんか？と言われて、参加して見たら、フォーラムの案内とかを頂いて参加しているという感じですね。それでそういった所に顔を出すようになって、色々な人がいることを知った。カレッジリンクもUDCKに来ないですしね。カレッジリンクははちみつクラブで三輪先生に紹介してもらった。カレッジリンクも割と内容が楽しかったの。

○福角： ひとつひとつの活動が繋がっている、この地域のまちづくりの中で、それぞれが位置づけられていると実感するときはありますか？

●野村： ただの貸し教室ではないですよ、ここは。私たちからみたら、レベルが高くて、知的なものじゃないと参加できない、自分に知識がないと参加できないんじゃないかっていう漢字がした。ポスターを見ても、「サイエンス」とか名前がついちゃうと関係ない世界になってしまう。子どもがいる方はまだ良いですが、私のように小さい子どもがいなくて参加しにくいものもある。ちょっと遠目にみちゃう。だからそういう先入観はありますね。

○福角： 関わっていくなかでのイメージの変化みたいなものはありましたか？

●野村： ただね、この間の都市スタジオのことなんだけど、途中から英語のディスカッションになっちゃったんですよ。わかる人には良いけど、わからない人にとってはそこで閉じられてしまう。最初はどんな方にも参加できる、市民として色々な意見を言ってくださいね、ということだったのが、段々とレベルが上がっていくとついていけないところもあるし、始めの設定と違うんじゃないの、と思ってしまう。

○福角： この地域のまちづくりについて知っていったのはどうということがきっかけだったのですか？

●野村： たくさん色々なことに参加すること自体がまちづくり。難しい部分じゃなくて誰にでも参加できるまちづくりしか参加できない。だからまちづくりっていうのが、提唱している人によって違うと思う。建物をつくること、コミュニケーションをとること、催しをすること、色々なことがあると思うのね。でもそれが一体化するのは難しい。個々に専門的なものがあるしね。うつわづくりはお任せします、その使い方はみんな考えます。という感じかな。まちづくりと一言言っても何をまちづくりって言ってるの？って。この間も上野先生に、「まちづくりってどこの範囲まで考えるんですか？」「どの地域までを目指すのですか？」って聞いたら、「今回はそれを考えないで下さい」っておっしゃったんですね。 だったら私にとってのまちづくりと、講義の内容のまちづくりは一致しない。だったら意見が言えない。私にとってのまちづくりはこの周辺。

○福角： それぞれの人が考えているまちづくりの意味も、対象としているエリアも違う、そんな中でどういう風にやっていくかをみんなで考えていきたい。UDCKが行っている活動の中でも、その対象エリアは様々です。TX沿線、柏市、北部地域など。それぞれが重なり合っているのが良いかなと思います。

●野村： たぶんUDCKがそういう考えを持っていることを、知らない人が多い。UDCK自体がここのためにあると思っている人が多い。

○福角： UDCKが持っている公共性がどういうものなのかになってところにもあると思うのですが。

●野村： たぶんまだ熟していないんですね。まだまだこれから。私たちからしても、最初は三井がやっていると思っていたので、まちづくりってなんですか？構想がもうあるんでしょ？とはじめは思っていた。だから私たちはここに何ができるのかという関心しかなかった。学校はいつできるのだろう、この空き地には何ができるのだろう、っていうような。でもどうも違うらしい、というわさが飛び交っていることに不安を感じる人も多いと思う。うわさばかりが飛び交っている。見えて来ない。

○福角： そういう意味では、参加し易いクラブ活動はたくさんの人に参加してもらいたい良い機会かもしれないですね。

●野村： そうですね、小さな地道な活動が広がっているのは確かで、地道な活動も大切にね、大きなものはおまかせして。

○福角： 野村さんが活動に関わることで感じたこと、わかったこと、できた関係などありますか？

●野村： 皆さんおっしゃられているのは、すごく基本的なことなのですが、あいさつできる人がたくさん増えたというの、どこかで見かける、どこかで会っているというのは色んなところで、繋がって、今まであいさつする人がいなかったのに、立ち話する人が増えたことだと思う。住んでいる人にとっての生活って、楽しくなければ生活じゃない。ただ暮らしているだけでは生活じゃない。だからやっぱり若い人も、年齢いった人もみんなが楽しめるツールが必要。一緒にならないとできないものも、別じゃないとできないものもあるし、だからそういうツールはたくさんあった方が良さ。住んでいる人が楽しくないと、いくら建物があっても生きていかない。ハコをどのように活用していくのかーそれは私たちが求めるのか、それとも持っている人が発信するのか、発信したものが合致するのか、そこだと思う。

○福角： 両方の視点が欲しいですね。フィードバックしながら。ハードの部分は難しいですが、ソフト的な活動については住民の方が主体となってつくっていけるまちなのではないかと思います。

●野村： つくっていけるまちですよ。珍しいんじゃないですかね。まちをリニューアルするというのは町おこしをしたり、するけど、まあ0とは言わないけど、一からつくっていけるというのは今までにはない、きいたことないです。

○福角： 一般的には、住民はつくられたまちに住む、まちに対して受け身じゃないですか、つくっていく段階から関わろうという気持ちになることってなかなかないですよ。危機感を持たなければいけない問題がまだ深刻には起きていないというのがありますが。

●野村： 逆に深刻にならなければいけないまちにはなりたくないという危機感があります。今は良いけど、どんなまちもこれだけのマンションがあっても何十年後にさびれちゃって、あの頃は一体なんだったの？っていうまちになってほしくないなって。いつまでも生きているまちでいてほしい。松葉町をみてきて、高齢化が進んで私たちのように出て行くかつくり直すかどっちかじゃない、私は逃げてきたんだけどね。一回沈んだまちを復興するのは難しいでしょ。お金もないし。上を向いているときは良いんですよ。高齢化の問題にしても、パークシティにもお年寄り住んでいます。でも若い人を対象にした

ものがすごく多いというのは、高齢の人は忘れられているのではないかという気がしている。いくら楽しいまちでも、孤独死も起こり得るんですよ。だから高齢化している人を救い上げることと、若い人のことも同時進行で。その人たちをこういうところになかなか連れてこれないじゃないですか。

○福角： 三井もこのまちではこれまでの不動産会社のやり方ではなくて、新しくチャレンジしていると思うのですが、それでも2番街が出来た後はやはりその関わり方に大きな違いがでてくると思います。だから住民が主体的に関わって運営するしくみを考える段階にきていると思います。

●野村： もう目の前ですね。折角あるクラブを続けていくには自立しなければいけないけど、活動できる場所とお金がないと本当に何もできないですよ。今クラブハウスがすごく良い場所で、次のところはああいう場所はないので。あとコミュニティルームも、住民じゃないと借りれないし、入れない。そうすると今のクラブハウスでやっていることが外の住民をせっかく巻き込んでいるのに、巻き込めなくなっちゃうっていう恐れがある。UDCKも東大の中に入るんですよ。そうすると、UDCKは本当に事務所みたいになって、縮小していく方向になるんですよ。あと東大ってだけで入り難くなりますね。カレッジリンクも基礎コースで入ってくる人も減っているみたいだしね。私なんかも生徒さんや松葉の人に声をかけているけど、学校の講義って聞いただけで「うーん」ってなっちゃう。楽しいよって言ってもなかなか入ってこないのよね。

○福角： これから一市民としてまちづくりにどういう風に関わって行きたいかということについてはどうですか？

●野村： できることから、という感じですね。まちづくりスクールにも参加してみたいなと思いますけど。自分にできる範囲が何なのかよくわからない。

○福角： 野村さんのように、学習系のプログラムにも、サークル活動にも興味がある方も珍しいと思います。何か理由がありますか？

●野村： 両方行ってみると、別々に考える部分もあるんだけど、でもどこかで繋がっているんですよ。カレッジリンクの基礎コースに参加していた若いカップルが、ビーチボールを広めたいと、そこで宮奈さんと斉藤さんがカレッジリンクで講師で来たときに、ビーチボールをクラブ活動としてやったらどうかということで紹介した。そしてビーチボールクラブが実際ににできたんです。彼はそういうものを使って、デイサービスとか介護老人ホームで活動をしていて、彼は指圧とかの資格を

持っていて、そのお店を開く予定にしているという話からもわかるように色々繋がつているんですね。だから決して地道にやっていたら繋がっていないわけではなくて。全部が全部はつなげられないかもしれないけども、その中の一部の人が興味を示すことはあると思うの。だから決して諦めないで、呼びかけを続けていけば、子育てが終わった段階でもうちょっとアカデミックなことをやりたいと思うかもしれないじゃないですか？だから今の時点ではじゃなくても、環境が変わって行くから、細く長く、諦めないでその活動を続けて行くことが大切だと思う、UDCKもどこに行っても発信し続けることが大事だと思う。人が人を呼ぶ。いくらチラシを配っても、心がないと。紙面からはわからないことがたくさんあるからね。結局人のつながりだと思う。だから決してまちのクラブ活動とカレッジリンクは別物ではない。私はそういう繋がりを信じてやってきたので、続けていけば誰かは必ずと繋がっている。

○福角： 体操を無料でできるモチベーションはどこからきているのですか？

●野村： 30年間有料でやってきて、いづれ自分が歳をとって、あまり身体が自由に動けなくなって、もっとハードにやっていた時代を思うと、できなくなる時期が絶対にくると思っていて、そうなったら無償でやりたいとずっと思っていたの。思っていたので、ここで無料でやることに何の抵抗もなかった。ただ変なんだけど、他では有料でやっていてお金を頂いている訳じゃないですか、だから松葉の生徒さんにも、もし来たら来てほしいのよっていうけど。それで文句を言う生徒さんもないしね。だから自分ができることによって役に立つ事があつたら良いかと思って。あと出入り自由。会員制度無し。それは木漏れ日も同じ。

私たちの年代にのことは私たちにしかわからない。若い人にわかれて言う方が無理でね、でも私たちは若い人たちの時代を過ぎてきたから、なんとなくわかると思うから。

○福角： 地域のひとがどのようにまちと関わっていくかということに非常に興味がありますね。ただ寝にくる人もまだまだたくさんいると思うのですが。

●野村： このUDCKも柏の葉キャンパス周辺に昔からある地域（青田とか大室とか）と繋がっていない。お互いあまり知らない。はっぴば体操のときにはじめて交流して、いかに自分がせまい地域にいるのかなということがわかった。そういう意味での繋がりを誰かがつけてくれるのは良いと思う。だからここで夏にお祭りをしたんだけど、その時に色々テントが出てたけど、全然知らな

い人だらけで。ここが繋がつたらまた違うと思う。柏の葉だけういちゃってもいけないし。ただこのマンションの人は結構閉鎖的。色々呼びかけても反応がない。もうちょっと外とも関係をつくっていったら良いと思いますね。

○福角： UDCKがそこら辺を担えると良いと思いますが。

●野村： UDCKは柏の葉以外にも発信しているんですか？

○福角： TX沿線にポスターを貼ったり、市の情報誌に出したりとか、あとはメルマガですね。広報の仕方とか、発信のエリアも模索中だと思います。

●野村： まちづくりが何を目指していくかによりますよね。住民は自分たちが中心に思っているからね。

○福角： ベースの地域はもちつつも、外に対して開いていなければいけないですよね。

●野村： 閉じちゃうと収束するもですからね。マルシェなんかは以外と外から来た人が覗いて行って、何か持っていってもらえる可能性もありますよね。小さいところはそういうことから始める、UDCKは外に向かって発信する、みたいな感じで協働していくしかないと思う。人がわかれてしまうのは仕方ないと思う。興味の亡い事をおしつけることはできないし。広い視野で立っている人ができることは私たちにはできないし、その人ができるまちづくりって違うからね。

あとはこのまちの人だけでなく、やはり外から色々な人に入ってもらうことで、広がると思う。自分たちだけで孤立しないと思う。

一方で、自分の住むまちだから、安心・安全なことが基本だと思う。それがないと、いくら外へ広がっても良いまちとはいえないから、みんなが気持ちよく、きれいに保っていくことが大切だと思う。いつもきれいにしておくとか。ゴミゼロ運動を続けてもらうとか。一人ではなかなか拾えなくても、運動に参加することで拾うことができたり。小さいまちづくりをやっていくことも大事だと思います。

No	33 (4人)
日時	2010年12月11日18時~19時
場所	ららぽーと柏の葉
対象	市民 ● 池辺比佐代さん、飯島早苗さん、橋本杏里さん、山村麻衣子さん
質問者	○著者

○福角： 主旨説明。まずこのまちに来るきっかけから教えてください。

●池部： 僕と飯島は、きっかけがよくららぽーとに遊びに来ていて、まちづくりの掲示板を見ていて、この辺が面白い活動をしているなど。引越すことをきっかけにどうせならおもしろいこと、まちづくりに参加したいなど。親世代って、「昔はこうだったのよね」とか「今は建物が建ってこうなっちゃったのよね」とか結構色んな情報を持っていて、そういう話題を聞くとうらやましくて。自分は今しか知らない。昔をあまり知らない。自分が歳を重ねていくときに、昔はこうだったんだよっていう発展していく様を見たくて、ここに引越してきました。まちづくりに参加するつもりで引越して着ました。以前は柏の増尾、松戸にそれぞれ住んでいた。

○福角： 橋本さんと山村さんはいかがですか？

●橋本： 私は市川に住んでいて、もともとここは仕事で何度か来たことがあって、知っているまちだったのですが、そのうちにまちづくりをしていることを聞いて、面白いなど。折角ビーチボールも色々自分たちで広めたいねっていうのもあって、ここでやるんだったら私も参加するよということだった。

私は飯島さんと大学の同級生です。私とや山村さんは高校の同級生。

●山川： 私は実家が柏の西柏台で、話を聞いたときに「なんだ近所じゃん」と思って参加した。

○福角： まちづくりに興味をもって引越して来られたということですが、はじめは何の活動に参加されましたか？

●池部： カレッジリンクの基礎コースがあって、今年のはじめに参加した。

○福角： 参加してみてどうでしたか？

●池部： 千葉大学の徳山先生が非常に衝撃的で、とても面白かった。

●飯島： 一番最初の回か何かに宮奈さんと齊藤さんがお話をしてくれたのがきっかけで、つながった。そこで、自分たちがこのまちでビーチボールを広めていこうと思っていることを話した。

○福角： このまちに来る前からビーチボールをやられていたんですか？

●池部： 飯島さんの会社でやっていたところに橋本さんが誘われて入った。その後会社のメンバーが抜けて、江東区のビーチボール協会に入る入らないかとなったときに、色々あって、でも場所を借りるには色々大変だった。

●飯島： だったら柏の葉で、柏手はビーチボール自体がそんなに広まっていなかったから、広げていつかは試合ができる位になれば良いと思っていた。それでここで始めた。

齊藤さんに、そこまで本気ではなかったのですが、「やれますかね？」って聞いたら「やれますよ」って返事がきて、始まった。

体験からやった方が良いんじゃないかと齊藤さんから色々アドバイスをもらって。

○福角： 具体的に動き始めたのはいつですか？

●飯島： 10月かな、UDCKを使わせてもらって、まずはビーチボールとはなんぞやをパワーポイント発表してあとはみんなでボールを触ってもらって。その後体育館に移動して、5つ名した、その時はだいたい25人くらいだった。その後は月最低1回かな。だいたい月2回。

●池部： 3月まではこの調子で1回か2回でやっていく。

○福角： それはメルマガ配信で、自由に参加できるんですよね？

●飯島： そうですね。

○福角： 実際にクラブ活動にするとなったときに、まちづくりの交流の一環の中でビーチボールがどのような役割を担って行けば良いかと、目的とかはありますか？

●池部： 若干強引に立ち上げましたけど、もともとはビーチボールのチームだったので、チームが練習できる場所というところが出発点になるのですが、しかも全員出身千葉が多いので、都内でじゃなくて千葉の方が良いのもあって、あとは同じ世代の人と一緒に楽しめる場をつくりたいというのがスタートラインですね。いざ蓋を開けてみると、予想していなかった年齢ばかりでしたが。笑それが嫌ではなく、むしろ嬉しかった。新しいチャレンジだね。小学生が多かった。

●橋本：小学校でも、もうちょっと中学、高学年ぐらいがくるかなって言ってたんだけど、完全に低学年の子が来たので。

その位の年代の子と交流することも普段は少ないので、難しいですね。

○福角：練習メニュー小学生に合わせて考えないといけな
いでもんね。

●橋本：今みんなで模索中です。日によって来る子どもの
人数も違うので。多いと大変ですね。子ども達の中
でも、どごくやる気のある子とすぐに飽きちゃう子も
いるし。その辺のコントロールが難しいですね。

○福角：はじめはどういう年代の方を予想されていたの
ですか？

●池部：そう聞かれると、そこまで想定していなかったか
もしれません。フルオープンで、誰でも良いよって
いうのだけ決めてたので、かつ使っている体育館が
支援学校ということもあって、障害を持っている子
持っていない子関係なく、年齢も関係なく募集して
たので。何が来るだろう、という感じだったか
もしれないです。

どっちかと言うと高齢者に使ってもらいたいな
という気持ちはあったのですが、若い方ばかりに
なっちゃいましたね。

●橋本：私としては、折角新しい町で、若いご家族も
たくさんいるんで、家族にもっと参加してもらえ
たら良いなと思う。

○福角：都内でされていた時は、試合もたまに
あったと思うのですが、小学生が来ちゃうと
レッスンはメインになりますよね？

●飯島：都内でやっていた時は、私たちが主体
というよりも主体となっているところにお邪魔
して、そこの試合に入り込んでやらせてもら
っているという状態だった。なのでその時は
子ども達レッスンみたいなのはなかった。

●飯島：結構遅い時間だったので、小学生は
来なかったかな。あと子ども達は小学校で
ビーチボールのクラブ活動があったみたい
で、小学校の中でチームになっていて、大
会になるとたくさん出場してみたい。あれ
はもう学校単位で確立されてる。

○福角：そうすると、東京でやっていた時の
活動の仕方と、こちらでのそれとは全然違
いますね、先生のような。そうすると楽し
み方も変わってきたのかなと思うので
すが。

●池部：野望が大きすぎるので、通過地点
としては仕方ないと思っています。最終的
には自分たちもチームとして

出場したいと思っていますが、千葉って東
京とかと違ってスポーツ人口も少ないし、
組織化もされていないので、いくつか組
織めいたところもあるのですが、変なし
がらみがあるみたいで。条件が厳しいと
か。なので、そういうしがらみなしで、
このまちで、組織化して、県大会とか
全国大会に規模を広げていきたいと思
っている。できれば自分たちの活動場
所をつくるための、参加者を増やすた
めなので、指導側になるのは仕方ない。
今は我慢のとき。

●橋本：私たちと練習や試合ができるレ
ベルまでまずは皆さんになってもら
う。

●池部：親御さんにも参加してもら
う。付き添いじゃなくてやってくれ
と。来たら取りあえずプレーヤーとい
う感じですね。

●橋本：みんなができるようになってき
たら、練習メニューも統一して、極論
言えば、私たちがいなくても回る位
になってほしい。そうすると活動日
も増やせると思う。

●池部：活動日が増えれば練習量も増
えるし、強くなるし、自分たちは練
習量が圧倒的に少ないので、結局折
角大会に出てもすぐ負けちゃう。ど
うせやるなら勝ちたいと思うので。

○福角：当初まちづくりがしたいとい
うことで引越されてきましたが、ビー
チボールの活動を主体的に進めるま
でに半年もかからないスピードでし
たよね、今の活動をやっていること
でまちづくりに繋がっているという
実感はありますか？

●池部：あまりないかもしれない。

●橋本：結果的に、来ている人たちの
コミュニケーションの場になってい
れば、まちづくりになっているか
んと思うけど。

●池部：ただ、斉藤さんとかに紹介さ
れるときに、「ビーチボールの人です」
って言われるので、一つのコミュニ
ティの中に属しているんだという感
じがしますね。

●橋本：マルシェとかに言っても、
名前は覚えられていなくても「あ
あ、ビーチボールの！」って話しか
けられます。笑

●池部：肩書きじゃなくてコミュニ
ティが広がっていく感じが面白
くなって。クラブをやっていなかつ
たらなかった。

○福角：みなさんが思っているまち
づくりって何ですか？池部さんにお
伺いしたいのは、まちづくりがし
たいと思っていたということで、何
かしらイメージを持っていたのか
なと思って、それで実際カレッジ
リンクはクラブ活動に参加してみ
て何かイメージが変わったとかは
ありますか？

皆さんにお伺いしたいことは、今まで主体的にまちづくりをやりたかったことはないにしろ、こういった活動に参加する中で、まちと繋がっている意識ができたのかなど教えて下さい。

- 池部：すごく大それたものではないのですが、「柏の葉」という響きも良くて、好きだなと思って、ららぽーとの掲示板を見て面白そうだなって思って何かやりたい！と思っていて、当初はいち歯車で、何か面白いことがあったら参加したいなって思っていたんですよ。それがまたチャンスとして自分が主体的にできるものができて、すごく面白いと思います。あとやはり人の繋がりが好きなので、自分はずっと小さい時からマンション生活だったので、近所づきあいが少なく、少し憧れがあった。学校帰りに近所のおじさんから声をかけられるということが。利害関係のないコミュニケーションを求めているんだろうなと思います。やってみて、それが一番面白かった。実際にやってみると自分が働きかける以上に一歩足を踏み出したらすごい勢いでコミュニティが広がっていったので、まさに枝葉が延びるという感じでした。こっちに引っ越してからの方が充実しているのは確かですね。
- 福角：カレッジリンクに参加されていると結構年配の方とのコミュニケーションも多いと思うのですが、いかがですか？
- 池部：仕事柄年配の方とコミュニケーションをとる方が圧倒的に多かったんで、カレッジリンクは違和感なかったですね。
- 福角：大学と市民が繋がっているという意識はありますか？
- 池部：すごい深い繋がりという意識はないですが。
- 飯島：バルーンさんを見ていると、柏ビレッジの人と一緒に何かをしたりしている様子を見ると、感じますけどね。
- 池部：カレッジリンクは千葉大の授業を受けに行っている感覚がまだあって、繋がりというよりはまだ受け身かもしれません。
- 福角：カルネットの活動に参加される予定はないですか？
- 池部：今の所は予定はないのですが、身体を動かすことが好きなので、運動系のものでできたらやりたいです。
- 福角：みなさんはいかがですか？
- 橋本：私はここに住んでいるわけではないので、そこまで深くまちづくりを考えてはいないのですが、もともと

仕事できていた時から、何も無い状態を見ていて、それが段々できて、そこにビーチボールをやることになって、住んではないけど参加できるのかなってという楽しみはありますね。

- 福角：市川とここを比べるとどうですか？
- 橋本：市川は古い町なんですよ。もともと文化人が住んでいたようなまちなので、古い人たちが多いし。私が住んでいる街区は比較的若い人が多いのですが、住宅街の割にはこういうコミュニティはないです。関係は稀薄です。なので雰囲気は全然違う。つき合うとしても自治会とか回覧板とかぐらい。小さい子どもがいたときは子ども会とかがあったのですが、もう大人になってからは近所に誰が住んでるのかもわからないですし、隣のおばさんに合うぐらいで。そう考えると、世代も違う大人が色々集まって、外から来ても受け入れてくれるまちってすごく良いなって思います。
- 山村：私はここに近いところに住んでいて、かつマンションだったのですが、同じ年代の友達が多かったですね。子どもの時はよかったのですが、子どもが成長して、高齢化しちゃってるんですね。そんな中、うちの両親が見つけたのですが、柏市の緑生課が何かやっている、みどりの相談員という人がいて、月に数回決まった日に公園に来てたりという話も聞くし、ここの活動の様子も聞くし、柏の葉ってコミュニティの中心的な場なのかなっていう風に感じてきた。だから声をかけてもらった時に是非参加したいなと思いました。あとは大学の時に、美大だったのですが、芸術を通じてまちと関わっていくというようなプロジェクトでまちづくりみたいなこともしていたので、違和感がなかった。まちづくりによって地元を良くするというのは興味があった。
- 福角：まちづくりということに対して、もともと馴染みがあったのですか？
- 山村：たまたま意識したわけじゃないのですがたまたま繋がって。
- 福角：ビーチボール以外に何か参加されたものはありますか？
- 池部：セグウェイ。
- 福角：他には？
- 橋本：私はマチの先生のデコとか手芸サロンとか。
- 飯島：あとはソーセージづくりとか、ハロウィンパーティとか。季節もののイベントのボランティアとか。
- 飯島：私はどちらかと言うと、彼から話を聞いているうちに洗脳されたというか。自分がもともと住んでいたと

ころは、マンションだったのですが、マンション内のコミュニティみたいなのがあって、違うマンション間のコミュニティはなかったなと、こっちに引っ越してきて、マンション関係なく、周りの人とのネットワークが広がっているなというのをすごく感じます。それで最初は引っ張り込まれたというところがあったのですが、私自身新しいもの好きで何でも参加したいタイプなので。だからカレッジリンクもすごく受け身だったんです。それからまちづくりも楽しいなって思うようになった。それで自分自身がビーチボールを主体的にやるようになって、色んな人が繋がっていくのが新鮮で。

○福角：やはり人のネットワークが一番実感することなんですね。まちづくりと言えば、何か建物をつくるのが行政の政策というイメージはありましたか？

●橋本：ありましたね。なかなか個々で住民が動けるところってないと思うんですよね。もちろんそれは柏市も協力しているから、ここまで市民が主体的に動けるのになって思うのですが。

●池部：ここはバランスが良いんでしょうね。市民だけと言ってもだめだし、大学だけがと言ってもだめだし。

●橋本：そういう意味で色んな主体が集まっているのはすごいんですよね。

○福角：今後はそれをどう持続していくかということが課題だと思います。

●橋本：まだ人が増えますからね。

●池部：市民ってどうしても、言うだけで受け身 といふか いざやってみなよということになると祭り上げられてやるということが多くとおもうのですが、ここの良さはクラブ活動を見ていると、何々クラブのリーダーというようにネットワークが広がっていてすごく良いと思います。

●橋本：いっぱいリーダーがいると、安心しますよね、偏りが無いというか。何か大きいところでポンと一人でリーダーをしなければいけないとなると何もできないけど、いっぱいリーダーがいて、そのリーダーからまたネットワークができて、みたいな。

●池部：コーディネーターの齊藤さんとかすごくキーになっていると思います。齊藤さんは人柄も良いし、話をしてると結びつけるのがすごく巧いなって思います。こういう時はこの人！とか。それぞれの個性、クラブの善し悪しを把握して色んなところに繋げてくれていることがとても大きいんじゃないかな。自分たちもそれがなければただの柏市民なので。求めている人に対して、適したものを引っ張ってきてくれる。だから継続していくことを考えると、今はほとんどがボランティアでやれる人が限られているけど、これから

もっと自営の人とかのビジネスをしてたりとか、収入源を得られるしくみが必要になってきますよね。寄付だけじゃ厳しいですよ。

○福角：UDCKという場所についてお伺いしたいのですが、どのようなイメージをお持ちですか？

●飯島：私ははじめはモデルルームだと思っていました。

●橋本：私も。

●飯島：それで入ってみたんですよ。

●池部：ご自由にご勝手に書いてあるけど入っていいのかなみたいな。

●飯島：入ってみて、自転車の登録をしたのがきっかけで、公衆電源の存在を知ってパーベキューをしてみました。

●池部：でもあれも齊藤さんに説明してもらわなかったら絶対わからなかった。

●飯島：UDCKって横文字だしわからなかった。

●山村：私は母に聞くまで知らなくて、母がよく知っていて。新聞の間とか広報誌とか読み込む人で。もしかしてポスティングかな。どういうことが行われているかも母は知ってみたいですが、もう歳ですし、利用してないですが。

○福角：アーバンデザインセンターってどんなものだと今は思えますか？

●橋本：あまり深く関わっていない立場ですが、クラブ活動の取りまとめているのかなみたいなイメージ。

●飯島：私は地域の人が集まる場なのかなって。公民館みたいな。

●池部：僕はあまり良いイメージがないんです。無機質な感じがして。空間がデザインされすぎてるといふか。地域のためって言うけど、敷居が高いし。むしろ1個目の方が入り易かった。今はこざっぱりして入り辛い。用事がなかったら入らない。

●山村：デッキのところは良いんじゃない？

●橋本：入ってはいけない雰囲気がある。

●池部：本とかも見て良いよって書いてあるけど取り辛い。

○福角：多くの主体が関わっているのだから、市民の人に利用してもらいたい一方でオフィスとしての機能も保たなければいけないので試行錯誤中なんですよ。

建物そのものもありますが、あいつた地域のことを色々行う存在があるということについてはどうですか？

●橋本：他にはないよね。

●池部：存在自体はすごい有効だと思う。あの駅前にあると嫌でも目に入るから。そういうのがなければ知らないし、行かないし。

- 飯島：今までなかった分馴染み難いと思うのですが、一度踏み込んでしまえば、自分たちが活動しやすくなるし、踏み込む第一歩をもうちょっと考えてくれればもっと広まるのかなって思います。
 - 池部：クラブ活動をやってるからUDCKという響きをしってるけど、今自分たちの中での共通言語になっているけど、人に「UDCKでやります」って言っても通じないし。共通言語になるような発信がもっとあっても良いかなって。
 - 橋本：入ったことのない人にとっては、行政のハコものにしが見えなかつたりもするしね。うちら外でBBQやっていると、通る人が不思議な目で見ると。ぱっと見て自由に使えるというのがわかると良い。
 - 池部：もうひと工夫必要なかなって思う。今イベントをしても、来る顔ぶれが決まってきている。飽和というか。もう一工夫しないと、新しい人が入ってこれなくなって思う。全然違う地域の人が入ることも風通しがよくなるし。
クラブの人が協働で活動したりとかも考えられますし。その上でもう一域外側の人も入ってほしい。
- 福角：最後に、自分の住むまちがどういったら良いと思いますか？
- 飯島：隣の顔が知りたい。
 - 橋本：今本当に稀薄になってるのをすごく感じるし。孤独死とかも、今の社会が続いていけば自分のことになると思うし。最終的にはそこに繋がって行くのかなって。今自分が住んでいる地域も、柏の葉みたいなことまでは望まないけど、もうちょっと何かあったら良いなっておもいます。私は小学校の5年生の時に東京から市川に引っ越して、もちろん親同士は色々とおあるんですけど、子ども同士はほとんどなかった。
 - 山村：私はあったよ。
 - 橋本：家の前に公園があったけど、そこでは遊ばなかった。東京にいた時の方が遊んでいたかも。こっちに来てその友達と遊ぶ記憶がないかも。
- 福角：みなさん近所付き合いを求めているんですね。
- 池部：めんどくさいと思いつつも、どこかで欲しているものがあるのかもしれないですね。自分たちの世代が一番コミュニケーションの仕方を知らない世代なのかなって。核家族も増えて、近所付き合いをしなくても良い中で育って、馴染みもなくて。都内のマンションで育つとそうだったかも。
 - 飯島：私はマンションの中でそういうことがあったけど。
 - 山村：私もマンションの中ではあったな。役員が回ってくるしね。
- 飯島：マンション付き合いだけでも、あの人最近見ないわねっていうのもあるからね。だから私はそういう付き合いをするのが当たり前と思って育ったから、自分もまずは顔を知りたい。
 - 山村：すごく無機質な社会だよな。
 - 池部：そんなことを考えると、自分たちがやっていることってすごく小さくて、何も変わらないかなって思うんだけど、でも子どもたちが参加することで、彼らが変わるだろうっていう考えがある。自分たちのところに想像し得ないくらい子どもが来たというのも何かの縁かなって思う。
 - 山村：子どもたちが、このまちに住みたい、戻ってきたいと思えるようにしたいよね。
 - 池部：彼らが知らない人と触れ合って、何かをしてっていうのが当たり前思ってた育ってくれたらいいな、そう考えると自分たちの今というよりは、先を考えることができるかなって思う。30代になって始めて、次世代につなげるっていうことを意識し始めた。だからまちづくりでは、何かを繋げる、人と人を繋げるということに力を注ぎたい。
- 福角：活動拠点についてですが、どうやって今の場所を使うことになりましたか？
- 池部：探して、見つからなかったのですが、カレッジリンクで知り合った岡安さんという方がいて、その方が色々聞いてくれたみたいで、紹介してもらった。

No	34 (1人)
日時	2010年12月14日10時~11時
場所	UDCK
対象	市民 ●飯島さん
質問者	○著者

○福角：趣旨説明

●飯島：私はパークシティの住人なのですが、今4月でまる2年住んでいて、もともと松葉にいたので、ここが何にもない時から結構知っている方で、段々電車が通り、マンションができる様子を見ているのですが、マルシェをやっているのも最初は気づかなかったんですよ。でもまあポスティングがあって。もともと朝市とか市場とか楽しいから好きなんですけど。それで先ずはお客さんとして参加したのかな。はじめはいつやるのかもあまりわからず、やってたから寄ってみたという感じ。それはそれで消費者として、お客さんとしてやってたのですが、まちのクラブ活動ですが、東大でエコの調査をしている人たちがいて、その検束をお願いするのに、エコクラブに入ると言われて、そこに登録したらクラブ活動のメルマガで色々な案内がくるようになって。関口さんのことはもともと仕事の関係で知ってたので、お料理教室に参加するようになった。そこで関口さんの「男のための料理教室」がローストチキンとかビーフだったのですが、それに参加したくて助手として立候補した。私一応栄養士の資格を持ってるので、料理教室やんなよって関口さんに言われたり、次にやるときに一緒にやってよって言われたりして。そして柏の葉ドッグっていうのをつくりたいんだけど？って言われたときに、私もそういうのは大好きなので、一員にさせて頂いているのですが。

○福角：松葉からここに引っ越された理由は何ですか？

●飯島：とにかく手狭になってしまったので、どこかに引っ越そうと思っていて、子どもが転校しなくても良いところが良かった。あとは新しいまちでこれから開けていくというところに惹かれてですかね。

○福角：ここでやっている活動のことは、引っ越してからお知りになりましたか？

●飯島：そうですね。

●飯島：それで、柏の葉ドッグなんですけど、夏祭りをやったんですけど、柏の葉ドッグをつくるにあたって、地元の八百屋さんとかパン屋さんとも顔見知りになって、そ

うすると今度もまたマルシェに行つて会うと、コミュニケーションもできて、楽しくなつていったんですね。

○福角：マルシェ、エコクラブ、お料理教室以外には何か参加されていますか？

●飯島：齊藤さんが色々とセッティングをしてくれて、柏市の近隣レンタールと田中と松葉と3つの近隣センターの協働企画で、3回通しのピクニックの企画があつたんですよ。そこでお弁当づくりがあつて第一回の講師に推薦して頂いて、やらせて頂きました。

○福角：参加するうちに、マルシェに対するイメージは変わりましたか？

●飯島：そうですね、最初はもう本当に自分が楽しませてもらうだけで来ていたのですが、自分が中に入って行って、普通のお店の方の気持ちとはまた違うのですが。私は申し訳ないけど、商売がからんでいるわけじゃないので、楽しみだけで来ているんですけど、顔見知りが増えて行くに連れて、みんなに会いに行く楽しみもできましたね。

前は何かを買いに行くのが目的だったのですが、今は誰かに会いに行くことが目的になってきたかもしれないです。知ってるから買おうみたいなのところもあつたりして。たまたま隣で店を開いていた人とかも、次に場所が変わっても、ご挨拶できたり。そういう今度は楽しみができましたね。

○福角：マルシェでの顔が見える買い物、地元の食べ物も近くで買えることについてはどうお考えですか？

●飯島：どちらかという、私はそれをそこまで意識してなくて、地元のというよりは顔見知りの、という方が強いかな。

○福角：マルシェに参加して良かったことは何ですか？顔見知りの人ができたこと以外にも何かありますか？

●飯島：まちを活性化しているまちおこしじゃないですけど、柏の葉ドッグにしても、柏の葉の、マルシェの名物を作ろうよっていう熱い思いのところに参加させて頂いているので、活性化する一員になれているっていう実感が、微力でもそういう気持ちでいたいですね。

○福角：自分の住んでいるまちに対してそのような気持ちになることとか、まちづくりで何かしたいというのは昔からだったのですか？

●飯島：意外と活動できたかできないかは別として興味がありました。子ども会とかも。私は結構転勤族なので、そういうのには積極的に参加している方でしたね。

○福角： 今までに活動してきた地域と、ここでの活動の違いは何かありますか？

●飯島： ここはこういうマンションだったり、私今までは田舎だったので、すごくここは蜜なんですよ、子ども会にしても何でも。ここはここでドライな感じの中にも何か繋がりを探しているなっていう感じがして、特に小さいお子さんなんかはそんな気がするんです。

あと私はもともと子どもがすごく好きなので、すごく大きく言うと、まちの子ども達を育てたいなっていうのはすごくあるんですよ。今も保育園で仕事をしているのですが、自分の好きな食のことでこの子どもとかお母さんとかを育てたいなという気持ちはあります。

○福角： ピノキオには参加されたことはないですか？

●飯島： うちの子どもが参加していないからまだ行ったことはないんです。何か名前は聞いたことがあるのですが。去年柏の葉ドッグをつくる時に、ピノキオとコラボしたけど、関わったことはないです。でもそれに参加してから、この間のピノキオを見ると、少し見る目が変わったというか、見る目が変わったと思うんですよ。それまではそこまで興味がなかった。なぜか頭に入ってこなかったんです。チラシは来たんだけど、読んでも心に響いてこないというか、興味がなかったんでしょうね。でも一回一緒にやってから、ピノキオの話が出たりすると、どういことをやってるんだろうって思う様になった。

それこそUDCKって何なんだろうって、ずっと思っていました。何の建物なのかわからなくて。自然とここで打ち合わせをすることになって入る様になったとか、デッキを使ってお料理教室をしたりとか、必然性がある訪れるようになってからこういう施設だったんだって知った。

○福角： まちづくりという言葉に対して、違和感なく取り組めましたか？

●飯島： まちづくりって、ハードなものもソフトなものも、行政がやらなきゃできないこともあるし、まちづくりをするって言うよりは地域のコミュニケーションを図っていくのが、まちづくりの一部になるのかなって考えるようになった。

○福角： それは昔からそういう考えだったのですか？

●飯島： 子ども会という一つの行事に関わっていただけで、まちづくりって意識しながらやっているわけではないです。

○福角： 自分のやっている活動が、全体のまちづくりの中で位置づけられているといったような意識を持つことが大切なことだと考えています。

●飯島： それを聞くと、自分のやっていることがまちづくりの一端になっているんだということは、ここに来てから考えるようになりました。それに気づかされたかもしれない。それまでは自分がやりたくてやっているだけで終わっていたかも。

○福角： これからも、お料理や食を通して何かしらまちに関わっていきたいという思いはありますか？

●飯島： そうですね、ありますね。そんなに自分が何ができるとか考えていなかったのですが、齊藤さんすごくお上手で「ニーズがあるんですよ」とか「みんな知りたがっているんですよ」って言われると、結構その気になっちゃう。その結果みなさん喜んでくれて、コミュニケーションをとるきっかけづくりができたかなと。

○福角： どういった時に喜んでくれているかと実感されましたか？

●飯島： 近隣センターの合同企画（ピクニック）で講師をやったときにアンケートをとったのでってことで送って頂いたのですが、そのときに色々嬉しいことが書いてあって、私で役にたてるなら、、、と思った。今はやはり食が乱れているので、少しでも参考にしてくれれば良いとおもいます。

○福角： ここで活動していることと、お仕事とは何か得られることが違う気がするのですが、いかがですか？

●飯島： 私栄養士の資格は持っていましたけど、栄養士として働いたことは今までなくて、子どもが大きくなったきたのでそろそろ、と思って、1年前に8ヶ月くらい産休の交替で栄養士として保育園に入っていて、来年の4月からまた新しい保育園で栄養士をするのですが、今はその休憩期間というか勉強期間なんですね。それがちょうどこれと重なったので、すごくどっちにも良い作用というか。仕事とはまた違う、仕事が行き詰まったときにこっちの活動をしていて救われたこととかもあります。何でしょうね。やっぱり仕事じゃないからなのか、同じ食に関する事であってもね。すごい楽しかったんですよ。

○福角： 美味しいって声や反応が見れるからですかね。あとはここで出会った人と一緒に何かをつくりあげることが良かったんですかね？

●飯島： そうですね。今までみんなそれぞれの観点を持ち寄ってやっていることが楽しいのかな。

○福角： 食といえばカレッジリンクなどは興味はないですか？

●飯島： 一応ね、興味はあったんですけど、時間が合わなかったのかな。連続して出れないので。興味はあります。ここは何かそういうのがあるのが良いですよ。以前食品会社の方とか広告会社の方で食の安全を考える会みたいなのをやってて、それもすごく楽しかったのですが、食に興味のある人が集まってきていて、以前に料理教室で同じ班になった人とかと再会したりして、楽しかったですよ。

○福角： UDCKに始めてこられたのは、ミーティングかなにかですか？

●飯島： マルシェのときに少し覗いたことはありましたけど、覗いたただけであまりわからなかった。

○福角： ミーティングに参加されたり、少しずつ利用する中で、どういう施設だとお考えですか？

●飯島： まちづくりの拠点なんだなって思いました。はじめは全然思ってなかったのですが、以前もどこかに書いてあったのかもしれないですが、全然ピンときませんでした。そんなものがあるのかなって。拠点があったところでまちづくりができるのかなって感じはありましたけど、ここがあるから打ち合わせができたり、場があるから何かができるじゃないですか、最近はその必要性を感じます。

本当に最初は立派な建物はあるけど使われてるの？という感じでした。

大学生も企業の人もみんなが入って利用する場所なんだなと思うようになりました。

○福角： 近隣センターと一番違うところは何だと思いますか？

●飯島： こっちは身近ではないところかな。近隣センターは図書館やホールがあって、そこを利用する人が行くイメージがあるので、それは違いますね。

○福角： この地域にもほしいですか？

●飯島： そうですね、近隣センターというよりも図書館がほしいですね。子どもが全然行かなくなっちゃいました。

○福角： UDCKのような施設ってこれまで馴染みがなかったと思うのですが、このような施設が地域にあることについてどうお考えですか？

●飯島： このまちならではなのかなって感じがしますね。新しいまちであるということと、公民学ならではかなって。アゴラも何か普通のお店じゃないなって。その辺が違うのかなって思います。

○福角： これからどんな施設になったらよいと思いますか？

●飯島： ここはみんな、入ってよいのかな？って思うと思う。どういう人が使ってもよいか明確じゃないし、その辺がはっきりすれば良いかな。気軽には来れないので。

ただ普通に生活してては必要ないですよ。まちづくりというほどのことでなくても、何か一つのことえをやる人たちが集まるときに、どこで話そう？っていうときにこの場があることがありがたいなって。そういう集まりじゃないときは別の目的になっちゃうので。

○福角： 活動に参加するようになって、まちに対する意識の変化はありますか？

●飯島： まずはUDCKがすごく身近になったことと、こっち側に移ったからというものもありますけど、朝必ず覗いていくし、無意識に見たりするようになりました。

あとはそうですね、もう少しまちが活性化してほしいというのはあるのですが、一般の人たちがまずコミュニケーションが図れるようになるには、やはり近隣センターが必要かなと思いますね。

○福角： 行政がやっているわけじゃないからできることがある一方で、自分とか関係ない存在として認識してしまう人も多いので、近隣センターとはタイプが違いますね。

●飯島： ここで何かやっていると、すごく難しそうって思っちゃうんですね。知ってしまうと、すごく気軽に入れるので自分が興味のあることだったら行ってみようって思うのですが、身近に感じていないと何をやってもあまり来ないかもしれないですね。

○福角： また柏の葉ドッグを食べに行きますね。知っている人がつくってくれているというのは嬉しいですね。

●飯島： 是非。輪がすごく広がって行く感じがして、すごく嬉しいですね。

No	35 (1人)
日時	2010年12月13日13時~14時
場所	NPO支援センターちば
対象	商店/市民 ●関口久也さん
質問者	○著者

- 福角： 主旨説明
マルシェを知ったきっかけからお願いします。
- 関口： きっかけは小溝くんの営業で、出店しませんか？
ということで飛び込みで来た。それまでは全然しなかった。
- 福角： はじめはどういった印象をお持ちでしたか？
- 関口： 初めて聞いた時は、マルシェって全国あちこちでやっているって聞いていたから、市場風なのかんーと
かって思った。地元の農家とかお店をメインにして。
- 福角： 柏の葉キャンパス駅前ということで、柏駅からだと少し遠いですか？
- 関口： 距離とかそういうのは全然気にならなかった。
- 福角： マルシェをやってみたいなと思ったことはありますか？
- 関口： いや、全く思っていませんでした。営業されて、
うちならどうするかを考えた。
- 福角： ミルフィーユバーガーはもとからお店の商品としてあったのですか？
- 関口： もとからありました。最初すごかったんだよ。行列ができて、お店も少なかったし。整理券もつくっても
もらった位で。ちょっと話はそれるけど、出店して2、3
回目のときに齊藤さんを紹介されて、まちのクラブハウ
スで料理教室をやってくれと。それをやりはじめてから、
住人の方と仲良くなった。最初はローストチキンの
教室をやったのよ。そこがすごく集まっちゃって、そこ
に来てくれた人が次はこれをやってくれとか、マルシェ
に来るときに言われたりして、計5、6回はやったか
な。
- 福角： 一番始めにマルシェに参加されたのはいつですか？
- 関口： 2年前の夏。2008年の7月か8月。でローストチ
キンをしたのが去年の今頃。
- 福角： お料理教室をこれまでにされたことはありますか？
- 関口： あるよ。私のお店は学校給食に卸をやっている
ですよ、だから栄養士さんと一緒に小学生向けにやった
ことはあります。10回位やったかな。
- 福角： マルシェに参加していく中で、何度も参加される
理由は何ですか？
- 関口： うちの場合は、お店の商品がお肉だから、ミル
フィーユバーガーを持っていっているんだけど、そうす
ると「また来月も来るの？」とか会話ができるでしょ。
なんかそれがすごく大事だなって。それで次も来よう
って思う。お客さんとのコミュニケーションが多くて、楽
しかったからかな。もちろん、「主セはどこにある
の？」とか聞かれるし、それが大切だと思っていたか
ら、2回目からはショッピングカードをつくって持って
いたしね。
- 福角： 参加の目的は2回目位から今も続いているという
感じですか？
- 関口： そうですね。
- 福角： 柏の葉ドッグができてからは、その目的が増え
たりもしましたか？
- 関口： そうですね。当然出店をずっとやっているとお
店同士で仲良くなったり、お客さんともすごく仲良
くなったり、よく和田さんなんかも言うんだけど、「血は
つながっていないけど心は繋がっている」って。なんか
みんなでできないかなーって。そういう仲間意識みた
いなのができてきて、段々お店さんとも話す様になっ
てくると、一緒になんかやらない？とかコラボしようよ
とか。
- 福角： 参加して良かったなと思うところと悪かったな
と思うところはありますか？
- 関口： 悪かったことはほとんどないですね。雨で中止に
なったときは悲しい思いはしたけど、その他はいつも
持っていった分は完売してるからあんまり悪いイメ
ージはないね。もともとそこでたくさん売ろうという
つもりで行っているのではなくて、地元で、うちの
商品を介して知ってもらおうというつもりで参加
している。
- 福角： 前回の取材で、みなさんにとってマルシェは
どういう存在ですか？という質問がありましたが、
それは続けていくうちに変わってきますか？

● 関口： 参加するには色々な目的があって行くわけだけど、僕の場合はむこうの来月も来るの？とか来るよーとかっていうコミュニケーションの場というのが一番大きいんだよね。ふざけた話なんだけど、普通広告とか出すと何万、何十万って費用がかかるでしょ、マルシェに出店するのってたかが3000円で、時間は限られているけど、来る人にアピールできるとかって結構あると思うんだよね。比応対効果を考えると。あれはすごいイベントだな、と思って。

段々お店も人も増えてきたからもうちょっと盛り上げるためには何が良いかな、自分じゃちょっとできないから、巻き込めないかなーとおもって。

○ 福角： マルシェをやることで、まちづくりに対するイメージが変わったりすることもありましたか？

● 関口： 僕商人だから、例えばショッピングの面だったら、ららぽーとの中っていつもお店だけじゃ飽きちゃうだろうなーとか、もっと外に行けば面白いお店もいっぱいあるなーって思って、だけど自分に何ができるかと言えば、月に一回マルシェに来ることしかできないんだけど、実際に「お肉屋さんないのよー」とか「こっちに売りにきてよー」とか言われるんですよ。あと僕ネットショッピングもやってるんですけど、ショップカードにURLとか入れて。柏の葉の方もかなり買ってくれるんですよ。だからマルシェに出店しているだけじゃなくて、おつきあいはかなりあります。まちづくりはちょっとわからないな。まだ未完成のまちだなーと思う。

○ 福角： マルシェの活動はまちづくりだと思いますか？

● 関口： うん、もちろん。

○ 福角： どんな役割を担っていると思いますか？

● 関口： 月に一回のお祭り、イベント。なかなかないからね。

○ 福角： みこし祭りとかの普通のお祭りとはどういうところが違いますか？

● 関口： 新しいまちだから、そこには伝統とかないから、当然新しいマルシェみたいなスタイルのイベントができて当然だと思う。

○ 福角： マルシェが伝統になるかもしれないと思いますか？

● 関口： 長く続けてもらいたいな、と思います。結構楽しみに来てくれる人がいるから、そういうイベントは大事だなと。家族連れとか世代とかターゲットを問わず参加できるイベントだと思うから。

ディズニーランドに行くとなるとお金がかかるけど、近所であいったイベントがあると良いし。

○ 福角： 今後も商品を通じて、関わっていきたいですか？

● 関口： はい。

○ 福角： UDCKについておききたいのですが、はじめのUDCKのイメージはどのようなものでしたか？

● 関口： そうですね、何だろう。柏の葉の住宅街の拠点になって、そこから色々な情報を発信していくのかなーというイメージだった。

○ 福角： 関わってみておのイメージに変化はありましたか？

● 関口： そうですね、あそこでも今はこっちに来てパーベキューとかをやらせてもらったんだけど、良いなと思いましたね。パークシティに住んでいなくても、近くに住んでいる人が集まれる場所があることはとても良いと思う。公民館とか地域にあると思うけど、またそれとは違うというか。色々な人が利用し易いようになっている。

○ 福角： 公民館と一番違うなと感じるところは何ですか？

● 関口： イベントの質も違うだろうし、一番の違いは何だろう。特に公民館と違って、大きく集めたりするでしょ。何か新しい感じがするよね。

○ 福角： 出店者の方は柏の葉以外も柏市のあちこちから来ていますが、参加しに来ている人ももっと広域に広がっていったら良いなと思いますか？

● 関口： 思いますね。

○ 福角： マルシェが地域のお店と住民が繋がる活動というのがあると思うのですが、その地域とはどの辺までをイメージされていますか？

● 関口： そうですね、僕はあまりそれは考えていなくて、取りあえず最低柏市内。あと結構野田とかも来ますよね。

○ 福角： UDCKが自分の地域の施設だという実感はありますか？

● 関口： ありますね。

○ 福角： マルシェ以外でも使いたいと思いますか？どんな使い方をしたいと思いますか？

- 関口： 私も一回使わせてもらったけど、ビアフェスタで。差ソーセージを自分たちでつくって、ビールと食べて。そういうことってなかなかできる場所ないですよ。あそこは中がプロジェクタになって、外もデッキでアウトドア的なこともできるし、楽しかったですね。何でもできるという感じはするね。
- 福角： アーバンデザインセンターというものに馴染み始めたという実感はありますか？
- 関口： あります、あります。
- 福角： それはマルシェだけじゃなくて、ビアフェスタとかお料理教室とか、色んな使い方をやってみて感じることでですか？
- 関口： そうですね、色んな制約はあるかもしれないけど、基本的に僕らのアイデアを全部活かしてくれたから成功したんだけど、それって公民館とかではできないよなって後から思ったね。
- 福角： 場所があるということも大きいと思うのですが、ソフトな面ではどうですか？
- 関口： ソフトな面はあの規模だったらああいうイベントの規模で十分じゃない。
- 福角： アイデアを実現するプロセスには、斉藤さんの存在があったりするじゃないですか、他ではできないような。その辺はいかがですか？
- 関口： 僕の場合はね、斉藤さんもそうなんだけど、住人の和田さんとか飯島さんも含めて4人で動いているんだよね。例えばこの間は大人だったけど、夏は子ども向けにやったんだよね。だからターゲットを決めて、必ず住民の方に相談して、ミーティングを必ずやっているんですよ。集客の仕方は斉藤さんに任せて、UDCKの使い方とかイベントの内容については住人の方と細かくタイムスケジュールとかつくってやっているんですよ。
僕のことに関してなんですけど、あのマンションに住んでいる人って結構料理を知りたいとか、専門家の意見が聞きたいとかっていう人が結構いるみたいで、男性のためのローストビーフ教室をした時も、「こんなこと知らないの？」とかっていうことも多かったです。それで時間が延びちゃったりしてね。そういうことを繰り返しているとね、ぎゅっと1つのことを教えることで、皆さん満足して帰られることが段々わかってきて、それは飯島さんと和田さんも参加したがっていたんですけど、男性用だったからスタッフとして入ってもらったんですよ。そしたらね、うまくいったんですよ。そういう連携プレーができていることが良いと思いました。
- 福角： これから他にも商店の人を巻き込みたいとか、住人も巻き込んでいこうとお考えですか？
- 関口： 柏の葉ドッグで僕はもう頭いっぱいだから、他の人が他のことでまたつくってやれば面白いなと思いますね。柏の葉ドッグは今の人数が丁度良いかな。他の方がコラボして新しいものをつくるというのがあっても良いと思う。
- 福角： お店は柏駅近くにあると思うのですが、中央部と北部がもっと繋がると良いと思いますか？
- 関口： ありますね。
- 福角： 柏の葉ドッグを柏の葉以外にも広めたいという考えはありますか？
- 関口： 取りあえず柏の葉ドッグはマルシェ限定だね。僕はマルシェを通して、北部からこちらにお客さんを連れてくることできていると思うんですよ。他のお店さんは成果はあまりないみたいで。皆さん目的は様々だしやり方も違うしね。でもお店さんは、自分のお店に来てもらえるように頑張れば良いのになと思いますけどね。
- 福角： マルシェ、柏の葉ドッグ、お料理教室などたくさん参加されて、何か生活が変わりましたか？
- 関口： 苦労しているとかは全くなくて、だからできたのかな。マルシェでは特に初対面の方は「お店どこにあるの？」とか「この商品はどうなってるの？」とかだいたいの質問される。でも普通にお店で商品を買っていてもなかなかそういうことにならないんだよね。だからそれができるから、ちゃんと説明することで、買ってもらえるんだなと実感した。当たり前のことなんだけど、大事なことだなと思いました。マルシェに来る人はグルメな人が多くて、拘りを持った人も多くて、農園の野菜を楽しむに来る人がたくさんいるみたいですよ。そめや農園さんなんかかなりお客さんがついてるよ。
- 福角： UDCKで行っている他の活動はどうやって知りますか？
- 関口： メルマガかな。
- 福角： お肉屋さんという肩書きなしに参加したいものはありますか？
- 関口： セグウェイ。これもメルマガ。
- 福角： まちづくりの講座はいかがですか？
- 関口： 講座もね、出てみたいなと思いますね。どうしても仕事の都合で参加できないんですけど興味はあります。千葉大のカレッジリンクなんか面白そう。あとネ

イチャーキッツツアーとかも。僕はね、あそこら辺の地域は、お袋の実家があって、なじみもあったし、ゴルフ場があった時からお肉を卸していたんですよ、だからずっと変化を見てきたから違和感はあまりない。

○福角： 急激にまちに変化があった地域を実際に見てどうですか？

●関口： なんかまだ完成されていない感じがするね。まだ半分位かな。だからまだちょっと住み辛そうな感じはするね。

○福角： ずっと柏に住まわれているということですが、柏は人口流入も多い地域でふるさととか地元意識ができていく地域かなと感じているのですが、マルシェのような地元の資源やお店と新しい住人が繋がるイベントそのものについてはどうですか？

●関口： 僕はそれがあるから、まちが成長するんだと思う。先月ね、市が主催した運河から柏たなか駅までウォークランをやったんだよね、それで柏たなかの駅付近で食べ物を用意するというので、まだまだ田中は難しいね。あれは市が力を入れてやってみたい。市と東武線とTXと。その時TXは駅を開放してトイレの利用ができるようにしたりしたんだよね。あれでだいぶ知ってもらえたんじゃないかな。

○福角： 柏たなか駅付近はまだマンションもできていないので、駅の利用者も少ないみたいですね。

●関口： 市は頑張っているみたいだね。春にもマラソンかなにか企画してるみたいだし。

あと柏駅付近は一店一品といって商工会が企画したイベントがあるんだけど、地元の商店街から商品を出して、B級グルメであったり、手作りの自慢の一品を出すみたい。成果はなかなか難しいね。柏市の観光課と観光協会が頑張っているんだけど。柏の葉も去年県民プラザで千葉県のみこしを全部集めてやったんだけど、その時うちがミルフィーユバーガーを出した。そこは良かったね。千葉県って色んな太鼓の団体があるんだよね。見ててすごいんだわ。それを目当てに結構色んなところから来ましたね。江戸川台から無料のシャトルバスも出して。マルシェに来ているフリマの方も呼んでね。あれは盛り上がったね。UDCKは地元の住民向けに色んなイベントができると思うんだよね。柏の葉ドッグも年に4パターン出そうと思っていて、出すときには必ずイベントと絡めようと思っている。イベントのテーマに合わせて柏の葉ドッグをつくる。

10月はビールにフューチャーしてね。そうやってしたもの、次のマルシェで売る。面白いでしょ？

ただ僕らが作って売るだけじゃなくて、地元の良いところとか、個性のあるところをホットドッグというフォーマットに押し込んでやれば何か柏の良いところとか伝わるかなって。次回はかぶ！柏はかぶが日本一だから。それと巧くからめて。

○福角： 予算はどこから出ているのですか？

●関口： 基本的にはマルシェの売り上げ。住人の二人にも僕の売り場で手伝ってもらってるんだけど、二人にも売り上げから材料費引いて、残ったものを2で割って、お渡ししている。微々たるものだけど。でもじゃないと続かないと思うし、申し訳ない気持ちもある。

○福角： そうすると関口さんはボランティアになりますよね。

●関口： もちろん。でも僕は設けようという気持ちは毛頭ないから。イベントを盛り上げよう！という気持ちでやっているから。

○福角： そのモチベーションはどこからくるのですか？

●関口： 住人の方と何人も仲良くなって、僕にできることとお肉ぐらいしかないから、そうした時に隣にパン屋さんもいて、パン屋さんも仲良いから、やろうよって言って。パン屋さん結構モチベーション上がってるんだわ。青空ベーカリーさんも、マルシェを機にお店に来てくれる人が増えたみたいで、そういう楽しさを知っている人だから。そういうところがモチベーションになっているかな。

あんまり悪い人がいなんだよね、そういう安心感があった。柏駅付近じゃできないよ。

○福角： もっと利益を求める人が多いということですか？

●関口： そうですね。先月もあったんだけど、ゆるベルトという企画があったんだけど、あれはチケットを買わせて、チケットで商品を食べてもらってという企画でその時は盛り上がるんだけど、年に一回のイベントだから、みなさん苦勞されているみたい、根付き難い。安いから食べよう、みたいなイベントになっちゃった。

○福角： どうしてそのような違いができるのでしょうか？

●関口： マルシェに限って言えば、毎月継続してやっていることじゃないかな。今まで継続している実績とかさ。それってとても大事だと思っていて、さらに真ん中にUDCKという拠点があって、テーマを持ってやっているから、僕らもお店として出し易い。決して安売りしているから来て下さいというものじゃないじゃないですか、ゆるベルトはそういうところがある。その違いだね。

○ 福角：UDCKは公共施設だと思いますか？

● 関口： 思わないね。三井のものかなと思っているぐらい。東大とかもあるし、学園都市もそうだけど、考えられているまちだからああいうものがあるのは当然だし、それは市とかは関係ないかなって思う。

○ 福角： マンションが完成すると、三井の関わり方も変わってくると思うのですが、そういった時に地元の人に支えられないといけないのかなと思います。

● 関口： 僕もそう思います。

○ 福角： この数年間は発信していくために色々イベントなどができたと思うのですが、今後はどうしていくのが良いとお考えですか？

● 関口： 住んでいる人の意見を聞いて、こういうのがあったら良いとか、こういうのがあったら安心よね、とかそういうことを形にしていくのが一番良いとおもう。長く続くものはお客さんに愛され続けられないといけないから、あそこに住む人を幸せにできるものじゃないと行けないと思うよ。住んでいる人は本当に色んなことを考えていると思うよ。特に柏の葉なんかは。柏駅付近は色んなお店がありすぎるけど、あの地域はまだ専門店も少ないし、色んなものを必要としているんじゃないかな。

No	36 (一人)
日時	2010年12月13日15時~16時
場所	柏駅近くのカフェ
対象	市民 ● コフレダムール 佐々木愛さん
質問者	○著者

○福角：趣旨説明

お店のことも含めて、少し自己紹介して頂いてもよろしいですか？

- 佐々木： お店は丁度一年前から始めて、最初は知り合いのお店からバースデーケーキとかの注文を頂いてつくっていたんですが、段々その数が増えてきたのと、あとは自宅で作るとするのは保健所を通さないでやっていて、でも後々はお店を持ちたいということで、保健所を通せる部屋を探して、丁度1年間えに開業して、店舗は構えないけども、作業場兼引き渡し場ということでスタートした。やっていくうちに焼き菓子をやりたくて、ネット販売も考えていたんですけど、やはり広めるのってすごく大変じゃないですか、柏の神社でやっている九の市というイベントがあって、その時にかしわでさんに出している農家が出店してり、近くの印刷会社だったり、食べ物じゃなくてもものづくりをしている人が集まって開いている市なんですけど、そこに店出するようになったのが今年の1月なんですけど、そういうことをやっているということを私の知り合いが知って、その人の紹介でマルシェを教えてもらった。

私は柏近辺でやりたいと思っていて、実家は流山なんですけど、高校が柏だったというのもあって、結構柏が好きで、やるなら柏でという気持ちがあったんです。都内の鬼子母神とかの方でもてづくり市とかすごく多く行われているんですけど、ああいうところよりは地元で根付いてやっていきたいと思って、柏の葉も近いので是非やりたいと思いました。お客さんと会話しながら手渡しする魅力を感じているので、ネット販売よりもイベントで売りたいと思って参加している。そこでNPOの斉藤さんとか小溝さんとか宮奈さんと関わりを持つ様になって、UDCKを使って夜集まってミーティングをしたり、クラブハウスで季節のお菓子づくりを教えさせてもらったりしている。その繋がりでも、一番街のこもれび喫茶の方からご注文を頂いたりとか。私は商売目線のところがあるけれども、すごく繋がりができて、すごく懐かしい。私が子どものときに子ども会があって、同い年の子が活動したりして、季節のイベントがあって、というのがあったけど、歳をとると生活がバラバラじゃないですか、だか

ら近所の住民とかの関わりもなかったし、繋がるということも同じ世代・同じクラスの子と仲良くなるのが多かったんだけど、本当にイベントに参加したことによって、色んな職業の人や色んな世代の人と関わる事ができるようになったのは良いことだなと思います。

- 福角： 柏の市にも参加されているということですが、マルシェと違うなと思うところはどんなところですか？

- 佐々木： 九の市の方は、飲食が私と、中華料理屋さんやパン屋さんやシフォンケーキ屋さんぐらいで、あとはガラス細工だったり、陶器だったり革製品だったり、ちょっとゆったりしてて素朴な感じなんですけど、マルシェは参加されるお店も多いし、フリマも一緒ということで、すごく人が多いのと、世代が若いかなと思います。

あとは海外のマルシェを意識されていて、あの地域の若い世代にも興味を持ってもらえるようなトータルコーディネートがされているなと思いますね。UDCKのデザインに関しても、他の公共施設、コミュニティ施設って想像がつくデザインだけれども、ちょっと洗練されてて、何かお店かな？とかがって興味をそえられる外観かなって思いました。

- 福角： はじめに、お友達とか知り合いの方から紹介してもらったということですが、参加するうちにミーティングや企画にも参加されて、マルシェでやりたいこととか目的も変わってきたかな？と思うのですが、いかがですか？

- 佐々木： 最初はパッケージされた焼き菓子だけを用意して行ったのですが、機会を重ねる毎に自分も経験値が上がってきたこともあって、今はキッシュをサラダとセットにしたものとか。まだ柏の葉ではやっていないのですが、煮込み料理をやったりしてて、今日本は衛生面で厳しいところが多くて、外でグラムで販売することができないのですが、それに近い形で幅広くあたかもそこにお店があるみたいにできたら良いなと思うのと、飲食スペースというか、UDCK内を使わせてもらって、お店のようにパッケージされていないものを選んでもらって、こういったテーブルで食べてもらうとか、そういうことができたらずごく楽しいなと思って。やはり外だと持って帰るだけになってしまうじゃないですか、やっぱりそういう空間ができたらなっていうのと、この間、宮奈さんと伊藤さんと斉藤さんと砂川さんとマンションに住んでいるご夫婦7人位で打ち合わせをしていたことがありますが、夜のマルシェをやりたいねって。UDCK内で、昼のマルシェとは雰囲気を変えて、ちょっとしたデリの提供だったりできたら楽しいねって。やはりオシャレな外観だけあって、興味はあるけど入り辛いとか、あとは

日中は仕事で出ているから夜なら参加できる方とかそういう時間帯で使いたいねっていう話はして。

○福角： そのミーティングに参加する経緯を教えてください。

●佐々木： 宮奈さんから連絡が来て、柏のマルシェのグッズをつくりたいねっていう話になって、でもそういうのってどこでもやっているしな、ってなって、エコバックとか。他にないかなーって考えていたんですけど、それでミーティングが行われたのかな。

○福角： 出店者は佐々木さんだけだったんですか？

●佐々木： そうですね。マルシェとあとは地域を活性化させる一つのアイテムとして、夜マルシェで販売ができれば楽しいよねって。後々商品ができて。自治体のイベントと違って、まちの人の若い人の興味を持ってもらえるような仕掛けを考えているなとすごく感じました。

○福角： マルシェに参加される前まで、まちづくりに対してどのように考えていらっしゃいましたか？

●佐々木： まちづくりをあまり意識してなかったと思う。学生の頃はもう自分のことではいっぱいじゃないですか、それで仕事し始めても、ケーキ屋で働いていたのですが、朝早くて夜遅いので、帰って寝るだけだった。だから自分の住んでいるまちで年に一回くらい集会所で何かやっているのは知っていたけど、時間が合わないし、小さい子なんかは小学校で同じとかで輪がありますけど、私の歳だとそういうこともないし、何が行われているのかもあまりわからなかった。それで独立して柏でやりはじめて、柏の葉とはちょっと違うんですけど、柏も飲食店同士の繋がりも濃くて、例えばここのお店で私のケーキを使ってくれていて、他のお店でも使いたいと言ってきて、そしたらここのお店のスタッフが仲が良くて、とかの繋がりや、マルシェや九の市で知り合う人とはまた全然違う繋がりなんですけど、そこで久しぶりに人との繋がりに触れたというか、コミュニケーションの大事さを改めて感じだ。仕事詰めだとそういう余裕もなかったり、初対面の人とコミュニケーションをとるのはすごくエネルギーのいることだったりするじゃないですか、なので徐々にそういう環境に入ったことによって、思い出されることがあった。もともと学生のときから接客業をやっていたので、人と接することは好きなのですが、仕事からみになると、なんか友達とはちょっとちがうじゃないですか、でもやっぱり人と繋がることに代わりはなく、ましてやすごく年齢層が広いし、お菓子をつくっているということもあるのか、年配の方も、男女も関係なく声をかけてくださ

くありがたいなって。まちづくりとか大それたことは言えないけれど、マルシェのコミュニティはすごく大切で、それがまちづくりに繋がれば良いと思います。

○福角： 柏でやりたいと思った理由は何ですか？

●佐々木： 高校は柏で、大学は東京だったのですが、住まいはずっと流山だったんですよ、だからほとんど高校を卒業してからは柏には来なかった。仕事の日でも休みの日でも都内に出て。でも昔よりも柏にも飲食店が増えて、そこで友達と会ったり、仕事でも繋がったりしていくうちに柏も良いまちだなと思う様になりました。あとちょっと離れるとまだ田舎が残っていてすごく新鮮な野菜が取れることも、この歳になって気づいた魅力ですね。私の高校って16号をずっと行ったところであって、周りは畑で駅から20分くらい歩いてたんです。つおれもすごく愛おしくおもえる。柏って第二の渋谷って言われてたときもあつたりしたけど、渋谷って駅から何駅歩いても都会じゃないですか、柏はそんなに商業区域はなくて、少し歩けば田舎だし、一駅ですごく雰囲気違うんですよ。柏の葉の方って、柏駅付近を都内だと考えると、成城とか世田谷のイメージ。TXで流山おおたかの森と柏の葉キャンパスがあって、流山からちょっと来たところに柏駅があって、この3駅って今とても盛り上がっている場所だと思うのですが、それぞれ違うよさがあるというか。柏の人も柏の葉とかおおたかも見てほしいし、その逆もそうだし、そう思えるまちだなと思う。

○福角： UDCKについてお話を伺いたいのですが、どんなイメージがありますか？

●佐々木： 中に入って市民も使えるんだ、とかきれいな建物だなと思って、近くに住んでないからなのかもしれないけど、どうやって使えるかがまだわからない。ミーティングの時にウェルカムボックスとかがあったら良いなっていう話になりました。引っ越してきたときに、あの場所に行く機会があったら、必然的にUDCKのことを知ることができるし、公民館みたいになったら良いなって。素敵なオフィスもあるし、もったいないな一

どうして UDCKは東側に移動したのですか？

○福角： 説明。

●佐々木： この間、木漏れ日サークルにケーキを持って行ったときに、1番街の中に入ったのですが、良かったです。私も昔1から6番街まであるマンションに住んでいたのですが、真ん中に集会所があったのですが、そういうものがベースになってつくられているんだなと思いまし

た。住民が多い方がつながる確立も高いし、ああいう形は良いなと思いましたね。

UDCKは今の形は期間が決まっているんですね。なくなるのはもったいないですね。

○福角： マルシェに参加されるようになって、UDCKで行っている他の活動に興味を持ちましたか？

●佐々木： 先日UDCKでまちのクラブ活動の発表会をやっていたのを見て、こういう使われ方もしてるんだ、と知った。

10月かな、山形の地産地消をやっているシェフの講習会があったと思うのですが、その前にも7月頃に料理教室やワインセミナーをやっているのを聞いて、活用されているんだな、と思いました。あとはスクリーンもあるし、プレゼン会にも使われているんだな、と思いました。

○福角： 今までに参加したくなかったものはありますか？

●佐々木： シェフが来て講習をしたときに、農家さんも来ていて、農家さんが今つくっている野菜をPRすることもあって、その中で船橋の方が梨が取れるのが有名だから、梨で地域を活性化させたいみたいなことを言っていた。柏でもゆるベルトってイベントがあるのですが、そこでプライアンというお店の方がいて、まちづくりのディベートをしたんです。柏の葉だとお店も少ないし難しいのかなと思いますが、商店の人がまちづくりについて話し合えたら良いなとまちづくりって、住民も大事だけど、住民だけだと限界があるから、商店のモチベーションも上げると、もっとまちづくりが盛り上がると思います。

○福角： 今マルシェで柏の葉ドッグという商品を開発されているのですが、そういった活動がたくさんあると良いかなと思います。

●佐々木： 私がやっているミーティングも、住民の方が入ってやっています。デザイン系の人だけけど。

○福角： ああいう場所が柏の駅前にもあったら良いなとかって思いますか？

●佐々木： 柏にも、インフォメーションセンターがあって、その存在を最近知ったんですが、近くの飲食店のチラシが陳列されていたり、ゆるベルトのときも協賛して、チケットを提供してみたいなのですが、それまでは必要性を感じていなかったということがあることすら知らなかったのですが、イベントの時にはすこく力を貸してくれて、うちのお客さんでもインフォメーションセンターで見てマップを貰ってきたという人もいて。

あとゆるベルトは20代後半から40代くらいの人を対象にされていて、そういった人がゆるベルトというイベントをきっかけにお店に足を運んでくれるきっかけだと思うんですよ。インフォメーションセンター側も、その場所を知ってもらえきっかけになったと思うし、そういう意味で柏駅にもあるんですね。一つのコミュニティがここでもできているんだなと思います。

○福角： ゆるベルトは一年に一回ということですが、マルシェと比較すると、マルシェは月一回なので、その頻度の違いによって、何かかわりますか？

●佐々木： ゆるベルトって、700円の券が5枚つづりなのですが、単価の違いというか、お店にとってはリスクが大きいというか。700円分で700円よりも価値のあるものを出さなきゃいけないので、頻繁にあるときつい。でもゆるベルトによって、今までに行った事になかったお店に行き、新規のお客さんがつくこともあるみたいなので、今の頻度でやると丁度良いと思う。九の市なんかはお店がないから、月に1回出店することを楽しみにしている人もいるし、かしわでさんが近くに売りにきてくれるのを楽しみにしていることもあるし、買わなくても見るだけでも楽しいし、でもそれが毎週だと足を運ぶ人も減るだろうし、それが月に1回あることが丁度良いのかなと思います。

マルシェもそうですね、毎回場所が変わることについてはとてもやりづらい。前々回はピノキオプロジェクトと一緒にやったからたくさん人がいたけど、その次は、フリマとマルシェが駅の反対側であまりお客さんが来なかったし、かといって呼び込みをしている様子もなかったの、ちょっと出店者の人が「ちょっと、、、」という雰囲気もあった。今回は前回ほどではなかったのですが、UDCK前という狭い空間だったので、ちょっと寂しいなど。お野菜ってすこく人が集まるので、それと切り離されてしまうとつらい。あとベビーカーで来る人も多いので、デッキの上でやるのもちょっと微妙。

○福角： 今後も参加したいと思いますか？

●佐々木： はい。マルシェ以外も夜だったり、何かイベントを宮奈さんとかと組めたらなというのが今の希望です。しかもUDCKがなくなってしまう（移動する）ことが決まっているのなら、あるうちにやりたいと思っています。

○福角： 独立を機会に地域に対して関わりが強くなったということですが、マルシェだったからこそできたことってありますか？

●佐々木： 斉藤さんと知り合って、まちの店長シリーズで先生として使ってもらったり、それをきっかけに1番街

の方からご注文を貰ったりとか、そういうところで輪が広がったなと感じています。あとはワインショップの木村さんとの繋がりもできて、今は一緒に出店させてもらっているのですが、私はフランス菓子でキッシュなんかも作っているのですが、ワインともとても相性が良いので、一緒にコラボして出しています。ただやはりその場で食べてもらえるようなものだともっと楽しいだろうなって思います。

○ 福角： 他の出店者の方との繋がりもありますか？

● 佐々木： ありますよ。一緒に何かをするわけではないですが、お互い情報交換だったり、出店に関する情報を伝えたり、市で一緒の方も声を掛け合ったりとか。そういう話をしますね。そういう情報交換はとても刺激になります。作り手のモチベーションを聞いて、自分のモチベーションも上げるというか。メンタル面で刺激になります。

No	37 (2人)
日時	2010年12月13日17時~18時
場所	UDCK
対象	市民 ●カモミール 笠井和代さん、石井拓太さん (以下カモ)
質問者	○著者

○福角：趣旨説明

●カモ：私どもは、花工房カモミールという障害のあるお子さんの活動の場・居場所づくりとして、2005年の4月から市民活動として初めまして、2006年の4月から小規模福祉作業所として、市から活動資金を頂きながら今年で5年目です。正蓮寺の近くにあるのですが、農場を地主さんに300坪ほどお借りして、そこでハーブやブルーベリーを育てています。作業所というよりは居場所づくりです。結構オープンな感じで、地域で活動しようと、障害者の施設という枠に囚われないで活動しています。来年の4月にNPO法人化する予定です。それで5年目なのですが、UDCKさんにすごくお世話になっていて、マルシェができた時、NPO支援センターちばさんから声をかけて頂いたんですね。それが第一回目だったんですけど、それ以降毎年参加しています。

○福角：第一回目から全て参加されているのですか？

●カモ：全てではないですが、だいたい参加させて頂いています。

○福角：どういう繋がりがあったのですか？

●カモ：花工房カモミールができたときに、コミュニティサロンがあって、個人的に声をかけて頂いて、その時に支援センターの松浦さんという方がいらして、色々と情報を頂いたんですね。行事がある度に何かお願いします、と言われて、私たちもそうやって声をかけていただいているうちに地域の活動というのがものすごく広がってきたんですね。まちのクラブ活動にしてもマルシェにしてもすごく地域密着型で裾の尾が広がってきた。今本当に柏の葉キャンパス駅周辺で基盤ができてきて、我々もそれを将来的に広げて行こうと思っている。農場も、柏市の緑生化でかしまプロジェクトというのを立ち上げているのですが、そこにも参加して、オープンなハーブガーデンとして、出入り自由にしている。結構皆さん来て花なんかを見てくれますね。それをもっとネットワークを広げて、柏の葉キャンパスの近くにあるカモ

ミールという風に広がっていくと良いと思います。市民の人も一緒に活動できる。それが私たちの目標。

●カモ：障害がある方もない方も一緒に活動するというのが目標なんです。それがこのガーデン。コミュニティガーデンのように開放することが良いのかなと思っています。作業所の人間が地域に出て行こうとすると、結構人の助けが必要だし、人員も必要になってきますよね、僕らなんか見る目が足りないと外に連れていけないですから。そういう意味では移動してどこかに触れ合おうとすると大変なのですが、来てもらおうと。より日常的にしたいと。地域のコミュニティがなんか特別な行事っていうのだと、少し寂しいじゃないですか、それが当たり前になるというか。それが本来自然にあることだし、そういうことをしていきたいと考えてコミュニティガーデンをやっています。

○福角：柏の他の地域でもそういったことをされている方はいらっしゃるのですか？

●カモ：柏としては前例のないことだと思います。だからつくって行こうと思っています。

●カモ：コミュニティカフェみたいな形で、全国的にやられている方はいらっしゃるみたいだけど、僕らみたいに農場とか地域のお花というのは珍しいのではないかと思います。

○福角：農場を地主の方からお借りしているという話ですが、それはどこからお金を出しているのですか？

●カモ：それはね、地主さんが無償で貸してくれているんです。活動に賛同して下さったからだと思うんです。今私たちが農場で使っているところは、1999年ですか、鶏の放ら飼いで使っていたんですね、でも数年前に鳥インフルの問題が発生したときに、放ら飼いだっただけで野鳥とかもたくさん来ますし、それでちょっと私たちが発生させちゃったら、半径何キロのところに養鶏所があって、そこにご迷惑をかけてはいけないということで、我々も市民団体だし、これ以上は続けられないということで、鶏を引き取って頂いたんですね。その後、その畑があいていたのですが、我々の子どもたちが卒業する時で農場としてお借りできないかということでお話を聞いていたら、承諾して頂いて、そのまま使わせてもらっているんですね。

○福角：マルシェに参加していく中でマルシェのイメージに対する変化はありましたか？

●カモ：最初の第一回目のマルシェのときって、外国のマルシェそのものだったんですね、それを柏の葉キャンパスのオシャレなまちづくりでやっていくという感じだったんです。最初のマルシェは東京からもオシャレなお店

が参加して。我々もオシャレなマルシェに合う様に用意して行きました。地域に開放するというマルシェなわけで、でも他のフリマとは違うんだというのあって、良いと思うのですが、知らない人が結構多いんですね。我々は定期的に出ているので、リピーターの方や知り合いも広がってきたので、マルシェに参加して良かったなというのが実感ですね。

○福角：マルシェは地域の商店や資源と住民がつながる場だと思うのですが、それをフィールドを持って行っているという実感はありますか？

●カモ：そうですね、非常にあるんじゃないですか。柏の関口さんなんかはそれまでは知らなかったけど、柏の葉ドッグをきっかけに話したりとかしてコミュニティが広がりましたね。地域でやってきた方でも、こういうところにこないと知らなかった人も多し、僕らもここに来ていなかったら、カモミールのことを知らなままだったかなと。

●カモ：カモミールの目玉というか、お花だけでなく、ハーブをメインでやってるのですが、ハーブの認知度ってここ最近高まってきて、柏の葉ドッグでも我々のハーブを使ってもらったこともありますし、マルシェだけじゃなく、かきはなプロジェクトもやってますけど、すこしずつ、カモミールを知って頂く、きっかけになっていると思う。

●カモ：もうちょっと地域の住民（マンション以外）が知った方が良いかなと思います。柏の市民にはまだまだ。市役所の職員でも、担当じゃない方は知らない人も結構いる。

●カモ：UDCKの存在を知らない人も多いです。

●カモ：情報に触れる機会が少ないのかもしれないですね。もったいないなと、こんなに素敵な活動をしているのに。

●カモ：この間環境フォーラムとタウンミーティングをここでやりましたでしょ、参加する方は一部の方ですが、定年退職してお時間があって、文化的な方はこういうところに来ると思うのですが、ご存じない方が多いのは確かですよ。若い世代が知らないことは、将来的にみてもマイナスなことだと思う。若い人こそ知ってほしい。

●カモ：若い世代の方はハーブにしてもすぐに馴染めるけど、高齢者を含めた交流をオープンにしたものが必要だと思う。地域で運営できるブースがあっても良いと思う。そこで、色んな世代の人が垣根なく活動できる空間があると良い。高齢者は高齢者、障害者は障害者、学生は学生とかかたまるのはよくない。誰かが始めないとけないと思う。そういうところで地域のコミュニティづくりをしようというのを、ここではできると思うんですよ。

一歩踏み出して、誰かがやろうといわないと始まらないと思います。ここの活動に参加されている方はとても志が高い方も多いので、色んな方のアイデアも出るし、関わり方も多様だと思うんですよ。だから柏市で、第一号でつくっても良いじゃないですか。だから学生さんもプロジェクトに入って一緒に動くことも大事だと思います。そうすると、まちづくりを自分たちでつくっているという気持ちになるのではないかなと思うのです。

○福角：マルシェに関わる前に考えていたまちづくりと、参加後では何か変化はありましたか？

●カモ：もともと私たちは障害のある子を抱えていて、現在6人の子どもがいるけれども、4人は普通学級で育ってきていたので、こういう活動にもすんなり入れるんですよ。自然にできる。自分たちにできることをやろうという感じで。

○福角：身体と知的と両方いらっしゃいますか？

●カモ：身体は視覚障害と知的を重複してる人がいます。

○福角：柏市は身体と知的とわけているのですか？

●カモ：何年か前まではわけていたみたいですが、今は一緒です。受け入れることは可能です。

●カモ：僕はカモミールにきてから1年位ですが、マルシェに来たときの率直な意見は、生まれが伊豆の田舎なのですが、地域の祭りを考えたときに、もうちょっと地域住民を巻き込んでやった方が良いんじゃないかなって思っているんですね、マルシェに参加する前は、地域のお祭りと言えば当たり前のように地域住民が集まってきて、集会開いて話し合いをして、全部地域住民がやりますよね。一つの企業やプロジェクトがあるわけではなくて。みんながみんな話し合っ、続いて行く伝統があるというわけじゃないですか。ここは新しいまちだから、そういった伝統がないのは当たり前なのですが、伝統をつくっていかうとしてのマルシェなのかなって思った。それだったら、色んなところから来た人が地域で一つになって何か新しいことをやっていききっかけづくりにはすごく良い活動なのかな。その時に思ったのが、地域の企業とかお店とかが来ているわけじゃないですか、それは多いことは良いのですが、もうちょっと地域住民がからんできて良いかなと思います。それが老人だったり若者を繋げる役にもなるかもしれないので。今のままだと年齢の偏りは見られるのかなと。

最初はオシャレなまちづくりという感じだったから、マルシェのその型に合わない方は直しますという感じだった。例えば看板の書き方とかもイタリア語にしたりとか。

それで確かに素敵だったの、東京にあって柏にないのはそういうオシャレな感じかなと思うのでそれをやりたかったんだと思う。今は地域の方がどんどんやりはじめて、それには及ばないかもしれないけど、マルシェらしい出店の仕方は根付いてきているんだと思います。

- カモ：最近個人で出て来られる方もいて、クラフトとか。そういうのはとても良いと思います。本場のマルシェを考えても、地域の人がばーっと出てきて売り始めるみたいな、骨董市みたいな形でやっている人もいるわけじゃないですか、でもそれがみんな同じように売っているからできるわけです。その辺を考えると、そのように一般の方がやっているのは良いと思います。フリマはその辺がちょっと弱いんですよ。今わけてるでしょ、でも人を呼ぶためにはいるんだよねでもそれが本来意図していることは崩れてきたんだよね。その差別化の難しさはありますね。でも課題が見えてくるとやりがいがありますね。

○福角：まちづくりに対するイメージを教えてください

- カモ：柏駅付近の既往都市でもそういうことをやっているんですよ、色々と定着して。柏の葉は都市型住宅というイメージがあって、三井さんがどういう意図でやっているのかはわからないけど、その声も届いていないし、でも我々としては、そのマルシェやかしはなに参加して、その部分しか見えていないんですよ。結構毎週木曜にかしはなで来ていて、マルシェは月1回ということで、私たちの活動拠点として定着しているのですよ。その繋がりで農場もオープンガーデンでやっていこうという目標に向かってやっているところなんです。だから地域住民と言っても、駅から移動する通過するだけのひととマンションの人ですよ。だから市民活動って色んな活動で良いんですけど、活発な人の意見交換があるのとないのでは全然違うと思います。だからまちづくりをやることに関して、柏のプロジェクトを市民から募集しても良いと思うんですよ。この間のタウンミーティングで、学生さんが発表しましたけど、企業だけが入るのではなくて、そういう住民が運営するスペースがあっても良いんじゃないかなって思います。だからそういうのをやるには色んな方たちの力が必要だと思うんです。それが何年かかるかわからないけど、道が開けてくると思うんですよ。それで面白そうだなって感じてくれた方は関わってくれると思うんですよ。だから色んな年齢層や立場の人が混ざって活動を行うのが良いと思います。まずやってみることでしょ。ここの場所だと、いつも出入りしている人は良いけど、他の人には敷居が高いと思うんです。でもたまにマンションのお母さんとかが、ここで休憩してたりおしゃべりしているのを見ると良いなと思います。利用されてる

なって。アーバンデザインセンターってそれなに？って。私たちがさえそんなにわかっていないと思いますし。そもそもUDCKができた時にお花が全然なかったんですよ、それで私が個人的に3つくらい植えさせて貰いたんです。それが広がってこういう形でやって頂いてるんですが、まず動き出すことだと思うんですよ。

- カモ：まちづくりってそこに人が根付くからまちづくりだと思っていて、根付くためにはどうするかって言えば人が住みやすい環境をつくっていくことですよ。その住んでいる人は声を上げて学校が欲しいとか公園がほしいって言うていかないととととと動かないですよ。それを言う場所ってのは、さっき言ったコミュニティであったり、それを繋ぎ易くするためのものがまずは必要なかなって思います。それがとととと繋がっていくと、より過ごし易いコミュニティになっていくと思うんです。ここははじめから結構環境を残したりとか、自然を残したりして他のところよりは過ごしやすいのかもしれないですが、それでも都内に出て行く方も多くて、そうするとここに定着するかという疑問が残る。子どもにもまた戻ってきたいと思えるようなね。これから子どもが育って、小学生とかも増えてくると、もう少しまちとして根付いてくるのかなと思います。子どもがまだ少ないですよ。ピノキオをやっているときだけ子どもがいるっていうのは寂しいですよ。根を貼ることがひとつのまちづくりかな、そのためのコミュニティは大事かなって思います。

○福角：UDCKみたいな施設がまちにあることについて、障害者施設との関係も含めてどうお考えですか？

- カモ：はじめは敷居が高かったのね。若い学生がいつも打ち合わせしてるみたいな。誰もいないときは誰もいないけど。固定化しちゃうとだめだと思うんです。学生さんが使う！みたいな。でも、私たちも結構利用させて頂いてますが、まずここがどういう施設かということを知らないから、宣伝するんだしたら、もうちょっとわかりやすく宣伝しないと、一部のしか知らないという状況になる。県民プラザも一部のしか使っていないんじゃないかなって。日常的に出入りしている人がどのくらいいるのだろうというのが疑問。だからこもそうじゃないかなって思う。使う人は固定層。アーバンデザインセンターなんなの？って言う人が多い。
- カモ：認知度はわからないですが、こういう施設があるということはとても良いと思いますよ。他の団体さんと絡んだり、地域住民と絡んだりするときに、こういう中間の場所があると、行き易いし招集かけやすいんですよ。

実際僕らは事務所が流山にあるんですけど、いつかは柏の葉でやろうと思っていて、そういった時には色々を使わせて頂けたら良いなって思います。

- カモ：打ち合わせとか会議とか、ちょっとしたものがこうしてできるのは良いですね。会議室借りるにしても予約してお金払ってってなるし。

○福角： まだ福祉のまちづくりという観点から見たときに、アーバンデザインセンターがどのような役割を担えるかということについてはこれからだと思います。

- カモ：新しいまちなので、今のうちに進出したい理由は、地域の人に知ってもらうことを時間をかけてやっていきたいからなんです。地域に拠点をつくって、地域の住民が知ってくれているというまちができれば良いなって。

- カモ：クラスに普通学級に障害者がいるとすごく目立つじゃないですか、30人も40人も子どもがいる中で先生たちも大変なんですけど、色んなおさんの気持ちをしっかり受け止めている先生がいるクラスは、すごく雰囲気が良いんですよ。障害のある子に対してだめだーっていう感じでやっている、障害がない子もだめになっちゃう。それをすごく感じている。障害のある子がいきいきできるクラスは良いと思う。だから先生が弱いものに対してきつくあたられると、障害がない子も自分もやられている感覚になるみたいなんです。だから大人が受け止めないと。それも社会と同じだと思います。そうすると、社会も弱者に優しいまちというのは安心なんです。そういうのはまちづくりをやっていく中でも育てて行くということですよ。ほんとにこれからのまちづくりの課題だと思います。

今は自然にかしはなプロジェクトをやっているし、マルシェも何回か参加するうちに、障害者がいることが自然になってくるんですよ。一緒に溶け込んでいて、ありのままの良いわけです。それが柏の葉キャンパスでありのままの光景がどこまで広がるかということだと思います。

○福角： 自然になるにはまだ時間がかかりますね。

- カモ：まだ偏見はありますけどね、だからって閉じるのではなく、まちにどんどん出していかなければいけないと思う。

- カモ：それがスムーズにいくまちで新しいまちができれば、日本で唯一のまちになれる。

- カモ：モデルケースになると思う。それ位障害者福祉に関するモデルケースというのはほとんどないので。小さいながらも僕らはそれができるんじゃないかなって思う。それが特別なことじゃなくて自然なことなんです。

- カモ：だから僕らはどういう風にまちづくりに関わっていききたいかという、そういった観点で溶け込むように関わっていききたい。なので願わくば拠点としても福祉関係の何かをやりたいとは思いますが、まずは障害者がまちにでて共に生活することが当たり前になってほしいですね。

○福角： 地域に知ってもらい、溶け込むということよりも、地域体験で留まってしまいますよね。

- カモ：僕らも正直それでいっぱいいっぱいなんです。でも、それを周りの人が知ってくれてたらとても楽なんです。ボランティアの方が良い例です。地域住民の方も一緒なんです。それが本当に地域に出て行く事だと思うんです。そういうのが根付いてくると住み易いまちになってくると思います。

障害者やその家族が気兼ねすることなく、堂々とありのまま生きていいんだって思えることが本当のまちづくりなんじゃないかなって思う。

高齢者の方も、施設でまちからどんどん離れていくんじゃなくて、人生経験を活かして、もっとまちに出てきてほしいと思いますね。

No	38 (5人)
日時	2010年12月9日17時~18時半
場所	UDCK
対象	市民 ● 柏の葉ドッグメンバー (以下ドッグ) ・セキグチ肉店：関口さん ・青空ベーカリー：藤原さん ・手芸&デザイン担当：四ツ本さん ・柏の葉住人：和田さん、飯島さん ・NPO支援センターちば：斉藤さん、小溝さん
質問者	○蛭川さん (ブラップジャパン)

○蛭川： 毎月一回柏の葉スタイルニュースというものをつくっておりまして、地域で行われている団体の紹介とかプロジェクトを取り上げていて、今2500部発行しています。ららぽーととか、柏の葉公園、県民プラザを拠点に配布、あとは報道機関に配布しています。1月号でマルシェ・コロールについて取り上げようと思っていて、ひとつの成果として「柏の葉ドッグ」の誕生があげられると思います。どういう経緯で誕生したのか、どんな思いで誕生したのかをお聞かせ頂きたいと思います。まずは自己紹介からお願いします。

- 関口：関口です。マルシェではミルフィーユバーガーを売っていて、あとはマチの先生シリーズにも参加しています。
- 藤原：青空ベーカリーの藤原です。十余二の柏の葉ドッグランという犬を遊ばせるところがあるのですが、そこで土日だけパン屋をやっています。今年の3月からマルシェに参加しています。
- 四ツ本：四ツ本です。手芸が好きで、手芸を通じて地域人とコミュニケーションをとりたいという気持ちが強く、斉藤さんと知り合って、マルシェで手作り手芸品を売ったり、クラブハウスで手芸サロンをやっています。あとは編み物や手芸が苦手な人にも好きになってもらいたいということでやっています。
- 和田：1番街の住人の和田です。マチの先生シリーズの関口さんの回に息子と行って、息子も私も関口さんにはまってしまい、ファンになったのですが、そうするうちに「何かやってみる？」ということで、お手伝いさせて頂く事になりました。
- 飯島：わたしもパークシティに住んでいます。飯島です。きっかけは関口さんのお料理教室に行ったことなのですが、その前から仕事の関係で関口さんのことは知っ

ていたのですが、ただお話ししたことがなかった。男性用の回でローストビーフのにどうしても参加したくて、助手として立候補した。あとわたしもマチの先生シリーズで、お料理教室をやったことがあります。

- 蛭川： そもそも柏の葉ドッグ誕生の経緯をお願いします。
- 関口：きっかけはマルシェ。そこに出店しているお店で何かできないか、地元住民の方で料理が好きな方も見つけたので、何か一緒にできないかなということで、ホットドッグというフォーマットが良いのではないかとということで始めました。
- 蛭川： 最初の呼びかけは関口さんですか？
- 関口：そうですね。 ぱっと思いついたのがホットドッグ。
- 蛭川： 一番始めにつくられたのはいつですか？
- 関口：今年の夏休みですね。 8月19日。子ども向けにソーセージ教室をやって、その時に誕生した。
- 四ツ本：クラブハウスの片方でそのソーセージづくりをやっていて、反対側で紙芝居やったり、わたしはお手玉お姉さんをやっていたのですが、そういうお祭りの最後のお昼の時間にみんなで柏の葉ドッグを食べた。
- 蛭川： 始めて販売したのはいつですか？
- ドッグ：その前に10月のピノキオのイベントがありまして、フードコーディネーターの方も入って。その時に松葉第一小学校にアンケートをとって、「理想のホットドッグは？」みたいな。それをその時に形にしたんですよ。その翌月11月に販売した。9月に売ろうという話も出たのですが、ラッピング用のロゴを四ツ本さんにつくってもらおうとか、パネルとかは、ピノキオをやるからの方が良いんじゃないか、バタバタと進めるよりも、ピノキオを終えてからきちんと進めてから売ろうということで9月は見合わせたんですね。
- 関口：また夏場はすぐに痛んでしまうから、涼しくなってからやろうということになった。
- 斉藤：あと9月はたなかみこし祭りの時だったので、どの位売れるかも予測だつかなかったし。
- 蛭川： 11月に販売スタートですね。
- 小溝：10月は「柏の葉ドッグピノキオバージョン」ってことで3種類つくったんですよ。
- 斉藤：それで先月販売したのは、ピアフェスタの時に、開発したものなんですよ。
- 関口：後の話にも絡んでくるのですが、何かイベントを絡めながら新しい柏の葉ドッグをデビューさせようと

思っていた。11月には柏の葉の方でアサヒビールにお務めの方がいて、その方がここでセミナーをやっていて、そこでもソーセージ教室をやったりして、そこに来たお客さんが交流会でバーベキューをやって、そこでつくったものを11月に販売したんです。秋バージョンです。それでアサヒビールの方のお話を伺いながら、ソースに黒ビールを使ったんだよね。その時のソースを担当してくれたのが和田さん。夏祭りのときのソースを担当してくれたのが飯島さん。ソースの名前とかもついてるんですが。

○蛭川： 柏の葉ドッグの定義って何かありますか？まだ今は試行錯誤を繰り返しているという感じですか？

●関口： パンの形は柏の葉の形してる、柏の葉っぱパンということで。

○蛭川： これって何かパンに練り込んでいるのですか？

●藤原： ほうれん草ですね。強引に緑にして。

○蛭川： そうすると、お肉のソーセージが関口さんで、パンが青空ベーカリーさんで、ソースが住民のお二人が担当されているんですね。

●関口： あとお野菜は地産地消で。そめや農園さん。ただそめや農園さんは小さな農園だから取れる野菜も限られているそうで、ホットドッグまでまわらないということで、東急で買ったりしました。

●斉藤： あと8月の時はカモミールさんがハーブを出してくれました。ソーセージに練り込んであります。

○蛭川： 販売もみなさん協力してやられているのですか？

●関口： そうですね。売り場を今は並べて。柏の葉ドッグは、私のブースでやっています。

○蛭川： 販売状況はいかがですか？

●関口： 今まで2回販売（11月12月）しまして、毎回限定30食ですが、完売してます。

○蛭川： 住民のお二人は販売にも関わっていらっしゃるのですか？

●ドッグ： はい。販売だけではなく、調理から。

●藤原： ものすごく上手に販売してくれます。

●和田： ソーセージやソースは仕込んできているのですが、当日できたてを食べて頂こうということで、パンはトースターであたためて、ソーセージはボイルして出しているんです。

○蛭川： 四ツ本さんはどういった関わり方をされていますか？

●四ツ本： 私はポスターをつくってって頼まれて、柏の葉ドッグのロゴ的なものと絵を。

●関口： ゆくゆくはホットドッグの包装紙にロゴを入れたいと思っているんですよ。

○蛭川： そのポスターは店舗のところに貼っているんですよね？

●関口： そうです。

○蛭川： 制作、宣伝、販売全部を皆さんでされているのですね？

●ドッグ： そうですね。協力しあって。

○蛭川： 反応はいかがですか？

●飯島： 意外と知名度が高かったです。「ああ柏の葉ドッグね！」みたいな感じで買いに来る人も多い。

●四ツ本： 友達も来て早々、「柏の葉ドッグ買って来る！」って。あと私このソーセージが長いのがすごい幸せです。

●斉藤： それすごい狙っていて、関口さんと藤原さんと打ち合わせしているときに、「パンから飛び出させたいな」って言っていて、それで藤原さんからも「うちのパンは結構小さく見えても食べごたえがありますよ」って聞いて、打ち合わせをしてあの長さになった。

●和田： 定義ですが、柏の葉の葉っぱ型であることと、手作りソーセージであることなんですね。

○蛭川： ソーセージって、これ用に工夫されていることはありますか？

●関口： ソースとのバランスですね。あと制作するときに、ターゲットを決めているんですよ。ビールの時は大人向けとか。お父さん向けとか。マルシェのお客さんは結構様々な世代の方が来ますからね。11月12月は同じもの。中はチョリソーだった。

○蛭川： 次のマルシェは何か構想がありますか？

●関口： 次はね、かぶを使ったもの。柏ってかぶが生産ナンバー1ですからね。そういう風に地元の食材をアピールできる。

●飯島： あとは季節感を持たせて。

○蛭川： 試作をするときも皆さん集まられるのですか？

●ドッグ： 今まではやっていました。イベント毎にいつも開発していたので、その時にも。特にソースは毎回やっている。前はビール会社の方も交えてやっていた。

- 蛭川： 今後の展開としては、基本的にマルシェでは毎回出そうという感じですか？
- ドッグ： そうですね。他でも販売してくれて言われたのですが、人の面もあるし、経費もかかるので、お断りしたのですが。
- 蛭川： マルシェの名物ということですね。
- 斉藤： 繋げることが目的なんだよね。生産者を繋げたり、まちの人と繋げたりということが目的なので。
- 関口： 色々やりたいことはあるんですよ。年に4回販売するからスタンプリーストにしようとか。
- 斉藤： かぶの葉を練り込もうとか。
- 藤原： ピノキオの時はお菓子パン用に真っ白にしたんですけど、基本的には緑で。ほうれん草はきれいにできるし、繊維も残らないんですよ。
- 蛭川： マルシェがみなさんにとってどんな存在になっているのか、マルシェをやっている良かったことを教えてください。
- 関口： たくさん売ろうとして参加しているわけではなく、私は料理教室をやっている知り合いになった方と、マルシェでしか会えなかつたりするので、そういうことが嬉しいかなと。
あとこうしてみなさんと協力してやったものが形になって嬉しい。
- 藤原： 私はドッグランでパンを売り始めてから4年位は経つのですが、今まではそのドッグランに来るお客さんがほぼ100%だったのですが、3ドッグランは犬を遊ばせたついでに買って行かれるという形だったのですが、ここだと、色々商品がある中で見て選んで買ってくれるということと、あとはドッグランにいらしゃったり、マルシェで毎月楽しみに買ってくれる人とかもいてとてもありがたく思っています。関口さんの隣でやっているの、これが柏の葉ドッグのパン屋さんですよって流してもらっている。あとやっぱり普段は全部一人でやっているの、こういう場でみんな意見交換しながら作ることも新鮮で、刺激になります。
- 四ツ本： 私も自分の作品を売りたいというわけではなく、自分の作品を知ってもらって、それをきっかけにコミュニケーションできるというか交流したいとか、自分がこういう作品をつくっていることが地元の人に認知してもらいたいのが目的なんです。だから値段も他で出すよりもぐっと押さえて出しているし、私のつくるものって、自分で言うのも何ですがかわいいんですよ。それを数百円で買えるもの、小銭で帰るもの、かわいいもの、それがお家に、生活に入り込むわけですよ。それがSすごく良くなって。あとは、野菜とかでもそうだけど、作り手の

顔が見えた方が安心するというか、どんな人が作っているのかが見えた方が興味がわくんだろうなと思いました。なのでマルシェが大好きです。

- 和田： 私は消費者側の意見としてマルシェは作り手の顔が見えるという安心感と、この上なく作り手の方たちが熱い。商品をいかにして生んでいるか、そしてそれをどうやって使ってもらいたい、食べてもらいたいということを実際にコミュニケーションしながら、キャッチボールしながらできることが本当に良いと思います。うちは小学生の息子がいるので、お野菜一つにしても、こっちのきゅうりは白いとげがあってゴツゴツして、でも食べるとすごく味が濃くてっていうそれをお店の人が「食べてごらん！」とか言ってガリガリかじっている息子の姿を見ると、すごい食育をしてもらってるなと感じます。あとはお店を選んで買えるっていう色々なコミュニケーションの場になっているなという感じがして、そこに自分たちも関わらせてもらっているということが良いとこどりしている気がするのですが、嬉しいです。
- 蛭川： 消費側だけではなく、作り手側に回るの楽しいですか？
- 和田： はい。そうですね。お客さんの反応が手に取る様にしてわかるし、買うときもボツとして買うのではなく、「この間美味しかったよ」とか「今月はどんなの？」とか「来月どんなのつくるんですか？」とかって言われると、心がワクワクしてくる。
- 飯島： 私も月に一度のマルシェがものすごく楽しみで、本当に発信側に参加させて頂いて、もともとマルシェ自体楽しかったのですが、今度は自分がしかも自分一人ではできなかったことをここに混ぜて頂いて、月に一度だけお店屋さんごっこさせてもらっているような気分ですごく楽しいです。本当にお客さんと対話があって、おすすめしたりできるので、コミュニケーションが楽しい。あとは次のことを考えるのがすごく楽しみで、家で考えるのもとても楽しい。お料理はもともと好きで、自分の家だけでやっているのも良いのですが、それを発表する場があるというか、共有する場があるというのはすごく楽しくて、今本当に楽しくさせて頂いております。
- 斉藤： まちのクラブによく来てくれていた方が、今度マルシェに来て買う方ではなく売る方に参加して、さらにそこから店同士の中にさらにまちの人もいるっていう、すごいトルネードだなんて。良い巻き込みと言うか。
- 関口： 和田さんも飯島さんなど住人の方の意見もあったから、これで行ける！ってなった。あとは僕らが売ろうとすると、「このソーセージは、、、」とかってなっちゃうけど、二人はお客様にすごくちゃんと説明されて

いて、僕らが発見することもある。こういうアピールの仕方があるのかって。

- 齊藤：消費者側の意見がダイレクトに入っていますよね。

この良い雰囲気をどんどん繋げていければと思います。

- 関口：先月は1時間で完売しましたね。あとはこれからもそのパッケージのデザインとか色々展開の仕方はたくさんあるので。

謝辞

本論文の執筆にあたり、下記の方々には大変お世話になりました。

前田英寿様（元UDCK副センター長 現芝浦工業大学教授）
丹羽由佳里様（元UDCKディレクター 早稲田大学助手）
田口博之様（UDCKディレクター）
三牧浩也様（UDCK副センター長）
上野武様（千葉大学教授）
信時正人様（元東京大学大学院新領域創成科学研究科特任教授 現横浜市地球温暖化対策本部長）
中田聖司様（三井不動産株式会社）
日高仁様（東京大学大学院新領域創成科学研究科 特任研究員）
石黒博様、岩崎克康様、斉藤智之様（柏市副市長、柏市都市計画部都市計画課、柏市総務部行政課）
後藤敏様、加藤様、関口様、（富勢ふるさと協議会、布施近隣センター）
藤田武志様、丸田達夫様、根本様、（松葉ふるさと協議会、松葉近隣センター）
小野健一郎様、布施博様、橋爪良洋様、（柏市市民活動推進課）
石井慶範様（首都圏新都市鉄道）
砂川亜里沙様（UDCKディレクター）
宮奈由貴子様（UDCKディレクター NPO支援センターちば）
野田勝二様（千葉大学）
三輪正幸様（千葉大学）
小溝敏央様、斉藤香代子様（NPO支援センターちば）
中澤徹様（スパイラル株式会社）

上記の方々には、大変お忙しい中、資料提供やヒアリング調査のご協力を頂きました。特に活動主体の方々には何度もお話を伺い、ご丁寧に対応して頂きました。感謝致します。

【住民・市民の方々】

間島克哉様、水上征隆様、校篠邦夫様、豊田美奈子様、戸田紘子様、綱野敬司様、嶋浜祥之様、和田富美子様、浜野真紀江様、大野良恵様、野村志津江様、河合都志子様、山内文子様、池部比佐代様、飯島早苗様、橋本杏里様、山村麻衣子様、飯島様、関口久也様、佐々木愛様、笠井和代様、石井拡太様、よつもとみちよ様、藤原美奈子様

上記の方々には長時間に渡るヒアリング調査にご協力頂きました。ありがとうございました。

その他アンケート調査にご協力頂きました162人の方々にも深く感謝致します。

本研究の軸となった「住民・市民」の視点で捉えたまちづくりに対しての様々な裏付けは上記の方々のご協力無しにはできませんでした。各々の熱心なまちづくりへの考えと行動が、執筆に当たっての原動力となり、まちづくりの多様性を実感することができました。本当にありがとうございました。

まず、本論文の執筆において、大変お世話になった先生方にお礼申し上げます。

指導教員を勤めて頂きました清水先生には、感謝という言葉では表せない程、温かく熱心に指導して頂きました。最初の面談では3時間も4時間も時間を割いて頂き、「まちづくり」について多くのことを教えて頂きました。「地域」や「住民」の捉え方など挙げればきりがありませんが、先生との個人ゼミではまちづくりに必要な様々な概念についてお話して頂き、聞くばかりで情けないですが、とても楽しかったです。本当にありがとうございました。

副指導教員であり、空間計画研究室を清水先生とともに支えて下さった清家先生。多忙なスケジュールの合間を見て、清家研と空間研の指導をして頂いた姿が忘れられません。個人ゼミの機会は少なかったですが、研究室会議ではふわふわと定まらない論文の方向性を正して頂きました。ありがとうございました。

副指導教員である浅見先生には2回のご指導を頂きました。主に分析手法についてアドバイスを頂きました。ご指導頂いた内容をまり反映することができませんでしたが、分析することの意味とそこから明らかになることについて詳しく教えて頂いたことで、本研究をさらに深める可能性を示唆して頂きました。

また、突然の論文相談にも関わらず、鬼頭秀一先生にも温かいご指導を頂きました。普遍の意味を持った「アーバンデザイン」の概念と、地域の固有性から切り離す事ができない「まちづくり」の概念の関係についてお話を頂いたことで、本研究の「アーバンデザイン」と「まちづくり」の捉え方が定まったと考えています。

そして北沢猛先生。本研究の執筆に当たり、直接のご指導を頂けなかったこと、先生の構想した柏の葉、UDCKについて議論できなかったことがとても悔やまれます。しかし、UDCKを研究対象として調査を進めていく中で、常に「北沢猛が目指したアーバンデザイン、まちづくり」について考えることができました。UDCKという先生の残した大きな形像を通じて、間接的にご指導を頂いたのではないかと考えています。先生が創設したUDCKが多くの人々にとってかけがえのない存在となることを願っています。そしてそのための一歩として本研究を執筆できたことを嬉しく思います。

非常勤講師、研究員の方々

前田さん、丹羽さん、田中さん、原さん、砂川さん

上記の方々には、研究室会議において様々なアドバイスを頂きました。先生方のアドバイスとは違った視点で、より実務的なことを教えて頂きました。

三牧さん。三牧さんには多くのアドバイスやご協力を頂きました。ヒアリングの付き添いや資料作成など図々しいお願いにも快く引き受けて頂きました。三牧さんの優しさに甘えてしまうばかりでしたが、UDCKについて共に悩み、お話をさせて頂いたことは私にとって貴重な経験となりました。

研究室の皆様

ドクターの関谷さんとソンさんの存在は大変貴重なものでした。関谷さんには、UDCKで作業をしている際に話す機会が多く、UDCKについての情報をたくさん教えて頂き、論文の相談に乗って頂きました。具体的な事例や個々の事例について「これは知ってる？」と話しかけて頂いたことで何度も助けられました。

そして陰ながらの指導教員であったかもしれないソンさん。ソンさんには本当に多くの場面でご協力を頂きました。私が煮詰まって進まないときの相談にはじまり、アンケート配布時に居合わせたときは率先して「手伝うよ！」と声を

かけてくれ、データの作成の協力など、どんな時も支えて頂きました。私の下手な説明に対してもじっくりと話を聞き、論文の書き方や導き方の多くを教えて頂きました。さらには修士2年の仲間が研究室にいない時もソンさんとヨンちゃんと夜のランニングをし、何度も朝を迎えた思い出は忘れられません。本当にありがとうございました。

修士2年の皆様には大変お世話になりました。（本郷の黒川くんも）違う大学から集まったメンバーはそれぞれの個性が強く、考え方や意見の違いがとても顕著に現れていて、とても楽しかったです。大越のプロジェクトを通して共に議論し、パネルや模型を製作した時間は大変貴重な時間となりました。

えりぼうとヨンちゃんとは本当に多くの時間を共に過ごしました。えりぼうは隣の席から「福ちゃん大丈夫だよ」と何度も励ましてもらった気がします。二人でマイナス思考に陥った際には大野研のなみどんに笑われたことが良き思い出です。

ヨンちゃん。プロジェクトではもちろんですが、隣の席でほぼ毎日楽しい時間を過ごしました。ヨンちゃんの天真爛漫で褒め上手な性格に何度も元気をもらい、アンケート調査の配布やデータ作成などを手伝って頂きました。ソンさんに次いで一番研究の話をしたかもしれません。気軽にお互いの研究について話すことができたことを嬉しく思います。ヨンちゃんの研究、応援してます。

修士一年のみんな。

大野くんには度々アンケートの作業を手伝って頂きました。さりげなく「手伝いましょうか?」と言ってくれた優しさが、とても嬉しかったです。また尾瀬くんには励ましのメールを頂いたこともありました。m1とm2で部屋が異なるため、会う機会が少なかったことが残念です。

社会文化の皆様

研究室は違いますが、共に修士論文を書き上げた皆様。大野研の方々はほとんど同じ研究室のようでした。朝ご飯、お昼ご飯、夜ご飯を一緒に食べながら「論文やばいよー」と嘆き、励まし合いました。

他の研究室のメンバーもとても仲が良く、社会文化の良さを感じる学生生活を送れたことを、嬉しく思います。

また、西村くんには研究と向き合うことに対する姿勢について、多くの事を学びました。先生よりも厳しいアドバイスを受け止めるまでに時間はかかりましたが、そのアドバイスに助けられたことはとても多かったです。

本論文は、本当に多くの方々に支えられ、執筆時にはヒアリングに応じて頂いた方々の想いが最後の一日まで私を支えてくれたた研究であったと思います。ご協力頂いた全ての方に、深く感謝致します。

そして最後に、三重県の家族。

どんな時も私の進む道を応援し続け、常に支えてくれた家族には大変感謝致します。学校に泊まる日が続いた際にはたくさんの食べ物が詰まった荷物を送ってくれました。段ボールの中につまった大きな家族の応援メッセージが、エネルギーになっていたと思います。

2011年1月24日
